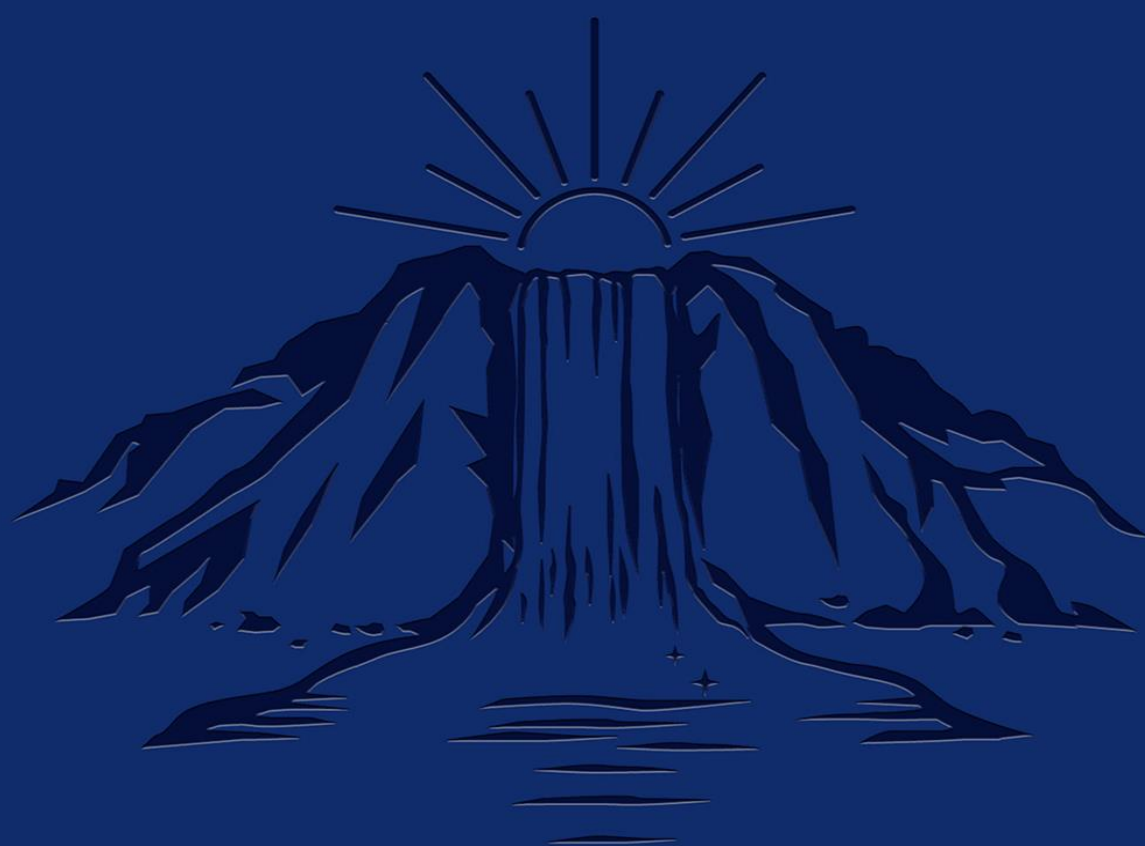


全能神、  
終わりの日のキリストの  
代表的な言葉



# 目次

はじめに

I 人類を救う神の三段階の働きについての代表的な言葉

(I) 律法の時代の働きを明らかにすることについての言葉

(II) 恵みの時代の働きを明らかにすることについての言葉

(III) 神の国の時代——終末の時代——についての言葉

II 終わりの日における神の裁きの働きについての代表的な言葉

III 神の受肉の奥義についての代表的な言葉

IV 聖書についての代表的な言葉

V 神の働きの各段階と神の御名の関係についての代表的な言葉

VI 神の性質、および神が所有するものと神そのものについての代表的な言葉

VII 唯一の存在たる神そのものを認識することについての代表的な言葉

(I) 神の権威についての言葉

(II) 神の義なる性質についての言葉

(III) 神の聖さについての言葉

(IV) 万物のいのちの源たる神についての言葉

VIII サタンがいかに人類を堕落させるかを明らかにする代表的な言葉

IX 堕落した人類のサタンの性質と本質を明らかにする代表的な言葉

X 神の国の時代の憲法、行政命令、戒律についての代表的な言葉

XI 真理の現実に入ることについての代表的な言葉

(I) 神への信仰についての言葉

(II) 神に祈り、神を崇拝することについての言葉

(III) 神に頼り、神を仰ぎ見ることについての言葉

(IV) 神の働きと人間の働きの違いに関する言葉

(V) 聖霊の働きを認識し、悪霊の働きを識別することについての言葉

(VI) 自分のサタンの的な性質と本性をいかに認識するかについての言葉

(VII) いかに正直な人となるかについての言葉

(VIII) いかに神に従うかについての言葉

(IX) 自分の本分を十分に尽くすことについての言葉

(X) 神を畏れ悪を避けることについての言葉

(XI) 人間と神の関係についての言葉

(XII) 神を認識することについての言葉

(XIII) 神を愛することをいかに追い求めるかについての言葉

(XIV) 裁きと刑罰、試練と精錬をいかに経験するかについての言葉

(XV) 神に仕え、神の証しをすることについての言葉

(XVI) サタンの影響を振り払い、救いを成し遂げることについての言葉

(XVII) 性質の変化と神によって完全にされることについての言葉

XII 神の要求、励まし、慰め、警告についての言葉

(I) 人間に対する神の要求についての言葉

(II) 人間に対する神の励ましと慰めについての言葉

(III) 人間に対する神の警告についての言葉

XIII 人間の結末を決める神の基準、および各種の人間の最後についての言葉

XIV 神の国の美しさと人類の終着点に関する預言、および神の約束と祝福についての言葉

## はじめに

終わりの日における神の御業の最中に、全能神は数百万にのぼる御言葉を表されたが、それが現在『言葉は肉において現れる』、『言葉は肉において現れる』、『キリストが語られた御言葉の実録』という3冊の書籍となっている。これらの書籍は極めて内容豊富であり、神の御業、神のご性情、そして神の本質に関する人間の知識において、極めて貴重である。『言葉は肉において現れる』1冊だけでも聖書と同等の語数にのぼり、神の御言葉は極めて大量であるため、人々の真理の追究、神の御言葉の理解と神の御業に関する知識を促進するため、これら3冊の御言葉から真理を追求する神の信者全員に授けるため、比較的古典的かつ有名な語句を選択して、そうした人々が神の御言葉を人生の標語とし、人生の現実とすることが出来るようにした。私達は現下20年以上にわたって終わりの日の神の御業を経験し、神の御言葉の中から多くの真理を理解し、人類を救う神の統御計画に関する神の知識を得てきた上、神の義なるご性情を的確に認識するようになった。終わりの日における神の御言葉と御業は、人間が自らの神への信仰により、救いを得てサタンの影響から逃れるために不可欠である。墮落した人間が神の裁きと罰により清められないならば、人間はユダヤ人の祭司長や書記官、パリサイ人のように、真に神を理解することが全く出来ず、神の恵みを授かることが出来ずに神を知らず、神に仕えることが出来ずに神を無視し、さらには終わりの日のキリストを再び十字架に架けるであろう。これは否定出来ない事実である。宗教界の主導者や牧師、長老達のうち、いかに多くの者が終わりの日における神の御業を非難しているかを知る者は居ないが、それはキリストが再び磔刑とされている事実ではなかろうか。終わりの日に全能神が表された御言葉は、墮落した人間の救いと、人間が神に関する神の知識を得る上において不可欠である。従前、全能神は言われました。「**発言のこの部分で、神は靈の観点から言葉を述べている。神の話し方は被造物である人には達成不可能である。その上、神の言葉の語彙と文体は美しく、感動的であり、人類の文学のいかなる形式もそれに取って代わることはできない。神が人を暴く言葉は正確で、いかなる哲学でも論破することはできず、すべての人々を服従させる。鋭い剣のように、神が人を裁く言葉は人々の魂の深みにまでまっすぐに人を切り込み、身を隠す場所さえ与えない。神が人々を慰める言葉は憐れみと慈愛を伝え、愛情のこもった母親の抱擁のように暖かく、人々にこれまでになかったほど安堵感を与える。このような発言の唯一最大の特徴は、この段階で神はヤーウェあるいはイエス・キリストの身分を使わず、終わりの日のキリストの身分も使わずに話すということだ。それどころか本来の身分——創造主——を使って**

神に従うすべての人々、まだ従っていないすべての人々に向かって話し、教えを説く。創造以来神がすべての人類に話しかけたのはこれが初めてであったと言える。今までに神がそれほど詳しく、系統立てて被造物である人類に話したことはなかった。もちろん、すべての人類にこれほど多くを長く話したのもこれが初めてだった。それはまったく前例のないことであった。その上、人々の中で神により言い表された初めての文章で、その中で神は人々を暴き、導き、裁き、心のままを語り、神が人々に自身の足跡、横たわる場所、その性質、自身が持っているものとその存在、その考え、人類に対する関心を知らしめる最初の発話でもあった。これらは創造以来神が第三の天から人類に語りかけた最初の発話であり、神が本来の身分を使って初めて、言葉の中に現れ、人間に対する心の声を表現したと言える。」（『言葉は肉において現れる』の第一部・序論より）

神の御言葉から有名な語句を選択している時、神の文それぞれが極めて貴いと感じた。神の御言葉は、それぞれ完璧かつ完全であり、神の御言葉の語句は、それぞれ相互に繋がって完全なものとなっている。取捨選択の判断が極めて困難で、長い部分を抜粋する必要がある部分もあった。そうすることで、神の御言葉それぞれの価値を感じ、またキリストが実に真理であられ、道であられ、いのちであられることを感じる事が可能となった。それは絶対的な真実である。本書で選択した古典的な神の御言葉を選択し、抜粋するのが適しているのは、福音を広め、神の証しに立つ時のみである。また、当然ながら、そうした御言葉は、個人的な霊的献身や古典的聖句の引用にも適している。真理の側面を探究したい場合、古典的な御言葉を読むだけでは完全な成果を実現するには不十分であり、選択した聖句に基づいて神の御言葉の全文を読むのが最適である。成果を改善するには、この方法によるほか無い。本書『終わりの日のキリストの代表的な言葉』は、神の足取りを探究するために神のご出現を待ち望んでいる者のための指導書であり、本書は読者を天の御国の門へと導くことが出来る。本書を熟読した後、読者は神の恵みに感謝し、それを讃えるであろう。ゆえに、真理と神のご出現を待ち望む者全員が、終わりの日における神の実際の御言葉である『言葉は肉において現れる』を直ちに受け容れること、そして本書が読者の目を喜ばせ、読者を開眼し、読者を喜びで満たし、よって読者が神の御声を知り、神の御前へと戻り、神の救いの全体を授かることを心から願っている。以上が本書発刊の趣旨の全てである。

2017年3月21日

# Ⅰ 人類を救う神の三段階の働きについての代表的な言葉

1. わたしの全経営（救いの）計画、六千年にわたる経営（救いの）計画は三段階、あるいは三時代から成る。それは始まりの律法の時代、次に恵みの時代（贖いの時代でもある）、そして終わりの日の神の国の時代である。これら三時代におけるわたしの働きは、各時代の性質によって異なるが、それぞれの段階においてこの働きは人間の必要性に対応している。正確には、わたしがサタンに対して行なう戦いでサタンが用いる策略に応じて働きは行われる。わたしの働きの目的は、サタンを打ち負かし、わたしの知恵と全能を明らかにし、サタンの策略をすべてあばくことであり、それによりサタンの支配下に生きる人類全体を救うことである。それはわたしの知恵と全能を示し、サタンの耐え難いおぞましさを明らかにするものである。それに加えて、被造物が善悪を区別し、わたしこそがすべてを治める者であることを認識し、サタンが人類の敵であり、下の下、悪い者であることをはっきりと見極められるようにし、善と悪、真理と偽り、聖さと汚れ、偉大さと卑劣の違いを絶対的な明白さをもって区別できるようにすることである。それにより無知な人類は、人類を堕落させるのはわたしではなく、創造主であるわたしだけが人類を救うことができ、人々が享受できるものを彼らに授けることができることをわたしに証しし、わたしこそがすべてを治める者であり、サタンは後にわたしに背いたわたしの被造物の一つにすぎないと人類は知ることができる。わたしの六千年の経営（救いの）計画は三段階に分けられており、わたしがそのように働くのは被造物がわたしの証人となり、わたしの心を知り、わたしこそが真理であることを知らしめるという成果を達成するためである。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

2. 三つの段階の働きは、神の経営（救い）全体の核心にあるもので、その三つの段階の中に、神の性質、そして神であるものが表されているのである。神の三段階の働きを知らない者は、神がどのようにしてその性質を表現するかを理解できないだけでなく、神の働きの英知も知らず、そして神が人類を救う様々なやり方や、人類全体に対する神の心を知らないままにいる。三つの段階の働きは、人類を救う働きの完全な表明といえる。三つの段階の働きを知らない人々は、聖霊の働きの様々な手段や原則を知らないままにいる。つまり、一つの段階の働きからそのまま残っている教義に厳格にこだわる人々は、神を教義に限定する人たちであり、神に対する彼らの信仰は曖昧で不確かである。そのような人たちは、決して神の救いを得ることがないだろう。神の三段階の働き

だけが神の性質の全てを余すところなく表せるのであり、人類全体を救う神の意図、そして人類の救いの全過程を完全に示すことができるのである。これは、神がサタンを打ち負かし人類を取り戻したということの証拠であり、神の勝利の証拠であり、そして神の性質全体の表明でもある。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

3. 六千年の経営（救いの）計画は働きの上で三段階に分けられている。どの段階も一つだけで三つの時代の働きを表すことはできず、全体の一部だけを表すことができる。ヤーウェの名前は神のすべての性質を表すことはできない。神が律法の時代に働きを実行した事実は、神が律法の下でしか神であることができないと証明しているのではない。ヤーウェは人間のために律法を定め、戒めを言い渡し、神殿と祭壇を造るように命じた。ヤーウェが行なった働きは律法の時代だけを表す。ヤーウェが行なった働きは、神はただ人間に律法を守るようにと言う神だとか、神殿にいる神だとか、祭壇の前にいる神だと証明しているのではない。そのようなことを言うのは誤りであろう。律法の下での働きは一つの時代だけを表すことができる。よって、もし神が律法の時代だけの働きをしたのなら、人は神のことを「神は神殿の中の神である。神に仕えるには、祭司の衣を着て、神殿に入らなければならない」と定義して、そこに閉じ込めてしまうだろう。もし恵みの時代の働きが決して実行されず、律法の時代が現在まで続いていたら、神は憐み深く愛する神でもあることを人間は知らなかっただろう。もし律法の時代の働きがなされず、恵みの時代の働きしかなされなかったなら、神は人を贖い、人の罪を赦すことができることしか人間は知らなかっただろう。神は聖なる汚れのない存在であり、神は自身を人間のために犠牲にし十字架にかけられることが出来ることしか知らなかっただろう。人はこのことしか知らず、他のことは何も理解しなかっただろう。だから、それぞれの時代は神の性質の一部だけを現すのである。神の性質のどの側面が律法の時代に、また恵みの時代に、また今の時代に表わされているかに関しては、これら三時代を一つの全体として統合して初めて、神の性質の全体を表すことができる。人がこれら三段階すべてを知って初めて、それを完全に理解することができる。この三段階の一つも排除することはできない。あなたはこれら三段階の働きを知って初めて、神の性質をその全体性において見ることができる。律法の時代における神の働きの完成は、神がただ律法の下で神であることを証明するのではなく、神の贖いの働きの完成は、神が永遠に人類を贖うことを示しているのでもない。これらはすべて人間によって引き出された結論である。恵みの時代は終わったが、神は十字架にしか属さず、十字架だけが神の救い

を象徴すると言うことはできない。もしそうするならば、神を定義していることになる。現在の段階では、神はおもに言葉の働きをしているが、神は人に対して憐れみ深くあったことなどなく、神がもたらしたものは刑罰と裁きでしかないなどと言うことはできない。終わりの日の働きはヤーウェとイエスの働き、そして人には理解されていないすべての奥義を明らかにする。これは人類の終着点と終わりを表し、人類の中で救いの全ての働きを完結するためになされる。終わりの日におけるこの段階の働きはすべてに終結をもたらす。人に理解されていなかったすべての奥義が明らかにされなければならない。人が奥義をその深みまで知り尽くし、心の中で完全にはっきりと理解できるようである。その時初めて人はそれぞれの種類によって区分される。六千年の経営（救いの）計画が完成して初めて、人は神の性質の全体を理解できるようになる。なぜなら、神の経営（救い）はその時に終わっているからである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

4. 救いの働き全体が三つの段階の働きであって、その中の一つの段階ではないため、三つの段階の働きのうちどの段階も単独に取り上げて全人類の唯一の認識すべきビジョンとすることはできない。救いの働きが完成されていない限り、神の経営（救い）も完全に終わることはできない。神の存在、性質、そして英知が救いの働き全体の中に表現されており、初めは人に対して明らかにされていなかったが、救いの働きの中で徐々に表されるようになった。救いの働きの各段階それぞれが神の性質と神の存在を部分的に表しているが、働きの各段階が直接かつ完全に神の存在全体を表すことはできない。つまり、救いの働きは三つの段階の働きが完成した後全部終わるのだから、神のすべてに関する人の認識は三つの段階の働きから切り離すことはできない。人が一つの段階から得るものは、単に神の働きの一部で表される神の性質にすぎず、それは前後の段階で表される性質と存在を代表することはできない。なぜなら、人類を救う働きは一時期または一箇所ですぐ終わるものではなく、異なった時期、異なった場所で人類の発展の状況によって次第に深くなっていくものだからである。それはいくつかの段階で行われる働きであって、一つの段階で終わるものではない。だから神の英知の全ては、一つの個別の段階よりはむしろ、三つの段階において具体化されるのである。神の存在の全て、神の全ての英知が、これらの三つの段階の中に配置されていて、どの段階の働きの中にも神の存在があり、神の働きの英知が記されている。人は、これらの三つの段階の中に表現されている神の性質の全体を認識しなければならない。この神の存在の全てが人類全てにとって非常に重要であり、神を礼拝するときに、人がもしこの認識を持たないの



であれば、彼らはブッダを崇拝する人々と何ら変わらないことになる。人の間で行う神の働きは人に隠されておらず、神を崇拝するすべての人に認識されるべきである。神は、人の間で人を救う三つの段階の働きを行ったのだから、人は、これらの三つの段階の働きの中で表現されている神が持つもの、また神であるものを認識すべきである。これは人がすべきことである。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

5. 三つの段階の働きは、神の働きすべての記録であり、神の人類の救いの記録であり、そしてそれは架空のものではない。もしあなた方が、神の性質全体を認識することを真剣に追い求めるのであれば、神によって為された働きの三段階を知らなければならず、しかもどの段階も欠けてはならない。これは神を知ろうと努力する人たちが達成しなければならない最低限のことである。人は思いつきのように独自で本当に神を知ることとはできない。それは人が自分で想像できるものでもなければ、聖霊が特定の人に特別に恩恵を授けた結果でもない。むしろそれは、人が神の働きを経験した後に得る認識であり、神の働きの事実を経験した後にだけ訪れる神に対する認識なのである。そのような認識は、ふと思いついて得ることとはできないし、教えられるものでもない。それは完全に個人的な体験に関係することなのだ。これらの三つの段階の働きの核心には、神の人に対する救いが在るが、この救いの働きの中には幾つかの働き方と、神の性質を表す手段が含まれている。これは、人がもっとも識別し難いことであり、また理解するのがむずかしいことである。時代の区分、神の働きの変化、働きの変化、この働きの受益者の変化等、これら全てが三つの段階の働きに含まれている。特に、聖霊の働き方の違い、神の性質、姿、名前、身分、その他の変化など、これら全てが三つの段階の働きの一部である。一つの働きの段階は、一部しか表すことはできず、特定の範囲に限られている。それは時代の区分や神の働きの変化には関連がなく、他の側面にはさらに関連性がない。これは完全に明らかな事実である。三つの段階の働きが人類を救う神の働きの全てなのだ。人は、人類を救う働きの中で、神の働き、そして神の性質を認識しなければならず、この事実なしには、あなた方の神に対する認識は、ただ無意味な言葉でしかなく、机上の空論にすぎない。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

6. ヤーウェの働きからイエスの働きまで、イエスの働きからこの現在の段階の働きまで、これら三段階は神の経営の全幅を覆うもので、そしてすべてひとつの霊による働きである。神が世界を創造した時から、神は常に人類を経営して来た。神は初めであり

終わりであり、最初であり最後であり、時代を始められる存在で、また時代を終わらせる存在である。違った時代、違った場所における三段階の働きは確かにひとつの霊によって行なわれる。これら三段階を切り離す者たちはすべて神に反抗している。今、第一段階から今日に至るまでのすべての働きはひとつの神の働きであり、ひとつの霊の働きであり、それに関して疑いの余地はないということを理解しなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

7. 神の経営（救いの）計画の働きの全ては神自身によって直接行われた。第一段階、即ち世界創造のあとの律法の時代の働きは、神自身によって直接行われた。神はモーセをもちいて律法を公布した。全人類を贖うという第二段階もまた受肉した神によって直接行われた。肉となった神以外には、それを行なう資格のある者は誰もいない。第三段階は言うまでもない――神のすべての働きを終わらせるためには、なおさら神自身が働くことが必要となる。全人類を贖い、征服し、獲得し、完全にする働きは、すべて神自身が直接遂行する。もし彼がこの働きを自ら行わないなら、彼の身分を人によって表すことはできないし、彼の働きが人によってなされることもないだろう。サタンを打ち負かし、人類を獲得するために、また、地上で正常な生活を人に与えるために、神は自ら人を導き、人の間で働く。神のすべての経営（救いの）計画とすべての働きのために、神は自らこの働きをしなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

8. 三つの段階の働きは一人の神によってなされ、そしてこれは最も偉大なビジョンであり、神を認識するための唯一の道である。三つの段階の働きは、神自身にしかできなかったことであり、誰も神の代わりにできることではなく、要するに、初めから今日まで神自身の働きは神にしかできないのである。神の三つの段階の働きは、異なる時期に異なる場所で行われており、またその内容もそれぞれ異なるが、それらは全て唯一の神によってなされたものである。すべてのビジョンの中でも、これが人の認識すべき最も偉大なビジョンであり、もし人がこれを完全に理解するなら、自分の立場を貫くことができる。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

9. 現在なされている働きは恵みの時代の働きを推し進めた。すなわち、六千年経営（救いの）計画全体における働きは前進した。恵みの時代は終わったが、神の働きはさらに前進している。なぜわたしは今の段階の働きは恵みの時代と律法の時代を基礎にし

ていると繰り返し言うのだろうか。これは、今日の働きは恵みの時代に行われた働きの延長であり、律法の時代に行われた働きを向上させたものであることを意味する。三つの段階は密接に相互関連しており、一つはその次の段階に繋がっている。なぜわたしは今の段階の働きはイエスによってなされた働きの上に築き上げられるとも言うのだろうか。この段階がイエスによってなされた働きの上に築き上げられなければ、キリストの磔刑、つまり過去に行われた贖いの働きはこの段階でなお実行されなければならない。だが、これは無意味なことであろう。従って、働きは完全に終わったのではなく、時代が前進し、働きは以前に比べていっそう高まったということである。今の段階の働きは律法の時代、および、イエスの働きの堅固な支えを基礎に置いて築かれるということが出来るだろう。働きは段階ごとに築かれ、今の段階は新しい始まりではない。三つの働きの段階の組み合わせのみを六千年にわたる経営(救いの)計画とみなすことができる。

『言葉は肉において現れる』の「二度の受肉が、受肉の意義を完成させる」より

10. 神の経営全体は、三段階に分割され、各段階において、人間に対して適切な要求が為される。さらに、様々な時代が経過し進行してゆくにつれ、全人類に対する神の要求はより高くなる。このようにして、この神の経営の働きは、人間が「言葉は肉として現れる」という事実を目の当たりにするまで、段階ごとに進んで絶頂に達する。また、そのようにして人間に対する要求と、人間が証しすることへの要求はさらに高度化する。真に神と協力することが可能であればあるほど、一層人間は神に栄光を帰す。人間の協力とは、人間が行うよう要求される証しであり、人間が行う証しは、人間による実践である。ゆえに、神の働きが然るべき成果を得られるかどうか、真の証が存在し得るかどうかは、人間による協力と証と密接に結びついている。働きが終わる時、つまり神の経営が全て終わりに達する時、人間はより高い証しをするよう要求されるであろう。そして神の働きが終局に達する時、人間の実践と霊的成長は頂点に達するだろう。過去において、人間は律法と戒めに従うことを要求され、忍耐強く謙遜であることを要求された。現在、人間は神の采配の全てに従い、神への至高の愛を備えることを要求されており、最終的には患難のただ中でも神を愛することが要求されている。これら三つの段階こそが、神が自身の経営全体にわたって、段階ごとに人間に要求することである。神の働きの各段階は、その前の段階よりも一層深くなり、各段階における人間に対する要求は、その前の段階よりも一層深遠であり、神の経営全体はそのようにして次第に形成される。人間の性質が神によって要求される基準に常に近づいてゆく理由は、正確に言うところ、人間に対する要求がさらに高くなってゆくからであり、その時初めて、神の働き

が完了し、全人類がサタンの影響から救われるまで、人類は次第にサタンの影響から離れてゆく。その時になると、神の働きは終局に達し、人間の性質の変化を達成するための神への人間の協力が終わり、全人類が神の光の中で生活し、それ以後は神への反抗や反逆は無くなる。また、神は人間に対して何も要求しなくなり、人間と神との間には、一層調和の取れた協力、つまり人間と神が共にある生活、神の経営が完了し、人間がサタンの手から神によって完全に救われた後に到来する生活がある。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

11. 人の救いの働きは三段階で実行された。すなわち、サタンとの戦いは、サタンが完全に打ち負かされる前に三段階に分割されたということである。しかし、サタンとの戦いにおける全ての働きに秘められた真理は、人に恵みを施し、人の罪祭となり、人の罪を赦し、人を征服し、人を完全にすることによってその効果が達成されるということである。実際、サタンとの戦いは、サタンに武器を持って立ち向かうものではなく、人の救い、人のいのちへの働き、人の性質を変えることであり、それにより人が神を証しすることである。サタンはこのようにして打ち負かされるのである。人の墮落した性質を変えることを通してサタンは打ち負かされる。サタンが敗北すると、つまり、人が完全に救われると、そのとき辱めを受けたサタンは完全に縛られ、こうして人は完全に救われることになる。ゆえに、人の救いの実質はサタンとの戦いであり、サタンとの戦いはおもに人の救いに反映される。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

12. 神は人類を創造し、人類を地上に置き、今日まで導いてきた。その後、人類を救い、人類のための罪のいけにえとなった。終わりの時に、彼は人類を征服して、人類を完全に救い出し、人に本来の姿を回復させなければならない。これが、彼が始めから終わりまで従事してきた働きである。つまり、人を元のイメージへ回復し元の姿へ回復させるのである。神は自身の国を打ち立て、人に本来の姿を回復させる。つまり神は地上における自身の権威を回復し、あらゆる被造物の間における自身の権威を回復する。人はサタンに墮落させられた後、神を畏れる心を失い、被造物として持つべき機能を失って、神に背く敵になった。人はみなサタンの権威の下に生きようになり、サタンの命令に従った。それゆえ、神は被造物の間で働くことができず、被造物からの畏れ敬いを得ることはさらにできなかった。人は神に造られており、神を礼拝すべきであるが、人は神に背いてサタンを崇拜した。サタンは人の心の中の偶像になった。こうして、神は人の心における立場を失い、つまり人を造った意義を失った。だから、神が人を造っ

た意義を回復しようとするなら、人に本来の姿を回復させ、人に墮落した性質を脱ぎ捨てさせなければならない。人をサタンの手から奪い返すには、人を罪の中から救い出さなければならない。このようなやり方によってのみ、神は次第に人に本来の姿を回復させ、本来の機能を回復させる。そして遂には、神の国を回復する。最終的にそれらの不従順の子を徹底的に滅ぼすのも、人がよりよく神を礼拝し、よりよく地上で生存することができるためである。神は人類を造ったので、人に自身を礼拝させる。神は人に本来の機能を回復させたいので、徹底的に、しかも混じりけが少しもないように、回復させる。神が自身の権威を回復することは、人に自身を礼拝させることであり、自身に従わせることである。それは、人を神ゆえに生きるようにすることであり、神の権威ゆえに神の敵を滅ぼすことであり、神のあらゆる部分全てが人の間で、全く拒否されることなく存続するようにすることである。神が打ち立てようとする国は神自身の国である。神が求める人間は自身を礼拝する人間であり、完全に従う人間であり、神の栄光を持つ人間である。もし神が墮落した人間を救い出さなければ、神が人を造った意義は無となる。神は人の間で権威を持たなくなり、地上に神の国が現れることもない。もし神に背く敵を滅ぼさなければ、神は完全な栄光を得ることができず、地上で神の国を打ち立てることもできない。人類の不従順な者たちを徹底的に滅ぼし、完全にされた者たちを安息の中に連れていく——これは彼の働きが終わったことのしるしであり、神が偉業を達成したしるしである。人類がみな本来の姿を回復し、それぞれ自分の本分を尽くし、自分の立場を守り、神のすべての定めに従うことができたなら、神が地上で一団の、自身を礼拝する人たちを得、自身を礼拝する国を打ち立てたことになる。神は地上で永遠の勝利を得、自身に敵対する者たちは永遠に滅びる。これは神が最初に人を造った時の意図を回復し、神が万物を造った意図を回復し、地上での神の権威、万物の中での神の権威、敵の間での神の権威をも回復したことになる。これらは神が完全に勝利を得たことのしるしである。その後人類は安息に入り、正しい軌道に乗った生活に入る。神も人との永遠の安息に入り、神と人が共有する永遠の生活に入る。地上の汚れと不従順は消え、地上の嘆き悲しみも消える。神に敵対する地上のあらゆるものも存在しなくなる。神と神に救われた人たちだけが残し、神の創造物だけが残る。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

13. これが神による経営である。人類をサタンに引き渡し—神が何であるか、創造主が何であるか、神をどう礼拝するか、なぜ神に服従することが必要なのかを知らない人類を——サタンが墮落させるままにしたのである。神はそれから一步一步、人間が完

全に神を礼拝しサタンを拒むまで、人間をサタンの手から取り戻す。これが神の経営である。これはみな神話的な物語のようで、わけがわからないように思われる。人々がこれを神話的な物語のように感じるのは、過去数千年の間にどれほど多くのことが人間に起こったかを知らないからであり、まして、この宇宙の広がりにおいてどれほど多くの物語が生まれたか、思いも及ばないからである。そのうえ、物質界の外に存在する、さらに驚くべき、はるかに恐ろしい世界があるのを意識することができず、人間の目では見ることができないでいるからである。これは人間には理解し難いことに思われるが、それは人間には神による人類の救いや神の経営の働きの意義が理解できず、また、人間が最終的にどのようなことになることを神が望んでいるかを知らないからである。そのような人類は、サタンに堕落させられる前のアダムとエバのようなものだろうか。いや、そうではない。神の経営は、神を礼拝し、神に従う一群の人々を得るためのものである。この人類はサタンにより堕落させられたが、もはやサタンを父とみなしておらず、サタンの醜い顔に気づいて拒み、神の裁きと刑罰を受けるため、神の前に来る。その人間は何が醜いか、それが聖いものとどう異なっているかを知っており、神の偉大さとサタンの邪悪さを認識している。このような人類は、もはやサタンのために働かず、サタンを崇めず、サタンを祭ることをしない。それは、その人たちが真に神のものとなった人々だからである。これが神による人類経営の意義である。神の今回の経営の働きのあいだに、人類はサタンによる堕落の対象であり、同時に、神による救いの対象であり、そして神とサタンが獲得しようと戦う産物でもある。神はその働きをすると同時に、徐々に人間をサタンの手から取り戻してきたので、人間は神に近づきつつある…

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

14. 三つの段階の働きが終わるとき、神を証しする者たちの一集団、つまり神を知る者たちの一団が作られる。この人たちはみな神に対する認識があり、真理を実行することができる人たちである。彼らには人間性と理知があり、皆三つの段階の救いの仕事を認識している。これが最後になし遂げられる働きであり、この人たちは6000年にわたる経営（救い）の働きの結晶であり、最終的にサタンを打ち負かした最も有力な証しである。神を証しすることができる者は、神の約束と祝福を受けることができる上に、最後の時に残り、神の権威を持ち、神を証しする一団になるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

15. 現在まで六千年に渡る神の働きの実行の後、神は自らの行為の多くをすでに示しているが、それは主にサタンを倒し、すべての人間を救うためだった。神は、その機

会を通して、天のすべてのもの、地上のすべてのもの、海の中のすべてのもの、および、神が創造した地上のあらゆるものがひとつ残らず、神の全能を知り、神のすべての行為を知るようにする。神はサタンを倒すための機会を捕らえ、人間に自らのすべての行為を示し、人々が神を褒めたたえ、サタンを倒す神の英知を賛美できるようにする。地に、天に、そして海の中にあるすべてのものは、神に栄光をもたらし、神の全能性を褒めたたえ、神のすべての行為を褒めたたえ、神の聖なる名前を叫ぶ。それは神がサタンを倒した証である。神がサタンを征服した証である。さらに重要なこととして、神が人間を救った証である。神の創造したすべては、神に栄光をもたらし、敵の打倒と勝利の帰還において神を褒めたたえ、偉大な勝利の王として神を褒めたたえる。神の目的はサタンの打倒だけではないため、神の働きは六千年間続いている。神はサタンの打倒を通して人間を救う。神はサタンの打倒を通して自らのすべての行為を現わし、自らの栄光のすべてを現わす。神は栄光を手にするだろうし、天使たちすべては神のすべての栄光を見るだろう。天の使者たち、地上の人間たち、そして地上のすべての創造物は、創造主の栄光を見るだろう。これが神の行う業である。天と地における神の創造物は、すべて神の栄光を目の当たりにし、神はサタンを完全に倒した後、意気揚々と帰還し、人間に神を褒めたたえさせる。こうして神は、これらふたつの側面を勝利の中に成し遂げる。最後にすべての人間は神によって征服され、拒否したり反抗したりする者、つまり、サタンに属する者すべてを、神は一掃する。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは人類全体が現在までどのように発展してきたかを知るべきである」より

## （Ⅰ）律法の時代の働きを明らかにすることについての言葉

16. ヤーウェがイスラエル人に行なった働きは、人類のあいだに神の地上における起源の場所を定め、それは神が臨在した聖なる場所でもあった。神はその働きをイスラエル人に限定した。当初、神はイスラエル外では働かず、代わりに、働きの範囲を限定するために、神が適切とみなした一民族を選んだ。イスラエルは神がアダムとエバを創造した場所であり、その場所の塵からヤーウェは人間を創造した。この場所は地上におけるヤーウェの働きの根拠となった。イスラエル人は、ノアの子孫であり、またアダムの子孫であるが、地上におけるヤーウェの働きの人間の基盤であった。

その当時、イスラエルにおけるヤーウェの働きの意義、目的、段階は全地球上にて働きを始めることであった。それはイスラエルを中心としながら徐々に異邦人の国々に広まった。これが全宇宙にわたる神の働きの原則である。つまり、ある模範を確立し、それを宇宙のすべての人が神の福音を受け入れるまで広げるのである。最初のイスラエル人は、ノアの子孫であった。これらの人々はヤーウェの息だけを与えられ、生活の基本的な必要にそなえるに十分なだけ理解したが、ヤーウェがどのような神であるかや、ヤーウェの人間への心は知らず、ましてや天地創造の主をどのように崇めるべきかも知らなかった。従うべき規則や掟があったかということについて、また被創造物が創造主のために取り組むべき仕事があったかということについては、アダムの子孫たちはそのようなことは一切知らなかった。彼らが知っていたのは、夫は家族を養うために汗を流して労働しなければならない、妻は夫に従いヤーウェが創造した人類を永続させなければならないということだけであった。言い換えるなら、この人々は、ヤーウェの息と命だけをもっており、どのように神の掟に従うべきかや、どのように天地創造の主を満足させるべきかについては何も知らなかった。彼らはあまりに何も理解していなかった。そのため、たとえ彼らの心には一切ゆがんだものや騙そうとするものではなく、彼らのあいだには嫉妬や闘争心はめったに起こらなかったものの、天地創造の主であるヤーウェについては一切の認識も理解ももっていなかった。これら人間の祖先はヤーウェのものを食べ、ヤーウェのものを楽しむことは知っていたが、いかにヤーウェを畏れるべきかは知らなかった。彼らは、ヤーウェはひざまずいて礼拝すべき唯一の方であることを知らなかった。それではどうして彼らを神の被造物と呼ぶことができるのか。そうであれば、「ヤーウェは天地創造の主である」と「神は人間が神の証拠となり、神に栄光を与え、神を表すようにと人を創造した」という言葉は、無駄に語られたのではないだろうか。ヤーウェに畏敬の念をもたない人々がどうしてヤーウェの栄光の証しとなることができる



たのか。どうして彼らがヤーウェの栄光の証拠になれたのか。ヤーウェの「わたしはわたしに似せて人を創った」という言葉は、それでは邪悪な存在であるサタンの掌中において武器にならないだろうか。これらの言葉は、それではヤーウェによる人の創造への不名誉の印にならないだろうか。働きのその段階を完了するために、人類創造の後、ヤーウェはアダムの中からノアの時にかけては人類を教えたり、導いたりしなかった。それどころか、洪水が世界を破壊するまでは、ヤーウェはノアの、またアダムの子孫であるイスラエル人を正式に導き始めなかった。イスラエルにおけるヤーウェの働きと発言は、イスラエルのすべての人々がイスラエルの全土で生活するあいだに、彼らを導いた。このようにして、ヤーウェは人間が命をもち、塵から起き上がって被造物となるように人間に息を吹き込むことができるだけでなく、人類を焼いたり、人類を呪ったり、人類を支配するためにその杖を使うこともできることをヤーウェは人類に示した。それで、人間もヤーウェが地上での人の生活を導き、昼と夜の時間によって人類のもとで語り働くことができることを知った。ヤーウェがこの働きをしたのは、人はヤーウェがつまみあげた塵に由来し、さらに人はヤーウェにより創造されたことを被造物が知るためだけである。これだけではなく、ヤーウェがイスラエルで働きを始めたのは、他の民族と国々（実際には、イスラエルとは無関係ではなく、イスラエル人から枝分かれした、依然としてアダムとエバの子孫である）が、イスラエルからのヤーウェの福音を受け取り、宇宙の全被造物がヤーウェを畏れ、ヤーウェを偉大であると認識するようになるためである。

『言葉は肉において現れる』の「律法の時代における働き」より

17. ヤーウェは人類を創造したが、つまり人類の祖先であるエバとアダムを造ったが、それ以上に彼らに知性や知恵を与えなかった。彼らはすでに地上で暮らしていたが、ほとんど何も理解していなかった。そのためヤーウェの人類創造の働きは半分完了しただけで、決して完了していなかった。ヤーウェは土で人間の雛形を形作り、それに息を吹き入ただけで、人間に神を崇めようという十分な意欲を与えなかった。初めのうち、人間は神を崇めたり畏れたりする心をもたなかった。人間は神の言葉に耳を傾けることを知っていただけで、地上における生活についての基本的知識や適切な生活の規則に関しては無知であった。このようなわけで、ヤーウェは男と女を造り七日間の作業を終えたものの、人間をすっかり完成させなかった。人間は殻でしかなく、本当にひとりの人ではなかったからである。人は人類を創造したのはヤーウェだということだけを知っていたが、ヤーウェの言葉と律法にいかに従うべきかについては何も知らなかった。

だから人類創造の後も、ヤーウェの働きは決して完成といえるようなものではなかった。ヤーウェはまた、人々が地上で共に暮らしヤーウェを崇めることができるように、ヤーウェに導かれた後、人々が地上における適切な人間としての生活をおくるための正しい道程に入れるように、ヤーウェの面前にて人間をしっかりと導かなければならなかった。これがなされて初めて、主にヤーウェの名の下で行なわれた働きはすっかり完成された。つまり、そうなる初めてヤーウェの世界創造の働きが完全に完了したのである。このように、ヤーウェが人類を創造して以来、人類がヤーウェの命令と律法に従い、地上における人間として適切な生活のあらゆる活動に携わることができるように、ヤーウェは人類の地上における生活を何千年間も導かねばならなかった。これで初めてヤーウェの働きはすっかり完成した。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

18. ヤーウェがイスラエルで働きを開始せず、その代わりに人類を創造した後に彼らを地上にのんきに生きるままにさせていたなら、その場合、人間の肉体の本性（本性とは、人間は自分には見えないものは決して知ることができない、つまり、ヤーウェが人類を創造したことを人間は知らず、なぜ創造したかについてはさらに無知であることを意味する）のせいで、人間はヤーウェが人類を創造したことや、万物の主であることを知ることは決してなかっただろう。もしヤーウェが人間を創造し地上に置き、人類を指導するために一定期間を人類と一緒にいる代わりに、ただ手の塵を払ってそのままにしたならば、その場合、全人類は無に帰していただろう。ヤーウェが創造した天と地、あらゆるもの、そして全人類が無に帰し、さらにサタンに踏みつけにされていただろう。そのようになれば、「地上において、つまり、天地創造の中心には、ヤーウェは立つべき場所、聖なる場所をもたなければならない」というヤーウェの望みは打ち砕かれていただろう。だから、人類創造の後、ヤーウェが人間のもとにとどまり、人の生活において指導し、彼らの只中で話しかけることができたというのは、すべてヤーウェの望みをかなえ、その計画を達成するためであった。

『言葉は肉において現れる』の「律法の時代における働き」より

19. 神が自身の経営（救いの）計画を正式に始めた時、人間が従うべき多くの規則を神は設定した。それは、人間が神とそして神の導きと一体となって普通の生活を送ることができるように定められたのである。神は最初に、どのように祭壇を建てるか、それをどのように整えるかを指示した。その後神は、人間に捧げ物を捧げるように指示し、人間がどのように生きるべきかを明確にした。つまり、人間が生きる中で何に注意を

払い、何に従い、何をすべきで何をすべきでないかを示したのである。神が人間のために定めたものは包括的で、それらの習慣、規則、原則により神は人間の振る舞い方に基準を設け、人間の生活を導き、どのように神の律法に従うかを示し、そして神の祭壇の前に人間が出ることを教え、人間のために神が造った、全ての秩序と節度あるものの中でどのように生きるべきかを示した。神はまずこれらの簡単な規則と原則を用いて人間に様々な制限を与え、そうすることで地上にあって人間が神を礼拝する正常な生活を送るようにし、正常な人間の生活を送るようにした。それが神の6千年に亘る経営（救いの）計画の始まりの具体的な内容である。それらの規則や決まりは多岐にわたり、律法の時代の人間に対する神からの具体的な導きであった。また、律法の時代までの人間が受け入れ、尊重すべきものであり、律法の時代に神が行なった業の記録であり、神の指導力と人間に対する導きの確かな証拠である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

20. 律法の時代に、ヤーウェは多くの戒めを定め、モーセに従ってエジプトを脱出したイスラエル人にモーセが伝えるようにした。それらの戒めはヤーウェがイスラエル人に与えたものであり、エジプト人には一切の関係がなかった。それらはイスラエル人を制するためであった。ヤーウェは戒めによりイスラエル人に要求した。彼らが安息日を守ったか、両親を敬ったか、偶像を崇拝したかなどが、イスラエル人が罪深いか義であるかを判断する原則であった。イスラエル人の中には、ヤーウェの火で打ちのめされた者、石を投げられ殺された者、ヤーウェの祝福を受けた者がおり、これは戒めを守ったか否かによって決められた。安息日を守らなかった者は、石を投げられ殺された。安息日を守らなかった祭司はヤーウェの火で打ちのめされた。両親を敬わなかった者もまた石を投げられ殺された。これはすべてヤーウェに称賛されたことであった。ヤーウェは戒めと律法を定め、それにより、イスラエル人を生活において導きながら、彼らがヤーウェの言葉を聞き、従うように、ヤーウェに反抗することのないようにした。ヤーウェはこれらの律法を用いて生まれたばかりの人類を制御し、それはヤーウェの働きの基礎を築くのに有益であった。そのため、ヤーウェが行った働きにもとづいて、最初の時代は律法の時代と呼ばれた。

『言葉は肉において現れる』の「律法の時代における働き」より

21. ヤーウェは多くの発言をし、かなりの働きをしたものの、それらの無知な人々にどのように人間になるべきか、どのように生きるべきか、どのようにヤーウェの道を理解するべきかを教え、人々を前向きに導いただけであった。ヤーウェが行なった働き

の大部分は、人々がヤーウェの道を守り、ヤーウェの律法に従うようになるためであった。働きは表面的に墮落した人々になされた。それは人々の性質を変化させることや、いのちの進歩には達しなかった。ヤーウェは人々を制御し支配するために律法を用いることだけに関心があった。当時のイスラエル人にとって、ヤーウェは神殿にいる神、天にいる神でしかなかった。ヤーウェは雲の柱で、火の柱であった。ヤーウェが人々に求めたのは、今日の人々がヤーウェの律法や戒めとして知っていること、規則とさえ呼ぶことのできるものに従うことだけであった。なぜなら、ヤーウェがしたことには人々を変えようとする意図はなく、人々がもつべきものをさらに与え、ヤーウェの口から指導するためであったからである。それは、創造された後に人間は、もつべきものを何ももっていなかったからである。それゆえヤーウェは地上での生活のために人々がもつべきものを与え、ヤーウェが導いてきた人々にその先祖であるアダムとエバを超えさせた。ヤーウェが彼らに与えたものは、最初にヤーウェがアダムとエバに与えたものを超えていたからである。それにもかかわらず、ヤーウェがイスラエルで行なった働きは、人類を導き、人類にその創造主を認識させることだけであった。ヤーウェは人々を征服したり、変えたりせず、ただ導いたにすぎない。これが、律法の時代におけるヤーウェの働きの全体である。これがイスラエル全土におけるヤーウェの働きの背景であり、真実の物語であり、本質であり、神の六千年にわたる働きの始まりであり、これはつまり人類をヤーウェによる制御の下に留めるためである。ここから神の六千年の経営（救いの）計画におけるさらなる働きが生れたのである。

『言葉は肉において現れる』の「律法の時代における働き」より

## (II) 恵みの時代の働きを明らかにすることについての言葉

22. イエスは恵みの時代におけるすべての働きを表した。イエスは受肉し、十字架につけられ、恵みの時代を開始した。イエスは贖いの働きを完成させ、律法の時代を終了させ、恵みの時代を開始するために十字架にかけられ、そのため「最高司令官」「罪のいけにえ」「贖い主」と呼ばれた。したがって、イエスの働きはヤーウェの働きと中身は異なっていたけれども、原則においては同じである。ヤーウェは律法の時代を開始し、地上における神の働きの拠点、発祥地を定め、戒めを発した。これらが神が行なった二つの働きであり、それは律法の時代を代表する。イエスが恵みの時代に行なった働きは戒めを発することではなく、それらを成就し、それによって恵みの時代が到来したことを告げ、二千年続いた律法の時代を終結させることであった。イエスは恵みの時代をもたらすために来た先駆者であったが、その働きの中心は贖いであった。よってイエスの働きもまた二つの部分から成る。それらは新しい時代を切り開くこと、そして十字架刑を通して贖いの働きを完成させることである。その後、イエスは去った。その時点で律法の時代は終わりを告げ、人類は恵みの時代に入った。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

23. イエスの働きは、その時代における人の必要性に応じて行われた。その務めは人間を贖い、その罪を赦すことであるがゆえに、イエスの性質は全体が謙遜、忍耐、愛、敬虔、寛容、憐れみ、慈しみであった。イエスは人間に豊かな祝福と恵みをもたらした。平和、喜び、イエスの寛容と愛、その憐れみと慈しみといった人々が享受することのできるあらゆるものをもたらした。その当時、人が受け取ったあふれんばかりの楽しむことがら、すなわち心の平安と安心、霊の慰め、救い主イエスによる支え、これらのものは、人の生きた時代ゆえにもたらされたのである。恵みの時代、人はすでにサタンにより墮落させられていたので、すべての人を贖う働きを完遂するためには、満ちあふれる恵み、限りない寛容と忍耐、そしてさらに、人間の罪を贖うのに十分な捧げ物が必要であった。恵みの時代に人々が見たのは、人間の罪のためのわたしの捧げ物であるイエスに過ぎなかった。人々は神は憐れみ深く寛容であり得ることだけしか知らず、イエスの慈しみと憐れみしか見なかった。それはひとえに、彼らが恵みの時代に生まれたからである。そのようなわけで、贖われる前に人々はイエスが彼らに授けるさまざまな恵みを楽しみ、その恩恵を受けなければならなかった。それにより、彼らは恵みを享受することでその罪を赦されることができ、イエスの寛容と忍耐を享受することで贖われる機会を得ることができた。イエスの寛容と忍耐を通してのみ、彼らは赦しを受け、イエス

が授けるあふれる恵みを楽しむ権利を手にすることができた。それはイエスが、「わたしは義人ではなく罪人を贖い、罪人がその罪を赦されるようにするためにきたのである」と言ったとおりであった。もしイエスが裁きと呪い、人間の過ちに対する不寛容の性質を持って受肉していたなら、人には決して贖われる機会はなく、永遠に罪深いままでいたことであろう。もしそうになっていたなら、六千年の経営（救いの）計画は律法の時代で止まり、律法の時代は六千年間続いていたであろう。人の罪は数が増し、よりひどいものとなり、人間の創造は無価値なものとなっていたであろう。人は律法のもとでのみヤーウェに仕えることができたではあるが、彼らの罪は最初に創造された人間の罪をも上回るものとなっていたであろう。イエスが人類を愛し、その罪を赦し、十分な慈しみと憐れみを与えれば与えるほど、人類はイエスにより救われ、イエスが大きな代価で買い戻した迷える子羊と呼ばれる資格があった。イエスは自分の追随者をあたかも母親が我が子を腕のなかであやすように取り扱ったので、サタンはこの働きに干渉することができなかった。イエスは人々に対して腹を立てたり嫌ったりせず、慰めに満ちていた。人々とともにいても激怒するようなことは決してなく、「七の七十倍までも相手を赦しなさい」と言うほどまでに罪に寛容で、人々の愚かさや無知を見逃した。そのようにしてイエスの心は他者の心を変容させ、それゆえに人々はイエスの寛容を通して赦しを受けた。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

24. 受肉したイエスには全く感情がなかったが、常にその弟子たちを慰め、施し、助け、支えた。どれほどの働きをしても、どれほどの苦しみを耐えても、決して人々に過大な要求を課すことなく、常に忍耐強く、彼らの罪を耐え忍んだ。そのため恵みの時代の人々はイエスを「愛すべき救い主イエス」と愛情を込めて呼んだ。当時の人々、すべての人々にとって、イエスが持っているものとイエスであるものは、慈しみと憐れみであった。イエスは決して人々の過ちを心に留めず、人々への接し方がその過ちをもとにするようなことは決してなかった。それは異なる時代だったため、イエスはよく食べ物をつつぱり人々に与え、彼らが十分食べられるようにした。イエスは追随者すべてに優しく接し、病人をいやし、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせた。人々がイエスを信じ、その行いすべてが真剣かつ真心からのものであることが分かるように、腐った死体をよみがえらせることさえして、その手の中では死人さえも生き返ることを彼らに示した。このようにしてイエスは人々のあいだで静かに耐え忍び、その贖いの働きを行った。十字架につけられる前でさえ、イエスはすでに人間の罪を負い、人類のための

罪の捧げ物となっていた。十字架につけられる前から、イエスは人類を贖うために十字架への道をすでに開いていた。ついに十字架で釘づけにされ、十字架のために自分自身を犠牲として捧げ、そのすべての慈しみ、憐れみ、そして聖さを人類に授けた。人々にはイエスは常に寛容であり、決して復讐を求めず、人々の罪を赦し、人々に悔い改めるよう勧め、忍耐、寛容、愛を持ち、自らの足跡に従い、十字架のゆえに自分自身を捧げるよう教えた。イエスの兄弟姉妹への愛は、マリアへの愛に勝るものだった。イエスの働きの原則は、病人をいやし、悪霊を追い出すことであり、それらはすべてその贖いのためであった。どこへ行っても、イエスは従ってくる人すべてに思いやりを持って接した。貧しい者を豊かにし、足の不自由な人を歩けるようにし、目の見えない人に見えるようにし、耳の聞こえない人を聞こえるようにした。身分が一番低かった人々や乏しい人々、罪人さえ招いて共に食卓につき、彼らを遠ざけることなく常に忍耐強く、「羊飼いが羊を百匹持っていて、その一匹が迷ったとすれば、九十九匹を残しておいて、迷った一匹を捜しに行く。そしてそれを見つけたら、大いに喜ぶだろう」とさえ言った。イエスは雌羊がその子羊を愛するように、その追随者を愛した。彼らは愚かしく無知で、イエスの目には罪人であり、さらには社会において最も身分の低い者であったにもかかわらず、イエスは他の人々からさげすまれていたこれらの罪人を目に入れても痛くないほど大切なものとして見た。彼らへの好意ゆえに、イエスは祭壇に捧げられる子羊のように、彼らのためにその命を捨てた。彼らのもとではしもべのようにふるまい、利用され、なぶり殺されるままにし、無条件に彼らに服従した。追随者にとってはイエスは愛すべき救い主であったが、上座から人々に説教したパリサイ人に対しては、イエスは慈しみや憐れみではなく、嫌悪と怒りを示した。イエスはパリサイ人のあいだではあまり働くことはなく、ごくまれに彼らに教えを説き叱責したが、彼らのもとで贖いの働きを行なうことはなく、しるしや奇跡を行うこともなかった。イエスはその慈しみと憐れみを追随者に与え、これら罪人たちのために十字架に釘づけられた最後の最後まで耐え忍び、ありとあらゆる屈辱に耐え、ついにすべての人間を完全に贖った。これがイエスの働きの全体である。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

25. イエスが現れたとき、イエスは神の役割も実行した。そして、いくつかの言葉を話した。しかし、イエスが成し遂げた主な働きは何だったろうか。イエスが主として成し遂げたことは、磔の働きであった。イエスは、磔の働きを完成し全人類を贖うために罪深い肉の似姿になった。そしてイエスが罪の贖いの供え物となったのは、全人類の

罪のためであった。これが、イエスが成し遂げた主な働きであった。最終的に、イエスは、後から来るひとたちを導くために、十字架の道を与えた。イエスが現れたとき、それは主として、贖いの働きを完了するためであった。イエスは全人類を罪から救い、天の国の福音を人にもたらし、そして天の国へ至る道をもたらしした。その結果、やってきた人たちは皆こう言った。「我々は十字架の道を歩くべきだ。そして十字架のために、我々自身を犠牲にすべきだ」。もちろん、最初イエスは、人に悔い改めさせ罪を告白させるために、他の働きもいくつか行い、多少の言葉も語った。しかし、彼の本来の役割はやはり、磔であった。そしてイエスが道を説きながら費やしたあの3年半は、その後、やってきた磔に向けての期間であった。イエスが祈った何回かは磔のためでもあった。イエスが暮らした一人の普通の人としての人生や、地上で彼が生きた33年半は、主として、磔という働きを完成するためであった。そしてこの働きに取り組む力をイエスに与え、その結果として神はイエスに磔という働きを託した。

『言葉は肉において現れる』の「すべては神の言葉が達成する」より

26. 神の働きの第二段階が終わるとすぐ、つまり十字架にはりつけになった後、人間を罪から取り戻す（つまり、サタンの手から人間を取り戻す）神の働きは成就した。そこで、その時から、人類は主イエスを救い主として受け入れるだけで罪が赦されるようになった。名目上は、人間の罪はもはや救いを得て神の前に出る妨げとはならず、サタンが人間を責める手立てではなくなったということである。それは、神自身が実際的な働きをし、罪深い肉の形を取り経験し、罪のための捧げ物となったからである。こうして、神の肉、罪深い肉の形をとった神のおかげで人間は贖われ、救われて、十字架から降りた。そこで、サタンに捕らわれた後、人間は神の前で救いを受けることに一歩近づいた。もちろん、この段階の働きは律法の時代から一歩進んだ神の経営であって、律法の時代よりもさらに深い段階のものであった。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

27. イエスの贖いがなければ、人類は永遠に罪の中に生き、罪の子、悪魔の子孫となっていたはずである。この状態が続けば、地上全体がサタンの住む地、その住まいとなっていたであろう。しかしこの贖いの働きは人類への慈しみと憐れみを示すことを必要とした。そのような手段によってのみ、人類は赦しを受け、ついに全き者とされ、神に完全に得られる資格を得ることができた。この働きの段階がなければ、六千年の経営（救いの）計画は前に進むことはできなかつただろう。もしイエスが十字架にかけられることなく、ただ病人をいやし、悪霊を追い出したただけだったなら、人々はその罪を完



全に赦されることはなかったであろう。イエスが地上で働きをなした三年半のあいだ、イエスはその贖いの働きを半分完成させただけであり、十字架に釘づけにされ、罪深い肉の姿となり、悪しき者に引き渡されることによってのみ、イエスは十字架での働きを完成させ、人間の運命を掌握した。サタンの手に引き渡されて初めて、イエスは人類を贖った。三十三年半のあいだイエスは地上で苦しみ、あざけられ、中傷され、見捨てられ、まくらする場所や休む場所さえないほどにまで放置され、その後十字架につけられ、聖なる罪のない体であるイエスの存在全体が十字架で釘づけにされた。イエスはあらゆる苦しみに耐えた。権力者たちはイエスをあざ笑い、むち打ち、兵士たちはその顔に唾を吐きさえした。それでもイエスは黙ったまま最後まで耐え忍び、死にいたるまで無条件に従い、そこですべての人間を贖った。そのとき初めてイエスは安息することができた。イエスが行なった働きは、恵みの時代のみを表すものであり、律法の時代を表すものではなく、また終わりの日々の働きに代わるものでもない。これが人類にとっての第二の時代である贖いの時代という、恵みの時代におけるイエスの働きの本質である。

『言葉は肉において現れる』の「贖いの時代における働きの内幕」より

### (Ⅲ) 神の国の時代——終末の時代——についての言葉

28. イエスが人の世に誕生した時、イエスは恵みの時代をもたらし、律法の時代を終わらせた。終わりの日において神はもう一度肉となり、今回人間の姿になった時、神は恵みの時代を終わらせ、神の国の時代をもたらしした。神の二回目の受肉を受け入れる人々はすべて神の国の時代に導かれ、直接神の導きを受け入れることができるだろう。イエスは人間のあいだでたくさんの働きをしたが、全人類の贖いを完了しただけで、人の贖罪のためのささげものとなり、人から墮落した性質のすべてを取り除くことはなかった。サタンの影響から完全に人を救うためには、イエスが贖罪のささげものとして人の罪を引き受けることが必要だっただけでなく、神にとっても、サタンによって墮落させられた人の性質を完全に取り除くためにもっと大きな働きを行うことが必要だった。そこで、人が罪を赦された後、神は人を新しい時代に導くために人間の姿に戻り、刑罰と裁きの働きを開始し、この働きは人をより高い領域に連れてきた。神の支配の下に従う人々はすべてより高い真理を享受し、より大きな祝福を受けるだろう。彼らは本当に光の中に生き、真理、道、いのちを得るだろう。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

29. 人が贖われる前、サタンの毒の多くがすでに人の中に植え付けられていた。サタンによる墮落を何千年も経た人間には、神に抵抗する性質が既に定着して存在していた。だから、人が贖われたとき、それは人が高い代価で買い取られた贖い以上のものではなく、人の中の毒を持った性質は取り除かれてはいなかった。ここまで汚れた人は、神に仕えるにふさわしくなる前に変えられなければならない。裁きと刑罰の働きを通して、人は自分の中の汚れて墮落した本質を完全に知ようになる。そして、人は完全に変わり、清くなることができる。この方法でのみ、人は神の玉座の前に戻るのにふさわしくなることができる。この日なされるすべての働きは人が清められ変えられるためである。言葉による裁きと刑罰、また精錬を通して、人は墮落を捨て、清くされることができる。この段階の働きを救いの働きと考えるよりは、むしろ清めの働きと言った方が適切であろう。実際、この段階は第二段階の救いの働きであるとともに征服の段階である。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

30. 終わりの日に受肉した神が地上に来るのは、主に言葉を述べるためである。イエスが来た時、天の国の福音を広め、十字架の贖いの業を成就した。イエスは律法の時

代を終わらせ、すべての古いものを終わりにした。イエスの現れが律法の時代を終わらせ、恵みの時代を招き入れたのだ。終わりの日に受肉した神が来て、恵みの時代は終わった。神は、主として言葉を述べるために来た。言葉を用いて人間を完全にし、光に照らし、啓発し、人間の心にある漠然の神のいるところを除くために来た。これはイエスが来た段階の働きではない。イエスが来た時には、多くの奇跡を示した。イエスは病人を癒やし、悪霊を追い払い、十字架で贖いの業を行なった。その結果、人間は、これが神のあるべき姿だと考えた。イエスが来た時、主は漠然の神の姿を人間の心から除くことはしなかった。イエスが来た時、十字架につけられた。病人を癒やし、悪霊を追い払い、天国の福音を広めた。ある意味で、神の受肉は終わりの日に人間の心から漠然の神の姿を除くもので、そうしてもはや人間の心に漠然の神の姿がないようにしたのである。神はその実際の言葉と働き、地上のあらゆる場所での動き、そして人々の間でするまことに真実で普通の働きを通じ、人々に神が実在することを知らせ、人間の心にある漠然とした神の居場所を取り除く。つまり、神は肉の体で語った言葉で人間を完全にし、すべてを成就するのだ。これが神が終わりの日に成就することだ。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知るということ」より

31. 今日、神は主として、「言葉が肉において現れる」という働きを完成するために、人を完全にすることに言葉を用いるために、そして人が言葉による取り扱いと精錬を受け入れるよう、肉になった。神の言葉の中であって、あなたは神によって、施され、いのちを得る。神の言葉の中で、あなたは神の働きと行いを知る。神はあなたを罰し精錬するために言葉を用いる。したがって、もしあなたが苦難に会うなら、それは神の言葉によるものでもある。今日、神は事実を用いるのではなく言葉を用いて、働きをする。神の言葉があなたに届いてはじめて、聖霊はあなたの中で働きをすることができ、あなたに苦痛を感じさせたり優しさを感じさせたりすることができる。神の言葉だけが、あなたを真実に至らせることができ、神の言葉だけが、あなたを完全にすることができる。したがって、終わりの日に神によってなされる働きの主体は、すべての人を完全にし、そして人を導くために自身の言葉を用いることであることを、せめてあなたは理解しなければならない。神はその働きのすべてを、言葉を通じて行う。神はあなたを罰するために事実を用いない。一部の人たちが神に抵抗することもある。神はあなたに大きな不快感をもたらさない。あなたの肉は罰せられていないし、あなたは苦痛を味わってもいない。しかし、神の言葉があなたに届き、あなたを鍛錬するようになるやいなや、それはあなたにとって耐えられないものになる。そうではないだろうか。効力者である

ときに、神は、人を底なしの穴に投げ入れると言った。人は実際に、底なしの穴に到達しただろうか。人を鍛錬するための単なる言葉の使用を通して、人は底なしの穴に入っていた。このようにして、終わりの日に、神が肉になるとき、神はすべてを成し遂げるために、すべてを明らかにするために、主として言葉を用いる。神の言葉の中においてのみ、あなたは、神とは何かを知ることができる。神の言葉の中においてのみ、あなたは、神が神自身であることを知ることができる。肉となった神が地上に来るとき、神は言葉を話すこと以外のどのような他の働きもしない。したがって、事実が必要でない。言葉で十分である。神は主な役割として、この働きをするために、神の力と至高を人が自身の言葉の中に見られるように、神が身を低くして自身を隠すことを人が自身の言葉の中に見られるように、そして神の完全性を人が自身の言葉の中に知ることができるように、来たからである。神が所有するものおよび神が今あるところのものすべてが、神の言葉の中にあり、神の知恵や素晴らしさは神の言葉の中にある。この中にあなたは、神が自身の言葉を話す多くの方法を見ることができる。今までずっと、神の働きのほとんどは、人間への施しであり、暴きであり、取り扱いであった。神は軽々しく人を呪いはしないし、そうするときでさえ、言葉を通してそれを行う。したがって、この肉となった神の時代において、神が再び病人を癒やし、悪魔を追い出すのを見ようとすべきでない。いつもしるしを見ようとしていてはならない。無意味なことだからだ。そのようなしるしは、人を完全にしはしない。わかりやすく言えば、以下のようなことである。今日、肉となった実在する神自身は、話すことだけを行い、行動はしない。このことは真理である。神はあなたを完全にするために言葉を用い、あなたに食べ物を与え、あなたの渇きを癒すために言葉を用いる。神はまた、働きをするために言葉を用い、さらに神は自身の真実をあなたに知らせるために、事実の代わりに言葉を用いる。もしあなたが、このような神の働きを感じ取ることができるなら、受け身でいることは難しいだろう。否定的なことに集中する代わりに、肯定的な事柄にのみ、あなたがたは集中すべきである。つまり、神の言葉が成就されようとしまいと、あるいは事実の到来があらうとなかろうと、神は自身の言葉から人がいのちを得ることを可能にする。これはあらゆるしるしの中の最大のしるしである。そしてなお偉大であるのは、これが議論の余地のない事実であるということである。この事実こそ、神を知る論拠とするのにもっともふさわしい。そしてこのことこそ、しるしよりもさらに偉大なしるしである。このような言葉だけが、人を完全にする。

『言葉は肉において現れる』の「すべては神の言葉が達成する」より

32. 神の国の時代に神は言葉を使い、新たな時代の到来を知らせ、神の働きの方法を変え、その時代全体の働きを行なう。これが言葉の時代において神が働く原則である。神は異なる視点から語るために肉となり、肉に現れる言葉である神、神の知恵と驚くべき素晴らしさを人間が本当に見ることができるようにした。このような働きは、人間を征服し、人間を完全にし、人間を淘汰する目的をよりよく達成するために行なわれる。これが言葉の時代において働くために言葉を使うことの真の意味である。言葉をとおして、神の働き、神の性質、人間の本質、人間が何に入っていくべきかを人間は知ようになる。言葉をとおして、言葉の時代に神が行ないたい働きはその全体が結実される。言葉をとおして、人間は明らかにされ、淘汰され、試される。人間は言葉を見、言葉を聞き、言葉の存在に気づいた。その結果、人間は神の存在、神の全能性と知恵、また神の人間への愛と人間を救う願望を信じる。「言葉」という語句は単純でごく普通であるが、受肉した神の口から出る言葉は宇宙全体を揺るがせる。それは人間の心、観念、古い性質、世界全体が以前にはどのように表れていたかを変革する。時代をとおして、今日の神だけがこのような働き方をし、今日の神だけがそのように語り、そのように人間を救いに来る。それ以降は、人間は言葉の導きの下に生き、言葉により牧され、施しを受ける。全人類は言葉の世界に、神の言葉の呪いと祝福の内に生きようになった。そして言葉の裁きと刑罰の下に生きようになったさらに多くの人間がいる。これらの言葉とこの働きはすべて人間の救いのため、神の旨を成就するため、過去の創造における世界の元来の状況を変えるためである。神は言葉をもって世界を創造し、宇宙の人間を言葉をもって導き、言葉をもって征服し救う。ついに、神は言葉を使って古い世界全体を終わらせる。そのときはじめて、経営(救いの)計画がくまなく完了する。

『言葉は肉において現れる』の「神の国の時代は言葉の時代である」より

33. 神がこの時代に実行する働きは、主に、人間のいのちのための言葉を与えること、人間の本性の実質と、人間の墮落した性質を明らかにし、人間の知識と文化とともに、宗教的観念、封建的な考え方、時代遅れの考えを除くことである。これはすべて神の言葉によって露わにし、清めなければならない。世の終わりに、神はしるしや不思議ではなく、言葉を用いて人間を完全にする。神は言葉によって人間を露わにし、裁き、罰し、人間を完全にし、言葉の中に神の知恵と素晴らしさを見、神の性質を知り、言葉によって人間が神の働きを知るようにする。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知ること」より

34. 終わりの日において、神は人を完全にするのに、主として言葉を用いる。神は、人に圧力をかけたり人を確信させたりするのに、しるしや不思議を用いない。それは、神の力を明らかにしない。もし神がしるしや不思議を示すだけならば、神の实在性を明らかにすることは不可能だろう。したがって、人を完全にすることも不可能だろう。神は、しるしや不思議によって人を完全にせず、人を潤し牧養するのに言葉を用いる。そしてその後で人は、完全な従順と神についての認識を達成することができる。これが、神が行う働きと神が話す言葉の目的である。神は、人を完全にするのにしるしや不思議を示すという方法を用いない。神は言葉を用い、多くの異なる働きの方法を用いて人を完全にする。それが精錬であろうと、取り扱い、刈り込み、あるいは言葉の施しであろうと、神は、人を完全にするために、人に神の働き、神の知恵や驚くべき力についてのより大きな認識を与えるために、多くの異なる観点から話す。

『言葉は肉において現れる』の「すべては神の言葉が達成する」より

35. 言葉の働きで一番大きな意義は、人々が真理を理解した後、真理を実践し、彼らの性質において変化を達成し、自分自身および神の業についての認識を獲得させることである。話すことを通して働くという手段のみが神と人の意思疎通を可能にでき、言葉のみが真理を説明することができるのである。このような方法で働くことは、人を征服する最善の手段である。言葉を発すること以外では、真理や神の業をより明確に人に理解させることのできる手段は他にない。そこで神は神の業の最終段階で人に話しかけ、人が理解しないすべての真理や奥義を明らかにして、彼らが神から真理の道といのちを得て、神の心を満足させることができるようにする。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである」より

36. 時代を終わらせる神の最後の働きでは、神の性質は刑罰と裁きであり、それが不義なるもの全てを現わし、すべての人々を公に裁き、神を真に愛する人たちを完全にする。このような性質のみが時代を終わらせることができる。終わりの日はすでに来ている。あらゆるものは種類によって区分され、性質に従って種類分けされる。この時に神は人の最後と終着点を明かにする。もし人が刑罰と裁きを受けなければ、人の不従順と不義を明かす方法はないであろう。刑罰と裁きを通してのみ、あらゆるものの終局を明かすことができる。人は罰せられ裁かれて初めて本当の姿を示す。悪は悪に、善は善に、人は種類によって区分される。刑罰と裁きを通して、すべてのものの最後が明かされ、悪人は罰せられ、善人は褒美を得るであろう。そして、すべての人たちは神の支配

の下に従属することになるであろう。すべての働きは義なる刑罰と裁きを通して達成されなければならない。人の墮落は頂点に達し、人の不従順はあまりにも深刻になってしまったので、おもに刑罰と裁きであり、終わりの日に明らかにされる神の義なる性質のみが人を完全に変えて全き者とすることができる。この性質のみが悪を暴露し、よってすべての不義なる人々を厳しく罰することができる。よって、この様な性質は時代の意義を持ち、神の性質の顕示と表示はそれぞれの新しい時代の働きのためである。神はその性質を気まぐれに意味もなく顕すことはない。もし、人の終末が終わりの日に明らかにされるときに神が依然として人に無尽蔵の憐れみと愛を与えるなら、もし神が依然として人を愛情深く、人を義なる裁きにさらさずに寛容、忍耐、赦しを示すなら、人がどんなに深刻な罪を犯しても、義なる裁きなしに依然として人を赦すなら、神の経営のすべてに一体終わりはあるのだろうか。このような性質がいつ人類を正しい終着点に導くことができるのだろうか。たとえばいつもいつくしみ深く、優しい、柔和な裁判官を例に取ってみよう。この裁判官は犯した罪に関係なく人々を愛し、誰であっても、いつくしみ深く寛容である。それでいつ正しい判決にたどり着くことができるのか。終わりの日には、義なる裁きのみが人を分類し、新しい領域に連れて行くことができる。この様に、時代全体に神の裁きと刑罰の義なる性質を通して終わりがもたらされるのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

37. 刑罰と裁きを連発する中で、人の子は言葉を話すことによって本来の性質を表現し、その刑罰と裁きを受け入れるすべての人々が人の子の本当の顔、ヨハネが見た人の子の顔の忠実な描写である顔を見ることを認める。（もちろん、このすべては神の国の時代の神の働きを受け入れない人々には見えないだろう。）神の本当の顔は人間の言葉では十分明確に表現することはできないので、神はその本来の性質の表現を用いて人に本当の顔を示す。すなわち、人の子の本来の性質を経験した人々はすべて、人の子の本当の顔を見たのである。神はあまりに偉大なので、人の言葉で十分明確に表現することができないからである。いったん神の国の時代における神の働きの各段階を経験したら、ヨハネが燭台の明かりの中で人の子について語った言葉の意味を人は知るだろう。「そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎが突き出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

38. この最後の段階の働きにおいて、成果は言葉によって達成される。言葉を通して、人は多くの奥義や過去の世代にわたる神の働きを理解するようになる。言葉を通して、人は聖霊の啓きを受け、言葉を通して、人はかつての世代に決して解明されなかった奥義や、昔の預言者たちや使徒たちの働き、そして彼らの働きの原則などを理解するようになる。言葉によって、人は神の性質を知るようになると同時に、人の不従順さや反抗心を理解し、自分の本質を知るようになる。このような働きの段階と、語られた全ての言葉を通して、人は霊の働き、受肉した神の働きを知り、さらに彼の性質の全体を知るようになる。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

39. 最後には、この現段階は神の働きを完全に終わらせ、その終結をもたらすだろう。すべての人たちが神の経営計画を理解し知るようになるであろう。人の中にある観念、意図、間違った理解、ヤーウェとイエスの働きに関する人の観念、異邦人についての見解、そして人の他の逸脱と間違いは正されるであろう。そして人は人生の正しい道、神によってなされたすべての働き、そしてすべての真理を理解するであろう。そうなった時、この段階の働きは終わりとなるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（２）」より

40. 終わりの日とは、すべてのものが征服することを通して、その種類にしたがって分類される時のことである。征服することは終わりの日の業である。つまり、一人一人の罪を裁くことが終わりの日の業である。そうでなければ、どうやって人々を分類できるというのか。あなたたちの間で行われている分類の働きは、全宇宙におけるそうした働きの始まりである。この後、すべての国々のいたるところにいる人々も征服の働きの対象となる。これは、被造物であるすべての人々が種類によって分類され、裁きの座の前に進み出て裁かれるということだ。誰一人、何ものもこの刑罰と裁きの苦しみから逃れることはできない。また、誰も、何ものも、この種類による分類を避けることはできない。あらゆるものが種類ごとに分けられる。それは、万物の終わりが近く、天と地のすべてが終結に至るからだ。どうして人間が己の存在の終結を逃れられよう。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（１）」より

41. 悪を罰し、善に報いるという神の最終的な働きは、全て全人類を完全に清めるために行われる。そうすることによって、完全に清くなった人類を永遠の安息に導き入れることができる。神のこの段階の働きは最も重要な働きであり、神の経営の働き全体



の最後の段階である。もし神が悪者たちを全て滅ぼさないで、彼らを残しておけば、全人類はやはり安息の中に入ることができず、神も全人類をよりよい領域に導き入れることができない。このような働きでは完了することはできない。神が自身の働きを終える時、全人類は完全に聖いものとなる。このようになってはじめて、神は安らかに安息の中で生活することができる。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

## II 終わりの日における神の裁きの働きについての代表的な言葉

1. 神は裁きと刑罰の働きを行うが、それは人が神についての認識を得られるようにであり、また神の証しのためである。人の墮落した性質を神が裁くことなしには、犯すことを許さない神の義なる性質を人は知ることはできず、神についての古い認識を新しいものに変えることもできない。神の証しのため、そして神の経営（救い）のため、神はそのすべてを公けにし、そうすることで、神の公的な出現を通して、人は神についての認識に到達することができ、その性質において変えられ、神のはっきりとした証しを立てられるようになる。人の性質の変化は、さまざまな種類の神の働きを通して成し遂げられる。このような性質の変化なしには、人は神の証しを立てることはできず、神の心にかなうこともできない。人の性質の変化とは、人がサタンの束縛と闇の影響から解放され、真に神の働きの見本であり標本、神の証人、神の心にかなう者になったことを意味する。今日、受肉した神がその働きを地上で行なうために来たが、神は人が神を認識し、神に服従し、神の証しとなること、すなわち、神の実際的で正常な働きを知り、人の観念とは合致しない神の言葉と働きのすべてに従い、神が人間を救うために行なうあらゆる働きと、また神が人間を征服するために成し遂げるあらゆる業の証しをたてること、を要求している。神を証す人々は神の認識をもたなければならない。この種の証しのみが正確であり現実的であり、この種の証しだけがサタンを恥じ入りらせることができる。神の裁きと刑罰、取り扱いと刈り込みを経験することで神を知るようになった人々を、神はその証人として用いる。神はサタンにより墮落させられた人々をその証人として用い、また性質が変わり、それにより神の祝福を得た人々をその証人として用いる。神は口先で賞賛するための人を必要とせず、神に救われていないサタンの種類の称賛や証しも必要としない。神を知る人々だけが神の証しを立てる資格があり、性質において変革させられた人々だけが神への証しとなる資格がある。神は人が意図的に神の名に恥をもたらすことを許さない。

『言葉は肉において現れる』の「神を知る者だけが神に証しを立てることができる」より

2. あなたがたは神の旨を理解し、神の働きは、天地万物の創造のように簡単なものでないことを理解すべきである。なぜなら、今日の働きとは、墮落した者たちや極度に麻痺してしまった人々たちを変え、創造されながらもサタンに働きかけられてしまった人々たちを清めることであり、アダムとエバを創造することではなく、ましてや光を創った

り、あらゆる種類の植物や動物を創造したりすることでもない。神の働きは、今やサタンによって墮落させられたものを清めて取り戻し、神のものとし、神の栄光とするためのものである。そのような働きは、人間が想像する天地万物の創造のように簡単なものではなく、人間が想像するような、サタンを呪って底なしの穴へ送るようなものでもない。むしろそれは人間を変えるためのものであり、否定的なものを肯定的なものに変え、神に属さないものを神の所有物にすることである。これがこの段階の神の働きの秘められた意味である。あなたがたはそれに気づかなくてはならないし、物事を安易に考え過ぎてはならない。神の働きは、どんな通常の働きとも異なっている。そのすばらしさは人間の頭では測り知ることができず、その知恵は人間が獲得できるものではない。この段階の働きの最中、神は万物を創造しているのでも、それらを破壊しているのでもない。むしろ、神はすべての創造物を変え、サタンによってけがされたすべてのものを清めているのだ。それゆえ神は大規模な働きを始めるであろう。そして、これこそが神による働きの意義の全てである。これらの言葉から、あなたは、神の働きが簡単だと思うだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きは人間が想像するほど簡単か」より

3. 終わりの日の働きとは、すべての人をその性質に応じて区分し、神の経営（救いの）計画を締めくくることである。時が近づき、神の日が来たからである。神の国に入る人すべて、すなわち神に最後の最後まで忠実な人すべてを、神は神自身の時代に連れて行く。しかし、神自身の時代が来る前は、神の働きは人間の行いを観察したり、人間の生活について調べたりすることではなく、人間の不服従を裁くことである。神の玉座の前に来る人すべてを、神は清めなければならないからである。今日まで神の足跡に従ってきた人はすべて神の玉座の前に来る人であり、これゆえに、最終段階の神の働きを受け入れる人の一人ひとは神の清めの対象である。言い換えれば、最終段階における神の働きを受け入れる人は誰もが、神の裁きの対象なのである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは真理をもって裁きの働きを行う」より

4. 裁きの働きは神自身の働きであり、そのため当然ながら神が自ら行なわなければならない。それは神の代わりに人が行うことはできない。裁きとは真理を用いて人類を征服することなので、この働きを人のあいだで行うために神が受肉した姿で再び現れることは疑いもないことである。つまり、終わりの日においてキリストは真理を用いて世界各地の人々を教え、彼らにあらゆる真理を知らしめる。これが神の裁きの働きである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは真理をもって裁きの働きを行う」より

5. 神の今回の受肉において、神の働きは主に刑罰と裁きを通して神の性質を表すことである。これを基礎として、神は人により多くの真理をもたらし、より多くの実践方法を示し、こうして人を征服し、墮落した性質から人を救うという神の目的を達成する。これが神の国の時代における神の働きの背後にあるものである。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

6. 終わりの日には、キリストはさまざまな真理を用いて人間を教え、人間の本質を明らかにし、人間の言動を解剖する。そのような言葉は、人の本分や、人はいかに神に従うべきか、人はいかに神に忠実であるべきか、いかに正常な人間性を生きるべきかや、また神の知恵と性質など、さまざまな真理を含んでいる。これらの言葉はすべて人間の本質とその墮落した性質に向けられている。とくに、人間がいかに神をはねつけるかを明らかにする言葉は、人間がいかにサタンの化身であり、神に敵対する力であるかに関して語られる。裁きの働きを行うにあたって、神は少ない言葉で人間の本性を明らかにするだけではない。神は長い期間にわたり、それをさらけ出し、取り扱い、刈り込む。このようなさらけ出し、取り扱い、刈り込みの方法は通常という言葉が取って代わることはできず、人間が完全に失った真理でなければ取って代われない。このような方法のみが裁きと呼ばれることができる。このような裁きを通してのみ人間は制圧され、神への服従に向かうように徹底的に説得され、さらに神についての真の認識を得ることができる。裁きの働きがもたらすのは、人による神の真の顔の認識と、人間自らの反抗的性質についての真理である。裁きの働きにより、人は神の心、神の働きの目的、人には理解することのできない奥義についてかなり理解できるようになる。また、それにより人は自分の墮落した本質と墮落の根源を認識し、人間の醜さを発見する。これらの効果はすべて、裁きの働きによりもたらされる。それは、実際に、この働きの本質は神を信じる人すべてに神の真理、道、いのちを開く働きだからである。この働きが神による裁きの働きである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは真理をもって裁きの働きを行う」より

7. 裁きの働きは代表によるもので、特に誰かのために行うものではない。そうではなくて、この働きでは、一群の人々が人類を代表して裁きを受けるのである。受肉した神が自ら一群の人々に働きかけ、全人類に施す働きを代理的に行うと、その後、それが徐々に広まる。裁きの働きも、そのように行われる。神は特定の人や特定の人を裁くのではなく、全人類の不義を裁く——例えば、神への敵対、神に対する不遜、神の

働きの妨害等。裁かれるのは人間の神への敵対の本質であって、この働きは終わりの日の征服の働きである。人間が目撃する受肉した神の働きと言葉は、終わりの日に大きな白い玉座の前での裁きの働きであり、これは過去に人間が考えたものである。今、受肉した神が行っている働きは、まさに、大きな白い玉座の前での裁きである。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は受肉した神による救いをより必要としている」より

8. サタンによりあまりにもひどく墮落させられた人類は、神が存在することを知らず、神を礼拝することをやめてしまった。初めに、アダムとエバが創造された時、ヤーウェの栄光とヤーウェの証しが地に満ちていた。しかし、墮落させられた後、人間はその栄光と証しを失った。なぜなら、誰もが神に反抗し、神を畏れ敬うことをすっかりやめてしまったからだ。今日の征服の働きは、そのすべての証しとすべての栄光を取り戻し、すべての人間が神を崇めるようにし、それによって被造物の間に証しがあるようにするためである。これが、この段階の業において達成されねばならぬことである。厳密に言って人間はどのように征服されるのだろうか。それは、この言葉の働きを用いて、人間を十分に確信させることによって行われる。それは暴露と、裁きと、刑罰と、情け容赦ない呪いを用いて人間を完全に服従させる。また、人間の反抗的性質を明らかにし、その反逆を裁くことによって人間は人類の不義と汚れを知るようになる。それによって神の義の性質がいっそう強調されるであろう。主に、こうした言葉を用いて人間を征服し、完全に確信させる。言葉は人類の究極的征服の手段であり、征服を受け入れる者はみな、言葉による鞭と裁きとを受け入れなければいけない。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実 (1)」より

9. 人の最も大きな問題は、人が自分の運命と前途のことしか考えず、それらを偶像としていることである。人は自分の運命と前途のために神を追い求めるだけで、神への愛から神を礼拝することはない。そのため、人を征服するには、人の身勝手さや貪欲、そして神を崇拝する妨げとなるものは、すべて排除しなければならない。そうすることによって、人の征服の効果が達成されるだろう。その結果、人を征服するもっとも最初の段階で、まず人の野心や最も致命的な弱点を一掃し、これを通して人の神への愛を現わし、人生についての認識を変え、また神に対する見方、自身の生存の意味などを変える必要がある。このようにして人の神への愛は清められる。つまり、人の心が征服されるのだ。しかし、全ての被造物に対する神の姿勢は、征服することだけを目的として征服するというものではない。そうではなく、彼は、人を獲得するため、自らの栄光のため、そして人の一番最初の本来の姿を回復するために、人を征服するのである。彼が征

服することだけを目的として征服するなら、征服の働きの意義が失われてしまうだろう。つまり、もし人を征服した後、神が人に見切りをつけ、人の生死に気を留めないなら、これは人類に対する経営（救い）にも、人の救いのための征服にもならないであろう。人が神により征服されたあとに神のものとされることと、素晴らしい終着点へ到達することのみが全ての救いの働きの中核であり、これによってのみ人の救いの目的が達成されるのである。すなわち、人が素晴らしい終着点に到着し、安息に入ることのみが、全ての被造物が持つべき前途であり、造り主によってなされるべき働きである。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

10. 征服の働きで達成される成果は、主に人間の肉が反抗をやめることである。つまり、人間の知性が神について新たに理解できるようになり、人の心が完全に神に従うようになり、人が神のために存在することを決心することである。人の性格やその肉体がどのように変わるかによって、その人が征服されたか否かが決まるのではない。むしろ、考え、意識、理知が変化するとき、つまり、精神的態度全体が変わるとき、神に征服されたのである。従うことを決意し、新たな心的態度を自分のものとし、もはや神の言葉や働きに自分なりの観念や意図を持ち込まず、頭脳は普通に考えられ、つまり、神のために心から努力できるなら、このような人は完全に征服された人である。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（3）」より

11. 征服の最終段階は、人々を救い、また、人々の結末を明らかにすることにある。それは、裁きによって人々の墮落を暴露し、それによって人々を悔い改めさせ、立ち上がらせ、いのちと人生の正しい道を追い求めるようにさせるためである。それは、鈍く頑なになった人々の心を目覚めさせ、裁きによって彼らの内にある反抗的性質を示すためである。しかしながら、もし人々がまだ悔い改めることができず、なおも人生の正しい道を追い求めることができず、これらの墮落を捨て去ることができないのなら、彼らは救いようのないものとなり、サタンにのみ込まれる。これが征服の意味だ——人々を救い、また人々の結末を見せるのだ。良い結末と悪い結末——すべては征服の働きにより明らかにされる。人々が救われるか呪われるかは、みな征服の働きの間に明らかにされる。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（1）」より

12. あなたたち人々に行われる征服の働きには、もっとも深い意義がある。一つには、この働きの目的は、一群の人々を完全にすることである。つまり、完全にされた最

初の一群、言わば、初穂として、彼らを勝利者の会衆に仕上げることである。第二には、それは、被造物に神の愛を享受させ、神の最も偉大な救いを受けさせ、神の完全な救いを受けさせ、人間が憐れみと慈愛を享受するだけではなく、さらに重要なことだが、刑罰と裁きをも享受させることなのである。創世の時から今日に至るまで、神がその働きの中で行ったことは、みな愛であり、人間への憎しみは欠片ほどもない。あなたの見た刑罰と裁きでさえ愛なのだ。それはもっと真実で、さらに現実的な愛であり、その愛は人を人生の正しい道へと導く。第三に、これはサタンの前で証しすることである。そして第四に、それは、将来の福音の働きを広めるための基礎を築くためである。神が行ったすべての働きは、人々を人生の正しい道へと導くことがその目的であり、人間として正常な生き方ができるようにするためである。何故なら、人間はどのように人生を歩むべきか知らないからだ。このような導きがなければ、あなたは虚しい人生しか送れないだろう。価値のない無意味な人生しか送られず、どうすれば正常な人間でいられるのか、まったく分からないだろう。これが人間を征服することの最も深い意味である。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内幕（４）」より

13. 神は何を通じて人を完全にするのであろうか。それは、義という神の性質によるのである。神の性質は主として義、怒り、威厳、裁き、呪いであり、神は主に裁きを通じて人を完全にする。一部の人々は理解できず、なぜ神は裁きと呪いによってしか人を完全にできないのかと問う。彼らは「神が人を呪ったら、人は死ぬのではないか。神が人を裁いたら、人は断罪されるのではないか。それにもかかわらず、人はどうやって完全になれるのであろうか」と言う。神の働きを理解しない人々はそう話すのである。神が呪うのは人間の不従順であり、神が裁くのは人間の罪である。神の言葉は厳しく、少しの気遣いもなく、人の内にあるあらゆるものを明らかにし、そうした厳しい言葉を通じて人の内にある本質を顕わにするが、神はその裁きを通じて人に肉体の本質についての深遠な認識を授け、それにより人は神の前に従順を示すのである。人の肉は罪から成り、サタンによるものであり、不従順であり、神の刑罰の対象である——であるから、人に自分を理解させるためには、神の裁きの言葉が人にもたらされねばならず、あらゆる精錬が行われねばならない。それにより初めて神の働きは成果を生むのである。

『言葉は肉において現れる』の「辛い試練を経験して初めて、神の素晴らしさを知ることができる」より

14. 神はその裁きをもって人を完全にし、愛し、救ってきたのである——しかし、神の愛にはどれだけのものが含まれているのであろうか。そこには裁き、威厳、怒り、呪いがある。神は過去に人を呪ったが、底なしの淵に完全に突き落としたわけではなく

、そうした手段により人の信仰を精錬したのである。神は人を死に追いやったわけではなく、人を完全にするために行いを為したのである。肉の本質はサタンのものである——それは神が言った通りである——だが、神が為した事実はその言葉通りではなかった。神が呪うのはあなたが神を愛するようになるためであり、肉の本質を知るようになるためである。神があなたを刑罰するのはあなたが目を覚ますためであり、内なる欠点を知らせ、人が全く価値のないことを知らせるためである。このように、神の呪い、裁き、威厳、怒りは、すべて人を完全にするためのものである。今日神が為すあらゆる事、あなたがたの内に神が顕かにする義なる性質——それは人を完全にするためのものである。神の愛はそのようなものである。

『言葉は肉において現れる』の「辛い試練を経験して初めて、神の素晴らしさを知ることができる」より

15. 今日、神はあなたたちを裁き、あなたたちを罰し、あなたたちを罪に定めるが、あなたを罪に定めるのはあなたが自分を知るためであることを知りなさい。罪に定めること、のろい、裁き、刑罰——これらはみなあなたが自分を知るため、あなたの性質が変わるためである。そしてさらに、あなたが自分の価値を知り、神の行動はすべて義であり、それは神の性質と神の働きの必要性に適っていること、神は人を救うための計画に従って働くこと、神は人を愛し、人を救い、人を裁き、罰する義なる神であることを理解するためである。もしあなたが、自分は低い地位の者で、墮落して、不従順であることだけを知り、神が今日あなたに行う裁きや刑罰を通してあなたに救いを明らかにしようと望んでいることを知らないならば、あなたは経験するすべがないし、ましてや前に進み続けることはできない。神は人を殺したり、滅ぼしたりするためにではなく、裁き、のろい、罰し、そして救うために来たのだ。神の六千年の経営（救いの）計画が終了する以前——つまり神が各範疇の人間の結末を明らかにする以前においては——地上における神の働きは人の救いのためであり、すべては神を愛する者たちを真に完全にし、神の統治に服従させるためである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである

」より



16. あなたたちはみな、罪と放蕩の場所で生活している。あなたたちは皆みだらで罪深い人々だ。今日、あなたたちは神を見ることができるだけではなく、もっと重要なことは、刑罰と裁きとを受け、こんなにも深い救い、つまり、神の最大の愛を受けているのだ。神のすることはすべて、あなたたちへの真の愛である。神に悪意はまったくない。神があなたたちを裁くのは、あなたたちの罪の故である。それは、あなたたちが自分自身をよく吟味し、このすばらしい救いを受けられるようにするためである。これはみな、人間を形成するために行われる。始めから終わりまで、神は人間を救うために全力を尽くしている。そして、確かなことは、神には、自らの手で創造した人間を完全に破壊するつもりはない。今、神は働くためにあなたたちの間に来た。これは、より以上の救いではないか。もし神があなたたちを憎んでいるのなら、あなたたちを直接導くためにそれ程大きな働きをするだろうか。なぜ神がそのように苦しむ必要があるのか。神はあなたたちを憎まないし、あなたたちに何の悪意ももたない。あなたたちは、神の愛が最も真実な愛であることを知らなければいけない。神が裁きを通して人々を救わなければならないのは、唯一、彼らの不服従の故である。そうでなければ、彼らは救われないだろう。あなたたちは、どうやって生活し、どのように生きていくのかを知らず、また、あなたたちは、このみだらで罪深い場所に住み、みだらで汚れた悪魔であるが、神は、あなたたちがいっそう墮落してゆくのを望まない。また神は、あなたたちがこのような汚れた場所で生活し、サタンの思うままに踏みつけられるのは見るにしのびない。あるいは、あなたたちがハデスに落ちてゆくままにすることなど望まない。神はただあなたたちの群れを獲得し、完全に救いたいと願っている。これが、あなたたちに征服の働きを行う主要目的である――これは正に救いのためなのだ。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内幕（４）」より

17. 神は墮落した人類を救うために地上で働きに来た――このことにうそはない。そうでなければ、神は直接その業を行うために来ることは絶対にないだろう。昔、神の救いの手段は最大限の慈愛と憐れみを見せることだった。神は全人類と交換するために自らのすべてをサタンに与えたほどであった。今日は昔とはまったく違っている。今日、あなたたちの救いは終わりの日に、各人を種類によって分類する期間に生じる。あなたたちの救いの手段は慈愛や憐れみではなく、人がより完全に救われるための刑罰と裁きである。従って、あなたたちが受けるすべては刑罰、裁き、容赦のない鞭であるが、この無情な鞭打ちの中に罰はほんの少しもないことを知りなさい。わたしの言葉がどんなに辛辣であっても、あなたたちに降りかかるのはあなたたちにはまったく無情だと思

われるほんの数語だけであり、わたしの怒りがどんなに大きくても、あなたたちに注がれるのは教える言葉であることを知りなさい。わたしはあなたたちに危害を加えるつもりはないし、あなたたちを殺すつもりもない。これはすべて事実ではないのか？今日、義の裁きであろうと、無情な鍛錬や刑罰であろうと、すべては救いのためであることを知りなさい。今日種類に応じた各人の分類がであろうと、人を分類する範疇が露わにされようと、神の発する言葉と業のすべては本当に神を愛する者たちを救うためである。義の裁きは人を清めるためであり、無情な鍛錬は人を清めるため、厳しい言葉、あるいは懲らしめはすべて人を純化するため、救うためである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである

」より

18. 今なされている働きは人々にサタンを捨てさせ、先祖を捨てさせることである。言葉による裁きのすべては人間の墮落した性質を暴露し、人々に人生の本質を理解させることを目的としている。繰り返されるこれらの裁きは全て、人々の心を刺し通す。ひとつひとつの裁きは人々の運命に直接影響を与え、人々の心を傷つけるためのものだ。その結果、彼らがこれらすべてのものを手離し、それによって、人生を知り、この汚れた世界を知り、また神の知恵と全能を知り、このサタンが墮落させた人類を知ることができるからである。この種の刑罰や裁きがあればあるほど、人の心は傷つき、人の霊はもっと目覚めることができる。これらの極端に墮落し、その欺きが最も深い人々の霊を目覚めさせることが、この種のさばきの目標である。人には霊がなく、つまり人の霊はとうの昔に死んでしまっている。そして、人は天が存在し、神が存在するということを知らないし、確かに人は死の奥底で葛藤していることも知らない。人は地球上でこの邪悪な地獄に生きているということをどのようにして知ることが可能だろうか。彼は自分の腐った死体が、サタンの墮落を通して、死のハデスに落ちたのをどのように知ることができるだろうか。彼は地上にあるものはすべて人類によって修復ができないほど長い間墮落されてしまったことをどのように知ることができるだろうか。そして今日、創造主が地に来て墮落した人々の集まりを救おうと探していることを、どのように知ることができるだろうか。人はあり得る限りの精錬と裁きを体験した後でさえ、彼の鈍った良心はほとんど奮い立つこともなく、事実上反応しない。人間は本当に墮落している！

この種の裁きは空から降って来る残酷なひょうのようだけれど、それは人にとって多大な利益がある。もしこのように人々をさばかないなら、何の結果もなく、苦悩の地獄から人々を救うのは全く不可能であろう。もしこの働きのためでないなら、人々がハデスから出てくるのは非常に難しいだろう。なぜなら、彼らの心はずいぶん前に死んでおり、彼らの霊はずいぶん前にサタンによって踏みにじられたからである。墮落の深淵に沈んでしまったあなたがたを救うには、熱心にあなたがたを呼んだり、裁いたりすることが必要で、その時初めて氷のように冷たいあなたがたの心が呼び起こされるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされた者だけが意義ある人生を送ることができる」より

19. 人間にとって刑罰と裁きとは、罪を罰し、肉を罰するための鍛錬であり、容赦のない暴露であるけれども、この業のどれ一つとして、肉を罪に定めて滅ぼすことを目的としてはいない。言葉による厳しい暴露は、すべてあなたを正しい道に導くことを目的としているのだ。あなたたちは、この業の実に多くを個人的に体験した。そして、明らかに、それはあなたたちを悪の道へと導かなかった。そのすべては、あなたたちが普通の人間性を実際に生きることができるようにするためだ。これはみな、あなたたちの普通の人間性が達成できるものだ。その業の一つひとつの段階は、あなたの必要、あなたの弱点、そして、あなたの実際の背丈に基づいて為され、あなたたちが荷えないような重荷は一つとしてあなたたちの肩に置かれていない。あなたは今、このことを明らかに見ることができず、わたしがあなたに厳し過ぎるように感じているかもしれない。わたしが毎日あなたを罰し、裁き、責めるのは、わたしがあなたを憎んでいるからだと思うかもしれない。また、あなたの受けているのは刑罰と裁きだが、実際は、すべてあなたへの愛であり、あなたを守るためのものなのだ。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内幕（4）」より

20. あなたがたは、神が人を完全な者とし、完成させ、そして獲得することは、人の肉への剣と強打以外はもたらさなかったこと、終わりのない苦しみ、燃える火、無情な裁き、刑罰、呪い、そして果てしない試練をもたらし続けてきたことを知るべきだ。これが内幕であり、人類経営の働きの真実である。しかし、これらすべての目的は人の肉に対するもので、敵意の槍の穂先はすべて、無慈悲に人の肉に向けられている（人は、元々は潔白だからだ）。そのすべては神の栄光と証し、そして神の経営のためである。これは、神の働きがただ人類のためだけではなく、計画全体と、神が人類を創った時の元々の意志の実現のためだからである。よって人々が経験することのおそらく90%は苦しみと火の試練なのだが、人の肉が憧れてきた甘く幸せな日々は非常に少ないかあるい

はまったくなく、ましてや神と美しい時を過ごすという幸せな瞬間を、肉において楽しむことなどない。肉は汚れているので、人の肉が見たり味わったりすることは、人が喜ばない神の刑罰以外の何者でもなく、まるで正常な理性を失っているかのようだ。これは神が、人の好まない自身の義なる性質を現すからであり、人の罪を大目に見ないからであり、そして敵をひどく嫌悪するからである。神は率直に、あらゆる方法を通して自身の性質をみな明らかにし、それによってサタンとの6千年の戦い、すなわちすべての人類の救いの働きと古きサタンの破壊を完結するのだ。

『言葉は肉において現れる』の「人類経営の目的」より

21. 終わりの日の神の裁き、刑罰の働き、すなわち、最後の清めの働きの中でゆるがず耐え抜ける人たちが、神と共に最後の安息の中に入る人たちである。したがって、安息に入る人はみな、神の最後の清めの働きを経て初めて、サタンの支配から振りほどかれ、神によって得られるだろう。最終的に神によって得られたこのような人々が最終的な安息へと入るのである。刑罰や裁きという神の働きの実質は、人類を清めることであり、それは、最終的な安息の日のためである。さもないと、全人類は、それぞれ自身と同類のものに属することができないか、あるいは安息の中に入ることができない。この働きは、人類が安息の中に入るための唯一の道なのである。清めの働きこそが人類の不義を清め、刑罰と裁きの働きこそが人類の中のそれらの不従順なものを全部さらけ出すのである。それによって、救うことのできる人と救うことのできない人とが識別され、生き残ることのできる人と生き残ることのできない人とが区別されるようになる。神の働きが終わる時、生き残ることのできる人は、清められ、人類のより高い領域の中に入って、地上でのよりすばらしい第2の人生を享受する。すなわち、彼らは人類の安息の日に入って神と共に生活する。生き残ることのできない人が刑罰や裁きを受けた後、彼らの正体が全て露呈される。それから彼らはみな滅ぼされ、サタンと同じように、もう地上で生きることができなくなる。未来の人類はもうこのような人々を含まない。このような人々は究極の安息の地に入る資格がなく、神と人が共有する安息の日に入る資格もない。なぜなら、彼らは懲らしめの対象であり、悪者、義なる人ではないからである。彼らはかつて贖われたことがあり、また裁かれもし、懲らしめも受け罰せられたことがある。彼らはまた神への奉仕をしたこともあるが、終わりの日がきたら、彼らはやはり、自身の悪さ、自身の不従順さ、贖う術もないような有様が原因で、排除され、滅ぼされる。彼らは未来の世界では存在しないし、未来の人類の間で生きることもない。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

### III 神の受肉の奥義についての代表的な言葉

1. 神は肉となりキリストと呼ばれ、真理を人に与えることのできるキリストは神と呼ばれる。ここには何の誇張もない。なぜなら、彼は神の本質を持っており、神の性質を持っており、その働きには知恵があり、これらはどれも人間の手の届かないものだからだ。自らキリストを称するが、神の働きを行えない者は、詐欺師である。キリストは、単なる地上における神の顕現ではなく、神が人の間で業を行い完成させるため神が宿った特有の肉体でもある。この肉体は、誰でも代われるものではなく、地上における神の業を適切に引き受け、神の性質を表し、神を十分に象徴し、人にいのちを与えるものである。遅かれ早かれ、キリストになりすましている者たちはみな倒れる。彼らはキリストと自称しながら、キリストの本質は全く持っていないからだ。だから、キリストの真偽は人が定めることのできるものではなく、神自身が答え定めるものだと言いたい。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

2. 受肉というのは、神が肉の体で現れることで、神が自分の創った人間のもとで働くために人間の姿で来るのである。さて、神が受肉するというのは、まず肉の体、普通の人間性を備えた肉体でなくてはならず、それが最も基本的な前提条件である。実際、神が受肉するということは、神が肉体において生き働くということ、その本質において肉となり、ひとりの人になるということを意味する。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

3. 受肉した神をキリストと呼ぶ。キリストは神の霊が肉をまとった姿である。この肉はいかなる肉ある人間とも異なる。キリストは肉と血でできているのではなく、神の霊が受肉したものだからである。キリストは普通の人間性と完全なる神性の両方を持っている。キリストの神性はいかなる人も持っていないものである。キリストの普通の人間性は肉的な活動のすべてを支え、キリストの神性は神自身の働きを遂行する。キリストの人間性も、神性も父なる神の心に従うものである。キリストの本質は霊、すなわち神性である。ゆえに、その本質は神自身のものである。この本質は神自身の働きを妨げることはなく、キリストが神自身の働きを破壊するようなことは決してありえず、神の心に逆らう言葉を語ることも決してない。ゆえに、受肉した神は神自身の経営（救い）を妨げるような働きは絶対に行わない。このことをすべての人が理解すべきである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

4. 受肉した神は神の本質を有し、受肉した神は神による表現を有する。神は人間の姿になるので、なすべき働きを打ち出し、神は人間の姿になるので、自分が何であるかを表して、人に真理をもたらし、人にいのちを与え、人に進むべき道を示すことができる。神の本質を含んでいない肉体が受肉した神ではないことは間違いなく、これについて疑う余地はない。受肉した神かどうか調べるためには、その人が表す性質や話す言葉からそれを決めなければならない。つまり、人間の姿になった神かどうか、それが真の道かどうかは、その人の本質から判断しなければならない。そこで、人間の姿になった神かどうかを決定するとき<sup>(4)</sup>、鍵となるのは、外見よりもむしろその人の本質（働き、言葉、性質、その他いろいろ）に注意を払うことである。外見だけを見て本質を見落とす者は、自分の無知、単純さをさらけ出すことになる。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

5. 神が受肉したのは、その働きの対象がサタンの霊や肉体を持たない何かではなく、人間、つまり肉体をもち、サタンに墮落させられた存在だからである。人間の肉体が墮落しているからこそ、神は肉体をもつ人間を働きの対象とした。さらに、人間は墮落の対象であるため、神は救いの働きの全段階で、人間をその働きの唯一の対象としている。人間は死すべき存在で、生身の体をもっているが、人間を救える唯一の存在は神なのである。そこで、その働きでよりよい成果が得られるよう、神は働きを行うために人間と同じ属性をもつ肉体をもたなければならない。神がその働きを行うために受肉しなければならないのは、人間が肉体をもっていて、罪を克服することも、肉体を捨て去ることもできないためだ。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

6. 人間の肉体の墮落を裁くするには、受肉した神以上に相応しいものはおらず、受肉した神以上に資格のあるものもない。もし神の霊が直接裁いたならば、それはすべてを含むものではないであろう。そのうえ、そうした働きは人間には受け入れがたいものだったろう。なぜなら、霊は人間と直接会うことができず、そのため効果は即座に見られるものでもない。まして、人間が神の侵しがたい性質をより明確に目にすることはできないであろう。もし受肉した神が人間の墮落を裁くなら、はじめてサタンを完全に打ち負かせる。受肉して普通の人間性をもった神は、直接人間の不義を裁くことができる。これが神本来の聖さ、すばらしさである。神だけが人間を裁く資格があり、その地位にいる。神には真理と義があるから、人間を裁くことができる。真理と義のない者には他人を裁くことができない。この働きが神の霊によって行われたなら、それはサタンに

勝利したことにはならないだろう。霊は本来、死すべき者たちよりも高い地位にあり、神の霊は本質的に聖く、肉に優る。もしこの働きを霊が直接行ったならば、神は人間の不服従のすべてを裁くことができず、人間の不義をすべて露わにすることもできないだろう。裁きの働きもまた人間の神についての観念を通して行われるからである。人間は霊について何の観念も抱いたことがない。そのため霊には、人間の不義をよりよく露わにすることができないし、まして、そうした不義を完全に明らかにすることもできない。受肉した神は、神を知らない者すべての敵である。人間の観念と神への敵対を裁くことで、神は人間のあらゆる不服従を明らかにする。受肉した神の働きの成果は、霊の働きよりも明らかである。そのため、すべての人間の裁きは霊が直接するのではなく、受肉した神の働きなのである。人間の体をもつ神は、人間が目で見、触れることができる。また、受肉した神は完全に人間を征服できる。この受肉した神と人間との関係において、人間は敵対から従順、迫害から受容、観念から認識、そして、拒否から愛へと変わっていく。これが受肉した神の働きの成果である。人間は神の裁きを受け入れることによってのみ救われ、神の口から出ることばによって徐々に神を知るようになり、神に敵対している間に神に征服され、神の刑罰を受けている間にいのちの糧を受ける。この働きはみな受肉した神の働きであって、霊としての神の働きではない。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

7. 神が新しい時代の到来を告げるために、わざわざ肉となることをあなたがたはみな知っている。そしてもちろん、神が新しい時代に案内するとき、同時に前の時代を終わらせる。神は初めであり終わりである。神の働きを始動させるのは神自身であるので、前の時代を終わらせるのも神でなければならない。それは神がサタンを負かし、世界を征服する証拠である。神が人々のもとで働くときはいつも、新しい戦いの始まりである。新しい働きの始まりがなくては、当然古い働きの終結もないということである。古い働きの終わりがないということは、サタンとの戦いの終わりがまだ来ていないという証拠である。神自身が人のもとに来て新しい働きを実践して初めて、人は完全にサタンの支配から自由になり、新しいいのち、新しい始まりを獲得することができる。そうでなければ人は永遠に古い時代に生き、永遠にサタンの古い影響下で生きることになる。一つの時代が神によって導かれるたびに、人間の一部は自由にされ、それによって人間は新しい時代に向けて神の働きと共に前進する。神の勝利は神に従うすべての人たちの勝利でもある。もし被造物である人類が時代を終えることを任されたなら、人間の視点からであろうとサタンの視点からであろうと、それは神に反抗するか裏切る行為でしか

なく、神に対する従順から出たものではなく、そのような人間の働きはサタンの道具にされてしまうことになる。人が神によって案内された時代において神に服従してついて行くときにのみ、サタンは完全に納得させられることができる。それが被造物の本分だからである。そして、あなたがたに必要なのは服従することだけで、それ以上にはあなたがたは何も求められていない、とわたしは言う。それこそ各自が自分の本分をわきまえ、自分の役目を果たすことの意味である。神は自身の働きを行ない、人が神の働きを神に代わってすることは必要としておらず、被造物の働きに神が関与することもない。人は自分自身の本分を果たし、神の働きに関与しない。これが本当の服従であり、サタンが敗北したという証拠である。神自身が新しい時代に案内したあとは、神はもはや人のもとで働くために到来することはない。そうして初めて、人は自分の本分を果たすために、新しい時代に正式に一步踏み出し、被造物としての使命を果たすのである。これがだれも背くことのできない働きの原則である。このように働くことだけが賢明で道理にかなっている。神の働きは神自身が行なう。神の働きを始動させるのは神で、それを終わらせるのも神である。働きを計画し管理するのも神であり、それ以上に、働きを成就するのも神である。それは聖書に、「わたしは初めであり、終わりである。蒔く者であり、刈る者である」と書かれている通りである。神の経営（救い）の働きに関連する全てのことは神自身により行なわれる。神は六千年の経営（救いの）計画の支配者で、誰も神の代わりに働くことはできず、神の働きを終わらせることはできない。というのは、すべてを支配するのは神だからである。神は世界を創造し、神は全世界が神の光の中に生きるよう導き、全時代を終わらせ、それにより神の計画すべてを成就させるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（１）」より

8. 最初の受肉は人を罪から贖う、つまりイエスの肉体を通して人を罪から贖うためであった。つまり、イエスは十字架から人を救ったが、墮落したサタンの性質は依然として人の中に留まった。二番目の受肉はもはや罪のためのいけにえとしての役割ではなく、罪から贖われた人たちを完全に救うことであった。それにより、赦されたものが罪から解放され、完全に清められ、性質が変えられ、それによりサタンの暗闇の影響を打ち破り、神の玉座の前に戻ってくるためである。このようにしてのみ、人は完全に清められる。神は律法の時代が終ってから、恵みの時代に救いの働きを開始した。これは神が人間の不従順に対する裁きと刑罰の働きを終えて人類を全く清める終わりの日まで続く。その時が来てはじめて、神は救いの働きを終え、安息に入る。よって、三段階の



働きの中で、神は二度のみ人の間で働きを実行するために肉となった。それは働きの三段階のうち一段階だけが、人を生活において導く働きであり、他の二段階は救いの働きだからである。神が肉となる場合のみ、神は人と共に生き、世の中の苦しみを経験し、普通の肉体で生きることができるのである。このようにしてのみ、神はその被造物である人に必要な実践的言葉を与えることができる。人が神から完全な救いを受けるのは、受肉した神ゆえであり、人が捧げる祈りへの回答として天から直接に受けるのではない。というのは、人は肉的であり、人は神の霊を見ることができず、ましてや神の霊に近づくことなどできないからである。人が接触することができるのは神の受肉した肉体でしかなく、人はこの手段を通してのみ、すべての言葉とすべての真理を理解し、完全なる救いを受けることができる。第二の受肉は人の罪を取り除き、人を清めるには十分である。よって、第二の受肉は肉体での神の働きのすべてに終止符を打ち、神の受肉の意義を完成する。その後は、神の肉体での働きは完全に終わりとなる。第二の受肉の後、神はその働きのために三度目に肉となることはない。神の経営（救い）全体が終わっているからである。終わりの日に、神の受肉は神の選ばれた民を全て自身のものとし、終わりの日の人たちはすべて、それぞれの種類に応じて区分されている。神はもはや救いの働きをすることも、どのような働きを行なうためにも肉に戻ることはない。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

9. 受肉の意義は、平凡な普通の人間が神そのものの働きをするということであり、つまり、神が人間性の内に神としての働きを行い、それによってサタンを打ち破るということである。受肉とは、神の霊が肉となる、つまり、神が肉となるということである。神が肉において行う働きは、肉において実現し、肉において表される霊の働きである。神の肉体以外には誰も、受肉した神の働きを成就できない。つまり、受肉した神の肉だけが、他の誰でもなくこの普通の人間だけが、神の働きを示せるのだ。もし最初の顕現で、神が二十九歳になる前に普通の人間性をもっていなければ——もし生まれてすぐに奇跡を行うことができたなら、もし、話せるようになってすぐに天の言葉を話せたなら、地上に初めて着いたときにすべての世俗的な物事を理解し、すべての人の考えや意図を知ることができたなら——そのような人は普通の人間とは呼ばれなかったであろうし、そのような肉は人間の肉とは呼ばれなかったであろう。もしキリストがそういうものであったなら、神の受肉の意味と本質は失われていたであろう。キリストが普通の人間性をもっていたことは、キリストが肉の体をもった、受肉した神であったことを示している。キリストが普通の人間としての成長過程を過ごしたことは、キリストが普通の人

間であったことをさらに証明するものだ。そのうえ、キリストの働きは、キリストが神の言葉、神の霊が人間となったものであることの十分な証拠である。神が人間になるのは、働きに必要なためである。つまり、その段階の働きには肉の体で、普通の人間性において行う必要があるからである。これが「言葉は肉となる」、「言葉は肉において現れる」ための前提条件であり、これが神の二度の受肉の背後にある実話だからである。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

10. 神が肉となったため、キリストは自身の肉において神の本質を実現し、よってキリストの肉は神の働きを引き受けるに充分になる。神の霊の働きはすべて受肉の期間にキリストがなす働きに取って代わられる。受肉の期間を通してすべての働きの核心となるのがキリストの働きである。そこにほかのどの時代の働きが混ざり合うこともない。そして神が肉となるのであるから、神は肉としての働きをする。神は肉の形をとって来るので、自身のなすべき働きを肉となった姿で成し遂げる。神の霊も、キリストも神自身であり、神はしかるべき働きをし、しかるべき職分を果たす。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

11. 職分を果たす間の受肉した神の生活は、人間性と完全な神性の二つを併せもつものである。もし受肉した神が生まれた瞬間から本格的に職分を果たし、超自然のしるしや不思議を示し始めたなら、その肉体の本質は何もないであろう。だから、受肉した神の人間性は、肉体的な本質のために存在するのである。人間性なくして肉は存在しない。また、人間性のない人は人間ではない。このように、神の肉の人間性は、受肉した肉のなくてはならない性質である。「神が人間になった時、神は完全な神で、まったく人間ではない」と言うのは瀆神行為である。なぜなら、このような発言はまったく存在せず、受肉の原理に反しているからである。神はその職分を始めた後も、働きを行なうときは人間の外皮をまといつつ、依然として神性のうちに宿っている。ただその時、神の人間性は神性が通常肉の体で働きを行えるようにするという目的だけを果たすのである。だから、働きをする者は、人間性に宿る神性である。働いているのは神の人間性ではなく神性だが、それは人間性の中に隠れた神性である。神の働きは、つまるところ、完全な神性が行うのであって、人間性によるのではない。しかし、働きを実践するのは神の肉である。このような神は、人間でありかつ神であると言えるだろう。神は肉の体で生きる神となり、人間の姿と人間の本質をもつが、また神の本質をも備えているからである。神の本質を備えた人間だから、被造物であるどの人間、神の働きを行うことのできるどの人間よりも上位に位置する。そこで、このような人間の姿をした者たちの

中で、人間性をもつすべての者の中で、神だけが受肉した神そのものである。他はみな、被造物である人間である。受肉した神と人間の双方に人間性があるが、被造物である人間には人間性以外には何もない。ところが、受肉した神は違う。受肉した神は、その肉体において人間性だけではなく、さらに重要なことに神性をも備えている。神の人間性は肉の体の外見や毎日の生活に見られる。しかしその神性は感知しにくい。神の神性は人間性があるとはじめて現れるのだから、また、人々が想像するほど超自然なものではないから、人々がそれを見るのは極めて難しい。今日でも受肉した神の本質を理解するのは極めて難しい。実際、わたしがこれほど長い間話してきても、あなたがたの大半にとってはいまだに謎であることであろう。これはとても単純なことなのである。神が人間になると、その本質は人間性と神性の合わさったものである。この組み合わせが神そのものと呼ばれる、地上における神そのものなのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

12. 受肉した神の人間性は、肉において普通の神性の働きを維持するためにある。神の普通の人間としての考え方が、その普通の人間性とあらゆる普通の身体的活動を維持する。神が普通の人間的思考をするのは、神が肉においてする働きをすべて支えるためなのだと言えるだろう。この肉が普通の人間の心をもたないのなら、神は肉における働きができず、肉においてすべきことを成就できない。受肉した神は普通の人間の心をもつが、その働きは人間の思考によって劣化しない。神は普通の心をもつ人間として働きを行うが、心をもった人間性はその前提条件であり、通常の人間の考えを行使することによりその働きを行うのではない。神の肉の体がどれほど崇高な考えをもとうと、神の働きは論理や思考の産物ではない。つまり、神の働きは肉の体から生まれるのではなく、人間性の内における神性の働きの直接的な現れなのである。その働きはみな、成就すべき職分であり、そのどれも人間の頭脳の産物ではない。たとえば、病人の癒し、悪霊祓い、磔刑はイエスの人間としての心の産物ではなく、人間の心をもった人間がなし得ることはなかったであろう。同様に、今日の征服の働きも受肉した神が行うべき務めであるが、人間の意図による働きではない。これは、キリストの神性が行うべき働きであって、肉の体をもつ人間に可能な働きではない。だから、受肉した神は普通の人間の心をもたなければいけない。普通の人間性をもたなければいけない。なぜなら、普通の心をもった人間性の内にあって働かなければいけないからである。これが受肉した神の働きの本質、受肉した神の本質そのものである。

イエスがその働きをする以前、イエスはただ普通の人間として生きた。誰一人、イエスが神であるとはわからなかったし、誰一人、イエスが受肉した神であることを気付かなかった。人々はただ、どこから見ても普通の人間としてイエスを知っていた。イエスのまったく平凡な普通の人間性は、神が受肉して人間の肉の形になっていたことと、恵みの時代は受肉した神の働きの時代であり、霊の働きの時代ではないことの証拠であった。これは、神の霊が完全に肉において現れたこと、神が受肉した時代には、肉の体が霊の働きをすべて行うことの証拠であった。普通の人間性をもつキリストは、霊が顕現した肉体であり、普通の人間性、普通の理知、人間的思考をもっている。「顕現」とは神が人間となること、霊が肉となることである。わかりやすく言えば、神自身が普通の人間性をもつ肉に宿るということで、それによって神性の働きを表す——これが顕現、または受肉の意味である。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

13. 神は人々の間で自らの働きをなすため、人に自らを現すため、また、人が神を見上げるようになるために地上に来た。これは些細なことだろうか。これは実に驚くべきことである。人の想像とは違い、神が来たのは、人が彼を見上げるようになり、神は実在し、漠然として空しい存在ではなく、いと高き方であるが謙っていることを人が理解するためである。これはそれほど単純なことだろうか。神が肉の姿をとってサタンと戦い、自ら人を牧さなければならないのは、正確に言えば、サタンが人の肉体を墮落させたからであり、人間こそが神の救おうとするものだからである。神の働きに有益なのはこれのみである。神の二度の受肉はサタンを打ち負かすために存在し、また、より効果的に人を救うために存在した。なぜなら、サタンと戦いを交える方は、それが神の霊であれ、神の受肉であれ、神をおいては他にいないからである。要するに、サタンと戦いを交える者は天使のはずはなく、ましてやサタンに墮落させられた人間であるはずもない。天使にそのような力はなく、人間はもっと無力である。そのように、もし神が人のいのちに働くことと、人に働くために自ら地上に来ることを望むなら、神は自ら肉となり、つまり、自ら肉の姿をとり、神の本来の身分と神がしなければならない働きをもって、人を救うために人々の間に来なければならない。もしそうでなく、この働きをしたのが神の霊か、人間であったなら、この戦いは永遠にその効果を達成することはなく、決して終わることもないだろう。神が肉となり、人々の間で自らサタンに戦いを挑むとき初めて、人に救いの機会があるのだ。さらに、その時初めてサタンは辱められ、利用する機会も、企てる計画もまったくないままの状態になるだろう。受肉の神によって

なされる働きを、神の霊によって成し遂げることは不可能であり、神の代わりに肉なる人間によって成し遂げることはなおさら不可能である。というのは、神がなす働きは人のいのちのためであり、人の墮落した性質を変えるためであるからだ。人がこの戦いに加わるとしたら、惨めにも混乱してただ逃げるだけで、彼らには人間の墮落した性質を変えることはまったくできないであろう。人には十字架から人間を救ったり、反抗的な人類すべてを征服したりすることは不可能であり、原則に従って古い働きを少しするか、サタンの敗北とは関係のない他の働きをすることしかできないだろう。それならなぜ思い煩う必要があるのか。人間を獲得することも、ましてサタンを打ち負かすこともできない働きに何の意味があるのか。したがって、サタンとの戦いは神自らによってのみ遂行されるのであって、人にはまったく不可能である。人の本分は服従して従うことである。というのは、人は新しい時代を切り開く働きも、サタンと戦う働きを遂行することもできないからである。人はただ神自らの指導の下で、造り主を満足させることができただけで、サタンは、それを通して打ち負かされるのである。これは人ができる唯一のことである。それゆえ、新しい戦いが始まるたびに、すなわち、新しい時代の働きが始まるたびに、この働きは神自らによってなされ、それを通して、神はその時代全体を導き、全人類のために新しい道を切り開く。それぞれの新しい時代の幕開けは、サタンとの戦いの新しい始まりであり、それを通して、人は神自らが導くより新しく、もっと美しい領域と新しい時代に入る。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

14. 主イエスが業を行っている間、人々は、神が多くの人間的な表現を持っていることを知った。たとえば、神は踊ったり、婚礼に列席したり、人間と親交したり、人間と会話し、様々な事柄を話し合ったりすることが可能であった。さらに、主イエスは神の神性を示す多くの業を遂行し、当然ながらそうした業はすべて神の性質を表出し、啓示するものであった。この時期においては、神の神性が、人間が見たり触れたりできる通常の身体により具現化された時、人間は神が出現と消滅を繰り返されている存在、人間の近づくことが出来ない存在であるとは感じなくなった。これに対し、人間は、人の子のあらゆる動作や言葉、業により、神の旨や神の神性を理解しようと試みることが出来るようになった。受肉した人の子は、神の人間性により神の神性を表現し、神の旨を人間に伝えた。また、神は、旨と性質を表出することにより、霊的領域では見ることも触れることもできない神を人間に啓示した。人々が見たのは、肉と骨を持ち、姿形のある神自身であった。そうして受肉した人の子により、神の正体、地位、像、性質、神の

中にある物事や神の存在が、具体的かつ人間的なものとされた。人の子の外観は、神の像に関してある程度の制約があったものの、人の子の本質と人の子の中にある物事や人の子の存在は、神自身の正体と地位を完全に示すことが可能であり、表出の仕方に僅かな相違があるのみであった。それが人の子の人間性であるか、人の子の神性であるかを問わず、人の子が神自身の正体と地位を示していたことを否定することはできない。しかし、この時期、神は肉により業を行い、肉の見地から言葉を述べ、人の子という正体と地位により人間の前に姿を見せたので、それによって人間の中にある神の真の言葉と業に遭遇し、体験する機会が人々に与えられた。また、それにより神の神性と、謙遜の中にある神の偉大さについて、人間が知見を得ることが可能となり、また神の真正さと実在に関する暫定的な知識と定義を得ることも可能となった。主イエスにより遂行された業や、イエスが業を行う方法、言葉を述べる観点は、霊的領域にある神の真の姿とは異なるものであったが、それでもなお主に関する全てが、それまで人間が見たことのない神自身を真に示しており、またその事実は決して否定できない。すなわち、神がどのような姿であるかによらず、また神がどの観点から言葉を述べるかによらず、あるいは神の人間に対する像がどのようなものであるかによらず、神は他ならぬ神自身を示す。神が人間を示すこと、腐敗した人間を示すことは不可能である。神は神自身であり、それを否定することはできない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

15. 神の本質そのものが権威を行使するが、キリストは神から来る権威に完全に服従することができる。霊の働きも、肉の働きも、互いに相反することはない。すべての被造物におよぶ権威となるのは神の霊である。神の本質のある肉も権威を有すが、肉となった神は父なる神の心に沿った働きをすべて行える。こうしたことは人には実現も想像もできない。神自身が権威であるが、神の肉は神の権威に服従することができる。これが「キリストは父なる神の心に服従する」という言葉に秘められた意味である。神は霊であり、救いの働きができるように、受肉した神も救いの働きをなすことができる。いずれにしても、神自身が神自身の働きをする。神は阻止することも、干渉することもせず、まして互いに対立する働きをすることはない。霊と肉は働きの本質が似ているからである。霊も肉も一つの心を行い、同じ働きを管理するために働くからである。両者は性質が異なるが、本質は同じである。どちらも神自身の本質と、神自身の身分を持っている。神自身は不従順の要素を持たない。神の本質は良きものである。神はあらゆる美と善と、すべての愛の現れである。肉の姿であっても、神は父なる神に逆らうような

ことは行わない。自身の命を犠牲にしても、神は心底から父なる神に従い、他の選択はしない。神には独善や尊大さといった要素も、うぬぼれや横柄さといった要素もない。神は不正な要素を持たない。神に逆らうものはすべてサタンから発生する。サタンはすべての醜悪さと邪悪の根源である。人がサタンに似た性質を持っている理由は、サタンが人に影響を与え墮落させたからである。キリストはサタンによって墮落させられていないため、神の特性のみを持っており、サタンの性質は全く持たない。どんなに働きが困難で、肉が弱くても、キリストは肉のうちに生きながら、神自身の働きを阻止するようなことは決してせず、ましてや不従順な行いで父なる神の心を見捨てるようなことではない。キリストは父なる神の心に逆らうくらいなら肉の痛みを受けることを選ぶだろう。イエスが「父よ、もしできることならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と祈ったようにである。人は選択をするが、キリストはそうしない。彼は神自身の身分を持っているが、肉ある神として、なお父なる神の心を求め、父なる神から委ねられた任務を果たす。これは人には不可能なことである。サタンから発生するものが持ち得る本質は神に逆らい、抵抗するものでしかなく、神の本質ではない。その本質は完全に神に服従することができず、ましてや神の心に進んで従うことなどできない。キリスト以外の人間はみな神に反する行いをするのができ、神に委ねられた働きを直接引き受けられる者はひとりもおらず、神の経営を自分自身がなすべき本分と考えられる者もひとりもない。父なる神の心に服従することはキリストの本質である。そして神への不従順はサタンの特性である。この二つの性質は相いれないものであり、サタンの特質を持つ者はキリストと呼ばれ得ない。人がキリストに代わって神の働きを行えないのは、神の本質がまったく備わっていないからである。人は自己の利益と将来の前途のために神に尽くすが、キリストは父なる神の心を行うために働く。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

16. キリストの人間性はキリストの神性によって支配されている。キリストは肉の姿をしているが、その人間性は肉を持った人間とまったく同じものではない。キリストは特有の性格を持っており、これもキリストの神性によって支配されている。キリストの神性は弱さを持たない。キリストの弱さはキリストの人間性に起因する。この弱さはある程度キリストの神性を制限するが、そのような制限は一定の範囲と時間内のものであり、無限大ではない。キリストが神性による働きをする時が来ると、それはキリストの人間性とは関係なく行われる。キリストの人間性は完全にその神性の指示を受ける。

キリストの人間性による普通の生活の他に、人間性によるほかの行動もすべて、キリストの神性の影響、働きかけ、指示を受ける。キリストは人間性を持っているが、それは神性による働きを邪魔するものではない。キリストの人間性がキリストの神性の指示を受けているからこそである。キリストの人間性は、ほかの人々の前ではその行いにおいて成熟していないが、それはキリストの神性のなす普通の働きに影響を与えることはない。キリストの人間性は墮落していないとわたしが言うのは、キリストの人間性はその神性に直接指示され、普通の人のそれよりも理知が高度であるということである。彼の人間性は働きにおいて神性によって指示されることに最も適している。キリストの人間性は神性による働きを現し、神性による働きに服従する能力が何よりも高い。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

17. 最初の受肉では、神は受肉の働きを完了しなかった。神が肉においてすべき働きの最初の段階を完了しただけである。だから、受肉の働きを完了するために、神は再び肉の体に戻り、肉体のもつすべての正常性と現実を生きている。つまり、神のことが完全に普通の平凡な肉の体として現れ、それにより、肉においてやり残した働きを完了しようというのである。二度目に受肉をした体は、本質的には最初と変わらないが、もっと現実的で、最初よりもさらに普通なものだ。その結果、第二の受肉の苦しみは最初のそれよりも重いのだが、この苦しみは肉における働きの結果であって、墮落した人間の苦しみとは異なる。これはまた、神の肉の体の普通さと現実から生じている。神が完全に普通かつ現実の肉体で職分を行うため、肉の体は多くの困難に耐えなければいけない。この肉の体が普通で現実のものであればあるほど、神はその職分を果たすために苦しむ。神の働きはごく普通の体、まったく超自然的でない体において表される。神の肉は普通で、人間を救う働きをも担わなければいけないので、その苦しみは超自然の肉よりもはるかに大きい——この苦しみはみな、神の体の現実と正常さから来ている。受肉した二つの体が職分を果たしていたときに受けた苦しみから、受肉した肉の本質がわかる。肉体が普通であればあるほど、働きを行う間、それだけ大きな苦難を神は耐えなければならない。働きをする肉体が現実的であればあるほど、人々の見方は厳しくなり、それだけ多くの危険が神にふりかかることになりがちである。それでも、肉が現実的であればあるほど、肉が普通の人間の必要と完全な理知をもっているほど、肉における働きを神はみごとに取り組むことができる。十字架につけられたのはイエスの肉、罪のための捧げ物としてイエスが捧げた肉体である。普通の人間性をもつ肉体という手段によってイエスはサタンに勝利し、人間を完全に十字架から救った。そして、神の二度



目の受肉では、征服の働きを行いサタンを打ち負かすのは完全な肉の体なのである。完全に普通で現実的な肉だけが征服の働きをその全体におよんで行い、力強い証しを示すことができる。つまり、人間の征服は、受肉した神の現実性と正常さによって効果的になるのであって、超常的な奇跡や啓示によるのではない。この受肉した神の職分は、話すことであり、それによって人間を征服し、完全にすることにある。つまり、肉として現れた霊の働き、肉の務めは、話すことで、それによって人間を征服し、顕示し、完全にし、淘汰することである。だから、肉における神の働きが完全に達成されるのは、征服する働きにおいてである。最初の贖いの働きは、受肉の働きの始まりに過ぎなかった。征服の働きをする肉は、受肉しての働きを完了させるであろう。性別では、一度目は男、二度目は女。これにより神の受肉の意味が完了する。これは人間の神についての誤解を取り除く。神は男にも女にもなれる。受肉した神には本質的に性別はない。彼は男と女を創ったが、神にとって性の区別はない。この段階の働きでは、言葉という手段によって働きの成果があらわれるように、神はしるしや不思議を行わない。さらに、その理由は、受肉した神の今回の働きは病人を癒し、悪霊を祓うためではなく、話すことによって人間を征服するためであり、これは、受肉した神の肉体が本来備えている能力が、言葉を話して人間を征服するというものであって、病人を癒やし、悪霊を祓うためのものではないということである。普通の人間性における神の働きは奇跡を行うことなく、病人を癒し、悪霊を祓うことはなく、話すことである。だから、第二の受肉をした体は、最初の時よりずっと普通のものに見える。人々は神の受肉が嘘ではないとわかっているが、この受肉した神はイエスの受肉とは異なっている。どちらも神の受肉ではあるが、完全に同じではない。イエスは普通の人間性、平凡な人間性をもっていたが、多くのしるしや不思議を伴っていた。この受肉した神においては、人間の目には、しるしや不思議は何も見えず、病者を癒すことも、悪霊を祓うことも、海の上を歩くことも、四十日間の断食もない。神はイエスがしたのと同じ働きは行わない。それは神の肉が本質的にイエスのものとどこか異なるからではなく、病者を癒したり悪霊を祓うことは、神の職分ではないからである。神は自分の働きを取り壊すこともなければ、自分の働きを妨げたりはしない。神はその実際の言葉で人間を征服するのだから、奇跡で屈服させる必要はない。そして、この段階は受肉の働きを完了するためにある。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

18. 神による各段階の働きには実質的な意義がある。イエスが来た時男性であったが、今回は女性である。このことから、神はその働きのために男と女の両方を造ったが

、神には性の区別がないことがわかる。神の霊が来るとき、それは意のままにいかなる肉体でも持つことができ、その肉体が神を表す。男性であろうと女性であろうと、それが受肉した神である限り、どちらも神を表す。イエスが女として現れたとしても、つまり、男ではなく女の赤子が聖霊によって受胎されたとしても、その働きの段階はまったく同じように完成されたことであろう。もしそうになっていたならば、今回の働きの段階は女性ではなく男性によって完成されなければならない、それでも結局、働きはまったく同じように完成されることになる。両方の段階でなされる働きには意義がある。働きは繰り返されることはなく、お互いに矛盾することもない。その働きの際、イエスは神のひとり息子と呼ばれたが、それは男性であることを示している。それではなぜこの段階でひとり息子のことは言及されていないのか。それは、働きの必要性から、イエスの性とは異なる性へと変更せざるを得なかったためである。神に関しては性の区別はない。神の働きは神の望むようになされ、いかなる制限にも左右されることはなく、非常に自由であるが、各段階には実質的な意義がある。

『言葉は肉において現れる』の「二度の受肉が、受肉の意義を完成させる」より

19. なぜわたしは、受肉の意味がイエスの働きで完了しなかったと言うのであろうか。それは、ことばが完全に肉の体にならなかったからである。イエスがしたことは、神の肉の体での働きの一部分だけであった。イエスは贖いの働きだけを行い、完全に人間を得る働きはしなかった。そのため、神は終わりの日に再度受肉したのである。この段階の働きはまた、普通の人間の体で、すっかり通常の人間によって、その人間性が少しも超越的でない存在によって行われる。つまり、神は完全な人間になったのであり、身分は神である人、完全な人間、完全な肉の体が働きをする。人間の目には、神はまったく超越的ではない、ただの人間に見える。ごく普通の人物で天の言葉を話すことができ、奇跡的なしるしは何も見せず、何の奇跡も行わず、まして、大きな集会場で宗教についての内的な真理を明らかにしたりはしない。第二の受肉の働きは、人々には最初のものとはまるで違って見える。あまりに違うので、二つには何の共通点もないように見える。最初の働きのようなことは、今回は何も見られない。第二の受肉の働きは最初のものとは異なっているが、それは両者の源が同一ではないということではない。同じかどうかは、肉の体で行われる働きの性質によるのであって、外形によるのではない。三段階の働きの間に神は二度受肉し、いずれのときも受肉した神は新たな時代を開き、新しい働きをもたらした。二度の受肉は相補うのである。人間の目では、二つの肉の体が同じ源から来ていると見極めることは不可能である。言うまでもなく、これは人間の目

や心の能力を超えている。しかし、両者の本質は同じである。二人の働きは同じ霊に発しているからである。受肉した二つの体が同じ源から発しているかどうかを判断できるのは、二人の生まれた時代と場所やそのような他の要素によるのではなく、二人の表す神性の働きによるのである。第二の受肉による体はイエスの行った働きは何も行わない。神の働きに慣習的な決まりはなく、それぞれが新たな道を開くからである。第二の受肉は最初の肉に関する人々の心にある印象を深めも固めもしないが、それを補い、完成させ、神についての人間の認識を深め、人々の心にある、あらゆる規則を破り、人々の心にある神についての誤った姿を消し去る。神自身の働きのどの段階も個別には、人間に神についての完全な認識を与えることはできないと言える。各段階は、全部ではなく、一部分だけを与えるのである。神はその性質を完全に示したが、人間の理解力が限られているため、神についての認識はまだ不完全なままである。人間の言語で神の性質を完全に言い表すのは不可能である。まして、神の働きの一段階だけで、どれほど完全に神を表せるだろうか。神は普通の人間性の陰に隠れて肉において働く。そして、その神性が現れてはじめて、人間は神を知ることができるのであり、その外見を見てのことではない。神はさまざまな働きを通して人間が神を知ることができるように受肉するのだが、働きの二段階は同じではない。このようにしてはじめて、人間は肉における神の働きについて、一つの面だけでなく、完全な認識をもてる。受肉しての二度の働きは別々のものだが、肉の本質とその働きの源は同一である。ただ、どちらも二つの異なった段階の働きをするために存在し、二つの別の時代に来るということである。いずれにしろ、受肉した神の肉は同じ本質と由来をもつ。これは誰も否定できない真理である。

『言葉は肉において現れる』の「神の宿る肉の本質」より

20. イエスは、「言は神と共にあった。」の実体のみを満たす業の段階を行った。神の真理は神と共にあり、神の霊は肉と共にあり、神と不可分であった。つまり、受肉した神の肉は神の霊と共にあったのであり、それは受肉したイエスが最初の受肉した神であったことの大きい証拠である。この段階の業は「言葉が受肉した」の内面的意味を満たし、「言は神と共にあった。言は神であった。」に一層深い意味を加え、「初めに言があった。」という言葉、あなたが堅く信じることを可能とした。つまり、神は創造の時に言葉を備え、神の言葉は神と共にあって神と不可分であった。そして、最後の時代には、神の言葉の力と権威は一層明瞭となり、人間は神の言葉すべてを理解できるようになり、言葉全てを聞くことができるようになった。それが最後の時代の業である。あなたは、こうした事柄を完全に知り尽くす必要がある。それは肉を知る問題では

なく、肉と言葉を知る問題である。これは、あなたが証に立つ必要があり、全ての人が知る必要がある物事である。これは2度目の受肉、そして神の最後の受肉の業であるため、この業は受肉の意味を完全なものとし、肉における神の全ての業が完全に遂行され、実施され、肉にある神の時代の幕を閉じる。

『言葉は肉において現れる』の「実践（４）」より

21. キリストの働きと現れはキリストの本質を決定する。キリストは託された働きを真心を持って完成することができる。キリストは天の神を心から崇拝し、真心を持って父なる神の心を求めることができる。これはすべてキリストの本質によって決定されている。そしてキリストの自然な現れもキリストの本質によって決定されている。キリストの「自然な現れ」と呼ばれるのは、キリストの現れが模倣でも、人による教育の結果でも、人による長年の育成の結果でもないからである。キリストはそれを学んだのでも、それでわが身を飾ったのでもない。むしろ、それはキリストのうちに本来備わっているものである。人はキリストの働き、現れ、人間性、そして普通の人間性を持った生活を否定するかもしれないが、キリストが真心で天の神を崇拝することを否定できるものは一人もいない。キリストが父なる神の心を果たすために来たことを否定できる者はおらず、キリストが父なる神を求める心の切実さを否定できる者もない。キリストの姿は感覚にとって快いわけでも、その話に特別な重みがあるわけでもなく、その働きに人が想像するような地を揺るがし、天を揺さぶるものでもないが、彼は確かにキリストであり、真心で天の父の心を全うし、天の父に完全に服従し、死ぬまで従う者である。これは彼の本質がキリストの本質だからである。この事実は人には信じがたいものだが、確かに存在する。キリストの職分が全うされた時、キリストの働きを通して、キリストの性質と存在は天の神の性質と存在を現すことを、人は知るであろう。その時、キリストの全ての働きの総和から、この者はまことにことばが肉となった者であり、血と肉による人間とは異なることが分かるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

22. 受肉した神の外観は人間と全く同じであり、人間の知識を学び、人間の言葉で話し、時には人間と同じ方法や表現で考えを表現されるものの、人間に対する見方や物事の本質に対する考え方は、受肉した神と腐敗した人間では、決して同じということはない。受肉した神の視点と、その立場の高さは、腐敗した人間が得ることの出来ないものである。なぜなら、神は真理であり、肉となった身体にも神の本質が存在し、その考えや、その人間性で表出されるものもまた真理であるからである。腐敗した人間にとっ

て、彼が肉にあって表出する事柄は、真理といのちの提供である。これらのものは、ひとりだけではなく、人間全体に与えられているものである。腐敗した人間にとって、心の中で自分に関連する人々の数は僅かであり、心にかけて気遣う他の人の数は僅かである。大災害が発生したとき、人間が最初に心配するのは自分の子供、配偶者、両親のことであり、比較的博愛的な者でも、せいぜい親戚や親友だけであり、それ以外の者のことは決して心配しない。人間は、つまるところ人間であって、人間の目線の高さからしか物を見ることが出来ない。しかし、受肉した神は、腐敗した人間とは全く異なる。受肉した神の身体がいかに普通で慎み深いものだったとしても、あるいはいかに多くの人間に見下されたとしても、人間に対する受肉した神の旨と態度は人間が抱くことの出来ないものであり、だれも真似することの出来ないものである。受肉した神は、常に神性の視点で、創造主の立場から人間を見る。受肉した神は神の本質と心によって人間を見る。通常の人間の立場で、腐敗した人間の目線で人間を見ることは決して出来ない。人間が人類について考える時、人間は人間の視点で見て、人間の知恵や規則、理論を基準として用いる。これは人間が人間の目で見ることが出来る物事の範囲内であり、腐敗した人間が成し得る範囲内である。神が人類について考える時、神は神の視点で見、神の本質と神の持っているものとその存在を用いて人間を見る。この範囲には、人々が見ることの出来ないものも含まれているという点が、受肉した神と腐敗した人間では全く異なる。この相違は人間と神の異なる本質により決定され、人間と神の身分や立場、そして物を見る視点を決定するのは、この本質の相違である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

23. 神の霊が纏った肉は、神自身の肉である。神の霊は至高のものであり、神の霊は全能であり、聖であり、義である。それと同様に、神の肉も至高のものであり、全能であり、聖であり、義である。このような肉は、義であり人間に有益な物事、聖なるものであって栄光ある物事、力ある物事しか行うことが出来ず、真理や道義に反する物事を行うことが出来ず、ましてや神の霊を裏切る物事を行うことなど出来ない。神の霊は聖なるものであり、したがって神の肉は、サタンが腐敗させることの出来ないものであり、人間の肉の本質と異なる。なぜなら、サタンにより腐敗させられているのは、人間であって神では無いからである。サタンは神の肉を腐敗させることはできない。したがって、人間とキリストは同じ空間にあるにもかかわらず、サタンにより占有され、利用され、囚われているのは人間だけである。それに対し、キリストはサタンによる腐敗の

影響を永久に受けない。なぜなら、サタンは最も高い場所まで昇り、神に近付くことが決して出来ないからである。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り（２）」より

24. 今日言及する実践的の神自身は、人間性においても神性においても働きを行う。実践的の神の出現によって、神が普通の人間として行う働きと生活と同時に、完全に神性となる働きも達成される。人間性と神性は一つに結合され、両方の働きは<sup>[c]</sup>言葉を通して達成される。人間性であろうと神性であろうと、神は言葉を発する。神が人間性において働く時は、人々が神と交わり理解できるように、人間の言葉を話す。神の言葉は平易で理解しやすいので、すべての人々に供給することができる。知識がであろうと、教育が不十分であろうと、彼らは皆神の言葉を受け取ることができる。神性の働きも言葉を通して行われるが、それは溢れるばかりに豊富で、いのちに満ち、人の意志に汚れておらず、人の好みを含まず、人間性の限界に縛られず、普通の人間性の範疇の外に存在する。神性における働きも肉において実行されるが、それは聖霊の直接的な表現である。もし人々が人間性における神の働きを受け入れるだけならば、彼らは一定の範囲に閉じ込められてしまうので、ごくわずかな変化を人々にもたらすだけでも、絶え間のない取り扱い、刈り込み、鍛錬が必要になるだろう。とはいえ、聖霊の働き、あるいは臨在がなければ、人々はいつも古いやり方を繰り返すだけだろう。神性の働きを通してのみ、これらの弊害や欠陥が正される。そして、その時初めて人々は完全にされるのである。絶え間のない取り扱いと剪定に代わって必要なのは、積極的ものの供給であり、人々の全ての欠点を補い、人々のあらゆる状態を露わにし、人々の生活、発言、行動の全てを支配し、その意図と動機を暴露するために言葉を使うことである。これこそが、実践的の神の真の働きである。したがって、実践的の神に対するあなた方の態度について言えば、あなた方は神の人間性の前におとなしく従い、神を認識し、認め、さらに神性における働きや言葉も受け入れ、それらに従うべきである。神が肉において現れることは、神の霊の働きと言葉のすべてが、神の持つ普通の人間性、および神の受肉を通して行われることを意味する。言い換えれば、神の霊は人間性の働きを指揮し、肉において神性の働きを実行する。そして受肉した神の中にあなたは人間性における神の働きと同時に、完全なる神性の働きも見ることができる。これは実際の神が肉において現れることのさらに実際的な意義である。このことをはっきり見ることができれば、あなたは神の様々な部分を全てつなぐことができ、神性の働きを重要視し過ぎることも、人間性における働きを軽視することともなくなる。また、極端に走ることも、回り道することともなくなるだ

ろう。総括すると、実際神の意義とは、人間性の働きと神性の働きは同じ霊によって支配され、肉体を通して表されるということである。それを通して人々は、神が鮮やかで生きているようであり、現実的で、実在していることを見ることができるのだ。

『言葉は肉において現れる』の「実際の神は神自身であることを知るべきである」より

25. 人間の肉はサタンによって墮落し、最も深く盲い、まことに深く損なわれた。神自らが受肉して働く最も根本的な理由は、救いの対象が肉の体をもつ人間であり、サタンもまた人間の肉を用いて神の働きを妨げているためである。サタンとの戦いは、実は人間を征服する働きであり、同時に、人間はまた、神による救いの対象でもある。このように、受肉した神の働きは不可欠なのだ。サタンは人間の肉を墮落させ、人間はサタンの体現者となり、神に打ち負かされるべき存在となった。このように、サタンと戦って人類を救う働きは地上で行われ、神はサタンと戦うために人間にならなければいけない。この働きは極めて实际的なものだ。神が受肉して働いている時、神は実際はサタンと肉において戦っている。神が肉において働くとき、神は霊的領域の働きをしており、霊的領域での働きのすべてを地上で現実的なものにする。征服される者は神に逆らう人間であり、打ち負かされる者はサタンの体現者（もちろん、これもまた人間）、神に敵対する者であり、最終的に救われる者もまた人間である。このように、神が被造物の外形をもつ人間になることがますます必要なのは、神がサタンと真の戦いを行えるようにであり、それにより神に対して不服従で神と同じ姿をもつ人間を征服し、神と同じ姿をもちサタンによって損なわれた人間を救うためである。神の敵は人間、その征服の対象は人間、救いの対象も神の被造物である人間だ。そこで、神は人間とならなければいけない。そのほうが、ずっと働きをしやすくなるのだ。神はサタンに勝利し、人間を征服し、そのうえ、人間を救うことができる。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

26. 人間はサタンのせいで墮落したが、神の被造物のうちで最高のものだ。そこで、人間には神による救いが必要だ。神の救いの対象はサタンではなく人間であり、救われるべきものは人間の肉、人間の魂であり、悪魔ではない。サタンは神が滅ぼす対象であり、人間は神に救われる者である。人間の肉はサタンによって墮落させられた。だから、まず人間の肉が救われなければならない。人間の肉は極めて深く墮落しており、神に敵対するものになっている。そして、公然と神に敵対し、神の存在を否定しさえする。この墮落した肉は、まったく手に負えない。墮落した肉の性質以上に扱いにくく、変えにくいものはない。サタンは人間の体に入って混乱させ、人間の体を使って神の働き

を妨害し、神の計画を妨げる。それゆえ人間はサタンとなり、神の敵になった。人間が救われるには、まず征服されなければならない。このため、神は挑戦に立ち上がり受肉した。働きを行い、サタンと戦うためである。神の目的は墮落した人類の救いと、自分に抵抗するサタンを打ち破り、滅ぼすことである。神は人間を征服する働きによってサタンを破り、同時に墮落した人間を救う。そうして、神は二つの問題を一度で解決する。神は肉において働き、肉において語り、すべての働きを肉において行う。人間とよりよく交わり、よりよく征服するためである。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

27. 神が人を救うとき、霊の手段を用いたり霊として直接行なわない。というのは、神の霊は人が触れることも見ることもできず、人が近づくこともできないからである。もし神が霊の立場で直接人を救おうとするなら、人は神の救いを受け入れることはできないであろう。そして、もし神が造られた人の外形をまとうなら、人はこの救いを受け入れることはできないであろう。というのは、ちょうど誰もヤーウェの雲の近くに行くことができなかったように、人は決して神に接近することができないからである。被造物である人となることによってのみ、すなわち、言葉を神がまとう肉体に入れることによってのみ、神は従ってくるすべての人たちに直接言葉を働かせることができる。その時初めて、人は自分自身で神の言葉を見聞きし、さらに言葉を自分のものとし、これによって、完全に救われることができる。もし神が肉とならなければ、肉なる人はそのような大きな救いを受けることもできないし、誰一人救われることもないであろう。もし神の霊が人の間で直接働いたなら、人は打ち倒されてしまうか、神と係わる方法がないまま、サタンにすっかり連れ去られ囚われるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

28. もし神が肉とならないなら、神は人の目に見えず、触れることの出来ない霊のままである。人は肉の被造物で、人と神は二つの違った世界に属し、性質も異なっている。神の霊は肉からなる人とは相いれず、それらの間には何の関係も作ることはできない。さらに、人は霊になることはできない。それだから、神の霊は被造物の一つになって、神の本来の働きをしなければならない。神は最高の場所に昇ることもできれば、へりくだって、被造物である人になって人々のもとで働き、生きることもできる。しかし人は高みに昇り、霊になることもできなければ、ましてや最も低い場所に降りることなどできない。よって、神はその働きを実行するために人とならなければならない。最初の受肉のときのように、受肉した神の肉体のみが十字架にかけられることによって人を



贖うことができたが、神の霊が人のために罪のためのいけにえとして十字架にかけられることはできなかったであろう。神は人のために罪のためのいけにえとして直接人となることができたが、人は神が人のために用意した罪のためのいけにえを受け取るために直接天に昇ることはできなかった。そういうわけで、この救いを受け取るために人を天に昇らせるのではなく、神に天と地のあいだを数回行ったり来たりすることをたのむことだけが可能なことなのである。というのは、人は墮落したので天に上ることはできず、ましてや罪のためのいけにえを手にはすることはできないからである。よって、イエスは人のもとに来て、人がどうしても達成することができない働きを自ら行なう必要があった。神が肉となるときは必ず、どうしてもそうする必要があるのである。もしいずれかの段階が神の霊が直接行なうことができたなら、神は受肉という屈辱に耐えることはなかったであろう。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

29. 救われるべき者たちにとって、霊の使用価値は、肉にはるかに劣る。霊の働きは、全宇宙、すべての山々、川、湖、大海に及ぶ。しかし、肉の働きで神は、触れるすべての人と効果的に交流できる。そのうえ、触れることのできる形をもつ神の体は、人間には理解しやすく、信頼しやすく、神についての人間の認識を深めることができ、神の実際の業の深い印象を植え付けられる。霊の働きは神秘に包まれていて、死すべき人間には理解し難く、見ることはそれ以上に難しい。だから、無意味な想像に頼るしかない。しかしながら、肉の働きは正常で、現実に基づいており、豊かな知恵を含み、人間の肉眼で見ることのできる事実である。人間はその身で神の働きの知恵を経験できるから、豊かな想像力を働かせる必要もない。これが受肉した神の働きの正確さ、本物の価値である。霊には、人間の目に見えず、想像しにくいことしかできない。たとえば、霊による啓示、霊による感動、それに霊の導きなど。しかし、知性のある人間には、こうしたものは何ら明瞭な意味をもたない。こうしたものは感動あるいは漠然とした意味しか提供せず、言葉による指示を与えられない。しかしながら、受肉した神の働きは、大いに異なる。言葉を用いて正確な導きができるし、明確な意図、そして、目指すべきははっきりとした目標がある。だから、人間は手探りして歩きまわる必要がないし、想像力を働かせる必要も、まして、推測する必要もない。これが肉における働きの明瞭さであって、霊の働きとの大きな違いである。霊の働きは限られた範囲においてのみ適しており、肉の働きと置き換えることができない。肉の働きは、霊の働きよりはるかに正確で、必要な目標とずっと現実的で価値ある認識とを人間に与える。墮落した人間にとって

最も価値ある働きは、正確な言葉と目指すべき明確な目標を与え、そして見て触ることのできるものである。実際の働きと時宜にかなった導きだけが人間の嗜好に合う。そして、現実の働きだけが人間をその墮落した邪悪な性質から救える。これを成し遂げられるのは受肉した神だけである。受肉した神だけが、人間をかつて墮落した邪悪な性質から救えるのだ。霊は神に備わった本質であるが、こうした働きは受肉した神にしかできない。もし霊だけで働いたなら、神の働きは効果的なものではないだろう——これは明確な事実である。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

30. 真理を求め、神の現れを待ち望む者すべてにとって、霊の働きは感動と啓示、理解不能で想像もできない不思議な感覚、偉大で超越的で崇めるべきものであるが誰にも達成できず手に入れることのできないものという感覚だけを与える。人間と神の霊とは、遠くから互いを見ることしかできない。まるで両者の間に遠い隔たりがあるように。そして、けっして似ることがない。まるで、目に見えない境界で隔てられているかのように。実は、これは霊が人間に与えた幻影である。なぜならば、霊と人間とは種類を異にするものであり、霊と人間はけっして同じ世界で共存できず、霊には人間的な要素は何もないからである。だから、人間には霊は必要ではない。霊には、人間に最も必要な働きを直接することができないからである。肉の働きは求めるべき真の目標、明確な言葉、そして、神が現実的かつ正常で謙虚で普通であるという感覚を人間に与える。人間は神を恐れはするだろうが、たいていの人は神と心安く付き合える。人間は神の顔を見、神の声を聞くことができるし、遠くから見する必要はない。この肉体は人間にとって近づきやすいように思われる。遠くの不可思議な存在ではなく、目に見え、触れられるのだ。この肉体は人間と同じ世界にあるのだから。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

31. 神が受肉していなかった時、神の言葉が完全な神性から発せられたものであったため、人間は神の言葉の多くを理解していなかった。人間には理解できない霊的領域において言葉が表出されていたので、神の言葉の観点と背景は人間にとって見えないものであり、到達不可能なものであった。肉を持つ人間にとって、霊的領域に立ち入ることは不可能であった。しかし神が受肉した後、神は、人間性の観点から人間に対して語り、霊的領域から出てそれを超えた。神は、神の神性の性質、旨、姿勢を、人間が想像できる物事、生活の中で見たり遭遇したりしていた物事により、人間が受け入れられる方法を用い、人間が理解できる言葉で、また人間が把握できる知識で表出することによ

り、人間が神を理解し知り、人間の能力の範囲内かつ人間に可能な程度で、神の意図と神が求める基準を理解できるようにすることが可能であった。これが、人間性における神の業の方法と原則であった。神が肉にあって業を行う方法と原則は専ら人間性により達成されたが、そうした方法と原則により、神性から直接業を行う事では達成できない結果が実際に得られた。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

32. 受肉した神の働きが途方もなく素晴らしいことを人は今では理解でき、そこには人には達成できないことがたくさんある。それらは奥義と不思議である。だから、多くの人たちは服従して来た。誕生してから一度も誰にも従ったことのない人たちも、今日、神の言葉に触れると、彼らはそうと気付かないまま完全に従うのである。彼らはあえて綿密に調べることも、何か他のことを言うこともない。人類は言葉の下に倒れ、言葉による裁きの下に平伏している。もし神の霊が直接人に話しかけたら、人はみなその声に従い、啓示の言葉がなくても倒れ、ちょうどパウロがダマスコへの途上で光の中で地にひれ伏したようになる。もし神がこのように働き続けたなら、人は言葉による裁きを通して自分の堕落を知り、救いを得ることもできないであろう。肉になることによって初めて、神は言葉を直接すべての人の耳元に届け、その結果聞く耳のある人はすべて言葉を聞き、言葉による裁きの働きを受けることができる。これだけが神の言葉による成果であり、霊が出現して人を脅かし、服従させるというようなものではない。このような実践的でしかも並はずれた働きを通してのみ、長い間奥深く潜んだ人の古い性質を完全に明らかにし、人がそれを認め、性質を変えることができる。これらはすべて受肉した神の実践的働きである。この働きにおいては、神は実践的に語り裁くことで、言葉によって人に裁きの結果を達成する。これは受肉した神の権威であり、神の受肉の意義である。それは受肉の神の権威を知らせ、言葉の働きが達成した結果を知らせ、霊が肉となったことを知らせるためになされ、また言葉による人間への裁きを通して神の権威を実証するためになされる。神の肉体は平凡で普通の人間の外形であるが、神が権威に満ちており、その「人」が神自身であり、その言葉は神自身の表現であることを人に示すのは言葉が成し遂げる結果である。これはすべての人間にこの「人」は神であり、肉となった神自身であり、誰も犯すことはできないことを示している。誰も言葉による神の裁きを超えることはできず、暗闇のどんな勢力も神の権威に打ち勝つことはできない。人間は彼に完全に服従するのは、彼の言（ことば）が肉となった故、彼の権威の故、言葉による彼の裁きの故である。肉となったこの人がもたらす働きは、彼のもつ権威

である。肉となったのは、肉は権威を持つこともでき、人に見え実体のある実践的な方法で、人の間で働きをなすことができるからである。そのような働きは、すべての権威を所有する神の霊によって直接なされる働きよりも現実的で、その結果も明らかである。これは受肉した神の肉体は実践的な方法で語り、働くことができるからである。肉体の外形は権威を持たず、人が近づくことができる。一方、彼の本質は権威を伴うが、その権威は誰にも見えない。彼が話し働くとき、人は彼の権威の存在を感じることはできない。これは彼の実際の働きにとっても好都合である。そして、そのような実際の働きはすべて成果を上げることができる。たとえ誰も彼の権威を持つことに気付かず、誰にも犯されることがないことや神の怒りを知らなくても、彼の覆われた権威と隠れた怒り、そして公に語られた言葉を通して、彼はその言葉により意図した成果を達成する。すなわち、口調や断固とした話し方、そして言葉の知恵のすべてを通して、人は完全に確信する。この様にして、人は一見何の権威も持っていないような受肉した神の言葉に服従し、それによって人の救いという神の目的を達成するのである。これは受肉のもう一つの意義である。つまり、より現実的に語り、彼の言葉の現実性が人に働き、その結果、人は神の言葉の力の証人となる。だから、もし受肉によらないなら、この働きは少しも成果を得られず、完全に罪人たちを救うことはできないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（４）」より

33. 肉体において生きるすべての者にとって、性質を変えるには目指すべき目標が必要だ。そして、神を知るには、神の本当の業を見、神の本当の顔を見る必要がある。この二つは神の受肉した体でのみ可能なことだ。そして、いずれも普通の現実の体でのみ成し遂げられる。だから受肉が必要なのであり、すべての墮落した人間はこれを必要としているだ。人々は神を知る必要があるので、漠然とした超自然的な神の表象を心から消し去らなければならない。そして、墮落した性質を捨て去る必要があるのだから、まずその墮落した性質を知らなければならない。人間の力だけで漠然とした神の表象を心から消し去ろうとしても、望ましい成果は得られないだろう。人々の心にある漠然とした神の表象は、言葉だけではさらけ出したり、消し去ったり、完全に除いたりすることはできない。そうしてみても、人間の中に深く根付いているものを消し去るのは不可能だろう。実践の神と神の真の姿だけが、そうした漠然とした超自然的なものと入れ替わり、徐々に人々に教え、そうした方法によってのみ、目指すべき結果が得られるのだ。人間は、過去に求めていた神が漠然とした超自然的なものであったことに気づく。これを成し遂げるのは、霊による直接の導きではなく、まして、特定の個人の教えでもなく

、受肉した神なのである。受肉した神が本格的にその働きを行うとき、人間の固定観念が露わになる。なぜなら、受肉した神の正常さと現実性は、人間の想像の中にある漠然とした超自然な神とは正反対なものだからだ。人間の元来からの固定観念は、受肉した神との対照によってのみ明らかになる。受肉した神と比較することなしには、人間の固定観念は明らかにならない。言い換えれば、現にそこにあるものと比較しなければ、漠然とした物事は明らかにならない。言葉によってこの働きのできる者は誰もいない。また、言葉によってこの働きを明確に表現できる者は誰もいない。ただ神自身がその働きのできるのであって、ほかの誰も神に代わってその働きをすることはできない。人間の言語がどんなに豊かであろうと、神の現実性と正常性を言い表すことはできない。神が人間のもとで自ら働き、自分の姿と実在とをすっかり示してはじめて、人間はもっと実際的に神を知ることができ、もっとはっきり神を見られるのだ。肉体をもつ人間には、この成果を成し遂げられない。もちろん、神の霊もまた、これを成し遂げることはできない。神は墮落した人間をサタンの影響から救うことができるが、この働きは、神の霊には直接できないことだ。そうではなく、神の霊のまとう人間の体だけが、受肉した神の肉体だけができることだ。この生身の体は人間であると同時に神であり、正常な人間性を備えている一人の人間であるが、また、完全な神性を備えた神でもあるのだ。だから、この肉体は神の霊でなく、霊とは大きく異なっているのだが、それでも、人間を救う受肉した神自身であって、霊であると同時に肉体でもある。どのような名で呼ばれようと、つまるところ、それは人間を救う神そのものだ。神の霊は肉体から切り離すことはできず、肉の働きはまた、神の霊の働きでもあるからだ。これはただ、この働きが霊として行われるのではなく、人間として行われるということである。霊が直接行う必要のある働きは、受肉を必要としない。また、生身の体を必要とする働きは霊には直接できないもので、受肉した神だけが可能なのだ。これがこの働きに必要なものであり、また、墮落した人間に必要なものなのだ。神の働きの三つの段階では、一つの段階だけが霊によって直接行われた。そして残りの二つの段階は受肉した神が実行し、霊が直接働くことはない。霊が行った律法の時代の働きは、墮落した人間の性質を変えることを伴わず、神について人間が知ることと何の関わりもないものだった。しかしながら、恵みの時代と神の国の時代の受肉した神の働きは、人間の墮落した性質と神についての認識に関わるもので、救いの働きにおける重要かつ不可欠な部分である。だから、墮落した人間は受肉した神による救いを、受肉した神の直接的な働きをさらに必要とする。人間には、受肉した神が導き、支え、水をやり、養い、裁き、罰する必要がある。そして、受肉した神からのさらなる恵みと贖いが必要だ。受肉した神だけが人間の親友となり、

牧者となり、現実存在する助けとなることができる。これらすべてが現在と過去において受肉が必要とされる所以である。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

34. 神の国の時代には、肉となった神は、神を信ずるすべての人たちを征服するために、言葉を用いる。これが、「言葉が肉において現れる」ということである。神は、この働きをするために終わりの日にやって来た。つまり、神は、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためにやって来た。神は言葉を話すだけであり、事実の到来は稀である。これがまさに、言葉が肉において現れることの実体である。そして肉となった神が自身の言葉を話すとき、これが肉における言葉の出現であり、肉へ入り来る言葉である。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。そして言は肉となった。」このこと（言葉が肉において現れるという働き）が、終わりの日に神が成し遂げるだろう働きであり、自身の全経営計画の最終章である。したがって、神は地上に来て、肉の中で自身の言葉を表さなければならない。今日行われること、未来において行われるであろうこと、神によって成し遂げられるであろうこと、人の終着点、救われるであろう人々、滅ぼされるであろう人々、等々、最後に成し遂げられるべきこのような働きはすべて、明確に述べられてきた。そしてこれらはすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げることを目的にしている。かつて発行された行政命令や憲法、滅ぼされるであろう人々、安息へ入るであろう人々、これらの言葉はすべて成就されなければならない。これが主として、終わりの日を通じて、肉となった神によって成し遂げられた働きである。神は、神によって運命づけられた人々はどこに属し、運命づけられない人々はどこに属するか、神の民や息子たちはどのように分類されるか、イスラエルに何が起こるだろうか、エジプトに何が起こるだろうかを人々に理解させる。未来には、これらの言葉のすべてが成し遂げられる。神の働きの歩みは加速している。神は、あらゆる時代に何がなされるべきか、終わりの日の肉となった神によって何が行われるよう予定されているか、そして行われるべき神の働きが何であるかを、人に明らかにするための手段として言葉を用いる。これらの言葉はすべて、言葉が肉において現れることの実際の意義を成し遂げるためのものである。

『言葉は肉において現れる』の「すべては神の言葉が達成する」より

35. 神は主に、「言葉が肉になる」という事実を成し遂げるために地上に来た。つまり神は、言葉が肉から発されるよう来たのである（神が直接天から語った旧約のモーセの時代とは異なる）。その後、千年神の国時代にはそれぞれの言葉が成就し、人々の

目に見える事実になり、少しの誤りもなく、おのこの目で見ることになるだろう。これが、神の受肉の最高の意味である。つまり霊の働きは、肉体を通し、言葉を通して達成される。これは「言葉が肉になる」および「言葉の肉における出現」の真の意味である。神だけが霊の意志を語ることができ、肉における神のみが霊に代わって語ることができる。神の言葉は受肉した神の中に明らかにされ、他のすべての人はそれらによって導かれる。誰もそこから外れることはなく、みなこの範囲内にいる。これらの言葉からのみ、人々は知ることができる。このようにして得ない者たちは、天から発せられた言葉を得られると夢みている。これが、受肉した神に示された権威であり、全ての人を信服させるのである。最も優れた専門家や牧師でさえ、これらの言葉を話すことはできない。彼らはこれらに従わねばならず、誰も新しく始めることはできない。神は言葉によって全宇宙を征服する。肉体によってではなく、受肉した神の口から発せられた言葉によって、全宇宙にいるすべての人を征服する。これこそ、言葉は肉となるということであり、これこそ、肉における言葉の出現である。人々には、神がさほど多くの仕事をなしていないように見えるかもしれないが、神が言葉を発するだけで、人々は完全に納得し、圧倒される。事実がなければ、人々は喚き散らし、神の言葉があれば、彼らは沈黙する。神はこの事を必ず成し遂げるだろう。地上への言葉の到来を達成することは、神の長年に亘る計画だからである。

『言葉は肉において現れる』の「千年神の国は訪れた」より

36. 受肉した神の働きで最もよい点は、神に従う人々に正確な言葉と勧告、人類への正確な心を残せるため、受肉した神の働きと全人類に向けられた心とを、後に信者たちがこの道を受け入れる人々により正確に、具体的に伝えられる点にある。受肉した神の人間の間での働きだけが、神が人間と共に存在し、生きている事実を真に確立できる。この働きだけが、神の顔を見たい、神の働きに立会い、神の直接的な言葉を聞きたいという人間の欲求を満たす。受肉した神は、ヤーウェの後ろ姿だけが人間に示された時代を終わらせ、また、漠然とした神への人間の信仰の時代を終わらせる。とりわけ、最後に受肉した神の働きは、すべての人間により現実的で実践的な快い時代をもたらす。神は律法と教義の時代を終わらせるだけではなく、もっと重要なことに、現実的で正常で、義であり聖なる神、経営（救いの）計画を明らかにし奥義と人類の運命を示す神、人間を創り、救いの働きを完了し、数千年にわたって隠されていた神を人類に明らかにするのだ。神は漠然の時代を完全に終わらせ、全人類が神の顔を求めても見つけられなかった時代を終わらせる。神は、すべての人間がサタンに仕えた時代を終わらせ、すべ

ての人間をまったく新たな時代へと完全に導く。これはみな神の霊ではなく、受肉した神の働きの結果なのだ。神が受肉して働くと、神に従う者たちは、もはや漠然とした不可解なものを手探りで求める事をせず、漠然の神の心を推測することをやめる。神が肉における働きを広めると、神に従う人々は、神が受肉して行った働きをすべての宗教、すべての宗派に伝え、その言葉全部をすべての人間の耳に伝えるだろう。神の福音を受ける者が聞くことはみな、神の働きの事実で、人間が自分で見たり聞いたりしたこと、事実であって、噂ではない。こうした事実は神がその働きを広める証拠であり、また、その働きを広めるために用いる道具である。事実がなければ、神の福音はすべての国々、あらゆる場所に伝わらない。事実なしで人間の想像だけであれば、神はけっして全宇宙を征服する働きを行うことはできない。霊は人間には触れることのできないもので、人間には不可視で、霊の働きは神の働きのそれ以上の証拠も事実も人間に残せない。人間はけっして神の本当の顔を見ないだろうし、存在しない漠然とした神をいつまでも信じているだろう。人間はけっして神の顔を見ないし、また、直接神が語る言葉を聞くこともない。人間の想像するものは、結局のところ、むなしく、神の真の顔に取って代われない。神の本来の性質、神自身の働きは、人間がまねる事ができない。目に見えない天の神とその働きは、受肉した神が自ら人間の間で働いて、はじめて地上にもたらされる。これが、神が人間に姿を現す最も理想的な方法であり、この方法により人間は神を見て、神の真の顔を知る。そして、これは受肉しない神では不可能なことだ。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

37. この肉が人間にはできない働きができるのは、その内なる性質が人間のそれと異なっているためで、それが人間を救えるのは、その身分が人間とは異なるからだ。この肉の体が人類にとって極めて重要なのは、それは人間である、かつそれ以上に神であるからだ。それは通常の間には不可能な働きが可能だからであり、神には地上で共に暮らす墮落した人間を救うことが可能なためである。神は人間と同じ外見をもつが、受肉した神はどんな重要人物よりも人間にとって重要である。それは神の霊には不可能な働きが可能だからであり、神自身について霊よりも優れた証しができ、神の霊よりも完全に人間を得ることが出来るからだ。その結果、この肉は普通で平凡であっても、その人類への貢献と人類存在にとっての意義により、この肉体は極めて尊いものとなる。そしてこの肉の真の価値と意味は誰にとってもはかりしれないものがある。この肉は直接サタンを滅ぼすことはできないが、神はその働きによって、人間を征服し、サタンを打ち負かせる。サタンを完全に支配下に下せる。これは、神が受肉したから、サタンに勝



利して人類を救うことができるのだ。神は直接サタンを滅ぼしはしないが、サタンによって墮落させられた人類を征服する働きをするため受肉する。このようにして、神は被造物のもとで自分を証しでき、墮落した人間をよりよく救える。受肉した神がサタンを打ち負かすことは、神の霊が直接サタンを滅ぼすよりも偉大な証しであり、より説得力がある。受肉した神は、人間が創造主を知る手助けをよりよく行うことができ、被造物のもとでよりよく神自身を証しできる。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

38. 今回は、神は霊体ではなく、まったく普通の体で働きを行うために来る。それは神の二度目の受肉の体というだけではなく、神がそれをまとして戻ってくる体でもある。それはごく普通の肉体である。この体の中に、他の人々と異なるものは何も見受けられないが、あなたは、今までに聞いたこともない真理をこの人から受け取ることができる。この取るに足らない肉体は、神から来る真理の言葉のすべてを具現化したものであり、終わりの日の神の働きを引き受けるもの、また人が知ようになる神の全性質の表現である。あなたは天の神を見ることを大いに望んでいたではないか。あなたは天の神を理解することを切に願ったではないか。あなたは人類の終着点を見ることを大いに欲していたではないか。この人は、今まで誰ひとりとしてあなたに語ることはできなかった秘密の全てをあなたに語るだろう。また、あなたが理解していない真理についてさえ語るだろう。この人は、あなたにとっての神の国への入り口の門であり、新しい時代への導き手である。このような普通の肉が多く計り知れない奥義を握っているのである。この人の行いはあなたには測り知れないかもしれないが、その人が行うすべての働きの目標は、この人が人々が思うような単なる肉ではないことを理解するのに充分である。なぜならこの人は、終わりの日に人類に神が示す配慮及び神の意志を表しているからである。あなたは天地を揺るがすような神の語る言葉を聞くことはできず、燃え上がる炎のようなその目を見ることもできず、また、鉄の杖のような神の懲らしめを感じることもできないが、その言葉から神の怒りを聞き、神が人類に示す憐れみを知ることができる。あなたは神の義なる性質と神の知恵を見ることができ、更に神が全人類に対して持つ配慮をはっきり理解することができる。

『言葉は肉において現れる』の「神が人々の間で偉大な業を成し遂げたことを知っているか」より

39. 終わりの日の神の働きは、天の神が地上で人々の間で生きていることを人に見せることであり、また人が神を知り、神に従い、神を畏敬し、神を愛することができるようにすることである。これが神が再び肉に戻った理由である。今日人が見るものは人

と同じ姿の神、一つの鼻と二つの目を持つ神、目立たない神であるが、最終的には神はあなた方に次のことを示すだろう。この人の存在がなければ、天と地は膨大な変化にさらされ、この人の存在がなければ、天は薄暗くなり、地上は混沌に陥り、全人類は飢饉と疫病の中で暮らすことになるということを。終わりの日における受肉の神による救いがなければ、神はずっと前に全人類を地獄で滅ぼし尽くしていたはずであるということを、神はあなた方に示すであろう。またこの肉の存在がなければ、あなた方は永遠にずっと罪人のかしらと死体のままであるということを神は示すであろう。この肉の存在がなければ全人類は避けることのできない災難に直面し、終わりの日の神の人類への一層厳しい懲罰から逃れることはできないことをあなた方は知るべきである。この普通の肉の誕生がなければ、どのように求めようとも、あなた方にはみな生も死も到来しない状態に陥るだろう。この肉の存在がなければ、今日、あなた方は真理を受け取り神の玉座の前に来ることもできないだろう。それどころか、あなた方の深い罪ゆえに罰せられるだろう。あなた方は知っているか。神の肉への再来がなければ、誰にも救いの機会はないのである。また、この肉が来なければ、神はずっと以前に古い時代を終わらせていたはずである。それでも、あなた方は神の二度目の受肉をなおも拒むことができるのか。あなた方は、この普通の人から大いに利益を得ることができるのに、なぜすぐにこの人を受け入れないのか。

『言葉は肉において現れる』の「神が人々の間で偉大な業を成し遂げたことを知っているか」より

40. 最後にはすべての国々はこの普通の人を礼拝し、この取るに足りない人に感謝し、従うだろう。全ての人類を救い、神と人の間の対立を和らげ、神と人を近づけ、神と人の考えをつなげるための真理、いのち、道をもたらしたのは、この人だからである。一層大きな栄光を神にもたらしたのもこの人である。このような普通の人、あなたの信頼や敬愛を受けるに値しないだろうか。このような普通の肉はキリストと呼ばれるに相応しくはないだろうか。このような普通の人、人々の間で神の表出となれないことなどだろうか。人類が災難を免れる手助けをするこのような人は、あなた方に愛され、あなた方が抱きしめる価値がないなどということがあろうか。あなた方がこの人の口から発せられる真理を拒み、あなた方の間に彼が存在することを忌み嫌うならば、あなた方の運命はどうなるであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神が人々の間で偉大な業を成し遂げたことを知っているか」より

41. キリストが語る真理に依り頼むことなくいのちを得ることを望む者は、地上で最も愚か者であり、キリストがもたらすいのちの道を受け入れない者は幻想の世界で迷

子になった者だ。だから、終わりの日のキリストを受け入れない者は神から永遠に嫌われるとわたしは言う。キリストは、終わりの日に神の国への門となる存在であり、誰も迂回することはできない。キリストを通してでなければ、誰も神に完全にしてもらうことはできない。あなたは神を信じているのだから、神の言葉を受け入れ、神の道に従わなければならない。真理を受け取ることも、いのちの供給を受け入れることもなく、祝福だけを得ようと考えてはならない。キリストは、彼を真に信じる者にいのちを与えるために終わりの日にくる。その働きは、古い時代を終わらせ新しい時代に入るためのもので、新しい時代に入る人が必ず進まなければならない道だ。あなたが彼を認めず、彼を非難したり、冒涇したり、さらに迫害したりするなら、あなたは永遠に火で焼かれなければならない。神の国には決して入れない。このキリストこそ、聖霊の現れであり、神の顕現であり、神が地上での業を託した者だからだ。だから、あなたが終わりの日のキリストがする全てのことを受け入れられないなら、あなたは聖霊を冒涇しているとわたしは言うのだ。聖霊を冒涇する者が受けなければならない報いは、誰の目にも明らかだ。そして、あなたが終わりの日のキリストに敵対し、拒むなら、誰もその結末をあなたに代わって引き受けることはできないともわたしは言おう。さらに、これから先、あなたが神に認めてもらう機会はない。たとえあなたが自らの罪を償おうとしても、あなたが神の顔を拝することは二度とない。なぜなら、あなたが敵対したのは人ではなく、あなたが拒んだのは卑小な存在ではなく、他でもないキリストだからだ。あなたはこの結末に気づいているのか。あなたが犯したのは小さな過ちではなく、重罪だ。だから、全ての人に忠告する。真理の前に牙をむき出したり、軽率に批判したりすることのないように。あなたにいのちを与えるのは真理以外にはなく、あなたを生まれ変わらせ、神の顔を仰ぐことができるようにしてくれるものは、真理以外にはないからだ。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

#### 脚注

- a. 原文では「～かどうかに関しては」と書かれている。
- c. 原文では「そして両者は」

## IV 聖書についての代表的な言葉

1. 長い間、人々の伝統的な信仰の方法は（世界の三大宗教の一つであるキリスト教においては）聖書を読むことであった。聖書から離れることは、主を信じることではない。聖書から離れるのは邪教、異端であり、他の本を読んでも、そうした本の基礎は聖書の解説でなければならない。つまり、主を信じるというのなら、聖書を読まなければならないのだ。聖書を飲み食いし、聖書の外では、聖書と関わりのない本を崇めてはいけない。そういうことをするのは、神への裏切りだ。聖書が存在するようになって以来、人々の主への信仰は聖書への信仰である。人々は主を信じるという代わりに、聖書を信じると言ったほうがいい。聖書を読み始めたと言うよりは、聖書を信じるようになったと言うほうがいい。そして、主の前に帰ったというよりは、聖書の前に帰ったと言うほうがいいだろう。このように、人々はまるで聖書が神であるかのように崇め、まるでそれが自分たちのいのちの源で、それを失うことはいのちを失うことであるかのようだ。人々は聖書を神と同じくらい高いものと見ているが、神より高いと思う人々さえいる。人々は、たとえ聖霊の働きがなくとも、たとえ神を感じられなくとも、生きていける——しかし、聖書を失くしたり、あるいは聖書の有名な章句を失くしたりすると、すぐに、まるでいのちを失ったかのようになる。そこで、人々は主を信じ始めるとすぐに聖書を読み始める。そして、聖書を暗記し、より多く聖書の暗記すればするほど、主を愛し、信仰が深いことの証拠になる。聖書を読み、それについて他の人々に話すことのできる人々はみな、よい兄弟姉妹だ。長年の間、人々の信仰と主への忠誠は、聖書をどれほど理解しているかによって測られてきた。たいていの人は、なぜ神を信じなければいけないのかをまったく理解していないし、どう神を信じるべきかを知らないのに、聖書の章句を解明するために闇雲に手がかりを探す以外には何もしない。人々は聖霊の働きの方角を追究したことはない。これまで、懸命に聖書を勉強し調べる以外のことをしてこなかった。聖書の外で聖霊の新たな働きを見出した者は誰もいないし、聖書から離れた者もないし、聖書から離れる勇気をもつ者もない。人々は長年の間聖書を研究し、まことに多くの解釈を編み出し、多くの労力を費やしている。彼らはまた、聖書について数多くの異なった意見をもち、それについて果てしなく議論しており、現在では二千以上の教派が形成されている。彼らはみな、特別な解釈を探しているか、より深遠な奥義を聖書の中に探している。彼らは探索し、ヤーウエのイスラエルでの働きの背景に、あるいはイエスのユダヤでの働きの背景にそれを見つけるか、それとも他の誰も知らないさらなる奥義を見つけることを望んでいる。人々の聖書への態度は偏執と信仰

で、聖書の内部事情や本質について、完全に理解している人は誰もいない。だから、現在もなお人々は聖書に関して説明しようのない不思議さを感じる。それ以上に、聖書に執着し、聖書を信じている。今日、誰もが終わりの日の働きについての預言を聖書に見出したがっている。その人たちは終わりの日に神がどのような働きをするのか、終わりの日についてどんな前兆があるのかを見つけたがっている。このように、その人たちの聖書信仰はますます熱を帯び、終わりの日に近づくほど、ますます聖書の預言、とりわけ終わりの日についての預言に信頼をおく。そうした聖書への盲信、そうした聖書への信頼によって、その人たちは聖霊の働きを探そうという欲求をもたない。人々の観念では、聖書だけが聖霊の働きをもたらすのである。聖書の中だけに神の足跡を見いだせる。聖書の中だけに神の働きの奥義が隠されている。他の書物や人々ではなく、聖書だけが、神に関するすべてとその働きの全体を明らかにできる。聖書は天の働きを地にもたらす。そして、聖書は時代の始まりと終わりをもたらすことができる。こうした観念があるので、人々は聖霊の働きを探そうという意向をもたない。そこで、聖書が過去にどれほど人々の役に立ったかはともかく、神の現在の働きの妨げになっている。聖書がなければ、人々は別の場所に神の足跡を探せる。しかし、今日、神の足跡は聖書によって封じ込められている。だから、神の最新の働きを広げることは、二重に困難な、苦しいことになっている。これはみな、聖書の有名な章句のせいであり、聖書のさまざまな預言のせいである。聖書は人々の心の中で偶像となり、人々の頭脳の中の謎となった。人々は神が聖書とは別に働けることをどうしても信じられず、聖書の外でも神を見つけることができることが信じられなくなっている。まして、神が最後の働きのあいだに聖書を離れて新しく始められるなどとは信じられない。これは人々にとって考えられないことである。人々には信じられないし、想像することもできない。聖書は神の新たな働きを受け入れるための大きな障害になり、神がこの新たな働きを広めることを困難にしている。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について（１）」より

2. 聖書は歴史書だ。もちろん、ここには預言者の預言もいくつか載っている。そして、そうした預言は歴史などではまったくない。聖書はいくつかの部分からなっている。預言だけではなく、ヤーウエの働きだけでもなく、パウロの書簡だけでもない。聖書には幾つの部分があるかを知っていなければいけない。旧約には創世記と出エジプトなどが含まれ、そして、預言者たちが書いた預言書もある。最後に、旧約はマラキ書で終わる。旧約は、ヤーウエの導いた律法の時代を記録している。創世記からマラキ書まで

、律法の時代の働きすべての総合的な記録だ。これはつまり、旧約は律法の時代にヤーウェに導かれた人々の経験の記録だということだ。旧約の律法の時代、大勢の預言者がヤーウェに起こされ、神の預言をした。彼らはさまざまな部族や民族に指示を与え、ヤーウェのする働きについて預言した。こうした起こされた人々はみな、ヤーウェからの預言の霊を与えられていた。彼らはヤーウェから幻を見せられ、その声を聞くことができたので、ヤーウェに啓示を受けて預言を書いた。彼らの行なった働きはヤーウェの声の代弁で、それはヤーウェに代わって行われた預言の働きであった。当時のヤーウェの働きは、単に霊を用いて人々を導くことであった。ヤーウェは受肉せず、人々は神の顔をまったく見なかった。そこで、ヤーウェは大勢の預言者を起こして、自分の働きをさせた。預言者たちに神託を与え、彼らはそれをイスラエルのすべての部族や氏族に伝えた。彼らの働きは預言をすることで、彼らの一部はヤーウェが彼らに与えた指示を記述して、他の人々に見せた。ヤーウェはこれらの人々を起こして預言を語らせ、将来の働きや、当時進行中の働きについて預言させた。そこで、人々はヤーウェの知恵と素晴らしさを見ることができた。これらの預言の書は聖書の他の書とは大きく異なっていた。それらは預言の霊を受けた人々、ヤーウェに幻を見せられたり、その声を聞いたりした人々が語り、書き記した言葉だ。預言の書以外は、旧約のすべてはヤーウェがその働きを終えた後に人々が作成した記録だ。これらの書は、創世記や出エジプト記がイザヤ書やダニエル書に比肩できないのと同様、ヤーウェの起こした預言者の語った預言とは同列に置けない。預言は働きが実行される以前に告げられた。一方、他の書は働きが完了してから書かれたもので、それが人々にできたことだった。当時の預言者はヤーウェの啓示を受けて預言を伝えた。彼らは多くの言葉を語り、恵みの時代の物事について、また、終わりの日に世界が破壊されることを預言した——ヤーウェが計画している働きだ。残りの書はみな、ヤーウェがイスラエルで行った働きについての記録である。だから、聖書を読む場合には、主にヤーウェがイスラエルでしたことについて読むことになる。聖書の旧約は主にヤーウェのイスラエル人を導く働きの記録であり、モーセを用いてイスラエル人をパロの虜囚から解放し、エジプトから脱出させ、荒野に連れていき、その後、カナンに入った。その後に起こったことはみな、彼らのカナンでの生活である。これ以外はみな、全イスラエルでヤーウェの行った働きの記録である。旧約に記録されていることはみな、ヤーウェのイスラエルでの働きの記録で、これはヤーウェがアダムとエバを創造した場所での働きである。ノアの後、神が正式に地上の人々を導き始めた時から、旧約に記録されていることはみな、イスラエルでの働きである。では、なぜイスラエルの外では何の働きも記録されていないのだろうか。なぜなら、イスラエルの地

が人類の生まれた地だったからだ。始めに、イスラエルの他に国はなかった。そして、ヤーウェは他の場所では働かなかった。このように、聖書に記されていることは、純粹に当時のイスラエルでの働きなのである。預言者たち、イザヤ、ダニエル、エレミヤ、エゼキエルの話した言葉……彼らの言葉は、神の地上における他の働きを預言するもので、ヤーウェの神自身の働きを予告している。これはみな神から出たもので、聖霊の働きであり、これらの預言者の書を除くと、他のすべてはみな当時のヤーウェの働きを経験した人々の記録である。

創造の働きは、人間が存在する以前に行われた。しかし、創世記は人間が存在するようになってから書かれた。これは、モーセが律法の時代に著した書である。これは、今日あなたたちの間に起こっている事柄に似ている。起こった後で、あなたたちは将来人々に見せるために、将来の人々のために書き記すが、記録したものは過去に起こったことで、歴史に他ならない。旧約に記録されている事柄はヤーウェのイスラエルでの働きで、新約に記録されているのは恵みの時代のイエスの働きである。これらは神が二つの異なる時代に行った働きを記録している。旧約は律法の時代の神の働きを記録している。だから、旧約は歴史的な書物で、新約は恵みの時代の働きの産物である。新しい働きが始まると、それも時代遅れになった。そういうわけで、新約もまた歴史的な書物である。もちろん、新約は旧約ほど組織だったものではないし、それほど多くを記録していない。旧約のヤーウェの語った多くの言葉のすべては聖書に記録されているが、イエスの言葉の一部しか四福音書に記録されていない。もちろん、イエスもまた多くの働きをしたが、それは詳細に記録されなかった。新約にあまり記録がないのは、イエスが行った働きの量による。地上でイエスが三年半の間に行った働きと使徒たちの働きは、ヤーウェのそれよりはるかに少ない。だから、新約は旧約よりずっと書が少ない。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について(1)」より

3. 新約の福音の書はイエスが十字架につけられてから二十年から三十年後に書かれた。それ以前には、イスラエルの人々は旧約だけを読んでいて、つまり、恵みの時代の始めに、人々は旧約を読んだのである。新約は恵みの時代になって、はじめて現れる。イエスが働いていた間、新約は存在しなかった。イエスがよみがえり、昇天した後になって、人々はイエスの働きを記録した。そうしてはじめて、四福音書が生まれ、それに加えて、パウロとペテロの書簡、そして黙示録が生まれた。イエスが昇天して三百年以上過ぎた後で、後の世代が記録を集め、新約が生まれた。この働きが完了した後ではじめて新約が存在した。それ以前にはなかったのである。神がすべての働きを行った。使

徒パウロも自分のすべての働きを行った。その後に、パウロとペテロの書簡が集められ、ヨハネがパトモス島で記録した最大の幻が、終わりの日の働きを預言していたため、最後に加えられた。これらはみな、後の世代の編集したものであって、今日の言葉とは別物である。今日記録されていることは、神の働きの段階に沿ったものである。人々が今日関わっているのは、神が自ら行った働きであり、神が自ら語った言葉である。人は介入する必要がない——霊から直接出る言葉は順を追って並べられており、人間の記録を編集したものとは異なっている。彼らが記録したものは、彼らの教養と人間としての能力の程度に従っていたと言える。彼らが記録したものは人間の経験であった。人々にはそれぞれ自分なりの記録の手段と認識があり、それぞれの記録は異なっていた。だから、聖書を神と崇めるなら、あなたは極めて無知で愚かだということになる。なぜ今日の神の働きを求めないのか。神の働きだけが人間を救うことができるのである。聖書は人間を救えない。彼らは聖書を数千年の間読むことが出来たが、それでもなお彼らのうちには少しの変化も見られない。そして聖書を崇めるのなら、けっして聖霊の働きを得ることはないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (3)」より

4. 聖書とはどういう書物なのか。旧約は律法の時代の神の働きである。旧約聖書は律法の時代のヤーウェの働きと、創造の働きを記録している。そのすべてがヤーウェの行った働きを記録しており、マラキ書のヤーウェの働きの記録で終わっている。旧約は神の行った二つの働きを記録している。一つは創造の働き、もう一つは律法の布告だ。どちらの働きもヤーウェが行った。律法の時代はヤーウェ神という名で行れた働きを示している。これは、主にヤーウェという名で行われた働きの総体なのだ。だから、旧約はヤーウェの働きを記録しており、新約はイエスの働き、主にイエスという名で行われた働きを記録している。イエスの名の意義とその行った働きは、主に新約に記録されている。旧約の律法の時代、ヤーウェはイスラエルに神殿と祭壇を築いた。地上でイスラエル人の生活を導き、彼らがヤーウェの選ばれた民、つまり彼らが神が地上で最初に選んだ集団で、神の心にかなう者であり、神自ら導いた民であることを証明した。つまり、イスラエルの十二部族がヤーウェが最初に選んだ民であり、神は律法の時代のヤーウェの働き終了まで、いつでも彼らの中で働いた。第二の段階の働きは新約の恵みの時代の働きで、イスラエルの十二部族の一つ、ユダヤ族の間で行われた。働きの範囲が狭かったのは、イエスが受肉した神であったからだ。イエスはユダヤの地でだけ働き、三年



半の間だけ働いた。だから、新約に記録されたものは、旧約に記録された働きの量を超えることは到底できないのだ。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について（１）」より

5. 聖書は旧約・新約聖書とも呼ばれる。あなたたちは、「約」の意味を知っているだろうか。「旧約」の「約」とは、ヤーウェがエジプト人を殺してイスラエルの民をパロから救ったときの、ヤーウェとイスラエルの民との契約に由来する。もちろん、この契約の証しは鴨居につけた羊の血で、神はそれをもって人間と契約を結んだ。この契約は、二本の門柱と鴨居に羊の血のついた家の者はイスラエル人で、彼らは神の選ばれた民であり、ヤーウェは彼らを通り過ぎる（このとき、ヤーウェはエジプト人の初子たちと羊や牛の初子をみな殺そうとしていた）という内容であった。この契約には二重の意味がある。ヤーウェはエジプト人とその家畜を一切救わず、男の初子と羊と牛の初子をみな殺す。そこで、多くの預言書は、エジプト人がヤーウェの契約のために厳しい刑罰を受けることを預言していた。これが契約の第一層の意味である。ヤーウェはエジプト人の初子と家畜の初子をみな殺したが、イスラエルの民は、すべて見逃した。つまり、イスラエルの地に住む民はヤーウェの慈しむ者たちであり、みな助かるであろうということである。ヤーウェは彼らのために長期におよんで働こうと思い、羊の血で彼らと契約を結んだ。それ以後、ヤーウェはイスラエル人を殺すことなく、彼らは永遠に自分の選んだ民であると告げた。イスラエルの十二部族の間で、ヤーウェは律法の時代を通して働きを開始する。イスラエル人に律法を示し、彼らの中から預言者と士師を選び、彼らを神の働きの中心に置いた。ヤーウェは彼らと契約を結んだ。時代が変わらない限り、ヤーウェは選ばれた民の間でだけ働く。ヤーウェの契約は変えられないものだった。それは血で結ばれたからである。そして、神が選んだ民との間で結ばれたのである。より重要なことに、ヤーウェは時代全体を通じて働くために適切な範囲と対象を選んだ。そこで、人々は契約をとりわけ重要なものと見た。これが契約の第二層の意味である。契約締結前の創世記を例外として、旧約の他の書はみな、契約を結んだ後のイスラエル人との間の神の働きを記録している。もちろん、異邦人のことを述べている箇所もあるが、総体的に旧約はイスラエルにおける神の働きを記録している。ヤーウェのイスラエル人との契約のため、律法の時代に書かれた書は「旧約」と呼ばれている。これはヤーウェのイスラエル人との契約に因んで名付けられた。

新約は、イエスが十字架上で流した血と、イエスを信じる者たちとの間での契約に因んで名付けられた。イエスの契約はこうである。ただイエスを信じれば、イエスの流し

た血により罪を赦され、救われ、イエスをとおして生まれ変わり、もはや罪人ではない。神の恵みを受けるにはイエスを信じさえすればよい。そうすれば、死後、地獄の苦しみを受けることがない。恵みの時代に記された書はみな、この契約の後のものだ。そしてみな、働きと、そこで述べられた言葉を記録している。これらの書は主イエスの磔刑による救い、あるいは契約より先には進まない。これらは、すべて経験をした主における兄弟たちが記した書である。だから、これらの書も契約に因んで名付けられ、「新約」と呼ばれる。この二つの契約には、恵みの時代と律法の時代だけが含まれていて、終わりの時代には何のつながりもない。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (2)」より

6. 多くの人は、聖書を理解することと解釈できることは、真の道を探すのと同じことだと信じている。しかし、実際、物事はそんなに単純だろうか。聖書の実際は誰も知らない。つまり、聖書は単なる神の働きについての歴史的記録であること、神の以前の二段階の働きについての証しであること、神の働きの目的については何も教えていないことである。聖書を読んだことのある人はみな、そこには律法の時代と恵みの時代の二つの段階での神の働きが記録されていることを知っている。旧約はイスラエルの歴史と創造から律法の時代の終わりまでのヤーウェの働きを記録している。新約では四福音書に、イエスの地上の働きと、パウロの働きを記録している。これらは歴史的記録ではないのか。過去の物事を今日に持ち込めば、それは歴史となり、どんなにそれが事実で真実であろうと、やはり歴史である。そして、歴史は現在について取り上げることはできない。神は歴史を振り返らないからである。だから、聖書だけを理解して、神が今日しようとしている働きを何も理解しないのなら、また、神を信じていても聖霊の働きを求めないのなら、あなたは神を求めるということがどういうことなのか、わかっていない。イスラエルの歴史を学ぶために、神の天地創造の歴史を研究するために聖書を読むのなら、あなたは神を信じていない。しかし、今日、あなたは神を信じていのちを求めているのだから、神の認識を求めているのだから、また、死んだ文字や教義を求めているのだから、あるいは、歴史を理解しようとしているのではないのだから、あなたは今日の神の心を求めなければいけない。そして、聖霊の働きの方向を尋ね求めなければいけない。もしもあなたが考古学者なら、聖書を読んでもよいであろう。しかし、そうではない。あなたは神を信じる者の一人なのだから、神の現在の心を探し求めるのが一番だ。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (4)」より

7. 今日、人々は聖書が神であり、神は聖書だと信じている。また、聖書の言葉のすべてだけが神の語った言葉であって、それはみな、神が語ったと信じている。神を信じている人々は、旧約と新約の六十六書はすべて人間が書いたものだけれど、これらはみな神から靈感を受けており、聖霊の告げたことを記録しているのだとさえ考えている。これは人々の解釈が誤っているのもであって、事実には完全に沿ったものではない。実際、預言の書以外、旧約のほとんどは歴史的記録である。新約の書簡のいくつかは人々の経験に基づいたもので、またいくつかは聖霊の啓きによるものである。たとえば、パウロの書簡はひとりの人間の働きから生まれたもので、それはみな、聖霊の啓きを受けた結果であった。また、その書簡は教会のために書かれたもので、教会の兄弟姉妹への勧告と激励の言葉だった。聖霊の語った言葉ではなかったのである。パウロは聖霊の代わりに語ることはできなかった。また、彼は預言者でもなかったし、ましてヨハネが見たような幻を見てもいない。パウロの書簡はエペソ、フィラデルフィア、ガラテヤ、その他の教会に向けて書かれた。だから、新約のパウロの書簡はパウロが諸教会に向けて書いた手紙で、聖霊の靈感によるものではないし、また、聖霊が直接語ったものでもない。あれは単に、パウロが働きの間に諸教会に向けて書いた勧告と慰めと励ましの言葉である。また、当時のパウロの活動の大部分の記録でもある。あれは主における兄弟姉妹のために書かれたもので、当時のすべての教会の兄弟姉妹に、パウロの助言に従い、主イエスの教えを守らせるためのものだった。当時の教会であれ、未来のものであれ、パウロは自分の書いたものをみなが飲み食いしなければならないとは絶対に言わなかったし、また、自分の言葉がみな神から出たものだとも言わなかった。当時の教会の状況に合わせて、パウロは単に兄弟姉妹と心の交流をして、彼らを励まし、彼らの信仰を深めようとしていた。そして、彼は単に説教をしたり思い起こさせたりして、勧告していたのだ。彼の言葉は、彼自身の重荷に基づいて、言葉によって人々を支えたのだ。彼は当時の教会の使徒としての働きをした。彼は主イエスに用いられた働き手だった。そして、教会の責任を与えられていた。彼は教会の仕事を行なうよう任じられていて、兄弟姉妹の状況を調べなければいけなかった。そのために、主においての兄弟姉妹すべてに手紙を書いたのだ。彼が人々に向けて言った信仰を養い、確信に満ちた言葉はみな正しかったが、それは聖霊の言葉を代弁していたのではないし、パウロにも神の代理はできなかった。一人の人間の経験の記録や手紙を聖霊が諸教会に向けて語ったものとして扱うのは、ばかげた解釈であり、ひどい冒瀆である。パウロが諸教会に向けて書いた手紙については、特にそうである。彼の手紙は当時の各教会の事情や状況に基づいて兄弟姉妹に向けて、主における兄弟姉妹を励まし、主イエスの恵みを受けられるようにと書いたも

のなのだから。彼の手紙は、当時の兄弟姉妹を奮起させるためのものであった。これは彼自身の重荷であり、聖霊が彼に負わせたものだったといえる。結局のところ、彼は当時の教会を導いた使徒で、諸教会に手紙を書いて励ました。それが彼の責任であった。彼の身分は単に活動中の使徒であって、単に神に遣わされた使徒だった。彼は預言する者でも、予知する者でもなかった。だから、彼にとって自分の働きと兄弟姉妹の生活が最も重要なものであった。それで、彼は聖霊を代弁することはできなかったのだ。彼の言葉は聖霊の言葉ではなかったし、まして、神の言葉であったとは到底言えない。パウロは神の被造物でしかなく、受肉した神では絶対になかったのだから。彼の身分はイエスの身分とは違っていた。イエスの言葉は聖霊の言葉で、神の言葉であった。イエスの身分はキリスト、神の子であったのだから。どうしてパウロがイエスと対等になれるのか。もし人々がパウロの書いたような手紙や言葉を見て、聖霊の言葉として神のように崇めるなら、それはあまりにも分別がないということになるだろう。もっと厳しい言い方をすれば、これは冒瀆以外の何物でもないのではないか。どうして人間が神に代わって話せるのか。また、どうして人々は人間の手紙や語った言葉の記録をまるで聖なる書か天の書であるかのように、その前に額づくことができるのであろうか。神の言葉は人間が何気なく口にできるものなのか。どうして人間が神に代わって話せるのか。それで、どう思うのか——パウロが諸教会に宛てて書いた手紙には、彼自身の考えが混じっているのではないか。どうして人間の考えで汚れていないと言えるであろうか。彼は自分の個人的経験や人生の幅に基づいて諸教会に向けて手紙を書いた。たとえば、パウロはガラテヤの諸教会に向けて手紙を書いているが、そこには、ある意見が含まれている。そして、ペテロも別の手紙を書いているが、別の意見が見られる。どちらが聖霊から出たものなのか。誰一人確かなことを言えない。だから、彼らは二人とも教会のために重荷を負っていたが、二人の手紙は彼らの霊的背丈を、彼らの兄弟姉妹に向けた備えと支えを、諸教会への彼らの責任を象徴している。その手紙は人間の働きを表しているに過ぎない。すべてが聖霊から出ていたのではないのだ。もしもパウロの手紙は聖霊の言葉だというのなら、その人は愚かで、冒瀆を犯している。パウロ書簡と新約のその他の書簡は、もっと最近の宗教活動家の回顧録のようなものだ。それらはウォッチマン・ニーの著書やローレンスの経験その他と同じようなものだ。簡単に言えば、最近の宗教活動家の著作は新約には含まれていないが、そうした人物の本質は同じである。彼らは一定の期間、聖霊に用いられた人々であったが、直接神を代表することはできなかったのである。

8. 新約のマタイの福音書は、イエスの系図を記録している。冒頭で、イエスはアブラハムの子孫、ダビデの子孫、ヨセフの子であったと述べている。次に、イエスは聖霊によってもうけられ、処女から生まれたと述べている。すると、イエスはヨセフの子でもアブラハムの子孫でもダビデの子孫でもないことになる。しかし、系図はイエスとヨセフのつながりを主張している。次に、系図はイエスが誕生した過程を記し始める。それによると、イエスは聖霊によってもうけられ、処女から生まれたのであり、ヨセフの子ではない。しかし、系図では、はっきりと、イエスがヨセフの子であると書いてあり、系図はイエスのために書かれているため、その記録は四十二世代に及ぶ。ヨセフの代になると、ヨセフがマリヤの夫であると手短に告げている。これらの記述は、イエスがアブラハムの子孫であることを証明するためのものである。これは矛盾ではないのか。系図は明らかにヨセフの祖先を列挙しており、それは確かにヨセフの系図なのだが、マタイは、それがイエスの系図だと主張している。これはイエスが聖霊によって生まれたことを否定するものではないのか。だから、マタイの系図は人間の考えではないのか。これはばかげている。このことから、この書がすべて聖霊から出たものではないことがわかる。おそらく、神には地上に系図がなければいけないと考えた人々がいて、その結果、イエスをアブラハムの四十二代目の子孫だとしたのではないであろうか。これはまことに愚かなことだ。地上に到着した後で、どうして神に系図があり得るのか。神に系図があると言うのなら、それは神を被造物と同列に置いているのではないか。神は地上の存在ではなく、創造の主であり、肉の体をもってはいても、本質においては、人間と同じではないのだ。どうして神をその被造物と同じものにできるのか。アブラハムは神の代理人ではない。彼はヤーウェの当時の働きの対象であり、単にヤーウェの認める忠実なしもべでしかなく、イスラエルの民の一人であった。どうして彼がイエスの祖先であり得ようか。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (3)」より

9. 聖霊に用いられた者たちの言葉は全て聖霊から出た言葉である、とあえて言う人が今日あなたの方の中にいるだろうか。そんなことをあえて言う人がいるだろうか。もしあなたがそのようなことを言うなら、いったいなぜエズラの預言書は除外され、昔の聖徒や預言者たちが書いた書物も同じように扱われたのか。それらの全てが聖霊から出たものであるなら、どうしてあなた方はあえてそのような気まぐれな選択をするのか。あなたに聖霊の働きを選ぶ資格があるのか。また、イスラエルの史実の多くが除外された。このような過去の記述が全て聖霊から出たものであると信じるなら、一部の書が排除

されたのはなぜか。それらがみな聖霊から出たものであれば、全て保管されて、諸教会の兄弟姉妹が読めるよう送られるべきである。それを人間の意図によって選抜したり処分したりすべきではない。そのようなことは間違っている。パウロとヨハネの経験には個人的に見たことが含まれていると言っても、それは彼らの経験と認識がサタンから出たものということではなく、彼らが個人的に経験したり見たりしたものがあったというだけのことである。彼らの認識は当時の実際の経験を背景にして生まれたものであり、それが全て聖霊から出たものだと言えようか。もし四つの福音書が全て聖霊から出たものなら、マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネが、イエスの働きについてそれぞれ違うことを言っているのはなぜか。そのことを信じないというなら、聖書の中の、ペテロが主を三度否定する話を読んでみなさい。四つの書すべてが違い、それぞれ特徴を持っている。多くの無知な人達は言う。「受肉の神もまた人間であるのなら、その方の語る言葉は全く聖霊から出るものと言えようか。もしパウロとヨハネの言葉に人の意志が混じっているのなら、神が語る言葉には本当に人の意図が混ざっていないのだろうか」そんなことを言う人たちは盲目で無知なのだ。四つの福音書を注意して読みなさい。イエスが行った事、イエスが語った事に関して記述されていることを読んでみなさい。それぞれの記述が全く異なっており、違う視点を持っている。これらの福音書の作者によって書かれたものが全て聖霊から出たものならば、全てが同じであり一貫しているはずだ。それでは、どうして相違があるのだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「呼び名と身分について」より

10. 聖書は神のイスラエルでの働きの歴史記録であり、古代の預言者たちの数多くの預言と、ヤーウェが当時その働きについて述べたことの一部が記録されている。だから、人々はこの本を神聖なものとして尊ぶ（神は聖く、偉大であるから）。もちろん、これはみな、人々のヤーウェへの畏敬と神への尊崇から来ている。人々がこの本をこのように扱うのは、神の被造物が自分たちの創造主を深く畏敬するためで、この本を天の書と呼ぶ者さえいる。実際のところ、これは人間の記録でしかないのだが。これはヤーウェが直接名付けたものではないし、ヤーウェが直接その作成を導いたものでもない。つまり、この本の著者は神ではなく、人間なのだ。聖書は、人間が敬ってつけた書名に過ぎない。この書名は、ヤーウェやイエスが話し合って決めたものではない。これは人間の考えでしかない。この本はヤーウェの著書ではないし、ましてイエスの著したものでもない。そうではなくて、多くの古代の預言者や使徒たち、予知する者の書いたものを後の世代が編集して、その人々にはとりわけ聖いものと映った古代の文書を一冊の本

に、未来の世代によって解読されるのを待っている多くの計り知れない深遠な奥義を含んでいるとその人々が信じた一冊の本に、まとめたものである。だから、よけいに人々はこの本を天の書だと考えがちである。四福音書と黙示録の追加によって、この本への人々の態度は、他のどの本とも異なっていて、誰一人、この「天の書」を解明しようとししない。——それはあまりに「神聖」だからだ。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (4)」より

11. あなたたちは聖書を理解しなければいけない——この働きは最も必要なものだ。今日、聖書を読む必要はない。そこには新しいものは何もないからだ。みな古い。聖書は歴史的な書物であり、もしも恵みの時代に旧約を飲み食いしていたなら、恵みの時代に旧約の時代の要求を実践していたなら、イエスはその人を拒んでいただろう。そして、罪に定めていたであろう。もしも旧約をイエスの働きに適用していたなら、その人はパリサイ人であったであろう。もし、今日、旧約聖書と新約聖書をともに飲み食いし、実践したなら、今日の神はあなたを罪に定めるだろう。今日の聖霊の働きから取り残されるだろう。もし旧約聖書と新約聖書を飲み食いするなら、その人たちは聖霊の流れの外にいる。イエスの時代、イエスは当時、ユダヤ人と自分に従う者みなを自らの内の聖霊の働きに従って導いた。イエスは聖書を自身の行為の基礎とせず、自分の働きに従って語った。イエスは聖書の記述を気に留めなかった。また、自分に従う人々を導く道を聖書に求めなかった。教えを説き始めたその初めから、イエスは悔い改めの道を広めた——その言葉は旧約の預言書ではまったく触れられていないものだった。イエスは聖書に従って行動しなかっただけでなく、新たな道へと導き、新たな働きを行った。イエスは教えを説く際に、一度も聖書に触れていない。律法の時代には、イエスのように奇跡を起こし、病を癒し、悪霊を祓う者は一人もいなかった。イエスの働き、その教え、そして彼の言葉の権威と力も、律法の時代の誰よりも勝っていた。イエスはただ、自分の新たな働きを行った。多くの人々は聖書を用いてイエスを罪に定めたが(さらにはイエスを十字架につけるのに旧約を用いた)、イエスの働きは旧約を超えていた。もしそうでなければ、なぜ人々はイエスを十字架につけたのか。それは、旧約ではイエスの教え、病を癒し悪霊を祓う能力について何の記述もなかったからではないのか。イエスの働きは新たな道を開くためのものであり、それは意図的に聖書に戦いを挑むものではなかったし、意図的に旧約を放棄するものでもなかった。イエスはただ、自分の職分を果たすため、自分を切に求める人々に新たな働きをもたらすために来たのである。旧約を説明し、その働きを継続するために来たのではない。イエスの働きは、律法の時代が

発展を続けるようにするためではなかった。イエスの働きはそれが聖書に基づいたものかどうかを問題にしなかったからである。イエスは単に、しなければならない働きをするために来たのだ。だから、イエスは旧約の預言を説明せず、また旧約の律法の時代の言葉に沿った働きもしなかった。イエスは旧約の記述を無視した。それが自分の働きに合致しているかどうかを気にしなかった。また、他の人々が自分の働きを理解しているかどうか、人々がそれをどう非難しているかも気にしなかった。イエスはただ、しなければならない働きを続けたのだ。多くの人々は旧約の預言者たちの預言に基づいて彼を罪に定めたのだが。人々にとって、イエスの働きは根拠を欠き、旧約の記述に反することが数多くあった。これは愚行ではないか。神の働きに教義を当てはめる必要があるのだろうか。また、それは預言者たちの預言に合致しなければいけないのだろうか。結局のところ、どちらが偉大なのだろうか。神か、それとも聖書か。なぜ神の働きが聖書に沿ったものでなければならないのか。神には聖書を超える権利がないということか。神は聖書から離れて別の働きをすることができないのか。なぜイエスとその弟子たちは安息日を守らなかったのか。もし安息日を守り、旧約の掟を実践するためであったのなら、なぜイエスは現れて以来、安息日は守らなかったのに、足を洗い、頭を覆い、パンを割り、ワインを飲んだのか。これはみな、旧約の掟にはないことではないか。もしイエスが旧約を遵守したなら、なぜそうした教義に違反したのか。神と聖書と、どちらが先に来たかわかっているはずである。神は安息日の主であると同時に、聖書の主でもあるのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (1)」より

12. 当時、イエスの言葉や働きは教理に固執したものではなかった。また、旧約聖書の律法に従って働きを実行することもなかった。それは、恵みの時代に行われるべき働きに従っていたのである。イエスは自らもたらした働きと、自らの計画と、自らの職分に従って尽力したが、旧約聖書の律法に従っては働かなかった。イエスの働きで旧約の律法に基づいたものはひとつもなかった。また、イエスは預言者たちの言葉を実現させるためにこの世に来て働いたのでもなかった。どの段階の神の働きも、とりわけ昔の預言者たちの預言を成就させるためのものではなく、教理に従うため、あるいは意図的に預言者たちの預言を実現させるために来たのでもなかった。だが、彼の行ったことが昔の預言者たちの言葉を混乱させることはなく、彼が過去に行った働きの妨げとなることもなかった。神の働きの顕著な点は、いかなる教理にも縛られずに、彼自身が為すべき働きを行うことであった。彼は預言者でも先見者でもなく、自らが行うべき働きをす



るために実際に来て、自身の新しい時代を切り開き、新たな働きを実行するために来た行動の人であった。もちろん、イエスが自身の働きを為すために来たとき、旧約聖書の昔の預言者たちが語った多くの言葉を成就させてもいる。今日の働きもまた旧約聖書の昔の預言者たちの預言を成就させている。ただ単にわたしはその「黄ばんだ古い暦」を掲げることがないというだけのことだ。というのは、わたしには他にももっと為すべき働きがあり、あなた方に語るべきことももっとあるからだ。そして、その働きと言葉は聖書の聖句を説明するより遥かに重要な事である。なぜなら、そのような働きは、あなた方にはさほど意義も価値もなく、あなた方の助けになることも、あなた方に変化をもたらしこともないからだ。わたしは聖書に書かれたことを成就するために新しい働きをする訳ではない。もし神が聖書の中の昔の預言者の言葉を成就するためだけに、この地上に来たのなら、受肉の神と昔の預言者たちのどちらが偉大なのだろう。結局のところ、預言者たちが神を支配しているのか、それとも神が預言者たちを支配しているのか。あなたは、これらの言葉をどのように説明するつもりなのか。

『言葉は肉において現れる』の「呼び名と身分について」より

13. 律法の時代の働きを見たければ、また、イスラエル人がどのようにヤーウェの道に従ったかを見たいのなら、旧約を読まなければいけない。恵みの時代の働きを理解したいのなら、新約を読まなければいけない。しかし、終わりの日の働きについては、どうすればいいのか。今日の神の導きを受け入れ今日の働きに入らなければいけない。これが新たな働きであり、誰も予め聖書に記録していないからだ。今日、神は中国で肉となり、新たな民を選んだ。神はこれらの人々の間で働き、恵みの時代の働きから続いて、地の働きを続ける。今日の働きの道は人間がかつて歩んだことのないもので、誰も見たことのないものである。それはかつて誰もしたことのない働きであり、それは神が地上で行う最新の働きだ。だから、かつて行われたことのない働きは歴史ではない。今は今であり、まだ過去になっていないからである。人々は神が地上で、イスラエルの外で、より偉大で新しい働きをしたこと、それがすでにイスラエルの範囲を超え、預言者たちの預言を超え、これまでに預言されていない、新しい、驚くべき働き、イスラエルの外の新たな働き、人々が見も想像もできない働きであることを知らない。どうして聖書にこのような働きの具体的な記録が載っているだろう。誰が今日の働きの細部に至るまで漏らすことなく、事前に記録することができただろう。あのカビ臭い古い本に、この、慣習を破る、より大きな賢い働きを、誰が記録できるだろう。今日の働きは歴史ではない。だから、今日の新たな道を歩みたいのなら、聖書から離れなければいけない。

聖書の預言書や歴史書を越えなければならない。そうしてはじめて、新たな道を正しく歩むことができ、そうしてはじめて、新たな領域、新たな働きに入ることができる。なぜ今日、聖書を読まないように言われるのか、なぜ聖書とは別の働きがあるのか、なぜ神は新たな、より詳細な実践を聖書に求めないのか、なぜより偉大な働きが聖書の外にあるのかを理解しなければいけない。これをみな、あなたたちは理解する必要がある。新旧の働きの違いを知らなければいけない。聖書を読まないが、聖書を分析できなければいけない。そうでなければ、まだ聖書を崇めていて、新たな働き、新たな変化に入るのが困難になるであろう。より高い道があるのに、なぜ低い、旧式の道を学ぶのか。新たな言葉、新たな働きがあるのに、なぜ古い歴史的記録の中で生きるのか。新たな言葉はあなたに必要なものを与えることができる。つまり、これが新しい働きであることの証明である。古い記録は十分な満足を与えたり現在の必要を満たすことができない。このことは、それが歴史であり、今現在の働きではないことを示している。最も高い道は最も新しい働きだ。そして、新しい働きは、どんなに過去の道が高くとも、それは人々の思考の歴史であり、参考としての価値がどれほどであってもそれは古い道なのだ。たとえそれが「聖なる書」に記されていても、古い道は歴史だ。たとえ「聖なる書」に記録されていないことでも、新たな道が今現在のものなのだ。この道はあなたを救う。そして、この道はあなたを変える。これは聖霊の働きだからだ。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (1)」より

14. 当時のユダヤ人はみな旧約聖書を読んでいて、男の子が飼葉桶の中で生まれるというイザヤの預言を知っていた。それではなぜ、これを知っていたにもかかわらず、彼らはイエスを迫害したのか。彼らの反抗的本性と聖霊の働きについての無知のためではないだろうか。当時、パリサイ人は、イエスの働きは預言された幼児について彼らが知っていることとは違っていると信じていた。今日の人々が神を受け入れないのは、肉となった神の働きが聖書と一致しないからである。彼らの神に対する反抗の本質はまったく同じものではないだろうか。あなたは聖霊のすべての働きを疑いなく受け入れることができるか。もしそれが聖霊の働きなら、それは正しい流れである。あなたは何を受け入れるべきか選別するよりも、むしろそれをほんのわずかな疑念も抱かずに受け入れるべきである。神から幾分かの見識を得て、神に対して用心するのであれば、それは本当に無用な行為ではないだろうか。あなたがすべきなのは、聖書からさらに実証を求めたりせず、聖霊の働きである限り、いかなるものも受け入れることである。あなたが神を信じるのは神に従うためであり、神を調べるためではないからである。わたしがあ

なたの神であることを示すためにわたしに関するさらなる証を探し出すべきではなく、むしろわたしがあなたのためになるかどうかを見定めるべきである。それが鍵である。たとえ聖書の中に疑うべくもない証拠を見つけたとしても、それによってあなたが完全にわたしの前に来られることにはならない。あなたはわたしの前ではなく、聖書の制約の中で生きているのである。聖書はあなたがわたしを知る助けにはならないし、わたしへのあなたの愛を深めることもできない。聖書は男の子が生まれると預言したが、人は神の働きを知らなかったため、その預言が誰に実現するかは誰にも分からなかった。そのため、パリサイ人はイエスに逆らうことになった。わたしの働きは人にとって有益であることを知っている者もいるが、それでも彼らはイエスとわたしがお互い両立しない二つのまったく別の存在であると信じ続けている。当時、イエスは恵みの時代において弟子たちに一連の説教しか語らなかった。たとえば実践のしかた、集い方、祈る際の求め方、他の人々の扱い方などである。イエスが実行した働きは恵みの時代の働きであり、弟子たちやイエスに従う人々がどのように実践すべきかについてしか釈義しなかった。恵みの時代の働きをただで、終わりの日の働きは何もしなかった。ヤーウェが律法の時代に旧約の律法を定めたとき、なぜその時恵みの時代の働きを行わなかったのか。なぜ恵みの時代の働きを前もって明らかにしなかったのか。そうすれば人が受け入れるための役に立ったのではないだろうか。ヤーウェは男の子が生まれて、指導者になると預言しただけで、恵みの時代の働きを前もって実行はしなかった。各時代の神の働きには明確な境界がある。神は現在の時代の働きだけを行い、次の段階の働きを前もって行うことは決してない。このようにしてのみ、神の各時代の代表的な働きは前面に引き出される。イエスは終わりの日のしるし、いかに忍耐するか、いかにして救われるか、いかに悔い改め、告白するか、また、いかに十字架を負い、苦しみに耐えるかについてしか語らず、終わりの日に人はどのように進入すべきか、どのように追求すれば神の心を満足させるかについては語らなかった。したがって、終わりの日の神の働きを聖書の中に捜し求めるのは誤った考えに基づく行為ではないだろうか。手に聖書を携えているだけでなにを見分けることができるのか。聖書の解釈者であれ説教者であれ、誰が今日の働きを予知することができるのか。

『言葉は肉において現れる』の「自己の観念で神を定義する人がどうして神の啓示を受けることができるのか」より

15. 聖書は人間の歴史の中で数千年にわたり存続し、人々は皆、聖書を神のように扱い、その結果終わりの日の人々は神を聖書と取り替えるほどだからである。これは神が真に嫌悪することである。ゆえに、神は、空き時間に聖書の内部事情と起源を明瞭に

説明しなければならなかった。そうしなければ、聖書は人々の心の中で依然として神の代わりとされ、人間は聖書の言葉に基づいて神の業を非難したり評価したりするからである。聖書の本質、構造、そして欠陥に関する神の説明は決して聖書の存在を否定するものでも、聖書を非難するものでも無い。むしろそれは、人々が聖書に対して正しい見方をし、聖書を崇拝するのを止め、迷わないように、合理的かつ適切な説明を示し、聖書の元来の像を復元し、聖書に関する人々の誤解を訂正するものである。人々は自分たちの聖書への盲目的な信仰が、神を信じ崇めることであると誤解し、聖書の真の背景や弱点を敢えて正面から見ようとしない。全ての人が聖書の純粋な知識を得た後、人々はそうした状況から躊躇無く離れ、堂々と神の新たな言葉を受け容れることができるであろう。これが、この数章における神の目的である。ここで神が人々に語ろうとする真理は、神の現在の働きや言葉の代替となることができる理論や事実は無いということ、そして神の地位の代替となるものは一切無いということである。聖書の罫を捨て去ることができないならば、人々は決して神の前に来ることはできないであろう。神の前に来ることを望むのであれば、まず自らの心から神の代替となり得るあらゆるものを払拭する必要がある。そうすれば、神は満足するであろう。ここで神は聖書を説明しているだけであるが、聖書以外にも人間が誤って真に崇拝している物事が多数あるということ、そして人間が崇拝しないものだけが真に神に由来するということを忘れてはならない。神は単に例として聖書を用い、人々に誤った道へ進まないように、神を信仰し神の言葉を受け容れる時に再び極端になって困惑に陥らないように注意を促しているのである。

『言葉は肉において現れる』第三部「諸教会を歩くキリストの言葉」の「序論」より

16. 今日、わたしはこのようにして聖書を分析しているが、これはわたしが聖書を憎んでいるからではないし、また、参考としての価値を否定するものでもない。わたしが聖書の本来の価値とそのなりたちを説明し、明確にしているのは、あなたが闇の中にとどまることのないようにである。人々は聖書について実に多くの解釈をしており、その多くは誤っているので、聖書をこのように読むのは、得るべきものを得ることを妨げるだけではなく、さらに重要なことに、わたしのしようとする働きの妨げとなる。これは未来の働きのために、はなはだしく邪魔なものとなり、有用さより欠点ばかりをもたらす。だから、わたしがあなたに教えていることは、単に聖書の本質とその内部事情である。わたしは聖書を読むなどと言っているのではないし。また、聖書がまったく無価値だと告げて歩けとも言っていない。ただ、聖書に関して正しい知識と見方をもつべきだということだ。あまり偏った見方をしないことだ。聖書は人間の書いた歴史書だが、これ

はまた、古代の聖人や預言者が神に仕えた原則とともに、近い時代の使徒たちが神に仕えた経験を記した文書でもある。これらはみな、そうした人々が実際に見て、知った事柄であり、この時代に真の道を求める人々に関する参考としては役立てることができる。だから、聖書を読めば、他の書物からは得られない多くのいのちの道について知ることができる。これらの道は、預言者や使徒たちがかつて経験した、聖霊の働きのいのちの道であり、その言葉の多くは貴く、人々の必要とするものを与えてくれる。だから、人々はみな聖書を読むことを好むのである。聖書にはまことに多くの事が隠されているから、人々の聖書の見方は偉大な宗教家の著作に対するものとは異なっている。聖書は古代と新しい時代にヤーウェやイエスに仕えた人々の経験と認識を集めた記録で、後の世代は、これにより多くの啓示、洞察、実践への道を学ぶことができた。聖書がどの偉大な宗教家たちの著作よりも高位にあるのは、彼らの著したものが聖書から引き出したものであり、彼らの経験はみな聖書から来ている、いずれも聖書を解説しているからである。そこで、人々は偉大な宗教家の著書から糧を得られるが、彼らはまだ聖書を崇める。聖書がじつに偉大で深遠に思われるからだ。聖書はパウロ書簡やペテロの書簡といった、いのちの言葉の書の一部を収めているし、また、人々はこれらの書から必要なものや助けを得ることができるものの、これらの書は時代遅れで、過去の時代に属するものである。どれほど優れていても、一つの時代にだけ通用するもので、永遠ではない。神の働きは常に進展しており、ただパウロやペテロの時代にとどまることはできないし、いつまでもイエスが十字架につけられた恵みの時代にとどまることもできない。だから、これらの書は恵みの時代にのみふさわしいものであって、終わりの日の神の国の時代にはふさわしくない。これらは恵みの時代の信者の必要を満たすものであって、神の国の時代の聖徒のためのものではない。どんなにすぐれたものであっても、それらは過去のものなのだ。これはヤーウェの創造の働きやイスラエルでの働きも同様だ。働きがどんなに偉大なものであっても、それは過去のものであって、それが廃れる時が来ることは決まっていた。神の働きもまた同じである。偉大だが、終わる時が来る。いつまでも創造の働きにとどまることはできないし、十字架刑の時代にとどまっていることもできない。十字架刑の働きがいかに説得力があり、サタンを打ち負かすことにおいてどれほど効果的であっても、結局、働きは働きであり、時代もまた時代なのである。働きはいつまでも同じ基礎の上にとどまれない。また、時代がけっして変わらずにあるということはいえぬ。創造があったのだから、終わりの日がなければならない。これは必然だ。だから、今日、新約のいのちの言葉、つまり使徒たちの書簡とそれに四福音書は歴史的な書となり、古い年鑑となった。古い年鑑がどうして人々を新たな時代に導ける

であろうか。年鑑がどれほど人々にいのちを与えることができたとしても、人々を十字架に導くことができたとしても、時代遅れなのではないか。価値がないのではないか。だから、盲目的にこれらの年鑑を信じるべきではないと言うのだ。ああしたものは古すぎて、あなたを新たな働きに至らせることができず、重荷になるだけだ。新たな働き、新たな進路に至らせることができないばかりか、古い宗教的な教会に入らせる。もしそうなると、神への信仰において退歩していることになるのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「聖書について (4)」より

17. わたしは人々の間で多くの働きをしてきた。わたしがその間に発した言葉は数多くある。これらの言葉は人間の救済のためで、人間がわたしと融和するようにと発したものである。しかし、わたしと融和する者は、地上ではほんの数名しか得ていない。だから、人間はわたしの言葉を重んじないとわたしは言う。人間はわたしと融和しないのだから。このように、わたしのしている働きは単に人間がわたしを崇めるようにするためだけではなく、もっと重要なことには、人間がわたしと融和するようにである。墮落した人々は、みなサタンの罠に囚われている。彼らは肉に生き、利己的な欲求をもって生きていて、彼らの中には、わたしと融和する者は、ただの一人もいない。わたしと融和すると言う者もいるが、みな漠然とした偶像を拝んでいる。彼らはわたしの名を聖いものとしているが、わたしに反する道を歩んでいる。そして、彼らの言葉は傲慢とうぬぼれに満ちている。心の底では、みなわたしに敵対しており、わたしと融和していないからである。毎日、彼らは聖書にわたしの痕跡を探し、適当に「都合の良い」句をみつめては、いつまでも読み続け、それを聖句として唱える。彼らはわたしと融和する方法を知らず、わたしに敵対するということが何を意味するかを知らず、単に闇雲に聖句を読んでいるだけである。彼らは見たことがなく、見ることもできない漠然とした神を聖書の中に閉じ込めて、暇な時に取り出して眺めている。彼らはわたしの存在を聖書の範囲内においてのみ信じている。そういう人々にとって、わたしは聖書と同じである。聖書がなければ、わたしはいない。わたしがいなければ、聖書はない。彼らはわたしの存在や行為を無視し、その代わりに聖書の一字一句に極端かつ特別の注意を注ぐ。そして、その多くは、聖書で預言されていない限り、わたしは自分がしたいことは何もしてはいけなさとさえ信じている。彼らはあまりにも聖書を重視し過ぎている。彼らは言葉と表現を大事にするあまり、聖書の語句を用いてわたしの発する一語一語を評価したり、わたしを批判するほどである、と言える。彼らの求めているのは、わたしとの融和の道ではなく、また、真理との融和の道でもなく、聖書にある言葉と融和する道なのであ

る。また、彼らは、聖書に合致しないものは、例外なく、わたしの働きではないと信じている。そうした人々はパリサイ人の従順な子孫なのではないか。ユダヤのパリサイ人は、モーセの律法に基づいてイエスを罪に定めた。彼らは当時のイエスとの融和を求めず、律法に文字通りに忠実に従うあまり、イエスが旧約の律法に従っておらず、またメシヤでもないという罪で、ついに無実のイエスを十字架につけたのである。彼らの本質は何であったのか。彼らは真理と融和する道を求めていなかったのではないか。彼らは聖書の一字一句にこだわり、わたしの心とわたしの働きの手順や方法には無関心でいた。彼らは真理を求めた人々ではなく、聖書の言葉に厳密に従った人々であった。彼らは神を信じたのではなく、聖書を信じていた。つまるところ、彼らは聖書の番犬であった。聖書の影響力を擁護するため、聖書の権威を維持するため、聖書の評判を守るため、彼らは慈悲深いイエスを十字架につけることまでした。彼らは、ただ単に聖書を守るため、人々の心の中にある聖書の一字一句の地位を維持するために、そうしたのである。だから、彼らは未来と罪のための捧げ物を見捨て、聖書の教義に従わなかったイエスを罪に定めて殺したのである。彼らは聖書の一字一句に隷属していたのではないか。

では、今日の人々はどうだろう。キリストは真理を解き放つために来た。しかし、人々は天に入って恵みを受けるために、キリストを人間の間から追い出したいくらいなのである。彼らは聖書の権益を守るために真理の訪れを完全に否定し、聖書の永続を確実にするため、再び肉となったキリストをもう一度十字架に釘付けにしたいくらいなのである。あれほど悪意に満ちた心をもち、わたしに対してあれほど敵意のある本性をもつ人間が、どうしてわたしの救済を受けられるのか。わたしは人間の中に生きているが、人間はわたしの存在を知らない。わたしが人間に光を照らしても、人間はわたしの存在を知らずにいる。わたしが怒りを人間の上に放つと、人間はますます強くわたしの存在を否定する。人間は言葉、聖書との融和を求めるが、真理と融和しようとわたしの前に来る者はただの一人もいない。人間は天のわたしを見上げ、天にいるわたしについて、とりわけの関心を向けるが、肉におけるわたしを心にかける者は誰一人いない。人間の間で生きるわたしがあまりに平凡だからである。聖書の言葉に合致するものだけを求める人々、漠然とした神に合致することだけを求める人々は、わたしには哀れに見える。それは、その人たちが崇めているのは死んだ言葉と、計り知れない宝を与えられる神だからである。その人々が崇めているのは、人間の思いのままになる神なのだが、それは存在しない。では、そうした人々はわたしから何を得られるのか。人間はただ言いようもなく低劣である。わたしに敵対する人々、わたしに限りない要求をする人々、真理を

愛さない人々、わたしに反抗心をもつ人々——どうしてそんな人々がわたしと融和できるのか。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと融和する道を探せ」より

18. 神自身がいのちであり、真理であり、神のいのちと真理は共存している。真理を得られない者がいのちを得ることは決してない。真理による導き、支え、施しがなければ、あなたは文字と教義、そしてさらには死しか得られない。神のいのちは常に存在し、神の真理といのちは共存する。真理の源を見つけることができないなら、いのちの栄養は得られないだろう。いのちの施しを得られないなら、もちろん真理は全く得られないので、想像と観念以外には、あなたの肉全体はただの肉、臭い肉でしかない。活字による言葉はいのちとはみなされず、歴史の記録は真理として敬われることはなく、過去の教義は神が現在話している言葉の記録とはみなされない。神が地上に来て人の間に生きているときに告げたものだけが真理であり、いのちであり、神の心であり、神が現在働くやり方である。昔神が語った言葉の記録を現代に適用しようとするのなら、あなたは考古学者であり、あなたにぴったりの表現は歴史的遺産の専門家ということになる。なぜなら、あなたは常に神が過ぎ去った時にした働きの痕跡を信じており、神が以前人の間で働いた時に残した神の影しか信じておらず、神が昔自分を信じる者に与えた道しか信じていないからである。あなたは、神の今日の働きの方向を信じておらず、今ある神の栄光に満ちた顔を信じておらず、現在神が表している真理の道を信じていない。それゆえに、あなたは間違いなく完全に現実から遊離した空想家である。もし今、あなたがなご人にいのちをもたらすことのできない言葉に固執するなら、あなたは望みのない一片の枯れ木<sup>(4)</sup>だ。あなたは保守的すぎで、あまりに強情で、理性がなさすぎるからだ。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

19. 終わりの日のキリストはいのちをもたらし、変わることなく永遠に続く真理の道をもたらす。この真理を通して人はいのちを得ることができ、この真理を通してのみ、人が神を知り神に良しと認めてもらうことができる。あなたが終わりの日のキリストが与えるいのちの道を求めないのなら、あなたは決してイエスに良しと認めてもらうことはできず、天の国の門をくぐる資格を得ることはない。なぜなら、あなたは歴史の操り人形であり歴史に囚われた人だからだ。規則や文字に支配され、歴史に束縛される者は、決していのちを得ることはなく、永遠のいのちの道を得ることはない。なぜなら、彼らが持っているのは、玉座から流れるいのちの水ではなく、彼らが何千年もしがみつ



いてきた汚水でしかないからだ。いのちの水を与えられない者は永遠に死体であり、サタンのおもちゃであり、地獄の子である。そのような者がどうして神に会うことができるのか。あなたが過去にしがみつき、足踏みをしながら現状維持しようとし、現状を変え歴史を棄てようとししないなら、あなたは神に常に反することになるのではないか。神の働きの歩みは、押し寄せる波や轟く雷鳴のごとく広大で力強い。それでも、あなたは自分の愚に固執して何もしないまま、座して自滅を待っている。このままで、あなたが小羊の足跡に従う者だと見なされることはあろうか。あなたが神として固執するものが、常にあたらしく古びない神だと言えようか。あなたの黄ばんだ本の言葉があなたを新しい時代に運んでくれることがあろうか。神の働きの歩みをたどれるよう導いてくれようか。そして、それらがあなたを天国に引き上げられるだろうか。あなたの手につかんでいる物は、つかの間の慰めを与えられる文字でしかなく、いのちを与えられる真理ではない。あなたが読む言葉は、あなたの舌を肥やせるだけで、あなたが人の人生を知るうえで助けとなる知恵の言葉ではなく、ましてやあなたを完全にするように導いてくれる道などではない。この食い違いを見て、あなたはよく考えてみようとは思わないだろうか。そこに含まれる奥義を理解させてはくれないだろうか。あなたは、自分で自分を天国に引き上げ、神に会わせることができるのか。神が来なくても、あなたは自らを天国に引き上げ、神と共に家族の幸福を楽しむことができるのか。あなたは未だに夢を見ているのか。それなら、わたしは勧める。夢を見るのを止めよ。そして誰が今働いているのかを見よ。誰が今、終わりの日に人を救う働きをしているのかを見よ。そうしなければ、あなたは決して真理を得ることはなく、決していのちを得ることもない。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

## 脚注

- a. 「一片の枯れ木」は「救いようがない」という意味の中国の諺。

## V 神の働きの各段階と神の御名の関係についての代表的な言葉

1. それぞれの時代で神自身によってなされる働きは神の真の性質の表現を含んでおり、神の名前と神の行なう働きは時代とともに変わり、それらはすべて新しい。律法の時代に、人類を導く働きはヤーウェの名によってなされた。そして第一段階の働きは地上で実行された。この段階の働きは神殿と祭壇を建てることで、律法を用いてイスラエルの人々を導き、彼らの間で働くことであった。イスラエルの人々を導くことによって、神は地上での働きの拠点を築いた。この拠点から、神はその働きをイスラエルを越えて拡張した。すなわち、イスラエルから開始して、神はその働きを外に向けて拡張した。それにより、後の世代が、次第にヤーウェが神であること、ヤーウェが天と地とすべてのものを創造し、すべての被造物を造ったことを知るようになった。神はイスラエルの人々を通してその働きを広めた。イスラエルの地は地上におけるヤーウェの働きの最初の聖なる地で、地上における神の最も初期の働きは、イスラエル全土でなされた。それが律法の時代の働きであった。恵みの時代の働きでは、イエスが人を救う神であった。神がもつもの、神であるものは恵み、愛、憐れみ、慎み、忍耐、謙遜、思いやり、寛容であり、イエスが行った働きの多くは人の贖いであった。神の性質に関して言えば、それは憐れみと愛であった。そして神は憐れみ深くいつくしみ深かったので、人間のために十字架に釘づけにされなければならなかった。そうすることで神は自身の全てを犠牲にするほど人類を自身のように愛していることを示した。サタンは「人間を愛しているのだから、極限まで人間を愛さなければならない。人間を十字架から、罪から解放するためにあなたは十字架に釘打たれなければならない。人類すべての代わりにあなた自身を捧げてもらおう」と言った。サタンは以下のようにもちかけた。「あなたは愛にあふれ憐れみ深い神なのだから、極限まで人間を愛さなければならない。十字架にあなた自身を捧げなければならない。」イエスは「人間のためである限り、わたしのすべてを喜んで犠牲にしよう」と言った。その後イエスは躊躇することなく十字架にかけられ、人類全体を贖った。恵みの時代には、神の名はイエスであり、それは神が人類を救う神であり、神は憐れみ深く、いつくしみ深いという意味である。神は人と共にいた。神の愛、神の憐れみ、そして神の救いはひとりひとりに伴っていた。もし人がイエスの名を受け入れ、神の存在を受け入れるなら、人は平安と喜びを得ることができ、神の祝福、いくつもの大いなる恵みを受け、救いを受け取ることができる。イエスの十字架刑を通

して、イエスに従うすべての人たちは救いを受け、その罪が赦された。恵みの時代には、神の名はイエスであった。すなわち、恵みの時代の働きはおもにイエスの名の下でなされた。恵みの時代には、神はイエスと呼ばれた。イエスは旧約聖書を越えて新しい働きを行い、イエスの働きは十字架刑で終わり、それがイエスの働きのすべてであった。したがって、律法の時代ではヤーウェが神の名であり、恵みの時代ではイエスの名が神を表した。終わりの日には、神の名は全能なる神——全能なるものであり、神はその力で人を導き、人を征服し、人を自分のものとし、最終的にはその時代を終わらせる。どの時代でも、神の働きのどの段階でも、神の性質は明らかである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

2. 「ヤーウェ」はわたしがイスラエルで働きを行っている間に用いた名前であり、人を憐れみ、人をののしり、人の生活を導くことのできる、イスラエル人（神に選ばれた人々）の神という意味である。それは偉大な力を所有し、英知に満ちた神という意味である。「イエス」はインマヌエルであり、愛に満ち、慈悲心に満ち、人の罪を贖う捧げものを意味する。イエスは恵みの時代の働きを行い、恵みの時代を表すので、経営（救いの）計画の一部分しか表すことはできない。すなわち、ヤーウェだけがイスラエルの選ばれた人々の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、モーセの神、イスラエルのすべての人々の神である。そこで現代、すべてのイスラエル人は、ユダヤの部族は別として、ヤーウェを崇拝している。彼らは祭壇でヤーウェに捧げものをし、神殿で祭司の祭服を着て神に仕える。彼らが望むのは、ヤーウェの再来である。イエスだけが人類の救い主である。イエスは罪から人類を救った捧げものである。つまり、イエスの名前は恵みの時代から来ており、恵みの時代の贖罪の働きのために存在した。イエスの名前は恵みの時代の人々が生き返り、救われるために存在したのであり、全人類の贖罪のための特別な名前である。そこで、イエスという名前は贖罪の働きを表し、恵みの時代を意味する。ヤーウェの名前は律法の下に生きたイスラエルの人々のための特別な名前である。各時代、各段階の働きにおいて、わたしの名前は根拠のないものではなく、代表的意味を持っている。それぞれの名前は一つの時代を表す。「ヤーウェ」は律法の時代を表し、イスラエルの人々が崇拝した神の敬称である。「イエス」は恵みの時代を表し、恵みの時代に救われたすべての人々の神の名前である。

『言葉は肉において現れる』の「救い主はすでに『白い雲』に乗って戻って来た」より

3. イエスがその働きをするために来たとき、それは聖霊の指示によるものであった。イエスは聖霊が望むことを行い、それは旧約聖書の律法の時代でも、ヤーウェの働き

に従うものでもなかった。イエスが来て行なう働きはヤーウェの律法やヤーウェの戒めに従うことではなかったが、それらの源泉は同じであった。イエスが行った働きはイエスの名を表し、恵みの時代を代表した。ヤーウェによってなされた働きはヤーウェを表し、律法の時代を代表した。それらの働きはひとつの霊による二つの異なる時代における働きであった。イエスが行った働きは恵みの時代だけを代表することができ、ヤーウェが行った働きは旧約聖書の律法の時代だけを代表することができた。ヤーウェはイスラエルとエジプトの民を導き、そしてイスラエルを越えるあらゆる国々を導いただけであった。…それらは二つの違った名前と呼ばれたが、二つの段階の働きはひとつの霊によって行なわれ、第二の働きは第一の働きの続きであった。名前が違い、働きの内容も違っていたように、時代も違った。ヤーウェが来たときは、それはヤーウェの時代で、イエスが来たときは、それはイエスの時代であった。だから神が来るときはそのたびに神はひとつの名で呼ばれ、神はひとつの時代を表し、新しい道を開く。それぞれの新しい道で神は新しい名前を持ち、それは神は常に新しく、決して古くないということと、神の働きは常に前進していることを示すのである。歴史は常に前進しており、神の働きは常に前進している。神の六千年の経営計画が終わりに達するためには、前進し続けなければならない。毎日、神は新しい働きを行なわなければならない、毎年、神は新しい働きを行なわなければならない。神は新しい道を開き、新しい時代を始め、新しくさらに偉大な働きを始め、そして新しい名前と新しい働きをもたらさなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（3）」より

4. それぞれの時代で、神は新しい働きを行い、新しい名前と呼ばれる。どうして神が異なった時代に同じ働きをすることができるのか。どうして神が古いものにしがみついていることがありえようか。イエスの名は贖いの働きのために使われたが、それならば終わりの日にイエスが再臨するとき依然として同じ名前と呼ばれるであろうか。イエスはまだ贖いの働きをするのであろうか。なぜヤーウェとイエスはひとつであるのに、違う時代には異なる名前と呼ばれるのか。それは働きの時代が違うからではないのか。ひとつの名前で神全体を現わすことができるのだろうか。この様に、神は違う時代には異なる名前と呼ばれなければならない。そして時代を変え時代を現わす名前を用いなければならない。なぜなら、ひとつの名前だけで神を完全に表すことはできないからである。そしてそれぞれの名前はある時代の神の性質を表すだけで、神の働きを表すために必要である。よって、神は時代全体を表すために、どんな名前であれ神の性質に合う名前を選ぶことができる。

5. もしどの段階においても神の働きが常に同じで、神がいつも同じ名前と呼ばれるなら、人はどのように神を知るのだろうか。神はヤーウェと呼ばれなければならない、ヤーウェと呼ばれる神以外に、他の名前と呼ばれるものは神ではない。あるいは神はイエスとだけ呼ばれ、神がイエス以外の他の名で呼ばれることはない。イエス以外では、ヤーウェは神ではなく、全能神も神ではない。人は神が全能であると信じているが、神は人とともにいる神である。神は人とともにいるから、イエスと呼ばれなければならない。こうすることは教義に従い、神をある範囲に束縛することである。神がそれぞれの時代に行なう働き、神が呼ばれる名前、神が持つ姿、今日までの神の働きのそれぞれの段階などは、ひとつの規律に従うことはないし、いかなる束縛にさらされることもない。神はヤーウェであり、しかしイエスでもあり、メシヤ、全能神でもある。神の働きは徐々に変わることができ、それにあわせて神の名にも変化がある。どのひとつの名も神を完全に表すことはできず、神が呼ばれるすべての名が神を表すことができ、神がそれぞれの時代に行なう働きが神の性質を表している。

6. 「神は私たちと共におられる」というイエスの名は神の性質の全体を表すことができるであろうか。それは神をはっきりと表現することができるであろうか。もし人が神はイエスとだけ呼ばれ、神はその性質を変えることができないので、他の名前を持つことはないと言うなら、そのような言葉は神への冒瀆である。あなたがたは、「神は共におられる」というイエスの名が神の全体を表すことができると信じてるのだろうか。神は多くの名前と呼ばれることができるが、それらの多くの名前の中に、神がもっているすべてを要約できる名前はひとつとしてなく、神を完全に表すことができる名前はひとつもない。そして神は多くの名前を持っているが、これらの多くの名が神の性質を余すところ無く明確に表現することはできない。というのは神の性質はあまりにも豊かで、人の認識をはるかに越えているからである。人間の言語は、神を余すところ無く要約することができない。神の性質について人間が知っていることすべてを要約するには、人間には限られた語彙しかない。偉大な、りっぱな、驚くべき、計り知れない、至高の、聖なる、義なる、知恵に満ちたなど、言葉が多すぎる。このように限られた語彙では、人間が神の性質に関して目の当たりにしたことのほんの少しでも記述することは不可能である。もっと最近になって、多くの人々が心の中の熱情をもっと上手に記述しようと、さらに言葉を追加した。神は偉大すぎる。神は神聖すぎる。神は美しすぎる。今日

、このように言うことはその頂点に達しているが、それでも人間は神を明確に表現できずにいる。だから、人間にとって神には多くの名前があるが、神には名前がない。これは神の存在はあまりに豊富で、人間の言語は不十分すぎるからである。ひとつの特定の言葉あるいは名前では神のすべてを表すにはあまりにも不十分である。では神はひとつの決まった名前を持つことができるだろうか。神はあまりにも偉大で聖であるのに、なぜ神がそれぞれの新しい時代に名前を変えてはいけないのか。それだから、神が自ら働きを行なうそれぞれの時代に、神が行なう働きを要約するその時代に合った名前を用いるのである。神はその時代における神の性質を表すために、その時代の意義を反映する特定の名前を用いる。神は自身の性質を表現するために人間の言葉を用いる。それでも、霊的な体験をし神をじかに見たことのある多くの人々が、ひとつの特定の名前が神のすべてを表現することはできないといまだに感じている。これはなんと残念なことであろうか。それで人間は神を名前で呼ぶことはなく、ただ「神」と呼ぶのである。人間の心は愛であふれているようでありながら、それはまた矛盾に悩まされているようでもある。人間は神をいかに説明するべきかが分からないからである。神であるものは豊かすぎて、それを表現する方法などどうしても存在しないのである。神の性質を要約できるひとつの名前はなく、神がもつもの、神であるもののすべてを表現できるひとつの名前もないのである。もしも誰かがわたしに「正確には何という名前を使いますか」と尋ねるならば、こう言うであろう。「神は神である。」これこそが神にとって最良の名前ではないのか。神の性質の最高の要約ではないのか。神の名を求めてなぜそんなに骨をおるのか。名前のことで寝食を忘れて、なぜそこまで熱心に考えるのか。神がヤーウェ、イエス、メシヤと呼ばれない日がやって来るだろう——神はただ創造主と呼ばれるであろう。その時、神が地上で呼ばれたすべての名前は終わりを迎える。というのは神の地上での働きは終わり、その後神は名前を持たなくなるからである。すべての物が創造主の支配下に入るときに、何故神を適切ではあるが不完全な名前で呼ぶのか。今も神の名を求めているのか。未だに神はヤーウェとしか呼ばれないと敢えて言うのであろうか。未だに神はイエスとしか呼ばれないと敢えて言うのであろうか。神を冒瀆する罪を負うことができるのか。神は本来どんな名前も持たなかったということを知るべきである。神にはすべき働きがあり、人類を経営しなければならなかったので、一、二の、あるいは多くの名前を持っただけであった。どのような名で呼ばれるにしても、それは神自身が自由に選んだのではないだろうか。神はそれを決めるのに被造物を必要とするだろうか。神が呼ばれる名前は人が理解できること、人の言葉にそったものであるが、その名前は人によって要約されることはできない。ただ天には神がいて、それは神と呼ばれ

、それは偉大な力を持った神であり、あまりにも知恵があり、あまりにも崇められ、あまりにも素晴らしく、あまりにも神秘的で、あまりにも全能で、そしてそれ以上言うことはない。それがあなたが知っていることのすべてである。このように、イエスの名だけで神を表すことができるだろうか。終わりの日が来ると、神の働きは依然として神が行なうが、時代が異なるので神の名は変わらなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（３）」より

7. 神は不変であるという人たちがいる。それは正しいが、それは神の性質と本質の不変性に言及している。神の名前と働きの変化は、神の本質が変わったことを証明しているのではない。言い換えるなら、神は常に神であり、これは決して変わることはない。神の働きは常に同じだと言うのなら、神はその六千年の経営（救いの）計画を終えることはできるであろうか。あなたは神は永久に不変であることだけ知っているが、神は常に新しく決して古くないことを知っているのか。もし神の働きが決して変わらないなら、神は人類を現代まで連れてくることができたであろうか。もし神が不変なら、神がすでに二つの時代の働きをしたのはなぜであろうか。神の働きは常に前進している。だから神の性質は人間に次第に現わされる。そして現わされるのは神の本来の性質である。初めには、神の性質は人には隠されていて、神は決して自身の性質を人に公然と現したことはなく、人は神について認識がなかった。だから神は働きを用いて自身の性質を徐々に人に現わした。しかし、これは神の性質がそれぞれの時代に変化するという意味ではない。神の心が常に変わるので、神の性質が絶えず変わるということではない。むしろ、神の働きが異なった時代で実行されるため、神の本来の性質のすべてが徐々に人に現わされ、人は神を知ることができるのである。しかし、これは神がもともと特有の性質を持たず、時代と共に徐々に変わっていったという証明などではない——そのような理解は間違いである。時代の移り変わりに応じて、神は人にその本来の特有な性質、神であることを現わす。ひとつの時代の働きで神の性質の全体を表現することはできない。だから「神は常に新しく決して古くない」という言葉は神の働きに関してであり、「神は不変である」という言葉は神が本来持っているもの、そして神の在り方に関してである。いずれにせよ、六千年の働きを一点で定義することはできないし、単なる静的な言葉で描くこともできない。そのようなことは人間の愚かさである。神は人が想像するように単純ではないし、神の働きは一時代には立ち止まってははいられない。たとえば、ヤーウェは神の名前を常に表すわけではない。神はイエスの名によっても働くことができ、これはいかに神の働きが常に前進しているかという象徴である。

神は常に神であり、決してサタンになることはない。サタンは常にサタンであり、決して神になることはない。神の知恵、神の素晴らしさ、神の義、そして神の威厳は決して変わることはない。神の本質、神がもつものと神であるものは決して変わることはない。しかし神の働きは常に前進しており、常に深くなっている。神は常に新しく決して古くないからである。それぞれの時代に、神は新しい名前を名乗り、それぞれの時代に神は新しい働きを行い、それぞれの時代に神は被造物に神の新しい心と新しい性質を見せる。もし人々が新しい時代に、神の新しい性質の表れを見ないならば、人々は永遠に神を十字架に釘付けにするのではないであろうか。そうすることで神を定義するのではないであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きのビジョン（3）」より

8. 人が終わりの日に救い主イエスが到来することをまだ望み、ユダヤの地にいたときの姿で到来することをまだ期待するなら、6000年の経営（救いの）計画全体は贖罪の時代に停止し、それ以上進展することはできないだろう。そのうえ、終わりの日は決して来ることはなく、時代にピリオドが打たれることはないだろう。救い主イエスは人類の贖罪と救済のためだけにあるからである。わたしは恵みの時代のすべての罪人のためにイエスの名を名乗ったのであり、わたしが人類全体を終らせるのはこの名においてではない。ヤーウェ、イエス、メシアはすべてわたしの霊を表すが、これらの名前は単にわたしの経営（救いの）計画の異なる時代を示すものであり、わたしの全体を表すものではない。地上の人々がわたしを呼ぶ名前のどれも、わたしの性質全体、わたしであるすべてを明確に示すことはできない。それらは単に異なる時代にわたしが呼ばれる異なる名前にすぎない。だから最後の時代——終わりの日の時代——が来た時、わたしの名前はまた変わるのである。わたしはヤーウェやイエスとは呼ばれないし、ましてやメシアとは呼ばれないが、力ある全能の神自身と呼ばれ、この名前の下でわたしは時代全体を終らせるだろう。わたしはかつてヤーウェとして知られていた。わたしはメシアとも呼ばれ、また、人々はかつてわたしを救い主イエスとも呼んだ。わたしを愛し、尊敬したからである。しかし、今日わたしは人々が過去に知っていたヤーウェでもイエスでもない。わたしは終わりの日に戻ってきた神、時代を終らせる神である。わたしは、わたしの全性質を余すところなく顕し、権威、名誉、栄光に満ちて地の果てから立ち上がる神自身である。人々は一度もわたしと関わったことがなく、わたしを知ったことがなく、ずっとわたしの性質に無知であった。天地創造から今日に至るまで、わたしを見たことがある者はひとりとしていなかった。これは終りの日に人の前に現れるが、人々の



間に隠れている神なのである。神は真実で現実的に、照りつける太陽や燃え立つ火のように、力に満たされ、権威にあふれて人々のあいだに存在する。わたしの言葉によって裁きを受けない人や物は一人として、一つとしてない。燃える火によって浄化されない人や物は一人として、一つとしてない。最終的には、あらゆる諸国はわたしの言葉のために祝福され、わたしの言葉のために粉々に砕かれもする。このようにして、終わりの日にすべての人は、わたしが戻ってきた救い主であり、人類のすべてを征服する全能神であり、かつては人のための罪の捧げものであったが、終わりの日にはすべてを焼き尽くす太陽の炎にもなり、またすべてのものを露わにする義の太陽でもあることを理解するだろう。それが終わりの日のわたしの働きである。わたしはこの名前を名乗り、この性質を持ち、すべての人がわたしが義の神であり、照りつける太陽、燃え立つ火であることが理解できるようにする。そうするのはすべての人が唯一の真の神であるわたしを崇め、わたしの本当の顔を見ることができるようになるのである。わたしはイスラエル人たちの神であるだけでなく、贖い主であるだけでなく、天、地、海の至る所にあるすべての創造物の神である。

『言葉は肉において現れる』の「救い主はすでに『白い雲』に乗って戻って来た」より

(一篇の御言葉)

### 三位一体は存在するのか

イエスの受肉という真実が明るみに出た後、人は、天の父がいるだけでなく、子とさらには霊がいるということを信じた。これが、天には父と子と聖霊のすべてを一つにした三位一体の神がいるという、人の抱いている従来の観念である。すべての人間が次のような観念を持っている。神は一人だが、三つの部分からなっている。従来の考えに深くはまり込んだ人々は、それが父、子、聖霊と考える。それら三つの部分を一つにしたものだけが神のすべてなのである。聖なる父がいなければ、神は完全ではない。同様に、子、または聖霊がいなければ、やはり神は完全ではない。人々の観念においては、父だけでも、子だけでも神と見なすことはできないと考えられている。父と子と聖霊が合わさって初めて神そのものと見なすことができる。今、すべての宗教信者は、あなたたちの中のありとあらゆる信奉者も含めて、この信念を抱いている。だが、この信念が正しいかどうかに関しては、誰も説明できない。なぜならあなたたちは神そのものに関する事柄についてはいつも意識が曖昧だからである。これらは観念であるが、あなたたちはそれが正しいか、間違っているかわからない。それはあなたたちが宗教的観念にあまりにも強い影響を受けてしまっているからである。あなたたちはこれらの従来からの

宗教的観念をあまりにも深く受け入れており、この毒はあなたたちの内部にあまりにも深く浸透している。従って、この件に関してもあなたたちはこの有害な影響に屈している。なぜなら、三位一体は絶対に存在しないからである。すなわち、父と子と聖霊の三位一体など絶対に存在しない。これらはすべて人の従来からの見解、人の誤った信念である。人は何世紀にもわたりずっと、その心の中の観念が生み出し、人によってねつ造され、人がこれまで見たことのない三位一体の存在を信じてきた。長年にわたり、たくさんの霊的偉人たちが三位一体の「真の意味」を説明してきたが、三位一体は三つのはっきり区別できる同本質の位格であるというような説明は曖昧模糊としたもので、人々はみな神の「構成」のせいで混乱している。これまで完全な説明ができた偉人は一人もいない。ほとんどの説明は論法の見地からすれば、また理論上では合格レベルに達しているが、その意味を十分明確に理解している人は一人としていない。これは、人が心の中で抱いている偉大な三位一体など存在しないからである。誰も神の本当の風貌を見たことがないし、幸運にも天に昇って神のすみかを訪問し、神がいる場所にどのようなものがあるのか調べたり、「神の家」には何万世代、あるいは何億万世代あるのかを正確に決めたり、あるいは神の本来の構成はいくつの部分から成り立つのかを調査したりした人はいないからである。主に調べる必要があるのは、父と子、ならびに聖霊の年齢、各位格の外見、正確にどういうわけで分かれたのか、どういうわけで一つになるのか、である。残念ながら、これまでの多くの年月のなかで、一人としてこれらの事柄の真実を決定できた人はいない。みな推測しているにすぎない。三位一体に関心のあるすべての熱心で敬虔な宗教信者に事柄の真実について報告するため、天まで昇って見学し、全人類のために「調査報告書」を携えて戻ってきた者は一人としていないからである。もちろん、そのような観念を形成した責めを人に負わせることはできない。それなら、なぜ父なるヤーウェは人類を創造した時、子のイエスを同行させなかったのだろうか。最初にすべてがヤーウェの名で通っていたら、もっとよかっただろう。責めを負わせなければならなかったら、天地創造のときに子や聖霊を呼び寄せず、単独で働きを実行したヤーウェ神の一時的過失のせいにしよう。もし彼らが皆で同時に働いていたら、彼らは一つになっていたのではなかっただろうか。最初から最後までヤーウェの名だけしかなく、恵みの時代からはイエスの名がなかったら、または、イエスがその時もまだヤーウェと呼ばれていたら、神は人類によってこのように分割される苦しみをせずにすんだのではないだろうか。確かに、このすべてに対してヤーウェを遺憾に思うことはできない。責めを負わせなければならなかったら、聖霊に負わせよう。聖霊は何千年もの間、その働きをヤーウェ、イエス、さらには聖霊の名で続行し、一体誰が神なのかわからな

くなってしまうほどに人を当惑させ、混乱させてしまった。聖霊そのものが形や姿なしに、さらにはイエスのような名前なしに働いていたら、そして人が聖霊に触れることも、見ることもできず、ただ雷鳴の音だけを聞いていたら、この種の働きは人類にもっと多くの恩恵をもたらさなかつただろうか。では今何ができるだろう。人の観念は山のようが高く、海のように広く蓄積したので、今日の神はもはやそれらに耐えることができず、まったく途方に暮れている。昔、ヤーウェとイエス、その間にいる聖霊だけであった時でも、人はすでにどのように対処すべきか途方にくれていたが、今は全能者が加わり、やはり神の一部だと言われてさえいる。彼がだれであるのか、どのくらいの年月の間、三位一体のどの位格と混じり合っていたのか、あるいはその中に隠れていたのかなど、誰が知っていようか。どうして人がこんなことに耐えられるだろうか。三位一体だけで人が一生かけて説明するのに十分であったが、今では「四位格の一つの神」がいる。これはどう説明ができるであろうか。あなたは説明できるのか。兄弟姉妹よ。どうしてあなたたちは今日までこのような神の存在を信じてきたのか。わたしはあなたたちに脱帽する。三位一体ですら担うのにもう十分であったのに、今あなたたちは四位格からなるこの一つの神に揺るぎない信仰を抱き続けている。あなたたちは立ち去るよう促されたのに拒絶している。とてもありえないことだ。あなたたちは本当に素晴らしい。実際四つの神の存在を信じることもできて、それをなんとも思わない。あなたたちはこれを奇跡だと思わないのだろうか。わたしは、あなたたちがこのような偉大な奇跡を引き起こせるとは知り得なかった。実のところ、三位一体はこの宇宙のどこにも存在しないことを話しておこう。神には父も子もおらず、ましてや父と子が共同で使う道具、つまり聖霊の概念などない。このすべては最大の誤った考えであり、この世には断じて存在しない。だが、そのような誤った考えにさえ発端があり、全く根拠がないわけではない。なぜならあなたたちの心はそれほど単純ではないし、あなたたちの考えには理性がないわけではないからである。むしろ、それらの考えはかなり適切で、独創的であるので、どのサタンに対してでも動じない。残念なのは、これらの考えがすべて誤った考えであり、断じて存在しないことである。あなたたちは本当の真実をまったく見たことがない。あなたたちは単に推測し、観念を作り、次に、欺いて他の人々の信用を得るため、また機知や理性のない極めて愚かな人々を支配するため、そのすべてを物語に作り上げ、人々にあなたたちの偉大で、名高い「専門家の教え」を信じさせようとしている。これは真理だろうか。これは人が受けるべきいのちの道なのだろうか。すべては馬鹿げている。一語も適切ではない。この長い年月を通してずっと、神はこのようにあなたたちによって分けられてきて、各世代とともにますます細かく分けられ、一つの神が公然

と三つの神に分けられるまでに至った。そして今、人が神を一つに再結合するのはまったく不可能である。神をあまりにも細かく分けすぎたからである。手遅れにならないうちにわたしの迅速な働きがなければ、あなたたちがどのくらい長く厚かましくもこのようなことを続けるかはわからない。このように神を分け続けるなら、どうして神はあなたたちの神でいられようか。あなたたちはまだ神を認識できるであろうか。あなたたちはまだ神のもとに戻るつもりなのか。もしわたしが少しでも遅く到着していたら、あなたたちは「父と子」、ヤーウェとイエスをイスラエルに送り返し、あなたたち自身が神の一部であると主張していたことだろう。幸いにも、今は終わりの日である。とうとう、わたしが長いこと待っていたこの日が来て、この段階の働きを自分の手で実行してはじめて、あなたたちによる神そのものの分割が停止した。これがなかったら、あなたたちはエスカレートして、あなたたちの中のサタンをすべて祭壇上に載せて崇拜さえしていただろう。これがあなたたちの策略である。あなたたちが神を分ける手段である。あなたたちは今そのようにし続けるつもりなのか。あなたたちに尋ねたい。神は幾つあるのか。どの神があなたたちに救済をもたらすのか。あなたたちがいつも祈る対象は最初の神か、二番目なのか、それとも三番目なのか。そのなかでどの神を常に信じているのか。父だろうか。それとも子だろうか。あるいは霊だろうか。あなたが信じるのはいずれなのか、わたしに教えて欲しい。あなたはあらゆる言葉をもって神を信じていると言うが、あなたたちが実のところ信じているのはあなたたち自身の知力である。あなたたちは断じて心の中に神を持っていない。しかし頭の中にはそのような「三位一体」がいくつもあるのだ。あなたたちはそう思わないだろうか。

三つの段階の働きがこの三位一体の概念に従って評価されるならば、それぞれが行う働きは同じではないので、三つの神がいなければならない。あなたたちの中の誰かが三位一体は実際存在すると言うならば、この三位格で一つの神とは一体何か説明してみたまえ。聖なる父とは何か。子とは何か。聖霊とは何か。ヤーウェは聖なる父なのだろうか。イエスは子なのだろうか。それでは聖霊についてはどうか。父は霊ではないのだろうか。子の本質も霊ではないのだろうか。イエスの働きは聖霊の働きではなかったのだろうか。当時のヤーウェの働きはイエスの働きと同じ霊によって行なわれたのではなかったのだろうか。神はいくつの霊を持つことができるのだろうか。あなたの説明によると、父、子、聖霊の三位格は一つである。もしそうなら、三つの霊がいることになるが、霊が三ついるということは神が三ついることを意味する。となると唯一の真の神はいないことになる。こんな神がどうして神の本来備え持つ本質を持つことができるだろう

。神は一つであることを受け入れるならば、神はどうして子を持ち、父であることができるのか。これらはすべて観念にすぎないのではないか。神は唯一で、この神の中には唯一の位格しかなく、神の霊は唯一である。聖書に「唯一の聖霊、唯一の神のみがいる」と書かれている通りである。あなたの言う父と子が存在するかどうかにかかわらず、結局は唯一の神のみがあり、あなたたちが信じる父、子、聖霊の本質は聖霊の本質である。言い換えれば、神は一つの霊であるが、すべての上に立つことができるのはもちろん、肉体になり、人々の中で暮らすこともできる。神の霊はすべてを含んでおり、どこにでも存在する。神は同時に肉体の形になり、宇宙中に存在することができる。すべての人々が神は唯一の真の神であると言うので、神は一つだけで、誰も意のままに分けることはできない。神は唯一の霊で、唯一の位格である。そしてそれが神の霊である。あなたが言うように、それが父、子、聖霊であるならば、三つの神ではないのか。聖霊は一つの事柄であり、子は別の事柄、さらに父も別の事柄である。彼らは本質の異なる、違った位格であるのだから、どうしてそれぞれが唯一神の一部分でありえようか。聖霊は霊である。これは人にとって理解しやすい。もしそうなら、父はさらにいっそう霊である。父は地上に降臨したことも、肉体になったこともない。父は人の心の中でヤーウェ神であり、確かに霊でもある。では父と聖霊の関係は何か。それは父と子の関係なのだろうか。それとも聖霊と父の霊の関係なのだろうか。各霊の本質は同じなのだろうか。それとも聖霊は父の道具なのだろうか。これはどうしたら説明できるのだろうか。それなら子と聖霊の関係は何なのだろうか。それは二つの霊の関係なのだろうか。それとも人と霊の関係なのだろうか。これらはすべて説明のできない事柄である。彼らがみな一つの霊ならば、三位格の話はありえない。彼らはただ一つの霊を所有しているからである。彼らがはっきり異なる位格であるならば、霊の力も異なるものになり、断じてただ一つの霊になることはできないだろう。父、子、聖霊のこの概念は非常に不合理である。これは神を分割し、それぞれが地位と霊を持つ三つの位格に分けてしまう。それではどうして神は一つの霊、一つの神でいられようか。教えて欲しい。天と地、そしてその中のすべてのものは父、子、あるいは聖霊が造ったのだろうか。彼らは一緒になって天地を創造したのだと言う人がいる。それでは誰が人類を救ったのだろうか。聖霊か、子か、それとも父なる神か。人類を救ったのは子であると言う人もいる。それでは実質上、子とは誰か。彼は神の霊の受肉ではないのか。受肉した神は被造物の人という観点から、天の神を父の名で呼ぶ。イエスが聖霊による受胎から生まれたことを知らないのか。彼の中には聖霊がいる。あなたが何と言おうとも、彼はやはり天の神と一つなのである。彼は神の霊の受肉だからである。子というこの考えは断じて真実ではない。すべ

での働きを実行するのは一つの霊である。神だけが、すなわち、神の霊が働きを実行する。神の霊とは誰か。聖霊ではないのか。イエスの中で働くのは聖霊ではないのか。働きが聖霊（すなわち神の霊）によって実行されなかったのなら、彼の働きが神自身を表すことができただろうか。イエスが祈る間、父の名で天の神を呼んだ時、これは被造物の人の観点だけから行われたのであり、それはただ神の霊が普通の正常な肉を着て、被造物の人の外見をしていたためであった。彼の中には神の霊があったとしても、外観は普通の人であった。言い換えれば彼は、イエス自身を含め、すべての人が言うところの「人の子」になった。彼が人の子と呼ばれるならば、彼は普通の人々の通常の家庭に生まれた人（男でも女でも、とにかく、人間の外見を持つ者）である。従って、父の名で天の神を呼ぶことは、あなたたちが最初天の神を父と呼んだ時と同じであった。彼は創造された人の観点からそうした。イエスが覚えるようにとあなたたちに教えた主の祈りをまだ覚えているか。「天にいますわれらの父よ……」イエスはすべての人に天の神を父の名で呼ぶよう求めた。そして彼も天の神を父と呼んだので、彼はあなたたちすべてと対等の立場に立つ者の観点からそうしていた。あなたたちは天の神を父の名で呼んだので、このことはイエスが彼自身をあなたたちと対等の立場にあり、神によって選ばれた地上の人（すなわち神の子）と見なしていることを示している。もしあなたたちが神を「父」と呼ぶならば、これはあなたたちが被造物だからではないのか。地上におけるイエスの権威がどんなに偉大でも、磔刑以前はイエスは単に人の子であり、聖霊（すなわち神）に支配され、地上にいる被造物の一人にすぎなかった。まだ自分の働きを完成させていなかったからである。従って、彼が天の神を父と呼ぶのはもっぱら彼の謙虚と従順さからであった。しかし、彼がそのように神（すなわち天の霊）に呼びかけることで、彼が天の神の霊の子であることの証明にはならない。むしろ、それは単に彼の視点が異なっていることであり、彼が別の位格であるということではない。別個の位格の存在というのは間違った考えである。磔刑以前、イエスは肉体の限界に縛られた人の子であり、霊の権威を十分には所有していなかった。そのため、彼は被造物の視点からのみ父なる神の意志を求めることができた。ゲッセマネで「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい」と三度祈ったときのように。十字架刑に処せられる前、彼はユダヤ人の王にすぎなかった。彼はキリストであり、人の子であり、栄光の体ではなかった。そのため、彼は被造物の観点から神を父と呼んだのである。さて、あなたは神を父と呼ぶ者はすべて子であると言うことはできない。もしそうなら、ひとたびイエスがあなたたちに主の祈りを教えたら、あなたたちは皆「子」になっていたのではないだろうか。まだ納得しないなら、教えて欲しい。あなたたちが父と呼ぶのはだれ

なのか。イエスに言及しているなら、あなたたちにとってイエスの父は誰なのか。イエスが去ったあと、父と子というこの考えもなくなった。この考えはイエスが肉体になった年月にのみ適切であった。それ以外のすべての状況下では、その関係は、あなたたちが神を父と呼ぶときの創造主と被造物の関係である。父と子と聖霊という三位一体のこの考えが有効である時はない。それは諸時代を通じてめったに見られない誤った考えであり、存在しない。

これでほとんどの人は「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り……」という創世記の神の言葉を思い起こすであろう。神が「われわれの」形に合わせて……ということから考えると、「われわれ」は二人以上を示す。神が「われわれ」と述べたので、神は一つだけではない。このようにして人は理論上ははっきりと異なる位格について考え始め、これらの言葉から父、子、聖霊という考えが生じた。では、父とはどういうものか。子とはどういうものか。そして聖霊とはどういうものか。ひょっとして今日の人類は三つを合わせて一つの姿に造られたのだろうか。それでは人の姿は父、子、あるいは聖霊の姿に似ているのだろうか。人は神のどの位格の姿をしているのだろうか。人の抱くこの考えはまったく間違っており、ばかげている。これは一つの神をいくつかの神に分けることしかできない。モーセが創世記を記述した時は、世界の創造に続いて人類が造られた後のことであった。そもそも最初、世界が始まった時、モーセは存在していなかった。モーセが聖書を記述したのはそれからずいぶん後のことだったので、天の神が語ったのは何であったのかをモーセはどうして知ることができただろうか。彼は神がどのように世界を創造したかについて少しも知らなかった。旧約聖書には、父、子、聖霊についての言及はなく、唯一の真の神、ヤーウェがイスラエルで働きを実行することにしか触れていない。神は時代が変わるにつれて異なった名前と呼ばれているが、これは名前ごとに異なる神格を指していることを証明できない。もしそうなら、神には無数の位格がいるのではないだろうか。旧約聖書に書かれていることは、ヤーウェの働き、つまり、律法の時代に開始するための神そのものの働きの段階である。それは、神が語るとそのようになり、神が命じると従うといった神の働きであった。ヤーウェは自分が働きを実行するために来た父であるとは決して言わなかったし、子が人類を贖うために来ると予言もしなかった。イエスの時代になった時、神はすべての人類を贖うために受肉したと言われただけで、来たのは子であるとは言われなかった。各時代は同様ではないし、神自身がする働きも異なるので、神は異なる領域内で働きを実行する必要がある。このようにして神の表す身分も異なる。ヤーウェはイエスの父であると人は信じ

ているが、このことは実はイエスによって認められておらず、イエスは次のように語った。「わたしたちは決して父と子として区別されなかった。わたしと天の父は一つである。父はわたしの中にあり、わたしは父の中にある。人が子を見るとき、天の父を見ているのである。」すべてが語られた時、父であろうと子であろうと、彼らは一つの霊であり、別々の位格には分けられない。ひとたび人が説明しようとする、はっきりと異なる位格や、父、子、霊の関係で問題は複雑になる。人が別々の位格について話す時、これは神を物質化することではないだろうか。人は位格を第一、第二、第三とランク付けさえしている。これらはすべて人の概念にすぎず、言及する価値はなく、まったく非現実的である。あなたが誰かに「神は幾つあるのか」と尋ねたら、神は父、子、聖霊の三位一体で、唯一の真の神であると言うだろう。「父とは誰か」と尋ねると、「父は天の神の霊である。父はすべてを司り、天の主である」と言うだろう。「では、ヤーウェは霊なのか」と尋ねれば、「そうだ」と言うだろう。次に「子とは誰なのか」と尋ねたら、もちろんイエスが子であると言うだろう。「ではイエスの経歴はどうなっているのか。どこからイエスは来たのか」と尋ねれば、「イエスは聖霊による受胎を通してマリアの子として生まれた」と言うだろう。では、イエスの本質も霊ではないのか。イエスの働きも聖霊を表しているのではないのか。ヤーウェは霊でイエスの本質も霊である。終わりの日の今、言うまでもなく、やはり働いているのは<sup>14</sup>霊なのである。どうして彼らが異なる位格でありえようか。神の霊が異なる観点から霊の働きを実行しているだけなのではないか。それ自体として、位格の間に区別はない。イエスは聖霊によって宿り、間違いなく彼の働きはまさしく聖霊の働きであった。ヤーウェによって実行された第一段階の働きにおいて、神は肉体にならなかったし、人の前に現れもしなかった。そこで、人は彼の姿を決して見なかった。彼がいかに大きくとも、いかに背が高くとも、やはり霊であり、初めて人を造った神自身であった。すなわち、それは神の霊であった。彼が雲の合間から人に話しかけた時、彼は単に霊にすぎなかった。誰も彼の姿を目撃しなかった。神の霊が受肉し、ユダヤで人となった恵みの時代になった時だけ、人は初めてユダヤ人として受肉した姿を見た。ヤーウェの感触は感知できなかった。しかし、彼は聖霊によって、すなわち、ヤーウェ自身の霊によって受胎されたので、イエスはやはり神の霊の具現化として生まれた。人が初めて見たものは、イエスの上に鳩のように降りてくる聖霊であった。それはイエスだけに限定された霊ではなく、むしろ聖霊であった。ではイエスの霊は聖霊と区別することができるのか。イエスが神の子イエスであり、聖霊は聖霊であるなら、どうしてこの二つは一つになることができようか。もしそうなら、働きは実行できなかったであろう。イエスの中の霊、天にある霊、ヤーウェの霊



はすべて一つである。それは聖霊、神の霊、7倍に強化された霊、すべてを包みこむ霊と呼ぶことができる。神の霊は多くの働きを実行することができる。それは世界を創造することができ、地球を洪水にして世界を破壊することもできる。それは全人類を贖うことができ、そのうえ、全人類を征服し、破滅させることもできる。この働きはすべて神自身によって実行され、神のほかのどの位格が神の代わりに行ったということはない。神の霊はヤーウェ、イエス、ならびに全能者という名で呼ぶことができる。それは主であり、キリストである。また人の子になることもできる。天にも地にもいる。天上の高みにも、群衆の中にもいる。天と地の唯一の主人である。天地創造から今に至るまで、この働きは神自身の霊によって実行されてきた。天における働きであろうと、肉体での働きであろうと、すべては神の霊によって実行される。すべての被造物は、天であろうと、地上であろうと、神の全能の手のひらの中にある。このすべては神自身の働きであり、神に代わって誰も行ふことはできない。天において、神は霊であるが、神自身でもある。人々のもとでは、神は肉体であるが神のままである。神は何十万もの名前で呼ばれるかもしれないが、それでも神は神であり、すべての働き<sup>[b]</sup>は神の霊の直接表現である。神の磔刑による全人類の贖いは神の霊の直接的働きであったし、終わりの日の間にすべての民、すべての地に向けた宣言もそうである。いつも神は全能で唯一の真の神、すべてを含む神自身としか呼ぶことはできない。はっきりと異なる位格は存在しないし、ましてや父、子、聖霊というこの考えも存在しない。天にも地にも神はただひとつである。

神の経営（救いの）計画は六千年に及び、働きの違いに基づいて三つの時代に分けられる。第一の時代は旧約の律法の時代である。第二は恵みの時代で、第三は終わりの日に属する時代、神の国の時代である。各時代で異なる身分が表されている。これは単に働きの違い、すなわち、働きの必須要件によるものである。律法の時代の第一段階の働きはイスラエルで実行され、贖いの働きを完結する第二段階はユダヤで実行された。贖いの働きのため、イエスは聖霊による受胎から、ひとり子として生まれた。このすべては働きの必須要件のためであった。終わりの日には、神は働きを異邦人の国々まで広げてそこの人々を征服し、神の名が彼らの間でも偉大になることを望んでいる。神は人を導いて、すべての真理を理解してそれに入れるようにすることを望んでいる。この働きはすべて一つの霊によって実行される。神はさまざまな観点から働きを行うかもしれないが、働きの本質と原則は変らない。実行された働きの原則と本質をよく見れば、すべては一つの霊によって為されたことがわかるであろう。それでもまだ「父は父であり、

子は子であり、聖霊は聖霊であり、そして最後には一つにされるだろう。」と言う人も  
いるであろう。では一体どのようにしてそれらを一つにするべきであろうか。どうして  
父と聖霊を一つにすることができるのか。もしそれらがもともと二つなら、どのように  
結合しても、二つのままではないだろうか。それらを一つにすると言うとき、それは単  
に二つの別々の部分を結合して全体で一つにすることではないだろうか。しかし、それ  
らは一つにされる前は二つの部分ではなかっただろうか。一つの霊はそのはっきりとし  
た本質があり、二つの霊を一つにすることはできない。霊は物質ではなく、物質界のほ  
かの何ものとも異なっている。人々の理解するところでは、父は一つの霊であり、子は  
別の霊で、聖霊もさらに別の霊であるので、それなら三つの霊はコップ三杯に入ってい  
る水のように混ざりあって一つの全体になる。そうすれば三つは一つにまとめられるの  
ではないか。これは全く間違った説明である。これは神を分割しているのではないだろ  
うか。どうして父、子、聖霊のすべてを一つにできるのだろうか。これらはそれぞれ異  
なる性質をもつ三つの部分ではないのか。それでも、「イエスは自分の愛する子と神は  
はっきり述べなかったか。」と言う人たちがいる。イエスは神の愛する子、神の心にか  
なう者である――これは確かに神自身によって語られた。神は自身の証しをしていたの  
だが、それは異なる観点から、すなわち天の霊の観点から自身の受肉の証しをしていた  
のである。イエスは神の受肉であって、天にいる神の子ではない。わかるか。「わたし  
が父におり、父がわたしにおられる」というイエスの言葉は、二者が一つの霊であるこ  
を示しているのではないだろうか。そして、彼らが天と地に分けられたのは受肉のた  
めではないだろうか。実際には彼らはやはり一つである。たとえ何であれ、神が自身の  
証しをしているに過ぎない。時代の変化、働きの必須要件、神の経営（救いの）計画の  
さまざまな段階のために、人が神を呼ぶ名前も違って来る。第一段階の働きを実行す  
るために来た時、神はヤーウェ、イスラエル人の羊飼いとしか呼ばれなかった。第二段階  
では、受肉した神は主およびキリストとしか呼ばれなかった。しかし、その時、天の霊  
は、イエスは神の愛する子であるとだけ述べ、彼が神のひとり子だとは言及しなかった  
。そのようなことは断じて起こらなかった。どうして神がひとり子を持つことができよ  
うか。それでは神は人にならなかったのか。神は受肉したので愛する神の子と呼ばれ、  
このことから父と子の関係が生じた。それは単に天と地に別れていたためであった。イ  
エスは肉体の観点から祈った。イエスは普通の人間の肉体の姿をしていたので、肉体の  
観点から「わたしの外観は被造物のものである。わたしは肉体となってこの世に来たの  
で、今や天からは遠く、遠く離れている。」と言ったのである。このため、イエスは肉  
体の観点からしか父なる神に祈ることができなかった。これがイエスの本分であり、受

肉した神の霊が備えていなければならないものであった。イエスが肉体の観点から父に祈るということだけで彼が神でないと言うことはできない。イエスは神の愛する子と呼ばれるが、それでも神自身である。霊が受肉しただけで、本質はやはり霊だからである。人が理解するところでは、イエスが神自身ならばなぜ祈るのだろうかという疑問に思う。これは、イエスが受肉した神であり、肉体の中に生きる神であり、天の霊でないからである。人が理解するところでは、父、子、聖霊はすべて神である。三つすべてを合わせて一つにしたものだけが唯一の真の神と見なすことができ、このようにして神の力は並外れて大きくなる。このようにしてのみ神は7倍に強化された霊なのだという人々がまだいる。子がこの世に現れた後祈る時、祈りはその霊に向かってなされた。実は、彼は被造物の観点から祈っていた。肉体は完全なものではないからであり、イエスは完全ではなかったし、肉体になったとき、数多くの弱点を持っていた。また彼は肉体において働きを実行した時、大いに難儀した。そのため、彼は磔刑になる前に三度父なる神に祈り、それ以前にも何回も祈ったのである。彼は弟子たちの間で祈った。彼は山上で一人で祈った。彼は釣り船の上で祈った。彼はおおぜいの群衆の中で祈った。彼はパンを割きながら祈った。彼は人々を祝福するとき祈った。彼はなぜそうしたのか。彼が祈ったのは霊に向かってであった。彼は肉体の観点から霊に向かって、天の神に向かって祈っていた。したがって、人の見地からは、イエスはその働きの段階で神の子になった。しかし、現在の段階では神は祈らない。これはなぜか。なぜなら神がもたらすものは言葉の働きであり、言葉による裁きと刑罰だからである。祈りの必要はない。神の職分は話すことだからである。十字架にかけられないし、人によって権力者たちに引き渡されない。神はただその働きを実行するだけで、すべては整っている。イエスが当時祈った時、天国が来るようにと、父なる神の旨が行われるようにと、今後の働きのために父なる神に祈っていた。現在の段階では、天国はすでに来たのだが、神はそれでも祈る必要があるだろうか。神の働きは、時代を終らせることであり、新しい時代はこれ以上ないので、次の段階のために祈る必要はあるだろうか。わたしは必要ないと思う。

人の説明にはたくさんの矛盾がある。実際、これらはすべて人のもつ観念である。さらなる精査がなければ、あなたたちは皆、それらは正しいと信じるだろう。あなたたちは、三位一体の神の考えは人の見解にすぎないことを知らないのか。人の認識に十分で完全なものはない。いつも不純物があり、人の考えはあまりにも多すぎる。これは、被造物が神の働きを説明することはどうしてもできないことを立証している。人の心の中にはあまりにも多くのものがあり、すべて論理と思考から来ており、真理と矛盾してい

る。あなたの論理は完全に神の働きを分析できるだろうか。ヤーウェのすべての働きについて識見を得ることができるだろうか。すべてを見通せることができるのは人であるあなたなのか、それともとこしえからとこしえまで見ることができる神自身なのだろうか。とこしえの昔からとこしえの未来まで見ることができるのはあなたなのか、それともそれができるのは神なのだろうか。どう思うか。どうしてあなたが神を説明するのに値するのか。あなたの説明の基礎は何か。あなたは神なのか。天と地、およびその中のすべてのものは神によって造られた。これをしたのはあなたではなかったのだから、なぜあなたは正しくない説明をしているのか。さて、あなたは三位一体の存在を信じ続けるのか。それはあまりにも厄介だとは思わないのだろうか。三つではなく一つの神を信じるほうがよいであろう。軽いのがもっともよい。主の荷は軽いからである。

『言葉は肉において現れる』の「」より

#### 脚注

- a. 原文には「働いているのは」という語句は含まれていない。
- b. 原文には「……の働き」という語句は含まれていない。

## VI 神の性質、および神が所有するものと神そのものについての代表的な言葉

1. 神の喜びとは、正義と光の存在と現れによるものであり、暗闇と邪惡の消滅の故である。彼は、人類に光と良い生活をもたらしたことを喜ぶ。彼の喜びは正義の喜びであり、あらゆる肯定的なものの存在の象徴、そして何よりも吉兆の象徴である。神の怒りは不義の存在と、それが引き起こす混乱が神のものである人類を害していることによるものである。それは邪惡と暗闇の存在、また、真理を駆逐するものの存在の故であり、そしてそれ以上に、良いものと美しいものに反する物の存在の故である。彼の怒りは、全ての否定的な物事がもはや存在しないことの象徴であり、さらには、彼の聖さの象徴である。彼の悲しみは、彼が望みを持っているにも関わらず暗闇に落ちた人類によるもので、彼が人のためにする働きは彼の期待にかなわず、彼が愛する人類がみな光りの中で生活できるようになっていないからである。彼は罪のない人類、正直だが無知な人、そして善良だが自分の見解を持っていない人に対して悲しみを感じている。彼の悲しみは彼の善良さと憐みの象徴であり、美しさと慈愛の象徴である。彼の幸せは、もちろん彼の敵を打ち負かすこと、そして人の真心を得ることからもたらされる。さらに、それは全ての敵の勢力の駆逐と消滅、そして人類が良き平和な生活を得ることから生じる。彼の幸せは人の喜びとは異なり、良い実を集めるときの気持ちであり、それは喜びにまざる気持ちである。彼の幸せとは、人類が今後苦しみから解き放たれ、光の世界に入ることの象徴である。その一方で、人類の感情は全て己の利益の目的のために存在し、義、光、または美しいもののために存在するのではなく、ましてや天の恵みのために存在するものではない。人類の感情は利己的で暗闇の世界に属している。これらは神の心のためのものではなく、ましてや神の計画のためのものではないため、人と神が同等に語ることは決してできない。神は永遠に至高かつ高潔な方であり、人は永遠に下劣で、価値もない。これは、神が永遠に犠牲を払い、人類のために自身を捧げているからである。しかし人は、自分の為にしか求めたり働いたりしない。神は人類の存在のために永遠に働いているが、人が光や義に寄与することは全くない。人が一時期働いたとしても、それは弱く、ささいな不幸にも耐えることができない。人の働きは常に自分のためであって他の人のためではないからである。人は常に利己的であるが、神は永遠に無私無欲である。神は公正なもの、良いもの、そして美しいもの全ての源であるが、人は醜いものと邪惡なもの全ての継承者であり、表現者である。神が自身の義と美しさの本質を

変えることは決してないが、人はいつでも義を裏切り、神から遠く離れてしまうことができる。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質を理解することは極めて重要である」より

2. 全能なる神は、頭から足の先まで繋がる肉や血は少しもない霊の体に現れる。神は宇宙と世界を超越し、第三の天にある栄光の玉座に座り、万物を治めている。宇宙のすべてのものはわたしの手の中にある。わたしが語ると、そのようになり、わたしが定めると、それは成る。サタンはわたしの足の下にあり、それは底なしの穴にいる。わたしの声が発されると、天と地は滅び、無に帰す。すべてのものは新たにされ、これは真実以外の何ものでもない不変の真理である。わたしは世に打ち勝ち、すべての悪い者たちに打ち勝った。わたしはここに座り、あなたがたに語っている。耳のある者はみな聞くべきである。生ける者はみな受け入れるべきである。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第十五章」より

3. 全能神は全ての権力を握る方、全てを成し遂げる方であり、完全なる真の神である。この神は七つの星を携えているだけでなく、七つの霊と七つの目を持ち、七つの封印を解いて巻物を広げるが、それだけではなく、七つの疫病と七つの鉢を管理し、七つの雷鳴を開く。ずっと前に神は七つのラッパを鳴らした。彼によって造られた全てのものと完全にされた全てのものは彼を讃美し、彼に栄光を帰し、彼の御座を高くかかげるべきである。ああ、全能神よ！あなたは全てであり、あなたは全てを達成し、あなたにあっては、全ては完全であり、全ては明るく、全ては解放されており、全ては自由であり、全ては強く、力に満ちている。隠されたものや覆われたものはなく、あなたにあっては、全ての奥義が現わされている。さらに、あなたは大勢の敵を裁き、あなたの威厳を示し、燃え盛る炎を示し、あなたの怒りを示す。そしてさらに、前例のない、永遠で、全く無限の栄光を示す。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第三十四章」より

4. シオンよ！歓呼せよ！シオンよ！大声で歌え！わたしは勝ち誇って戻ってきた。わたしは勝利して帰って来た。すべての民よ。急いで整列せよ！万物よ。おまえたちは完全に停止しなければならない。わたしの本体は全宇宙に向けられており、わたしの本体は世界の東に現れるからだ。礼拝してひざまずこうとしない者などあろうか。真の神と呼ばない者などあろうか。畏敬の念を持って見上げないのは誰か。讃美しないのは誰か。歓呼しないのは誰か。わたしの民はわたしの声を聞き、わたしの子らはわたしの国

で生き残るだろう。山々と川とすべてのものが止むことなく歓呼し、絶えることなく跳び回る。このとき、誰一人退こうとする者はなく、抵抗して立ち上がろうとする者はいない。これはわたしの素晴らしい業であり、それはさらに、わたしの偉大な力である。わたしはすべてのものが心の中でわたしを尊うようにする。そしてさらに、すべてのものがわたしを賛美するようにする。これは、六千年のわたしの経営（救いの）計画の究極の目的であり、わたしがそれを定めたのである。一人の人間も、一つの物体も、一つの事でさえも、あえてわたしに抵抗して立ち上がることも、わたしに逆らって立ち上がることもない。わたしの民は皆わたしの山に流れて来て（これは後にわたしが創造する世界を意味している）、わたしの前で服従する。それは、わたしには威厳と裁きがあり、わたしが権威を持っているからである。（これはわたしが体に宿っているときを指している。わたしは肉においても権威を持っているが、肉の中では時間と空間による制限を超越することができないので、わたしが完全な栄光を得たとは言えない。わたしは長子たちを肉において獲得するが、それでもなお、わたしが栄光を得たとは言えないのだ。わたしがシオンに戻り、わたしの外観を変えるとき初めて、わたしは権威を持ち、すなわち、栄光を得ると言ってよいのだ。）わたしにとっては難しいことは何もない。あらゆるものは、わたしの口から出る言葉によって破壊される。そして、それらが存在するようになり完全にされるのは、わたしの口の言葉によってだからである。わたしの偉大な力と権威はこのようである。わたしは力と権威に満ち溢れているので、わたしを妨げられる者は一人もいない。わたしはすでにすべてのものに勝利し、すべての反逆の子らに打ち勝ったのだ。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第百二十章」より

5. わたしはわたしの栄光をイスラエルに与え、その後その栄光を移す、そしてイスラエルの人々を東方へ連れて行き、すべての人々を東方へ連れて行った。わたしは彼らをみな「光」へと導いた、彼らが光と再会し、光と交わり、それ以上探す必要がないように。わたしは探し求めているすべての者が再び光を見て、わたしがイスラエルで持っていた栄光を見られるようにする。わたしはずっと前に白雲に乗って人々の間に降ったことを彼らが理解するようにし、無数の白い雲と豊かな果実、さらにはイスラエルの神ヤーウェを見るようにしよう。わたしは、彼らがユダヤ人の「先生」、待望のメシア、そして歴代の王たちによって迫害されてきたわたしの完全な姿を見上げるようにする。わたしは、全宇宙の働きを行い、偉大な働きをし、わたしの栄光のすべてとわたしの業すべてを、終わりの日に人々に表す。わたしは、わたしの栄光に満ちた全容を、長年わ

たしを待った人々、わたしが白雲に乗って下るのを熱望してきた人々、わたしが再び現れるのを熱望してきたイスラエル、そしてわたしを迫害するすべての人類に見せる。それによって、すべての者はわたしがずっと前にわたしの栄光を取り去ってそれを東方へもたらしていたことを知るだろう。それはもはやユダヤにはない、なぜなら終わりの日はすでに来ているからである。

『言葉は肉において現れる』の「七つの雷が轟く——神の国の福音が宇宙の隅々まで広まることを預言」より

6. 宇宙の隅々までわたしはわたしの働きを行っている。東方では、雷のような轟音が終わることなく発生し、すべての国々と教派を震わせている。すべての人々を現在に連れて来たのはわたしの声である。わたしはすべての人々がわたしの声により征服され、みなこの流れに落ち、わたしの前に帰服するようにする。わたしはずっと前に全地からわたしの栄光を取り戻し、東方で新たにそれを発したからである。わたしの栄光を見ることを願わない者がいるだろうか。わたしの再臨を心待ちにしない者がいるだろうか。わたしが再び現れることを渴望しない者がいるだろうか。わたしの愛らしさを思慕しない者がいるだろうか。光の元へ来ようとししない者がいるだろうか。カナンの地の豊かさを見上げようとししない者がいるだろうか。「贖い主」が再び来るのを待ち望まない者がいるだろうか。偉大なる全能者を敬慕しない者がいるだろうか。わたしの声は全地の隅々まで広められるであろう。わたしはわたしに選ばれた者に向かって、彼らにもっと話しかけたいと願う。山々や川を震わせる強大な雷のように、わたしは全宇宙と人類にむかってわたしの言葉を話しかける。そしてわたしの口にある言葉は人の宝になり、すべての人々はわたしの言葉を大切にする。稲妻が東から西へひらめき渡る。わたしの言葉は、人が決して手放したくないもの、そして測り難いものであるが、それ以上に彼らにさらなる喜びをもたらすものである。生まれたての赤児のように、すべての人々は喜びに満ち、わたしの到来を祝う。わたしはすべての人々を、わたしの声によってわたしの前へ連れて来る。その時から、わたしは正式に人類へ入る、人々がわたしを礼拝するために。わたしから放たれる栄光とわたしの口にある言葉によって、人々はみなわたしの前へ来るようになり、稲妻が東方から閃くこと、またわたしが東方の「オリーブ山」に降ったことも知るようになる。彼らはわたしがずっと前からすでに地上にいたことを知り、「ユダヤ人の息子」ではなく、東方の稲妻だと知るだろう。なぜならわたしはずっと前に復活し、人々の中から去って、その後栄光と共に再び人々の中に現れたからである。わたしは幾時代も前に崇拝された神であり、幾時代も前にイスラエル人によって見捨てられた「赤児」である。それだけでなく、わたしは今の時代の栄光に満ちた全能



神である。すべての者をわたしの玉座の前に来させ、わたしの栄光に満ちた顔を見させ、わたしの声を聞かせ、わたしの業を見上げさせなさい。これがわたしの心の全てである。これがわたしの計画の結末であり、クライマックスであると同時に、わたしの経営の目的でもある。すべての国々にわたしにひれ伏させ、すべての人にその言葉でわたしを認めさせ、すべての人にわたしを信頼させ、またすべての人がわたしに服従するようにしなさい。

『言葉は肉において現れる』の「七つの雷が轟く——神の国の福音が宇宙の隅々まで広まることを預言」より

7. わたしの話が深くなる中で、わたしはまた宇宙のありさまも見ている。わたしの言葉によって、無数の被造物がみな新たになる。天は変わり、地も変わる。人間は本来の形を現し、ゆっくりと、それぞれ同じ種類のものたちと共に、それと知らぬ間に家族のもとに戻っていく。そこで、わたしは大いに喜ぶだろう。わたしは妨げられることなく、だれもそれと知らないうちに、わたしの大いなる働きは完了し、だれもそれと知らないうちに、無数の被造物は変化する。わたしが世界を創ったとき、わたしはすべてのものをそれぞれに創った。すべての形あるものをそれぞれの種類に集まるようにした。わたしの経営（救いの）計画が終わりに近づくと、天地創造当初の状態を回復させ、すべてを本来の姿に戻す。すべては大きく変わり、すべてはわたしの計画の内に戻る。時は来た。わたしの計画の最後の段階が終わろうとしている。ああ、不浄な古き世界。必ずや、わたしの言葉に倒れる。必ずや、わたしの計画で無になる。ああ、無数の被造物たち。あなたがたは、みな、わたしの言葉の中で新たないのちを得る。今、あなたがたには主がいるのだ。ああ、純粹でしみ一つない新たな世界。必ずやわたしの栄光の中でよみがえる。ああ、シオンの山よ。もはや沈黙するな。わたしは勝利の内に帰ってきた。創造の中から、わたしは全地を調べる。地上で、人間たちは新たな生活を始め、新たな希望を得た。ああ、わが民よ。どうして、あなたがたがわたしの光の中で復活しないでいられようか。どうして、あなたがたがわたしの導きの下、喜びに跳ね上がらないことがあるか。地は歓喜の声を上げ、水は楽しい笑い声を響かせる。ああ、よみがえったイスラエルよ。わたしの定めをどうして誇りに感じないことがあるか。誰が泣いたのか。誰がうめき声を上げたのか。かつてのイスラエルは、もうない。そして、今日のイスラエルは立ち上がった、塔のようにまっすぐに、この世に、すべての人間の心の中に立ち上がった。今日のイスラエルは必ずや、わが民を通じて存在の源を得る。ああ、忌まわしいエジプトよ。まことに、もうわたしに敵対はしないだろう。どうしてわたしの憐れみを利用してわたしの刑罰を免れようとするのか。どうしてわたしの刑罰の内に存

在できないのか。わたしの愛する者はみな、必ず永遠に生き、わたしに敵対する者はみな、必ず永遠に刑罰を受ける。わたしはねたみ深い神だから、わたしは人間の行いを軽々しく赦さない。わたしは地上すべてを観察し、世界の東に義と威厳、怒り、刑罰をもって現れ、すべての人間たちにわたしを現す。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十六章」より

8. わたしは唯一無二の神自身であり、さらに唯一の神の本体であり、またわたしという肉全体は、何よりも神の完全なる表象である。わたしを畏れない者、反抗的な目をする者、わたしに反抗的な言葉を話す者は誰でも、必ずわたしの呪いと怒りによって死ぬだろう（わたしの怒りの故に呪いがあるであろう）。また誰でもわたしに忠誠と子としての愛を示さず、わたしを騙そうとする者は、わたしの憎しみの中で必ず死ぬだろう。わたしの義と威厳と裁きは永遠に続くであろう。最初、わたしは愛と憐みに満ちていたが、これはわたしの完全な神性の性質ではない。義、威厳と裁きこそが、わたし——完全な神自身——の性質である。恵みの時代の間は、わたしは愛と憐みに満ちていた。わたしが完了しなければならなかった働きのために、わたしは慈愛と憐みを持っていたが、その後では慈愛と憐みは必要なかったのだ（それ以来一切ない）。それはすべて義と威厳と裁きであり、これは、わたしの完全な神性と結びついたわたしの普通の人性の完全な性質である。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十九章」より

9. 七つの雷鳴が玉座から発せられ、宇宙を揺るがし、天と地をくつがえし、その響きは空を貫く。その貫くような音はすさまじいので、人々は逃げることも隠れることもできない。稲妻と雷鳴が発せられると、たちまち天地は変化し、人々は瀕死の状態になる。すると、空から激しい暴風雨がやって来て、電光石火の速さで宇宙全体を一掃する。地球の隅々では、それは降り注ぐ豪雨となって全ての片隅や割れ目に流れ込み、染みひとつ残さない。頭先从らつま先まで洗い流し、隠れられるものなどひとつもなく、流されずに逃れられるものは何もない。雷鳴の轟きは、輝く稲妻の不気味な閃光と同様、人々を恐怖に震えさせる。鋭い諸刃の剣は反逆の子らを打ち倒し、まったく逃れる場所がない敵は大災害に直面し、激しい嵐の中で彼らの頭は混乱し、意識を失ってばったり倒れると、彼らは息絶えて、瞬く間に水の流れに流される。彼らは自分の命を守る術もなく、ただ死んでいく。わたしから七つの雷鳴が発せられ、それらはわたしの意図を伝える。その意図とは、エジプトの長子を打つこと、邪悪な者を罰し、わたしの教会を清め、その結果、人々が互いに寄り添い合い、みなが同じように考えて行動し、わたし

とひとつの心になり、そして宇宙のすべての教会がひとつの教会として建て上げられることである。これがわたしの目的である。

雷鳴が轟くとき、泣き叫ぶ声が波のように起こる。一部の者たちは眠りから覚め、酷く驚いて、自分達の心の奥深くを探り、玉座の前に急いで戻る。彼らはごまかしたり、騙したり、犯罪を犯したりすることを止める。そのような者たちが目覚めるのに、まだ遅くはない。わたしは玉座から見る。人々の心の奥深くを見る。わたしは、心から、熱心にわたしを求めるものを救い、そのような者たちに憐れみをかける。他の何にも増してわたしを心から愛する者たち、わたしの旨を理解する者たち、そして道の終わりまでわたしに従う者たちを、わたしは救って永遠へと招き入れる。わたしはこの手で彼らをしっかりと掴んでいるので、彼らがこの光景に直面することはなく、彼らが傷つくことはない。ある者たちは、稲妻が走るこの光景を見て、悲惨な気持ちになり、声を上げることができなくなり、悔やむがもう遅過ぎる。このようなふるまいに執着するのであれば、彼らはもう手遅れである。ああ、全てが、全てが……全てが完了するのだ。これはわたしによる救いの手段のひとつである。わたしは、わたしを愛するものを救い、邪悪な者を打ち倒す。そうすれば、地上でわたしの国は安定して揺るぐことはなく、すべての国々と人々、そして宇宙の果ての人々は、わたしは威厳であり、わたしは燃え盛る炎であり、全ての人の心の奥深くを探る神であることを知るであろう。これからは、偉大な白い玉座の裁きが大衆に公に現され、裁きが始まったことが全ての人に告げられる。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第三十五章」より

10. 雷鳴のような声が発せられ、宇宙全体を揺るがし、人々の耳をつんざき、彼らが逃れるにはもう遅すぎる。そして、ある者は殺され、ある者は滅ぼされ、また、ある者は裁かれる。それは本当に誰も見たことのないような光景である。耳を澄ましてみなさい。雷鳴の轟きといっしょに泣き叫ぶ声が聞こえてくる。その声はハデスから聞こえ、地獄から聞こえてくる。それは、わたしによって裁かれた反逆の子らの苦々しい声である。わたしの言うことを聞かず、わたしの言葉を実践しない者は厳しく裁かれ、わたしの怒りの呪いを受ける。わたしの声は裁きと怒りであり、わたしは誰も容赦しないし、誰にも憐れみを示さない。わたしは義なる神であり、わたしは憤っており、燃えており、清めており、滅ぼしているからである。わたしの中では何も隠されておらず、感情的なものは何もなく、むしろすべてが開かれており、すべてが義であり、公平である。わたしの長子たちは既にわたしと共に玉座に就いて、すべての国々とすべての民族を支配しているので、それらの正しくない不義のものや人々は、今裁かれつつある。わたしは

、何一つ見逃すことなく、完全に暴露して、彼らを一人ずつ探るであろう。何故なら、わたしの裁きは完全に明らかにされ、完全に公開されており、留められるものは何ひとつないからである。わたしは、わたしの旨に合わないものは何であれ投げ棄て、底なしの穴で永遠に滅びるようにする。わたしはそれが底なしの穴で永遠に燃えるようにする。これがわたしの義であり、わたしの公正さである。誰もこれを変えることはできず、それはわたしの命令に従わなければならない。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第百三章」より

11. わたしは義であり、わたしは信実であり、わたしは人の心の奥底を探る神である。わたしはすぐに正しい者と不正な者を明らかにするが、あなたがたが警戒する必要はない。すべてはわたしの時に従って行われる。わたしを心から求めているのは誰か、わたしを心から求めていないのは誰かを、あなたがたに教えよう。ただあなたがたはわたしの言葉を、よく食べ、よく飲み、わたしの前に出てわたしに近づくだけで、わたしが自らわたしの働きをする。あなたがたはすぐに成果を見ようと焦ってはいけない。わたしの働きは一度に全て完成するものではない。その中にはわたしの段階と知恵があり、故にわたしの知恵が明らかになる。わたしの手によって行われることが何であるかを、あなたがたに見せよう。それは悪を罰し、善に報いることである。わたしは誰もひいきすることはない。わたしは、わたしを心から愛する者を愛し、私を愛さない者には常にわたしの怒りが臨む。そうして、わたしが真の神であり、人間の心の奥底を探る神であることを彼が永遠に忘れないようにする。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第四十四章」より

12. わたしは心からわたしのために尽くし、わたしに身を捧げる者のすべてを愛する。わたしは、わたしから生まれていながら、わたしを知らず、わたしに抵抗さえする者のすべてを嫌う。わたしは心からわたしに味方する者は誰でも見捨てず、彼らの祝福を倍にする。わたしは恩知らずの者には二倍の罰を与え、簡単には容赦しない。わたしの国では曲がったことや偽り事、この世のものは一切ない。つまり、全く死者の臭いがなく、すべてが公正であり、義であり、すべては純粹であり、開かれており、何も隠れておらず、何の秘密もない。すべてが新鮮で、すべてが喜びであり、すべてが啓発的である。誰かが死者の匂いをまだ持っているなら、その者は決してわたしの国に留まることができず、わたしの鉄の杖によって支配される。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十章」より

13. ほんとうに王として統治する者たちは、わたしの予定と選択に依るのであり、そこにはどんな人間の意志もあってはならない。もし誰かがこれに介入しようとするなら、その者はわたしの手によって打たれなければならない。彼はわたしの焼き尽くす火の対象である。これはわたしの義と威厳のもう一つの側面である。わたしは言った。わたしは万物を支配し、完全に権威を振るう知恵ある神であり、わたしは誰にも寛容でなく、情け容赦なく、個人的感情を持っていないと。わたしは誰であれ（その人がどれだけ上手に話そうが、わたしは彼を放免しない）わたしの義と公正と威厳によって取り扱う。そしてその一方、わたしの行いの奇跡を誰もがもっと見られるようにし、わたしの行いの意味を彼らが悟れるようにする。わたしは悪霊たちのあらゆる種類の行いを一つずつ罰し、それらを一つずつ底なしの穴に投げ込む。時が始まる以前にわたしはこれらの働きを完了し、悪霊たちにどんな地位も、彼らが働けらるどんな場所も残さなかった。わたしが予め定め、選んだ人々はすべて、どんなときにも悪霊たちによってとり憑かれることはなく、いつも聖なるものである。わたしが予め定めも選びもしなかった者は、サタンに引き渡し、わたしのもとには留まらせない。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十章」より

14. あなたはわたしがどのような人間を求めているかを知らなければならない。不純な人間は神の国に入ることを許されないし、また不純な人間が聖地を汚すことも許されない。あなたがたとえどれほど長くまたどれほど多くの働きを行ってきたとしても、最後のときになって未だ甚だしく汚れていれば、わたしの国に入ることは天の律法が許さないのである。世の初めから今日まで、人がいかに取り入ろうとも、人がわたしの国に入るのにわたしが便宜を図ったことはない。これは天の掟であり、誰にも破ることは許されない。

『言葉は肉において現れる』の「成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている」より

15. すべてが秩序正しくなるとき、それはわたしがシオンに戻る日である。そして、その日はすべての人々によって記念されるだろう。わたしがシオンに戻るとき、地上のすべてのものは静まりかえり、安らぐ。わたしがシオンに戻って来ると、すべてのものは本来の外観を取り戻す。その時、わたしはシオンでわたしの働きを開始し、悪者を罰し、善人に報い、わたしの義を実施し、わたしの裁きを実行するだろう。わたしは、わたしの言葉を使って、すべてを成し遂げ、あらゆる人とあらゆる物にわたしの刑罰の手を体験させる。わたしは、すべての人々に、わたしの栄光のすべて、わたしの知恵のすべて、そしてわたしの豊かさのすべてを見せる。すべてがわたしによって完成するの

で、立ち上がって批判する者は一人もいない。この中に、誰もがわたしの名誉のすべてを見て、すべてのものがわたしの勝利のすべてを体験するだろう。あらゆるものがわたしと共に現れるからだ。このことから、人はわたしの偉大な力と権威を十分に見ることができる。誰もわたしを憤慨させることはなく、誰もわたしを妨げようとはしないだろう。すべてのことはわたしによって公けにされる。何かをひとつでも隠そうとする者は誰か。わたしはそのような者には絶対に憐みを示さない。このような惨めな者はわたしの厳しい罰を受け、このような屑はわたしの目の前から取り除かれなければならない。ほんの少しの容赦もなく、彼らの感情をまったく考慮せずに、わたしは鉄の杖で彼らを支配し、わたしの権威を用いて彼らを裁く。なぜなら、わたしは、感情を持たず、威厳があり、誰にも憤慨させられることのない神自身だからである。時が来て、「原因や理由もなく」わたしによって打たれ、滅ぼされることを避けるために、すべての者がこのことを理解し、見るべきである。なぜなら、わたしの杖はわたしを怒らせるすべての者を打つからである。彼らがわたしの行政命令を知っていようがまいが、わたしにはまったく関係ない。わたしの本体は誰からの侵害も許さないの、それはわたしには全く重要でない。これが、わたしが獅子であると言われている理由だ。わたしが触れる者は誰でも、わたしによって打ちのめされるだろう。わたしが憐れみといつくしみの神だと今言うことは、わたしを冒涇することであると言われている理由はこれなのだ。わたしは、本質的には子羊ではなく、獅子である。誰もあえてわたしを怒らせることはない。また、わたしを怒らせる者は誰であれ、何の感情も示されず、わたしが直ちに死によって罰する。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第百二十章」より

16. わたしは燃えつくす火であり、侮辱に耐えることはしない。人間はすべてわたしから作られたのであるから、わたしのすべての言葉や行いに人々は従わなければならない。抵抗してはならない。人々はわたしの働きに干渉する権利はなく、特にわたしの働きや言葉の何が正しく何が間違っているかを分析する資格はない。わたしは創造の神であり、被造物はわたしに対し畏敬の念を持って、わたしが求めるすべての事を成し遂げるべきである。また、わたしに対し理を説くべきでもないし、抵抗はなおさらするべきではない。わたしは自らの権威をもって我が民を統べ、わたしの創造の一部を成す者はすべてわたしの権威に従うべきである。今日あなた方はわたしの前にあって大胆で厚かましく、わたしがあなた方を教えるのに用いる言葉に従わず、恐れを知らないが、わたしはただあなた方の反抗に耐えているだけである。取るに足らない蛆虫が糞の山で汚物

を掘り返しているからといって、わたしは怒りを爆発させてわたしの働きに影響を及ぼすようなことはしない。わたしは父の旨のために、わたしが言葉を発し終えてわたしの最後が来るまで、忌み嫌うものすべてが存在し続けるのに耐える。

『言葉は肉において現れる』の「落ち葉が土に還る時、あなたは行ったあらゆる悪事を後悔するであろう」より

17. わたしの憐れみは、わたしを愛し、自分たちを否定する者たちに現わされている。そして、悪い者たちにもたらされる懲罰はわたしの義なる性質の証明そのものであり、それ以上にわたしの怒りの証である。災いがやって来ると、わたしに反抗する者たちすべてに飢饉や疫病が降りかかり、彼らは涙を流す。あらゆる種類の悪事を犯してきたが、長年わたしに従って来た者たちは罪を免れることはできない。彼らも時代を超えて、ほとんど目にしたことのない災いのただ中で、絶えず恐怖と不安を抱き生きるだろう。そして、わたしだけに忠誠を示して従って来た人たちは喜び、わたしの力に拍手喝采する。彼らは言葉に表せないほどの満足感を体験し、わたしが人類にいまだかつて与えたことのない喜びの中で生活する。わたしは人の善行を宝とし、悪行を忌み嫌うからだ。わたしが初めて人類を導き始めたときから、わたしと同じ心を持った人たちの集まりを獲得することを熱望してきた。そして、わたしはわたしと同じ心を持っていない人たちを決して忘れることはなく、彼らに相応しい報いを与えて楽しむ機会を待ち望みながら、彼らを憎しみと共に心の中に持ち続けてきた。今日、遂にその日を迎え、もはや待つ必要はなくなった。

『言葉は肉において現れる』の「終着点のために、善行を十分積まなければならない」より

18. あなたは既に祭壇で誓っているのだから、わたしの目の前であなたが逃げ出すのを許さず、二人の主人に仕えることを許しはしない。わたしの祭壇で、わたしの目の前で誓った後に、別の者を愛せると思ったのか。そんな風にわたしを笑いものにすることを許すことなどあるだろうか。あなたは自分の舌で気軽にわたしへの誓いを立てられるとも思ったのか。いと高き者であるわたしの玉座に誓いを立てることなどどうして出来たのか。自分の誓ったことなどどこかへ消えてしまったと思ったのか。言うておくが、たとえあなた方の肉体が消えようとも、あなた方の誓いは消えはしない。最後には、あなたの誓いによってあなたを罪に定めよう。それでもあなたは自分の言葉でわたしに対応できると考え、その心で穢れた霊と邪悪な霊に仕えることができると考える。わたしをそそのかす犬や豚同然の人間に対して、怒らずにいられるとでも言うのか。わたしは自らの行政命令を執行し、穢れた霊どもの手から、わたしを信じる、堅苦しく「敬虔な」者たちを奪い返さなければならない。彼らはわたしの役牛となり、馬となり、食

肉処理してもらえるのを、整然と「待って」いる。あなたに以前の決意を思い出させ、もう一度わたしに仕えさせる。わたしはどんな創造物に対してもわたしをごまかすことを許さない。あなたはわたしに対して気まぐれに要求し、偽ることが出来ると思ったのか。あなたの言動を見聞きしていないとでも思ったのか。あなたの言動がわたしの目に触れないままであるはずなどない。そのようにわたしをごまかすまにさせることなどできようか。

『言葉は肉において現れる』の「あなた方はみな人格が卑しすぎる」より

19. 天使たちがわたしを褒めたたえて音楽を奏でる時、わたしは人に対する同情をかき立てられずにはいられない。直ちに、わたしの心は悲しみに満たされ、わたしからこのつらい感情を取り除くことはできない。人から引き離され、その後再び結び合わされる喜びと悲しみの中で、わたしたちは感情を交わすことができない。上にある天と、下にある地とに分けられ、人とわたしは定期的に会うことができない。誰が過去の感情への懐古の情から抜け出すことができるだろう。誰が過去の思い出にふけるのをやめることができるだろう。過去の感慨が続くことを望まない者などいないだろう。わたしが戻ってくることを切望しない者はないだろう。わたしと人の再会を待ち焦がれない者がいるだろうか。わたしの心は深く悩み、人のいのちには深い憂いがある。霊においては似ていても、わたしたちはあまり一緒にはいられない。わたしたちは頻繁には会えない。だから、全人類の人生は悲しみに満ち、活力に欠けている。人はいつもわたしを渴望しているからである。人間はあたかも天から叩き出された物体のようである。彼らは地上でわたしの名を呼び、地上からわたしを見上げる——しかしどうしたら彼らは飢えた狼の口から逃れることができるだろう。どうしたら人間は狼の脅しや誘惑から逃れることができるだろう。人間がわたしの計画の手筈に従って自分を犠牲にしないで済むことなど、できるだろうか。彼らが大声で懇願する時、わたしは彼らから顔をそむけ、もはや見つめることに耐えられない。しかし、どうして彼らの涙ながらの叫びを聞かずにいられようか。わたしは人間世界の不当な行為を正すだろう。わたしは世界中で自らの手で働きを行い、サタンが再びわたしの民に危害を与えるのを禁止し、敵が再び好き放題に行うのを禁止する。わたしは地上の王になり、玉座を地上に移し、わたしの敵をすべて地面に倒し、わたしの前でその罪を自白させるだろう。わたしの悲しみの中に怒りが混じり合い、わたしは全宇宙を踏みこみ平らにし、誰も見逃さず、わたしの敵に恐怖心を起こさせるだろう。わたしは全世界を廃墟とし、敵をその廃墟に落とし入れるので、これ以降敵が人類を墮落することはもうなくなるだろう。わたしの計画はすでに決



定しており、誰も、何者であろうとも、それを変えることはできない。わたしが全宇宙の上方を堂々と荘厳に歩き回る時、全人類は新しくなり、すべては復活するだろう。人はもはや嘆くことはなく、わたしに助けを求めて叫ぶこともなくなる。そのようになった時、わたしの心は大いに喜び、人々はわたしを祝うために戻って来るだろう。全宇宙は上から下まで喜びに湧きかえるだろう。…

『言葉は肉において現れる』 第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十七章」より

20. この広大な世界で、数え切れないほどの変化が起こっている。大海は変じて田園となり、田園は変じて大海となり、これが何度も繰り返されている。宇宙の万物を統治する方を除いては、この人類を導き案内できる者はいない。この人類のために労したり備えたりできる力ある者は存在せず、ましてや人類を光の終着点へと導き、この世の不正から解放できる者などいるはずもない。神は人類の未来を嘆き、人類の墮落を悲しみ、人類が一步一步、滅びと戻ることをできない道に向かって進んでいることに心を痛めている。神の心を引き裂き、神を棄てて邪惡な者を求めた人類、このような人類がどこに向かっているのかを考えたことのある者がいるだろうか。まさにこれこそが、誰も神の怒りを感知せず、誰も神を喜ばせる道を求めようともせず、神のもとへ近づこうとすることもなく、さらには、誰も神の悲しみと痛みを理解しようとししない理由である。神の声を聞いた後でさえ、人は自分の道を歩み続け、頑なに神のもとから離れ去り、神の恵みと配慮を避け、神の真理を避けて、神の敵であるサタンに自身を売ることの方を好む。そして、人がこのまま頑なであり続けるなら、後ろを振り向くこともなく神を見捨てたこの人間に対して神がどのようにふるまうかについて、誰が考えたことがあるのか。神が繰り返し人に思い起こさせ、勧告する理由は、人間の肉体と魂にはとうてい耐えられないような、未だかつてない災難を神はその手に準備しているからだということを知る者はいない。この災難は単に肉体の懲罰だけではなく、魂の懲罰でもある。あなたは知らなければならない。神の計画が無駄になり、神の喚起と勧告に反応が無いなら、神はどのような怒りを注ぐであろうか。それは今までどんな被造物も経験したことも聞いたこともないようなものである。だからわたしは、この災難は前例がなく、二度と繰り返されることはないと言う。なぜなら、神の計画とは今回一度だけ人類を創造し、一度だけ人類を救うことだからである。これが最初であり、また最後である。それゆえ、今回人類を救おうとする神の苦心や切なる期待を理解できる者は一人もいない。

『言葉は肉において現れる』の「神は人間のいのちの源である」より

21. わたしは以前言ったはずである。わたしは知恵ある神である。わたしはわたしの普通の人性を用いて、すべての人々とそのサタンのような振る舞いを露わにし、間違った意図を持つ者、他人の前では一様にふるまい、他人の背後では違うふるまいをする者、わたしに抵抗する者、わたしに不実である者、お金を渴望する者、わたしの重荷を考慮しない者、兄弟姉妹に対して欺瞞や不正を行う者、口達者で人々を喜ばせる者、そして兄弟姉妹たちと心と思いにおいて一致して協力することができない者たちを暴露する。わたしの普通の人性の故に、実に多くの人々が密かにわたしに抵抗し、欺瞞や不正を行い、わたしの普通の人性は知らないだろうと思い込んでいる。そして、実に多くの人々がわたしの普通の人性に特別注意を払い、わたしに良い食べものや飲みものを与え、召使のようにわたしに仕え、心の中にあることをわたしに話している一方、わたしの背後ではいつも全く違うふるまいをしている。盲目な人間たちよ。あなた方は全くわたしを分かっていない——人の心の奥底を見とおす神を。あなたは今なおわたしを知ってはいない。あなたが何をしているのかわたしは気づいていないと、あなたはまだ思っている。考えてみなさい。わたしの普通の人性故に、どれだけ多くの人々が自らを滅ぼしてきたことか。目を覚ましなさい。もうこれ以上わたしを欺いてはならない。あなたは、あなたのすべての行いとふるまい、一つひとつの言葉と行為をわたしの前に置いて、わたしの吟味を受け入れなければならない。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十六章」より

22. わたしの計画において、サタンは一步ごとにかかるとに噛み付いてきたのであり、わたしの知恵の引き立て役としてわたしの本来の計画を邪魔をする方法と手段をつねに探っている。しかし、わたしがサタンの欺きに満ちた策略に屈するものだろうか。天と地のすべてはわたしに仕えている。サタンの欺きに満ちた策略も同様ではないのか。これはまことにわたしの知恵の交わる場所、これはまことにわたしの業の驚くべきところであり、これはまことにわたしの全経営（救いの）計画が実行される原則である。神の国の建設の時代にも、わたしはサタンの欺きに満ちた策略を避けて、なすべき働きを続ける。宇宙のあらゆるものの中で、わたしはサタンの行いをわたしの引き立て役に選んだ。これはわたしの知恵ではないのか。これはまさに、わたしの働きの驚くべきところではないのか。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第八章」より

23. わたしが正式に働きを始めると、すべての人はわたしの動きにつれて動く。そのようにして、全宇宙の人々はわたしと共に働く。全宇宙に「歓呼の声」が響き、人間

はわたしと共に勢いよく前進する。その結果、赤い大きな竜はうろたえ、狂乱し、わたしの働きに仕え、望まずとも、自分のしたいことができず、わたしの支配に従うしかなくなる。わたしの計画すべてにおいて、赤い大きな竜はわたしの引き立て役、わたしの敵、そしてまた、わたしのしもべである。したがって、わたしはけっして竜の「要求」を緩めたことがない。だから、受肉におけるわたしの働きの最終段階は、その家の中で完了するのである。このようにすれば、赤い大きな竜はよりよくわたしに仕えることができ、それによって、わたしはこれに打ち勝ち、計画を完了するのである。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十九章」より

24. わたしは初めであり、終わりである。わたしは復活した完全なる唯一の真の神である。わたしはあなた方の前でわたしの言葉を語る。そしてあなた方はわたしが言うことを固く信じなければならない。天地は滅び行くが、わたしが言うことの一点、一画としてすたれることはない。これを憶えておきなさい！憶えておきなさい！いったんわたしが語れば、一言も取り消されることはなく、一つひとつの言葉が成就されるのだ。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第五十三章」より

25. 「わたしが語ったことは考慮されなければならないし、考慮されたことは完成されなければならない。そしてこのことは誰も変えることはできない。これは絶対的なことである。」わたしが過去に言ったことであろうと、将来言うことであろうと、すべては実現し、人類すべてがそれを目にするだろう。これはわたしの言葉の働きの背後にある原理である。…宇宙で起こるすべてのことの中で、わたしが最終的な決定権を持たないものはない。わたしの手の中にない存在などあるだろうか。わたしの言うことはすべてその通りに進み、人々の中にはわたしの心を変えられる者はない。それが、わたしが地上で行った契約なのか。何事もわたしの計画を妨げることはできない。わたしの経営の計画と同様に、わたしの働きの中にも、絶えずわたしは存在している。いったい誰が妨害できようか。これらを直接準備したのはわたしではないか。今日のような状況になっても、わたしの計画や予測から外れることは決してない。すべてわたしがずっと以前に決めていたのだ。あなた方の中の誰がこの段階のためのわたしの計画を推測できるだろう。わたしの民はわたしの声に耳を傾け、わたしを本当に愛する一人一人がわたしの玉座の前に戻るだろう。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第一章」より

26. 私たちは、いかなる国家も勢力も神が果たそうと願うものの前に立ちはだかることはできないと信じている。神の働きを妨害し、神の言葉に抵抗し、神の計画をかき乱し、阻害する者たちは最終的には神に罰せられる。神の働きに逆らう者は地獄に送られる。神の働きに反抗する国家は滅ぼされる。神の働きに反対するために立ち上がる民族は地上から一掃され、消滅する。

『言葉は肉において現れる』の「神は全人類の運命を支配する」より

27. すべてはわたしの言葉で成し遂げられる。誰一人手を出すことはできない。また、誰一人、わたしのしている働きをすることは、できない。わたしは全地の空気をきれいに拭い、地上にいる悪魔たちの痕跡を一掃しよう。わたしはすでに始めている。そして、わたしの刑罰の働きの第一段階を赤い大きな竜のすみかで始める。そうして、わたしの刑罰が全宇宙に及ぶと、赤い大きな竜とあらゆる不浄な霊が無力で、わたしの刑罰を免れないことがわかる。わたしは全地を調べるのだから。地上でのわたしの働きが完了すると、つまり、裁きの時代が終わると、わたしは正式に赤い大きな竜を刑罰する。わが民は、わたしが赤い大きな竜に与える義の刑罰を見る。人々は、わたしの義のゆえにたたえをささげ、わたしの義のゆえに、永遠にわたしの聖なる名を称える。そこで、あなたがたは、正式に本分を果たし、全地で正式にわたしをたたえる。永遠に絶えることなく。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十八章」より

28. 神の国を迎える祝砲が鳴り響くとき——これはまた、七つの雷が轟くときでもある——この音が天と地とを激しく揺さぶり、天空を震わせ、すべての人間の心の糸を震わせる。神の国の讃歌が赤い大きな竜の国で厳かに響く。わたしが赤い大きな竜の国を破壊し、わたしの国を建てたことを証ししているのだ。さらに重要なことに、わたしの国は地上に建てられる。このとき、わたしは天使たちを世界のすべての国々に遣わし、わたしの子ら、わが民を牧養するようにする。これはまた、わたしの働きの次の段階のために必要なことなのである。しかし、わたしは、赤い大きな竜がとぐろを巻いて横たわる場所に、戦いに行く。すべての人間が肉の内においてわたしを知ることになり、わたしの行いを肉の内において見るができるようになるとき、赤い大きな竜のねぐらが灰となり、跡形もなく消える。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十章」より

29. 民がみな完全にされ、地上の全ての国々がキリストの国となるとき、七つの雷鳴がとどろく。現在はその段階へ大きく前進する時であり、その時に向かって侵攻する。これが神の計画である——近い将来、それは実現する。しかし、神は自身が語ったこと全てを既に達成している。それ故、地上の国々は大波が押し寄せれば揺れてしまう、砂の上に建てられた城にすぎないことは明らかである。終わりの日は迫っている。赤い大きな竜は神の言葉の下に倒れる。神の計画が成功裏に実行されたことを確認するため、天使たちが地上に降りてきて、神を満足させるために最善を尽くす。肉となった神自身が出陣し、敵に戦いを挑む。受肉した神が現れる場所はどこであれ、敵は滅ぼされる。真っ先に滅ぼされるのは中国で、神の手によって破壊される。神は中国を一切容赦しない。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十章」より

30. わたしは神の国を支配し、さらに、全宇宙を支配している。わたしは神の国の王であるとともに、全宇宙の主でもある。今から後、わたしは選民でない人々をすべて集め、異邦人の間で働きを始める。そして、わたしの行政を全宇宙に告げ、わたしの働きの次の段階を開始できるようにする。わたしは異邦人の間にわたしの働きを広めるために刑罰を与える。つまり、異邦人である者たちには力を用いるということだ。当然、この働きは、選民たちの間でのわたしの働きと同時に進められる。わたしの民が支配し、地上で力を振るう時はまた、地上のすべての人が征服される日であり、そして、さらに、わたしが憩うときでもある。そして、その時初めて、わたしは征服した人々みなの前に姿を現す。わたしは聖なる国では姿を現し、汚れの地では姿を隠す。征服されわたしに従順となった者はみな、その目でわたしを見ることができ、その耳でわたしの声を聞くことができる。これが終わりの日に生まれた者の恵み、これがわたしの定めた恵みであり、これはどの人間にも変えることができないのだ。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十九章」より

31. 世界は崩壊しつつある。バビロンは麻痺している。宗教的世界——どうしてこれが、わたしの地上の権威により破壊されないことがあろう。誰がまだわたしに逆らい、敵対しようとするのか。律法学者たちか。すべての宗教関係者か。地上の支配者や権力者か。天使たちか。誰がわたしのからだの完全さと豊かさをたたえないだろう。すべての民の中で、誰がわたしの讃えをやむことなく歌わず、誰がいつでも幸福でないのか。わたしは赤い大きな竜のすみかのある国に住んでいる。しかし、わたしはそれで恐れに震えたり、逃げたりはしない。その民がみな、すでに赤い大きな竜を嫌い始めている

からだ。竜の前で何か「本分」が尽くされたことはない。その代わり、みな自分がふさわしいと思う振る舞いをし、それぞれが最適と思う道を選んでいる。どうして地上の国々が滅びないことがあろう。どうして地上の国々が倒れないことがあろう。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十二章」より

32. わたしの最後の仕事は人を懲罰するためだけのものではなく、人の終着点を決めるためのものでもある。さらに、わたしが行ってきたすべてのことに対して、あらゆる人たちから承認を受けるためである。わたしはすべての人にわたしが行ってきたことは正しく、わたしの行ったことは全てわたしの性質の表現であることを知って欲しいと思っている。人類を生み出したのは人の行いではなく、とりわけ大自然の行いではない。それどころか、創造されたすべてのもののの中で、あらゆる生けるものを育むのはわたしである。わたしの存在なしには、人類は滅びる他なく、酷い災難を経験するだけであらう。だれも美しい太陽や月、緑にあふれる世界を再び見ることはできないだろう。人類は極寒の夜や、避けられない死の影の谷に遭遇するだけだろう。わたしは人類の唯一の救いである。わたしは人類の唯一の望みであり、さらに、わたしは全人類がその存在を託すその者である。わたしがいなくては、人類はすぐに停滞してしまう。わたしがいなくては、たとえだれもわたしに注意していなくても、人類は壊滅的被害を受け、あらゆる種類の霊に踏みつけられるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「終着点のために、善行を十分積まなければならない」より

33. わたしが再来するとき、国々はわたしの燃える炎がつくった境界線に沿ってすでに分断されているであらう。そのときわたしは自らを焼け付く太陽として人類に新たに顕し、人間がかつて見たことのない聖なるものの姿にて自らを公けに人間に示し、ちょうどわたし、ヤーウェがかつてユダヤの諸部族のあいだを歩いたように無数の諸民族のあいだを歩く。そこから、わたしは人類をその地上での生活において導く。そこで人々は必ずやわたしの栄光を見、また空中に雲の柱が一本、彼らを生活において導くためにあるのを見る。わたしは聖なる場所に出現するからである。人間はわたしの義なる日を、またわたしの栄えある出現を見る。それはわたしが全地球を統治し、わたしの多くの息子たちを栄光に至らせるときに起こる。地上のいたるところで人々はひれ伏し、わたしの幕屋は人類の真中に、わたしが今日行なっている働きの岩の上に堅固に打ち立てられる。人間はまた神殿でわたしに仕える。祭壇は汚らしくおぞましいもので覆われており、わたしはそれを粉々に打ち砕き、新たに建てる。生まれたばかりの子羊と子牛が聖なる祭壇の上に積み上げられる。わたしは今日の神殿を打ち倒し、新しい神殿を建て

る。今日ある神殿は、嫌悪すべき人々で溢れており、それは倒壊する。わたしが建てる新しい神殿は、わたしに忠実なしもべで溢れる。彼らはわたしの神殿の栄光のために、再び立ち上がり、わたしに仕える。あなたがたはわたしが大いなる栄光を受ける日を、またわたしが神殿を倒し新しい神殿を建てる日を見ろ。また、あなたがたはわたしの幕屋が人間の世界に到来する日を見ろ。わたしは神殿を壊し、同じくわたしの幕屋を人間の世界にもたす。それは、わたしの降臨を見るかのようなものである。あらゆる国々を打ち砕いた後、わたしは国々を新たに招集し、それよりわたしの神殿を建て、わたしの祭壇を据え付け、あらゆる者がわたしに犠牲を捧げ、神殿でわたしに仕え、異邦人の諸国におけるわたしの働きに忠実に自らを捧げることができるようにする。彼らは現代におけるイスラエルの民のようになり、祭司の式服と王冠で着飾り、わたし、ヤーウェの栄光が彼らの真中にあり、わたしの威厳が彼らの頭上において彼らとともに留まっている。異邦人の諸国におけるわたしの働きもまた同じ方法で実行される。イスラエルにおけるわたしの働きと同じように、異邦人の諸国におけるわたしの働きは行なわれる。なぜなら、わたしはイスラエルでの働きを発展させ、それを異邦人の諸国に広めるからである。

『言葉は肉において現れる』の「福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある」より

34. 人々はわたしに歓声を送り、わたしを讃える。全ての人は唯一の真の神の名を唱え、わたしの業を見ようと目を上げる。わたしの国はこの世界に降臨し、わたしの本質は富み、豊かである。これを祝福しない人などいようか。これに喜び踊らない人などあろうか。シオンよ。勝利の旗を掲げてわたしを祝福せよ。汝の意気揚々とした勝利の歌を歌い、わたしの聖なる名を広めよ。地の万物よ。今、わたしへのいけにえとして自らを清めよ。空の星よ。今汝らの場所に戻り、大空にわたしの偉大さを示せ。わたしは、わたしへの無限の愛と敬意を歌にて注ぐ、地の人々の声に耳を傾ける。この日、万物が活気を取り戻すと、わたしは地を歩きだす。この瞬間、花々は咲き、鳥たちは歌い、万物は歓喜に満ちる。神の国の礼砲の音にサタンの国は崩れ、神の国の讃歌のこだまする合唱にサタンの国は破壊される。そして、もはや蘇ることはないだろう。

敢えて立ち上がり抵抗しようとするものなどいるだろうか。地に降りると、わたしは灼熱を、怒りを、あらゆる災いをもたす。地上の諸国は今やわたしの国である。空高く雲は崩れ、渦巻く。空の下、湖と川は波立ち、心を打つメロディーを紡ぐ。憩う生き物は巣から現れ、眠る人々はみなわたしにより目覚める。すべての人々が待っていた日がついに来た。人々は最も美しい歌をわたしに捧げる。

35. いのちの道は、誰でも持てるものではなく、誰にでも簡単に得られるものでもない。なぜなら、いのちは神のみに由来しているからだ。それはすなわち、神自身のみがいのちの本質を持っており、神自身なくしていのちの道は存在せず、神のみが、いのちと永遠に流れつづけるいのちの生ける泉の源であることを意味する。神が世界を創造したとき以来、神はいのちの活力に関わる多くの働きをし、人にいのちを与える多くの働きをし、人がいのちを得られるよう多大な代償を払ってきた。神自身が永遠のいのちで、神自身が、人が復活できる道だからである。神が人の心に不在であることはなく、常に人の中に生きている。神は人の生活の原動力であり、人の存在の基盤であり、誕生後の人の存在にとっての豊かな鉱物である。神は人を生まれ変わらせ、人が自分の持つあらゆる役割においてしっかりと生きられるようにする。神の力と、神の消えることのないいのちの力のおかげで、人は何世代も生きてきた。その間ずっと、神のいのちの力は人の存在の支えであり、神は普通の人間が誰も払ったことのないような代償を払ってきた。神のいのちの力は、いかなる力にも勝る。そしていかなる力をも超越する。神のいのちは永遠であり、神の力は非凡であり、神のいのちの力はいかなる被造物や敵の力によっても簡単に圧倒されない。神のいのちの力は存在し、時と場所にかかわらず明るい輝きを放つ。天地は激変するかもしれないが、神のいのちは永遠に不変である。万物は過ぎ去るが、神のいのちは依然としてそこにある。それは、神が万物の存在の源であり、それらの存在の根幹だからだ。人のいのちは神に由来し、天の存在は神に拠り、地の生存は神のいのちの力から生じる。活力を有するいかなる物体も神の主権を越えることはできず、いのちの力を有する何物も神の権威の及ぶ範囲から逃れ出ることはできない。このようにして、誰もが神の支配下に服従し、神の命令の下で生きねばならず、誰も神の支配から逃れられない。

『言葉は肉において現れる』の「終わりの日のキリストだけが人に永遠のいのちの道を与えられる」より

36. 広大な宇宙に、どれほどの生ける物が、一つの不変の規則にしたがって生き、いのちの法則に何度も何度もしたがって、生き、再生しているのか。死ぬ者は生きる者の物語を抱えて行き、生きている者は死んだ者と同じ悲劇的な歴史を繰り返す。そこで、人類は自問せずにはいられない。なぜわたしたちは生きるのか。そして、なぜわたしたちは死ななければいけないのか。誰がこの世界を支配しているのか。そして、誰がこの人類を創ったのか。人類はほんとうに大自然の生み出したものなのか。人類はほんとうに自分の運命を支配しているのだろうか。…数千年にわたり、人類はこうした問を何



度も何度も発している。残念ながら、人類がこうした間に頭を悩ませれば悩ませるほど、ますます科学への渴望が強くなった。科学は、ささやかな肉の欲求の充足と、つかの間の肉の楽しみを与えるが、人類を魂の奥底にある孤独や寂しさ、かろうじて隠している恐怖と無力感から解放することなど到底できない。人類は単に肉眼で見、脳で理解できる科学的知識を用いて心を麻痺させているが、これは 人類が奥義を探ることを止めることはできない。人類は、宇宙万物の支配者が誰であることを知らないし、まして、人類の始まりも未来も知らない。人間はこの法則の中で、ただ生きている、否応なしに。誰一人、逃れることができないし、誰もこれを変えることはできない。あらゆる物事の間と天において、永遠から永遠にすべてを支配しているのは、ただお一方だけだからである。それは、かつて人間が見たことがないお方、人類が知ることもないお方、その存在を人類は信じたこともない。しかし、それは人類の祖先に息を吹き込み、人類にいのちを与えたお方である。人間の生存のために施し、養い、今日まで導いて来たお方である。さらに、人類が生き残るために依存する唯一のお方なのである。彼は万物を支配し、天の下すべての生ける物を支配している。彼は四季を支配し、風と霜、雪、雨を呼ぶ。彼は人類に陽光を与え、夜の訪れをもたらす。天と地とを整え、人間に山々と湖、川、すべての生き物を与えたのは彼である。彼の業はあらゆるところにある。その力はいたるところにある。その知恵はいたるところにある。その権威はいたるところにある。その法則や規則の一つひとつは彼の業の具現であり、その一つひとつが彼の知恵と権威とを明らかにしている。誰が彼の支配を免れることができようか。また、誰が彼の采配から逃れることができようか。万物は彼の眼差しの下にあり、さらに、彼の支配の下で生きている。彼の業と力の前に人類は、彼が実際に存在し、万物を支配していると認めざるを得ない。神を除いては、他の何も宇宙を支配できず、まして、やむことなく人類に施すこともできない。神の業を認識できるかどうか、神の存在を信じているかどうかにかかわらず、あなたの運命は神の定めるところであって、神が永遠にあらゆるものの支配権を持ち続けることに疑いはない。神の存在と権威とは、人間に認められ理解され得るかどうかによって左右されるものではない。神だけが人間の過去・現在・未来を知り、神だけが人類の運命を定めることができる。この事実を受け入れられるかどうかに関りなく、人類は近い将来、これらのことすべてをその目で見ることになる。そして、これは神が間もなく実現する事実である。人類は神の目の下で生き、死ぬ。人類は神の経営のために生きているのであり、その目が最期に閉じる時もまた、神の経営のためなのである。人間は何度も何度も来ては去り、行き来を繰り返す。例外なく、これはすべて神の支配し、定めていることである。神の経営は常に前進しており、やむことがな

い。神は人類に自身の存在を知らせ、神の支配を信じさせ、神の業を見させ、神の国に戻らせる。これが神の計画であり、何千年にもわたって神が行なってきた働きなのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

37. 神の性質というのは、人間の性格とは異なるため、誰にも極めて抽象的な問題に思われ、しかも、簡単には受け入れられないテーマである。神にもまた喜怒哀楽があるが、これら感情は人のものとは異なる。神には神そのものと神が持っているものがある。神が表し、明らかにするものは、全て神の本質と神の身分の表れである。神そのものと神が持っているもの、および神の本質と身分は、人が取って代わることができるものではない。神の性質には、人類への神の愛、人類への慰め、人類への憎しみが包含されており、しかも人類に対する完全な理解が包含されている。しかし、人の性格は楽観的、活氣的、または無感覚である。神の性質とは、万物と全ての生けるものの支配者、全ての創造物の主に属するものである。彼の性質は尊厳、権勢、崇高さ、偉大さ、そして何よりも至高性を表す。彼の性質は権威の象徴であり、あらゆる正義の象徴であり、また、あらゆる美と善の象徴である。しかもそれは、暗闇やいかなる敵の勢力にも圧倒されず、侵害されることのない者の象徴<sup>81</sup>であり、同時に、いかなる被造物も背くことができない（そして背くことが許されない）者の象徴<sup>82</sup>である。彼の性質は最高権力の象徴なのである。一個人であれ複数であれ、いかなる人間も神の働きや性質を阻害できないし、阻害してはならない。しかし人間の性格は、動物よりもわずかに優位であることの象徴に過ぎない。人間は、自身の中にも自身においても、何の権威も自主性も、自分自身を超越する能力もないが、本質的に、様々な人々、出来事、または物に振り回されて怖じ気づく者である。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質を理解することは極めて重要である」より

38. わたしが語った事柄の全てには神の性質が含まれる。わたしの言葉を注意深く考えるとよい。それらから間違いなく多くの利益を得るであろう。神の本質を理解することは非常に難しいが、わたしはあなたがた全員に神の性質について少なくともいくらかの認識があると信じている。ゆえに、わたしはあなたがたがそれをわたしに証明し、神の性質を犯さないより多くの事柄を行うことを望むのである。それがわたしを安心させてくれるだろう。例えば、常に心の中で神を思いなさい。何かを行う時は、神の言葉に従いなさい。全てにおいて神の心を探し求め、神を軽視したり神の栄誉を汚したりする事柄は行わないようにしなさい。さらに、神を心の奥に追いやって心の中の未来の隙

間を埋めないようにしなさい。もしそのようなことをするならば、あなたは神の性質を犯すことになるのである。決して神を冒瀆する事柄を口にしたり、神に対して不平を言ったりせず、神があなたの人生を通じてあなたに委ねた全ての事柄を正しく行うことができ、神の言葉の全てに従うならば、行政に触れることを首尾よく避けたことになる。例えば、「なぜわたしは彼が神であると思わないのか」、「これらの言葉は聖霊の導きと示しでしかないと思う」、「神がなす全ての事柄が正しいとは思わない」、「神の人間性が自分の人間性より優れているとは思わない」、「神の言葉はどうしても信憑性に欠ける」、または同様の批判的な事柄を言ったことがあるならば、罪を告白し、悔い改めることを勧める。人ではなく、神自身を犯すため、そうしなければ赦しの機会を得ることが決してないからである。人を批判しているだけだと思っているかもしれないが、神の霊はそうには考えない。神の肉体を軽視することは、神を軽視することと同じである。もしそうであるならば、あなたは神の性質を犯したことはないだろうか。神の霊によってなされる事柄の全てが神の肉体における働きを支え、その働きを十分に行うためのものであることを覚えておかなければならない。これを無視するならば、あなたは神を信じることに於いて決して成功を収めることができない者であると言おう。あなたは神の怒りを買ったため、神はそれに見合う懲罰を使ってあなたに教訓を与える必要がある。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質を理解することは極めて重要である」より

#### 脚注

- a. 原文では「されることがないことの象徴」となっている。
- b. 原文では「背くことができない（そして背くことが許されない）ことの象徴」となっている。

## VII 唯一の存在たる神そのものを認識することについての代表的な言葉

1. 神が万物の創造を始めた時から、神の力が現され、明示され始めた。なぜなら、神は万物を創造する際に、言葉を用いたからである。神が万物をどのように創造したか、なぜ創造したかを問わず、神の言葉により万物が出現し、確立され、存在した。そしてそれは創造主のみが持つ権威である。人間がこの世に出現する前、創造主は、自身の力と権威を用いて、人間のために万物を創造し、神の特別な方法により、人間に適した生活環境を整えた。神が行なった業は、すべて人間のための準備であり、やがて人間は神の息を授かる。すなわち、人間が造られる前、天、光、海、地や、小さな動物、鳥、様々な種類の昆虫や、バクテリアなど肉眼では見えないものを含めた微生物など、人間とは異なるすべての生物や創造物に対して、神の権威が示された。これらは、それぞれ創造主の言葉により生を受け、創造主の言葉により繁殖し、創造主の言葉により創造主の支配のもとで生活した。こうした創造物は、創造主の息を受けなかったものの、様々な形や構造で創造主から授かった命と活力を示している。またこうした生物や創造物は、創造主が人間に与えた話をする能力を授からなかったが、それぞれ創造主から授かった命を示す方法を授かっており、その方法は人間の言葉とは異なるものである。創造主の権威は、静止しているように見える物体が消えて無くならないよう、それに命の活力を与えるが、それ以上に、絶滅を避け、また創造主により授けられた生き残りのための法則や原則を世代を超えて受け継ぐよう、繁殖して増加する本能を全ての生物に授ける。創造主が神の権威を行使する様式は、厳密にマクロ的観点やミクロ的観点に固執せず、またいかなる形態にも限定されていない。神は、宇宙のはたらきを支配可能であり、万物の生死を支配し、そしてなによりも、万物を操作して神に仕えさせることが可能である。神は山、川、湖などのはたらきを支配することが可能であり、その中にある物を支配し、さらに万物が必要とする物を提供することも可能である。これが、創造主のみにある権威の、人間以外の全ての物に対する顕現である。こうした顕現は生涯に留まらず、終わることも中断することもなく、いかなる人や物によって変えられたり損なわれたり、加減されたりすることもない。創造主の身分に代わることができる者は存在せず、したがって創造主の権威は、いかなる創造物によっても代えられることができず、また創造物以外の物が得ることのできないものである。例として、神の使いや天使について検討する。彼らには、神の力が無く、いわんや創造主の権威は無い。なぜなら、彼ら

には創造主の本質が無いからである。神の使いや天使など創造物以外の物は、神に代わってある程度の業を行うことができるが、神の代理となることはできない。彼らには、人間には無い力があるものの、彼らには神の権威が無い。すなわち、彼らには、万物を創造し、万物に命令し、万物を支配する神の権威が無い。したがって、創造された物以外のいかなるものも、神の独自性を代理することはできない。またそれと同様に、神の権威と力についても、創造された物以外のいかなるものも、その代理となることはできない。あなたは、神の使いが万物を創造したなどということを、聖書で読んだことがあるだろうか。また、神が使いや天使に万物の創造を任せなかったのは、何故だろうか。それは、彼らには神の権威が無く、したがって神の権威を行使する能力が無かったからである。あらゆる被造物と同様、彼らもまた創造主の支配と権威の下にあり、したがって創造主は彼らにとっても神であり、主権者である。高貴であるか卑しいか、力が強いかわかりを問わず、神の使いと天使達の中に、神の権威を超えることの出来るものはいらず、したがって、彼らの中には創造主の身分の代理となることのできる者はいない。彼らが神と呼ばれることは決して無く、また創造主となることも無い。これは変えることのできない真理であり、事実である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

2. 宇宙、すなわち惑星、天の星は、すべて人類が出現する以前に、既に存在していた。マクロレベルでは、こうした天の物体は、神の支配下で、それらが存在している年月を通して、軌道を規則的に回り続けてきた。どの惑星が、何時、何処に移動するか、どの惑星が何時どのような役割を果たすか、どの惑星がどの軌道に乗るか、どの惑星が何時消滅するか、置換されるかなどといった事柄は、すべて寸分違わず正確に進行している。惑星の位置や惑星同士の間の距離は厳密な規則に従っており、正確なデータで説明可能である。惑星が移動する経路、速度、そして軌道の規則、特定の位置に到達する時刻は、正確に数値で表し、特定の法則により説明できる。数十億年にわたり、惑星は、これらの法則に全く逸脱することなく従ってきた。惑星の軌道や、惑星が従っている規則性を変化させたり中断させたりすることのできる力は存在しない。惑星の運動を律する特定の法則と、それを解明する正確なデータは、創造主の権威により事前に決定されており、惑星は創造主の統治と制御の下で、そうした法則に自然と従う。マクロレベルでは、ある程度の規則性やデータ、そして異常で説明出来ない法則や現象を見出すことは、人間にとってそれほど困難ではない。人類は神が存在することを認めず、創造主が万物を造り、支配しているという事実を受け入れず、さらには創造主の権威の存在を

認めないにもかかわらず、人文科学者、天文学者、物理学者は、宇宙における万物の存在、そして万物の運動を律する原理と法則が、巨大で目に見えない暗黒のエネルギーにより支配され、制御されているという結論に達することが益々多くなってきている。この事実により、人間は、こうした規則性の中に全能者が存在し、全てを指揮しているということに向き合い、認めざるを得なくなっている。彼の力は非凡であり、その素顔を見ることが出来る者はいないものの、彼は常に全てを支配し、制御している。彼による統治を超えることが出来る者や力は存在しない。こうした事実を鑑み、人間は万物の存在を支配する法則は人間が制御したり変えたり出来ないものであること、こうした法則は人間が完全に理解できないものであることを認める必要がある。さらに、そうした法則は自然に発生するものではなく、支配者により支配されている。こうした物事は、全て人間がマクロレベルで認識できる神の権威が表出されたものである。

ミクロ段階では、人間が地上で見る山々、川、湖、海、大陸、人間が体験する季節、植物、動物、微生物、人類を含めた地球上の万物は、全て神の権威の対象であり、神により支配されている。神による統治と支配の下においては、万物は神の旨に従って出現し、消滅し、その生命は全て特定の法則により管理され、その法則に従って生長し、繁殖する。これらの法則を超える人間や物事は存在しない。それは何故であろうか。それは神の権威のためであり、それが唯一の理由である。言い換えると、神の旨と言葉が理由であり、神自身が全てを行っていることが理由である。すなわち、こうした法則を出現させるのは神の権威と心であり、そうした法則は神の旨により移行し、変化し、そうした移行と変化は、神の計画のために発生し、消滅する。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

3. 神は、神が造った全ての物が出現し、神の言葉により確立し、そして徐々に変化し始めたのを見た。この時、神は、神が言葉により創造した様々な物や、神が遂行した様々な業について、満足していたであろうか。その答えは、「神は見て、良しとされた。」である。ここでは、何が分かるであろうか。「神は見て、良しとされた。」とは、何を示し、何を象徴するものでであろうか。神には、神が計画したことや、指定したことを実現させ、実現させると決めた目的を達成するだけの力と知恵がある。神がそれぞれの作業を完了した時、神は後悔していたであろうか。その答えも、「神は見て、良しとされた。」である。つまり、神は後悔の念を感じないだけでなく、むしろ満足していた、ということである。神は一切後悔しないとは、どのような意味であろうか。それは、神の計画や力、知恵は完璧であること、そしてこうした完璧さは、神の権威のみが達成

可能であることを示している。人間が作業を行う時、人間は、神と同様に、その作業が良いと思うことができるであろうか。人間が行う作業が全て完璧となり得るだろうか。人間が1度だけで完璧にすることのできる作業は、あるだろうか。人間が言うように、「完璧は有り得ず、比較的優れているに過ぎない」ので、人間が行う作業が完璧となることは、有り得ない。神が、神自身が行なった業が良いと判断した時、神が創造した物は、すべて神の言葉により造られたものであり、すなわち神が造った物全てに永久的な形があり、種類により分類され、恒久的に一定の位置、目的、機能が与えられたことについて、「神は見て、良しとされた。」のである。さらに、特にそうした創造物の役割と、神による万物の経営のなかで、それらの物が進むべき旅路は、神により既に命令され、変わることが無い。これは、創造主が万物に与えた、天の法則であった。

「神は見て、良しとされた。」この簡潔であり、それほど重視される事がなく、往々にして無視される言葉は、神がすべての生物に授けた、天の法則と天の命令である。この言葉は、創造主の権威を、より実践的かつ深く具現化したものである。創造主は、言葉により神が求めていることの全てを得て、実現しようとしていることの全てを実現することができるだけでなく、神が創造した全ての物をその手中に収め、神の権威により造った全ての物を支配することも可能である。さらに、すべてが系統的かつ規則正しいものである。また、神の言葉により全ての物が生き、死に、さらに、神の権威により神が定めた法則の中に存在した。これについては例外は無かったのである。この法則は「神はこれを見て、良しとされた」瞬間に始まり、創造主により廃止される日まで、神の経営（救いの）計画のために継続的に存在し、機能する。創造主のみにある権威は、万物を創造し、全ての物を出現させるよう命令する神の能力だけでなく、万物を支配し主権を握ることのできる能力、命と活力を与える能力、さらに、神の計画において神が創造する万物を、神が創造した世界の中で出現させ、完璧な形、完璧な生涯の構成、完璧な役割で、その世界に永遠に存在させる能力においても現れた。また、神の権威は、創造主の考えが時間、場所、地理など、いかなる制約も受けない方法で現れた。神の権威と同様、創造主のみにある身分は、永遠に変わることが無い。神の権威は、常に神のみにある身分を表し、その象徴であり、神の権威は、神の身分と共に、永遠に存在するのだ。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

4. 神の権威とは、神の力であると説明できる。まず、権威と力は、両方とも肯定・善であると断言できる。権威と力は、否定・悪と無関係であり、創造物やそれ以外の物

と関連性が無い。神の力は、生命や活力のある、あらゆる形の物を造ることが可能であり、それは神の命により決定される。神は生命であり、したがって全ての生物の源である。さらに、神の権威は、あらゆる生物を神のすべての言葉に従わせることができる。すなわち、神が述べた言葉に従って現れ、神の命令により生き、繁殖し、それ以後、神があらゆる生物を支配しあらゆる生物に命令し、このことから逸脱する物は永遠に存在しない。人間や物には、こうした力が無い。こうした力は神のみにあり、したがってその力を権威という。これは、創造主の独自性である。したがって、それが「権威」という言葉自体であれ、権威の本質であれ、それは神としか関連づけられない。なぜなら、権威は、創造主の固有の身分と本質の象徴であり、また創造主の身分と地位を示すものである。創造主以外に、「権威」という言葉と関連づけられる人間や物は存在しない。これが創造主に固有の権威の解釈である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

5. あなた方は、神の権威に関して、新たな認識を得ることができたであろうか。まず、今述べた神の権威と、人間の力との間に、相違点はあるであろうか。その相違点とは何であろうか。一部の人々は、それらは比較できないと言う。それは正しい。神の権威と人間の力は比較できないと言われているものの、人間の思考や思想のなかでは、人間の力が神の権威と混同されることが往々にしてあり、人々はこの両者を並べて比較する場合がある。これは、どのような状況であろうか。この両者のうち一方を他方に代えるというのは、人々は不注意に過ちを犯しているのではなかろうか。両者に関連性は無く、両者は比較できないが、人々は比較せずにはいられないのである。こうした状況は、どうすれば解決できるであろうか。真剣に解決策を見出したいと願うのであれば、神固有の権威を知ることである。創造主の権威を理解し知ることにより、あなたは人間の力と神の権威を同じ範疇で議論しなくなるであろう。

人間の力とは、何であろうか。簡潔に言うと、人間の力とは、人間の腐敗した性質や欲望、野望を拡大し、最大限に達成するための技能である。そうした技能は権威とみなされるであろうか。ある者の野望と願望がどれほど強く、成功であったとしても、その者に権威があるとは言えない。そうした自惚れや成功は、せいぜいサタンが人間の世界で行う茶番に過ぎず、サタンが神となる野望を果たすために、自らの祖先を演じる喜劇に過ぎない。

ここまでの議論を踏まえると、あなたは、神の権威を、どのように認識するようになったらうか。あなたは、ここまで伝えた内容から、神の権威に関する新たな認識を得



たはずである。そこで、あなた方に質問する。神の権威は、何を象徴するか。神の権威は、神の身分を象徴するであろうか。神の権威は、神自身の力を象徴するであろうか。神の権威は、神自身に固有の地位を象徴するであろうか。あらゆる物事のなかで、あなたが神の権威を見出した事柄は何か。あなたは、どのようにして神の権威を見出したか。人間が体験する四季に関して、春夏秋冬の変化の法則を人間が変えることはできるだろうか。木々は春に芽吹いて花が咲き、夏に葉で覆われ、秋に実を結び、冬に葉を散らす。この法則を変えることができる者はいるだろうか。これは神の権威の一側面を反映するものだろうか。神は「光あれ」と言った。すると光があった。この光は、現在も存在するだろうか。その光が存在するのは、何のおかげであるか。無論、光が存在するのは、神の言葉と神の権威のおかげである。神が造った空気は、現在も存在するか。人間が呼吸する空気は、神から生まれたものか。神から生まれたものを取り去ることができる者はいるか。神から生まれたものの本質と機能を変えることができる者はいるか。神が定めた昼と夜、そして神が命じた昼と夜の法則を混乱させることができる者はいるか。サタンには、それができるだろうか。あなたが夜に眠らず、夜と昼を取り違えている場合であっても、それは依然として夜であり、一日の生活習慣を変えることはできても、昼と夜の繰り返しに関する法則を変えることはできない。そしてその事実は誰にも変えることはできないのではなかろうか。牛のように、ライオンに土を鋤かせることができる者はいるか。象をロバに変えることができる者はいるか。鷹のように、鶏に空を飛ばせることができる者はいるか。羊のように、狼に草を食べさせることができる者はいるか。（いない。）魚を水の無い地上で生活させることができる者はいるか。人間にそのようなことはできない。なぜか。それは、神が魚に対し、水中で生活するよう命じたからであり、それに従って魚は水中で生活している。魚は地上で生活できず、死ぬであろう。魚は、神の決めた限界を越えることができない。あらゆる物事には法則と限界があり、あらゆる物事には固有の本能がある。その本能は創造主により定められたものであり、人間が変えることも越えることもできない。たとえば、ライオンは常に人間社会から離れた荒野に棲む。ライオンが人間とともに生活し、人間のために働く牛のように従順かつ忠実となることは無い。象とロバは両方とも動物であり、4本の足があり、空気を呼吸するが、両者は種類が異なる。なぜなら、神が象とロバを異なる種類に分け、それぞれ個別に本能があり、したがってロバを入れ替えることは不可能だからである。鶏には鷹と同様に脚と翼があるが、鶏は決して空を飛ぶことができない。鶏が飛んだとしても、せいぜい木に留まるまで程度である。そうしたことは、動物の本能により決定

される。また、こうした事柄の原因が、神の権威による命令であることは言うまでも無い。

現在の人間の発達状況においては、人間の科学が「繁栄している」と言える。また、人間による科学的追求の成果は「素晴らしい」と言えるであろう。ここで述べるべき事は、人間の能力は、かつて無いほどまでに高まったが、人間が未だに科学的に達し得ない事柄がある、ということである。人間は航空機、旅客機、原子爆弾などを作り上げ、宇宙空間へと進出し、月面を歩き、インターネットを発明し、高度な技術が採用された生活様式のなかで生活しているものの、人間は、呼吸する生物を未だに作り得ない。あらゆる動物の本能と、動物が生きる上での法則、そして生物の生死の循環は、すべて人間の科学により制御することが不可能なものである。ここで、人間の科学がいかに高度なものへと進化したとしても、人間の科学は創造主の心とは比較にならず、創造主による創造の奇跡や、神の権威の力を解明することは不可能である、と言わなくてはならない。地球上には海が多数あるが、海が限度を超えて地上に来ることは無い。なぜなら、神が海に対して限界を定めたからである。海は神が命じた場所に留まり、神の許可なくして自由に移動することはできない。神の許可無くして、海と陸が侵害し合うことはできず、神が動いて宜しいと述べた時に限り、移動することが可能となり、海がどこへ移動して留まるかは、神の権威により定められる。

端的に言えば、「神の権威」とは、神の心次第であることを意味する。神には何をどのように行うかを決定する権利があり、それは神の心が望む方法により行われる。万物の法則は、人間次第ではなく、神次第であり、人間はその法則を変えることもできない。万物の法則は、人間の意志で変えることができず、しかし神の心、知恵、そして命令により変えられるものであり、これは誰も否定できない事実である。天と地、万物、宇宙、星の輝く空、四季、人間にとって見えるものと見えないものは、すべて神の権威に基づき、神の命令、定めに従い、かつ創造の初めの法則に従って、一切不具合無く存在し、機能し、変化する。こうした物事の法則や、それらの機能が基づく固有の過程を変更することができる人間や物事は存在しない。これらのものは全て神の権威により現れ、同様に神の権威により消滅する。これがまさしく神の権威である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

6. 神による統治下において、万物は神の権威と経営により存在し、消滅する。密かに出現して消滅する物事もあり、人間はそうした物事の発生源やそれらが従う原理を把握できず、ましてやその出現や消滅の理由を知ることなど出来ない。人間は万物のうち

に出現する物事すべてを目撃し、聞き、経験することが可能であり、またそうした物事は全て人間と関与しており、さらに人間は様々な現象について無意識のうちに異常や規則性、異様ささえも捉えるものの、人間はその背景にある創造主の旨や心について、何も知らない。そうした物事の背後には様々な経緯と隠された事実がある。人間は創造主から遠く離れてしまい、創造主の権威が万物を支配しているという事実を認めないので、創造主の権威の下で発生する物事を、人間は決して知ることも理解することもできない。神による支配と統治は、大部分が人間の想像、知識、理解の範囲や、人間の科学により到達可能な範囲を超越しており、被造物である人類の能力が対抗できるものではない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

7. 聖句には「わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。」とある。創造主は人間に対してこの通りの言葉を語った。神がこのように述べると、人間の前に虹が出て、それは現在も存在する。皆その虹を見たことがあるであろう。では、虹を見たとき、虹がどのように現れるか知っているだろうか。虹がどのように現れるか、あるいはどこから現れるか、それがどこにあるかは、科学では証明出来ない。それは、虹が創造主と人間との間の契約のしるしだからである。その契約には科学的根拠は不要であり、虹は人間により造られた物では無く、人間は虹を変えることもできない。虹は、神が言葉を述べた後に、創造主の権威が継続しているものである。創造主は、独自の方法により、神と人間との契約を遵守したので、神が立てた契約のしるしとして神が虹を用いたことは、天の法則と天の命令であり、その法則と命令は、創造主にとっても、造った人間にとっても永遠に不変である。しかし、この変えることのできない法則は、神による万物創造後における創造主の権威の現れであり、創造主の権威と力は無限であることを言わなくてはならない。神が虹をのしるしとして用いたことは、創造主の権威の継続であり、その延長である。それは神が言葉により行なったもうひとつの業であり、神が言葉により人間と立てた契約のしるしである。神は人間に対して、神が何を行い、それをどのような方法で実現すると決めたかを人間に対して述べ、それは神の言葉に従って実現された。こうした力は神のみにあり、神が言葉を述べてから数千年が経過した現在も、神の言葉により述べられている虹を見ることができる。神が述べたこの言葉により、それは現在まで変えられることが無かった。この虹を消すこと、その法則を変えることができるものはいらず、虹は神の言葉のために存在する。これはまさしく神の権威である。「神は、神の言葉通りを実行し、神の言葉は実現され、

実現された物事は永遠に継続する。」現在も存在する虹は、そのことを明確に表しており、神の権威と力の明確なしるしであり特徴である。被造物には、そうしたしるしや特徴を持つ物はなく、そのような特徴やしるしは見られず、被造物以外の物のいずれにも、そうしたしるしや特徴は見られない。そうしたしるしや特徴は唯一の神のみにあるものであり、そうしたしるしや特徴により、創造主のみにある身分と本質と、被造物の身分と本質とが区別される。同時に、そうしたしるしや特徴は、神自身を除いて、被造物やそれ以外の物のいずれも決して超えることができないものである。

神が人間との契約を立てたことは、極めて重要な業であり、人間に真実と神の心を伝えるために用いた業であり、それについて、神は、神が人間との間で契約を立て、その契約を誓うために特別なしるしを用いるという、独自の方法を使った。この契約が立てられたことは、素晴らしいことであろうか。またそれは、どの程度素晴らしいことであっただろうか。この契約の特別な点は、この契約が、人間と人間、組織と組織、国と国の間で立てられた契約でなく、創造主と人類全体の間で立てられたものであり、創造主が万物を完全に破壊する日まで継続して有効なものであることにある。この契約を誓ったのも、維持するのも創造主である。つまり、人間と立てた「虹の契約」のすべてが、創造主と人間との間の対話に基づいて履行され、それは現在も続いているということである。被造物は、創造主の権威に服し、従い、また創造主の権威を信じ、感謝し、証しをし、讃美する以外に、何ができるであろうか。このような契約を立てる力を持つものは、唯一の神以外に無い。幾度となく出現する虹は、創造主と人間との間の契約を人間に知らせ、その契約について人間の注意を喚起するものである。創造主と人間との間の契約が継続的に現れることにより人間に対して示されているのは、虹でも契約自体でもなく、変えることのできない創造主の権威である。幾度となく出現する虹は、隠された場所における創造主の驚異的かつ奇跡的な業を証明すると同時に、色あせず、変わることの無い創造主の権威を力強く反映するものである。虹は、創造主のみにある権威の別の側面を示すものではないだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

8. 創世記第十八章18節「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか」を読んで、神の権威を感じることができただろうか。創造主の非凡さを感じることができただろうか。創造主が至高の存在であることを感じる事ができただろうか。神の言葉は確実である。神がそのような言葉を発するのは、成功を確信しているからではなく、それをあらわしているのでもない

。こうした言葉は、神の言葉の権威を証明するものであり、神の言葉を実現する命令である。ここでは、注意すべき表現が2つある。神が「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。」と述べた時、これらの言葉に曖昧な要素はあるだろうか。これらの言葉に懸念の要素はあるだろうか。これらの言葉に恐れ要素はあるだろうか。神の言葉には「必ず～となって」と「～みな、彼によって」という語からわかるように、そうした人間特有の要素は、創造主とは全く無縁である。誰かの幸運を願う時にこうした語句を用いる者はいらず、またこれほどの確信を持って強大な国により恵みを授けようとしたり、その誰かのために世界のすべての国民が祝福されると約束したりする大胆な者はいない。神の言葉が確かであればあるほど、その言葉は何かを証明するものとなる。それでは、その何かとは何であろうか。これらの言葉は、神にはそうした権威があること、また神の権威はそうした事を実現させることができること、そしてその実現は不可避であることを証明している。神は、アブラハムを祝福した全ての事柄について、何の躊躇もなく心において確信していた。さらに、その全てが神の言葉に従って実現されることとなり、いかなる力も、それを変えたり、阻害したり、不十分なものにしたりすることはできない。何が発生したかを問わず、神の言葉が実現され、達成されることを破棄したり、そうした実現や発生に影響を与えたりすることができるものは無い。まさしくこれが、創造主が述べた言葉が持つ力であり、人間に否定することを許さない創造主の権威である。これらの言葉を読んでも、疑念を感じるであろうか。これらの言葉は神が述べたものであり、神の言葉には力、威厳、そして権威がある。こうした力と権威、そして事実の実現の不可避性は、被造物やそれ以外の物のいずれもが、達成することも超越することもできないものである。このような口調で対話できるのは創造主のみであり、神の約束は虚言や無根の戯言ではなく、あらゆる人間や物が超越できない、独自の権威であることが事実により証明されている。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

9. 神が「大いにあなたの子孫をふやして」と述べた場合、それは神がアブラハムと立てた契約であり、「虹の契約」と同様に、それは永遠に実現されるだけでなく、神のアブラハムとの約束でもある。この約束を実現させる資格があり、実現させることが可能なのは、神のみである。人間が信じるかどうか、受け容れるかどうか、どのように考えるかを問わず、これらの約束はすべて神の言葉通りに履行される。神の言葉は、人間の意志や考えの変化によって変わることが無く、人間や物事の変化のせいで変わること

も無い。万物は消え去るであろうが、神の言葉は永遠に存在する。これに対し、万物が消滅する日は、まさに神の言葉が完全に履行される日である。なぜなら、神は創造主であり、神には創造主の権威と力があり、万物とあらゆる生命力を支配しているからである。神は、無から何かを出現させることも、何かを無とすることも可能であり、神は万物の生から死への推移も支配しているので、神にとって誰かの種を増やすことは何よりも容易なことであった。これは人間にとっておとぎ話のように空想的なことに思えるが、神にとって、神が行うと決定したこと、約束したことは、空想でもおとぎ話でもない。それは、神が既に見た事実であり、確実に実現されるものである。このことが理解できるであろうか。アブラハムの子孫が無数にいたことは事実により証明されているだろうか。またそれは、どの程度多数なのであるだろうか。神が述べたように「天の星のように、浜べの砂のように」というほどに多数であっただろうか。その子孫は、あらゆる国々と地域、世界のいたるところに広まったであろうか。また、この事実は何によって実現されたであろうか。それは、神の言葉の権威により実現されたであろうか。神の言葉が述べられてから数百年あるいは数千年の間、神の言葉は継続的に実現され続け、事実となり続けてきた。これが神の言葉の力であり、神の権威の証である。最初に神が万物を創造した時、神は「光あれ」と述べ、それに続いて光が現れた。これは極めて迅速に起こった事で、極めて短時間のうちに実現され、その実現には全く遅延が無かった。神の言葉の効力は即時的なものである。これらは両方とも神の権威を示すものだが、神がアブラハムを祝福した時、神は神の権威の別の本質を、人間が理解できるようにし、創造主の権威が計り知れないことを理解させ、さらに神は創造主の権威のうち、一層現実的であり、絶妙な側面を理解させた。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

10. 神の権威は点滅したりするものでも、行ったり来たりするものでもなく、神の権威がどの程度偉大であるかを計測出来る者はいない。どの程度時間が経過したかを問わず、神がある者を祝福した場合、その祝福は継続し、その継続は神の権威が計り知れないことの証拠となり、創造主の尽きることの無い生命力の再来を、人間が幾度となく目の当たりにすることが可能となる。神の権威の表示は、それぞれ神の言葉の完全な証明であり、言葉は万物と人間に対して証明された。さらに、神の権威により実現された全ての物事が比類無く優れており、完璧であった。神の心、神の言葉、神の権威、そして神が実現したあらゆる業は比類の無い美しい光景であり、被造物にとって、人間の言葉では、その重要性和価値を表現できなかった。神がある者と約束した場合、その者の

住む場所、その者の行動、約束を受ける前または後のその者の背景、その者の経歴、あるいは生活環境での変動は全て、神自身の手の甲のように熟知されている。神の言葉が述べられてから経過した時間を問わず、その言葉は、神にとってたった今述べられたかのようなものである。つまり、神には、神が人間と約束したこと全てについて、その約束が何であるか、完全に実現するまでにどの程度時間を要するかを問わず、その約束を追跡し、支配し、実現する力と権威がある。また、その約束の実現が影響を与える時間、地理、人種などの範囲がどの程度であるかを問わず、その約束は実現され、現実となり、さらにその実現において、神は全く努力を必要としない。この事実により、何が証明されるであろうか。それは、神の権威と力が宇宙全体と人類全体の支配に十分であることである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

11. 神は、アブラハムとヨブを祝福した後、その状態に留まることも、使いを働かせて結果がどうなるかを待っていただけても無かった。それとは正反対に、神が言葉を述べるとすぐに、神の権威の指針に従い、神が意図していた業に万物が応じ、神が必要としていた様々な人や物事が準備された。つまり、神の口から言葉が述べられるとすぐに、神の権威が地の全域で行使され始め、神は、アブラハムとヨブとの約束を実現するために、方向性を定める一方で、神が実行を計画していた物事の手順や主な段階それぞれに必要とされる適切な計画や準備も行なった。この時、神は使いだけでなく、神が創造した万物も操作した。つまり、神の権威が行使された範囲は、使いが含まれていたのみならず、万物が含まれており、神が実現を意図していた業に応じるために万物も操った。これが、神の権威が行使された具体的な様式であった。あなた方の想像では、神の権威について、神には権威と力があるので、神は第三の天や一定の場所に留まり、具体的な作業をする必要は無く、神の業は、すべて神の考えの中で完了された、と認識している者がいるであろう。また、一部の者は、神はアブラハムを祝福したが、神は何もする必要が無く、言葉を述べるだけで十分であった、と信じているであろう。実際の出来事は、そうしたものであったでしょうか。明らかにそうではない。神には権威と力があるものの、神の権威は真実であり、本物であり、空虚なものではない。神の権威と力の信ぴょう性と現実性は、神による万物創造や万物の支配、そして神が人間を導き、経営する過程において、次第に明示され、具体化された。神の人間や万物に対する支配のあらゆる方法や観点、詳細、神が実現されたすべての業、そして神の万物に関する理解により、実際に神の権威と力が空虚な言葉では無いことが証明された。神の権威と力は万物

に現され、継続的に明示された。こうした顕現と明示は、神の権威の実際の存在を物語るものである。なぜなら、神は常に神の権威と力を用いて神の業を継続し、万物に命令し、万物を支配しており、神の力と権威は、天使や神の使いが代理になれるものではないからである。神は、どのような祝福をアブラハムとヨブに与えるかを決定した。それは、神次第であった。神の使いが自らアブラハムとヨブを訪れたが、彼らの行動は神の命令、神の権威に従い、神の支配に従っていた。人間には、聖書の記録から、神の使いがアブラハムを訪れ、ヤーウェ神自らは何も行っていないように思われるが、実際は、真に力と権威を行使しているのは神自身であり、これについては人間にとって疑念の余地が無い。天使や使い達には大きな力があり、奇跡や、神から命じられた事を行っているのが分かるが、彼らの行動は、神の命令を遂行するためのものに過ぎず、決して神の権威の明示では無い。なぜなら、創造主の持つ、万物を造り、支配する権威を持つ人間や物は存在しないからである。そうしたわけで、創造主の権威を行使できる人間や物は存在しない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

12. その点について、「こう言いながら、大声で『ラザロよ、出てきなさい』と呼ばれた。すると、死人は……出てきた。」という聖書のこの一節を検討しよう。主イエスがこの業を行った時に言ったのは、「ラザロよ、出てきなさい」のひと言であった。その後ラザロが墓から出て来たが、これは主のひと言で達成された事であった。この時、主イエスは祭壇を作ることも、それ以外の業を行うこともなかった。主は、そのひと言を述べただけであった。これは奇跡と呼ぶべきであろうか、それとも命令と呼ぶべきであろうか。それとも、これは何らかの魔術であったのだろうか。これは表面的には奇跡であると言うことができ、現在の観点から見ても、奇跡だと言えるであろう。しかし、無論これを、魂を死人から呼び戻す呪文とも魔術とも呼べないことは確実である。この奇跡は、創造主の権威を実証する、ごく普通の些細な証明である、というのが正しい。これは神の権威であり、能力である。神には、ある者を死なせ、その魂を身体から出してハデスその他の然るべき場所へ還らせる権威がある。ある者がいつ死ぬか、その者がどこへ向かうかを決めるのは、神である。神は、こうした事柄をいつでもどこでも行うことができる。神は人間や物事、空間、場所の制約を受けない。神は望むままに事を行うことができる。なぜなら、あらゆる物や生き物は神の支配下にあり、あらゆる物が神の言葉と権威により生き、死ぬからである。神は死者を復活させることができるが



、これもまた、神が時間と場所を問わず、いつでも出来ることである。これが、創造主のみが持つ権威である。

ラザロを死から復活させるなど、主イエスが業を行った時、イエスは、人間やサタンに対して、人間の生死など、人間の全ては神によって決められているということ、そして神が受肉している場合であっても、目に見える物質的世界も、目に見えない霊的世界も、依然として神が支配していることを、人間とサタンに対して証明し、知らしめることを目的としていた。これは、人間の全てはサタンの支配下にはないことを、人間とサタンに対して知らしめるためである。またこれは神の権威の啓示であり、証明であり、さらに人間の生死に関する事柄は、全て神により支配されていることを全てのものに示す手段である。主イエスによるラザロの復活のような業は、創造主が人間を教え導くひとつの手段であった。これは、神が自身の力と権威を用い、人間を指導し、人間に対して施す、実際の行為であった。またこれは創造主が言葉を用いずに、創造主が万物を支配しているという真理を人間が理解できるようにするための手段であった。さらに、これは神による以外に救いは存在しないということ、実際の業により人間に対して伝える手段であった。こうした神が言葉無しで人間に教えを授ける手段は永遠に続く。こうした教えは消える事がなく、人間の心に色あせる事のない衝撃と啓示が与えられる。ラザロの復活は神を褒めたたえた。神に付き従う者すべてに、それは大きな衝撃を与えるものである。ラザロの復活により、この出来事を深く理解する人々すべての心に人間の生死を支配できるのは神のみであるという理解と認識が定着する。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

13. 神には権威と力があるものの、神は自身の業に対して厳格であり、原則を固守し、言葉の通りにしている。神の厳格さと神の業の原則では、創造主が侵害不可能であること、そして創造主の権威が無敵であることが示されている。神には至高の権威があり、万物が神の支配下にあり、神には万物を支配する力があるが、神は、かつて自身の計画を害したことも混乱させたことも無く、神が権威を行使する時は、常に神自身の原則に厳密に従い、神の口で述べた言葉に従い、神の計画の段階と目的に従っている。神により支配されている万物もまた、神が権威を行使するときの原則に従っており、神の権威の定め例外となる人間や物は存在せず、神の権威が行使される際の原則を変更できる人間や物が一切存在しないことは、言うまでも無い。神の観点から見ると、祝福された者は、神の権威により多くの財産を受け、のろわれた者は神の権威による罰を受ける。神の権威の支配下においては、神の権威行使の例外となる人間や物は存在せず、神

の権威が行使される際の原則を変更できる人間や物も一切存在しない。創造主の権威は、いかなる要素の変化によっても変更されず、同様に、神の権威が行使される際の原則は、いかなる理由によっても変更されない。天と地に大規模な変動が発生する可能性もあるが、創造主の権威は不変であり、万物が消滅する可能性もあるが、創造主の権威は決して消滅しない。これが創造主の不変であり侵害不可能な権威であり、まさに創造主固有のものである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

14. あなたがたが毎日どこへ行き、何をして、誰と会い、何を見て、何を言うか、あなたがたに何が起こるか、といった事柄を予測出来るであろうか。人間はそうした事柄の発生を予測することができず、ましてそれらがどのように展開してゆくかを予測することは出来ない。人生において、予期せぬ出来事は日常的に発生する。こうした日常的に起こる変化や、そうした変化の発生のかた、発生後の展開形態は、何ら規則性無く発生する物事は無く、これらの物事が辿る発展過程やその必然性は、人間の意志で変えられないということを、人類に対して継続的に喚起するものとなっている。あらゆる出来事は、人間に対する創造主の訓戒や、人間は自分自身の運命を支配できないという知らせを伝達すると同時に、自らの運命を掌握しようとする人間の大それた、そして無意味な野望や願望に対する反証でもある。こうした出来事は、人の耳元に何度も平手打ちを受けるように、人間に対して、誰が最終的に人間の運命を支配しているかを強制的に再検討させるものである。人間の野望や願望が繰り返し阻まれ、砕かれてゆくにつれ、結果として人間は、待ち受ける運命や、現実、天の意、そして創造主による統治を、無意識のうちに自然と受け入れる。こうした日常的な変化から全人生の運命に至るまで、創造主の計画や統治を明示しないものは無い。すなわち、「創造主の権威は超越不可能である」という知らせを伝えないもの、「創造主の権威は至高のものである」という恒久の真理を伝えないものは存在しない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

15. 誰であれその者が成育時に会おう人々や遭遇する物事は、すべて必然的に創造主の采配と計画に関連している。人間はそうした複雑な相互関係を予測することも、制御することも、推測することも出来ない。ある者の成育環境には様々な物事や様々な人々に関連し、そうした広大な網の目のように広がる関連性を用意したり、指揮したりすることが出来る者はいない。創造主を除き、いかなる人間や物事も、様々な人々、出来事、物事の発生、存在、消滅を制御することが出来ず、ある者の発育を創造主により定

められた通りに形成し、人の育成環境を形成し、創造主による経営の働きに必要とされる様々な役割を造り出して人間がその使命を完遂するための堅牢な基盤を固めるのは、極めて広大な網の目のような関連性である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

16. 人間は、自分が成長する際に啓発や影響を受ける人物や要素を選択出来ない。人間は、どのような知識や技能を身に付けるか、何を習慣とするかを、選択出来ない。人間は、誰が自分の両親や親戚となるか、自分がどのような環境で成長するかに干渉する余地は一切無く、他の人々との関係、出来事、周囲の物事、またそうした物事が自分の発達にどのような影響を及ぼすかは、すべて自分で制御出来る範囲外にある。それでは、こうした事柄は誰が決めるのであろうか。こうした事柄を事前に決めるのは誰だろうか。人間には、こうした事柄を選択することも、自分で決めることもできず、また明らかに自然と決まるものでも無いので、こうした事柄の形成は創造主の掌中にあることは言うまでも無い。創造主は、各人の出生する具体的な状況を予め定めるのと同様に、各人が成長する具体的な状況も予め定めることは言うまでも無い。ある者の出生により、その者の周囲の人々や出来事、物事が変化する場合、必然的にその者の成長や発達もまた、それらの人々や出来事、物事に影響を与える。たとえば、貧しい家庭に生まれるが、裕福な環境で成長する人々がいる一方で、裕福な家庭に生まれるが、その家庭の財産が減ってゆき、貧しい環境で育つ人々もいる。出生が一定の法則により管理されている者はおらず、必然的な一定の状況下で成長する者もいない。こうした物事は人間が想像したり制御したり出来るものではなく、人間の運命の結果であり、運命により決定されるものである。無論、根本的にそうした物事は、創造主によりその者の運命に予定されている。その者の運命の創造主による統治と計画により決定されている。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

17. ある者がその両親を離れて独立する時、その者が直面する社会の状況、その者が得る職業や経歴は、共に運命により定められ、その者の両親とは無関係である。大学で有利な学部を選択し、卒業後は満足できる職に就いて、人生の旅路の第一歩で成功を収める者もいる。様々な技能を学んで身に付けたが、自分に適した職や役職を得られず、ましてや経歴を積むなど問題外で、人生の旅路に就いてすぐに、何をしても挫折感を味わい、様々な問題に悩まされ、先行きが暗く、人生が不確かな者もいる。熱心に勉強に励んでも、高等教育を受ける機会をあと少しの所で逃してしまい、その後の成功運は失われたように思われ、人生の旅路における初心の志が消沈する者もいる。先行きが順

調か困難かが分からなくなった時<sup>14</sup>、そこで始めて、人間の終着点は実に様々だと実感し、生活に希望と恐れを抱く。それほど優れた教育を受けていないにもかかわらず、著書を出版し、ある程度名声を得る者や、ほぼ無学でありつつ事業で生活できるだけの金額を稼ぐ者もいる…。自分が選ぶ職業や、生計を立てる手段などについて、その選択に成功するか失敗するかを、人間は制御できるであろうか。人間が望み、決定した通りになるだろうか。大部分の者は、労働時間を減らし、収入を増やしたい、日照りや雨の中で骨折って労働したくない、身なりを良くしたい、目立ちたい、他人よりも優れた存在になりたい、家の名を上げたいと思う。人間の願望は極めて完璧であるが、人生の旅路の一步を踏み出した時、人間の宿命がどれほど不完全であることを認識するようになり、また自分の将来に大胆な計画を立て、大それた夢を抱くことが出来ても、それを叶える能力や力を持つ者や自分の将来を制御する立場にある者はいないという事実を、本当の意味で始めて理解する。自分の夢と直面する現実には常に差があり、物事が自分の思い通りになることは決して無い。そうした現実直面するので、人間は決して満足することが無い。自分の暮らし向きや将来のために、考えられ得る限りの手を尽くし、大いに努力し、大いに犠牲を払って自らの運命を変えようとする人々もいる。しかし、自らの多大な努力により自分の夢や願望を叶えられたとしても、結局のところ自分の運命は変えられず、いかに根気強く努力したとしても、宿命により決められた物事は超越出来ない。能力や知能指数、意志の力の差異に関係なく、人間は運命において皆平等であり、偉大か取るに足りない人間か、背が高いか低いか、高貴か下賤かによる差別は無い。ある者が従事する職業、ある者の生業、ある者が生涯にわたって蓄える富は、その者の両親や才能、努力、野望によって決まるものではなく、創造主により予め定められている。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

18. 子に対する両親の責任は、出生と子育てのほか、単に子に正式な成育環境を与えることである。なぜなら、創造主の予定を除き、人間の運命に関係する物事は無いからである。ある者の将来がどのようになるかを制御出来る者はいない。その者の将来は遙か以前に定められ、その者の両親でさえも変えられない。運命に関しては、人間は皆独立しており、各人には独自の運命がある。したがって、ある者の両親がその者の運命を阻むことも、その者が人生で担う役割に何らかの影響を与える事も出来ない。その者が生まれる家庭や、その者の成育環境は、その者の人生における使命を果たすための前提条件でしか無いと言えるであろう。そうした物事は、何らかの形でその者の人生にお

ける運命を決めたり、どのような宿命の中でその者が使命を果たすかを決めたりすることとは無い。したがって、ある者の人生における使命遂行を、その者の両親が助けることも、その者の人生で担う役割を、その者の親類が助けることも出来ない。その者の使命遂行方法や、どのような生活環境で役割を遂行するかは、その者の人生の運命のみにより決定される。つまり、創造主により予め定められたその者の使命に、その他の客観的条件が影響を与えることは無い。人間はみな、自分に特定の成育環境で成人に達し、段階的に自分自身の人生の道を歩み始め、創造主が各人のために計画した使命を果たし、自然と無意識のうちに人類の大海原へと入り、その生涯における役割を担い、そこで創造主の定めと統治のために、被造物として自分の責任を全うする。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

19. ある者の出生がその者の前世により運命づけられているとすれば、その者の死は、その運命の終焉となる。ある者の出生がその者のその人生における使命の始まりであるとすれば、その者の死は、その使命の終了となる。創造主は、ある者の出生の諸条件を定めているので、その者の死についても諸条件を定めていることは言うまでも無い。言い換えると、偶然生まれる者はおらず、予期されない死は無く、出生と死は必然的にその者の前世とその時の人生と関連している。ある者の出生の状況と死の状況は、両方とも創造主により予め定められたものであり、それらはその者の終着点、運命である。各人の死は、出生について言えるのと同様に、様々な特定の状況下で発生するので、人間の寿命、死亡の経緯や時刻は様々である。強健であるが早死にする者もいれば、虚弱であるが長生きして安らかに永眠する者もいる。不自然な原因で死ぬ者もいれば、自然な原因で死ぬ者もいる。自宅から遠く離れて死ぬ者もいれば、側にいる家族に看取られて最後に目を閉じる者もいる。空中で死ぬ者もいれば、地下で死ぬ者もいる。水中に沈む者もいれば、災害の犠牲者となる者もいる。朝死ぬ者もいれば、夜死ぬ者もいる。人間は、皆華々しい出生、輝かしい人生、栄誉ある死を望むが、自分の運命から脱したり、創造主による統治から逃れられたりする者はいない。これが、人間の運命である。人間は将来に向けて様々な計画を立てることができるが、出生と他界の時期や状況は誰にも計画できない。人々は死を回避し、拒否しようと最大限努力するが、死は人知れず静かに近付いて来る。自分の死期やどのように死ぬかを知る者はおらず、ましてや何処で死ぬかを知る者はいない。生死の力を持つのは人類では無く、自然界の生き物では無く、唯一の権威を持つ創造主であることは明らかである。人間の生死は自然界の法則の結果ではなく、創造主の権威による統治の結果である。

20. 神の権威の下では、全ての者が能動的あるいは受動的に神の統治と計画を受け入れるので、人生においてどれほどものがいたとしても、どれほど誤った道を進んだとしても、結局は創造主がその者のために定めた運命の範囲内に戻ってしまう。これが創造主の権威の凌駕することが不可能な性質であり、創造主の権威が万物を制御し支配する方法である。万物のいのちを支配する法則を担い、妨害されることなく人間が生まれ変わることを可能とし、毎日、毎年、世の中を変化させ、進歩させているのは、この凌駕不可能な性質と、この形態の制御と支配である。あなたがたは、こうした事柄全てを目のあたりにし、表面的に理解しているか、あるいは深く理解している。理解の程度は、真理に関する自分の経験と認識、そして神に関する自分の認識により異なる。真理の事実をどの程度知っているか、神の言葉をどの程度経験しているか、神の本質と性質をどの程度知っているかは、神による統治と采配に関するあなたの理解度を示すものである。神による統治と采配の存在は、人類がそれらに服従しているか如何に依存しているであろうか。神にこの権威があるという事実は、人間がそれに服従するか如何により決まるであろうか。神の権威は、状況を問わず存在する。つまり、あらゆる状況において、神は人間の運命その他あらゆるものを、神の考えと望みに従って支配し、計画する。これは人間が変化することで変化するものではなく、人間の意志に依存しないものであり、時間、場所、地理のいかなる変化によっても変えられることが無い。なぜなら、神の権威は、神の本質そのものだからである。人間が神による統治を知って受け入れられるかどうか、そしてそれに服従出来るかどうかは、神による人間の運命の統治という事実には少しも影響しない。つまり、神による統治に対して人間がどのような姿勢を取るかによらず、神が人間の運命と万物を統治しているという事実が変わることは無い。たとえ神による統治に服従しなかったとしても、依然として神はあなたの運命を操り、また、たとえあなたが神による統治を知ることが出来なくても、神の権威は依然として存在する。神の権威、そして神が人間の運命を統治しているという事実は人間の意志から独立したものであり、人間の好みや選択に従って変わることが無い。神の権威は全ての場所にあり、いつでも、どの瞬間も存在する。もし天と地が無くなるとしても、神の権威は決して無くならない。なぜなら、神は神自身であり、神に唯一の権威があり、神の権威は人間や出来事、物事、空間や地理による制限を受けないからである。神は常に神の権威を行使し、神の力を示し、神の経営（救い）の業を継続する。また神は、これまでと同様、常に万物を支配し、万物に必要なものを与え、万物を指揮する。そうした事柄は、誰も変えられない。それは事実であり、太古の昔から不変の真理であり続けている。

21. サタンが人間を墮落させるとき、あるいは留まることを知らない危害を加えるとき、神は何もせず傍観することも、神の選民を無視したり、見て見ぬふりをしたりすることもあります。サタンが行うことは、神にとって全て明瞭であり、神はその全てを理解しています。サタンが何をしても、サタンがどのような動向を引き起こしたとしても、神はサタンが何をしようとしているかを知っており、神はその選民を見捨てることは無いのです。神は、その代わりに、誰の気を引くこともなく、秘密裏に、静かに、必要なことすべてを行います。神が誰かに対して働き始める時、誰かを選ぶ時、神はそれを誰にも告げず、またサタンに告げることも無ければ、それを誇示することが無いのは、なおさらです。神は静かに、そして自然に必要なことを行うのみです。まず、神はあなたの家族を選びます。家族の背景はどのようなものか、あなたの両親や祖先は誰かといった事柄は、既に神により決定されています。つまり、そうした事柄は神が取り急ぎ決めたことではなく、遠い過去に始まった業です。神があなたの家族を選ぶと、神はあなたが生まれる日を選びます。今、神はあなたが産声を上げてこの世に生まれて来るのを、あなたの誕生を見、あなたが最初の言葉を口にするのを、あなたが躓きながら歩くことを覚えるのを見えています。あなたは最初の一步を踏み出し、その後もう一步を踏み出し、今では走ったり、跳んだり、話をしたり、自分の感情を表現できます。こうして人間が成長するにつれて、サタンの眼差しは獲物を睨む虎のように、人間ひとりひとりに注がれています。しかし神は働く時、人間や出来事、物事、場所、時間の制限を受けることが一切無く、神が行うべきこと、行なわなくてはならないことを行います。成長過程において、人が自分が好まない物事や疾病、挫折に遭遇することがあります。しかし、その道を進む時、あなたのいのちと将来は、完全に神の慈しみのもとにあります。神は、人生全体にわたってあなたの傍らにあり、あなたを守り、見守るという真の保証をあなたに与えます。あなたは、それを知らずに育ちます。あなたは新たな物事に接し、この世の中と人間を知るようになります。あなたにとってすべてが新鮮です。あなたは好きなことをするのを好みます。あなたは自分の人間性と生活環境の中で生活し、神の存在については一切の認識をもちません。それでも神はあなたが成長し、前進してゆく過程のすべてを見えています。あなたが知識を習得したり、科学を学習したりしている時でさえ、神はあなたの側から一步も離れることが無いのです。あなたは、他の人々と全く同様に、世界を知り、世界と接触するなかで、あなた自身の理想を確立し、趣味を持ち、興味の対象を持ち、高尚な大志を抱くようになります。あなたは、自分の将来について頻繁に思索し、自分の将来がどうなるかを思い描きます。しかし、その過程

で何があったとしても、神は全てをはっきりと見ています。あなたは自分の過去について忘れたかもしれませんが、神以上にあなたを深く理解している者はありません。あなたは神の見守る中で生活し、成長し、成熟します。この間、神の最も重要事項は、誰も気付くことができず、誰も知らないことです。神がそれについて、あなたに伝えることは当然ありません。では、この最も重要なこととは何ですか。それは、神がある人間を救う保証であると言えます。つまり、神はその人を救うことを望むので、神はそれを行う必要があります、その務めは人間にとっても神にとっても極めて重要なのです。それが何か知っていますか。あなたがたは、このことについて実感や概念が全く無いようなので、わたしが話します。あなたが生まれた時から現在に至るまで、神はあなたに対して多くの働きを行なってきましたが、神が行ったことを全て詳しく伝えることはありません。神はあなたに知らせることはなく、あなたに伝えませんでした。しかし、人間にとって、神の行いは全て重要です。神にとって、それは行うべき事です。神の心中には、神がなすべきことで、それらよりも遙かに重要なことがあります。それは、人間が生まれてから現在に至るまで、神はその人の安全を保証する必要があるということです。これを聞いても、あなたがたは完全に理解できないと感じ、「その安全とは、それほど重要なものなのか」と言うかも知れません。「安全」という言葉の文字通りの意味は何ですか。あなたがたは、それを平安である、災害や災難に遭遇することが無いことである、良い生活を送ることである、普通に生活することであるなどと理解しているでしょう。しかし、安全とはそれほど単純なものではないということを、あなたがたの心中で知らなければなりません。それでは、わたしがこのように話している、神が行うべきこととは一体何でしょうか。安全は、神にとって何を意味するのでしょうか。本当にあなたがたの安全の保証のことでしょうか。いいえ。それでは、神が行なうことは何でしょうか。この安全とは、あなたがサタンにより食い尽くされない、ということなのです。これは重要ですか。あなたはサタンに食い尽くされていませんが、そうであれば、これはあなたの安全に関連するのでしょうか。これはあなた個人の安全に関わり、それよりも重要な事はありません。サタンにより食い尽くされたなら、あなたの魂も肉も、もはや神に属しません。神はあなたをもはや救いません。神はそうした魂や人々を見捨てるのです。ですから、神が行うべき最も重要なことは、あなたの安全、あなたがサタンに食い尽くされないことを保証することだと言うのです。これは極めて重要ではありませんか。それでは、あなたがたはなぜ回答できないのですか。あなたがたは、神の大いなる優しさを感じる事ができないようですね。



22. サタンは神の権威に背いたことが一切無く、さらには神の指示と具体的な命令を注意深く聞き、それに従い、それに反することは無く、神の命令を自由に変えることも、当然ながら無かった。それは、神がサタンに対して定めた制限であり、したがってサタンが敢えてその制限を超えようとしたことは無い。これは神の権威の力ではなかろうか。これは神の権威を証しするものではなかろうか。サタンは、神に対してどのように振る舞うか、神をどのように見るかについて、人間よりもはるかに明確に理解していたので、霊の世界において、サタンは神の地位と権威を明確に理解しており、また神の権威の力と神の権威の行使が基づいている原則に関しても、深く理解していた。サタンがこうした神の権威や地位を見過ごすことも、何らかの形でそれに背くことも、神の権威を逸脱する行動を取ることも、決して無かった。また神の怒りに対抗することも一切なかった。サタンは元来邪悪で傲慢であるが、神がサタンに対して定めた限界を超えたことは無い。数百万年の間、サタンはそうした限界を固く守り、神からの指示や命令に全て従い、その限界を敢えて超えようとしたことは無い。サタンは悪意に満ちているにもかかわらず、腐敗した人間よりもはるかに「賢い」。サタンは創造主の身分を知っており、自らの限界も心得ていた。サタンの「従順な」行動から、神の権威と力は、サタンが背くことのできない天の命令であることが理解できる。また、まさにこの独自性と権威故に、万物が秩序にしたがって変化し、増加し、人間は神が立てた過程に従って生活し繁殖でき、この秩序を乱したり、この法則を変えたりすることができる人間や物が不在であることが分かる。なぜなら、人間や物はすべて創造主の手から現れ、創造主の命令と権威から現れたからである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

23. サタンは、その欲のある眼でヨブを見ていたが、神の許可が無ければ、ヨブの体毛の1本ですら触れることができない。サタンは生来邪悪かつ残酷であるが、ひとたび神がサタンに命令すると、サタンはその命令に従うほか無い。そうしたわけで、サタンがヨブのところに来たとき、サタンは羊の中の狼のように凶暴であったにもかかわらず、サタンは神が定めた限界を無視することも、神の命令に背く事も無く、サタンは、全ての行動において、神の言葉の原則と限度から逸脱することは無かった。これは事実ではなかろうか。この観点から見ると、サタンはヤーウェ神の言葉に背くことが無かったことが分かる。サタンにとって、神が述べた言葉は、すべて命令であり、天の法則であり、神の権威を示すものであった。なぜなら、神の言葉の背後には、神の命令に背いた者や天の法則を破った者に対する神の罰が暗示されているからである。サタンは、自

分が神の命令に背いた場合、神の権威から逸脱し、天の法則を破った報いを受けなければならないことを、はっきりと認識している。それでは、その報いとは、どのようなものであろうか。それは言うまでも無く、神による罰である。サタンのヨブに対する行為は人間を腐敗させるサタンの行動の縮図に過ぎず、サタンがそれらの行為を行っていた時、神が定めた限界と、神がサタンに対して命令した事柄は、サタンのあらゆる行動の背後にある原則の縮図に過ぎない。さらに、この一件におけるサタンの役割と立場は、神の経営の働きにおけるサタンの役割と立場の縮図に過ぎず、サタンがヨブを試した時の、サタンの神に対する完全な服従は、神の経営の働きに対して、サタンが少しも反抗しようとしなかったことの縮図に過ぎない。これらの縮図はあなた方に何を警告するだろうか。サタンを含めた万物のなかには、創造主が定めた天の法則や命令に背くことができるものは一切無く、また、こうした天の法則や命令に違反しようとするものは一切ない。なぜなら、服従を拒んだ者に対して創造主により科される罰に変更を加えたり逃れたりできる人間や物は存在しないからである。天の法則や命令を定めることができるのは創造主のみであり、それらを施行できるのも創造主のみであり、人間や物が背くことができないのは、創造主の力のみである。これが、創造主固有の権威であり、この権威は万物において至高のものであるので、「神は最も偉大であり、サタンはその次に偉大である」と言うことはできない。固有の権威を持つ創造主を除いて、神は存在しないのである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

24. サタンは、これまで数千年にわたって人間を腐敗させてきている。サタンは無数の邪悪を働き、何世代もの人々を騙し、また世界中で凶悪な罪を犯してきた。サタンは人間を虐げ、騙し、誘惑して神に謀反を起こさせ、何度も神の経営（救いの）計画を混乱させ、妨害してきた。それでもなお、神の権威の下で、万物やすべての被造物は神により定められた法則と規律を遵守し続けている。神の権威に比べれば、サタンの邪悪な性質とその蔓延は極めて醜く、不愉快であり、卑劣であり、取るに足りず、脆弱である。サタンは神により造られた万物の中を歩んでいるが、神の命令を受けた人間や物事に対して、ほんの僅かな変化さえも与えることができない。数千年が経過した現在、人類は神から授かった光りと空気を享受し、神自身から授かった息を呼吸し、神が造った花々や鳥たち、魚や昆虫を楽しみ、神から授かった全てを享受している。昼と夜が引き続き交互に入れ替わり、四季は通常通り移ろいでおり、今年の冬には、空を舞うガンの群れが渡り去ってゆき、次の年の春に舞い戻り、魚は河川や湖沼以外へと移動して生活

の場とすることなく、夏の日中にはセミが地上で魂を歌い上げ、秋には鈴虫が草の間で風に合わせて優しい歌を口ずさみ、ガンは群れを成し、鷹は単独で行動し、ライオンの群れは狩りを行うことで生命を維持し、ヘラジカは草原の草花から立ち去ることが無い。万物のなかでも、動物は、すべて行き来を繰り返しており、無数の変化が一瞬にして発生する。しかし、その本能と生存のための法則は不変である。動物は神の施しと糧により生きており、動物の本能を変えることや、動物の生存の法則を妨害することは、誰にもできない。万物の中で生きる人間はサタンにより腐敗し、騙されたものの、人間は依然として、神により造られた水、空気など、神により造られた全ての物を差し控えることができず、また人間は依然として神により造られた空間で生活し、繁殖している。人間の本能は、依然として不変のままである。人間は、見ることを眼に、聞くことを耳に、考えることを脳に、理解することを心に、歩くことを脚に、業を行うことを手に、それぞれ依存している。神の施しを人間が受け取れるように神が人間に授けられた本能や、人間が神と協力するために必要な能力、創造物としての義務を履行するために必要な能力は変わっておらず、人間の霊的な必要性、人間が自分達の起源を知りたいという願望、創造主による救いに対する人間の切望は、変わっていない。以上が、神の権威の下で生活し、サタンによる残酷な破壊を幾度となく経験してきた人間の現況である。人間はサタンによって踏み躪られ、また人間はもはや創造された時のアダムとエバのようではなく、知識、想像、観念など、神に反対する物事や、サタンのような墮落した性質に満たされているが、神の観点から見ると、人間は依然として神が造った時と同じ人間である。人間は依然として神により支配され、指揮され、神が定めた生涯から逸脱することなく生活しているので、神の観点から見ると、サタンにより腐敗させられた人間は、埃をかぶったようなもの、つまり空腹でお腹が鳴り、反応が少し遅くなり、従前よりも記憶力が悪くなり、少し年老いたに過ぎず、人間の機能と本能は、全く損傷していない。これが、神が救済しようとしている人間である。しかし、人間は創造主の呼ぶ声や言葉を聞くだけで、立ち上がってその言葉がどこから聞こえているかを探しまわるであろう。人間は、創造主の姿を見ただけで、その他のことは全く心に無くなり、全てを投げ出して、自らを神に捧げ、神のために命すら捧げるであろう。人間の心が、創造主の心からの言葉を理解したとき、人間はサタンを拒絶し、創造主の味方となるであろう。また人間が身体の穢れを完全に洗い流し、創造主による施しと糧を授かったとき、人間の記憶が蘇り、その時人間は、真に創造主の支配下に戻るであろう。

25. 人類の運命と万物の運命は、創造主による統治と密接に絡み合い、創造主の指揮と不可分の繋がりがあり、最終的にそれらの運命を神の権威から引き離して翻弄することはできない。人間は、万物の法則により創造主の指揮と統治を理解するようになり、生存の法則により創造主の統治を認識し、万物の運命により創造主がその万物に対する統治と支配を行使する方法に関して結論を得る。また人間は、人間と万物のライフサイクルによって、万物やあらゆる生物に対する創造主の指揮と采配を真に経験し、そうした創造主による統治や采配が、この世の法令や規則、制度その他の権力や威力よりも優先されるのを目の当たりにする。これに鑑みると、創造主による統治は、いかなる被造物も侵害出来ないものであり、いかなる権力も創造主によって予定された物事に干渉したり変更したり出来ないものであることを、人類は認めざるを得ない。人類や万物の何世代にもわたる生活や繁殖は、こうした神性の法則や規則の下で行われる。これは創造主の権威が真に具現化されたものではなかろうか。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

#### 脚注

a.原文に「分からなくなった」の語句は含まれていない。

## (I) 神の権威についての言葉

1. 神が万物の創造を始めた時から、神の力が現され、明示され始めた。なぜなら、神は万物を創造する際に、言葉を用いたからである。神が万物をどのように創造したか、なぜ創造したかを問わず、神の言葉により万物が出現し、確立され、存在した。そしてそれは創造主のみが持つ権威である。人間がこの世に出現する前、創造主は、自身の力と権威を用いて、人間のために万物を創造し、神の特別な方法により、人間に適した生活環境を整えた。神が行なった業は、すべて人間のための準備であり、やがて人間は神の息を授かる。すなわち、人間が造られる前、天、光、海、地や、小さな動物、鳥、様々な種類の昆虫や、バクテリアなど肉眼では見えないものを含めた微生物など、人間とは異なるすべての生物や創造物に対して、神の権威が示された。これらは、それぞれ創造主の言葉により生を受け、創造主の言葉により繁殖し、創造主の言葉により創造主の支配のもとで生活した。こうした創造物は、創造主の息を受けなかったものの、様々な形や構造で創造主から授かった命と活力を示している。またこうした生物や創造物は、創造主が人間に与えた話をする能力を授からなかったが、それぞれ創造主から授かった命を示す方法を授かっており、その方法は人間の言葉とは異なるものである。創造主の権威は、静止しているように見える物体が消えて無くならないよう、それに命の活力を与えるが、それ以上に、絶滅を避け、また創造主により授けられた生き残りのための法則や原則を世代を超えて受け継ぐよう、繁殖して増加する本能を全ての生物に授ける。創造主が神の権威を行使する様式は、厳密にマクロ的観点やミクロ的観点に固執せず、またいかなる形態にも限定されていない。神は、宇宙のはたらきを支配可能であり、万物の生死を支配し、そしてなによりも、万物を操作して神に仕えさせることが可能である。神は山、川、湖などのはたらきを支配することが可能であり、その中にある物を支配し、さらに万物が必要とする物を提供することも可能である。これが、創造主のみにある権威の、人間以外の全ての物に対する顕現である。こうした顕現は生涯に留まらず、終わることも中断することもなく、いかなる人や物によって変えられたり損なわれたり、加減されたりすることもない。創造主の身分に代わることができる者は存在せず、したがって創造主の権威は、いかなる創造物によっても代えられることができず、また創造物以外の物が得ることのできないものである。例として、神の使いや天使について検討する。彼らには、神の力が無く、いわんや創造主の権威は無い。なぜなら、彼らには創造主の本質が無いからである。神の使いや天使など創造物以外の物は、神に代わってある程度の業を行うことができるが、神の代理となることはできない。彼らには、

人間には無い力があるものの、彼らには神の権威が無い。すなわち、彼らには、万物を創造し、万物に命令し、万物を支配する神の権威が無い。したがって、創造された物以外のいかなるものも、神の独自性を代理することはできない。またそれと同様に、神の権威と力についても、創造された物以外のいかなるものも、その代理となることができない。あなたは、神の使いが万物を創造したなどということを、聖書で読んだことがあるだろうか。また、神が使いや天使に万物の創造を任せなかったのは、何故だろうか。それは、彼らには神の権威が無く、したがって神の権威を行使する能力が無かったからである。あらゆる被造物と同様、彼らもまた創造主の支配と権威の下にあり、したがって創造主は彼らにとっても神であり、主権者である。高貴であるか卑しいか、力が強いかわかり、神の使いと天使達の中に、神の権威を超えることの出来るものはいらず、したがって、彼らの中には創造主の身分の代理となることのできる者はいない。彼らが神と呼ばれることは決して無く、また創造主となることも無い。これは変えることのできない真理であり、事実である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

2. 宇宙、すなわち惑星、天の星は、すべて人類が出現する以前に、既に存在していた。マクロレベルでは、こうした天の物体は、神の支配下で、それらが存在している年月を通して、軌道を規則的に回り続けてきた。どの惑星が、何時、何処に移動するか、どの惑星が何時どのような役割を果たすか、どの惑星がどの軌道に乗るか、どの惑星が何時消滅するか、置換されるかなどといった事柄は、すべて寸分違わず正確に進行している。惑星の位置や惑星同士の間の距離は厳密な規則に従っており、正確なデータで説明可能である。惑星が移動する経路、速度、そして軌道の規則、特定の位置に到達する時刻は、正確に数値で表し、特定の法則により説明できる。数十億年にわたり、惑星は、これらの法則に全く逸脱することなく従ってきた。惑星の軌道や、惑星が従っている規則性を変化させたり中断させたりすることのできる力は存在しない。惑星の運動を律する特定の法則と、それを解明する正確なデータは、創造主の権威により事前に決定されており、惑星は創造主の統治と制御の下で、そうした法則に自然と従う。マクロレベルでは、ある程度の規則性やデータ、そして異常で説明出来ない法則や現象を見出すことは、人間にとってそれほど困難ではない。人類は神が存在することを認めず、創造主が万物を造り、支配しているという事実を受け入れず、さらには創造主の権威の存在を認めないにもかかわらず、人文科学者、天文学者、物理学者は、宇宙における万物の存在、そして万物の運動を律する原理と法則が、巨大で目に見えない暗黒のエネルギーに

より支配され、制御されているという結論に達することが益々多くなってきている。この事実により、人間は、こうした規則性の中に全能者が存在し、全てを指揮しているということに向き合い、認めざるを得なくなっている。彼の力は非凡であり、その素顔を見ることが出来る者はいないものの、彼は常に全てを支配し、制御している。彼による統治を超えることが出来る者や力は存在しない。こうした事実を鑑み、人間は万物の存在を支配する法則は人間が制御したり変えたり出来ないものであること、こうした法則は人間が完全に理解できないものであることを認める必要がある。さらに、そうした法則は自然に発生するものではなく、支配者により支配されている。こうした物事は、全て人間がマクロレベルで認識できる神の権威が表出されたものである。

ミクロ段階では、人間が地上で見る山々、川、湖、海、大陸、人間が体験する季節、植物、動物、微生物、人類を含めた地球上の万物は、全て神の権威の対象であり、神により支配されている。神による統治と支配の下においては、万物は神の旨に従って出現し、消滅し、その生命は全て特定の法則により管理され、その法則に従って生長し、繁殖する。これらの法則を超える人間や物事は存在しない。それは何故であろうか。それは神の権威のためであり、それが唯一の理由である。言い換えると、神の旨と言葉が理由であり、神自身が全てを行っていることが理由である。すなわち、こうした法則を出現させるのは神の権威と心であり、そうした法則は神の旨により移行し、変化し、そうした移行と変化は、神の計画のために発生し、消滅する。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

3. 神は、神が造った全ての物が出現し、神の言葉により確立し、そして徐々に変化し始めたのを見た。この時、神は、神が言葉により創造した様々な物や、神が遂行した様々な業について、満足していたであろうか。その答えは、「神は見て、良しとされた。」である。ここでは、何が分かるであろうか。「神は見て、良しとされた。」とは、何を示し、何を象徴するものでであろうか。神には、神が計画したことや、指定したことを実現させ、実現させると決めた目的を達成するだけの力と知恵がある。神がそれぞれの作業を完了した時、神は後悔していたであろうか。その答えも、「神は見て、良しとされた。」である。つまり、神は後悔の念を感じないだけでなく、むしろ満足していた、ということである。神は一切後悔しないとは、どのような意味であろうか。それは、神の計画や力、知恵は完璧であること、そしてこうした完璧さは、神の権威のみが達成可能であることを示している。人間が作業を行う時、人間は、神と同様に、その作業が良いと思うことができるであろうか。人間が行う作業が全て完璧となり得るだろうか。

人間が1度だけで完璧にすることのできる作業は、あるだろうか。人間が言うように、「完璧は有り得ず、比較的優れているに過ぎない」ので、人間が行う作業が完璧となることは、有り得ない。神が、神自身が行なった業が良いと判断した時、神が創造した物は、すべて神の言葉により造られたものであり、すなわち神が造った物全てに永久的な形があり、種類により分類され、恒久的に一定の位置、目的、機能が与えられたことについて、「神は見て、良しとされた。」のである。さらに、特にそうした創造物の役割と、神による万物の経営のなかで、それらの物が進むべき旅路は、神により既に命令され、変わることが無い。これは、創造主が万物に与えた、天の法則であった。

「神は見て、良しとされた。」この簡潔であり、それほど重視される事がなく、往々にして無視される言葉は、神がすべての生物に授けた、天の法則と天の命令である。この言葉は、創造主の権威を、より実践的かつ深く具現化したものである。創造主は、言葉により神が求めていることの全てを得て、実現しようとしていることの全てを実現することができるだけでなく、神が創造した全ての物をその手中に収め、神の権威により造った全ての物を支配することも可能である。さらに、すべてが系統的かつ規則正しいものである。また、神の言葉により全ての物が生き、死に、さらに、神の権威により神が定めた法則の中に存在した。これについては例外は無かったのである。この法則は「神はこれを見て、良しとされた」瞬間に始まり、創造主により廃止される日まで、神の経営（救いの）計画のために継続的に存在し、機能する。創造主のみにある権威は、万物を創造し、全ての物を出現させるよう命令する神の能力だけでなく、万物を支配し主権を握ることのできる能力、命と活力を与える能力、さらに、神の計画において神が創造する万物を、神が創造した世界の中で出現させ、完璧な形、完璧な生涯の構成、完璧な役割で、その世界に永遠に存在させる能力においても現れた。また、神の権威は、創造主の考えが時間、場所、地理など、いかなる制約も受けない方法で現れた。神の権威と同様、創造主のみにある身分は、永遠に変わることが無い。神の権威は、常に神のみにある身分を表し、その象徴であり、神の権威は、神の身分と共に、永遠に存在するのだ。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

4. 神の権威とは、神の力であると説明できる。まず、権威と力は、両方とも肯定・善であると断言できる。権威と力は、否定・悪と無関係であり、創造物やそれ以外の物と関連性が無い。神の力は、生命や活力のある、あらゆる形の物を造ることが可能であり、それは神の命により決定される。神は生命であり、したがって全ての生物の源であ



る。さらに、神の権威は、あらゆる生物を神のすべての言葉に従わせることができる。すなわち、神が述べた言葉に従って現れ、神の命令により生き、繁殖し、それ以後、神があらゆる生物を支配しあらゆる生物に命令し、このことから逸脱する物は永遠に存在しない。人間や物には、こうした力が無い。こうした力は神のみにあり、したがってその力を権威という。これは、創造主の独自性である。したがって、それが「権威」という言葉自体であれ、権威の本質であれ、それは神としか関連づけられない。なぜなら、権威は、創造主の固有の身分と本質の象徴であり、また創造主の身分と地位を示すものである。創造主以外に、「権威」という言葉と関連づけられる人間や物は存在しない。これが創造主に固有の権威の解釈である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

5. あなた方は、神の権威に関して、新たな認識を得ることができたであろうか。まず、今述べた神の権威と、人間の力との間に、相違点はあるであろうか。その相違点とは何であろうか。一部の人々は、それらは比較できないと言う。それは正しい。神の権威と人間の力は比較できないと言われているものの、人間の思考や思想のなかでは、人間の力が神の権威と混同されることが往々にしてあり、人々はこの両者を並べて比較する場合がある。これは、どのような状況であろうか。この両者のうち一方を他方に代えるというのは、人々は不注意に過ちを犯しているのではなかろうか。両者に関連性は無く、両者は比較できないが、人々は比較せずにはいられないのである。こうした状況は、どうすれば解決できるであろうか。真剣に解決策を見出したいと願うのであれば、神固有の権威を知ることである。創造主の権威を理解し知ることにより、あなたは人間の力と神の権威を同じ範疇で議論しなくなるであろう。

人間の力とは、何であろうか。簡潔に言うと、人間の力とは、人間の腐敗した性質や欲望、野望を拡大し、最大限に達成するための技能である。そうした技能は権威とみなされるであろうか。ある者の野望と願望がどれほど強く、成功であったとしても、その者に権威があるとは言えない。そうした自惚れや成功は、せいぜいサタンが人間の世界で行う茶番に過ぎず、サタンが神となる野望を果たすために、自らの祖先を演じる喜劇に過ぎない。

ここまでの議論を踏まえると、あなたは、神の権威を、どのように認識するようになったらうか。あなたは、ここまで伝えた内容から、神の権威に関する新たな認識を得たはずである。そこで、あなた方に質問する。神の権威は、何を象徴するか。神の権威は、神の身分を象徴するであろうか。神の権威は、神自身の力を象徴するであろうか。

神の権威は、神自身に固有の地位を象徴するであろうか。あらゆる物事のなかで、あなたが神の権威を見出した事柄は何か。あなたは、どのようにして神の権威を見出したか。人間が体験する四季に関して、春夏秋冬の変化の法則を人間が変えることはできるだろうか。木々は春に芽吹いて花が咲き、夏に葉で覆われ、秋に実を結び、冬に葉を散らす。この法則を変えることができる者はいるだろうか。これは神の権威の一側面を反映するものだろうか。神は「光あれ」と言った。すると光があった。この光は、現在も存在するだろうか。その光が存在するのは、何のおかげであるか。無論、光が存在するのは、神の言葉と神の権威のおかげである。神が造った空気は、現在も存在するか。人間が呼吸する空気は、神から生まれたものか。神から生まれたものを取り去ることができる者はいるか。神から生まれたものの本質と機能を変えることができる者はいるか。神が定めた昼と夜、そして神が命じた昼と夜の法則を混乱させることができる者はいるか。サタンには、それができるだろうか。あなたが夜に眠らず、夜と昼を取り違えている場合であっても、それは依然として夜であり、一日の生活習慣を変えることはできても、昼と夜の繰り返しに関する法則を変えることはできない。そしてその事実は誰にも変えることはできないのではなかろうか。牛のように、ライオンに土を鋤かせることができる者はいるか。象をロバに変えることができる者はいるか。鷹のように、鶏に空を飛ばせることができる者はいるか。羊のように、狼に草を食べさせることができる者はいるか。（いない。）魚を水の無い地上で生活させることができる者はいるか。人間にそのようなことはできない。なぜか。それは、神が魚に対し、水中で生活するよう命じたからであり、それに従って魚は水中で生活している。魚は地上で生活できず、死ぬであろう。魚は、神の決めた限界を越えることができない。あらゆる物事には法則と限界があり、あらゆる物事には固有の本能がある。その本能は創造主により定められたものであり、人間が変えることも越えることもできない。たとえば、ライオンは常に人間社会から離れた荒野に棲む。ライオンが人間とともに生活し、人間のために働く牛のように従順かつ忠実となることは無い。象とロバは両方とも動物であり、4本の足があり、空気を呼吸するが、両者は種類が異なる。なぜなら、神が象とロバを異なる種類に分け、それぞれ個別に本能があり、したがってロバを入れ替えることは不可能だからである。鶏には鷹と同様に脚と翼があるが、鶏は決して空を飛ぶことができない。鶏が飛んだとしても、せいぜい木に留まるまで程度である。そうしたことは、動物の本能により決定される。また、こうした事柄の原因が、神の権威による命令であることは言うまでも無い。

現在の人間の発達状況においては、人間の科学が「繁栄している」と言える。また、人間による科学的追求の成果は「素晴らしい」と言えるであろう。ここで述べるべき事は、人間の能力は、かつて無いほどまでに高まったが、人間が未だに科学的に達し得ない事柄がある、ということである。人間は航空機、旅客機、原子爆弾などを作り上げ、宇宙空間へと進出し、月面を歩き、インターネットを発明し、高度な技術が採用された生活様式のなかで生活しているものの、人間は、呼吸する生物を未だに作り得ない。あらゆる動物の本能と、動物が生きる上での法則、そして生物の生死の循環は、すべて人間の科学により制御することが不可能なものである。ここで、人間の科学がいかに高度なものへと進化したとしても、人間の科学は創造主の心とは比較にならず、創造主による創造の奇跡や、神の権威の力を解明することは不可能である、と言わなくてはならない。地球上には海が多数あるが、海が限度を超えて地上に来ることは無い。なぜなら、神が海に対して限界を定めたからである。海は神が命じた場所に留まり、神の許可なくして自由に移動することはできない。神の許可無くして、海と陸が侵害し合うことはできず、神が動いて宜しいと述べた時に限り、移動することが可能となり、海がどこへ移動して留まるかは、神の権威により定められる。

端的に言えば、「神の権威」とは、神の心次第であることを意味する。神には何をどのように行うかを決定する権利があり、それは神の心が望む方法により行われる。万物の法則は、人間次第ではなく、神次第であり、人間はその法則を変えることもできない。万物の法則は、人間の意志で変えることができず、しかし神の心、知恵、そして命令により変えられるものであり、これは誰も否定できない事実である。天と地、万物、宇宙、星の輝く空、四季、人間にとって見えるものと見えないものは、すべて神の権威に基づき、神の命令、定めに従い、かつ創造の初めの法則に従って、一切不具合無く存在し、機能し、変化する。こうした物事の法則や、それらの機能が基づく固有の過程を変更することができる人間や物事は存在しない。これらのものは全て神の権威により現れ、同様に神の権威により消滅する。これがまさしく神の権威である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

6. 神による統治下において、万物は神の権威と経営により存在し、消滅する。密かに出現して消滅する物事もあり、人間はそうした物事の発生源やそれらが従う原理を把握できず、ましてやその出現や消滅の理由を知ることなど出来ない。人間は万物のうちに出現する物事すべてを目撃し、聞き、経験することが可能であり、またそうした物事は全て人間と関与しており、さらに人間は様々な現象について無意識のうちに異常や規

則性、異様ささえも捉えるものの、人間はその背景にある創造主の旨や心について、何も知らない。そうした物事の背後には様々な経緯と隠された事実がある。人間は創造主から遠く離れてしまい、創造主の権威が万物を支配しているという事実を認めないので、創造主の権威の下で発生する物事を、人間は決して知ることも理解することもできない。神による支配と統治は、大部分が人間の想像、知識、理解の範囲や、人間の科学により到達可能な範囲を超越しており、被造物である人類の能力が対抗できるものではない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

7. 聖句には「わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。」とある。創造主は人間に対してこの通りの言葉を語った。神がこのように述べると、人間の前に虹が出て、それは現在も存在する。皆その虹を見たことがあるであろう。では、虹を見たとき、虹がどのように現れるか知っているだろうか。虹がどのように現れるか、あるいはどこから現れるか、それがどこにあるかは、科学では証明出来ない。それは、虹が創造主と人間との間の契約のしるしだからである。その契約には科学的根拠は不要であり、虹は人間により造られた物では無く、人間は虹を変えることもできない。虹は、神が言葉を述べた後に、創造主の権威が継続しているものである。創造主は、独自の方法により、神と人間との契約を遵守したので、神が立てた契約のしるしとして神が虹を用いたことは、天の法則と天の命令であり、その法則と命令は、創造主にとっても、造った人間にとっても永遠に不変である。しかし、この変えることのできない法則は、神による万物創造後における創造主の権威の現れであり、創造主の権威と力は無限であることを言わなくてはならない。神が虹をしるしとして用いたことは、創造主の権威の継続であり、その延長である。それは神が言葉により行なったもうひとつの業であり、神が言葉により人間と立てた契約のしるしである。神は人間に対して、神が何を行い、それをどのような方法で実現すると決めたかを人間に対して述べ、それは神の言葉に従って実現された。こうした力は神のみにあり、神が言葉を述べてから数千年が経過した現在も、神の言葉により述べられている虹を見ることができる。神が述べたこの言葉により、それは現在まで変えられることが無かった。この虹を消すこと、その法則を変えることができるものはいらず、虹は神の言葉のために存在する。これはまさしく神の権威である。「神は、神の言葉通りを実行し、神の言葉は実現され、実現された物事は永遠に継続する。」現在も存在する虹は、そのことを明確に表しており、神の権威と力の明確なしるしであり特徴である。被造物には、そうしたしるしや特

徴を持つ物はなく、そのような特徴やしるしは見られず、被造物以外の物のいずれにも、そうしたしるしや特徴は見られない。そうしたしるしや特徴は唯一の神のみにあるものであり、そうしたしるしや特徴により、創造主のみにある身分と本質と、被造物の身分と本質とが区別される。同時に、そうしたしるしや特徴は、神自身を除いて、被造物やそれ以外の物のいずれも決して超えることができないものである。

神が人間との契約を立てたことは、極めて重要な業であり、人間に真実と神の心を伝えるために用いた業であり、それについて、神は、神が人間との間で契約を立て、その契約を誓うために特別なしるしを用いるという、独自の方法を採用した。この契約が立てられたことは、素晴らしいことであろうか。またそれは、どの程度素晴らしいことであっただろうか。この契約の特別な点は、この契約が、人間と人間、組織と組織、国と国の間で立てられた契約でなく、創造主と人類全体の間で立てられたものであり、創造主が万物を完全に破壊する日まで継続して有効なものであることにある。この契約を誓ったのも、維持するのも創造主である。つまり、人間と立てた「虹の契約」のすべてが、創造主と人間との間の対話に基づいて履行され、それは現在も続いているということである。被造物は、創造主の権威に服し、従い、また創造主の権威を信じ、感謝し、証しをし、讃美する以外に、何ができるであろうか。このような契約を立てる力を持つものは、唯一の神以外に無い。幾度となく出現する虹は、創造主と人間との間の契約を人間に知らせ、その契約について人間の注意を喚起するものである。創造主と人間との間の契約が継続的に現れることにより人間に対して示されているのは、虹でも契約自体でもなく、変えることのできない創造主の権威である。幾度となく出現する虹は、隠された場所における創造主の驚異的かつ奇跡的な業を証明すると同時に、色あせず、変わることの無い創造主の権威を力強く反映するものである。虹は、創造主のみにある権威の別の側面を示すものではないだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

8. 創世記第十八章18節「アブラハムは必ず大きな強い国民となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか」を読んで、神の権威を感じることができるだろうか。創造主の非凡さを感じることができるだろうか。創造主が至高の存在であることを感じるることができるだろうか。神の言葉は確実である。神がそのような言葉を発するのは、成功を確信しているからではなく、それをあらわしているのでもない。こうした言葉は、神の言葉の権威を証明するものであり、神の言葉を実現する命令である。ここでは、注意すべき表現が2つある。神が「アブラハムは必ず大きな強い国民

となって、地のすべての民がみな、彼によって祝福を受けるのではないか。」と述べた時、これらの言葉に曖昧な要素はあるだろうか。これらの言葉に懸念の要素はあるだろうか。これらの言葉に恐れ要素はあるだろうか。神の言葉には「必ず～となって」と「～みな、彼によって」という語からわかるように、そうした人間特有の要素は、創造主とは全く無縁である。誰かの幸運を願う時にこうした語句を用いる者はいらず、またこれほどの確信を持って強大な国により恵みを授けようとしたり、その誰かのために世界のすべての国民が祝福されると約束したりする大胆な者はいない。神の言葉が確かであればあるほど、その言葉は何かを証明するものとなる。それでは、その何かとは何であろうか。これらの言葉は、神にはそうした権威があること、また神の権威はそうした事を実現させることができること、そしてその実現は不可避であることを証明している。神は、アブラハムを祝福した全ての事柄について、何の躊躇もなく心において確信していた。さらに、その全てが神の言葉に従って実現されることとなり、いかなる力も、それを変えたり、阻害したり、不十分なものにしたりすることはできない。何が発生したかを問わず、神の言葉が実現され、達成されることを破棄したり、そうした実現や発生に影響を与えたりすることができるものは無い。まさしくこれが、創造主が述べた言葉が持つ力であり、人間に否定することを許さない創造主の権威である。これらの言葉を読んでも、疑念を感じるであろうか。これらの言葉は神が述べたものであり、神の言葉には力、威厳、そして権威がある。こうした力と権威、そして事実の実現の不可避性は、被造物やそれ以外の物のいずれもが、達成することも超越することもできないものである。このような口調で対話できるのは創造主のみであり、神の約束は虚言や無根の戯言ではなく、あらゆる人間や物が超越できない、独自の権威であることが事実により証明されている。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

9. 神が「大いにあなたの子孫をふやして」と述べた場合、それは神がアブラハムと立てた契約であり、「虹の契約」と同様に、それは永遠に実現されるだけでなく、神のアブラハムとの約束でもある。この約束を実現させる資格があり、実現させることが可能なのは、神のみである。人間が信じるかどうか、受け容れるかどうか、どのように考えるかを問わず、これらの約束はすべて神の言葉通りに履行される。神の言葉は、人間の意志や考えの変化によって変わることが無く、人間や物事の変化のせいで変わることも無い。万物は消え去るであろうが、神の言葉は永遠に存在する。これに対し、万物が消滅する日は、まさに神の言葉が完全に履行される日である。なぜなら、神は創造主で

あり、神には創造主の権威と力があり、万物とあらゆる生命力を支配しているからである。神は、無から何かを出現させることも、何かを無とすることも可能であり、神は万物の生から死への推移も支配しているので、神にとって誰かの種を増やすことは何よりも容易なことであった。これは人間にとっておとぎ話のように空想的なことに思えるが、神にとって、神が行うと決定したこと、約束したことは、空想でもおとぎ話でもない。それは、神が既に見た事実であり、確実に実現されるものである。このことが理解できるであろうか。アブラハムの子孫が無数にいたことは事実により証明されているだろうか。またそれは、どの程度多数なのであるだろうか。神が述べたように「天の星のように、浜べの砂のように」というほどに多数であっただろうか。その子孫は、あらゆる国々と地域、世界のいたるところに広まったであろうか。また、この事実は何によって実現されたであろうか。それは、神の言葉の権威により実現されたであろうか。神の言葉が述べられてから数百年あるいは数千年の間、神の言葉は継続的に実現され続け、事実となり続けてきた。これが神の言葉の力であり、神の権威の証である。最初に神が万物を創造した時、神は「光あれ」と述べ、それに続いて光が現れた。これは極めて迅速に起こった事で、極めて短時間のうちに実現され、その実現には全く遅延が無かった。神の言葉の効力は即時的なものである。これらは両方とも神の権威を示すものだが、神がアブラハムを祝福した時、神は神の権威の別の本質を、人間が理解できるようにし、創造主の権威が計り知れないことを理解させ、さらに神は創造主の権威のうち、一層現実的であり、絶妙な側面を理解させた。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

10. 神の権威は点滅したりするものでも、行ったり来たりするものでもなく、神の権威がどの程度偉大であるかを計測出来る者はいない。どの程度時間が経過したかを問わず、神がある者を祝福した場合、その祝福は継続し、その継続は神の権威が計り知れないことの証拠となり、創造主の尽きることの無い生命力の再来を、人間が幾度となく目の当たりにすることが可能となる。神の権威の表示は、それぞれ神の言葉の完全な証明であり、言葉は万物と人間に対して証明された。さらに、神の権威により実現された全ての物事が比類無く優れており、完璧であった。神の心、神の言葉、神の権威、そして神が実現したあらゆる業は比類の無い美しい光景であり、被造物にとって、人間の言葉では、その重要性和価値を表現できなかった。神がある者と約束した場合、その者の住む場所、その者の行動、約束を受ける前または後のその者の背景、その者の経歴、あるいは生活環境での変動は全て、神自身の手の甲のように熟知されている。神の言葉が

述べられてから経過した時間を問わず、その言葉は、神にとってたった今述べられたか  
のようである。つまり、神には、神が人間と約束したこと全てについて、その約束が何  
であるか、完全に実現するまでにどの程度時間を要するかを問わず、その約束を追跡し  
、支配し、実現する力と権威がある。また、その約束の実現が影響を与える時間、地理  
、人種などの範囲がどの程度であるかを問わず、その約束は実現され、現実となり、さ  
らにその実現において、神は全く努力を必要としない。この事実により、何が証明され  
るであろうか。それは、神の権威と力が宇宙全体と人類全体の支配に十分であること  
である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

11. 神は、アブラハムとヨブを祝福した後、その状態に留まることも、使いを働か  
せて結果がどうなるかを待っていただけても無かった。それとは正反対に、神が言葉  
を述べるとすぐに、神の権威の指針に従い、神が意図していた業に万物が応じ、神が必要  
としていた様々な人や物事が準備された。つまり、神の口から言葉が述べられるとすぐ  
に、神の権威が地の全域で行使され始め、神は、アブラハムとヨブとの約束を実現する  
ために、方向性を定める一方で、神が実行を計画していた物事の手順や主な段階それぞ  
れに必要とされる適切な計画や準備も行なった。この時、神は使いだけでなく、神が創  
造した万物も操作した。つまり、神の権威が行使された範囲は、使いが含まれていたの  
みならず、万物が含まれており、神が実現を意図していた業に応じるために万物も操っ  
た。これが、神の権威が行使された具体的な様式であった。あなた方の想像では、神の  
権威について、神には権威と力があるので、神は第三の天や一定の場所に留まり、具  
体的な作業をする必要は無く、神の業は、すべて神の考えの中で完了された、と認識し  
ている者がいるであろう。また、一部の者は、神はアブラハムを祝福したが、神は何も  
する必要が無く、言葉を述べるだけで十分であった、と信じているであろう。実際の出来  
事は、そうしたものであっただろうか。明らかにそうではない。神には権威と力がある  
ものの、神の権威は真実であり、本物であり、空虚なものではない。神の権威と力の信  
びよう性と現実性は、神による万物創造や万物の支配、そして神が人間を導き、経営す  
る過程において、次第に明示され、具体化された。神の人間や万物に対する支配のあら  
ゆる方法や観点、詳細、神が実現されたすべての業、そして神の万物に関する理解によ  
り、実際に神の権威と力が空虚な言葉では無いことが証明された。神の権威と力は万物  
に現され、継続的に明示された。こうした顕現と明示は、神の権威の実際の存在を物語  
るものである。なぜなら、神は常に神の権威と力を用いて神の業を継続し、万物に命令



し、万物を支配しており、神の力と権威は、天使や神の使いが代理になれるものではないからである。神は、どのような祝福をアブラハムとヨブに与えるかを決定した。それは、神次第であった。神の使いが自らアブラハムとヨブを訪れたが、彼らの行動は神の命令、神の権威に従い、神の支配に従っていた。人間には、聖書の記録から、神の使いがアブラハムを訪れ、ヤーウェ神自らは何も行っていないように思われるが、実際は、真に力と権威を行使しているのは神自身であり、これについては人間にとって疑念の余地が無い。天使や使い達には大きな力があり、奇跡や、神から命じられた事を行っているのが分かるが、彼らの行動は、神の命令を遂行するためのものに過ぎず、決して神の権威の明示では無い。なぜなら、創造主の持つ、万物を造り、支配する権威を持つ人間や物は存在しないからである。そうしたわけで、創造主の権威を行使できる人間や物は存在しない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

12. その点について、「こう言いながら、大声で『ラザロよ、出てきなさい』と呼ばれた。すると、死人は……出てきた。」という聖書のこの一節を検討しよう。主イエスがこの業を行った時に言ったのは、「ラザロよ、出てきなさい」のひと言であった。その後ラザロが墓から出て来たが、これは主のひと言で達成された事であった。この時、主イエスは祭壇を作ることも、それ以外の業を行うこともなかった。主は、そのひと言を述べただけであった。これは奇跡と呼ぶべきであろうか、それとも命令と呼ぶべきであろうか。それとも、これは何らかの魔術であったのだろうか。これは表面的には奇跡であると言うことができ、現在の観点から見ても、奇跡だと言えるであろう。しかし、無論これを、魂を死人から呼び戻す呪文とも魔術とも呼べないことは確実である。この奇跡は、創造主の権威を実証する、ごく普通の些細な証明である、というのが正しい。これは神の権威であり、能力である。神には、ある者を死なせ、その魂を身体から出してハデスその他の然るべき場所へ還らせる権威がある。ある者がいつ死ぬか、その者がどこへ向かうかを決めるのは、神である。神は、こうした事柄をいつでもどこでも行うことができる。神は人間や物事、空間、場所の制約を受けない。神は望むままに事を行うことができる。なぜなら、あらゆる物や生き物は神の支配下にあり、あらゆる物が神の言葉と権威により生き、死ぬからである。神は死者を復活させることができるが、これもまた、神が時間と場所を問わず、いつでも出来ることである。これが、創造主のみが持つ権威である。

ラザロを死から復活させるなど、主イエスが業を行った時、イエスは、人間やサタンに対して、人間の生死など、人間の全ては神によって決められているということ、そして神が受肉している場合であっても、目に見える物質的世界も、目に見えない霊的世界も、依然として神が支配していることを、人間とサタンに対して証明し、知らしめることを目的としていた。これは、人間の全てはサタンの支配下にはないことを、人間とサタンに対して知らしめるためである。またこれは神の権威の啓示であり、証明であり、さらに人間の生死に関する事柄は、全て神により支配されていることを全てのものに示す手段である。主イエスによるラザロの復活のような業は、創造主が人間を教え導くひとつの手段であった。これは、神が自身の力と権威を用い、人間を指導し、人間に対して施す、実際の行為であった。またこれは創造主が言葉を用いずに、創造主が万物を支配しているという真理を人間が理解できるようにするための手段であった。さらに、これは神による以外に救いは存在しないということ、実際の業により人間に対して伝える手段であった。こうした神が言葉無しで人間に教えを授ける手段は永遠に続く。こうした教えは消える事がなく、人間の心に色あせる事のない衝撃と啓示が与えられる。ラザロの復活は神を褒めたたえた。神に付き従う者すべてに、それは大きな衝撃を与えるものである。ラザロの復活により、この出来事を深く理解する人々すべての心に人間の生死を支配できるのは神のみであるという理解と認識が定着する。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

13. 神には権威と力があるものの、神は自身の業に対して厳格であり、原則を固守し、言葉の通りにしている。神の厳格さと神の業の原則では、創造主が侵害不可能であること、そして創造主の権威が無敵であることが示されている。神には至高の権威があり、万物が神の支配下にあり、神には万物を支配する力があるが、神は、かつて自身の計画を害したことも混乱させたことも無く、神が権威を行使する時は、常に神自身の原則に厳密に従い、神の口で述べた言葉に従い、神の計画の段階と目的に従っている。神により支配されている万物もまた、神が権威を行使するときの原則に従っており、神の権威の定め例外となる人間や物は存在せず、神の権威が行使される際の原則を変更できる人間や物が一切存在しないことは、言うまでも無い。神の観点から見ると、祝福された者は、神の権威により多くの財産を受け、のろわれた者は神の権威による罰を受ける。神の権威の支配下においては、神の権威行使の例外となる人間や物は存在せず、神の権威が行使される際の原則を変更できる人間や物も一切存在しない。創造主の権威は、いかなる要素の変化によっても変更されず、同様に、神の権威が行使される際の原則

は、いかなる理由によっても変更されない。天と地に大規模な変動が発生する可能性もあるが、創造主の権威は不変であり、万物が消滅する可能性もあるが、創造主の権威は決して消滅しない。これが創造主の不変であり侵害不可能な権威であり、まさに創造主固有のものである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

14. あなたがたが毎日どこへ行き、何をして、誰と会い、何を見て、何を言うか、あなたがたに何が起こるか、といった事柄を予測出来るであろうか。人間はそうした事柄の発生を予測することができず、ましてそれらがどのように展開してゆくかを予測することは出来ない。人生において、予期せぬ出来事は日常的に発生する。こうした日常的に起こる変化や、そうした変化の発生のかた、発生後の展開形態は、何ら規則性無く発生する物事は無く、これらの物事が辿る発展過程やその必然性は、人間の意志で変えられないということを、人類に対して継続的に喚起するものとなっている。あらゆる出来事は、人間に対する創造主の訓戒や、人間は自分自身の運命を支配できないという知らせを伝達すると同時に、自らの運命を掌握しようとする人間の大それた、そして無意味な野望や願望に対する反証でもある。こうした出来事は、人の耳元に何度も平手打ちを受けるように、人間に対して、誰が最終的に人間の運命を支配しているかを強制的に再検討させるものである。人間の野望や願望が繰り返し阻まれ、砕かれてゆくに連れ、結果として人間は、待ち受ける運命や、現実、天の意、そして創造主による統治を、無意識のうちに自然と受け入れる。こうした日常的な変化から全人生の運命に至るまで、創造主の計画や統治を明示しないものは無い。すなわち、「創造主の権威は超越不可能である」という知らせを伝えないもの、「創造主の権威は至高のものである」という恒久の真理を伝えないものは存在しない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

15. 誰であれその者が成育時に会う人々や遭遇する物事は、すべて必然的に創造主の采配と計画に関連している。人間はそうした複雑な相互関係を予測することも、制御することも、推測することも出来ない。ある者の成育環境には様々な物事や様々な人々が関連し、そうした広大な網の目のように広がる関連性を用意したり、指揮したりすることが出来る者はいない。創造主を除き、いかなる人間や物事も、様々な人々、出来事、物事の発生、存在、消滅を制御することが出来ず、ある者の発育を創造主により定められた通りに形成し、人の育成環境を形成し、創造主による経営の働きに必要とされ

る様々な役割を造り出して人間がその使命を完遂するための堅牢な基盤を固めるのは、極めて広大な網の目のような関連性である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

16. 人間は、自分が成長する際に啓発や影響を受ける人物や要素を選択出来ない。人間は、どのような知識や技能を身に付けるか、何を習慣とするかを、選択出来ない。人間は、誰が自分の両親や親戚となるか、自分がどのような環境で成長するかに干渉する余地は一切無く、他の人々との関係、出来事、周囲の物事、またそうした物事が自分の発達にどのような影響を及ぼすかは、すべて自分で制御出来る範囲外にある。それでは、こうした事柄は誰が決めるのであろうか。こうした事柄を事前に決めるのは誰だろうか。人間には、こうした事柄を選択することも、自分で決めることもできず、また明らかに自然と決まるものでも無いので、こうした事柄の形成は創造主の掌中にあることは言うまでも無い。創造主は、各人の出生する具体的な状況を予め定めるのと同様に、各人が成長する具体的な状況も予め定めることは言うまでも無い。ある者の出生により、その者の周囲の人々や出来事、物事が変化する場合、必然的にその者の成長や発達もまた、それらの人々や出来事、物事に影響を与える。たとえば、貧しい家庭に生まれるが、裕福な環境で成長する人々がいる一方で、裕福な家庭に生まれるが、その家庭の財産が減ってゆき、貧しい環境で育つ人々もいる。出生が一定の法則により管理されている者はおらず、必然的な一定の状況下で成長する者もいない。こうした物事は人間が想像したり制御したり出来るものではなく、人間の運命の結果であり、運命により決定されるものである。無論、根本的にそうした物事は、創造主によりその者の運命に予定されている。その者の運命の創造主による統治と計画により決定されている。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

17. ある者がその両親を離れて独立する時、その者が直面する社会の状況、その者が得る職業や経歴は、共に運命により定められ、その者の両親とは無関係である。大学で有利な学部を選択し、卒業後は満足できる職に就いて、人生の旅路の第一歩で成功を収める者もいる。様々な技能を学んで身に付けたが、自分に適した職や役職を得られず、ましてや経歴を積むなど問題外で、人生の旅路に就いてすぐに、何をしても挫折感を味わい、様々な問題に悩まされ、先行きが暗く、人生が不確かな者もいる。熱心に勉強に励んでも、高等教育を受ける機会をあと少しの所で逃してしまい、その後の成功運は失われたように思われ、人生の旅路における初心の志が消沈する者もいる。先行きが順調か困難かが分からなくなった時<sup>[9]</sup>、そこで始めて、人間の終着点は実に様々だと実感

し、生活に希望と恐れを抱く。それほど優れた教育を受けていないにもかかわらず、著書を出版し、ある程度名声を得る者や、ほぼ無学でありつつ事業で生活できるだけの金額を稼ぐ者もいる…。自分が選ぶ職業や、生計を立てる手段などについて、その選択に成功するか失敗するかを、人間は制御できるであろうか。人間が望み、決定した通りになるだろうか。大部分の者は、労働時間を減らし、収入を増やしたい、日照りや雨の中で骨折って労働したくない、身なりを良くしたい、目立ちたい、他人よりも優れた存在になりたい、家の名を上げたいと思う。人間の願望は極めて完璧であるが、人生の旅路の一步を踏み出した時、人間の宿命がどれほど不完全であることを認識するようになり、また自分の将来に大胆な計画を立て、大それた夢を抱くことが出来ても、それを叶える能力や力を持つ者や自分の将来を制御する立場にある者はいないという事実を、本当の意味で始めて理解する。自分の夢と直面する現実には常に差があり、物事が自分の思い通りになることは決して無い。そうした現実と直面するので、人間は決して満足することが無い。自分の暮らし向きや将来のために、考えられ得る限りの手を尽くし、大いに努力し、大いに犠牲を払って自らの運命を変えようとする人々もいる。しかし、自らの多大な努力により自分の夢や願望を叶えられたとしても、結局のところ自分の運命は変えられず、いかに根気強く努力したとしても、宿命により決められた物事は超越出来ない。能力や知能指数、意志の力の差異に関係なく、人間は運命において皆平等であり、偉大か取るに足りない人間か、背が高いか低いか、高貴か下賤かによる差別は無い。ある者が従事する職業、ある者の生業、ある者が生涯にわたって蓄える富は、その者の両親や才能、努力、野望によって決まるものではなく、創造主により予め定められている。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

18. 子に対する両親の責任は、出生と子育てのほか、単に子に正式な成育環境を与えることである。なぜなら、創造主の予定を除き、人間の運命に関係する物事は無いからである。ある者の将来がどのようなになるかを制御出来る者はいない。その者の将来は遙か以前に定められ、その者の両親でさえも変えられない。運命に関しては、人間は皆独立しており、各人には独自の運命がある。したがって、ある者の両親がその者の運命を阻むことも、その者が人生で担う役割に何らかの影響を与える事も出来ない。その者が生まれる家庭や、その者の成育環境は、その者の人生における使命を果たすための前提条件でしか無いと言えるであろう。そうした物事は、何らかの形でその者の人生における運命を決めたり、どのような宿命の中でその者が使命を果たすかを決めたりするこ

とは無い。したがって、ある者の人生における使命遂行を、その者の両親が助けることも、その者の人生で担う役割を、その者の親類が助けることも出来ない。その者の使命遂行方法や、どのような生活環境で役割を遂行するかは、その者の人生の運命のみにより決定される。つまり、創造主により予め定められたその者の使命に、その他の客観的条件が影響を与えることは無い。人間はみな、自分に特定の成育環境で成人に達し、段階的に自分自身の人生の道を歩み始め、創造主が各人のために計画した使命を果たし、自然と無意識のうちに人類の大海原へと入り、その生涯における役割を担い、そこで創造主の定めと統治のために、被造物として自分の責任を全うする。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

19. ある者の出生がその者の前世により運命づけられているとすれば、その者の死は、その運命の終焉となる。ある者の出生がその者のその人生における使命の始まりであるとすれば、その者の死は、その使命の終了となる。創造主は、ある者の出生の諸条件を定めているので、その者の死についても諸条件を定めていることは言うまでも無い。言い換えると、偶然生まれる者はおらず、予期されない死は無く、出生と死は必然的にその者の前世とその時の人生と関連している。ある者の出生の状況と死の状況は、両方とも創造主により予め定められたものであり、それらはその者の終着点、運命である。各人の死は、出生について言えるのと同様に、様々な特定の状況下で発生するので、人間の寿命、死亡の経緯や時刻は様々である。強健であるが早死にする者もいれば、虚弱であるが長生きして安らかに永眠する者もいる。不自然な原因で死ぬ者もいれば、自然な原因で死ぬ者もいる。自宅から遠く離れて死ぬ者もいれば、側にいる家族に看取られて最後に目を閉じる者もいる。空中で死ぬ者もいれば、地下で死ぬ者もいる。水中に沈む者もいれば、災害の犠牲者となる者もいる。朝死ぬ者もいれば、夜死ぬ者もいる。人間は、皆華々しい出生、輝かしい人生、栄誉ある死を望むが、自分の運命から脱したり、創造主による統治から逃れられたりする者はいない。これが、人間の運命である。人間は将来に向けて様々な計画を立てることが出来るが、出生と他界の時期や状況は誰にも計画できない。人々は死を回避し、拒否しようと最大限努力するが、死は人知れず静かに近付いて来る。自分の死期やどのように死ぬかを知る者はおらず、ましてや何処で死ぬかを知る者はいない。生死の力を持つのは人類では無く、自然界の生き物では無く、唯一の権威を持つ創造主であることは明らかである。人間の生死は自然界の法則の結果ではなく、創造主の権威による統治の結果である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

20. 神の権威の下では、全ての者が能動的あるいは受動的に神の統治と計画を受け入れるので、人生においてどれほどものがいたとしても、どれほど誤った道を進んだとしても、結局は創造主がその者のために定めた運命の範囲内に戻ってしまう。これが創造主の権威の凌駕することが不可能な性質であり、創造主の権威が万物を制御し支配する方法である。万物のいのちを支配する法則を担い、妨害されることなく人間が生まれ変わることを可能とし、毎日、毎年、世の中を変化させ、進歩させているのは、この凌駕不可能な性質と、この形態の制御と支配である。あなたがたは、こうした事柄全てを目のあたりにし、表面的に理解しているか、あるいは深く理解している。理解の程度は、真理に関する自分の経験と認識、そして神に関する自分の認識により異なる。真理の事実をどの程度知っているか、神の言葉をどの程度経験しているか、神の本質と性質をどの程度知っているかは、神による統治と采配に関するあなたの理解度を示すものである。神による統治と采配の存在は、人類がそれらに服従しているか如何に依存しているであろうか。神にこの権威があるという事実は、人間がそれに服従するか如何により決まるであろうか。神の権威は、状況を問わず存在する。つまり、あらゆる状況において、神は人間の運命その他あらゆるものを、神の考えと望みに従って支配し、計画する。これは人間が変化することで変化するものではなく、人間の意志に依存しないものであり、時間、場所、地理のいかなる変化によっても変えられることが無い。なぜなら、神の権威は、神の本質そのものだからである。人間が神による統治を知って受け入れられるかどうか、そしてそれに服従出来るかどうかは、神による人間の運命の統治という事実にも少しも影響しない。つまり、神による統治に対して人間がどのような姿勢を取るかによらず、神が人間の運命と万物を統治しているという事実が変わることは無い。たとえ神による統治に服従しなかったとしても、依然として神はあなたの運命を操り、また、たとえあなたが神による統治を知ることが出来なくても、神の権威は依然として存在する。神の権威、そして神が人間の運命を統治しているという事実は人間の意志から独立したものであり、人間の好みや選択に従って変わることが無い。神の権威は全ての場所にあり、いつでも、どの瞬間も存在する。もし天と地が無くなるとしても、神の権威は決して無くならない。なぜなら、神は神自身であり、神に唯一の権威があり、神の権威は人間や出来事、物事、空間や地理による制限を受けないからである。神は常に神の権威を行使し、神の力を示し、神の経営（救い）の業を継続する。また神は、これまでと同様、常に万物を支配し、万物に必要なものを与え、万物を指揮する。そうした事柄は、誰も変えられない。それは事実であり、太古の昔から不変の真理であり続けている。

21. サタンが人間を墮落させるとき、あるいは留まることを知らない危害を加えるとき、神は何もせず傍観することも、神の選民を無視したり、見て見ぬふりをしたりすることもあります。サタンが行うことは、神にとって全て明瞭であり、神はその全てを理解しています。サタンが何をしても、サタンがどのような動向を引き起こしたとしても、神はサタンが何をしようとしているかを知っており、神はその選民を見捨てることは無いのです。神は、その代わりに、誰の気を引くこともなく、秘密裏に、静かに、必要なことすべてを行います。神が誰かに対して働き始める時、誰かを選ぶ時、神はそれを誰にも告げず、またサタンに告げることも無ければ、それを誇示することが無いのは、なおさらです。神は静かに、そして自然に必要なことを行うのみです。まず、神はあなたの家族を選びます。家族の背景はどのようなものか、あなたの両親や祖先は誰かといった事柄は、既に神により決定されています。つまり、そうした事柄は神が取り急ぎ決めたことではなく、遠い過去に始まった業です。神があなたの家族を選ぶと、神はあなたが生まれる日を選びます。今、神はあなたが産声を上げてこの世に生まれて来るのを、あなたの誕生を見、あなたが最初の言葉を口にするのを、あなたが躑きながら歩くことを覚えるのを見えています。あなたは最初の一步を踏み出し、その後もう一步を踏み出し、今では走ったり、跳んだり、話をしたり、自分の感情を表現できます。こうして人間が成長するにつれて、サタンの眼差しは獲物を睨む虎のように、人間ひとりひとりに注がれています。しかし神は働く時、人間や出来事、物事、場所、時間の制限を受けることが一切無く、神が行うべきこと、行なわなくてはならないことを行います。成長過程において、人が自分が好まない物事や疾病、挫折に遭遇することがあります。しかし、その道を進む時、あなたのいのちと将来は、完全に神の慈しみのもとにあります。神は、人生全体にわたってあなたの傍らにあり、あなたを守り、見守るという真の保証をあなたに与えます。あなたは、それを知らずに育ちます。あなたは新たな物事に接し、この世の中と人間を知るようになります。あなたにとってすべてが新鮮です。あなたは好きなことをするのを好みます。あなたは自分の人間性と生活環境の中で生活し、神の存在については一切の認識をもちません。それでも神はあなたが成長し、前進してゆく過程のすべてを見えています。あなたが知識を習得したり、科学を学習したりしている時でさえ、神はあなたの側から一步も離れることが無いのです。あなたは、他の人々と全く同様に、世界を知り、世界と接触するなかで、あなた自身の理想を確立し、趣味を持ち、興味の対象を持ち、高尚な大志を抱くようになります。あなたは、自分の将来について頻繁に思索し、自分の将来がどうなるかを思い描きます。しかし、その過程で何があったとしても、神は全てをはっきりと見えています。あなたは自分の過去につい



て忘れたかもしれませんが、神以上にあなたを深く理解している者はありません。あなたは神の見守る中で生活し、成長し、成熟します。この間、神の最も重要事項は、誰も気付くことができず、誰も知らないことです。神がそれについて、あなたに伝えることは当然ありません。では、この最も重要なこととは何ですか。それは、神がある人間を救う保証であると言えます。つまり、神はその人を救うことを望むので、神はそれを行う必要があります、その務めは人間にとっても神にとっても極めて重要なのです。それが何か知っていますか。あなたがたは、このことについて実感や概念が全く無いようなので、わたしが話します。あなたが生まれた時から現在に至るまで、神はあなたに対して多くの働きを行なってきましたが、神が行ったことを全て詳しく伝えることはありません。神はあなたに知らせることはなく、あなたに伝えませんでした。しかし、人間にとって、神の行いは全て重要です。神にとって、それは行うべき事です。神の心中には、神がなすべきことで、それらよりも遙かに重要なことがあります。それは、人間が生まれてから現在に至るまで、神はその人の安全を保証する必要があるということです。これを聞いても、あなたがたは完全に理解できないと感じ、「その安全とは、それほど重要なものなのか」と言うかも知れません。「安全」という言葉の文字通りの意味は何ですか。あなたがたは、それを平安である、災害や災難に遭遇することが無いことである、良い生活を送ることである、普通に生活することであるなどと理解しているでしょう。しかし、安全とはそれほど単純なものではないということを、あなたがたの心中で知らなければなりません。それでは、わたしがこのように話している、神が行うべきこととは一体何でしょうか。安全は、神にとって何を意味するのでしょうか。本当にあなたがたの安全の保証のことでしょうか。いいえ。それでは、神が行なうこととは何でしょうか。この安全とは、あなたがサタンにより食い尽くされない、ということなのです。これは重要ですか。あなたはサタンに食い尽くされていませんが、そうであれば、これはあなたの安全に関連するのでしょうか。これはあなた個人の安全に関わり、それよりも重要な事はありません。サタンにより食い尽くされたなら、あなたの魂も肉も、もはや神に属しません。神はあなたをもはや救いません。神はそうした魂や人々を見捨てるのです。ですから、神が行うべき最も重要なことは、あなたの安全、あなたがサタンに食い尽くされないことを保証することだと言うのです。これは極めて重要ではありませんか。それでは、あなたがたはなぜ回答できないのですか。あなたがたは、神の大いなる優しさを感じる事ができないようですね。

22. サタンは神の権威に背いたことが一切無く、さらには神の指示と具体的な命令を注意深く聞き、それに従い、それに反することは無く、神の命令を自由に変えることも、当然ながら無かった。それは、神がサタンに対して定めた制限であり、したがってサタンが敢えてその制限を超えようとしたことは無い。これは神の権威の力ではなかろうか。これは神の権威を証しするものではなかろうか。サタンは、神に対してどのように振る舞うか、神をどのように見るかについて、人間よりもはるかに明確に理解していたので、霊の世界において、サタンは神の地位と権威を明確に理解しており、また神の権威の力と神の権威の行使が基づいている原則に関しても、深く理解していた。サタンがこうした神の権威や地位を見過ごすことも、何らかの形でそれに背くことも、神の権威を逸脱する行動を取ることも、決して無かった。また神の怒りに対抗することも一切なかった。サタンは元来邪悪で傲慢であるが、神がサタンに対して定めた限界を超えたことは無い。数百万年の間、サタンはそうした限界を固く守り、神からの指示や命令に全て従い、その限界を敢えて超えようとしたことは無い。サタンは悪意に満ちているにもかかわらず、腐敗した人間よりもはるかに「賢い」。サタンは創造主の身分を知っており、自らの限界も心得ていた。サタンの「従順な」行動から、神の権威と力は、サタンが背くことのできない天の命令であることが理解できる。また、まさにこの独自性と権威故に、万物が秩序にしたがって変化し、増加し、人間は神が立てた過程に従って生活し繁殖でき、この秩序を乱したり、この法則を変えたりすることができる人間や物が不在であることが分かる。なぜなら、人間や物はすべて創造主の手から現れ、創造主の命令と権威から現れたからである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

23. サタンは、その欲のある眼でヨブを見ていたが、神の許可が無ければ、ヨブの体毛の1本ですら触れることができない。サタンは生来邪悪かつ残酷であるが、ひとたび神がサタンに命令すると、サタンはその命令に従うほか無い。そうしたわけで、サタンがヨブのところに来たとき、サタンは羊の中の狼のように凶暴であったにもかかわらず、サタンは神が定めた限界を無視することも、神の命令に背く事も無く、サタンは、全ての行動において、神の言葉の原則と限度から逸脱することは無かった。これは事実ではなかろうか。この観点から見ると、サタンはヤーウェ神の言葉に背くことが無かったことが分かる。サタンにとって、神が述べた言葉は、すべて命令であり、天の法則であり、神の権威を示すものであった。なぜなら、神の言葉の背後には、神の命令に背いた者や天の法則を破った者に対する神の罰が暗示されているからである。サタンは、自

分が神の命令に背いた場合、神の権威から逸脱し、天の法則を破った報いを受けなければならないことを、はっきりと認識している。それでは、その報いとは、どのようなものであろうか。それは言うまでも無く、神による罰である。サタンのヨブに対する行為は人間を腐敗させるサタンの行動の縮図に過ぎず、サタンがそれらの行為を行っていた時、神が定めた限界と、神がサタンに対して命令した事柄は、サタンのあらゆる行動の背後にある原則の縮図に過ぎない。さらに、この一件におけるサタンの役割と立場は、神の経営の働きにおけるサタンの役割と立場の縮図に過ぎず、サタンがヨブを試した時の、サタンの神に対する完全な服従は、神の経営の働きに対して、サタンが少しも反抗しようとしなかったことの縮図に過ぎない。これらの縮図はあなた方に何を警告するだろうか。サタンを含めた万物のなかには、創造主が定めた天の法則や命令に背くことができるものは一切無く、また、こうした天の法則や命令に違反しようとするものは一切ない。なぜなら、服従を拒んだ者に対して創造主により科される罰に変更を加えたり逃れたりできる人間や物は存在しないからである。天の法則や命令を定めることができるのは創造主のみであり、それらを施行できるのも創造主のみであり、人間や物が背くことができないのは、創造主の力のみである。これが、創造主固有の権威であり、この権威は万物において至高のものであるので、「神は最も偉大であり、サタンはその次に偉大である」と言うことはできない。固有の権威を持つ創造主を除いて、神は存在しないのである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

24. サタンは、これまで数千年にわたって人間を腐敗させてきている。サタンは無数の邪悪を働き、何世代もの人々を騙し、また世界中で凶悪な罪を犯してきた。サタンは人間を虐げ、騙し、誘惑して神に謀反を起こさせ、何度も神の経営（救いの）計画を混乱させ、妨害してきた。それでもなお、神の権威の下で、万物やすべての被造物は神により定められた法則と規律を遵守し続けている。神の権威に比べれば、サタンの邪悪な性質とその蔓延は極めて醜く、不愉快であり、卑劣であり、取るに足りず、脆弱である。サタンは神により造られた万物の中を歩んでいるが、神の命令を受けた人間や物事に対して、ほんの僅かな変化さえも与えることができない。数千年が経過した現在、人類は神から授かった光りと空気を享受し、神自身から授かった息を呼吸し、神が造った花々や鳥たち、魚や昆虫を楽しみ、神から授かった全てを享受している。昼と夜が引き続き交互に入れ替わり、四季は通常通り移ろいでおり、今年の冬には、空を舞うガンの群れが渡り去ってゆき、次の年の春に舞い戻り、魚は河川や湖沼以外へと移動して生活

の場とすることなく、夏の日中にはセミが地上で魂を歌い上げ、秋には鈴虫が草の間で風に合わせて優しい歌を口ずさみ、ガンは群れを成し、鷹は単独で行動し、ライオンの群れは狩りを行うことで生命を維持し、ヘラジカは草原の草花から立ち去ることが無い。万物のなかでも、動物は、すべて行き来を繰り返しており、無数の変化が一瞬にして発生する。しかし、その本能と生存のための法則は不変である。動物は神の施しと糧により生きており、動物の本能を変えることや、動物の生存の法則を妨害することは、誰にもできない。万物の中で生きる人間はサタンにより腐敗し、騙されたものの、人間は依然として、神により造られた水、空気など、神により造られた全ての物を差し控えることができず、また人間は依然として神により造られた空間で生活し、繁殖している。人間の本能は、依然として不変のままである。人間は、見ることを眼に、聞くことを耳に、考えることを脳に、理解することを心に、歩くことを脚に、業を行うことを手に、それぞれ依存している。神の施しを人間が受け取れるように神が人間に授けられた本能や、人間が神と協力するために必要な能力、創造物としての義務を履行するために必要な能力は変わっておらず、人間の霊的な必要性、人間が自分達の起源を知りたいという願望、創造主による救いに対する人間の切望は、変わっていない。以上が、神の権威の下で生活し、サタンによる残酷な破壊を幾度となく経験してきた人間の現況である。人間はサタンによって踏み躪られ、また人間はもはや創造された時のアダムとエバのようではなく、知識、想像、観念など、神に反対する物事や、サタンのような墮落した性質に満たされているが、神の観点から見ると、人間は依然として神が造った時と同じ人間である。人間は依然として神により支配され、指揮され、神が定めた生涯から逸脱することなく生活しているので、神の観点から見ると、サタンにより腐敗させられた人間は、埃をかぶったようなもの、つまり空腹でお腹が鳴り、反応が少し遅くなり、従前よりも記憶力が悪くなり、少し年老いたに過ぎず、人間の機能と本能は、全く損傷していない。これが、神が救済しようとしている人間である。しかし、人間は創造主の呼ぶ声や言葉を聞くだけで、立ち上がってその言葉がどこから聞こえているかを探しまわるであろう。人間は、創造主の姿を見ただけで、その他のことは全く心に無くなり、全てを投げ出して、自らを神に捧げ、神のために命すら捧げるであろう。人間の心が、創造主の心からの言葉を理解したとき、人間はサタンを拒絶し、創造主の味方となるであろう。また人間が身体の穢れを完全に洗い流し、創造主による施しと糧を授かったとき、人間の記憶が蘇り、その時人間は、真に創造主の支配下に戻るであろう。

25. 人類の運命と万物の運命は、創造主による統治と密接に絡み合い、創造主の指揮と不可分の繋がりがあり、最終的にそれらの運命を神の権威から引き離して翻弄することはできない。人間は、万物の法則により創造主の指揮と統治を理解するようになり、生存の法則により創造主の統治を認識し、万物の運命により創造主がその万物に対する統治と支配を行使する方法に関して結論を得る。また人間は、人間と万物のライフサイクルによって、万物やあらゆる生物に対する創造主の指揮と采配を真に経験し、そうした創造主による統治や采配が、この世の法令や規則、制度その他の権力や威力よりも優先されるのを目の当たりにする。これに鑑みると、創造主による統治は、いかなる被造物も侵害出来ないものであり、いかなる権力も創造主によって予定された物事に干渉したり変更したり出来ないものであることを、人類は認めざるを得ない。人類や万物の何世代にもわたる生活や繁殖は、こうした神性の法則や規則の下で行われる。これは創造主の権威が真に具現化されたものではなかろうか。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

#### 脚注

- a.原文に「分からなくなった」の語句は含まれていない。

## (Ⅱ) 神の義なる性質についての言葉

26. 神の義なる性質を理解するには、最初に神の感情を理解する必要がある。すなわち、神が何を嫌うか、何を憎むか、何を愛するか、誰を我慢するか、誰に慈悲深いか、どのような人間がその慈しみを受け取るかを理解しなければならない。これが、知っておくべき要点のひとつである。さらに、神が如何に愛に満ちていたとしても、人間に対する神の慈悲と愛が如何に深かったとしても、神の地位や身分、威厳を害する者に対しては容赦しないということを理解する必要がある。神は人間を愛しているが、人間を甘やかすことは無い。神は人間に愛情と慈しみを与え、人間を寛容に扱うが、人間に迎合することは一切無い。神には、神の原則と限界がある。あなたがどれほど神からの愛を感じていたとしても、その愛がどれほど深かったとしても、他の人間と接するように神と接してはならない。神は人間を神に親しい存在として扱うことは本当であるが、人間が神を他の人間として、あるいは友人や崇拜対象など、他の創造物であるかのようにみなした場合、神はそうした人間の前から姿を消し、そうした人間を見捨てる。これが神の性質であり、神は、こうした事柄に対する注意を怠って神に接する人間を容赦しない。この神の性質は、神の御言葉でしばしば述べられている。あなたがどれほど多くの道を歩み、どれほど働き、どれほど堪え忍んできたとしても、あなたが神の性質を害すると、神はあなたに対し、あなたがしたことに応じて報いを与える。これは、神が人間を神に親しい存在とみなしていても、人間は神を友達や親戚のように扱ってはならないことを意味する。神を友達のように扱ってはならない。あなたが如何に多くの愛情を神から受けていたとしても、如何に多くの寛容さを与えられていたとしても、決して神を友達のように扱ってはならない。これが神の義なる性質である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 7」より

27. 反抗に対する神の寛容さの不在は神のみが持つ本質であり、神の怒りは神特有の性質であり、神の威厳は神のみの独占的本質である。神の怒りの根底となる原則は、神のみが持つ身分と地位を証明するものである。この原則が唯一の神自身を象徴するものであることは、言うまでも無い。神の性質は、神自身の固有の本質である。神の性質は時間の経過とともに変化すること、場所によって変化することもない。神の固有の性質は、神のみにある本質である。神が誰に対して業を行うかを問わず、神の本質も、神の義なる性質も、不変である。ある者が神を怒らせた場合、神が伝える怒りは、神固有の性質である。この時、神の怒りの基底にある原則や、神の唯一無二の身分や地位は

不変である。神は、神の本質が変化したり、神の性質に異なる要素が生まれたりしたことを理由として、怒ることは無く、神が怒るのは、人間の神に対する反抗が、神の性質に反するからである。人間の神に対する目に余る挑発は、神固有の身分と地位に対する深刻な挑戦である。神から見ると、人間が神に挑戦するということは、人間が神と争っており、神の怒りを試していることを意味する。人間が神に反抗し、神と争い、神の怒りを継続的に試す時は、罪がはびこる時でもあり、その時、神の怒りは自然と出現する。したがって、神が怒りを示していることは、あらゆる邪惡な力が滅びること、あらゆる敵対勢力が破壊されるということを象徴するものである。これが神の義なる性質と、神の怒りの独自性である。神の威厳と聖さが試された時、正義の力が阻害され、人間に見えなかった場合、神は、怒りを伝える。神の本質に基づけば、神と争い、神に敵対し、敵対する地上の様々な力は、すべて邪惡であり、腐敗した不当なものであり、すべてサタンに由来し、サタンに属する。神は正義であり、光であり、完璧に聖であるので、邪惡で腐敗した、サタンに属する物事は、神の怒りが発せられると消滅する。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

28. ソドムの町を滅ぼす時に神が用いた火は、神が人類や物を滅ぼす最も迅速な方法である。ソドムの人々を焼き尽くしたことは、人々の身体だけでなく、人々の靈魂全体を滅ぼすものであり、それにより、物質的世界と人間が見ることの出来ない世界の両方において、町の中に居た人々の存在の消滅が確実なものとされた。それは、神が怒りを明示し、表現する方法のひとつである。こうした態様の明示や表現は、神の怒りの本質の一面であり、したがって、当然ながら神の義なる性質の本質の明示でもある。神が怒りを伝える時、神は憐れみと慈愛の明示を一切停止し、寛容と忍耐を明示することは無くなる。忍耐を継続し、今一度憐れみと寛容を与えるよう神を説得できる人間、物、理由は一切存在しない。そうした神の持っているものに代えて、神は一瞬の迷いもなく、神の怒りと威厳を伝え、神の望むところに従って、神が望む業を迅速かつ円滑に行う。人間が反してはならない神の怒りと威厳は、こうして伝えられ、それは神の義なる性質のある側面を表すものでもある。神が人間に対する懸念と愛の証を得るとき、人間は神の怒りを感じることも、神の威厳を理解することも、反抗に対する神の不寛容さを感じることも出来ない。それが原因で、常に人間は、神の義なる性質が単に憐れみと寛容さと愛のみであると考えようになった。しかし、神が町を滅ぼしたり、人類を憎悪したりということを知ると、人間は神が人間を滅ぼす時の怒りと威厳により、神の義なる性質の別の側面を見ることが出来る。これが、反抗に対する神の不寛容さである。反抗

を一切甘受することの無い神の性質は、あらゆる神の創造物の想像を超え、それ以外の物にも、その性質を阻んだり干渉したり出来る物は存在せず、そうした性質を模倣したり、偽ったりすることが出来ないのは尚更である。したがって、神の性質の様々な側面のなかでも、この側面は、人類が最も詳しく知るべきものである。この種の性質は、神自身だけに存在し、他の誰にも存在しない。神がこの種の義なる性質を持っている理由は、人間を腐敗させ、食べ物にする邪悪さ、腹黒さ、反逆、サタンの悪意に満ちた行動を、神が嫌悪しているからであり、また神に反逆する全ての罪の行いを神が嫌悪しているからである。さらに神の聖なる清い本質もその理由となっている。それゆえ、創造物やそれ以外の物が、神に対して率直に反対ないし対抗することを、神は甘受しないのである。たとえ、神が嘗て憐れみを示した者や神の選民となった者であったとしても、神の性質を挑発し、神の忍耐と寛容の原則を超えただけで、神は自身の義なる性質、すなわち、いかなる反抗をも甘受しない性質を、全く容赦なく、また躊躇なく示す。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

29. 神の怒りの噴出は神の義なる性質を示す側面のひとつに過ぎないものの、神の怒りが、その対象について無差別なことや、原則が無いということは決して無い。それとは反対に、神は怒りやすくなく、神が軽率に怒りや威厳を示すことは無い。更に、神の怒りはかなり制御され、計測されているので、神の怒りと、人間が怒りを爆発させたり、発散させたりするのとは比較することは出来ない。聖書には、人間と神との対話が多く記録されている。聖書に登場する人間の一部は、発言が浅薄で、無知で、稚拙であるが、神はそうした人間を打ち倒すことも、非難することも無い。特に、ヨブの試練の間、ヤーウェ神はヨブの3人の友やその他の者たちの発言を聞いて、その者たちをどのように扱ったであろうか。神はその者たちを非難したであろうか。神はその者たちに対して、激怒したであろうか。神は、そのようなことを一切しなかった。その代わり、神はヨブに対し、その者たちのために祈るよう命じ、神はその者たちの誤りを気に留めることは無かった。これらの例では、神が腐敗した無知な人類を扱う主な姿勢が示されている。したがって、神の怒りの発出は、神の気分を示したり晴らしたりするものでは決して無い。神の怒りは、人間が考えるような感情の爆発では無い。神は、自分の気分を制しきれなかったり、怒りが我慢の限界を超えたりすることが原因となって、怒りを発出させることが無い。逆に、神の怒りは、神の義なる性質を示し、その性質を純粋に表出し、神の聖なる本質の象徴を表出するものである。神は怒りで、反抗を容赦しない。これは、神の怒りが動機を区別しないということでも、無主義であるということでも無



い。動機を区別せずに無主義で手当たり次第に怒りを爆発させるのは、腐敗した人類固有の特色である。人間が地位を得ると、気分を制御するのが困難になり、事あるごとに不満を爆発させ、感情を露わにする。人間は、自分の力を示し、自分の地位や身分が普通の人々とは違うことを他人に知らしめるため、明確な理由なく激怒することさえ多々ある。無論、地位の無い腐敗した人間も、頻繁に取り乱す。そのような人間の怒りは、その人間の個人的利益に対する危害によって発生させられる場合が往々にしてある。自分の地位と威厳を守るため、腐敗した人間は感情を発散させ、傲慢な本質を露わにすることが往々にしてある。人間は、罪の存在を防御するために突然激怒して感情を露わにし、そうした行動によって、その者は自分の不満を表す。こうした行動は汚れや謀略に満ちている。人間の腐敗と邪悪、そして何よりも人間の向こう見ずな野心と欲望に満ちている。正義が邪悪に挑む場合、人間は正義を守るために怒りを爆発させることは無い。それとは逆に、正義の力が危機にあるとき、迫害されたとき、攻撃されたとき、人間の態度は、無視、回避、畏縮といった類いのものである。しかし、邪悪の力に対峙した時、人間の態度は、迎合する、ぺこぺこ頭を下げるといった類いのものである。したがって、人間の怒りの爆発は、邪悪な力にとって逃げ道であり、肉欲に満ちた人間の、猛烈で抑制できない邪悪な行動の表出である。しかしながら、神が怒りを示す時は、邪悪な力は全て阻止され、人間を傷つける全ての罪が阻止され、神の業を阻害する敵意のある力が明らかにされ、取り上げられて呪われ、神に反逆するサタンの僕は罰せられて根絶される。その者たちがいなくなった後、神の業は何ものにも阻害されることなく進められ、神の経営（救いの）計画は、予定通り一步步着実に実行され、神の選民はサタンの妨害や策略の対象となることなく、神に付き従う者は、静寂と平和の中で神の導きと施しを楽しむ。神の怒りは、あらゆる邪悪の力の増大と横行を阻止する防衛手段であり、また正義で肯定的な物事全ての存在を守り、広め、それを抑圧や破壊から永久に保護する防衛手段である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

30. 人間が他人の前で怒るか、あるいは陰で怒るかを問わず、人間には皆様々な意図と目的がある。このような人間達は、自分自身の信望を構築している場合や、自らの利益を守ろうとしている場合、自分の外聞や面目を保とうとしている場合などがあるであろう。自分の怒りをある程度抑えるよう努める者も居れば、全く抑えようとする様子無く、好きなときに心ゆくまで怒りを露わにする者も居る。つまり、人間の怒りは、自分自身の腐敗した性質から生まれている。その目的が何であれ、怒りは人間の肉欲や

本性に関連するものであって、正義や不正義とは無関係である。なぜなら、人間の本性や本質には、真理に相当するものが皆無だからである。したがって、腐敗した人類の怒りと、神の怒りとは、同じ次元で議論してはならない。サタンにより腐敗させられた人間の行動は、例外なく腐敗を保護する願望から始まり、腐敗を基礎としている。したがって、人間の怒りと神の怒りは、理論上どれほどの妥当性があるように思われようと、同じ次元で議論すべきではない。神が怒りを示す時、邪悪な力が阻止され、邪悪な物事が破壊される一方、正義であり、肯定的な物事は、神の慈しみと保護を与えられ、存続が可能となる。神が怒りを伝えるのは、不正義で邪悪な物事が、正義で肯定的な物事の通常の活動と発達を妨害し、破壊するからである。神の怒りの目的は、神自身の地位や身分を守るためではなく、正義であり、肯定的であり、善良で美しい物事、そして人類の正常な生存における規律と秩序を守るためである。これが神の怒りの根底にある原因である。神の怒りは極めて適切であり、自然であり、神の性情の真の明示である。神の怒りの根底には、意図や虚偽、策略が無く、また腐敗した人類に共通する、欲望も狡猾さも悪意も暴力も邪悪も全く存在しない。神が怒りを伝える前に、神は既にあらゆる物事の本質を極めて明瞭かつ完全に把握しており、また正確かつ明瞭な定義と結論を導き出している。故に、神のあらゆる業の目的は、神の姿勢と同様、極めて明確である。神の心に混乱は無く、神は盲目でもなく、衝動的でもなく、軽率でも無く、そしてなによりも無原則ではない。これが神の怒りの実践的側面であり、この側面のため、人類は普通の存在を続けることができるのである。神の怒りが無ければ、人類は異常な生活条件へと陥るであろう。正義であり、美しく善良な物事が破壊され、消滅するであろう。神の怒りなくしては、被造物の規律と生存法則が破壊され、完全に転覆さえするであろう。人間が造られて以来、神は義の性質により人類の正常な生活を継続的に守っている。神の義なる性質に怒りと威厳が含まれているため、邪悪な人間や物事、人類の普通の生活を阻害し損なうあらゆる物事が、神の怒りによる罰を受け、制限され、破壊される。過去数千年にわたり、神は義なる性質により、神に反抗し、サタンの僕や手先となったあらゆる不浄な悪霊を、人類を経営する業の中で継続的に倒し、破壊して来た。したがって、人類に対する神の救いの働きは、常に神の計画に従って進行してきた。つまり、神の怒りの存在のおかげで、人間の中で最も義なる運動は、かつて破壊されたことが無い。

31. 神のニネベの人々に対する怒りの程度を問わず、ニネベの人々が断食を宣言して粗布と灰を身に付けるとすぐに、神の心は次第に軟化し、神の心が変化を始めた。神がニネベを破壊すると宣言した時、ニネベの人々による罪の告白と悔い改めの前の時点で、神は依然として怒っていた。ニネベの人々が一連の悔い改めの行動を取った後、神のニネベの人々に対する怒りは、ニネベの人々に対する憐れみと寛容さへと次第に変化していった。1件の出来事において、こうした神の性質の2つの側面が同時に現れたことには、何ら矛盾することは無かった。これに矛盾が無いことは、どのようにして理解すべきであろうか。神は、ニネベの人々が悔い改めた時に、これらの対局にある本質を連続して表出し、明示しており、これにより神の本質の現実性と不可侵性を理解することができる。ここでは神の姿勢により分かることがある。それは、神は人間に対して容赦することが無いということではなく、また神は人々に対して憐れみを与えることを望んでいない、ということでも無い。それは、人々が神の御前で真に悔い改め、悪の道を離れ、不法を手から捨てることは、極めて希だ、ということである。つまり、神が人間に対して怒っている時、神は人間が真に悔い改めること、人間の真の悔い改めを見ることを望んでおり、こうした場合に、神は憐れみや寛容さを、人間に対して引き続き寛大に与える。すなわち、人間の邪悪な行動は神の怒りに触れ、神の憐れみと寛容さは、神の言葉を聞き、神の前で真に悔い改める者、悪の道を離れ、不法を手から捨てることができる者に与えられる。ニネベの人々に対する扱いでは、神の姿勢が極めてはっきりと明示されていた。神の憐れみと寛容さを得ることは全く困難では無い。神は真の悔い改めを要求する。人々が悪の道を離れ、不法を手から捨てるかぎりにおいて、神は心と人々に対する姿勢を変える。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

32. ニネベの町は、ソドムの人々と同様に腐敗し、邪悪で凶暴な人々で満ちていたのに対し、ニネベの人々の悔い改めにより、神の心が変わり、ニネベの人々を滅ぼさないことに決めた。神の言葉と命令に対するニネベの人々の反応は、ソドムの民の姿勢と比べると極めて対照的な姿勢であり、ニネベの人々の誠心誠意による神への服従と、罪の悔い改め、そしてあらゆる面における心からの行動のため、神は再び、心からの哀れみを示し、その哀れみをニネベの人々に与えた。神の人類に対する報いと哀れみは、誰も真似をすることが出来ない。神の憐れみと寛容さや、神の人類に対する真摯な思い入れを持つことが出来る者は、存在しない。あなたが偉大な人物あるいは超人であるとみなす男性や女性のうち、そうした偉大な人物あるいは超人としての高い立場、崇高な立

場から、人類や創造物に対してこのような発言をする人が存在するであろうか。人類のうち、誰が人類の生存状況を自分の手のひらのように熟知できようか。誰が人類の存在に伴う負担と責任を負うことが出来ようか。誰がひとつの町の破壊を宣言できようか。そして、誰がひとつの町を赦すことが出来ようか。誰が、自分の創造物に愛着があるなどと言えようか。それが出来るのは、創造主だけである。人類に対する慈愛を感じるのは、創造主だけである。人類に対する優しさと愛慕を示すことができるのは、創造主だけである。人類に対する変えることのできない真の愛情があるのは、創造主だけである。同様に、人類に憐れみを与え、神の創造物の全てを愛慕することが出来るのは、創造主のみである。創造主の心は、人間の行動ひとつひとつに対し、ときめいたり、傷んだりする。創造主は、人間の邪悪と腐敗に対して怒り、苦しみ、悲しむ。また創造主は、人間の悔い改めと信仰に満足し、寛大であり、喜ぶ。創造主の心は、いずれも人間のために存在し、人間がその中心にある。創造主の存在とそこにある物事は、すべて人間のために表出される。創造主の心は、人間の存在と密接に結びついている。創造主が旅をし、忙しく動き回り、そのいのちのすべてを与え、一分一秒を捧げるのは、人間のためである……創造主は、自らの命を哀れむことを知らないにもかかわらず、自身が造った人類を常に哀れみ、慈しむ……創造主は、自らの全てを人類に捧げる……創造主は、無条件に、かつ見返りを期待することなく、憐れみと寛容さを与える。彼がこうした業を行う唯一の目的は、人間が引き続き彼の前で生きることができるようにし、いのちを受けることができるようになることである。何時の日か、人間が彼に服従し、彼こそが人間が存在するための必要を施し、全てのもののいのちを与える存在であると認識出来るようにすることである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

33. ヨナはニネベの人々に伝えるヤーウェ神の言葉を託されたが、ヨナはヤーウェ神の意図も、ヤーウェ神のニネベの人々に対する懸念も理解していなかった。神は、この叱責により、人類が神自身の手により造られたものであること、また人間のひとりひとりについて、神が甚大な努力をしたこと、神の望みを負っていること、神のいのちの恵みを享受していること、神が大きな代償を払っていることを、ヨナに対して述べていた。また、ヨナがこのとうごまを愛慕するのと同様に、神自身の手により造られた人類を神が愛慕していることが、この叱責によりヨナに伝えられた。神は、最後の最後まで、ニネベの人々を安易に見捨てるつもりは一切無かった。さらに、ニネベには子供や何も知らない家畜も多数居た。神の創造物のうち、右も左も分からない子供や無知な動物

を取り扱うとき、神が早まって子供や動物の生命を絶ち、その運命を決めることが出来なかったのは、なおさらである。神は、子供達の成長した姿を見ることを望んでいた。神は、子供達が将来大人達のような道へ進まないこと、ヤーウェ神の警告を二度と耳にする必要が無いこと、ニネベの歴史の証をすることを望んでいた。それにも増して、神は悔い改めた後のニネベとその将来の姿を見ること、そして何よりも、ニネベの人々が再び神の慈悲の許で生活するのを見ることを、望んでいた。したがって、神の見地からすると、神が造った物のうち、そうした右も左も分からない子供達が、ニネベの将来であった。こうした子供達は、ヤーウェ神の導きの許でニネベの過去と未来の証しとなる重要な任務を背負うことになるのと同時に、ニネベの卑劣な過去も背負うことになるのであった。このヤーウェ神の真の思い入れが述べられている部分において、ヤーウェ神は、創造主の人類に対する慈悲を提示した。この部分では、「創造主の慈悲」は虚言でも、空虚な誓いでもなく、具体的な原則であり、方法であり、目的であった。創造主は真実であり、実在し、嘘や偽りを行わない。そしてこのように、彼の慈悲は、あらゆる時代において、人類に対して無限に与えられる。しかし、現在に至るまで、この創造主とヨナとの対話は、神が人類に対して慈悲をもって接する理由、神が人類に対して慈悲を示す方法、神が人類に対してどの程度寛容であるか、そして神の人類に対する真の思いに関する、神による、唯一の言葉である。ヤーウェ神の簡潔な対話では、自身の人類に対する完全な心が表出されている。この対話は人類に対する神の心の姿勢に関する真の表出であり、また人類に対する神による豊富な慈悲の付与に関する、具体的な証明でもある。神の慈悲は、常に世代から世代へと与えられてきたように、かつての人類のみに与えられるものではなく、比較的最近の人類にも与えられる。多くの場合、神の怒りは特定の地域、特定の時代に人類に対してくだされるのに対し、神の慈悲は決して止まることが無い。神は、自身の慈悲により導き、施し、与え、そしてそれを神の創造物の世代から世代へと連綿と続けられる。なぜなら、神の人間に対する真の思い入れは、変わることが無いからである。「惜しまないでいられようか」というヤーウェ神の言葉が示す通り、神は常にご自身の創造物を愛慕してきた。これが創造主の義の性質による慈悲であり、この慈悲もまた、創造主の純然たる特質である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

34. 勿論、神には哀れみと寛容があるが、神が怒りを露にする時には、神の聖さと義に背くことを許さない神の側面を見せる。人間が神の命令に完全に従うことができ、神の要求に従って行動することができる時には、神は人に溢れるほどの憐れみをかける

。しかし人間が墮落、そして神への憎悪と敵意で満ちている時、神は深い怒りを表す。では神の怒りはどれほど深いのだろうか。神の怒りは、神が人間の抵抗と悪行を見なくなるまで、神の目の前から消えてなくなるまで続く。そうしてはじめて、神の怒りは消える。言い換えると、誰であれその心が神から離れ、神に背き、神に帰ることがないならば、たとえ外見上神を礼拝し、従い、そして思考の中で礼拝し従っても、その心が神に背いた途端、神の怒りが発せられ、止むことはない。人間に十分な機会を与えたうえで、いったん深い怒りが発せられるならば、それを撤回することはなく、神は二度とそのような人間に憐れみや寛容を示すことはない。これは、神に背くことに耐えることがないという神の性質のひとつである。…優しく、美しく、善いものに対しては神は寛大で憐れみ深い。邪悪で罪深く、悪意に満ちたものに対しては、深く怒り、その怒りは止まることがないほどである。神の溢れんばかりの憐れみと深い怒り——これらは神の性質の2つの原則であり、最も重要な側面であり、初めから終わりまで示されているものである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

35. ニネベの人々に対する神の心の変化には、躊躇や曖昧さが一切含まれていなかった。むしろ、その変化は純粋な怒りから、純粋な寛容さへの変化であった。これが神の本質の真の明示である。神は、業に関して優柔不断であることや躊躇することが決して無い。神の業の根底にある原理と目的はすべて明白かつ明瞭であり、純粋で完璧であり、その中に策略や陰謀は一切潜んでいない。つまり、神の本質には、闇や邪悪が一切含まれていない。神はニネベの人々の悪の行いが神の目に留まったため、ニネベの人々に対して怒ったが、この時、神の怒りは神の本質に由来するものであった。しかし、神の怒りが消え、ニネベの人々に再び寛容さが与えられた時に神が明示したのも、神自身の本質であった。この変化は、すべて人間の神に対する姿勢の変化に起因するものであった。この変化の間、侵害を許さない神の性質も、神の寛容な本質も、神の愛と憐れみに満ちた本質も変わることが無かった。人々が邪悪な行動を取ったり、神を侵害したりした場合、神はその人々に神の怒りを伝える。人々が真に悔い改めた場合、神の心は変化し、神の怒りは静まる。人々が神に対して頑なに反抗を続けた場合、神の怒りは静まることが無い。神の怒りは徐々にこうした人々を侵し、最終的に人々は滅びを迎える。これが神の性質の本質である。神が示しているのが怒りであれ、憐れみと慈愛であれ、人間の心底にある神に対する行動と姿勢が、神の性質の明示により何が現されるかを左右する。神がある者に対して継続して怒っている場合、その者の心は間違い無く神に反

抗している。その者は決して悔い改めず、神の前でひれ伏すこともなく、神に対して真の信仰を持つこともなかったため、その者は決して神の憐れみと寛容さを得ることはできない。ある者が神の労りや憐れみ、寛容さを頻繁に与えられている場合、その者には間違い無く神に対する真の信仰があり、その者の心は神に反抗していない。その者はしばしば神の前で正直に悔い改めるので、しばしば神の鍛錬がその者にくださったとしても、その者に神の怒りがくだることは無い。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

### 36. 創造主の義なる性質は現実であり、生きている

神がニネベの人々に対して心を変えた時、神の憐れみと寛容さは見せかけであっただろうか。無論、見せかけではなかった。それでは、単一の問題において、神の性質の2つの側面の一方から他方へと推移したことから、何が分かるであろうか。神の性質は、一切分割されておらず、ただひとつである。人々に対して神が表出しているのが、怒りであるか、憐れみと寛容さであるかを問わず、それらはすべて、神の義なる性質の表出である。神の性質は、現実であり、生きている。神は、事態の展開に応じて、自身の心と姿勢を変える。ニネベの人々に対する神の姿勢の推移から、神には独自の心があることが分かる。神は機械でも粘土細工でもなく、生ある神自身である。神はニネベの人々に対して怒ることもあれば、ニネベの人々の態度に基づき、ニネベの人々の過去を赦すこともある。神はニネベに災いを起こすと決定することもある。ニネベの人々の悔い改めに基づき、その決定を変更することもある。人々は規則を機械的に適用することを好み、規則を用いて神を立証し、定義することや、神の性質を数式により知ることを好む。したがって、人間の考えの範囲内においては、神は思考することがなく、独自の考えを持っていない。現実では、神の心は、物事や環境の変化に伴い、継続的に変化している。神の心が推移している時、神の本質の様々な側面が現れる。この推移の過程において、神が心を変えた瞬間、神は、神のいのちが存在する真実と、神の義なる性質は真実であり生きているということを、人間に対して明示する。さらに、神は独自の真の明示により、神の怒り、憐れみ、慈悲、寛容さが存在する真実を人間に対して証明している。神の本質は、時間と場所を問わず、物事の展開にしたがって明示される。神は、獅子の怒りと母の憐れみと寛容さを持っている。人間が神の義の性質を疑うこと、侵害すること、変更すること、ゆがめることは、許されない。神の義なる性質、すなわち神の怒りと憐れみは、時間と場所を問わず、全ての物事において表出される。神は、こうした側面をありとあらゆる所で、ありとあらゆる瞬間に、鮮明に表出する。神の義なる性

質は、時間や場所の制限が無い。つまり、神の義なる性質は、時間と場所の制約に支配されて機械的に表出されたり明示されたりするのではない。むしろ、神の義なる性質は、いつでも、どこでも、自由に表現され、表出される。神が心を変えて怒りを表出するのを止め、ニネベの町を滅ぼさなかったのを見て、神は単に憐れみ深く、愛情があるのだ、と言えるだろうか。神の怒りは内容を伴わない言葉であると感じるであろうか。神が激しい怒りを表わし、憐れみを与えるのを止めた時、神は人類に対する真の愛を感じていなかったと言えるだろうか。神は、人々の邪悪な行いに対して激しい怒りを表したのであり、神の怒りには何ら欠陥は無い。神の心は人々の悔い改めにより動かされる。神の心を変化させるのは、この悔い改めである。神の感動、神の心の変化、神の人間に対する憐れみや寛容さには、全く欠陥が無い。これらは清く、純粋で汚れの無いものである。神の寛容さは、純粋に寛容さであり、神の憐れみは、純粋に憐れみである。神は、人間の悔い改めと行動の変化に従って、怒り、憐れみ、寛容さという性質を示す。神が示すものは、それが何かによらず、すべて純粋である。それらはすべて率直であり、その本質は創造物が示すいかなるものよりも傑出している。神が表現する行動の原理、神の心あるいは具体的な判断、あらゆる業には、全く欠点がない。神はそのように判断を下し、行動するが、同じようにして自身の計画を全うする。その結果は正確かつ完璧である。なぜならその結果の元となるものが完璧だからである。神の怒りは、完璧である。同様に、いかなる創造物も持っていない神の憐れみや寛容さは聖なるものであり、完璧であり、いかなる議論にも経験にも耐えうるものである。

この聖句にあるニネベの町での出来事を理解した上で、あなたがたは、神の義なる性質の別の側面の本質を理解できたであろうか。神唯一の義なる性質の別の側面を理解できたであろうか。人類のうち、こうした性質を持つ者は居るだろうか。神の怒りのような怒りを持つ者は居るだろうか。神のような憐れみや寛容さを持つ者は居るだろうか。創造物のなかで、これほど大きな怒りを召喚し、人間を滅ぼし、人間に災いをもたらすことを決定出来る者は、居るだろうか。憐れみを与え、人間を寛大に扱い、赦し、よって人間を滅ぼす決断を覆す資格を持つのは、誰だろうか。創造主は、自身の固有の方法と原則に従って、自身の義なる性質を示し、他の人々、出来事、物事による支配や制限を受けない。神の固有の性質のため、神の考えや心をかえることが出来る者はおらず、また神を説得して神の決断を覆すことの出来る者も居ない。創造物の行動や考えは、全て神の義なる性質による判断に基づき存在する。神が怒るか、憐れみかけるかを支配



できるものは居ない。それを決定できるのは、創造主の本質、つまり創造主の義なる性質のみである。これが創造主の義なる性質が有する唯一無二の特徴である。

ニネベの人々に対する神の姿勢の推移を分析して理解した後、神の義なる性質に含まれる憐れみを指して、それを「唯一無二」であるとする事が出来るであろうか。神の怒りは、神のみが持つ義の性質の本質における一側面であると先述した。ここで、神の怒りと神の憐れみという2つの側面を、義の性質と定義する。神の義の性質は聖であり、侵害不可能なものであり、疑うことのできないものであり、創造物にもそれ以外の物にも、その性質を持つ物は存在しない。神の義の性質は、神に固有であり限定されたものである。つまり、神の怒りは聖であり、侵害不可能なものであると同時に、神の義の性質のもうひとつの側面である神の憐れみもまた聖であり、侵害不可侵なものである。創造物やそれ以外の物で、神の業における神の代理となることができるものは皆無であり、ソドムの破壊やニネベの救済において神の代理となることができるものも皆無である。これが、神唯一無二なる義の性質の真の表出である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

### 37. 神の義の性質を知る上で、経験や想像に依存してはならない

もし、自分が神の裁きと鍛錬を受けることになったとしたら、あなたは、神の言葉は不純だ、と言うであろうか。あなたは、神の怒りの根底は架空のもので、神の怒りは不純だ、と言うであろうか。あなたは、神の性質は必ずしも完全に義では無い、と言って、神を中傷するであろうか。神の業を解釈する時は、神の義なる性質にその他の要素が混入していないこと、そして神の業が聖であり完璧であることを確信している必要がある。神の業には、神による攻撃、神の罰や、神による人類の破壊などが含まれる。神の業は、それぞれ例外なく神が本来持っている性質と神の計画に厳密に従って行われる。これには、人類の知識や伝統、哲学は含まれない。また、神の業は、それぞれが神の性質と本質を表出するものであり、腐敗した人類のいかなる物事とも無関係である。人間の考えでは、完璧であり、かつ純粹であり、かつ聖なるものは、神の人類に対する愛、憐れみ、そして寛容さだけである。しかしながら、神の怒りが同様に純粹であることを知る者は居ない。さらに、神が決して反抗を甘受しないのは何故か、神の怒りがそこまで甚大なのは何故か、といった疑問について考える者は居ない。それとは逆に、神の怒りを腐敗した人類の態度として誤解し、神の怒りを、腐敗した人類の怒りであると思いつ込み、さらには神の怒りは腐敗した人類の性質の自然な表出と同じであると仮定したりする者が居る。こうした者は、神の怒りが発生するのは、不満により発生する腐敗した

人類の怒りと同様であり、神の怒りが発生するのは神の気分の表出であると考えていることさえある。この交わりの後は、あなたがたの一人ひとりが、神の義なる性質について誤解や想像や仮定をしないこと、わたしの話を聴いた後、心の中で、神の怒りの真実を認識できること、神の怒りについて、従前の誤った考えを捨てること、神の怒りの本質に関する自分自身の誤った考えや見方を変えることが可能であることを願う。さらに、あなたがたが神の性質の正確な定義を心で理解すること、神の義なる性質について疑念を抱かないこと、神の真の性質に関して人間による理由付けや想像を適用しないことを願う。神の義の性質は、神自身の本質である。神の義の性質は、人間が造ったものでも、書き綴ったものでもない。神の義の性質は、神の義の性質であり、創造物とは何の関係も無い。神自身は、神自身である。神が創造物となることは決してあらず、神が創造物の中でその一員となった時であっても、神が本来持っている性質と本質は不変である。したがって、神を知ることは、ある物体について知ることではない。神を知ることは何かを分解することでも、人間を理解することでも無い。神を理解する上で、物体や人間を理解する方法を用いた場合、神に関する認識を得ることは不可能である。神を知ることは、経験や想像に依存することではなく、したがって神に関して自分が経験したことや想像したことを適用してはならない。どれほどの経験や想像力があっても、それには限界がある。さらに、自分の想像は事実に対応するものではなく、ましてや真理に対応するものでも無く、神の真の性質と本質とは相容れないものである。神の本質を理解する上で、想像に依存した場合、成功することは有り得ない。したがって、唯一の方法は、神から出た物すべてを受け容れ、徐々に経験し、理解に達する方法である。あなたが協力し、真理に対する飢えや渇きがあれば、何時の日か、神を真に理解し、知るよう、神が導き示すであろう。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

### (Ⅲ) 神の聖さについての言葉

38. 神の聖さとはすなわち神の完璧な本質にして神の無私的愛であり、神が人に与えるすべての物事は無私である。そしてあなたは、神の聖さに汚れがなく、非の打ち所もないことを知る。神の本質は、神が自身の身分を誇示するために用いるただの言葉ではなく、むしろ神は神の本質を用いて、静かに、真摯に個々の人間を取り扱うのです。つまり、神の本質は空虚なものでも、理論的なものでも、教義上のものでも無く、ましてやある種の知識などでは無いのです。神の本質は人間のための教育の一種ではなく、神自身の行ないの真の顕示であり、神がもつもの、神であるものの本質の顕示です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

39. 神が物事に関して人と同様の見解を抱くのを皆さんが見ることはありませんし、さらに、神が人間の視点や知識、科学、哲学、想像を用いて物事を処理するのを皆さんが見ることもありません。その代わりに、神が行なうすべてのことと、神が明らかにするすべてのことは真理につながっています。つまり、神が発したすべての言葉と、神が行なったすべての行為は真理に関係しているのです。この真理は、根拠のない空想ではありません。この真理とそれらの言葉は、神の本質と神のいのちゆえに神により表されます。これらの言葉と神が行なったすべてのことの本質は真理なので、神の本質は聖なるものであると言うことができます。言い換えると、神の言動のすべては人に活力と光をもたらします。それにより、人は前向きな物事と、その前向きな物事の現実性を見ることができ、またそれは、人が正しい道筋を歩けるよう、人に道を示します。これらの物事は神の本質ゆえに決定され、これらは神の聖なる本質ゆえに決定されます。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 5」より

40. わたしの言う神の聖さとは、何を指しますか。暫く考えてください。神の真実性は、神の聖さですか。神の誠実さは、神の聖さですか。神の無私さは、神の聖さですか。神の謙虚さは、神の聖さですか。神の人間への愛は、神の聖さですか。神は人間に真理といのちを無償で与えます。これは神の聖さですか。（はい。）神が顕すことは、全て唯一無二であり、墮落した人間には存在せず、それを見出すこともできません。サタンが人間を墮落させる過程や、サタンの墮落した性質やサタンの本質や本性では全く見ることはできないものです。神のもつもの、神であるものは、すべて唯一無二であり、そうした本質を持つのは、神自身のみです。…聖さの本質は真の愛ですが、それ以上に真理や義、光の本質なのです。「聖なる」という言葉は、神に用いられた時のみ適切

であり、創造物のうちで聖なると呼ぶに相応しいものは存在しません。人間はこれを理解しなければなりません。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

41. 「ヤーウェ神はその人に命じて言われた。『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう』」この聖句における神の人間への命令には、どのような内容が含まれていますか。まず、神は人間に何を食べてよいか、それは様々な木からの実であることを伝えます。危険も毒もなく、望むままにどれも好きなだけ食べることができます。これがひとつの箇所です。もうひとつの箇所は警告です。ここでは、どの木から実を取って食べてはならないかを人間に警告しています。人間は、善悪の知識の木からその実を取って食べてはなりません。それを取って食べると、どうなりますか。神は人間に「それを食べると、必ず死ぬ」と言いました。この言葉は分かりやすいですか。もし神があなたにこのように言うものの、なぜなのかわからなかったら、それを従うべき規則や命令とみなしますか。従わなければなりませんね。しかし、人間がそれに従うことができるか否かを問わず、神の言葉は明確なものです。神は人間に、食べてもよいものと、食べてはならないもの、そして食べてはならないものを食べるとどうなるかを極めて明瞭に述べました。神が述べたこの短い言葉に、神の性質の何かを認識しましたか。この神の言葉は真実ですか。何か欺瞞がありますか。何か虚偽がありますか。何か脅しがありますか。（いいえ。）神は人間に、正直に、誠実に、そして真摯に、食べてもよいものと食べてはならないものを、明瞭に分かりやすく伝えたのです。この言葉には、隠された意味がありますか。この言葉は分かりやすいですか。憶測する必要がありますか。（いいえ。）推測する必要はありません。言葉の意味は一見して明瞭であり、読んですぐに理解できます。極めて明解です。つまり、神が述べたいこと、神が表現したいことは、その心から出るのです。神が表現することは混じりけがなく、分かりやすく、明確です。隠れた動機や意味などありません。神は人間に直接語り、食べてもよいものと、食べてはならないものを伝えました。つまり、神のこの言葉から、神の心は透明で、真実であることが人間には理解できます。ここに偽りなど絶対にありません。食べられるものを食べてはならないと言ったり、食べられないものについて「食べて、どうなるか見てみなさい」などといったりはしていません。神はそのようなことを意味しないのです。神が心で何を考えようと、それは神が言うことです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 4」より

42. 神は人間を造り、それ以降、人類の生活を導いてきました。人類に祝福を与えるにしても、律法や神の戒めを与えるにしても、生活に様々な規則を定めるにしても、それらを行なうことにおける神の意図する目的が何であるかをあなたがたは知っていますか。まず、神のすることはすべて人類の益のためであると、確実に言うことができますか。この言い方は比較的大まかで内容がないとあなたがたは考えるかもしれませんが、具体的に言うと、神のすることはすべて人間が普通の生活を営むように導くためではないですか。それが人間が神の規則を守るようにするためであるか、神の律法を守るようにするためのものであるかにかかわらず、神の目的は人間がサタンを崇拝しないようにすること、サタンに害されないようにすることです。これは最も原則的なことで、一番最初に行われたことです。始めに、神の心を人間が理解していなかったときには、神は簡単な律法と規則を挙げ、考えられるあらゆる方面に関する規定を定めました。これらの規定は簡単なものですが、その中には神の心が含まれています。神は人類を大切にし、いつくしみ、心から愛しています。そうではありませんか。（その通りです。）では、神の心は聖なるものであると言うことができますか。神の心は清いとも言えますか。（はい。）神には隠された意図がありますか。（いいえ。）それでは、この神の目的は正しく、前向きですか。（はい。）神がどのような規定を定めたとしても、神の働きの過程において、それらはすべて人間にとって前向きな効果があり、それらが道を導きます。それでは、神の意思には利己的な考えがありますか。神には人間が関わる場所で何か追加的な目的があったり、神は人間を何らかの方法で利用したいのですか。（いいえ。）そういうことは一切ありません。神は言葉の通りに行い、また心でもそのように考えます。目的が混入していることや、利己的考えはありません。神は自分自身のために何かをすることはなく、絶対的にすべてを人間のために行い、自身の目的は一切ありません。たとえ神には人間のための計画や意図があるものの、神は自分自身のためには何も行ないません。神が行なうことはすべて純粹に人間のために、人類を守り、人類が誤った道へと迷い込まないようにするために行なわれます。この心は貴重ではありませんか。この貴重な心をほのめかすものが一抹でもサタンに見られますか。（いいえ。）これをほのめかすものはサタンには一切見られません。神の行なうことは、すべて自然に明示されます。神の働き方を見ると、神はどのように働きますか。神はこれらの律法や言葉を、緊箍児<sup>(4)</sup>のように一人ひとりの人間の頭にきつく結び付けて、各人に強制的に課しますか。神はそのように働きますか。（いいえ。）それでは、神はどのようにその働きを行ないますか。（神様は私たちを導かれます。神様は私たちに助言を与え、励まされます。）神は脅迫しますか。神はあなたがたに堂々回りの話し方をします

か。（いいえ。）あなたが真理を理解できないとき、神はどのように導きますか。（神様は光を照らされます。）神はあなたに光を照らし、真理と一致しないことや、すべき事を明確に伝えます。神が働くこれらの方法から、あなたは神とどのような関係にあると感じますか。これらの方法は、神はあなたの把握する範囲を超えていると感じさせますか。（いいえ。）それでは、どう感じさせますか。神は特にあなたに近く、あなたとの距離はありません。神があなたを導くとき、あなたに施すとき、あなたを助け、支えるとき、あなたは神の優しさ、神の尊敬すべきことを感じ、神がどれほど美しく、どれほど温かいかを感じます。では、神があなたの堕落を咎めたり、神に背いたことについてあなたを裁いたり鍛錬するとき、どのような方法を用いますか。神は言葉で咎めますか。神はあなたの環境や人々、出来事、物事などを通して鍛錬しますか。（はい。）この鍛錬は、どの程度に達しますか。それは、サタンが人間を害するのと同程度に達しますか。（いいえ、人間が耐えられる程度に達します。）神は、優しく、愛に溢れ、繊細で、思いやりのある方法で、特別に配慮された適切な方法で働きます。神の方法は、「神は私にこれをさせてくれるべきだ」とか、「神は私にそれをさせてくれるべきだ」のような強い感情をあなたに抱かせることはありません。神は物事が耐えがたくなるような強い考え方や強い感情をあなたに与えることは決してありません。そうではありませんか。たとえ神の裁きと刑罰の言葉を受け入れるときでさえ、あなたはどう感じますか。神の権威と力を感じる時、あなたはどう感じますか。神は神聖で害することができないと感じますか。（はい。）そのようなときに、あなたは神から遠ざけられたと感じますか。神に対する恐怖を感じますか。感じません。そのかわりに、あなたは神に対する畏敬の念を感じます。人は神の働きのおかげで、これらすべてのことを感じるのではないですか。もしサタンが人間に働きかけたとしたら、人間はこうした感情を抱くでしょうか。（いいえ。）神は神の言葉、神の真理、神のいのちを用いて、絶えず人間に施し、人間を支えます。人間が弱いとき、落ち込んでいるとき、神は決して厳しく「落ち込むな。なぜ落ち込んでいるのか。なぜ弱いのか。弱くなるどのような原因があるのか。あなたはあまりに弱く、常に落ち込んでいる。生きていて何の意味があるのか。死んでしまえ」などとは言いません。神はこのように働きますか。（いいえ。）神にはこのように振る舞う権威がありますか。（はい。）しかし、神はそのように振る舞いません。神がそのように振る舞わないのは、神の本質、神の聖なる本質のためです。神の人間への愛、神が人間を大切にし、いつくしむことは、一、二行では明確に表現できません。それは人間の誇りによりもたらされるものではなく、神が実際の実践において生み出すものであり、それは神の本質の明示です。神が働くこれらの方法すべてによ

り、人間は神の聖さを見ることができますか。神の善意、神が人間において達成したい効果、神が人間に対して働くために用いる様々な方法、神が行う働きの種類、神が人間に理解させたいことを含め、神が働くこれらの方法すべてにおいて、神の善意に何らかの邪悪や悪賢さを見たことがありますか。（ありません。）それでは神が行うことすべて、言うことすべて、神が心で思うことすべてにおいて、また神が明示する本質のすべてにおいて、神を聖なるものと呼ぶことができますか。（はい。）この聖さをこの世において、あるいは自分自身の中に見たことがある人間はいますか。神以外に、聖さを誰か人間かサタンの中に見たことがありますか。（ありません。）今まで話してきた内容から、神を唯一無二の聖なる神自身と呼ぶことができますか。（はい。）神の言葉、神が人間に対して働く様々な方法、神が人間に語ることに、人間に思い起こさせること、助言し、励ますことを含め、神が人間に施すものはすべて一つの本質に由来します。すなわち、それらはすべて神の聖さに由来するのです。もしそのような聖なる神が不在であったなら、神に代わり、神の働きを行なうことのできる人間はいません。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 4」より

43. 今は終わりの日における神の働きの時となり、神はもはや最初のように恵みと祝福を人間に与えるのみではなく、また人間をなだめることもありません。この働きの間に、人間は経験した神の働きのあらゆる側面から何を認識したのでしょうか。人間は、神の愛と神の裁きと刑罰を認識したのです。この時、神は人間にさらに施し、支援し、啓き、導き、人間は次第に神の意図と語られる言葉、そして神が人間に与える真理を理解するようになります。人間が弱く、落胆し、よりどころとするものを失った時、神は言葉により人間を慰め、忠告し、励ますので、霊的背丈の小さな人間は次第に自分の力を見出し、前向きに立ち上がることができ、神と協力することを望むようになります。しかし、人間が神に従わなかったり、神に抵抗した場合、あるいは自分自身の墮落を表した場合、神は容赦なくそうした人々を懲らしめ鍛錬します。しかし、人間の愚かさ、無知さ、弱さ、未熟さに対し、神は寛容と忍耐を示します。このように、神が人間に対して行う全ての働きにより、人間は次第に成熟し、神の意図や真理の一部を知り、肯定的な物事や否定的な物事、邪悪とは何か、闇とは何かを知るようになります。神は人間を常に懲らしめ、鍛錬するとは限らず、また常に寛容と忍耐を示すとは限りません。むしろ、神は各人に対し、異なる方法で、様々な段階において、人間の様々な霊的背丈や能力に応じて施すのです。神は、人間に対して多くのことを行い、大きな代償をはらいます。人間はその代償や業を認識することは無いものの、神のすることはすべて人間ひ

とりひとりに対して実際に行われています。神の愛は実在します。神の恵みにより、人間は災害を次々と回避する一方で、人間の弱さには、神は何度となく寛容を示します。神の裁きと刑罰により、人間は人類の墮落とサタンのような本質を次第に認識するようになります。神が与える物事、神が人間の目を開くこと、そして神による導きにより、人間は、真理の本質、人間に必要な物事、自分が進むべき道、人生の目的、自分の人生の価値と意味、将来へと進む方法をますます知ることができるようになります。こうした神の業は、神の唯一の元来の目的と不可分です。それでは、その目的とは何でしょうか。神がそのような方法で人間に対する働きを行うのは、何故でしょうか。神はどのような結果を実現しようとしているのでしょうか。言い換えれば、神は人間に何を見、人間から何を得たいのでしょうか。神は、人間の心が蘇ることを見たいのです。神がこのようにして人間に対して働きを行うのは、継続的に人間の心を目覚めさせ、霊を目覚めさせ、人間がどこから来たのか、人間を導き、支え、また人間に与え、人間の存在を現在まで維持しているのは誰かを認識させるためであり、創造主は誰であるか、誰を礼拝すべきか、人間はどのような道を歩むべきか、人間はどのようにして神の前に来るべきかを人間に認識させるためです。こうした方法が用いられるのは、人間が神の心を知り、理解し、神の人間を救う働きの背後にある大いなる慈しみと愛を理解するように、人間の心を次第に蘇らせるためです。人間の心が蘇ると、人間は退廃し墮落した性質の生活を送ることを望まなくなり、その代わりに神が満足する真理を追い求めることを望むようになります。人間の心が目覚めると、人間はサタンと完全に訣別できるようになり、サタンによる危害を受けなくなり、サタンにより支配されることも騙されることも無くなります。その代わりに、人間は神の働きと言葉に積極的に協力して神の心を満足させることができ、神を畏れ、悪を避けることができるようになります。これが神の働きの元来の目的です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

44. 基本的に、長い人生の中では、誰もが数多くの危険な状況や誘惑に遭遇します。これは、あなたの傍らには、常にサタンが存在し、あなたを見据えているからです。サタンは、あなたが災害に見舞われたり、災難が降りかかったり、何事もうまくいかなかったりすることを喜び、また、あなたがサタンの罠にかかることを喜びます。しかるに神は、常にあなたを守り、次々起こる逆境や災難からあなたを守ります。これが、平安や喜び、祝福、身体の安全など、人間が持つものは、実際のところ全てが神の支配下にあり、神が各人の運命を導き、決定する、とわたしが言う理由です。しかし、一部の



人々が言うように、神は自分の地位について仰々しい概念を持っており、「わたしは最も偉大な存在であり、わたしがあなたがたを支配している。あなたがたは全員わたしに慈悲を請わなければならず、わたしに従わない者は死をもって罰とする」などと言うのでしょうか。神はかつて、このように人間を脅迫したことがありますか。（ありません。）神は、これまでに「人類は墮落しているので、わたしが人間をどのように好き勝手に扱ってもどうでもよい。人間に対して周到な用意を行う必要は無い」などと言ったことがありますか。神はこのように考えるのでしょうか。神がそのように行動したことがありますか。（ありません。）それとは反対に、神による人間それぞれに対する処遇はまじめで責任感があり、あなたが自分自身に対するよりも責任感に溢れています。そうではないですか。神は無益に言葉を述べることも、尊大に振る舞うことも、人々を欺くこともありません。その逆で、神は誠実かつ静かに、自身が行うべきことを行います。それらの業は人間に祝福、平安、喜びをもたらします。それらは人間を平安かつ幸福のうちに神の見えるところへと来させ、神の家へと連れて行きます。すると人間は正しい理知と思考をもって、神の前で生きて神の救いを受け入れます。それならば、神はその働きにおいて他意があったことがありますか。かつて神が人間に対して親切を装い、少々の愛想のよい言葉で騙し、それから人間に背を向けたことがありますか。（ありません。）かつて神が、あることを述べ、それと一致しないことを行ったことがありますか。かつて神が、これをしてあげよう、あれをするのを助けてあげようと空虚な約束をし、豪語した上で消え去ったことがありますか。（ありません。）神には、狡猾さや偽りがありません。神は信実で、神のすることはすべて真実です。神は、人間が信頼できる唯一の存在であり、自分の人生などの全てを託すことのできる神です。神には狡猾さが無いのであれば、神は最も真摯な存在であると言えますか。（はい。）当然言えます。今このような言葉で神を叙述すると、言葉が無力であり、人間的でありすぎるものの、人間の言語の制約があるため、どうすることもできません。ここで神を真摯であるとするのは僅かに不適ですが、当座はこの語を用います。神は信実かつ真摯です。それでは、こうした側面について話すことは、何を意味しますか。神と人間の相違点や、神とサタンの相違点ですか。そう言うこともできます。なぜなら人間は、サタンの墮落した性質を全く神に見出すことができないからです。そう言って間違いないですか。これにアーメンと言って貰えますか。（アーメン！）サタンの邪悪さが神において明らかにされることを見る事は決してありません。神が行ない明示する事柄は全て人間にとって有益であり、役立つものであり、人間に施すために行われ、いのちに満ちあふれ、人間に対して進むべき道と方向性を与えます。神は墮落しておらず、さらに神のすること全てを検

討すると、神は聖なる存在であると言えますか。（はい。）神には人類の墮落が一切なく、人類の墮落した性質やサタンの本質と類似していたり同一であったりするようなのは一切無いので、この観点から、神は聖なる存在であると言えます。神が墮落を示すことはありません。神自身が聖であることは、その働きにおける本質の明示により十分確認することができます。このことが理解できますか。では神の聖なる本質を今、知るために、しばらく次の二つの側面について検討しましょう。①神には墮落した性質が全く無い、②人間に対する神の働きの本質により、人間は神自身の本質を理解することができます、この本質は完全に肯定的であること。一つひとつの神の働きが人間にもたらすものは、全て肯定的であり、まず、神は人間が誠実であることを要求します。これは肯定的ではないでしょうか。神は人間に知恵を与えます。これは肯定的ではないですか。神は人間が善と悪を見分けることができるようにします。これは肯定的ではないですか。神は人生の意味と価値を人間に理解させます。これは肯定的ではないですか。神は人間に人々、出来事、物事の本質を真理に従って理解させます。これは肯定的ではないですか。（はい、そうです。）これら全ての結果として、人間はサタンに騙されたり、危害を加えられたり、支配されたりすることが無くなります。つまり、人間はサタンの墮落から完全に解放され、したがって神を恐れ悪を避ける道を徐々に歩むことができます。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

45. 現在、神の本質に関するあなたがたの知覚的な理解には、学び、確認し、実感し、経験するための長い時間が必要です。やがて心から神の聖さが、神の完璧な本質であり、神の無私な愛であり、神が人間に与える物事のすべてが無私であることを知り、神の聖さは汚れ無く、非難の余地が無いことを知るでしょう。神の本質は、神が自身の身分を誇示するために用いるただの言葉ではなく、むしろ神は神の本質を用いて、静かに、真摯に個々の人間を取り扱うのです。つまり、神の本質は空虚なものでも、理論的なものでも、教義上のものでも無く、ましてやある種の知識などでは無いのです。神の本質は人間のための教育の一種ではなく、神自身の行ないの真の顕示であり、神がもつもの、神であるものの本質の顕示です。人間はこの本質を知り、理解しなければなりません。なぜなら、神が行なうこと、神が言う言葉は全て偉大な価値があり、一人ひとりの人間にとって極めて重要であるからです。あなたが神の聖さを理解した時、あなたは神を真に信仰することができます、神の聖さを理解した時、「唯一の神自身」という言葉の真意を本当に理解できます。あなたは他の道を歩むことも可能であると想像することは

もはや無く、神があなたのために用意した全てを裏切ろうとはもはや思わなくなります。神の本質は聖なるものなので、あなたは神によってのみいのちに通じる明るい正しい道を歩むことができ、神によってのみ人生の意味を知ることができ、神によってのみ真の人間性を生きることができ、真理を獲得し、知ることができ、神によってのみ真理からのちを得ることができます。人間が悪を避けるのを助け、サタンの危害と支配から人間を救うことができるのは神だけです。神以外に、これ以上苦しめないよう、辛苦の海からあなたを救い出すことができる人や物はありません。このことは、神の本質により決まっています。無私にあなたを救うのは神自身のみであり、あなたの将来や運命、人生に究極的に責任を負うのは神のみであり、神はあなたのためにあらゆる物事を手配します。これは、被造物や非被造物のいずれも成し得ないことです。被造物や非被造物に、このような神の本質を持つものは存在しないので、あなたを救い、導く能力のある人や物は存在しません。これが人間にとっての神の本質の重要性です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

#### 脚注

a. 「緊箍児」とは、中国の有名な小説『西遊記』に言及している。この小説では、僧の玄奘が呪文により孫悟空を支配するが、そのためには金の環が孫悟空の頭にはめられ、魔法により締め付けられ、耐え難い頭痛を起こす。その後、これは人間を拘束することの比喩表現となった。

#### (Ⅳ) 万物のいのちの源たる神についての言葉

46. 神が万物を造って以来、神が定めた法則に基づき、万物は機能を続け、常に発展してきた。神に見守られ、神に支配されて、万物は人間の生存とともに常に発展し続けて来た。いかなる物も、これらの法則を変えたり破壊したり出来ない。あらゆる生き物が増殖できるのは、神による支配があるからであり、あらゆる生き物が生存できるのは、神の支配と管理があるからである。つまり、神の支配下においては、あらゆる生き物が規則正しく現れ、繁栄し、消滅し、復活する、ということである。春になると降り注ぐ雨が春特有の感覚をもたらし、地を潤す。地では雪解けが始まり、草が土の中から芽吹き、木々も次第に緑色へと変わる。こうした生き物全てが、地に新鮮な活力をもたらす。これが、あらゆる生き物が現れて繁栄している光景である。様々な動物も巣穴から出て春の温もりを感じ、新しい年を始める。全ての生き物が夏の暑さのなかで日差しを浴び、夏の温かさを楽しむ。様々な草木や植物は急速に生長し、花を咲かせて実を結ぶ。夏は、人間を含めて全ての生き物が活発である。秋には雨が涼しさをもたらし、様々な生き物が刈り入れの時期を迎える。あらゆる生き物が実を結び、こうした生き物が秋の実りを迎えるので、人間もまた冬の食料を準備するために刈り入れを始める。冬になると、全ての生き物が寒さの中で次第に休息し始め、静寂が訪れ、人間もまた休息して冬を過ごす。こうした春夏秋冬の移り変わりは、すべて神が定めた法則により行われる。神はこの法則によりあらゆる生き物と人間を導き、人間のために豊かで色彩に富んだ生活形態を設け、様々な気温と季節のある生存環境を用意した。こうした規律ある生存環境では、人間の規律ある生存と繁殖も可能となる。人間はこの法則を変えることができず、この法則に反することが出来る者は皆無である。この世にどれほど大規模な変革があろうと、これらの法則は存続する。なぜなら、これらの法則が存在するのは、神が存在するからである。その理由は、神の支配と管理である。この種の秩序ある、より広範な環境の中で、人間の生活は、そうした法則と規則の中で進歩する。これらの法則により何世代もの人間が培われ、また何世代もの人間がこれらの法則の中で生存してきた。人間は、何世代にもわたり、神が造った物事と秩序ある環境を享受してきた。人間がこれらの法則を元来のものであると感じたり、それを完全に軽視していたり、あるいはそれが神により指揮されている、支配されていると感じることが出来なかったとしても、いかなる場合も、神は常にこの変わることの無い業を常に行っている。こうした変わらない業における神の目的は、人間の生存と、人間が存続することが出来るようにすることである。

47. 神は、万物を支配する規則の主であり、神は万物の存続を律する規則を支配し、また神は宇宙や万物も、共生できるように支配する。神はそれらの物事が絶滅したり消滅したりしないよう、支配するので、人類は存続することが可能であり、そうした環境で神の導きのもとに生活できる。万物を支配するこれらの規則は神の支配下であり、人類はその規則に干渉することも、その規則を変更することも出来ない。これらの規則を知り、管理するのは神自身のみである。木々はいつ芽吹くか、雨はいつ降るか、土がどの程度の水と栄養素を植物に与えるか、葉はどの季節に落ちるか、木々はどの季節に実を結ぶか、日光はどの程度のエネルギーを木々に与えるか、日光から得たエネルギーにより木々は何を排出するか、といった事柄は、全て神が宇宙を造った時に決められていることであり、人間が破ることの出来ない律法である。生物も、人間には生物であるとは見えない物も、神により造られたものは神の掌中にあり、神の支配の下にある。この規則を変えたり違反したり出来る人間は居ない。つまり、神が万物を造った時、神は万物がどうあるべきかを定めた。木は土が無ければ根を下ろすことも、芽吹くことも、成長することも出来ない。土に木が無ければ干上がるであろう。また、木は鳴き鳥の住処であり、風から身を守る場所でもある。木は日光無しでも問題無いであろうか。（それは問題となる。）木に土だけしか無かったとしたら、それは木に不適であろう。こうした事は、すべて人間と人間の生活を継続するためのものである。人間は木から新鮮な空気を受け取り、木が守る土の上で生活する。人間は日光や他の生物が無ければ生活できない。これらの物同士の関係は複雑であるが、万物が相互に関連し、依存して存在することが出来るように、神が万物を支配する規則を定めたことを、あなたは思い出す必要がある。神が造った物には、その全てに価値と意味がある。神が意味の無いものを造ったとしたら、神はそれを消滅させるであろう。これは、神が万物を与える際に用いる方法のひとつである。

48. 神が宇宙に必要なものを与える、というのは、極めて広義であり、様々な場合がある。神は、単に日常に必要とされる食料や飲料を人間に与えるのみならず、人間に見える物と見えない物を含め、神は人間に必要とされる全ての物事を与える。神は、人間に必要とされる生活環境を維持し、管理し、支配する。どの季節に人間がどのような環境を必要とするかを問わず、神はそれを用意している。人間の生活に適した大気や気温もまた神の支配下であり、これらの規則が自然に発生したり、不規則に発生したりす

ることは一切無い。それらの大気や気温は神の法則と業の結果である。これら全ての規則の源は神自身であり、神は万物のいのちの源である。これは、あなたが信じることができるかどうか、知ることができるかどうか、理解できるかどうかを問わず、証明された、疑う余地の無い事実である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 7」より

49. 神が万物を造った時、神は様々な手段と方法により、万物の釣り合いを取るようにし、山や湖沼の存続条件、植物や様々な動物、鳥、昆虫の生活条件の釣り合いを取った。神の目的は、神が定めた法則に従って様々な生き物が生活し、繁殖できるようにすることであった。あらゆる生き物はこれらの法則に反することができず、またこれらの法則は破ることが出来ないものであった。人間が安全に生活し、何世代にもわたって繁殖可能であるのは、この種の基本的な環境の中のみであった。ある生き物が、神が定めた量や範囲、神が支配している増加率、頻度、数を超えている場合、人間の生存環境は様々な程度の被害を受けるであろう。それと同時に、人間の生存が危機に瀕することになるであろう。…適切な数を超える動物が1種類あるいは数種類存在する場合、人間の生存空間内の空気、気温、湿度、そして空気の構成成分ですら様々な程度で被害を受け、破壊されるであろう。同様にして、こうした状況下では、人間の生存と運命が、この種の環境の脅威を受けるであろう。したがって、人間がこうした釣り合いを失った場合、人間が呼吸する空気が損害を受け、飲む水が汚染され、必要とする気温も変化し、様々な程度の影響を受けるであろう。こうした事態が発生した場合、人類の土着の生存環境に甚大な影響と問題が発生する。このような、人間の基本的な生存環境が破壊された状況では、人類の運命と将来の見通しは、どのようなものになるであろうか。これは極めて深刻な問題である。人間にとって万物がどのような存在であるか、神が造った物それぞれの役割、それが人間にどのような影響を及ぼし、どれほど大きな利益をもたらすかを神は知っているので、神の心では、こうした物事全てに計画があり、また神は神が造った万物のあらゆる側面を管理している。したがって、人間にとって、神が行う業は、全て極めて重要であり、全て必要なものであった。万物の生態的な現象や万物の自然の法則を見るとき、神が造った物それぞれの必要性に疑念を抱かなくなるであろう。あなたは、神による万物に対する采配と、神が人間に施す様々な方法について、無礼な言葉を使って勝手な判断をすることが無くなるであろう。また万物に対して神が定めた、神の法則に関しても、勝手な結論を行わなくなるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 9」より

50. こうした奇妙に見える現象について話をしている理由は、それが1か所に固定されているか、鼻から呼吸できるかどうかを問わず、神が造った万物には、それぞれの生存法則が存在するということを、あなたがたに理解してもらうためである。神がこれらの生き物を造る遥か以前に、神はそれらの生き物のための棲息地、つまり固有の生存環境を用意した。これらの生き物には、それぞれ固定された生存環境、固有の食料、固定の棲息地、生存のための気温などがそうした生き物の生存に適した、固定された棲息地がある。このように、そうした生き物は方々を彷徨ったり人間の生存を侵害したり、人間の生活に影響を及ぼしたりすることは無い。これが、神が全ての生き物を管理する方法である。こうした事は、すべて人間に最適な生存環境を与えるためのものである。万物のうち、生き物には、それぞれ固有の生存環境の中に生き延びるための食料がある。その食料により、生き物は土着の生存環境に固定されている。そうした環境においては、生き物は、それらの生き物のために神が定めた法則に従い、依然として生存と繁殖を続けている。この種の法則や神の予定があるため、あらゆる生き物は人間と調和して相互作用し、人間とあらゆる生き物は相互依存している。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 9」より

51. 万物がそれぞれの法則を失ったとしたら、万物は存在しなくなるであろう。万物がそれぞれの法則を失ったとしたら、万物のうち、あらゆる生き物が存続不可能となるであろう。人間もまた、人間が自らの生存を依存している、自らの環境を失うであろう。人間がこれら全てを失うとしたら、人間は世代を超えて繁殖し、生存してゆくことが出来なくなるであろう。人間が現在まで生存してきたのは、神が人類を様々な方法で育むために、人間に対して万物を与えたからである。人間が現在まで、つまり今日まで生存してきたのは、神が様々な方法で人間を育てているからである。こうした好ましく秩序のある固定された生存環境により、地上の様々な種類の人間、様々な人種の人間が、予め定めた範囲内で生存出来るのである。この範囲や境界を越えることが出来る者は居ない。なぜなら、それらを定めたのは神だからである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 9」より

52. 万物は神の支配から切り離すことが出来ないので、神の支配から自分を切り離すことが出来る人間は居ない。神による支配と供給を失うと、人間の命、すなわち人間の肉にある命は消滅するであろう。これが、神が人間の生活環境を定めたことの重要性である。人種を問わず、また東洋、西洋など居住地域を問わず、人間は、神が人類のために用意した自らの生存環境から自らを切り離すことはできず、神が用意した生存環境

による養育と供給から自らを切り離すことができない。あなたの生活手段や、あなたが生活を依存している物事、肉にある命の維持を依存している物事が何であれ、あなたは神による支配と管理から自らを切り離すことが出来ない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 9」より

53. 神が万物のいのちの源であることは、神がすべてのものを供給することが十分示しています。なぜなら、神は万物が存在し、生き、繁殖し、継続することを可能にした供給の源だからです。神以外には存在しません。神は、それが最も基本的な生活環境であれ、人間が日常的に必要なものであれ、人々の霊への真理の供給であれ、万物に必要なものと人類に必要なものすべてを与えます。あらゆる視点から見て、人類にとっての神の身分と地位に関しては、万物のいのちの源は神自身のみです。これは正しいですか。（はい。）つまり、神は人間が目で見えて感じるこの物質世界の支配者であり、主であり、供給者です。人類にとって、これは神の身分ではありませんか。これは完全に正しいです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 8」より

54. 霊的世界とは、物質世界とは異なる重要な場所である。それでは、わたしがそれを重要であると言う理由は何であろうか。これについて詳細に話をする。霊的世界の存在は、人間の物質世界と不可分の関連性がある。霊的世界は、神による万物の統治のうち人間の生死の周期において重要な役割を担い、この役割がその存在が重要である理由のひとつである。霊的世界は五感で認識できない領域であるため、それが存在するかどうかを正確に判断できる者は存在しない。霊的世界における出来事は人類の存在と密接に関連し、そのため人間の生き方もまた霊的世界から甚大な影響を受ける。これは神による統治に関連するであろうか、というと、関連する。こう述べても、わたしがこの事項について話をする理由を理解できるであろう。霊的世界は神による統治と管理に関連するから、というのが、その理由である。このように、人間が見ることのできない世界における天の命令や律法、統治組織は、物質世界におけるどの国家の法令や組織よりも遙かに優れており、この世界に生きるもののうち、そうした命令や律法、統治組織に背いたり濫用したりしようとする者は、一切居ないであろう。これは神による統治と管理に関連するであろうか。霊的世界には、明確な行政命令と、明確な天の命令、規則がある。様々な段階と領域において、執行官は厳密にその任務と規則を遵守する。なぜなら、執行官は天命に背いた時の報いが何か、神がどのように邪悪を罰し、善良に報いるか、神がどのように万物を統治し、支配するか、そして神がどのようにして天の命令と



憲章を実施するかを明確に理解しているからである。これらの事柄は、人間が住む物質世界と異なるであろうか、というと、大いに異なる。霊的世界は、物質世界とは全く異なる世界である。天の命令と規則があるため、霊的世界は、神による統治、支配、そして神の性質と神が持っているものや神であるものに関連する。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 10」より

55. 神は霊的世界における様々な天の命令や規則、組織を定め、そうした天の命令や規則、組織が宣言された後、それらは霊的世界の様々な役務を担当する者により、神が定めた通り厳密に施行され、敢えてそれらに違反する者は居ない。したがって、人間の世界における人間の生死の周期、そしてある者が動物として生まれ変わるか、人間として生まれ変わるかについては、その両方に法則が存在する。これらの法則は神に由来するため、敢えてそれに背く者は居らず、背くことが出来る者も居ない。人間が見ることの出来る物質世界が規則正しく秩序が保たれているのは、こうした神の統治と法則のためである。人間が全く見ることの出来ない別の世界と平和に共存し、そこで調和して生活出来るのは、こうした神の統治のためであり、これらは全て神の統治と不可分のものである。人の肉の命が死んだ後も、魂にはいのちがあるとすれば、神の管理が無かったとしたら、その魂はどうなるであろうか。その魂は様々な場所をさまよい、様々な所に入り込んで、人間の世界の生き物を害することすらあるであろう。こうした危害は人間だけでなく、植物や動物も対象となるが、最初に害を受けるのは、人間であろう。こうした魂が管理されておらず、人間に危害を加え、極めて邪悪な物事を行ったとしたら、霊的世界にこうした魂の適切な処遇も存在するであろう。事態が深刻な場合、その魂はやがて消滅し、破壊されるであろう。可能であれば、どこかに置かれた後に生まれ変わるであろう。つまり、霊的世界における様々な魂の管理は、様々な段階と規則に従って命じられ、実施されている。人間の物質世界が混沌としたものとならず、物質世界の人間が正常な精神と分別を持ち、肉体にあって秩序ある生活を送っているのは、こうした管理があるために他ならない。人間がそうした通常の生活を送ることによって初めて、肉体にあって生活する者は繁殖し、何世代にもわたって繁殖を続けることができる。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 10」より

56. 生き物の死、すなわち物理的な生命の終焉は、その生き物が物質世界から霊的世界へと移動したことを示す一方、物理的な生命の誕生は、生き物が霊的世界から物質世界に来て、その役割を負い、果たし始めるということを示す。それが生き物の出発であるか、到着であるかを問わず、そうした出発と到着は両方とも霊的世界における業と

不可分である。ある者が物質世界に到来した時、霊的世界において、その者が生まれる家庭、その者が現れる時代、時期、そしてその者が担う役割に関して、その者に適した采配と定義は、神により既に完了されている。そうしたわけで、その者の生涯全体、その者の行動や、その者が進む方向性は、霊的世界における采配に従い、一切の誤り無く進行してゆく。その一方で、物理的な生命が終焉を迎える時、そして終焉のかたちと場所は、霊的世界においては明瞭で認識可能である。神は物質世界を支配し、また霊的世界を支配し、また神は通常における魂の生死の周期を遅延させることは一切無く、ある魂の生死の周期に関する采配において誤ることも一切無い。霊的世界の当局に仕える執行官は、それぞれ神の指示と支配に従い任務を遂行し、なすべき事を行う。そのため、人間の世界では、人間が認識するあらゆる物質的現象は秩序があり、混沌は一切存在しない。こうしたことは、すべて神の秩序ある万物支配と、神の権威による万物支配のおかげであり、神の支配下にある物事には、人間が生活する物質世界のほか、人類の背後にある目に見えない霊的世界がある。そうしたわけで、人間が良い生活を望み、好ましい環境を望むのであれば、物質世界全体において与えられることに加え、誰も見ることが出来ず、人間のためにあらゆる生き物を統治し、秩序のある霊的世界においても与えられる必要がある。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 10」より

57. 万物を支配し、管理しているのは、神である。神は、存在するあらゆる物事を造り、管理し、また支配し、施す。これが神の地位であり、身分である。万物すなわち存在する全ての物事について、神の真の身分は創造主であり、支配者である。それが、神が所有する身分であり、神は万物にあって唯一の存在である。神の被造物のうちひとつとして、人間の世界にあるか、霊的世界にあるかを問わず、何らかの方法や申し開きにより、神の身分や地位を装ったり、神の代理となったりすることの出来るものはいない。なぜなら、万物を支配する身分と力、権威、そして能力を持つ者は、ただひとりしか存在せず、それが唯一の神自身であるからである。神は万物の中で生き、動いている。神は万物のうち最も高い場所へと昇ることができる。また神は、血と肉のある人間のひとりに身をやつし、人間と対面して苦楽を共にすることも可能である。それと同時に、神は万物に命じ、万物の運命や方向性を決定する。さらに、神は人類全体の運命と方向性を導く。このような神は、あらゆる生き物が崇め、付き従い、知るべき存在である。したがって、どの種類の人間に属するかを問わず、神を信じ、付き従い、敬うこと、またあなたの運命に対する神の支配と神の采配を受け入れることのみが、あらゆる人間

や生き物にとって、必然の選択肢である。神の唯一性により、人間は神の権威、神の義なる性質、神の本質を理解し、そして神が万物に施す方法が全て独自のものであることを理解する。また神の唯一性により、神自身の真の身分と神の地位が決定される。そうしたわけで、あらゆる被造物のうち、霊的世界や人間の世界に存在する生き物が神の代わりとなろうとした場合、それは不可能であり、また神になりすますことも不可能である。これは事実である。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 10」より

## VIII サタンがいかに人類を墮落させるかを明らかにする代表的な言葉

1. 地がまだ存在していなかったとき、大天使は天国の天使の中で最も偉大だった。大天使は、天国のすべての天使に対する権限を握っていた。それは神から大天使に与えられた権威だった。神を除いて、大天使は天国の天使の中で最も偉大だった。神が後に人間を創造したとき、大天使は地上において神に向けて大きな裏切りを行った。大天使は、人間を支配し、神の権威を超越したかったため、神を裏切ったとわたしは言うのである。エバを誘惑して罪に陥れたのは大天使だった。大天使が神を裏切ったのは、地上に自分の王国を建設し、人間に神を裏切らせて、代わりに自分に従わせたかったからである。大天使は自分に従う者がたくさん存在することを知った。天使たちは、地上の人々と同じく、大天使に従った。鳥と獣、木々、森、山、川、および地上のあらゆるものは、人であるアダムとエバの管理下にあり、アダムとエバは大天使に従った。大天使はそのようにして神の権威を超越し、神を裏切ろうと考えた。後に大天使は多くの天使たちに神を裏切らせ、それが汚れた霊となった。今日までの人間の発展は、大天使の墮落に影響されているのではないか。人間が今日あるような状態なのは、大天使が神を裏切り、人間を墮落させたからである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは人類全体が現在までどのように発展してきたかを知るべきである」より

2. はじめに神はアダムとエバを創造し、また蛇も創造した。全ての被造物の中で、蛇は最も有毒だった。その体は毒を含み、サタンはその毒を利用した。エバを誘惑し罪に落とし入れたのは蛇だった。アダムはエバが罪を犯した後に罪を犯した。そして2人はそれから善と悪の区別ができるようになった。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは人類全体が現在までどのように発展してきたかを知るべきである」より

3. 「女を惑わす蛇」について話しましょう。この蛇は誰ですか。（サタンです。）神の六千年にわたる経営（救いの）計画において、サタンは引き立て役であり、…サタンの言動から、サタンがどのように行動し、どのように人間を墮落させ、どのような本性を持ち、どのような表情であるかを見ることが出来るからです。では、女は蛇に何と言いましたか。女はヤーウェ神が女に言ったことを蛇に説明しました。女の言葉に従うなら、女は神が女に言ったことすべての有効性を確認していましたか。女はそれを確認できませんでした。そうですね。新たに造られたばかりの者として、女には善と悪を見分ける能力も、自分の周囲の何かを認識する能力もありませんでした。女が蛇に語った

言葉から判断すると、女は心の中で神の言葉が正しいと認めていませんでした。それが女の態度でした。だから、神の言葉に対して女が確固たる態度がないことを見てとった蛇は、「あなたがたは必ず死ぬ訳ではない。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」と言いました。この言葉には、何か間違いがありますか。この一文を読み終わったとき、あなたがたは蛇の意図を感じ取りましたか。この蛇は、どのような意図をもっていますか。（人間を惑わして罪を犯させようとすることです。）蛇はこの女を惑わして神の言葉に耳を傾けるのをやめさせたいのですが、そのままを話しませんでした。ゆえに、蛇は極めて狡猾であると言えます。蛇は、人間に気付かれないよう心の中に秘めた意図する目的を果たすために、その旨をずるくて曖昧な方法で表現します。これが蛇の狡猾さです。サタンは常にこのように話し、行動してきました。蛇は「必ず～訳ではない」のように言い、こうなるとも、ああなるとも断言しません。しかし、この話を聞いて、この無知な女の心は動かされました。言ったことが望みどおりの効果をもたらしたので、蛇は喜びました。これが蛇の狡猾な意図でした。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 4」より

4. 初めて社会科学の考えを持つようになってから、人の精神は科学と知識に占領されてしまった。それからすぐ、科学と知識は人類を支配する道具となり、もはや人が神を礼拝する十分な余地はなくなり、神を礼拝する好ましい条件もなくなった。人の心の中で占める神の位置はどこまでも低められていった。人の心の中に神の居場所が無い世界とは、暗く、何の希望も無く、空虚である。そこで、人の心と精神を満たすために、多くの社会学者、歴史家、政治家が現れて、社会科学の理論、人類進化の理論等、神が人を創造したという真理に反する理論を述べた。こうして、神が万物を造ったという真理を信じる人はますます少なくなり、進化論を信じる人の数は増加の一途をたどっている。神の働きの記録と旧約の時代の神の言葉を、神話や伝説として取り扱う人々はますます多くなっている。人々の心は、神の威厳と偉大さに対して、また神が存在し、万物を支配しているという信条に対して無関心になっている。人類の生存、そして国家と民族の運命はもはや彼らにとって重要ではない。人は飲食と快楽の追求にしか関心の無い虚しい世界に生きている。…神が今日どこで働きを行っているのか、あるいは、神が人の終着点をいかに支配し、定めているのか、それを自らすすんで探し求める者はほとんどいない。こうして、人間の文明は、人の知らないうちに、ますます人の望みどおりには行かなくなり、多くの人々がこんな世界に生きている自分達は、亡くなった人々に

比べて不幸せだと感じてさえいる。過去に高度の文明を築いた国々の人たちでさえそのような不満をあらわにしている。何故なら、神の導きなしには、支配者たちや社会学者たちが人類の文明を維持するためにどんなに頭を悩ませて何の役にも立たないからである。誰も人の心の中の空洞を埋めることはできない。誰も人のいのちとなることはできず、どんな社会学的理論も、心をむしばむ虚しさから人を解放することはできないからである。科学、知識、自由、民主主義、余暇、快適な暮らしは、つかの間の慰めに過ぎない。これらのものがあっても、人は必然的に罪を犯し、社会の不正を嘆く。これらのものは、人の探求への欲求や願望を抑えることはできない。人は神によって造られたからであり、人の無意味な犠牲や探索はさらなる苦悩につながるだけである。人は常に恐怖に怯えて存在し、人類の将来にどのように向き合うべきか、目の前にある進路にどのように対峙すべきか分らない。人は科学や知識に脅かされるほどになり、自分の中にある空虚感をそれらのもの以上に恐れるようになる。この世であなたが自由な国に住もうと、人権のない国に住もうと、人類の運命から逃れることは決してできない。あなたが支配者であろうと、支配される者であろうと、人類の運命、奥義、そして終着点を探求しようとする願望から逃れることは到底できない。ましてや、途方にくれるほどの空虚感から逃れることはできない。全人類に共通するこの現象を、社会学者は社会現象と呼んでいる。しかし、このような問題を解決できる偉大な者が現れることはない。

『言葉は肉において現れる』の「神は全人類の運命を支配する」より

5. 科学が人にするのは、対象物を物理的世界において見ることができるようになることだけで、単に人間の好奇心を満たすに過ぎません。それは人間に神が万物を支配している法則を見せてはくれません。人間は科学に解答を見出しているようですが、その解答は不可解で、一時的な満足感、人間の心を物理的世界に閉じ込めることだけに役立つ満足感をもたらすだけです。人間は科学に解答を見出したと感じているので、どのような問題が起きようとも、科学的意見に基づいてそれを証明したり受け入れようとします。人間の心は科学に取りつかれたようになり、科学に魅惑されるあまり、もはや神を知り、神を拝み、万物は神から来て、解答を得るには人は神に向かうべきであると信じる心をもたなくなります。そうではありませんか。人が科学を信じれば信じるほど、人は愚かになり、全てに科学的な解決策があり、研究によって何もかも解決できると信じるのです。人は神を求めず、神の存在を信じません。長年神に従って来た人でさえ、気まぐれに細菌の研究を始めたり、問題の答えを求めて情報を調べたりします。このような人は、問題を真理の視点から検討せず、ほとんどの場合、科学的な見解と知識か問題

解決のための科学的解答に頼りますが、神に頼らず、神を求めません。このような人の心に神はいますか。（いません。）科学と同じ方法で神について研究したい人さえいます。例えば、大洪水の後に箱舟がたどり着いた場所に行った宗教専門家が多くいます。彼らは箱舟を見ましたが、箱舟の外観に神の存在を見ないのです。彼らはただ物語と歴史を信じ、それが彼らの物理的世界に関する科学的研究の結果です。物理的なものを研究すれば、それが微生物学であれ、天文学であれ、地理学であれ、神が存在する、あるいは神は万物を支配するということを示す結果を見つけることは決してありません。では、科学は人に何ををするのですか。それは人間を神から遠ざけるのではありませんか。科学は人が神について研究するようにしていませんか。科学は神の存在について人をますます疑い深くしているのではないのですか。（そうです。）では、サタンは人間を墮落させるためにどのように科学を用いたいのですか。サタンは科学的結論を用いて人を騙し麻痺させ、曖昧な解答を用いて人の心にしがみつき、人が神の存在を追及したり信じたりしないようにしたいのではありませんか。（その通りです。）ですから、これがサタンが人を墮落させる方法の一つであるとわたしたちは言うのです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 5」より

6. 人のいわゆる知識に、サタンはその人生哲学と思想をかなり浸み込ませています。またサタンはそれをしつつ、人間にサタンの思想、哲学、視点を取り入れさせて、人間が神の存在を否定するように、神の万物の支配と人間の運命の支配を否定するようにしむけようとします。だから、人間の勉学が進み、より多くの知識を把握するにつれ、神の存在が曖昧になるのを感じ、神は存在しないとまで感じることもあります。サタンが人間の頭脳に視点、観念、思想を追加するにつれ、これらの思想を人間の頭脳に入れ、人間はこれにより墮落させられるのではありませんか。（そうです。）そのとき人間の生活の基盤は何ですか。人間はその知識に本当に依存していますか。いいえ。人間はその知識に隠されたサタンの思想、視点、哲学を自らの生活の基盤としています。ここがサタンによる人間の墮落の核心が起こるところであり、これがサタンの目的で、人間を墮落させる方法なのです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 5」より

7. サタンは知識を餌として用います。注意して聴くように。知識は餌の一種に過ぎません。人間は「学習に励み、日々向上」し、知識を武器のように身に付け、知識を科学の扉を開くのに用いるよう誘惑されます。つまり、身に付ける知識が多ければ多いほど、より多くの物事を理解するようになるのです。サタンは、人間にこのようなことを

言います。また、サタンは人間に、知識を身に付けるとともに、高尚な理想を育み、大志と理想を持つよう命じます。人間に知られることなく、サタンはこのようなメッセージを数多く送り、無意識のうちにそれが正しい、あるいは有益であると人間に感じさせます。人間は、知らぬ間にそうした道を歩み、知らぬ間に自分自身の理想と大志に導かれて進んでゆきます。人間は、サタンに与えられた知識、偉人や有名人の考えから徐々に気付かぬうちに学びます。また人間は、英雄とみなされる人々の行動から学び続けます。こうした英雄の行動によって、サタンは人間に何を奨励していますか。サタンは人間に何を吹き込もうと望んでいますか。人間は愛国心に溢れ、自国に忠誠であり、勇敢でなければならない。歴史や英雄の伝記から人間は何を学びますか。それは、人に対して忠義心を持つこと、あるいは友達のために尽くすことです。こうしたサタンの知識の中で、人間は無意識のうちに多くの良からぬ物事を学びます。サタンが人間のために用意した種は、知らぬ間に未熟な人間の心に植え付けられ、その種は、人間に偉大な人物になる必要がある、有名になる必要がある、英雄になる必要がある、愛国心を持つ必要がある、家族を愛する人間になる必要がある、友人のためならば何でもする、忠義感を持つ人間になる必要があると感じさせます。サタンに魅惑された人間は、サタンが人間に用意した道を知らず知らず進んでゆきます。その道を歩んでゆくうちに、人間はサタンによる生活の規則を受け入れることを強要されます。人間は、自分で全く気付かぬうちに独自の生活規則を作り出しますが、それはサタンが人間に強制的に吹き込んだ生活規則に過ぎません。この学習過程において、サタンは、物語や伝記など、サタンの餌を人間に少しずつ食べさせることのできる全ての手段を用いて、サタンの物事を人間に吹き込むと同時に、人間に独自の目標を目指し、独自の人生の目標や生活規則、人生の進路を決めさせます。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

8. 人間が知識を習得する過程において、サタンは、それが物語の説明であったり、ただ一つの知識を与えることであったり、人間に自分の欲を満たし理想を実現させるようなことであったりと、あらゆる手段を用います。サタンはあなたをどの道に導きたいと思っていますか。人間は知識を習得することは自然であり、何も悪いことが無いと考えています。おだやかな言い方をすれば、高尚な理想を育むことや、大志を抱くことは、向上心があるということであり、それは人生において正しい道のはずである。人間が自らの理想を実現したり、人生において出世できたりするとしたら、そのように生きる方が素晴らしいのではないか。そのようにして自分の祖先に栄誉をもたらすのみならず



、おそらく歴史に自分の名を残すことは、良いことではないか。こうしたことは、世俗的な人々から見れば、良いことであり、適切で前向きなことです。しかし、サタンは邪悪な動機をもって、人間をそのような道へと導き、それで良しとするかという、無論そのようなことはありません。実際には、人間の理想が如何に高尚であったとしても、また人間の願望が如何に現実的であり、適切であったとしても、人間が成し遂げたい事、求める事は、二つの言葉と不可分な関連性がある。その二つの言葉は、人間それぞれの生涯にとって極めて重要であり、サタンが人間に吹き込みたいことです。その二つの言葉とは、何でしょうか。「名声」と「利得」です。サタンは極めて温和な方法、人間の観念に極めてうまく適合する方法を用います。その方法には、全く過激さが無いのです。人間は、無意識のうちにサタンの生き方や生活の規則を受け入れるようになり、人生の目標や方向性を決定し、またそうすることにより無意識のうちに人生の理想を持つようになります。そうした人生の理想は、どれほど高尚な響きがあったとしても、名声や利得と複雑に関連している建前に過ぎません。偉人や有名人のみならず、全ての人々が人生において従う全ての事柄は、「名声」と「利得」のふたつだけに関連するものです。人間は、名声と利得を手に入れば、それを利用して高い地位や莫大な富を堪能し、人生を楽しむことができると考えます。名声と利得を手に入れば、それを悦楽の追求と不徳な肉の快樂に利用できると考える。人間は、自分が求める名声と利得のために、無意識ではあるが率先して、自分の心身や所有する全ての物事、将来、運命をすべてサタンに引き渡します。人間はこの引き渡しにあたり、実に一瞬たりとも躊躇することが無く、それを奪回する必要性を省みることも一切ありません。このようにして人間がいったんサタンを頼りにし、サタンに忠義を尽くしたなら、人間は自分自身を支配していることができるでしょうか。無論できません。こうした人間は完全にサタンに支配されます。彼らはすっかり泥沼に沈み込んだのであり、そこから抜け出すことは一切不可能です。ひとたび名声と利得の泥沼に陥いると、人間は明るいもの、義なるもの、美しく良いものを求めなくなります。これは、人間に対する名声と利得の魅力が強すぎるため、それが人間にとって人生を通して終わり無く永遠に追求するべきものとなってしまいうからです。これが真実ではないですか。中には「知識の習得とは読書することや知らない事を幾つか習得することで、時勢や世の中に遅れを取らないようにするためである。知識を習得するのは、ただ生活の糧を得るため、自らの将来のため、必需品のためである」と言う人もいます。必需品や食糧の問題を解決するためだけに、十年におよぶ辛い学習を行う人間がいるのでしょうか。そんな人は一切いません。それでは、辛い学習を長年にわたり続けるのは何故ですか。それは、名声と利得のためです。名声と利得がは

るか前方に待っており人を呼んでいるため、自らの勤勉と辛苦と努力をもってその道を進むほか無く、それによって名声と利得を得られるものと信じているのです。自らの将来の道のため、将来の快樂と生活向上のために辛苦を味わう必要があるのです。そんな知識とは、いったい何なのか、わたしに教えてくださいませんか。知識とは、人々が知識を習得する過程で、サタンが人々に教えた生存の法則ではないでしょうか。サタンにより人間に吹き込まれた、人生の高尚な理想ではないでしょうか。たとえば、偉人の考えや、有名人の操守さ、英雄の気概、武俠小説の俠客や劍術家の俠骨や親切心を考えてみましょう。（その通りです。）これらは世代を超えて影響を及ぼし、各世代の人々はそうした思想を受け入れて、そのために生存し、永遠にそれを求めるよう仕向けられます。これがサタンが知識を用いて人間を墮落させる方法であり、手段です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

9. サタンは名声と利得を用いて人間の思想を支配し、人間が名声と利得しか考えられないようにします。人間は名声と利得のために努力し、名声と利得のために苦勞し、名声と利得のために恥辱に耐え、持てる全ての物事を犠牲にし、名声と利得のためにすべての判断と決断を下します。このようにして、サタンは目に見えない足かせを人間にかけます。足かせは人間の身体に付けられ、人間はそれを外す力も勇氣もありません。したがって、無意識のうちに、人間は足かせをかけられ、極度の困難の中を歩んでゆきます。この名声と利得のために、人間は神を避け、神を裏切り、ますます邪惡になります。人間はこのようにして世代を追うごとにサタンの名声と利得により破壊されてゆきます。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

10. 数千年に及ぶ古代文化や歴史に関する知識により、人間の思考や觀念、精神的觀念は極めて固く閉ざされ、浸透不可能かつ分解不可能なものとなっている<sup>[1]</sup>。人間は、あたかも神により地下牢に追放されて二度と光を見ることが無いかのよう、十八層地獄で生活している。封建的思想が人間を迫害し続け、人間は辛うじて呼吸するほどまで息が詰まっている。人間には反抗する力が全く無く、ひたすら黙して耐え続けている。義と公平のために敢えて戦い、立ち上がる者は今まで一人もいなかった。人間は毎日領主の虐待と暴挙の下で動物同然に生活して年を重ねてゆくだけである。人間は神を求めて地の幸福を享受しようと考えたことが無い。それは、ひからびて色がくすんだ枯れ葉のように人間が打ち倒されたかのようである。人間は遙か昔に記憶を失い、人間の世界という陰府で絶望的に暮らし、自分が陰府もろとも滅びるよう、最後の日の到来を待

っており、人間が待っている最後の日は、あたかも安らかな平和が人間に授けられる日であるかのようである。封建的倫理は、人間の生活を「ハデス」へと陥れており、人間が反抗する能力は一層少なくなっている。様々な虐待により、人間は徐々にハデスの深い所、神から一層遠い所へと強制的に陥れられた。現在、神は人間にとって全く知らない存在であり、人間は依然として神と会おうと神を急いで避けようとする。人間は神を心に留めず、あたかもそれまで人間が神を知る事も神に会うことも無かったかのように、神を孤立させる。神は人生の長い旅路を通して待ち続けているが、神の抑え難い怒りを人間に向けることは、決して無かった。神は人間が悔い改めて再出発するのを、ひたすら黙して待ち続けている。神は、遠い昔に人間の世界へ来て人間と同じ苦難を受けた。神は長年にわたり人間と共に生活したが、彼の存在を見出した者はいなかった。神は人間の世界の惨事に黙して耐えつつ、自身が負う業を行っている。父なる神の心と、人間の必要性のため、神は人間が嘗て経験したことの無い苦痛を受け、それに耐えている。神は、父なる神の心と、人間の必要性のために、人間の前で黙して人間のために尽くし、自らを慎んだ。古代文化の知識は、神の前から何も言わずに人間をさらって魔王とその末裔に引き渡した。四書五経は、人間の思想と観念を新時代の反逆へと導き、人間が四書五経を記した者達を一層崇拜するようにして、人間が抱く神の観念を助長した。魔王は冷酷に、そして人間が気付かぬうちに、人間の心から神を排除しつつ、面白がって人間の心を奪った。その時以来、人間は魔王の顔をした醜く邪悪な霊に取り付かれている。神への憎しみが人間の胸を満たし、魔王の凶悪さが日々人間の中に広がってゆき、ついに人間は完全に滅ぼされた。人間は自由を失い、魔王の呪縛から逃れる事が出来なくなった。ゆえに、人間は1か所に留まり、囚われることを余儀なくされ、魔王に降伏し、服従した。魔王は人間の若い心に無神論の腫れ物の種を植え付け、「科学技術を学び、四つの近代化を実現せよ。この世に神はいない。」など、人間に偽りを諭した。それだけでなく、魔王は「私達の勤勉な労働により素晴らしい国を建てよう。」と繰り返し宣言し、全ての者に対して、幼少時代から自国のために仕える訓練をするよう要求した。人間は無意識のうちに魔王の前へと導かれ、魔王は(あらゆる人間を掌握している神を名乗り)躊躇無く人間を我がものとした。魔王は、一度も恥じらうことは無く、恥辱を覚えることは一切無かった。さらに、魔王は厚かましくも神の選民を自分の家の中に捕らえ、ねずみのように机上に飛び乗り、人間に自分を神として崇拜させた。魔王は、何という無法者であろうか。魔王は「この世に神はいない。風は自然の法則が原因である。雨は凝結して水滴となって地表に落ちる水分である。地震は地質学的変化に起因する地表の振動である。干ばつは太陽表面の原子核工学的障害により起こる大気の乾燥

である。これらは自然現象である。そのうちどれが神の業だというのか。」などという衝撃的な中傷を唱える。その上魔王は、「人間は古代の類人猿から進化したもので、現在の世界は、約10億年前の原始社会から進化したものである。ある国家の栄枯盛衰は、その国家の国民の手により決まる。」などという恥知らずな事を呼びかける<sup>[a]</sup>。後ろの方では、人間に魔王を上下逆にして壁に掛けさせ、机上に鎮座させて崇拜させる。魔王は「神はいない。」と唱えるが、魔王は自らを神とみなし、真の神を執拗に地の果ての外へと追いやろうとする。魔王は神の地位に立ち、魔王として君臨する。何と途方も無く馬鹿げたことであろうか。魔王は、有害な憎悪により人間に滅びをもたらす。神は魔王の宿敵であり、神は魔王と折り合いを付けることが不可能であると思われる。魔王は神の駆逐を謀り、罰を受けることも捕らわれることも無いまま<sup>[2]</sup>の、まさしく魔王である。どうして私たちが魔王の存在を容赦できようか。魔王は、神の業を阻止し、打ち砕いて台無しにする<sup>[3]</sup>まで休むことが無く、それはあたかも最後に魚が死ぬか網が破けるかするまで、魔王は神に反抗し続けたいかのようである。魔王は、故意に神に反抗し、常に神に近付く。魔王の忌まわしい顔は、完全に仮面を剥がされて久しく、打ちのめされてあざが出来<sup>[4]</sup>、窮状にあるが、それでも神への憎悪が衰えることは無く、それはあたかも魔王が神を一口に呑み込んで自分の心の憎しみを癒やすことを望んでいるかのようである。こうした憎むべき神の敵を、どうして人間は容赦出来ようか。人間の生涯の望みを叶えるには、魔王の根絶と完全な駆除によるほか無いであろう。どうして魔王を意のままにさせるのを許しておけるであろうか。魔王は、人間が天日を知らず、行き詰まって愚鈍になるまで人間を腐敗させた。人間は正常な人間の理知を失った。私達の全てを捧げて魔王を打ち焼き払い、未だに残る危険性に対する恐れを解消し、神の業が早急に嘗て無い輝きに達することが出来るようにしようではないか。この悪党どもは人間の中に来て、徹底した騒動と混乱を引き起こした。そうした悪党どもは全ての人間を断崖の縁へと追い詰め、粉碎してその屍をむさぼることを密かに企んでいる。そうした悪党どもは、愚かしくも大博打を打って<sup>[5]</sup>神の計画を阻止し、神と争うことを望んでいる。それは決して容易ではない。最も憎むべき罪に咎められるべき魔王のために、遂に十字架が用意された。その十字架は、もはや神が架けられるものではなく、神は既にそれを悪魔が架けられるものとして、譲り渡している。はるか以前に、神は勝利し、人間の罪に対する悲しみを感じなくなっている。神は、全人類に対して救いを授ける。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(7)」より

11. 上から下まで、そして最初から最後まで、魔王は神の業を阻害し、神に協調しない行動を取り続けてきた。古代文化遺産や貴重な古代文化の知恵、道教や儒教の教え、儒教の五経と封建時代の礼に関する話が、人間を陰府に陥れた。現代の先進科学技術も、発展した農工業、そして商業も、全く見当たらない。むしろ魔王は、故意に神の業を阻害し、それに反対し、それを破壊するために、古代の「類人猿」により広められた、封建時代の礼をひたすら強調する。魔王は現在に至るまで人間を苦しめてきたが、それだけでなく人間を完全に食べ物にする<sup>16)</sup>ことを望んでいる。そうした封建時代の倫理規定に関する教え、古代文化の知恵の継承が、人間を長年にわたって蝕み、大小の悪魔へと変貌させて来た。神を快く受け容れ、神の降臨を歓迎するであろう者は、ごく僅かである。人間の表情は殺気に満ち、至る所で死の気配が感じられる。そうした者は、神をこの地から排除することを求め、神を抹消するために、刀剣を持って陣を組んでいる。悪魔の地全体において、偶像が広まり、人間は、神はいないと教えられ続けている。この地の上には、吐き気を催すような紙と香の焼ける臭いが強く漂っており、窒息するほどである。それはへびがとぐろを巻く時に放つ汚泥の臭いのようであり、人間は嘔吐ずにはいられないほどである。それに加えて、悪魔達の読経が、かすかに聞き取れる。その声色は陰府の遠い所から聞こえるようであり、人間は背筋が凍るのを感じずにはいられない。虹色の偶像がこの地全体に散在し、それがこの地を幻惑の世界へと変え、魔王は自分の邪惡な謀りが成就したかのように、常に薄笑いを浮かべている。その一方、人間はそれに全く気付かず、自分の理性が無くなり、自分が打ち倒されるほどまでに悪魔が自分を腐敗させたことに気付かない。悪魔は神の全てを一撃打破し、再び神を侮辱し、暗殺することを望み、神の業を打ち壊し、阻害しようとする。どうして悪魔は神が同等の地位にあることを甘受出来ようか。どうして悪魔は、人間の中で行う業を神が「邪魔する」のを許すことが出来ようか。どうして悪魔は神が自分の醜惡な顔を暴くのを許すことが出来ようか。どうして悪魔は神が自分の業を阻止するのを許すことが出来ようか。そう酷く怒っている悪魔が、どうして神が地における権力の宮を治めるのを甘受するであろうか。どうして悪魔が敗北を認めることを望むであろうか。悪魔の醜惡な表情は悪魔の在り方を示しており、それゆえ人間は自分が笑うべきか泣くべきか分からなくなり、悪魔について語ることは極めて困難である。それが悪魔の本質ではなかろうか。悪魔は、醜惡な霊で、自分が驚異的に美しいと信じている。全くけしからぬ共犯者集団である<sup>17)</sup>。悪魔は人間の中に来て享樂にふけり、混乱を助長する。悪魔の阻害行為により、世界的な日和見主義的風潮が興り、人間の心を狼狽させる。また、悪魔が人間を歪めたため、人間は見るに堪えない醜惡な獣のようであり、元来の聖い人間の姿は皆無

である。悪魔は、地における暴君としての権力を掌握することさえ望む。悪魔は神の業を妨害しており、それにより神の業は辛うじて前進し、銅と鋼の壁のように、人間を封じ込めることが出来る。極めて多くの罪を犯し、極めて多くの問題を引き起こしてきた悪魔には、どうして罰を待つ以外に何か期待出来ることが有るだろうか。悪魔と悪霊は、地上を暴れ回り、神の心と丹精を込めた努力を封じ込めて、それらを浸透不可能なものとしている。何という大罪であろうか。どうして神が不安にならずにいられようか。どうして神が怒らずにいられようか。悪魔は、神の業に対して重篤な妨害や反対を引き起こしている。まったく反逆的過ぎる。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(7)」より

12. 人間が行う迷信的な行為は、神が最も忌み嫌うものであるが、そうした行為が神により定められたものであると考え、それを捨て去ることが出来ない人が多く、そうした行為は現在も完全には捨て去られていない。若者が手配する婚礼や嫁入り道具、祝儀、披露宴や、それと同様に祝われる慶事、継承されてきた古代の風習、死者のために行われる無意味な迷信的行為や葬式などは、それにも増して神が忌み嫌うものである。日曜日（ユダヤ人が励行する安息日）でさえ、神にとって忌み嫌うべきものである。それにも増して、神は人間同士の社交関係や世俗的付き合いを嫌悪し拒絶する。皆が知っている春節やクリスマスは、神が定めたものではなく、ましてこうした祝祭日の玩具や飾り付け（二行連、新年の菓子類、爆竹、灯籠、クリスマス・プレゼント、パーティー、聖餐式）は神が定めたものなどでは全くない。これらは、人間の心にある偶像ではなかろうか。安息日にパンを分け合うことやぶどう酒、亜麻布の衣服などは、それにも増して偶像である。龍擡頭、龍舟節、中秋節、臘八節、新年など中国で一般的な伝統的祭日、そして復活祭、洗礼日、クリスマスなどの宗教的祭日は、どれも正当化しようのない祭日であり、昔に制定されてから多くの人々により現在まで受け継がれてきているが、神が造った人類と全く相容れないものである。これらの祭日は、人間の豊かな想像力と巧妙な観念により、現在まで受け継がれることが可能となったものである。そうした祭日は全く欠点が無いように思われるが、実際にはサタンの人間に向けた謀である。その地にサタンが多ければ多いほど、またその地が廃れて時代遅れであればあるほど、そこには封建的風習が一層深く根ざしている。そうした物事は人間を堅く拘束し、そのために全く身動きをとる余裕がない。宗教界の祭祀の多くが、高い独創性を示し、神の働きへの架け橋を築いているように思われるが、実はそうした祭祀はサタンが人間を拘束し、神を知ることを阻む目に見えない紐であり、それらは全てサタンの狡猾な策謀であ

る。事実、神の働きのある段階が完了すると、神は既にその時代の手段や方法を跡形もなく破壊し終えている。しかし「敬虔な信者」は、そうした有形の物体を崇拜し続ける。その一方で、彼らは神のもつものを心の奥へしまい込み、それ以上学ばず、神への愛で満ち溢れているかのような素振りであるが、実際は神を遙か以前に追い出し、祭壇にサタンを据えている。人々はイエスの肖像、十字架、マリア、イエスの洗礼、最後の晩餐などを、天の主として尊びつつ、「父なる神よ」と繰り返し呼び続ける。これは全て冗談ではなかろうか。現在まで人類が受け継いで来た同様の文言や実践は、神にとって憎むべきものである。そうした物事は神の前途を阻み、さらに人間がいのちに入るのに大きな障害となる。サタンが人間を墮落させた範囲を除いても、人々の内面はウィットネス・リー（李常受）の掟やローレンスの経験、ウォッチマン・ニー（倪柝聲）の調査、そしてパウロの働きのような物事で満たされている。神が人間に対して働きを行うすべが全くない。なぜなら人々の内面には個人主義や掟、規則、規制、制度などが多過ぎるからである。人々の封建的迷信の傾向に加え、そうした物事は人間を捉えてむさぼって来た。それはあたかも人々の考えが想像上の生き物が雲に乗って旅をする寓話を極彩色で物語る興味深い映画のようであり、極めて独創的であるために人々は驚き、茫然として言葉を失う。実のところ、神が来て今日行う働きは、主として人間の迷信的態度を取り扱い、払拭して、その精神的姿勢を完全に变化させることである。神の働きは何世代も受け継がれて今日まで人間により保存されてきたものではなく、霊的な偉人の遺産を継承する必要も、他の時代に神が行った代表的な業を継承することもなく、神自らが開始し、完了させるものである。人間はそうした物事に一切関与する必要がない。現在の神は、それらとは別の方法で語り、働きを行う。それならば、なぜ人間が自ら苦勞する必要があるのであろうか。人間が自分達の「祖先」の遺産を継承し続けながら、この流れの中で今日の道を歩んだ場合、終着点にたどり着くことはないであろう。神は、特にこの人間行動形態を、人間界の年月や日々と憎悪するのと同様に、大いに忌み嫌っている。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(3)」より

13. サタンは民間伝承や歴史書にある物語を数多く作り上げて、人間に伝統文化や迷信の登場人物などを深く印象付けています。例としては、中国の八仙過海、西遊記、玉皇大帝、ナーザの大暴れ、封神演義など。これらの例は、人間の心に深く根ざしていませんか。あなたがたのうちには詳細をすべて把握していない人もいるでしょうが、あらすじは知っており、そうした内容の概要が心や頭に残って忘れることが出来ないのだ

す。これらの例は、サタンがはるか昔に人間向けに作り、サタンの様々な思想や伝説を異なる時期に何度となく流布してきたものです。こうした事柄は人間に直接的な危害を加え、人間の魂を蝕み、人々に次々と呪文をかけます。つまり、こうした伝統文化、伝説、迷信から生まれた事柄を受け入れ、こうした事柄が頭の中で確立された存在となり、心から離れなくなった時点で、あなたは呪文にかけられたようなものであり、そうした文化、思想、伝説に捕らわれ、影響されるようになるのです。こうした事柄は、生活や人生観、物事の判断力に影響を与えます。とりわけ、人生における真の道の追求に影響を与えるので、これはまさしく呪文です。その呪文を捨て去ろうとしても捨てられず、切っても切り捨てられず、打っても打ち倒すことが出来ない。さらに、人間が無意識のうちにこの種の呪文にかかった場合、人間は知らぬうちにサタンを信仰するようになり、心の中にサタンの像を育てます。つまり、サタンを偶像、崇拜対象として、過度の場合は神としてみなします。こうした物事は人間の心に無意識のうちに存在し、人間の発言や行動を支配します。さらに、あなたはこうした物語や伝説を虚偽とみなしますが、そのうちその存在を無意識のうちに認め、そこから実在の人物を作り出し、実在する物事に変えていきます。あなたは、無意識の領域で、これらの思想や物事の存在を受け入れるのです。また、あなたは無意識のうちに悪魔、サタンそして偶像を自宅や心に受け入れるのです。これはまさしく呪文です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

14. サタンが社会動向を利用して人間を堕落させることです。この社会動向には様々なものがあります。「それは衣服のことですか。最新ファッションや化粧品、ヘアスタイルやグルメに関することですか」などと言う人がいます。社会動向とは、そうした物事に関することですか。それらも社会動向の一部ですが、ここでそうした物事については取り上げません。ここでは、社会動向が人間にもたらす考えや、社会動向が世間における人間の行動にどう影響するか、そして社会動向が人間にもたらす人生の目標や人生観についてのみ話し合います。社会動向は、人間の精神状態を支配し、影響を与えることがあるので、極めて重要です。こうした社会動向には、それぞれに人間を継続的に堕落させ、良心、人間性、理知を失わせ、人間の倫理や人格をますます低下させる邪悪な影響があり、それゆえ現在、大部分の人々に誠実さや人間性、良心、さらには理知さえ欠如している状態にまで達しているとさえ言えるほどです。それでは、そのような社会動向とは何なのでしょう。それは裸眼では見るのが不可能です。社会動向が席卷すると、その創出者となるのはごく僅かな人たちです。その人たちは、ある種の行動を



始めたり、ある種の考え方や物の見方を受け入れたりして始めます。しかし大部分の人々は、無意識のうちに、そうした社会動向に継続的に汚染され、捕らわれ、魅惑され、やがてそれを知らず知らずのうちに、無意識のうちに受け入れるようになり、それに呑み込まれて支配されるようになります。こうした社会動向で、心身の健全さが欠如し、真理とは何かを知らず、肯定的なものと否定的なものの区別が出来ない人間は、そうしたサタンに由来する社会動向や人生観、価値観を次々と進んで受け入れてしまいます。この種の人々は、どのような人生を送るべきかに関してサタンが教えることや、サタンにより「授けられた」生活の道を受け入れます。彼らには強さ、能力、またことさらに拒否する意識が欠乏しているのです。…

…サタンはこうした社会的動向を用いて、少しずつ人間を誘惑して悪の巣窟へと誘い、社会的動向に捕らわれた人間は、気付かぬうちに金銭や物欲、邪悪と暴力を擁護するようになります。ひとたびこうした物事が人間の心に入ると、人間はどうなりますか。人間は邪悪なサタンと化すのです。それは、人間の心のどのような心理的傾向に起因しますか。人間は何を擁護しますか。人間は邪悪と暴力を好むようになるのです。人間は美や善を嫌い、またそれ以上に平和を嫌います。人間は通常の人間性による質素な生活を送ろうとせず、高い地位や大きな富を得ることを望み、肉の享楽に耽溺し、自分の肉を際限も制約もなく満足させるために努力を惜しまず、すなわち自分の求めるあらゆる事を行います。それならば、人間がこうした動向に没頭した場合、取得した知識はあなたが自由になるのに役立ちますか。あなたが知る伝統文化や迷信は、この窮地を投げ捨てるのに役立ちますか。人間が把握している伝統的な倫理や儀式は、人間が自制する上で役立ちますか。例として、『三字経』を考えてみましょう。三字経は、人間がこうした社会動向の泥沼<sup>[6]</sup>から抜け出す上で、役立つことがありますか。（ありません。）このように、人間はますます邪悪で、傲慢で、尊大で、自己中心的で悪意に満ちてゆきます。人間同士の愛情も家族同士の愛情も無くなり、親戚や友人同士の理解も無くなり、人間関係は暴力に満ちたものとなっています。誰もが暴力的方法を使用して、他の人間のそばで生活することを望み、自分自身の生活を確保するために、暴力を使います。地位や利益を得るためにも暴力を用い、また暴力や邪悪な方法を用いてしたい放題です。このような人類は恐ろしいものではないですか。（その通りです。）今わたしが述べた事を聞いて、サタンが人を墮落させるこの環境、この世界、このような群衆の中で暮らすのは恐ろしいと思いませんか。（思います。）

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

15. 「地獄の沙汰も金次第」はサタンの哲学であり、人類全体に、あらゆる人間社会に浸透しています。この格言は人間一人ひとりの心に染み込み、今や一人ひとりの心の中に固定しているので、社会動向であると言えます。人はこの格言を受け入れない状態から、それに慣れ親しんでいく状態に移行したので、現実生活を知るようになったとき、格言を暗黙のうちに徐々に認め、その存在を認知し、最終的には一人ひとりが格言に承認印を押したのです。この過程は、サタンが人間を墮落させる過程ではありませんか。おそらく人々はこの格言を同じ程度に理解しておらず、人々の周辺で起きたことや個人的な経験にもとづいて、一人ひとりがこの格言について程度のことなる解釈や認識をしています。そうですね。この格言について誰かがどれほどの経験があるかにかかわらず、これが誰かの心に及ぼすことのある否定的な効果は何ですか。皆さん一人ひとりを含め、この世にいる人々の人間的性質を通して、何かが明らかにされました。これはどのように解釈されますか。それは金銭崇拜です。それを誰かの心から排除するのは困難ですか。極めて困難です。サタンによる人間の墮落は相当に徹底的なようです。サタンがこの社会動向を用いて人を墮落させた後、それは人にどのように表れますか。皆さんは金がなくてはこの世で生き残っていけない、一日でさえも不可能であると感じませんか。人の地位は、体面と同様に、その人がどれだけ金をもっているかにもとづいています。貧しい人々は恥ずかしさのあまり背を丸め、その一方で富裕な人々は高い地位を享受しています。彼らは胸を張って威張り、大きな声で話し、傲慢に暮らします。この格言と社会動向は人に何をもたらしますか。多くの人が金を稼ぐことは、あらゆる犠牲を払う価値があると考えていませんか。人々はもっと金を得るために自分の尊厳や高潔さを犠牲にしていませんか。多くの人が、自らの本分を尽くして神に従う機会を、金のせいで失っていませんか。これは人にとって損失ではありませんか。（損失です。）この方法と格言を用いて人間をここまで墮落させるサタンは邪悪ではありませんか。これは悪意に満ちた策略ではありませんか。この広く流布している格言に反対する状態から最終的にそれを真理として受け入れる状態に移行するにつれて、人の心は完全にサタンの掌中に落ち、そのため気付かないうちにこの格言により生きようになります。この格言は、どの程度あなたに影響を与えましたか。あなたは真の道を知り、真理を知っているかもしれませんが、それを追求するには無力なのです。神の言葉を明確に知っているかも知れませんが、代償を払う覚悟がなく、代償を払うために苦しむ覚悟もありません。その代わり、あなたは自分の将来と運命を犠牲にして、最後の最後まで神に逆らう方がいいのです。神が何を言おうと、神が何をしようと、あなたへの神の愛が深く偉大であることにあなたがどれほど気づいていようと、あなたは頑なにこの格言

のためにひたすら代償を払うのです。つまり、この格言は既にあなたの行動や思想を支配しており、それをあきらめるよりも、むしろそれに自分の運命を支配されることを望んでいるのです。人はこのようなことをし、この格言に支配され、操られます。これは人間を墮落させるサタンによる効果ではありませんか。これはあなたの心に根ざしているサタンの哲学と墮落した性質ではありませんか。もしあなたがそうすると、サタンはその目的を達成したことになりませんか。（なります。）サタンがこのように人間を墮落させてきたことが見えますか。感じるができますか。（いいえ。）あなたはそれを見も感じもしなかったのです。ここにサタンの邪悪が見えますか。サタンはあらゆる時にあらゆる場所で人間を墮落させます。サタンは人間がこの墮落に対して防御することを不可能にし、それに対して人間を無力にさせます。うっかりしていたり、自分に何が起きているかを認識していない状況において、サタンはその思想、観点、サタンから来る邪悪な物事をあなたに受け入れさせます。人はそれらをすっかり受け入れ、それに苦情を言うこともありません。それらを宝のように大切に抱えて、それらが自分を操り、もてあそぶままにします。このようにしてサタンによる人間の墮落はますます深まるのです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 5」より

16. ひどく汚れた地に生まれ合わせて、人は社会に駄目にされ、封建的倫理の影響を受け、「高等教育機関」で教えを受けてきた。時代遅れの考え方、墮落した倫理観、さもない人生観、卑劣な哲学、全く価値のない存在、下劣な生活様式と習慣、これらはすべて人の心をひどく侵害し、その良心をひどくむしばみ、攻撃してきた。その結果、人はますます神から離れ、ますます反対するようになった。人の性質は日ごとに悪質になり、神のために進んで何かを投げ出そうという者は一人としておらず、進んで神に従う者は一人としておらず、さらには神の出現を進んで探し求める者も一人としていない。それどころか、サタンの支配下で快楽を追求しているだけで、泥の地で肉体の墮落にふけっている。真理を耳にしたときでさえ、暗闇に生きる人々はそれを実行に移そうとは考えず、たとえ神の出現を見たとしても、神を探し求める気持ちにはならない。こんなにも墮落した人類にどうして救いの可能性があり得ようか。どうしてこんなにも退廃した人類が光の中に生きることができようか。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

17. 人間を墮落させるためにサタンが用いる手段は、おもに六つある。

第一の手段は支配と威圧です。つまり、サタンはあなたの心を支配するために、あらゆることを行ないます。「威圧」とは何ですか。脅迫と強制的な戦術を用いてあなたに言うことを聞かせ、従わなかった場合の結末を考慮させることを意味します。あなたは恐れて、逆らうような真似はせず、サタンに服従します。

第二の手段は騙しとごまかしです。「騙しとごまかし」には何が伴いますか。サタンはでっち上げた伝説や嘘で人を騙して人にサタンを信じさせます。サタンは人間が神に造られたとは決して言いませんが、人間は神に造られたのではないとも直接的に言いません。サタンは「神」という言葉を全く用いず、あなたを惑わすために言い換えの言葉を用いるので、あなたは神の存在については基本的に何も知りません。このごまかしには当然、これ以外にも様々な側面があります。

第三の手段は強制的な教化です。何についての強制的教化ですか。強制的な教化は、人間自身の選択により行なわれますか。人間の同意のもとで行われますか。（いいえ。）人間が同意しなくても無関係です。あなたの無意識のうちに行われ、サタンの思想や生活法則、本質があなたに吹き込まれます。

第四の手段は脅迫と誘惑です。つまり、サタンは、あなたにサタンを受け入れさせ、あなたをサタンに付き従わせ、サタンのために行動させるために、様々な手段を用います。サタンは、目標達成のために必要とあらば、手段を選びません。サタンはあなたに僅かに恩恵を施すことがあるが、あなたを誘惑して罪を犯させます。あなたがサタンに従わなかった場合、サタンはあなたを苦しめ、あなたに罰を与え、あなたを攻撃して罫にかけるために様々な手段を用います。

第五の手段は惑わしと麻痺です。「惑わしと麻痺」とは、サタンが、人間を騙すことが本当の目的なのに、あたかもサタンが人間の肉や生活、将来を考慮しているように考えられるよう、人間の考え方と合致するような甘い言葉や思想をでっち上げることです。サタンはそうして人間を麻痺させるので、人間は善悪の判断がつかなくなり、人間は知らないうちに騙され、サタンに支配されてしまうのです。

第六の手段は、心身の破壊です。サタンは人間の何を破壊しますか。（精神など人間のすべてです。）サタンは人間の精神を破壊し、あなたを無力にして反抗させないようにします。つまり、あなたの心は、自分の意思に反してとてもゆっくりサタンへ向いてゆきます。サタンは、これらの考えや文化などを用いて、これらの事柄を日常的に人間に吹き込み、人間に影響を及ぼし、教化し、極めてゆっくりと人間の意志を滅ぼし、も

はや善人になりたくないと考えさせ、人間が義と呼ぶものを堅持する意志をくじきます。知らないうちに、人間は流れに逆らって上流へと進む意志の力を失い、下流に流されていきます。「破壊」とは、サタンが人間を苦しめるあまり、人間でも幽霊でも無いほどの状態にした上で、その機会に人間を食い尽くすことです。

サタンが人間を墮落させるこれらの手段は、どれもが人間を無力にして反抗できない状態に陥れることが可能です。どれもが人間にとって致命的なものです。つまり、サタンの行動とサタンが用いる手段は、すべてあなたを墮落させ、人間をサタンの支配下に陥れ、あなたを罪惡の泥沼に陥れることができます。以上が、サタンが人間を墮落させるために用いる手段です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

18. 神は人間に働きかけ、人間は神の態度と心の両方において大切にされています。一方、サタンは人間を大切にしますか。サタンは人間を大切にしません。サタンが考えるのは人間を傷つけることだけです。そうではありませんか。サタンが人間を傷つけることを考えているとき、サタンは喫緊の精神状態でそうしますか。（はい。）人間に対するサタンの業に関しては、サタンの悪意のある邪惡な本性を十分に言い表し、あなたがたがサタンの憎らしさを知ることができる二つの語句があります。サタンが人間に接近する際に、サタンは常に強制的に一人ひとりの人間を占有し、一人ひとりの人間に取り憑き、害を及ぼすところまで到達し、サタンの目的を果たし、無謀な野望を実現させようとしています。「強制的に占有する」とはどういう意味ですか。それはあなたの同意の上で、それとも同意なしで起こりますか。あなたが知っていて、それとも知らないうち起こりますか。それはまったく知らないうちに起こります。あなたが意識していない状況において、おそらくサタンがまだ何も言っていないとき、おそらくまだ何も行っておらず、何の前提も脈絡もないとき、サタンはあなたを取り囲んでそこにいるのです。サタンは利用する機会を探しており、次にあなたを強制的に占有し、あなたに取り憑き、あなたを完全に支配し危害を加えるという目的を果たします。これが、サタンの人類を手に入れるための神との戦いにおける典型的な意図と振る舞いです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 4」より

19. この地は数千年にわたり不浄の地となっており、耐えがたいほど汚れ、悲劇に溢れる。至る所に幽霊がはびこり、欺し偽り、根拠の無い告発を行い<sup>[8]</sup>、冷酷かつ残忍であり、この幽霊の街を踏みつけて屍の山を残した。腐った屍の悪臭が地を覆って充満

しており、その地は堅く警護されている<sup>9)</sup>。誰が空の彼方の世界を見ることが出来るか。その悪魔は人の身体全体をがんじがらめにして両眼を見えなくし、両唇を堅く封じる。魔王は数千年にわたって現在まで猛威を振るい、幽霊の街を堅固に警備しており、それはあたかも難攻不落の悪魔の城のようである。その一方、警護に当たる番犬の群れが睨んでおり、番犬は神による不意打ちで完全に滅ぼされるのを強く恐れ、平和と幸福の余地は無い。こうした幽霊の街に住む人間が神を見たなどということが、どうして有り得るだろうか。そうした者は神の優しさや愛しさを享受したことが、嘗てあったであろうか。人間の世界の物事について、そうした者はどのように認識しているであろうか。そうした者のうち、誰が神の切なる望みを理解できるであろうか。肉にある神が完全に隠れたままであっても、不思議では無い。悪魔が残忍非道をはたらくような、こうした暗黒社会において、瞬く間に人々を殺す魔王が、愛しく懇切で聖い神の存在を、どうして容認出来るか。どうして魔王は神の到来に喝采を送ることができようか。まったく卑屈な者どもである。そうした者は恩を仇で返し、神を侮って久しく、神を虐待し、残忍を極め、神を少しも敬うことなく、強奪や略奪を行い、良心を完全に失い、親切さのかけらもなく、純真な者を無分別な物事へと誘惑する。遠い昔の祖先はどうだろうか。愛された指導者はどうだろうか。そうした者は皆、神に反抗している。そうした者の干渉により、地にある者すべてが闇と混沌に陥れられたのだ。宗教の自由というが、どうだろうか。市民の正当な権利と利益というが、どうだろうか。そうした物事はすべて、罪を隠蔽する手口である。誰が神の業を受け容れたというのか。誰が神の働きのために命を捧げ、血を流したというのか。親から子へ、何世代にもわたって、奴隷とされた人間は不作法に神を奴隷としてきた。そうした物事がどうして怒りを買わずに居られるであろうか。数千年におよぶ憎しみが心に凝縮され、数千年におよぶ罪深さが心に刻み込まれている。こうした状態で、どうして憎悪感を覚えずに居られようか。神の仇を討ち、神の敵を掃討し、敵が二度と蔓延ることを許してはならない。また敵が意のままに問題を起こすことを許してはならない。今がその時である：人は随分前からこのために全力を振り絞り、努力の限りを尽くし、費やせるだけ費やしてきた。それは、この悪魔の忌まわしい顔をはぎ取り、盲目にされた人々、あらゆる苦しみと苦難に耐えてきた人々が痛みから立ち上がり、この邪悪な古い悪魔に背を向けることができるようにするためである。なぜ、神の業に対してそのような難攻不落の障害を建てるのか。なぜ神の民を欺く様々な謀りを用いるのか。真の自由や正当な権利と権益はどこにあるのか。公平さは、どこにあるのか。安らぎは、どこにあるのか。温もりは、どこにあるのか。偽りに満ちた謀りを用いて神の民を欺すのは何故か。神が来るのを武力で抑制するのは何故

か。神が造った地の上を、神に自由に移動させないのは、何故か。神が枕するところが無くなるほどに神を追うのは、何故か。人間の温もりは、どこにあるのか。人間同士の歓迎は、どこにあるのか。それほどまで絶望的な思慕を神に引き起こすのは、何故か。神に何度も叫ばせるのは、何故か。神の愛する子を神に強制的に憂わせるのは、何故か。この暗黒社会とその哀れな番犬が、神の造った世界を神が自由に出入り出来るようにしないのは、何故か。苦痛と苦難の中に生きる人間が理解しないのは、何故か。あなたがたのために、神は大いなる苦痛を受け、大いなる苦しみをもって神の愛する子、そしてその肉と血をあなたがたに与えた。それならば、あなたがたが依然として盲目を向けるのは、何故か。皆が見守る中、あなたがたは神の到来を拒絶し、神の友好を拒否する。あなたがたがそれほどまで非良心的なのは、何故か。そのような暗黒社会の不当さを、あなたがたは進んで受けるのだろうか。自分の腹を数千年におよぶ敵意で満たす代わりに、魔王の「糞」で満たすのは、何故か。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(8)」より

20. サタンは、一般大衆を騙すことにより、名声を得る。通常、サタンは義の先導者的かつ模範的存在として、自分自身の立場を確立する。義を守るという旗印のもと、サタンは人間を傷つけ、その魂を食い物とし、また人間を麻痺させ、騙し、扇動するためにあらゆる手段を講じる。サタンの目標は、自分の邪惡な行いを人間に認めさせ、それに人間を従わせること、サタンと共に神の權威と支配に反対させることである。しかし、その陰謀や策略、下劣な特徴についてわきまえるようになり、サタンの踏み台にされ、騙され、奴隷として仕えること、あるいはサタンと共に罰を受けて滅ぼされることを望まなくなると、サタンは従前の高德な特徴を一変させ、仮面を破り捨て、真の邪惡で残忍で醜い獣のような素顔を現す。サタンは、自分に従うことを拒んだ者と、サタンの邪惡な力に反対した者全てを皆殺しにすることを、何よりも好む。この段階で、サタンは信頼のおける紳士的姿を装うことは出来なくなり、被っている羊の皮の下の醜い悪魔のような特徴を持つ正体を現す。サタンの陰謀が明るみに出た時、その真の特徴が現れた時、サタンは激怒してその野蛮さを現し、人間を傷つけ、食い物にするサタンの欲望が強くなって行く。これは、サタンが人間が目覚めることに対して激怒するからである。サタンは、捕らわれの身から解き放たれて自由と光を得ようとする人間に、強い復讐の念を抱いている。サタンの怒りは、サタンの邪惡さを保護するためのものであり、またその獣のような性質を真に披瀝するものである。

サタンの行動は、万事においてサタンの邪悪な性質を示す。サタンが人間を惑わせて自分に従わせようとする初期の取り組みから、サタンが自分の邪悪な行いに人間を引きずり込む、サタンによる人間の搾取や、サタンの真の姿が現れ、人間がそれを認めて見捨てた後のサタンの執念深さまで、サタンが人間に対して行うあらゆる邪悪な行いのうち、サタンの邪悪な本質が披瀝されないものは無く、サタンは肯定的な物事と全く関係が無いという事実を証明しないものは無く、サタンはあらゆる邪悪な物事の根源であることを証明しないものは無い。サタンの行動は、すべてサタンの邪悪さを守り、サタンの邪悪な行いを継続し、正しく肯定的な物事に反抗し、人類の通常の存在の法則や秩序を破綻させる。サタンの行いは、神への敵意であり、神の怒りが滅ぼすものである。サタンには自分自身の怒りがあるが、その怒りはサタンの邪悪な性質を発散させる手段である。サタンが憤慨し、激怒する理由は、サタンの陰謀が明らかになったことや、その策略を成功させるのが困難であること、神の代わりとして君臨するというサタンの向こう見ずな野心と願望が打ち砕かれ、阻止されたこと、全人類を支配する目標が何の価値もないものとなり、永遠に達成出来なくなることなどである。サタンの陰謀が結実することや、サタンの邪悪が拡散するのを阻止して来たのは、神が度々召喚してきた、神の怒りであるため、サタンは神の怒りを嫌うと同時に畏れている。神の怒りが適用された時は常に、サタンの下劣な真の姿が披瀝されるだけでなく、サタンの邪悪な願望も明らかにされる。同時に、人類に対するサタンの怒りの理由が白日の下にさらされる。サタンの激昂は、サタンの邪悪な性質とサタンの謀略が、真に明示されたものである。無論、サタンが激怒した時は、毎回邪悪な物事の破壊を予告している。つまり、肯定的な物事に対する保護と維持、そして、反抗することが許されない、神の怒りの本質がその後続く。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

21. サタンの「特別」な身分のために、サタンが様々な側面において表示する内容に対して、多くの人々が強い関心を寄せるようになる。なかには、サタンは奇跡を起こすことや、人間には不可能なことができるのであるから、サタンにも神と同様に権威がある、と信じている愚かな人々もいる。そうしたわけで、人間は神を礼拝する一方で、心の中にサタンの居場所を設け、さらにはサタンを神として礼拝することさえある。こうした人々は、哀れであると同時に、憎まれるべきである。こうした人々は、その無知さのために哀れであり、またその非道と生来の邪悪な本質のために憎まれるべきである。ここで、権威とは何か、権威は何を象徴するか、権威は何を表しているかを知らせる



必要があるであろう。概して、神自身が権威であり、神の権威は崇高さと神の本質を象徴し、神自身の権威は、神の地位と身分を表す。そうであるとすれば、サタンは自分が神であるなどと敢えて言うであろうか。サタンは、自分が万物を造り、万物を支配していると敢えて言うであろうか。当然ながら、そのようなことは言わない。なぜなら、サタンは万物を創造することができないからである。現在まで、神が造った物と同じ物をサタンが造ったということは一度もなく、サタンが命あるものを造ったことは一切無い。サタンには神の権威が無いので、神の地位と身分をサタンが得ることはできない。これはサタンの本質により決定される。サタンには、神と同じ力があるだろうか。当然ながら、そのようなことは無い。サタンの行動や、サタンが起こした奇跡を何と呼ぶであろうか。それらは、力であろうか。それらを権威と呼べるであろうか。無論、それは力ではなく、権威とも呼べない。サタンは邪悪を率い、神の業のあらゆる側面を覆し、損なわせ、妨害する。現在まで数千年にわたり、人間を腐敗させ、虐待し、人間を誘惑し、欺して悪行を行わせ、神から拒否される存在にして、死の淵に向かわせたサタンは、かつて人間による祝賀や称賛、敬愛に値することを行なったことがあるだろうか。仮にサタンが権威と力を持っていたとすれば、人間はその権威や力により腐敗させられていたであろうか。仮にサタンが権威と力を持っていたとすれば、人間はその権威や力により危害を被ったであろうか。仮にサタンが権威と力を持つとすれば、人間はその権威や力により神を捨てて死へと向かうのであろうか。サタンには権威も力も無いのであれば、サタンの行為の本質は何であると判断すべきであろうか。サタンの行為全てを単なる謀略であると定義する人々もいるが、わたしはそうした定義はそれほど適切ではないと考える。人間の腐敗による邪悪な行いは、単なる謀略であろうか。サタンがヨブを虐げた邪悪な力と、ヨブを虐げ悩ませようとする激しい願望は、単なる謀略では得られないものである。思い出してみると、丘や山に広く群れていたヨブの動物たちは、一瞬にして消え去った。ヨブが所有していた大量の富が一瞬で消えた。これは謀略だけで成し得たことであろうか。サタンの業の性質は、損害、妨害、破壊、危害、邪悪、悪意、闇など、否定的な言葉に該当するので、そうした不正で邪悪な出来事の全てはサタンの行為と密接に繋がっており、サタンの邪悪な本質と不可分のものである。サタンの「力」や、大胆さ、野望がどれほどのものであったとしても、サタンの損傷を与える能力がどれほど優れていたとしても、サタンが人間を腐敗させ、誘惑する能力の幅広さがどれほどのものであったとしても、サタンが人間を威嚇する謀略や計略がどれほど狡猾であったとしても、またサタンが存在する形態をどれほど変化させることができたとしても、サタンには生き物を造る能力や、万物に対する法則や規律を定める能力があったことは無く、命

のあるものかないものかを問わず、どのようなものも支配する能力があったことは無い。広大な宇宙の中で、サタンから生まれた人間や物、サタンのおかげで存在する人間や物、サタンに統治され、支配されている人間や物は、全く存在しない。それとは反対に、サタンは神の支配権の下で生活する必要がある、さらに神の指示と命令にすべて従う必要がある。神の許可なくしては、サタンにとってひとしずくの水やひと握りの砂に触れることさえ困難である。また神の許可なくしては、サタンは蟻を地に這わせることさえままならないのであるから、神の造った人間を動かすことなど到底できるはずがない。神から見ると、サタンは山のユリの花よりも劣り、空を舞う鳥や海の魚にも劣り、地のウジ虫にも劣る。万物の中におけるサタンの役割は、万物に仕え、人間のために仕え、神の業と神の経営（救いの）計画に資することである。サタンの本性がいかに悪意に満ちているか、その本質がいかに邪悪であるかによらず、サタンにできることは、神に仕え、神に対照を提供するという、その機能に従順に従うことのみである。これがサタンの本質であり位置づけである。サタンの本質は命や力、権威から切り離されており、サタンは神の手の中にある玩具のようなもの、神のための役立つ道具に過ぎない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

#### 脚注

1. 「分解不可能」とは、ここでは皮肉であり、人々が自分の知識、文化、霊的観点に凝り固まっていることを意味する。
2. 「罰を受けることも捕らわれることも無いまま」とは、悪魔が凶暴になり、暴れ回ることを指す。
3. 「台無しにする」とは、悪魔の凶暴な行動を見るのがいかに耐えがたいことであるかを指す。
4. 「打ちのめされてあざが出来」は魔王の醜い顔について述べたものである。
5. 「大博打を打って」は、悪魔の陰険で邪悪な謀りの喩えである。この喩えは嘲笑的に用いられている。
6. 「食べ物にする」とは、人間の全てを奪い尽くす魔王の凶暴な行動を指す。
7. 「共犯者集団」は「ごろつきの群れ」の同義語である。
8. 「根拠の無い告発を行い」とは、悪魔が人間を害する方法を指す。

9. 「堅く警護されている」とは、悪魔が人間を害する方法が特に残忍であり、人間を強く支配するので、人間には動き回る余地がないことを指す。

a. 原文では「～と呼びかける者もいる」となっている。

b. 原文に「の泥沼」の語句は含まれていない。

## IX 墮落した人類のサタンの性質と本質を明らかにする代表的な言葉

1. 人が神に反対し、反抗する根源はサタンによる墮落である。サタンによって墮落させられたので、人の良心は麻痺してしまい、不道徳になり、考え方は低下し、逆行する精神状態を持ってしまった。サタンによって墮落させられる前は、人はもちろん神に従い、神の言葉を聞いた後それらに従っていた。人は健全な理知と良心を生来持っており、人間性も正常であった。サタンによって墮落させられた後、人が本来持っていた理知、良心、人間性は鈍くなり、サタンによって損なわれ、したがって人は神に対する服従や愛を失った。人の理知は異常になり、性質は動物の性質と同じになり、神に対する反抗はますます頻繁になり、深刻になっている。しかし、人はまだこのことに気づかず、認識せず、単に盲目的に反対し、反抗している。人の性質の暴露は人の理知、見識、良心の表出であり、人の理知や見識は不健全で、良心は極めて鈍くなっている。したがって人の性質は神に対して反抗的である。人の理知と見識に変化がなければ、その性質を変えることも、神の心にかなうことも不可能である。理知が不健全だと、人は神に仕えることができず、神に使われるには適さない。正常な理知とは神に従い、忠実であること、神を切望し、神に対して絶対で、神に対して良心を持っていることを意味する。神に対して心と考えにおいてゆるぎなく、わざと神に反対するようなことはしないことを意味する。理知が異常な人々はそうではない。サタンによって墮落させられて以来、人は神についての観念を作りだし、神への忠誠心や渴望は持っておらず、言うまでもなく神に対する良心も持っていない。わざと神に反対し、批判する。さらには陰で神に悪口雑言を投げつける。人は明らかにその方が神であることを知っているにもかかわらず、陰で批判し、神に従うつもりはなく、神に盲目的要求や依頼を行うだけである。そのような人々、つまり理知が異常な人々は自分自身の卑劣な行動を知ることや反抗心を後悔することができない。自分自身を知ることができれば、人々は自己の理知を少し取り戻す。神にますます反対し、自分自身を知らなければ、その理知はますます不健全になる。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

2. 人の墮落した性質が発覚する源はその人の鈍くなった良心、悪意のある本性、不健全な理知でしかない。良心や理知が正常に戻る事ができれば、人は神の前で神に用いられるのに相応しい人になるだろう。人がますます神に反抗的になるのは、単に良心

がつねに麻痺しており、その理知が決して健全ではなく、ますます鈍くなっているからであり、そのためイエスを十字架に釘でうちつけさえしたし、終わりの日に受肉した神の肉体が自分の家に入るのを拒絶し、神の肉体を罪に定め、神の肉体を卑しいものとみなすのである。少しでも人間性を持っていれば、受肉した神の肉体をそんなにひどく扱わないだろう。少しでも理知があれば、受肉した神にこのような卑劣な扱い方はしないだろう。少しでも良心を持っていれば、受肉した神にこのような方法で「感謝する」ことはないだろう。人は神が受肉した時代に生きているにもかかわらず、神がそのような良い機会を与えたことに感謝することができず、それどころか、神の到来を呪うか、あるいは神が肉となった事実を完全に無視し、一見したところそれに反対し、うんざりしている。神の到来を人がどのように扱うかにかかわらず、要するに、神は辛抱強く常に自らの働きを行なってきた。たとえ人が神を全く歓迎していなくても、盲目的に神に要求を突き付けてもである。人の性質はこの上なくひどくなり、理知はこの上なく鈍くなり、良心は悪い者によって完全に踏みにじられ、もともとの良心はずっと以前に途絶えてしまった。人は人類に多くのいのちと恵みを授けてくれた受肉の神に感謝しないばかりか、真理を与えたことで神をひどく嫌悪さえしている。真理に全く関心を持たないので、人は神をひどく嫌悪している。人は肉となった神のために命を捨てることができないだけでなく、神から利益を引き出そうとし、自分が神に預けたものの何十倍もの利息を神に要求する。そのような良心と理知を持つ人々はこのすべてを当たり前のことと思い、自分は神のために十分費やしたのに、神はあまりにも少ししか与えてくれないと信じている。わたしに一杯の水を与えたのに、両手を伸ばしてミルク二杯分<sup>[a]</sup>に等しいものを要求したり、わたしに一夜の宿を提供しても、宿泊費として何倍もの額を要求しようとした人々がいる。そのような人間性や良心で、どうしてあなたがたはいのちを得ることを望めようか。あなたがたはなんと卑劣な悪党なのだろう。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

3. 数千年にわたる墮落の後、人は麻痺し、物分かりが悪くなり、神に反対する悪魔になり、神への人の反抗の歴史は「史記」に記録されるほどになり、人自身でさえその反抗的行いに完全な説明ができなくなっている。人はサタンにより深く墮落させられ、惑わされてしまったので、どちらに向いたらよいかわからなくなっているのである。今日でさえ、人はまだ神を裏切っている。人は神を見ると裏切り、神が見えないときもやはり神を裏切る。神の呪いや怒りを目の当たりにしても、それでも神を裏切る人々さえいる。そこでわたしは、人の理知はその本来の機能を失い、人の良心も本来の

機能を失ったと言う。わたしが目にする人は人の装いをした獣、毒のある蛇であり、わたしの目の前でどんなに哀れっぽく見せようとしても、わたしは人に対して決して寛大にはならない。人は白と黒の違い、真理と非真理の違いを把握していないからである。人の理知は大いに麻痺しているにもかかわらず、まだ祝福を得ようと願い、人間性はひどく下劣であるにもかかわらず、まだ王としての統治を保有することを願う。そのような理知の持ち主がいったい誰の王になれるというのか。そのような人間性の者がどうして玉座に着くことができようか。実に人は恥を知らない。身の程知らずな卑劣漢である。祝福を得たいと願うあなたがたに対し、わたしはまず鏡を見つけて、そこに映る自分自身の醜い姿を見ることを勧める。あなたは王になるために必要なものを持っているだろうか。あなたは祝福を得ることのできる者の顔をしているだろうか。性質にわずかな変化もなく、真理は何一つ実践していないにもかかわらず、あなたはまだ素晴らしい明日を願っている。あなたは自分自身を欺いている。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

4. また、数千年におよぶ「民族主義の高尚な精神」が人間の心の奥に残した悪影響、そして、自由も大志も根気も向上意欲も全くなく、消極的で衰退的なまま、奴隸的精神状態にとらわれた人々が束縛されている封建的な考え方もある。こうした客観的要素により、人類の観念的態度や理想、倫理、性質に消えることのない不浄で醜悪な色調が加えられてきた。人間は暗黒のテロリストの世界で生活しているように思われるが、それを超越することを求める者や、理想の世界に移ろうと考える者はいない。人間はむしろ自分の境遇に満足し、子供を産み育て、日常生活の諸事に奔走して励み、汗をかき、快適で幸せな家庭や、夫婦の愛情、親孝行な子供達、平和な人生を送って晩年を迎える喜びを夢見ている。現在まで数十年、数千年、数万年にわたり、人間はそのようにして時間を浪費し、誰も完全な生活を創造することなく、全員がこの暗黒の世界で互いに殺し合うこと、名声や富をめぐる競い合い、互いに謀をすることにのみ没頭している。今まで、誰が神の心を求めたであろうか。今まで、神の働きに注意した者がいるであろうか。人間のあらゆる部分が闇の影響により占められている状態が、人間の本性となつて久しい。そのため、神の働きを行うのは極めて困難であり、現在、神が人間に託したことに人々はさらに配慮しなくなっている。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(3)」より

5. 人間の本性はわたしの本質と全く異なる。その理由は、人間の腐敗した本性が全てサタンに由来するからであり、また人間の本性はサタンに取り憑かれて腐敗させられ

ていることにある。つまり、人間はサタンの邪悪と醜悪さの影響下で生きながらえている。人間は真理の世界や聖なる環境で育つのではなく、光の中で生活してもいない。ゆえに、人間それぞれの本性に真理が生来備わっていることはあり得ず、それ以上に、神を畏れ、神に従う本質を持って生まれることもあり得ない。逆に、人間は神を拒み、神に反抗し、真理を愛すことのない本性を備えている。わたしが話したいのは、この裏切りの本性に関する問題である。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り(2)」より

6. 人間の存在は、霊が順番に肉体化することに基づいている。つまり、各人は、霊が肉体化した時に、肉にある人間の命を得る。人間の身体が生まれた後、その命は肉の限界、つまり霊が外殻から出る時まで続く。この過程が何度も繰り返され、それと共に人間の霊は往来を繰り返し、全人類の存在が維持されている。肉にある命は、人間の霊の命でもあり、人間の霊は人間の肉の存在を支援する。つまり、各人の命は、その者の霊に由来し、人間の肉に元来いのちがあるのではない。したがって、人間の本性は人間の肉ではなく霊に由来する。人間がサタンによる誘惑、サタンが与える苦悩や腐敗をどのように受けたかを知るのは、各人の霊のみである。人間の肉は、それを知る事が出来ない。よって、人間は無意識のうちに益々汚れ、邪悪で暗黒になってゆく一方、わたしと人間との距離も益々広がり、人間の日々も益々暗黒になる。人間の霊は、全てサタンに掌握されている。ゆえに、人間の肉もまたサタンに囚われているのは言うまでも無い。こうした肉と人間が、どうして神に反抗せず、生来神の味方であり得るだろうか。サタンがわたしにより空へと投げ出されたのは、サタンがわたしを裏切ったからであるが、それならば、どうして人間がその影響から解放され得るであろうか。これが、人間の本性が裏切りである理由である。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り(2)」より

7. わたしに完全に従うことが出来ない行動は裏切りである。わたしに忠実であることが出来ない行動は裏切りである。わたしをごまかし、嘘でわたしを騙すことは裏切りである。頭が多く、観念で一杯で、それをいたる所で広めることは裏切りである。わたしの証しと益を護らないことは裏切りである。心の中でわたしから去って作り笑いを浮かべるのは裏切りである。こうした行動は全て、あなたがたがいつも出来る物事であり、あなたがたの間で恒例ともなっている物事でもある。あなたがたのうちの一人として、それを問題だと考える者はいないが、わたしはそうは考えない。わたしは、わたしを裏切ることを些細な事として扱うことは出来ず、また無視することも出来ない。わたし

はあなたがたの間で業を行っているが、あなたがたは依然としてそのような状態である。あなたがたを思い遣り、見守る者がいつの日かいなくなったら、あなたがたは皆お山の大將<sup>[5]</sup>になるのではなかろうか。その時、あなたがたが大惨事を引き起こした時、誰がその後始末をするのであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り(1)」より

8. あなたがたは、自分が誰にも悪いことをしたことが無いからといって、自分に裏切りの本性が無いと楽観してはならない。あなたがそのように考えるのであれば、あなたには胸がむかむかさせられる。わたしがその都度述べてきた言葉は、全ての人々に向けて語られたのであって、一個人やあるタイプの人間にだけ向けられたものではない。ひとつの事においてわたしを裏切ったことが無いからといって、それは、あなたが他のどんなことにおいてもわたしを裏切らないことの証明にはならない。結婚生活での挫折の中で真理の追求において確信を失う人々もいる。ある人々は、家族崩壊時にわたしに対し忠誠を尽くす任務を投げ捨ててしまう。束の間の喜びや興奮を求めるために、わたしを見捨てる人々もいる。光の中で生き、聖霊の業の喜びを自分のものとするよりも、むしろ暗い谷に落ちた方が良いという人々もいる。ある人々は、富への欲を満たすために友人の助言を無視し、今なお自分の過ちを認めて戻ることが出来ない。わたしの保護を受けるために一時的にわたしの名のもとで生きる人々もいれば、命にしがみつき、死を恐れているために、少しだけしか捧げない者たちもいる。これらの行動と、その他の不道德で、その上みっともない行動は、まさに人々が心の奥底で長い間わたしを裏切ってきた行為と同じではなかろうか。無論、人々の裏切りは事前に計画されたものではなく、それは彼らの本性の自然な現れであることを、わたしは知っている。わたしを裏切りたい者は一人もおらず、その上、何かわたしを裏切る事をして、喜ぶ者はいない。それどころか、彼らは恐怖に震えているではないか。それならあなたがたは、それらの裏切りの埋め合わせをどうやって為すことができるのか、またどのようにして現状を変えることができるのかについて考えているのであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り(1)」より

9. サタンにより腐敗させられた霊は、すべてサタンの支配する領域にある。ただし、キリストを信じる者は分離され、サタンの軍勢から救われ、今日の神の国へと導かれている。こうした人々は、もはやサタンの影響下では生活していない。それでもなお、人間の本性は依然として人間の肉に根ざしている。つまり、あなたがたの霊は救われているにもかかわらず、あなたがたの本性は依然として昔のままの姿であり、あなたがた



がわたしを裏切る可能性は依然として100パーセントである。わたしの業が極めて長期に及ぶのはそのためである。なぜなら、あなたがたの本性は極めて揺るぎないからである。現在、あなたがたは皆、自分の本分を尽くす上で可能な限りの苦難を受けているが、否定出来ない事実として、あなたがた各人にわたしを裏切り、サタンの領域、サタンの陣営に戻り、従来生活へと戻る可能性がある。この時、あなたがたが現在のように人間性や人間としての姿を僅かでも持つことは不可能であろう。深刻な場合、あなたがたは滅ぼされ、さらに永遠に罪に定められ、生まれ変わることは二度となく、厳罰に処されるであろう。これが、あなたがたを待ち受けている問題である。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り(2)」より

10. あなた方は神によって泥から切り離され、いずれにせよ不潔で嫌われる汚物の中から選び出された。あなた方はサタンに属していて、かつてはサタンによって踏みつけられ、傷つけられていた。だから、あなた方は泥から切り離されたと言われているし、あなた方は神聖ではなく、それどころかサタンは、あなた方を人ではなく物体として長い間ばかりにしていたのだ。これがあなた方に対するもっとも適切な表現である。あなた方は、魚や海老のように望ましい捕獲物とは対照的に、自分がよどんだ水や泥の中で見つけられた不潔なものであることを理解しなければならない。あなた方からは何の喜びも引き出されないからである。単刀直入に言えば、あなた方は低層社会における最低の獣であり、豚や犬にも劣っている。率直に言えば、そのような表現であなた方を呼ぶのは誇張表現ではなく、問題を単純化する方法である。あなた方をそのような表現で呼ぶのは、実のところ、あなた方に敬意を表する方法である。あなた方の見識、話し方、「人」としての行動、生活におけるあらゆることは——泥の中におけるあなた方の立場も含め——あなた方の身分が「並外れている」ことを証明するのに十分である。

『言葉は肉において現れる』の「人に固有の身分と人の価値——それらはいったいどのようなものか」より

11. 人は神を追求したがらず、自分の所有物を神のために使いたがらず、生涯を通しての努力を神に捧げたがらず、それどころか、神はやり過ぎたとか、神には人の観念と対立する部分がありすぎるなどと言う。人間性がこのようでは、たとえあなたがたが努力を惜しまないとしても、神の承認を得ることはやはりできないだろうし、あなたがたが神を探し求めているという事実は言うまでもない。あなたがたは自分が人類の不良品だということを知らないのか。あなたがたの人間性ほど卑しい人間性はないということを知らないのか。あなたがたの「称号」は何か知らないのか。本当に神を愛する人々はあなたがたをオオカミの父、オオカミの母、オオカミの息子、オオカミの孫息子と

呼ぶ。あなたがたはオオカミの子孫、オオカミの民族である。あなたがたは自己の身分を知るべきであり、それを決して忘れてはならない。自分がなにか優れた人物だと考えてはならない。あなたがたは人類のなかで最も悪意がある非人間的なものの群である。あなたがたはこのことを全く知らないのか。あなたがたの中で働くためにわたしがどれほどの危険を冒しているか知っているだろうか。あなたがたの理知が正常に戻ることはできず、あなたがたの良心が正常に働くことができなければ、あなたがたから「オオカミ」の名称が外されることは決してなく、呪いの日を免れることも決してなく、懲罰を受ける日を免れることも決してない。あなたがたは劣った生まれで、何の価値もない。本質的に飢えたオオカミの群、山積みのがらくたとごみである。あなたがたと違って、わたしがあなたがたに働きかけるのは甘い汁を吸いたいからではなく、その必要があるからである。あなたがたがこのような反抗的態度を続けるなら、わたしは働くのをやめ、二度と再びあなたがたに働き掛けることはない。それどころかわたしを喜ばせてくれる別の集団に働きを移し、このようにして永遠にあなたがたから離れる。なぜならわたしに敵対する人々を見たくないからである。では、あなたがたはわたしに味方することを望むか、それとも反目していただきたいか。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

12. 人類はわたしの敵以外の何ものでもない。人類は、わたしに抵抗し従わない邪悪な者である。人類は、わたしによって呪われた邪悪な者の子孫以外の何ものでもない。人類は、わたしを裏切ったかの大天使の末裔以外の何ものでもない。人類はすでに、わたしによって嫌悪され捨てられ、わたしと対立するようになった悪魔の遺産以外の何ものでもない。全人類の上にかかる空は、暗く陰鬱であり、澄み渡った明るさなど微塵もない。人間の世界は漆黒の闇であり、そこで生きるとき、人は伸ばした自身の手を見ることができないし、顔を上げて太陽を見ることはできない。足の下は道路は、ぬかるみ、くぼみだらけであり、さらに曲がりくねっている。全土に死骸が散乱している。暗がりの隅は遺骸で溢れている。冷たく暗い、奥まった場所は、居を定めている大勢の悪魔たちが群がっている。人類がいる至る所に、悪魔の群れもまた行ったり来たりしている。汚れにまみれた無数のけだものの子孫が残忍な戦いの中で競い合っている。そしてその音が人を震え上がらせる。そのような時代、そのような世界、そしてそのような「地上のパラダイス」において、人は人生の至福を探し出すのにどこへ向かうだろうか。人は、人生の終着点を見出すのにどこへ向かうだろうか。遠い昔にサタンに踏みつけられた人類は、サタンの似姿で行動し続けてきた――それどころかサタンの化身でさえ

あった。彼ら自身がサタンの明確な証人である証拠だ。そのような人類、そのような人間のくず、あるいは、そのような墮落した人間家族の子孫――彼らがどうして、神の証しに立つことができようか。どこからわたしの栄光は現れるのだろうか。わたしの証しに立てるものはどこにいるのか。わたしに敵対し人類を墮落させている敵はすでに、わたしが創造し、わたしの栄光とわたしの生きること満ち溢れた人類に汚点を残した。敵はわたしの栄光を奪ってしまった。そしてそれが人に吹き込んだものはサタンの醜悪さで並々と飾られた毒と善悪の知識の木の果実からの汁に他ならない。

『言葉は肉において現れる』の「本物の人とは何を意味するか」より

13. 「天では、サタンがわたしの敵であり、地上では人がわたしの仇である。天と地は繋がっているので、彼らは9世代にわたり連座して同罪と見なされるべきである。」サタンは神の敵である。わたしがこのように言うのは、サタンが神の偉大な好意と親切に対して報いるどころか、むしろ「流れに逆らって舟を漕ぐ」からであり、そうすることによって神に対する「親孝行」を果たさないからである。人々もサタンと同じではないだろうか。彼らは「両親」に対して子としての尊敬の念をまったく示さず、「両親」から受けた養育と援助に決して返礼をしない。このことは地上の人々が天のサタンと同類であることを十分に示している。人とサタンは神に対する心と気持ちが同じなので、神が9世代を同罪として巻き込み、赦される者は誰もいないのは当然のことである。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第三十八章」より

14. 眠っている神の民を救うために神が彼らに呼び掛けない日は一日としてないが、彼らは皆睡眠薬を飲んだかのように活気のない状態にいる。神が彼らを一瞬でも目覚めさせなければ、彼らは睡眠状態に戻り、まったく気づかない。神の民全員のうち、三分の二は麻痺しているようである。彼らは自分が必要とするものも、自分の欠点も知らず、何を着るべきか、何を食べるべきかさえない。このことから、赤い大きな竜が人々を墮落させるために努力を振り絞ってきたことが見て取れる。竜の醜さは中国の全地域に広がっており、人々は苛立ち、もはやこの退廃的で、がさつな国に留まることを望んでいない。神が最も嫌うのは、赤い大きな竜の本質であり、そのため、神は一日も欠かさず怒りの中で人々に思い出させ、人々は毎日神の怒りの眼差しにさらされて暮らしている。たとえそうであっても、大半の人々はまだ神を探し求めることがわからず、ただそこに座ってながめ、手で食べ物を与えられるのを待っている。飢え死にしそうでも、彼らは進んで自分の食べ物を探しに行こうとしない。人々の良心はサタンによってとくに墮落させられており、本質的に冷酷な心になってしまっている。神が次の

ように言うのももっともである。「わたしが促さなければ、あなたがたはいまだに目覚めず、冬眠しているかのように、凍ったような状態のままでいだろう。」人々は冬眠して冬を過ごしており、食べることも飲むことも要求しない動物のようである。これがまさに神の民の現在の状態であり、そこで神は、肉の姿の神を光の中で知ることだけを要求する。神は人々が大いに変わることを、あるいは彼らがいのちにおいて目覚ましい成長を遂げることは要求しない。それでも不潔で汚い赤い大きな竜を打ち負かし、神の偉大な力を明らかにするのに十分であろう。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十三章」より

15. わたしの働きが終わる時、もはやわたしは人からこの「救済のための資金」を求めないだろう。それどころか、わたしは本来備わっている機能を実行し、「わたしの家のもの」を下ろして、すべての人々が楽しむために差し出す。今日、すべての人はわたしが与える試練のまっただ中で試される。わたしの手が正式に人々の間に届くと、彼らはもはや感嘆の目でわたしを見上げることはなく、憎しみをもってわたしを扱う。その瞬間、彼らの心臓は直ちにわたしによってえぐり出され、標本になる。わたしは人の心臓を「顕微鏡」で観察する――わたしへの本当の愛はそこにはない。何年もの間、人々はわたしをだまし、からかい続けてきた――彼らの左心房にも右心室にもわたしに対する憎しみの毒が含まれていることがわかるから、わたしが彼らにそのような態度をとるのも不思議ではない。しかし、彼らはまったくこのことを知らず、認めさえしない。わたしが観察した結果を彼らに示しても彼らは目を覚まさない。彼らの心の中では、これらは過去の問題で、今日再び持ち出すべきではないと思っているかのようなのである。したがって、人々は「わたしの観察結果」を無頓着に見るだけである。彼らは観察記録を返却し、大股に立ち去る。その上、彼らはこのようなことを言う。「これらは重要ではない、わたしの健康に何の影響もない。」彼らは軽蔑的に少し笑い、次に少し威嚇的な眼差しを示し、わたしに対して、そんなに率直であるべきではなく、もっといい加減でなければならないと暗に伝えているかのような態度を示す。まるで、わたしが彼らの内なる秘密を明らかにするのは人の「おきて」を壊すようなものだと言わんばかりである。そこで彼らはわたしをさらに憎むようになる。そうやってようやくわたしは人々の憎しみの源を見る。これは、わたしが見ている時には彼らの血液は流れていて、体内の動脈を通過したあと、血液が心臓に入った時に初めてわたしが新しい「発見」をするからなのだ。しかし、人々はこのことを何も考えない。彼らは完全に不注意で、得るもの、失うものについて考えてみることもなく、そのことは彼らの「私心のない」精神を示す

のに十分である。彼らは自分自身の健康状態には何の配慮もせず、わたしのために「飛び回る」。これも彼らの「忠実性」であり、彼らに関して「称賛すべき」ことである。そこでわたしは、彼らはこれによって幸せになるだろうという内容の「称賛」の手紙をもう一度彼らに送る。しかし、この「手紙」を読むと、彼らはすぐに少し腹立ちを感じる。彼らの行うすべてのことについて、わたしが手紙を書かなかったからである。いつもわたしは人々が行動する時指示をしてきたが、彼らはわたしの言葉をひどく嫌悪しているように思われる。したがって、わたしが口を開くとすぐに彼らは目をギュッと閉じ、耳を両手で塞ぐ。彼らはわたしが愛を与えても、尊敬の念を持ってわたしを見上げることはなく、常にわたしを憎んでいる。わたしが彼らの欠点を指摘し、彼らの所有するすべての品物を暴いたからであり、そのため彼らは仕事で損をし、生活の手段をなくしてしまった。そういうわけで彼らのわたしに対する憎しみはその後増加しているのだ。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第三十二章」より

16. 人類の本質は、ほんの少しでも望みが残っていれば、神に助けを求めようとせず、自然のままで生き残るための自己満足的方法を採用しようとするものなのだ。これは人類の本質が独善的であり、すべての人を見下しているからである。このため、神は次のように語った。「安楽な時にわたしを愛することのできた者は一人もいない。自分たちが安らかで幸福な時に、喜びを分かち合おうと、わたしに手を伸べた者は一人もいない。」これは実に嘆かわしいことである。神は人類を創造したが、神が人間世界に来ると、彼らは神を拒絶しようとし、あたかも神がさすらっている孤児か、この世に市民権を持たない者であるかのように自分たちの領土から追い払おうとする。誰も神に愛着を覚えず、誰も真に神を愛さず、誰も神の到来を歓迎していない。それどころか、神の到来を見ると、彼らの嬉しそうな顔は瞬く間に曇ってしまう。まるで突然途中で嵐にあったかのようであり、神が彼らの家族の幸せを奪ってしまうかのようであり、神はけっして人類に祝福を与えず、その代わりにただ人類に不幸を与えたかのようである。つまり、人類の考えでは神は彼らにとって恩恵ではなく、いつも彼らを呪う存在なのだ。このため、人類は神を気にも留めず、歓迎せず、いつも神に対して冷淡であり、これはけっして変わっていない。人類はこれらの事柄を心に抱いているので、人類は不合理で不道德だと神は言い、人間がたぶん備えているであろう感情でさえ彼らの中に感じられないと言う。人類は神の感情にまったく考慮を示さず、神にかかわる時に彼ら独自の「正しさ」を使う。人類は長年の間このようであり、このために神は彼らの性質は変化して

いないと言った。これは彼らが数枚の羽根ほどの実体しか持っていないことを示すことになる。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十四章」より

17. 天の神は、最も不浄な悪徳の地に来て、決して不満を漏らさず、人間について不平を言わず、人間の略奪<sup>[1]</sup>や抑圧を黙って受けた。彼は、人間の不合理な要求に報復することも、人間に対して過度の要求や不合理な要求をすることも無かった。彼は単に、教えること、啓くこと、叱責、言葉による精錬、注意を喚起すること、勧告すること、慰めること、裁くこと、啓示することなど、人間が必要とする全ての働きを不平を言わずに行う。神の段階のうち、どれが人間のいのちのためでは無かったであろうか。神は人間の前途や運命を取り去ったが、神が行った段階のうち、どれが人間の運命のためでは無かったであろうか。その段階のうち、どれが人間の生存のためでは無かったであろうか。どれが夜のように黒い闇の勢力がもたらす苦難や抑圧から人間を解放するためでは無かったであろうか。どれが人間のためでは無かったであろうか。愛情溢れる母のような神の心を、誰が理解できるというのか。神の真剣な心を、誰が理解できるというのか。神の情熱的な心と熱心な期待は、冷酷な心と冷淡かつ無関心な眼差し、人間による非難と侮辱の繰り返し、辛辣な言葉と皮肉、蔑みといった報いを受け、また嘲笑、蹂躪と拒否、誤解と愚痴、疎外と忌避、欺瞞と攻撃、そして苦しみばかりで報いられている。温かい言葉には、敵意の表情と冷淡な不満の意味をこめて振られる千本の人差し指が向けられた。神は、それを忍んで頭を下げ、おとなしく従う牛のように人々に仕えるしか無い。<sup>[2]</sup>神はいくつの陽と月、いく度星を見上げたことであろうか。彼は何度日の出と共に発ち日の入りと共に戻って、父の元を去った時の苦痛の千倍におよぶ苦悩と、人間の攻撃と打撃、取り扱いと刈り込みを堪え忍び、悶々として眠れぬ夜を過ごしたことであろうか。神の謙遜と慎ましさは、人間の偏見<sup>[3]</sup>、不当な意見や処遇で応じられ、また神の匿名性と忍耐強さ、寛容さは、人間の強欲な眼差しで報いられ、人間は良心の呵責無く神を踏みにじり、殺そうとする。神を扱う人間の態度は、「希な聡明さ」の類いのものであり、人間に虐待され侮蔑された神は、幾万もの人間の足で踏みつぶされている一方で、人間は意気揚々として立ち、それはあたかも城に住む王のようであり、そして絶対的な権力の掌握<sup>[4]</sup>を望むかのようであり、陰で宮廷を操り、神を誠実で規則に従い、逆らったり問題を起こすことを許されない裏方の主事にしようとしているようである。神は『末代皇帝』の役を演じ、何の自由も無い操り人形<sup>[5]</sup>にならなければならない。人間の所行は筆舌に尽くしがたい。それならば、どうして神に対してあれこれと要

求する資格が人間にあらうか。どうして神に対して提案する資格が人間にあらうか。どうして人間の弱点に同情することを神に対して要求する資格が人間にあらうか。どうして人間が神の憐れみを授かるのにふさわしいであらうか。どうして人間が神の寛大さを何度も得るのにふさわしいであらうか。どうして人間が神の赦しを何度も得るのにふさわしいであらうか。人間の良心はどこにあるのか。人間は遥か昔に神の心を傷つけ、それを砕け散ったままにして久しい。神は、それが少しの温厚さしか伴わなくても、人間が神に優しく接することを期待して、生き生きと眼を輝かせ、澆刺として人間の中に来た。しかし、神の心はいっこうに人間によっては慰められず、神が受けてきたのは、激化を続ける<sup>(6)</sup>攻撃と苦悩のみである。人間の心は過度に貪欲であり、人間の欲望は大きすぎ、人間は決して飽き足りることを知らず、常に問題を起こし、無鉄砲であり、神に対して言論の自由や権利を決して与えず、神は、恥辱に屈服し、人間によって好きなように操られることを余儀無くされている。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(9)」より

18. 創造時から現在に至るまで、神は極めて大きな痛みを耐え忍び、無数の攻撃を受けて来た。しかし、現在も人間の神に対する要求は衰えることなく、神を吟味し、神に対して容赦せず、神に対して勧告し、批判し、咎めるだけで、それはあたかも神が誤った道を歩み、地上にある神が残忍で不合理であったり、奔放に振る舞ったり、結局無意味になったりするのを深く恐れているかのようである。人間は、神に対して常にこうした姿勢であった。それが神を悲しませないことが、どうしてあらうか。神は、受肉することにより甚大な苦痛と恥辱を受けたが、その上に、神に人間の教えを受け容れさせることは、どれほど酷いことであらうか。神は、人間の元へ来たことが原因で、全ての自由を奪われたが、それはあたかも神が陰府に捕らわれ、人間による分析を全く抵抗せずに受け容れたかのようである。それは恥辱ではないだろうか。常人の家庭に来たことで、イエスは最大の不義を受けた。それにも増して恥辱的なこととして、イエスはこの汚れた世に来て、深みの底までへりくだり、至って普通の肉を受けた。至高の神は、劣った人間となるにあたり、苦難を受けるのではなかろうか。そしてそれは、全て人間のためではなかろうか。神が自らのことを考えたことがあっただろうか。彼はユダヤ人に拒否されて殺され、人々に愚弄され、嘲笑されても、天に不平を言ったり地に反抗したりすることは無かった。現在、こうした数千年前の悲劇が、ユダヤ人のような人々の間で再発している。そうした者は、かつてと同じ罪を犯しているのではなかろうか。神の約束を人間が授かる資格が、どうしてあらうか。人間は神に反抗して、その後に神の恵

みを授かるのではなかろうか。人間が正義と向き合い、真理を探し求める事が決して無いのは、何故だろうか。人間は何故、神のすることに関心を抱かないのだろうか。人間の義はどこにあるのか。人間の公正さはどこにあるのか。人間は厚かましくも神を代表するつもりなのか。人間の正義感はどこにあるのか。人間が愛するもののうち、どの程度が神に愛されているであろうか。人間はチョークとチーズを見分けることが出来ず<sup>[7]</sup>、常に白黒を混同し<sup>[8]</sup>、義と真理を抑圧し、不公平と不義を空高く掲げる。人間は光を追い払い、闇の中ではしゃぎ回る。真理と正義を求める者は、それに反して光を退け、神を求める者は神を踏みつけて自らを空高く掲げる。人間は盗賊<sup>[9]</sup>同然である。人間の理知はどこにあるのか。誰が善悪を区別できようか。誰が正義を守ることが出来ようか。誰が真理のために苦しむことを望むというのか。人間は悪徳かつ邪悪である。人間は神を十字架に付けて拍手喝采し歓声を上げ、その熱狂的な叫びは止むことがない。人間は鶏と犬のように結託して共謀し、自分達の王国を建て、人間の干渉が及ばない場所はなく、また人間は目を閉じてくるったように吠え続け、皆一緒に閉じ込められて濁った雰囲気は充滿し、騒々しく活気があり、また盲目的に他人に追従する者たちが絶えず現われては、自分たちの皆祖先の「輝かしい」名声を掲げている。こうした犬と鶏は、遙か昔に神を心の奥へ押しやり、神の心境に対して注意を払ったことは一度も無い。人間は犬や鶏のようであり、他の百匹の犬も吠えさせる吠える犬のようである、と神が言ったのも不思議ではない。そのようにして、神の働きがどのようなものか、正義があるかどうか、神には足がかりとなる場所があるか、明日どうなるか、自分の卑しさや汚れなどにはおかまいなしに、人間は仰々しい謳い文句で神の働きを現代にもたらした。人間は物事をそれほど深く考えたことも、明日のことを懸念したことも無く、有益で貴い物事を集めて自分のものとし、神には屑と残飯<sup>[10]</sup>しか残さなかった。人間は何と残忍なことであろうか。人間は神に対して何も思いやることが無く、神の全てを密かにむさぼった後、神を自分の後ろに放り投げ、神の存在にそれ以上留意することは無い。人間は神を享受しつつ神に背き、神を踏みつける一方、口では神に感謝し、神を賛美する。人間は神に祈り、神をよりどころとしつつ、神を欺く。人間は神の名を「崇め」神の顔を見上げるが、同時に厚かましく恥知らずに神の玉座に座り、神の「不義」を裁く。人間は口では神に負債があると言って神の言葉を眺めるが、心の中では神を罵る。人間は神に対して「寛容である」が、神を抑圧しつつ、口ではそれが神のためと言う。人間は神のものを手に握り、口では神に与えられた食べ物を噛むが、人間の眼はあたかも神をむさぼり尽くすことを望んでいるかのように冷酷で無情な眼差しで神を見る。人間は真理を見るが、それがサタンの謀だと言うことにこだわる。人間は正義を見るが、それを強制



的に自己犠牲に変える。人間は人間の行いを見るが、それが神というものであると言い張る。人間は人間に与えられた天賦の才を見るが、それが真理であると言い張る。人間は神の業を見て、それが傲慢さであり、自惚れであり、虚勢であり、独善であると言い張る。人間は神を見る時、神に人間のレッテルを貼ることを主張し、サタンと共謀する被造物の座に納めようと懸命になる。人間は、それらが神の言葉であることを十分承知しているが、それは人間の書き記したものの以外の何物でもないと言う。人間は、神の霊が肉となって現れていること、神が受肉していることを十分承知しているが、単にその肉はサタンの末裔であると言う。神が謙り隠れていることを十分承知しているが、単にサタンが辱められられ、神が勝利したと言う。なんと役立たずな者達であろうか。人間は番犬として仕える価値さえ無い。人間は白黒を見分けることが出来ず、さらには黒を白だと故意に曲解している。人間の勢力と人間による包囲は、神の解放の日を持ち堪えることが出来るだろうか。人間は故意に神に反抗したあと、まったく気にもしないで、神が自らを現す隙さえ与えずに、神を死に追いやるほどである。義はどこにあるのか。愛はどこにあるのか。人間は神の傍らに座りつつ、跪いて赦しを請うよう神に強要し、人間の采配に全て従い、人間の策略に黙って従うよう迫り、神のすること全てにおいて人間の指示に従わせており、そうならなかったならば人間は激昂して<sup>(111)</sup>怒り狂う。黒を白へとねじ曲げるような闇の影響下にあって、どうして神が悲しみにうちひしがれないでいられようか。どうして神が懸念せずにいられようか。神が最新の働きを始めた時、それは新時代の夜明けのようであると言われるのは何故だろうか。人間の行いは極めて「豊潤」であり、「枯れることのない生ける水の泉」が人間の心の畑地を間断なく「潤す」一方、人間の「生ける水の泉」はぬけぬけと神と競い合う。<sup>(122)</sup>両者は折り合いが付かず、その泉は何のおとがめもなく神に代わって人間に施す一方、人間はそれに伴う危険に対して何の懸念することなく、その泉に加担する。それにはどのような効果があるのであろうか。人間は、神が人間の注意を引くことをひどく恐れ、また神の生ける水の泉が人間を引き寄せ、獲得することを深く懸念して、神を冷淡に隅へ追いやり、人間が神を全く気に留めない所まで遠ざける。こうして、この世の懸念を長年にわたり経験した後、人間は神に対して謀略を企て、さらには神を批判の対象とする。それはあたかも神が人間の目の中の丸太となったかのようにあり、人間は神を掴んで火にくべて精錬し、清めようと必死になっているかのようにある。神の苦難を見て、人間は腹を抱えて笑い、喜んで踊り、神も精錬するに至ったと言い、またあたかもそのみが天の公平かつ公正なやり方であるかのように、人間は神の穢れた不純物をすっかり焼き尽くして清めると言う。人間のこうした暴力的行為は、意図的かつ無意識のようである。人間は自ら

の醜い顔を現し、また忌まわしく汚れた魂と哀れな乞食の姿を現す。人間は、遍く猛り狂った後、衰れを極めたパグのように惨めな様相で天の赦しを乞う。人間は常に予想外の行動を執り、「虎の威を借りて他人を脅し」<sup>[6]</sup>、いつも役を演じ、神の心に少しも配慮せず、自らの地位と比較することも無い。人間はただ黙って神に反抗し、それはあたかも神が人間を虐待しており、神は人間をそのように扱うべきではないかのようであり、また天が目を持たず、故意に人間にとって物事が困難となるようにしているかのようである。したがって、人間は悪徳な謀りを企て、神に対する要求を僅かでも譲ることが無く、どう猛な眼差しで神の一挙一動を睨み、決して自らが神の敵であるとは考えず、神が霧を晴らして物事を明瞭にし、「虎の口」から人間を救い、人間のために報復する日が来ることを願っている。現在に至っても、人々は、時代を通して多くの者たちによって演じられてきた神に敵対するという役割を自らが演じているとは依然として考えていない。人間は、自分が為す全てのことにおいて久しく邪道を行き、かつて理解したことは海に飲み込まれていることを、どうして知ることが出来ようか。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(9)」より

19. 人類がここまで発展してきたことは、前例のない状況である。神の働きと人がいのちに入ることは肩を並べて進むのであるから、神の働きもまた比類の無い程の大きな好機である。現在まで人間がいのちに入ることは、人間がかつて想像し得なかった不思議である。神の働きは絶頂を迎え、それに続いて人間の「入ること」<sup>[13]</sup>もまた絶頂を迎えた。神は自らを可能な限り卑しくし、人間その他あらゆる宇宙の万物に一度も反抗したことが無い。一方、人間は神の頭の上に立ち、神を最大限まで抑圧している。万事が絶頂を迎え、義が現れる時が来ている。闇に地を覆わせ、闇に人々を包ませるままにしておくのは何故だろうか。神は数千年、ことによると数万年にわたり、それを見てきて、神の寛容さが限界に達して久しい。神は人間のあらゆる挙動を見続け、人間の不義がどの程度の期間はびこるかを観察し続けてきたが、人間は随分前から鈍感になっているので、何も感じない。一体誰が神の業を見て来たというのか。一体誰が目を上げて彼方を見据えたというのか。一体誰が注意して聴いたというのか。一体誰が全能者の掌中にいたことがあるというのか。人間は皆、架空の恐怖に苛まれている。<sup>[14]</sup>草や藁の山が何の役に立つというのか。人間は生きて肉にある神を虐待し死に至らしめることしか出来ない。人間は草や藁の山でしか無いが、人間が「最も得意とする」<sup>[15]</sup>事がある。それは、神を虐待して生きながら死に至らしめ、それが「人間の心に喜びを与える」と叫ぶことである。何とも役立たずの雑魚どもである。特に、止むことのない人の流れの中

で、神に注目し、神を堅く破ることの出来ない障壁で包囲する。人間は熱狂してゆく一方であり<sup>[16]</sup>、人間は神を大群となって取り囲み、神は少しも身動きが取れない。人間は、ありとあらゆる武器を手に、あたかも敵を睨むかのように、怒りに満ちた眼差しで神を見上げる。人間は「神を木っ端微塵に引き裂く」願望を抑えられない様子である。何とも当惑する事であるが、人間と神が、なぜそのような与（くみ）することの出来ない敵同士となったのであろうか。最も愛しい神と人間の間、何か遺恨があるのだろうか。神の業は人間にとって全く無益なのだろうか。神の業は人間に有害であらうか。神が人間の包囲を破り、第三の天に戻り、人間を再び地下牢に放り込むことを深く怖れつつ、人間は神を睨み続ける。人間は神を警戒してやきもきし、人間のもとにいる神に対して「機関銃」の銃口を向けて、ほふくしている。それはあたかも、神が少しでも身動きすると、人間は神の身体や着衣など、全てを残らず一掃するかのようである。神と人間の関係は、もはや修復不可能である。神は人間にとって理解不可能である一方、人間は故意に目を閉ざしてふざけまわり、わたしの存在を見ることを全く望まず、わたしの裁きに対して一切容赦しない。ゆえに、人間が予期していないときに、わたしは静かに漂うように去り、もはや誰が上で誰が下かということを人間と比較しなくなるであらう。人間はあらゆる「動物」のうち最も卑しく、わたしは人間に気をかけることを、もはや望まない。わたしが自分の恵み全体を、平穩に住む所へと全て取り戻して久しい。人間は極めて不従順であるのだから、何を理由として、わたしの貴い恵みをそれ以上享受するといふのか。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(10)」より

20. 神の働きは潤沢かつ豊富だが、人間の入りは極めて乏しい。人間と神の合同による「企て」のほぼ全てが神の働きであり、人間の入りの程度については、ほぼ見るべきところが無い。人間は極めて貧しく盲目であり、「古代の武器」を手にして今日の神に対する自らの力を測るほどである。こうした「古代の猿人ども」は、辛うじて直立歩行できるが、自分の「裸」のからだを全く恥じない。そうした者に神の働きを評価する資格が、どうしてあろうか。そうした四肢のある多くの猿人たちの眼は怒りに満ち、石で作った武器を手に、神と争い、この世がまだ見たことの無い猿人の競技、すなわち終わりの日における猿人と神の格闘を始めようとしており、それは全土に知られるであらう。こうした半ば直立歩行している古代の猿人の多くが、さらには、自己満足であふれている。そうした者は顔を覆う毛はもつれ、殺意に満ちて前肢を挙げる。彼らは完全には現代の人類まで進化していないので、直立するときと、這うときがあり、額は汗の

しずくで覆われ、露のようであり、やる気がありありと見て取れる。自分たちの仲間である原始の古代猿人が太くのろまな四肢の全てを用いて立ち、辛うじて攻撃をかわせるが反撃する力は無いのを見て、彼らは自己抑制するのが精一杯である。瞬く間に、何が起きたか悟る間もなく、リング上の「英雄」が四肢を空に向けて仰向けに地に倒れる。長年にわたり間違いでありながらも地面に立っていた四肢は、突然逆さまに投げ出され、猿人はもはや反抗する意欲をもたない。それ以後、最古の猿人は地上から一掃される。それは極めて「悲惨」である。この古代の猿人は、そうして突然の終焉を迎えた。なぜ素晴らしい人間の世界からそんなに急いで去る必要があったのであろうか。なぜ仲間と次の段階の戦略を話し合わなかったのであろうか。神との力比べの秘訣をあとに遺すことなくこの世に別れを告げるとは、何と哀れなことだろうか。それほどまで年老いた猿人が「古代文化と芸術」を子孫に伝えることなく、一言ささやくこともなく死んでこの世を去るとは、何と迂闊なことであらうか。近親者を傍に呼び集めて自らの愛を伝える暇も無く、石版に言葉を残さず、天日を見分けず、筆舌に尽くしがたい自らの苦難をひと言も述べることも無かった。息を引き取るにあたり、瀕死の自らの身体の近くに子孫を呼び寄せて、空に向かって永遠に伸びる木の枝のように硬くなった四肢を上向きに伸ばして目を閉じる前に「リングに上がって神に挑んではない」と告げなかった。これは悲劇の臨終を迎えたように見えるであらう……突然、リングの下からうなるような笑い声がして、半分だけ直立している猿人のひとりの気が変になっている。その者は、古い猿人より進化している鹿などの野性の動物を狩るための「石の棍棒」を手に、周到な計画を胸に秘め<sup>[17]</sup>、怒りに満ちてリングに飛び乗る。その者は何か手柄を立てたかのようなのである。石の棍棒の「威力」を用い、「三分間」何とか直立する。この第三の「脚」の「威力」は、何と強いことであらうか。その大柄で愚鈍で不器用な半直立猿人は、棍棒に支えられて三分間直立した。その尊敬すべき<sup>[18]</sup>老いた猿人が至って傲慢なものともである。確かに、その古代の石器は「評判どおり」である。柄も刃も鋒もあるが、刃に艶が無いことが唯一の欠点である。なんと嘆かわしいことか。その古代の「小さな英雄」を見ると、リングの上に立って、リングの下にいる者どもが無能で劣等な者であり、自分は勇敢な英雄であるかのように侮蔑するような目つきで見ている。その英雄は、リングの前に居る者どもを、心の中で密かに忌み嫌っている。「この国は問題に苛まれているのは私達各人のせいである。あなたがたは何故、逃げ出そうとするのか。この国が崩壊に瀕していると知りつつ、血みどろの戦いには参加しないというのか。この国は崩壊に瀕している。あなたがたが、自分の楽しみは後回しにして、まず最初に憂慮しないのは何故か。あなたがたは、よくもこの国が崩壊し、国民が退廃してゆくのを

傍観していることが出来るものだ。あなたがたは、国が征服されるという恥辱を受けることを望んでいるのか。あなたがたは全くの役立たずだ。」その者がこう考えると、リングの前で暴動が起こり、その者の眼は一層激昂し、今にも火を放ちそう<sup>[19]</sup>である。その者は、戦いの前に神が失敗するのを待ち兼ねており、神を死に追いやって大いに人々の心を喜ばせたくてたまらない。その者は、石器が名声を得るに値するかもしれないが、神に対抗することは決して出来ないことを知らない。その者が自分を防御し、倒れて再び立ち上がる間も無く、その者は両眼の視力を失って前後によろめく。その者は、自分の祖先の上に倒れて二度と立ち上がらない。その者は古代の猿人にしがみつき、叫ばなくなり、反抗する意志を全て失って自らが劣っていることを認める。これら二匹の哀れな猿人は、どちらもリングの前で死ぬ。人類の祖先は、今まで生き長らえたのに、義の太陽が昇る日に何も知らずに死んだというのは、何と不幸なことであろうか。それほど大いなる恵みを逃すとは、猿人たちは数千年にわたり待ち続けてきたのに、祝福を受けた日にそれを陰府へ持ち込み魔王とともに「享受する」ことになるとは、何と愚かであろうか。その祝福は生きている者の世界に残し、自分の息子や娘と共に享受するために取っておいてはどうであろうか。まさに自業自得である。多少の地位や名声、そして虚栄のために、殺されるという不幸を受け、慌てて地獄の門を真っ先に開き、その息子となろうとすとは、なんという無駄であろうか。そうした代償は全くの無駄である。それほど「国民的精神に満ち」ている年老いた祖先が、そこまで「自分に厳しく、他人に寛容」となって、自らを地獄に閉じ込め、無能で劣った者を地獄の外に閉め出すとは、何と哀れな事だろうか。このような「民衆の代表者」がどこにいるであろうか。「子孫の幸福」と「未来世代の平和な生活」のため、神の介入を許さず、それゆえ自らの命に全く配慮しない。無制限に自らを「国の大義」に捧げ、黙って陰府へ入る。そのような愛国心が何処にあるというのか。神と戦い、死も流血も怖れず、ましてや明日を憂うことなど無い。そうした者は戦地へ向かうのみである。彼らが自らの「献身の精神」と引き換えに得るのは、永遠の後悔と、地獄で永遠に燃え続ける炎に焼き尽くされることだけであるというのは、何と哀れなことであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(10)」より

21. わたしは多くの日と夜を人間と共に過ごし、人間と共にこの世に住んで来たが、人間に対する要求を追加したことは一切無い。わたしはただ前進するよう人間を導くだけであり、人間を導く以外には何もせず、人間の運命のために采配の働きを間断なく行い続ける。これまでに誰が天の父の旨を理解したことがあるだろうか。誰が天と地を

めぐって来たというのか。わたしは人間の「晩年」を人間と共に過ごすことを、もはや望まない。なぜなら、人間はひどく老いぼれて、何も理解せず、わたしが催した祝宴で他のすべてから離れて暴食する事しか知らず、それ以外のことを考え無いからである。人間は極度にけちであり、人間の騒がしさや陰鬱さ、危険は大きすぎるので、わたしは終わりの日に、勝利の貴い果実を分かち合うことを望まない。人間には、人間自らが作り出した豊かな祝福を享受させるがよい。なぜなら、人間はわたしを歓迎しないからである。何故わたしが人間を無理矢理微笑ませる必要があるというのか。世界各地で温もりが欠如し、世界各地の風景には春の兆しが全くない。人間は水生生物のように全く温もりが無く、死体のようであり、血管を通う血でさえも氷のように凍てついていて、心を冷やすからである。温もりは、どこにあるのか。人間は故無く神を十字架に架け、その後全く懸念を感じる事が無かった。後悔する者は居らず、こうした残忍な暴君は、依然として人の子を再び「生け捕りにする」<sup>[20]</sup>こと、そして銃殺刑執行隊の前に立たせ、自らの心の憎しみに終止符を打とうと謀っている。わたしがこのような危険な地に居残ることが、何に役立つというのか。わたしが居残るとすれば、わたしが人間にもたらすのは、対立と暴力、そして終わりなき問題だけであろう。なぜなら、わたしが平和をもたらしたことは無く、わたしがもたらしたのは戦乱だけだからである。人間の終わりの日は戦乱に満ち、人間の終着点は暴力と対立の中で崩れ去るに違い無い。わたしは戦乱の「喜び」を「分かち合う」ことを望まず、人間の流血や犠牲に立ち会わない。なぜなら、人間による拒絶のためわたしは「落胆」させられ、わたしは人間の戦いを見守る気になら無いからである。人間は思う存分に戦えばよい。わたしは休み、眠ることを望む。人間の終わりの日は、悪魔に立ち会わせるのがよい。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(10)」より

22. あなたがたは追求において、個人的な観念や希望や未来を多くもちすぎる。現在の働きは、あなたがたの地位に対する欲望やとりとめもない欲望を取り扱うためのものである。望み、地位に対する欲望<sup>[6]</sup>、そして観念はどれも典型的なサタンの性質の表れである。これらが人々の心に存在する理由は、サタンの毒が常に人間の考えを腐敗させており、サタンの誘惑を人間が決して払いのけることができないことにある。このような人々は罪のただ中で生活しているが、それを罪と考えず、「私達は神を信じているので、神は私達に祝福を与え、万事私達のために適切に手配してくださるに違いない。私達は神を信じているので、他人よりも優れているに違いない。私達は他の誰よりも地位と将来性が高いはずである。私達は神を信じているので、神は私達に無限の祝福を

与えるであろう。そうでなければ、神への信仰とは呼ばれないであろう」と考える。人間の心は、長年にわたり人間が生存のために依存してきた思想により腐敗させられ、その結果人間は不誠実で臆病で卑劣になった。人間は意志の力や決意が欠落しているだけでなく、貪欲で傲慢で強情になった。人間には、克己的決意が完全に欠乏している上、闇の影響による呪縛を払いのける少しの勇気もない。人間の考えと生活は腐敗し、神への信仰に対する人間の考え方は依然として耐えがたいほどに醜悪であり、人間が自分の神への信仰に対する考え方について語る時、それはただ聞くに堪えない。人間は皆、臆病で無能で卑劣であるが、また傷付きやすい。人間は闇の勢力に対して嫌悪感を覚え、光と真理への愛を感じず、それらを排除しようと最大の努力をする。あなたがたの現在における考え方や見方は、このようなものではないだろうか。「私は神を信じているのだから、ひたすら神の祝福を浴び、地位は決して下がらず、不信心者の地位よりも高いと保証されているはずだ」このような見方が、あなたがたの心の中に抱かれているのは、一、二年間のことではなく、もう長年にわたってである。あなたがたの取引的な考え方はあまりに発達している。あなたがたは現在の段階まで達したが、依然として地位を捨て去れないままであり、いつか地位がなくなり、名前が汚されるのではないかという強い恐怖を感じて、地位について調べ、観察しようと日々奮闘している。人間は、安楽に対する欲望を決して捨て去らなかった。

『言葉は肉において現れる』の「なぜ進んで引き立て役になろうとしないのか」より

23. 人々の神への信仰とは、神が自分たちに適切な終着点と、日の下にあるあらゆる恵みを与え、神を彼らの召使にし、神に自分たちとの平和で友好的な関係を維持させ、両者の間に決して対立がないことを求めることである。すなわち、ちょうど聖書に「わたしはあなたたちのすべての祈りに耳をかたむける。」と記されているように、神への信仰において、彼らは神に彼らのすべての要求を満たすことを約束し、祈り求めるものは何でも彼らに与えることを要求する。彼らは神に誰も裁かないように、誰も取り扱わないよう要求する。彼らにとって神はいつも優しい救い主イエスであり、いつでもどこでも人々と良い関係を保つ方であるからだ。彼らの信仰とはこうである。彼らはいつも臆面もなく神にものを求め、彼らが反抗的であろうと従順であろうと、神はなんでも見境なく彼らに授ける。人々は絶えず「負債」の返済を神から要求し、神はまったく抵抗せずに「その負債を返済」しなければならない。神が彼らから何かを得ようと得まいと、神は二倍「返済」しなければならない。神はただ彼らのなすがままである。神は思いのままに人々を指揮することはできない。ましてや彼らの許可なしに、神の望むままに

長年隠されてきた神の英知や義の性質を人々に現すことはできない。彼らはただ自分の罪を神に告白し、神はただそれを赦免するだけである。神は彼らの罪にうんざりすることもできずに、こういうことが永久に続くのである。聖書に、神は人に仕えられるためではなく、人に仕えるために来たとか、神は人の召使になるために来たなどと記されているのをいいことに、彼らはただ神をこき使い、神はただそれに従うのである。あなたたちはいつもこのように信じてきたのではないか。神から何も得られないとあなたたちは逃げたがる。そして何か理解できないことがあると、ひどく憤慨しあらゆる種類の悪態を浴びせかけさえする。あなたたちは神自身が英知と奇跡を充分に表現することをどうしても許そうとせず、その代わりにただ一時的な気楽さと心地よさを楽しむことを望む。今に至るまで、神への信仰におけるあなたたちの態度は相変わらずの古い見解である。神があなたたちにほんの少しでも威厳を見せれば、あなたたちは不愉快になる。あなたたちはいま自分の背丈がどのぐらいなのか正確にわかっているのだろうか。あなたたちの古い見解は実の所変化していないのに、自分たちは皆神に忠実だなどと考えるいけない。何も自分に降りかからない時は、あなたはすべてが順調に進んでいると考え、神を絶頂まで愛する。しかし、ちょっと些細なことが起こると黄泉の国にまで落ちる。これではあなたが神に忠実だと言えるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである」より

24. わたしの行いは海岸の砂の粒子より数が多く、わたしの知恵はソロモンの全ての子孫の知恵より偉大であるのに、人はわたしのことをただの医師や人の名もない教師としてしか思っていない。何人の人たちが、わたしに癒やされたいためにわたしを信じるだろうか。何人の人たちが、わたしの力で彼らの体から汚れた霊を追いついて欲しいためにわたしを信じるだろうか。そして何人の人たちが、わたしから平安と喜びを受け取るためだけに、わたしを信じるだろうか。何人の人たちが、より多くの物質的富をわたしから要求するために、わたしを信じるだろうか。何人の人たちが、平和にこの人生を生き、またこれから来る世で安全で穏やかに過ごすためだけに、わたしを信じるだろうか。何人の人たちが地獄の苦しみを避け、天国の祝福を受け取るためだけにわたしを信じるだろうか。何人の人たちが一時的慰めのためだけにわたしを信じ、来世で何かを得ることなど求めずにいるだろうか。わたしが激しい怒りを人にもたらし、人が本来持っていたすべての喜びと平安を押収したとき、人は疑い深くなった。わたしが人に地獄の苦しみを与え、天国の祝福を取り戻したとき、人の恥辱は怒りに変わった。人がわたしに癒してくれるように頼んだとき、わたしは彼を気にかけることもせず嫌悪を感じた



。人は代わりに汚れた医術や魔術という方法を求めてわたしから離れた。人がわたしに要求したもののすべてを取り除いたとき、人は形跡も残さず消えた。だから、わたしがあまりにも多くの恵みを与え、わたしから得るものがあまりにも多くあるので、人はわたしに信仰を持っていると言おう。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは信仰について何を知っているか」より

25. 現在、あなたがたが理解するようになったことは、完全にされなかった歴史上のどんな人間よりも高度である。それが試練に関する認識であれ、神への信仰に関する認識であれ、いずれにせよそれは、神を信じるどんな者の認識よりも高度である。あなたがたが理解しているのは、環境の試練を受ける前に知るようになったことであるが、あなたがたの実際の背丈は、それらのこととは全く相容れないものである。あなたがたが知っていることは、あなたがたが実践することよりも高度である。あなたがたは、神を信じる人々は神を愛すべきであり、祝福のためでなく、神の旨を満たすためだけに努力すべきであると言うが、あなたがたの生活の中に現れているものは、それとは程遠く、ひどく汚れている。ほとんどの人々が、平穏やその他の利益のために、神を信じている。あなたは、自分の利益にならなければ、神を信じず、神の恵みを受けられないのであれば不機嫌になる。これがどうしてあなたのほんとうの背丈でありえようか。家族の中で避けられない出来事（子どもが病気になる、夫が入院する、農作物が不作に見舞われる、家族の者たちからの迫害等）については、あなたは、日常生活で度々起こるこうした出来事を乗り越えることすら出来ない。このような事が起きると、あなたは当惑してどうして良いか分からなくなる――そして殆どの場合、神について不満の言葉をこぼす。神の言葉に騙された。神の業が自分を混乱させたのだと、不平を言う。あなたがたは、そのような思いを抱いたことはないだろうか。このようなことが自分に起こるのは希であると思っているだろうか。あなたがたは、こうした出来事のただ中で生活し日々過ごしている。あなたがたは、神への信仰を成功させることや、神の旨を満たす方法については、少しも考えることが無い。あなたがたの真の背丈は小さすぎる。それは、ひよこよりも小さい。自分の夫の事業で損失が出ると神について不平を言い、神の守りが無い状況に遭遇すると、やはり神について不平を言い、ひよこが一羽死んだり、囲いの中の年老いた牛が病を煩った時でさえ、不平を言い、自分の息子が家族を設ける時が来たが、十分な資金が無い場合にも、不平を言う。また、教会の働き人があなたの家で数回食事したが、教会から払戻しが無い場合や、誰も自分に野菜を送って来ない時も、不平を言う。あなたの腹は不満ではち切れそうだ。また、そのために時折集会へ行かなか

ったり、神の言葉を食すことも飲むこともなく、長期間にわたって否定的になるのが目に見えている。あなたに今日起こる出来事は一つとしてあなたの先行きや運命と関係が無い。これらの事は、あなたが神を信じていなかった時も起こったものだが、今日はそれらの責任を神に負わせ、神が自分を排除したと主張する。あなたの神への信仰はどうなったのか。あなたは本当に自らのいのちを神に捧げたのか。仮に、あなたがたがヨブと同様の試練を受けたとしたら、今日、神に付き従うあなたがたのうち、揺るぎなく立つことが出来る者は一人もおらず、あなたがたはみな倒れるであろう。また、あなたがたとヨブの間にはまったく雲泥の差がある。今日あなたがたの資産の半分が差し押さえられたならば、あなたがたは神の存在さえ否定するであろう。自分の息子や娘が自分から奪い去られたならば、不当だと叫びながら町中を走り回るであろう。あなたが生活に行き詰まったならば、神に文句をぶつけようとするであろう。わたしが最初あなたに対して多くの言葉を話して脅したのは何故かと尋ねようとするであろう。このようなとき、あなたがたはどんなことでもするであろう。このことは、あなたがたがまだ真の洞察も真の霊的背丈も得ていないことを示している。したがって、あなたがたの中の試練は大きすぎる。なぜなら、あなたがたが理解している事は多過ぎるぐらいだが、ほんとうに知っている事は、自分が認識している事の、数千分の一にも満たないからである。単に理解や知識を得ることに留まっていたはならない。どの程度を実行に移すことが出来るか、自分の労苦の汗がどれほど聖霊による啓きと照らしに結実しているか、どれだけ多くの実践で自分の決意を現実化したのかを、あなたがたは見るがよい。あなたは、自分の背丈と実践を真剣に考える必要がある。あなたの神への信仰においては、誰かのために単に上辺だけの身振りをしようとしてはならない——あなたが獲得できるか如何は、あなた自身の追求により決まるのである。

『言葉は肉において現れる』の「実践(3)」より

26. あなたは、神への自分の信仰が、どんな困難や患難も、あるいは僅かの苦難も招かないことを望む。あなたは、常にそれらの価値の無いものを追い求め、いのちの価値を全く認めず、自分の途方もない考えを真理よりも優先している。あなたには何の価値も無い。あなたは豚のように生きている——あなたと、豚と犬の間には、何か相違があるだろうか。真理を追求せずに肉を愛する者たちは皆、獣ではなからうか。霊のない死んだ者たちは皆、生ける屍ではなからうか。あなた方の間で語られた言葉は、一体いくつあるであろうか。あなた方の間で行われた働きは、ほんの少しだろうか。わたしは、あなた方の間で、どれくらい与えたであろうか。それなのに、あなたがそれを得てい

ないのは何故だろうか。あなたが不平を言うべきことは、何かあるだろうか。あなたが肉を愛しすぎているので、何も得られなかったということではなかろうか。また、その原因は、あなたの考えが突飛すぎるからではなかろうか。また、それはあなたが愚か過ぎるからではないか。あなたは、これらの祝福を得られない場合、自分が救われなかったことを、神のせいにするのか。あなたが追い求めているのは、神を信じた後に平和を得ることができるようになること——つまり、自分の子が病気にかからないこと、自分の夫が良い職に就くこと、自分の息子が良い妻を見つけること、自分の娘がしっかりした夫を見つけること、自分の牛や馬がうまく土地を耕すこと、一年間、作物に適した気候となることなどである。これが、あなたの求めることである。あなたの追求は、ただ快適に暮らすためであり、自分の家族に事故が起こらないこと、風が自分に当たらないこと、顔に砂がかからないこと、家族の作物が洪水に遭わないこと、自分が災害を受けないこと、神に抱かれて生きること、居心地の良い住処で生活することである。常に肉を求める、あなたのような臆病者には、心や霊があるだろうか。あなたは獣ではなかろうか。わたしは何も見返りを求めずに、真理の道を与えるが、あなたは追い求めない。あなたは神を信じる者たちのひとりであろうか。わたしは真の人生をあなたに授けるが、あなたは追い求めない。あなたは豚や犬と変わらないのではないか。豚は人生も清められることも追求せず、人生とは何かを理解しない。毎日、食べただけ食べた後、ただ寝るだけである。わたしは、あなたに真理の道を与えたが、あなたは未だにそれを得ていない。あなたは手ぶらである。あなたは、このような生活、つまり豚の生活続けることを望んでいるのであろうか。このような人々が生きていることの意味は何であろうか。あなたの生活は軽蔑すべきものであり、恥ずべきものであり、あなたはけがれと放蕩の中で暮らし、何も目指す目標がない。あなたの人生は、最も下劣ではなかろうか。あなたは、厚かましくも神を見上げるのであろうか。あなたは、このような経験が続けるならば、得る物は何もないのではないか。真理の道はあなたに与えられているが、最終的にあなたがそれを得られるかどうかは、あなた個人の追求によって決まる。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

27. 終着点に関する話になると必ず、あなたがたはその話を特に真剣に受け止める。あなたがたは全員この話題について特に敏感である。好ましい終着点に辿り着くために、神にひれ伏すのを切望する者もいる。あなたがたが切望する気持ちはわたしにも理解でき、それを言い表すことは不要である。あなたがたは自分の肉が災いに陥ることは絶対に望まず、それにも増して長く続く罰を将来受けることを避けたいと考えている。

もっと自由に快適に暮らすことを望むのみである。ゆえに、終着点の話になると、あなたがたは殊更心配になり、十分注意しないと神の怒りを買ひ、然るべき報いを受けるかもしれないと大いに恐れる。あなたがたは自分の終着点のためであれば、躊躇なく妥協してきた。また、あなたがたのうちかつて不従順で軽薄であった多くの者が、突然極めて優しく素直になり、その素直さは寒気がする程である。いずれにせよ、あなたがたは皆素直な心を備えており、終始わたしに対し、非難であれ虚偽であれ、信心であれ、隠しだて無く心を開いてきた。全体的に、あなたがたはわたしに対しそうした心の奥にある重要な物事を極めて腹藏なく「告白」してきた。無論、わたしもそうした物事を回避したことは無い。なぜなら、それはわたしにとって普通の事となったからである。あなたがたは心労の末に神の承認を得るよりも、むしろ終着点のために火の海に飛び込むほうが良いと考えているであろう。わたしがあなたがたに対して独断的すぎるということではなく、あなたがたの信心はわたしの行うあらゆることに直面するには特に乏しいということである。わたしの言う事を理解できないかも知れないので、簡単に説明する。あなたがたが必要としているのは、真理といのちではなく、自分の行動原理でも無く、いわんやわたしが骨折って行う働きでは無い。あなたがたが必要としているのは、富や地位、家族、結婚など、すべて肉にあって持っている物事である。あなたがたはわたしの言葉や働きを完全に軽視しているので、その信仰をひとことで概括できるが、それは「半信半疑」である。あなたがたは自分が完全に専心している物事を得るためなら何も厭うことは無い。しかし、神への信仰に関する事のために全てを捨てることが無いことをわたしは知った。むしろ、あなたがたは単に比較的忠誠で真剣なだけである。最大限に真剣な心の無い者は神への信仰における失敗であると言うのはこのためである。よく考えなさい。あなたがたのうちに失敗が多くあるであろうか。

神への信仰における成功は人々の独自の行動により達成されるということを知らなければならない。人々が成功せずに失敗する場合、それもまた本人の行動が原因であり、他の要素の影響が原因ではない。神を信じるよりも困難で苦勞を伴う事柄を成し遂げるためなら、あなたがたは何でもするであろうし、その事柄を極めて真剣に扱うであろうと思う。過ちをおかすことさえも嫌うであろう。これらはあなたがた全員が人生に注ぎ込んできた絶え間ない努力である。あなたがたは自分の家族を欺くことが無いであろう状況において、肉にあるわたしを欺くことすら出来る。これがあなたがたの一貫した振る舞いであり、人生に適用する原則である。あなたがたはわたしを欺くため、また美しく幸福な終着点を得るために、依然として偽りの姿を創っているのではないのか。あな

たがたの信心と真剣さは一時的なものでしかないことに気付いている。あなたがたの志とあなたがたが支払う代償は今のためだけであり、そのときのためではないのではないのか。あなたがたは美しい終着点を確保するために、最後に一つの努力をするだけでいたいと思っている。あなたがたの目的は取り引きをすることのみであり、真理に対する負債を抱えないようにすることではなく、とりわけわたしが支払った代償を償還するためではない。つまり、自分の聡明さを用いる用意があるだけで、戦う覚悟はない。それがあなたがたの心からの願いではなからうか。あなたがたは自分自身を隠してはならず、またそれ以上に、自分の終着点のために食事や睡眠が出来なくなるほど頭脳を苦しめてはならない。最後にはあなたがたの結末は既に定められているというのが本当ではないのか。

『言葉は肉において現れる』の「終着点について」より

28. 毎日、すべての人の行いや思いは神に注目されており、それらは同時に、彼ら自身の明日への準備となる。これはすべての生ける者が歩かなければならない道であり、わたしがすべての者に予め定めた道である。誰もこれを逃れることはできないし、誰にも例外はない。わたしは数えきれないほどの言葉を語り、さらには、測り知れないほどの量の働きを行ってきた。わたしは一人ひとりが、その生来の本性、およびそれがどのように進化するかに応じて、その人が為すべき全てのことを自然に遂行している様子を毎日見ている。知らないうちに、多くの人たちはすでに、あらゆる種類の人たちが露わにされるためにわたしが定めた「正しい軌道」に乗った。わたしはすでにあらゆる種類の人間を違った環境に置いており、その場所で、一人一人が生まれ持った特性を表現し続けている。彼らを縛る者は誰もいないし、彼らを誘惑する者もない。彼らはすべてにおいて自由であり、彼らが表現するものは自然に出てくる。彼らを抑制するものが唯一あるが、それはわたしの言葉である。だからわたしの言葉をしぶしぶ読む者も幾人かいるが、彼らの最後が死で終わらないようにそうしているだけであり、決してわたしの言葉を実践しているわけではない。その一方、一部の人たちは、彼らを導き彼らに施すわたしの言葉がなくては日々耐え難いことに気づき、自然にわたしの言葉をいつも手放さないでいる。時が経つにつれて、彼らはやっと人生の奥義、人類の終着点、人間であることの価値を発見する。人類はわたしの言葉の前では、このような有様でしかない。そしてわたしは、ただ事を自然の成り行きに任せる。わたしは、人がわたしの言葉を彼らの生存の基盤として生きるように強制するようなことは一切しない。だから、良心や自分の存在価値のない人たちは、静かに事の成り行きを観察し、大胆にわたしの言葉

を投げ捨て、自分の好きなようにする。彼らは真理や、わたしから出るすべてのものにうんざりする。さらに彼らはわたしの家にいることにもうんざりする。このような人たちは、たとえ奉仕をしていても、彼らの終着点のために、またわたしの懲罰を逃れるために、わたしの家に一時的に留まる。しかし、彼らの意図は決して変わることはないし、彼らの行動も変わることはない。このことは彼らの、祝福への願望を助長し、また、ただ一度で神の国に入り、そこに永久に留まることができ、さらに永久の天の国に入る欲求までも助長する。わたしの日がいつかすぐに来るのを彼らが待ち焦がれれば焦がれるほど、ますます彼らは、真理が彼らの道の障害物となり、躓きの石となっていると感じる。彼らは、真理を追求することなく、裁きも刑罰も受け入れることなく、とりわけ、わたしの家に従属的に留まり、わたしの命令どおりに従うことなどなく、ただ天の国の祝福を永久に楽しむために、神の国に足を踏み入れるのを待ち切れずにいる。これらの人々がわたしの家に入るのは、真理を求める心を満たすためでも、わたしの経営の下で共に働くためでもない。彼らの目的は、ただ次の時代に滅ぼされない人たちの一人になることだけである。よって、彼らの心は、真理とは何か、あるいは真理をどのように受け入れるかなど全く知っていない。これが、そのような人たちが真理を実践したことがまったくなく、自らがどれだけ極端なほどひどく墮落しているかを悟ることがないにもかかわらず、最後まで「しもべ」としてわたしの家に留まった理由である。彼らは「忍耐強く」わたしの日が来るのを待ち、わたしの働きの仕方に翻弄されても疲れを知らない。彼らがどんなに努力しても、彼らがどんな代価を支払っても、彼らが真理のために苦しみ、わたしのために犠牲を払ったことなど誰ひとり認めないだろう。心の中では彼らは、わたしによって古い時代が終わる日を見るのを待ちきれず、さらに、彼らはわたしの力と権威がいかに偉大であるかを知りたいと切に願っている。彼らが決して急いで行おうとしなかったこと、それは、自らを変え、真理を追求することである。彼らは、わたしがうんざりしているものを愛し、わたしが愛しているものにうんざりしている。彼らはわたしが憎むものを慕い、同時に、わたしの忌み嫌うものを失うことを恐れている。彼らはこの邪惡な世に生きているが、それを一度も憎んだことはなく、この世がわたしによって滅ぼされるのを心底恐れている。彼らが持っている目的は矛盾している。彼らはわたしが忌み嫌うこの世を喜んでいるが、また同時に、わたしがこの世をまもなく滅ぼすことを切望している。こうして、彼らは、真理の道から外れてしまう前に、破滅の災難を免れ、次の時代の主人へと変えられるというのである。これは彼らが真理を愛さず、わたしから出る全てのものにうんざりしているからである。おそらく、彼らは祝福を失わないように、しばらくは「従順なる人たち」になるだろうが、彼らの「

祝福切望意識」や滅びと燃える火の池に入ることへの恐怖が覆い隠されることは決してないだろう。わたしの日が近づくにつれ、彼らの願望は着実に強くなる。そして災いが大きければ大きいほど、わたしを喜ばせるにはどうしたらよいのか、彼らが長い間切望してきた祝福を失うのを避けるためには何をどうしたらよいのかが分からなくなり、彼らはますます無力になる。一旦わたしの手がその働きを始めると、このような人たちは先駆者として仕えるために熱心に行動する。彼らはわたしが彼らに気づかないことを深く恐れ、軍隊の前線に突入することだけを考える。彼らは自分たちの行為や行動が全く真理に沿っておらず、わたしの計画をただ妨害し、干渉するだけであるということを知らないで、自分が正しいと思うことを言ったり行ったりする。彼らは大いに努力するかもしれないし、困難に耐えようとする意志や意図は真実かもしれないが、彼らがすることすべてがわたしとは関係がない。なぜなら、わたしは彼らの行いが良い心がけから出ているのを一度も見たことはないし、ましてや彼らがわたしの祭壇に何か置くのを見たことは一度もないからだ。これが、彼らが長年わたしの前でしてきた行いである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがたは自分の行いを考慮すべきである」より

29. 神に付き従う者の多くは、ただ、どうして祝福を受けるかや、どうして災いを避けるかということだけに気をもんでいる。神の働きと神の経営と聞くと、彼らは口を閉ざし、興味を失う。彼らはそうした退屈な問題について知っていても、いのちに成長を与えるわけでも、これといった役に立つものでもないと思い込んでいるため、神の経営についての言葉を聞いてはいても、いい加減に扱うのである。そして、受け入れるべき大切なことだとは思わず、まして、自分たちのいのちの一部として受け取ることもない。そうした人々は、神に付き従うことにおいて、ただ一つの間、つまり祝福を受けることしかない。そこで、その目的に関わりあること以外に関心を向けることは怠惰すぎてしないのである。彼らにとって、神を信じるということは、祝福を受けることが最も正当な目的であって、それが信仰の価値にほかならない。その目的を果たすことができないことには、全く心を動かされない。今日神を信じている人々のほとんどは、そういう状態である。その人たちの目的や動機は、もっともらしく見える。神を信じると同時に、神のために費やし、神に身を捧げ、本分も果たすからである。青春を犠牲にし、家族や職を捨て、故郷から遠く離れて何年も懸命に働くことさえある。最終的な目的のために関心のありどころを変え、人生観を変え、求めるものの方向を変えさせる。しかし、神を信仰する目的を変えることはできない。彼らは自分なりの理想を管理するために駆け回る。どんなに道が遠くとも、途中でどんな困難や障害に出遭おうと、死を

も恐れず目標達成に努力する。どんな力がそのような献身を続けさせるのだろうか。彼らの良心だろうか。偉大で高潔な人格だろうか。最後の最後まで悪の力と戦おうとする決意だろうか。報いを求めずに神を証しする信仰心だろうか。神の心を実現させるためにすべてを捨てようとする忠誠心だろうか。それとも、途方もない個人的な欲求を一貫して放棄する奉仕の精神だろうか。神の経営の働きを知らない人がそれほど多くを捧げるといえるのは、ただ驚くべき奇跡である。ここでは、そうした人がどれほど多くを捧げているかは語らずにおこう。しかしながら、彼らの行動は分析するだけの価値が十分にある。彼らと密接に関わりのある恩恵とは別に、神を理解しない人々がそれほどまでに神に捧げる理由が他に何かあるだろうか。このことの中に、これまで認識されていなかった問題を発見する。それは、人間の神との関係は単にむき出しの利己心によるものであるということである。これは恵みの与え手と受け手との関係である。簡単に言うと、雇われ人と雇い主の関係のようなものである。雇われ人は雇い主から報酬をもらうためにだけ働く。こうした関係に愛情はない。ただの取引があるだけである。愛し愛される関係はなく、施しとあわれみとがあるだけである。理解はなく、抑圧された憤りと欺きだけがある。親しみはなく、越えられない溝があるだけである。物事がこういう状態に至ったとき、誰がこの傾向を元に戻せるだろうか。この関係がいかに絶望的なものになっているかを、どれほどの人がほんとうに理解できるだろうか。祝福を受ける喜びの中に浸っているとき、神とのそうした関係が、ばつの悪い、見苦しいものであるとは誰も想像できないはずである。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

30. 多くの人は、自分がいずれ辿りつく終着点のため、あるいは一時的に楽しみにあずかるために神を信じている。神による取り扱いを経験したことのない者にとって、神を信じることは、天国に行くためであり、また見返りを得るためなのであって、完全にされるためでも、被造物としての本分を尽くすためでもない。つまり、ほとんどの人は、その責任を果たしたり本分を完了したりするために神を信じているのではないのである。意味ある人生を送るために神を信じている人はほんのわずかで、「人は生きる以上、神を愛すべきである。なぜなら、そうすることがごく当然で正しいことであり、またそれが人の天職である」と信じる人もめったにない。このように、人はそれぞれ追い求める目標が違うが、その追求の目的と裏に在る動機はどれも似通っており、しかも、それらの人々は崇拜の対象が大体同じなのである。過去数千年に渡り、多くの信徒が死に、そして多くの信徒が死んで甦った。神を追い求めているのは一人二人というも



のではなく、千人二千人でさえ足りないが、そのような人々のほとんどは、個人の前途や未来の輝かしい希望のために神を求めているのであり、キリストに身を捧げている者はごく少数である。熱心な信徒でさえ、そのほとんどが自らの罠に陥って死に至っており、成功を収めた者の数はさらにほんのわずかである。そして、今日に至るまで、人が失敗してきた原因、あるいは成功できた秘訣は彼らに知られていない。キリストを熱心に追い求める人たちでさえ、未だに突然の識見を得たわけでもなく、これらの奥義の真相を突き止めたわけでもない。彼らはただ本当に知らないのである。彼らは、涙ぐましい努力をして求めるが、その歩む道は、成功へのそれではなく、既に先駆者が失敗した道なのである。そう考えると、どのように求めたにせよ、それは闇へ向かう道を歩いているということではないだろうか。結局彼らが得るのは苦い果実だけではないのか。過去に成功した者をまねる人が結果的に幸運を得るのかそれとも不運に見舞われるのかということすら予想困難であるのに、過去に失敗してきた人の跡をたどる人の勝算がどれほどあるだろう。失敗する可能性は更に大きいのではないか。彼らの歩む道に何の価値があるというのか。時間の無駄ではないのか。人がその追求に成功しても失敗しても、要するにいずれの結果でもその原因があるのだ。そして成功するか失敗するか、それは思うままに自由に追い求めることでは決まらないのである。

『言葉は肉において現れる』の「成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている」より

31. 大抵の人の神への信仰の実質は、宗教的な信仰である。彼らは神を愛することができず、ロボットのように神に付き従うことしかできない。心から神を求め、慕い求めることができないのだ。黙って神に付き従っているに過ぎない。多くの人は神を信じているが、神を愛している者はほとんどいない。人々が神を「畏れる」のは、災難を恐れているから、あるいは、神が偉大な存在だから「崇めて」いる一しかし、その畏れや尊崇には愛も、心からの思慕もない。人々は信仰体験において真理のごく小さな部分、あるいは、些細な奥義を求めることでしかない。大抵の人は単に従うだけで、混乱の中ではとにかく恵みさえ受け取れば良いという姿勢でいる。そうした人は真理を求めない。また、神の祝福を受けるために、誠に神に従おうとはしない。人々の神への信仰生活は無意味だ。無価値で、人々はただ自身の利益と目的だけ追求する。神を愛するために神を信じているのではなく、祝福を受けるために信じているのだ。多くの人は好きなように振る舞い、心の赴くままに行動し、決して神のためも、自分のしていることが神の心に適うかどうかとも考えない。そうした人は、神を愛することができないのは言うまでもなく、真の信仰を持つことさえ出来ない。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる」より

32. 人類の神への信仰の最も悲しい点は、神の働きの只中に人間が自分なりの経営を行い、神の経営そのものには無関心なことである。人間の最大の失敗は、神に服従し神を礼拝することを求めると同時に、人間は自分なりの理想の終着点を打ち立て、どうしたら最大の祝福を得て最高の終着点に行けるかを計算しているところにある。たとえ自分がいかに憐れむべき、憎しみに満ちた哀れな存在かを理解したとしても、自分の理想や希望を簡単に捨て去ることのできる人がどれだけいるだろうか。また、誰が途中で足を止め、自分の事だけを考えるのをやめられるだろうか。神と密接に協力して、その経営を完成する者を神は必要としている。神に服従するために、神の経営の働きに身も心も捧げる人を神は必要としている。神は毎日手を伸ばして神に物乞いする者は必要ではない。まして、わずかばかりを差し出して、その報酬を受けようと待っているような者は、無用である。わずかばかり貢献して自分の栄冠に満足するような者を神は嫌う。神の経営の働きを嫌がり、天国に行って祝福を得ることだけを話したがる心無い人々を神は憎む。それにもまして、神が人類を救うために行なう働きがもたらす機会を通じて利を得ようとする人々を、神は嫌う。そうした人は、神が経営の働きで成し遂げ、獲得しようとしていることにはまったく無関心だからである。そういう人々は、神の働きがもたらす機会を利用していかに祝福を受けるかということだけに気をもんでいる。彼らは、神の心には無関心で、自分たちの未来と運命のことだけに没頭している。神の経営の働きを嫌い、神がどのように人類を救うかとか、神の心についてはまるで関心がない人々は皆、神の経営（救い）の働きと無関係に好き勝手をしている。彼らの行動は、神によって記憶されず、認められず、まして神に喜ばれることなどない。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

33. 人々は人生を経験するにつれ、「自分は神のために家族も仕事も諦めた。神は私に何を与えてくれただろうか。神に与えられたものを全て計算して確かめてみなければ。最近何か祝福を与えられただろうか。私はずっと多くを捧げ、ずっと走り回り、多くの犠牲を払ってきた。神はその報いとして何か約束を下さっただろうか。神は私の良い行いを覚えているだろうか。私の最後はどうなるだろう。神から祝福を受けるだろうか。」誰もが常に、頻繁にそのようなことを心の中で計算し、彼らの動機付けであり、大志であり、取り引きがかかっている神に要求する。つまり、人間は心の中で常に神を試し、常に神の計画を考え出し、常に神に対して自分を弁護し、神からの言葉を絞り出し、自分の欲しいものを神が与えるかどうかを見ている。神を求める一方で、人は神を

神として扱っていない。人間は常に神と取り引きし、絶えず神に要求し、1与えられればその次は10与えられるように神に強要する。人間は神と取引しようと試みながら、同時に神と口論もし、中には試練が降りかかったり、ある種の状況に置かれたりすると、気弱になり、すべきことに対して受け身になって怠けるようになり、神に対して不満だらけになる人さえいる。神を信じ始めた時から、人間は神を豊穡の角やスイス・アーミーナイフのように豊かで万能であり、自分は神にとって最も価値ある者と見なすのである。あたかも神に祝福させて言葉を与えられることが当然の権利であり義務であり、神には自分を守り、労り、施す責任があるかのように。信仰を持つ大半の人々にとって「神を信じる」とは基本的にそのような理解でしかなく、それが神を信じることに對する最も深い考えなのである。人間の本質からその主観的な追求に至るまで、神に対する畏れなど全くない。人が神を信じる目的は神を礼拝することとは何ら関係ないのである。つまり、人は、神への信仰には神に対する畏れと神を礼拝することが必要だとは考えもしないし理解もしないのである。このような状況を考えれば、人間の実体がどのようなものかは明らかである。その本質とは何か。人間の心は邪悪で、不実で偽りに満ち、公正と義を愛するものでも善を愛するものでもなく、卑劣で貪欲なものである。人間は神に対して完全に心を閉ざしている。神に心を捧げてなどいない。神が人の心を本当に見たことなどなく、人間に礼拝されたことなどない。どれ程大きな犠牲を払っても、どれ程人間に対して働いても、どれ程人間に与えても、人間の目が開かれることはなく、全く無関心である。人間が神に心を明け渡したことなどなく、自分の心を考え、自分で決断するばかりである。これは、人間が神を畏れ悪を避ける道に従うことを望まず、神の主権と采配に従うことを望まず、神を神として礼拝することも望まないということの現れである。それが今日の人間の状態である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

34. 人々は、神は義なる神であり、人間が最後まで神に従う限り、神は最も正しいから、人間に対して不公平なことは決してしないと言う。人間が最後まで神に従ったならば、神は人間を見捨てられるであろうか。わたしは全ての人間に対して公平であり、全ての人間をわたしの義なる性質によって裁くが、人間に対する要求には適切な条件があるので、全ての人間は、わたしの要求することを達成しなければならない。わたしは、あなたの資格がどれほど幅広いのか、立派であるかということには気を留めず、あなたがわたしの道を歩んでいるか、真理を愛し渴望しているかどうかだけを考慮する。あなたに真理が欠けており、あなたがわたしの名を辱め、わたしの道に従って行動せず、注

意や配慮なく、ただついて来るだけであれば、わたしはその時あなたの悪のためにあなたを打ち倒し、罰するであろう。その時、あなたは何と言うであろうか。あなたは、神は義ではないと言えるであろうか。現在、あなたがわたしが語った言葉に従うならば、あなたはわたしが認めるような人である。あなたは、神に従う最中常に苦しみ、どんなに道が陰しくとも神に従い、良い時も悪い時も神とともにしてきたと言うが、あなたは神によって語られた言葉を実際に生きておらず、毎日神のために走り回ることだけを望み、有意義な人生を生きることについて考えたことがない。またあなたはこう言う。「とにかく私は神が義であると信じている。私は神のために苦しみ、神のために奔走し、自分を神に捧げ、承認を受けないにもかかわらず懸命に労してきたのだ。――神は必ず私のことを覚えているはずだ。」神は義であるというのはほんとうだが、その義はいかなる不純物にもけがされていない。その義には人間の意志が一切含まれておらず、肉や人間の取引にもけがされてはいない。反抗的で敵対し、神の道を遵守しない者は皆、罰され、誰も赦されず、誰も容赦されないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験――刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

35. 神の働きにはいつも新しい進展があるので、新しい働きもあり、当然すたれた古い働きも出てくる。この古い働きと新しい働きは矛盾するものではなく、補い合うもので、そのひとつひとつが過去から続いている。新しい働きがあるから、もちろん、古い働きは取り除かれなければならない。たとえば、長年実践されてきた慣習や習慣的に用いられてきた言い習わしは、人の長年の経験や教えと相まって、人に様々な観念を形成した。人によるそのような観念の形成によってさらに好都合なことに、古代から長年伝えられた理論の広まりに結びついて、神が自分の顔や本来の性質をまだ完全には人に現していないということである。人が神を信じる過程において、様々な観念の影響により、神に対する様々な観念的な認識は形成され、進歩し続けてきたと言える。結果として多くの宗教家が神の敵となった。人々の宗教的な観念が強ければ強いほど、彼らは神に反対し、神の敵となってしまう。神の働きはいつも新しく古いものは何ひとつなく、規則を形成することも一切なく、むしろ、継続的により大きい範囲で変化したり小さい範囲で変化したりして、新しくなっている。この働きは神自身の本来の性質の表れである。それはまた神の働きの本来の原則でもあり、神が自身の経営を成し遂げる手段の一つである。もし神がこの方法で働かないとしたら、人は変わらず、神を知ることでもできず、サタンが打ち負かされることもないだろう。よって、彼の働きのうちに一貫性のないように見える変化は継続して起きるが、それは実は周期的なものである。しかしなが

ら、人が神を信じる方法は全く異なり、古い、親しみのある教えや制度にしがみつき、より古いものを心地よく感じる。石のように頑固で愚かな人の考えが、どのようにして神の計り知れない多くの新しい働きと言葉を受け入れることができようか。人はいつも新しく古いことが一切ない神を嫌悪する。人が好むのは、白髪で不動のアンティーク化した古い神のみだ。つまり、神と人はそれぞれ好み異なるため、人は神の敵となった。このような不一致は、神が新しい働きをして六千年近く経った今日も多く存在する。故に、もう救済策もないのだ。それは人の頑なさが原因かもしれないし、神の行政命令が人間には不可侵であるが故かもしれない。だが神自身はまた完成されていない経営の働きを隣に誰もいないかのように進め、これらの宗教家たちは未だに、古くさい本や書物にすがっている。これらの不一致により、神と人とは敵対し、和解不可能にさえなっているが、神はそのような不一致は存在しないかのように、目を留めることはない。しかし、人は自分の信念にしがみつき、それらを手放すことはない。それでもひとつははっきりとしていることは、人が自分自身の姿勢を変えることがなくても、神の足はいつも動いており、神はいつも状況によって自分の姿勢を変え、最終的に戦わずして打ち負かされるのは人間である。一方、神は敗北した全ての敵にとっての最大の敵であり、打ち負かされた人々およびまだ打ち負かされていない人々の勝者でもある。誰が神と競って勝利できるのか。人の観念の多くは神の働きが発端となるため、神から来るように思える。しかし、だからと言って神は人を赦すことはしないし、神の働きから外れた「神のため」の多くの製品を次々製造する人を褒めそやすことももちろんしない。かえって、彼は人の観念や古くて敬虔な信仰にとっても嫌気がさしていて、これらの観念が生まれた日さえも無視する。人の観念は人により広まり、それらの源は人の考えや心であり、神からのものではなく、サタンによるものであるため、彼はこれらの観念を自分の働きによるものだとは全く認めない。神の意図は、自身の働きを、古いものや死んだものではなく、常に新しく生き生きとしたものとし、人の拠りどころとなるものが時代や期間に合わせて変化し、永遠に続くものであったり不変のものであったりしないことである。彼は人を生かし新たにさせる神であり、人を死に至らせ古くする悪魔ではないからである。あなたがたはまだこれが分からないか。あなたは心を閉ざしているのです、神について持っている観念を手放すことができない。神の働きが理不尽だからでも、人間の願望と合致していないからでもなく、無論神がいつも自分の義務に怠慢だからなどでもない。あなたが自分自身の観念を手放すことができないのは、あなたが不従順すぎるからであり、そしてあなたに神の被造物らしさが少しもないからで、神があなたに対してことを難しくしているのではない。全てはあなたに起因していて、神とは関係ない。全ての

苦しみと不幸は人が引き起こしている。神の意思はいつも良いもので、彼はあなたに自らの観念を作り出してほしいと願ってはいない。あなたに時代とともに変わり、新しくなってほしいと願っている。それでもあなたは大切なことを見極めることができず、いつも調査か分析をしている。神があなたに対してことを難しくしているのではなく、あなたが神への畏れを持っておらず、あなたがあまりに不従順なだけだ。ごく小さな被造物が、神に与えられたもののほんの一部を取り、それを使って神を攻撃しようとする。これは人の不従順ではないのか。人は神の前で自分の考えを表明する資格などではなく、価値のない、悪臭を伴う腐った格言を思いつくままに持ち出して来る資格などないと言える。カビの生えたような観念など尚更持ち出せない。それらはもっと価値のないことではないか。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知る者だけが、神に仕えられる」より

36. 神の働きは前進を続けており、その目的が変わることはないが、神の働きの実行手段はたえず変化しており、それによって神に従う人々も変化していく。神の働きが増えれば増えるほど、人はさらに徹底的に神を知るようになり、それに応じて人の性質も神の働きとともに変化する。しかし、神の働きがたえず変化しているため、聖霊の働きを知らない人々や真理を知らない愚かな人々は神の敵対者になる。神の働きは人が抱く観念とは決して一致しない。神の働きはいつも新しく、決して古くないからである。神は古い働きを決して繰り返さず、むしろこれまでなされたことのない仕事をたゆみなく行う。神はその働きを繰り返すことはなく、人は例外なく神の過去の働きに基づいて神の今日の働きを判断するので、神が新しい時代の働きの各段階を実行するのは困難を極める。人はあまりにも多くの妨げとなる物を突きつける。人の考えは偏狭すぎる。誰も神の働きを知らないのに、誰もがその働きを定義する。神から離れたら、人はいのちも真理も神の祝福も失ってしまうのに、人はいのちも真理も受け入れず、ましてや神が人類に与えるさらに大きな祝福も受け入れない。すべての人は神を得たいと願っているのに、神の働きのいかなる変化も許容することができない。神の新しい働きを受け入れない人々は、神の働きは不変であり、永久に停滞したままであると信じている。彼らの信条によれば、神から永遠の救いを得るためには律法を守ってさえいれば十分であり、悔い改め、罪を告白しさえすれば、神の心は永遠に満たされる。彼らは、律法の下で神、人間のために十字架につけられた神だけが神のはずであると考えている。また、神は聖書を超えるべきではないし、超えることはできないとも考えている。まさにこうした考えが彼らを古い律法に堅く縛りつけ、厳しい規定に束縛し続けてきた。さらに多くの人

々が、神の新しい働きがどのようなものでも、預言による裏付けがなければならず、その働きの各段階で、本心で神に従うすべての者には啓示が示されなければならない、そうでなければそれは神の働きではありえないと信じている。人が神を知るようになるのはただでさえ決して容易なことではない。さらに、人の愚かな心、ならびにうぬぼれという反抗的な本性を考慮すると、人が神の新しい働きを受け入れるのはなおさらむずかしい。人は神の新しい働きを入念に調べることも、謙遜して受け入れることもない。むしろ、軽蔑的な態度をとり、神の啓示と導きを待つ。これは神に反抗し、敵対する人の行動ではないだろうか。そのような人たちがどうして神の承認を得ることができようか。

『言葉は肉において現れる』の「自己の観念で神を定義する人がどうして神の啓示を受けられるのか」より

37. 神がまるで変わりのない粘土像であるかのように、あなたがたが神を評価し、描写するために既成概念を用いるなら、また、あなたがたが神を聖書の中だけに限定してしまい、神を働きの限定範囲内に閉じ込めるなら、これはあなたがたが神を罪に定めていることを証明することになる。彼らの心の中には、旧約時代のユダヤ人たちが神を偶像の型に投じ、まるで神はメシヤとしか呼ばれないかのように、またメシヤと呼ばれる者だけが神であり、彼らはまるで神は(生のない)粘土像であるかのように、神に仕え礼拝し、彼らは当時のイエスを十字架に釘づけし、死を宣告し、罪のないイエスを罪に定めたのである。神は何の罪も犯さなかったのに、人は神を容赦なく、断固たる決心をもって神に死を宣告した。そうして、イエスは十字架にかけられた。人はあたかも神の経営を見通してきたように、また神が行う全てのことは人の手中にあるかのように、人は常に神は変わらないと信じ、聖書によって神を定義している。人々は極端にばかげており、極度に傲慢であり、仰々しい雄弁の才を持っている。神に対するあなたの認識がどんなに大きいとしても、あなたは神を知らないし、あなたほど神に反抗している人たちは誰もおらず、またあなたは神を罪に定めているとわたしはやはり言おう。というのは、あなたは神の働きに従い、神によって完全にされる道を歩くことは全く不可能だからである。神はなぜ決して人の行動に満足しないのだろうか。なぜなら、人は神を知らず、人は多くの観念を持っており、現実に応じる代わりに、神に対する人の認識は画的だからである。このように、今日神は地上に来て、再び人間によって十字架に釘づけされた。

『言葉は肉において現れる』の「悪人は必ず罰を受ける」より

38. 各期間において、神は新たな働きを開始し、各期間において、人間には新たな始まりがあるであろう。人間が「ヤーウェは神である」または「イエスはキリストである」というような一つの時代のみに該当する真理に従うだけであれば、人間は聖霊の働きに遅れずついて行くことは決してできず、聖霊の働きを得ることは永遠にできないであろう。神がどのように働くかに関わらず、人間はほんの僅かも疑うことなく、遅れずについて行く。このようにすれば、どうして人間が聖霊により排除されることなどあるのか。神が何を為すかに関わらず、それが聖霊の働きであることを人間が確信し、何も疑わずに聖霊の働きに協力し、神の要求を満たそうとする限り、どうして人間が罰されることなどあるのか。神の働きは一度も停止したことがなく、神の歩みは止まったことがない。また神の経営の働きが完成する前、神は常に忙しく、休んだことがない。しかし、人間は異なる。人間は、ほんの少し聖霊の働きを得ただけで、あたかもそれが決して変わらないかのように扱う。人間は、わずかに知識を得ただけで、より新しい神の働きの足取りに進んでついて行こうとしない。人間は、わずかに神の働きを見ただけで、すぐに神を一種の木の人形のように決めつけ、神は常に人間の見る形のままであり、過去も未来も常にそのような形であると信じる。人間は、表面的な知識だけを得て、誇らしくなって我を忘れ、全く存在しない神の性質や在り方をみだりに主張する。そして聖霊の働きの一つの段階について確信するあまり、神の新たな働きを宣べ伝えるのがどのような人であれ、人間はそれを受け入れない。彼らは聖霊の新たな働きを受け入れることができない人々である。彼らは保守的過ぎて、新しい事を受け入れられない。これらの人々は神を信じてはいるが、神を拒んでいる者たちである。人間は、イスラエルの民が「ヤーウェのみを信じてイエスを信じなかった」のは誤っていると信じるが、大多数の人々が「ヤーウェのみを信じてイエスを拒絶する」という役、そして「メシアの再来を切望するがイエスというメシアには反対する」という役を演じている。それならば、人間が、聖霊の働きの一つの段階を受け入れた後も、依然としてサタンの支配の下で生活し、依然として神の祝福を受けていないことに何の不思議も無い。これは、人間の反抗心の結果ではなかろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

39. 人間の最大の問題は、見ることも触れることもできないもの、途方もなく神秘的で驚異的なもの、人間の想像を超えた、普通の人間には手の届かないものだけを愛する点だ。それが非現実的であればあるほど、人間はそれを分析し、他のものには目もくれずそれを追い求め、それを手に入れようとする。それらが非現実的であればあるほど



、ますます綿密に調べ、分析し、それらについて、自分なりのこと細かな考えを紡ぎだす。それに対して、物事が現実的であればあるほど、人間はそれらを素っ気なく扱う。ただそれらを見下し、蔑みさえする。これはまさに、あなた方がわたしのしている現実的な働きに対してとっている態度ではないのか。物事が現実的であればあるほど、あなた方は、ますます偏見を持つ。あなた方は、そういうものを調べる手間もかけず、ただ無視する。そうした現実的なありのままの条件を見下して、最も現実的である神について数多くの観念をもち、神の現実性と正常を受け入れることができない。そのようにして漠然としたものの中で信じているのではないか。あなた方は、過去の漠然とした神については揺るぎない信念を持っているが、今日の真の神には何の興味も示さない。それは、過去の神と現在の神とが二つの別の時代に属するからではないのか。それはまた、過去の神が天の崇高なる神であるのに対して、現在の神は地上のちっぽけな人間であるからではないのか。そのうえ、人間の崇める神は人間が頭で作り出した神であるのに対して、今日の神は地上で生まれた現実の肉だからではないか。結局のところ、人間が神を探求しないのは、今日の神は余りにも現実的であるからではないのか。何故なら、今日の神が人間に求めているのは、まさに、人間が最もしたくないこと、最も恥と思うことだからである。これは、人間にとって困難なことではないか。これは、人間の古傷をさらすことではないのか。このように、現実を追い求めない者は、受肉した神の敵、反キリストとなる。これが明白な事実ではないのか。

『言葉は肉において現れる』の「神とその働きを知る者だけが神の心にかなう」より

40. わたしは、長年にわたり、神を信仰する大勢の人々と出会って来た。こうした信仰はどのような形態であろうか。神が空気のような存在であるかのように、神を信仰する人々がいる。こうした人々は、神の存在に関する疑問に答えられない。なぜなら、こうした人々は神の存在や不在を感じる事も意識することも出来ず、ましてや神を明確に理解することなど出来ないからである。こうした人々は、無意識のうちに、神は存在しないと考えている。その一方で、神が人間であるかのように、神を信仰する人々もいる。こうした人々は、自分達に出来ないことが神にも出来ず、神は自分達と同様に考えているに違いない、と考えている。こうした者による神の定義は「目に見えず、触れることの出来ない人間」である。そのほかにも、神が操り人形であるかのように、神を信仰する人々もいる。こうした人々は、神には感情が無く、神は彫像であると考えている。問題が発生した場合、神はどのような姿勢も取らず、観点も意見もなく、人間の思うままである。人間は、単に自分達の好き勝手に信仰しているだけである。こうした者が

神を偉大な存在とした場合、神は偉大であり、小さな存在とした場合、神は小さいものとなる。人間が罪を犯して神の慈しみや寛容、愛が必要な時、神は慈しみを与えなくてはならない。こうした人々は、自分の心で神を考え出し、その神に自分達の要求や、願望を全て満たさせる。時や場所、そうした人々が何をしているかを問わず、そうした人々は、神の扱いや神への信仰に、そうした妄想を適用する。自分が神の性質を侵害しても、神は自分達を救うことが出来ると考えている者さえいる。これは、そうした人々が、神の愛は無限であり、神の性質が義であり、人間がどれほど神の怒りを買ったとしても、神はそれを一切覚えていることが無い。人間の過失や侵害、不従順は、その者の性質の一時的な現れであるので、神は人々に対して機会を与え、寛容かつ辛抱強い。神は、そうした人々を今まで同様、愛するであろう。したがって、依然として救いの希望は大いにあると考えていることが原因である。事実、ある者が神をどのように信仰しているかを問わず、その者が真理を追い求めている限り、神はその者に否定的な姿勢を取る。それは、あなたが神を信仰している時に、神の言葉が記された本を大切にし、毎日読んで研究しているものの、真の神を無視し、空気や普通の人間、あるいは操り人形のように扱っているからである。わたしがこう説明するのは何故であろうか。なぜなら、わたしの知るところによると、あなたが問題に遭遇しているか、難しい状況に遭遇しているかを問わず、あなたの無意識の領域にあり、あなたの内部で形成された物事には、神の言葉や真理の追求と関連する物事が一切無いからである。あなたが理解しているのは、自分が考えている物事や自分の観点のみであり、そうした自分の考えや観点を神に対して強制しているのである。そうした物事が神の観点とされ、遵守すべき基準とされている。このような状態を続行すると、時間と共に、あなたは神から徐々に遠ざかって行く。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

41. 人々がわたしと共に集う時、わたしの心は喜びで満たされる。直ちにわたしは手の中にある恩恵を人々に授け、人々がわたしと集うことができるようにする。わたしに従わない敵ではなく、わたしと共に生きる友人になるようにするのだ。したがって、わたしも人に心から接する。わたしの働きの中では人をハイレベルな組織のメンバーと見なしているので、わたしは人に対してことさら注意を払う。なぜなら人はいつもわたしの働きの目的だからである。わたしは人々がわたしを尊敬する気持ちになるように人々の心の中にわたしの場所を定着させた――しかし彼らはなぜわたしがこうするのかまったく知らず、ただ待つだけなのだ。人々の心の中にはわたしが定着させた場所がある

のに、彼らはわたしがそこに住むことを求めない。それどころか、彼らは「聖なる神」が心の中に突然やってくるのを待っている。わたしの姿はあまりにもみすぼらしいので、人々の求めに合わず、したがってわたしは彼らから「排除」される。彼らが望んでいるのは高貴で強力な「わたしの姿」だから――わたしが世の中に来た時、人々にはそうは見えなかったので、彼らは遠くを見つめ、心に抱く神を待ち続けた。わたしが彼らの前に現れた時、彼らは大衆の前でわたしを拒絶した。わたしは片隅に立ち、人の下す「判決」を待ち、人々がこの欠陥だらけの「製作品」であるわたしを結局どう扱うか確かめるために見守っているしかなかった。わたしは人々の傷跡は見ないで、傷のない部分を見るようにし、このことで満足する。人々の目には、わたしは空から降りてきた「小さな星」にすぎず、天国で一番小さい者であり、今日地上に来たのは神に任命されたからなのだ。その結果、人々は神とわたしを一つのもものと認めるのをひどく恐れ、「わたし」と「神」という言葉により多くの解釈を思いついた。わたしの姿には「神」の風貌がまったくないので、人々は皆わたしが神の家族ではなく、使用人であると信じて、これは神の姿ではないと言う。おそらく神を見たことのある人々がいるだろう――しかしわたしは地上では見識に欠けているから、神はわたしに「現れる」ことがなかったというのだ。おそらく、わたしには「信仰」があまりにも足りないために、人々の目にはわたしがみすぼらしい者と見えるのだろう。人々は、本当の神なら創造主なのできっと人の言語に堪能だろうと想像する。しかし、事実はまさに反対である。わたしは人の言語が下手なだけでなく、人の「欠点」を「補う」ことさえできない時がある。その結果、わたしは少し「罪悪感」を感じる。人々の「要求」通りに行動しないで、ただ材料を用意し、彼らに「欠けているもの」に応じて働くだけだからである。わたしは人に多くを要求しないが、人々はその反対であると思っている。したがって、彼らの「謙虚さ」があらゆる動きに明らかにされる。彼らはわたしが迷うのを深く恐れ、わたしが山の奥深くにある古代の森にさまよい入るのではという恐怖に怯え、いつもわたしの前を歩き、わたしのために道案内をしようとする。その結果、人々はわたしが地下牢の中に歩いて行ってしまうのを深く恐れ、いつもわたしを前方へと導いている。わたしは人々の「信仰」にはやや「好ましい印象」を持っている。彼らは食べ物や睡眠のことを考えず、わたしのために精を出して働き、わたしに対する労働のため昼も夜も眠らず、白髪にさえなるほどであった――これは彼らの信仰が全世界の人々を「超越」し、各時代を通して使徒達や預言者に「まさっている」ことを十分に示している。

42. 肉となった神を信じない人、すなわち、目に見える神の働きと言葉を信じない人、目に見える神を信じないで目に見えない天の神を崇拜する人はみな、心の中に神を持たない人である。彼らは、神に従わず、反抗する人たちである。このような人は真理を欠いているのは言うまでもなく、人間性と理知をも欠いている。このような人たちにとっては、目に見える神、触れることができる神はもっと信頼できず、目に見えない神、触れることのできない神こそが、いちばん信頼でき、またいちばん彼らの心を喜ばせるのである。彼らが求めるものは現実的な真理ではなく、いのちの本質でもなく、ましてや神の考えなどではない。むしろ彼らは、刺激を求めている。もっとも彼らの欲望を満たすことができるものならどんなものであっても、間違いなくそれが、彼らが信じ、追い求めるものである。彼らはただ自分の欲望を満たすためだけに神を信じるのであって、真理を求めるためではない。このような人たちはみな悪を行う人たちではないのか。彼らはひどく自信過剰で、天の神が彼らのような「善良な人々」を滅ぼすとは信じない。むしろ神は彼らを生き残らせ、しかも手厚く報いてくれると思っている。なぜなら、彼らは神のために多くの事をし、神のためにずいぶん「忠誠心」を尽くしたからである。もし彼らが目に見える神を追い求めるとなった場合、彼らの欲望が満たされなくなれば、彼らは直ちに神に反撃するか、烈火のごとく怒るはずである。このような人たちはみな、自分の欲望を満たそうとする卑劣な人間である。彼らは、真理を追い求めることにおいて誠実な人々ではない。このような人々は、キリストに従ういわゆる悪者たちである。真理を求めないこのような人たちは真理を信じることはできない。彼らは、人類の未来の結末については、なおさら感じる事ができない。なぜなら、彼らは目に見える神の働きと言葉をひとつも信じず、人類の未来の終着点をも信じる事ができないからである。したがって、彼らは見える神につき従っていても、やはり悪を働いて真理を求めず、わたしの要求する真理を実践することもない。自分が滅ぼされることを信じない人たちは逆に、まさに滅ぼされる対象そのものである。彼らはみな、自分がとても賢明であると信じていて、自分が真理を実行する人であると信じている。彼らは自分の悪行を真理と考え、それを大事にする。このような悪者はみなひどく自信過剰である。彼らは真理は教義であるとし、自分の悪行を真理と見なす。最後に彼らは自分の蒔いた種から刈り取る。自信過剰で傲慢であればあるほど、真理を得ることができず、天の神を信じれば信じるほど、神に逆らう。このような人たちはみな罰せられる人々である。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

43. 人の目には、神の言葉は毎日使う道具のようで、大切になどしないのである。従って、人々は神の言葉を実践できない。真理を知ってはいるが実践しない惨めで不幸な存在となってしまった。だからこうした人の過ちだけでも、一定期間神が嫌悪感を抱くのに十分である。人々が神の言葉を心に留めないと何度も言うのはこのためである。それでも彼らの観念故に、次のように考える。「私たちは日々神の言葉を研究し、分析しているのに、私たちが神の言葉を心に留めないなどと言われるのはどういう訳だろう。これは不当ではないだろうか。」あなたのために少し細かく分析しよう。――これを聞くと人々は赤面するであろう。神の言葉を読む彼らは、まるでよだれを垂らしながら飼い主の言葉を聞くパグのように頷き、右脚を後方へ引きながらおじぎをする。それだから、この時人々は自分達が相応しくない者と感じ、涙が頬をつたい、悔い改めて再出発したいかのようである。だが暫くするとまた、羊のようにおどおどした態度は失せて貪欲な狼のようになる。神の言葉は脇に置いてしまい、己のこと最優先、神のことは最後にしている彼らにとって、神の言葉を実践することなどできないのである。何か事が起こると、彼らはひじを外側に向けて曲げる。<sup>101</sup>これは身内に対する裏切りである。神が「生存をわたしに頼りながら、『反対側に走っているのだ。』」と言うのも不思議ではない。神の言葉には偽りはなく、全て真実で、少しの誇張もないが、それでも控えめに言われているようであることが、このことでやっと分かる。人の霊的背丈があまりに低く、神の言葉に耐えられないからである。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第三十六章」より

44. 多くの人々が神の言葉を日々読み、場合によってはその中にある代表的な言葉を、最も貴重な財産として注意深く暗記しようとしたり、その上随所で神の言葉を説教して言葉によって他の者たちに糧を与え、援助している。彼らは、これを行うことは神を証しし、神の言葉について証しすることであり、また神の道に従うことであると考えている。さらに彼らは、これを行うことは神の言葉に従って生きることであり、神の言葉を実生活に活かすことであり、こうすることにより、神の称賛を得て、救われ、全き者とされることだと考えているのだ。しかし、彼らは、神の言葉を説教する一方で、実践では神の言葉に従うことも、神の言葉により啓示されているものに自らを一致させようとすることも決してない。彼らはむしろ策略により他人からの敬服と信頼を得て、自らの経営の中に入り、神の栄光をかすめ取るために神の言葉を用いている。彼らは、神の言葉を広めることにより得られる機会を利用して、神の働きと称賛を得ることをいたずらに願っている。彼らは神の言葉を説教する過程で神の称賛を得ることもできないだ

けでなく、神の言葉を証しする過程で従うべき道を見いだすことも出来ず、神の言葉により他の人に与えたり助けたりする過程で自分自身に与えることも助けることもなく、これら全てを行う過程で神を知ること、真に神を畏れる心に目覚めることもできないまま、いったい何年が過ぎ去ったことだろうか。しかし、それとは反対に彼らの神に関する誤解は深くなる一方であり、神に対する不信感は深刻になるばかりであり、神に関する想像は大げさになるばかりである。彼らは、神の言葉に関する理論に満たされ、方向付けられて、まるで水を得た魚のようであり、何の苦もなく自分の能力を発揮しているようであり、あたかも自分の人生の目的や使命を見出し、新しい命を得て救われたかのようにあり、まるでリサイタルのように神の言葉を饒舌に語りながら真理に辿り着き、神の意図を把握し、神を知る道を見出し、また神の言葉を説教する過程の中で、あたかも神と顔を合わせることがしばしばあるかのようなのである。また彼らは、しばしば「感極まって」涙を流し、しばしば神の言葉の中にある「神」に導かれ、神の真摯な配慮と優しい思いやり絶えず掴まっているように見え、同時に、人間に対する神の救いと経営を理解し、神の本質を知るにいたり、神の義なる性質を理解しているかのように見える。こうした土台に基づき、彼らは、神の存在をより固く信じ、神の誉れ高い地位について熟知し、また神の荘厳さ、超越性をより深く感じているように考えられる。彼らは、神の言葉に関する表面的な認識に耽溺し、信仰が成長し、苦難に耐える決意が強まり、神に関する認識が深まったかのように見えはする。彼らは、神の言葉を実際に体験するまでは、神に関する彼らの認識や、神に関する考えは、すべて彼らの勝手な想像と推測から生まれたものであることに、殆ど気付かない。彼らの信仰は神のいかなる試練にも耐えず、彼らの言うところの霊性と背丈は、神の試練にも検証にも耐えることは全くできない。彼らの決意は砂上の楼閣以外の何物でもなく、彼らのいわゆる神に関する認識もまた、自分の空想による虚構にすぎない。事実、これらの、いわば神の言葉に対して多くの努力をした人々は、真の信仰、真の服従、真の思いやり、あるいは神に関する真の認識とは何かを悟ることが全くない。彼らは、理論、想像、知識、賜物、伝統、迷信、そして人類の道徳的価値観さえも利用して、それらを神への信仰や神を求めるための「投資資産」や「武器」に変え、また神への信仰や神を求めるための基盤にさえ変えてしまう。また同時に、彼らはこうした資産と武器を利用して、神を知るための、また神による検証、試練、刑罰、裁きなどに対処し取り組むための魔法の護符へと作り変える。最終的に、彼らが蓄えたものはいまだに、宗教的暗示や封建的迷信と、ロマンチックで異様で謎めいたことの全てが深く染みわたった、神に関する結論でしかなく、彼らが神に関して知り神を定義する方法は、天上や、天の神のみを信じる人々と同じ型に嵌

まったものである。一方、神の实在性、神の本質、神の性質、神の所有するもの、神の存在そのものなど――真の神自身に関する事すべて――は、彼らの認識では把握出来ないことであり、全く無関係で、正反対な事である。こうして、彼らは、神の言葉による供給や栄養により生活しているにもかかわらず、神を畏れ、悪を避ける道を、本当の意味ではたどることが出来ない。こうしたことの真因は、彼らが神と親しくなることが決してなく、神と真に接することも、交わることもなく、したがって彼らにとって、神との相互理解を達成することは不可能であり、神を真に信仰し、神を求め、礼拝することを、自らのうちに目覚めることができないことである。彼らがこのように神の言葉を見なし、神をこのように見なすこと――この見方や態度により、彼らは努力の末に何も手に入れることが出来ず、また神を畏れ、悪を避ける道へと進むことが永遠に出来ないように運命付けられているのである。彼らが目指す目標と彼らが進んでいる方向は、彼らが永遠に神の敵であり、永遠に救いを得られないことを示している。

『言葉は肉において現れる』の「神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道」より

45. わたしはあなたがたの生活の中に現れるが、あなたがたはそれを知らず、わたしにも気づかない。わたしの語る言葉の半分はあなたがたに対する裁きであり、さらにその半分しか効果がないのであなたがたは「注意散漫」になる。残りの半分は人生についてあなたがたに教え、どのように振る舞えばよいか教えるものであるが、それはまるであなたがたにとって存在しないかのようであり、あなたがたはそれに対しあたかも遊んでいる子どもの言葉を聞くようにヴェールをかけたような笑みを浮かべ、そして何もしないのだ。こういったことについてあなたがたは心を砕いたこともない。あなたがたはわたしの行動を好奇心から眺めてきたので、今やあなたがたは暗闇に落ち、光を見ることができない。――暗闇で哀れっぽく泣いているのである。わたしがあなたがたに望むのは従順、あなたがたの無条件の従順、そしてさらにわたしが要求するのは、あなたがたがわたしが語る事すべてに確信を持つことである。あなたがたはわたしの言葉と働きに対して無視するような態度を取るべきではないし、特にわたしの言葉に向き合うのに選り好みすべきでなく、ましてや常に無関心でいるべきではないことは言うまでもない。わたしの働きはあなたがたの只中で行われ、わたしはわたしの言葉の多くをあなたがたに与えてきた。しかしもしあなたがたがわたしに対してこのようにごまかそうとするのであれば、わたしは、あなたがたが獲得もせず実行にも移していないものを異邦人の家族に渡してしまうだけだ。被造物の中でわたしの手にないものなどあるだろうか。あなたがたのほとんどは「熟した老年」であり、わたしのこの種の働きを受け入れる

精力がないのである。あなたがたはハンハオ鳥<sup>14</sup>のように、なんとかやり過ごしているだけであり、わたしの言葉を真剣に扱ったことはない。若者は極めて虚栄心が強くひどく甘やかされており、わたしの働きにはさらに注意を払わない。彼らはわたしの晩餐会のご馳走を楽しむ気分ではないのだ。まるで鳥かごから出て、遠くへ飛び立っていった小さな鳥のようだ。このような若者あるいは老人がどのようにわたしにとって有益になるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「若者と老人に向けた言葉」より

46. 神の心において、自分の信仰が認められたことの無い人々がいる。換言すると、そうした人々の信仰を神が讃美しないため、そうした人々が神に付き従う者であることを、神が認めない。こうした人々は、何年にわたり神に付き従って来たかによらず、自分の考えや観点は全く変わらない。こうした人々は、信仰を持たない人々のようであり、信者以外の原則や作法に従って物事を対処し、信者以外の人々が持つ生存の規則や信念を遵守している。こうした人々は神の言葉を自分自身のいのちであることを決して認めず、神の言葉が真理であると決して信じず、神の救いを受ける意志が一切無く、神を自らの神として認めたことが一度も無い。こうした者は、神に対する信仰を、一種の余暇活動の趣味として捉え、神を単なる霊的な必需品のように扱っているため、神の性質や本質を理解しようとするのが有意義だと考えていない。真の神に該当する物事全てが、こうした人々に無縁であると言えるであろう。こうした人々は無関心であり、わざわざ注意を払うことも無い。これは、こうした者の心の深部において、神は視認できず、触れる事も出来ず、したがって神は存在しない、と常に激しい口調で伝える声があるからである。こうした人々は、そのような神を理解しようとする事は、努力に値しない、自分自身を騙そうとしているだけだと考えている。こうした人々は言葉で神を認めるのみで、本気で証しをすることは無い。また、こうした人々は実践的には何もせず、自分達が利口だと考えている。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

47. あなたがたが長年にわたってわたしの前でしてきた行動から、これまで一度も受け取ったことのない答えが得られた。そして、このような答えに対する問いは、「真理と真の神の前における人の態度とは、どのようなものだろうか」である。わたしが人間に注いできた努力は、人間を愛することがわたしの本質であることを証明している。また、わたしの前で人が為す行動や行為は、真理を憎みわたしに反抗する人間の本質を証明した。わたしはわたしに従ってきたすべての人たちのことをいかなる時にも気にか



けているが、わたしに従う人たちはわたしの言葉をいつも受け入れようとしない。彼らはわたしから出る提案でさえ、ひとつとして受け取ることがまったくできない。これがわたしをもっとも悲しませることである。たとえわたしの態度が誠実で、わたしの言葉がやさしくても、誰もわたしを理解することなどないし、その上、誰もわたしを受け入れることができない。みな、わたしにまかされた仕事を、自分本来の意図に従って行っている。彼らはわたしの意図を求めることもなく、ましてや、わたしの要望など尋ねることなどない。みなわたしに逆らっているのに、彼らは依然としてわたしに忠実に仕えていると主張している。多くの人たちは、自分が受け入れられない真理、あるいは自分が実践できない真理は、真理ではないと信じている。そのような人たちにとって、わたしの真理は否定され、投げ捨てられるものになっている。それと同時に、わたしは言葉においてのみ神として人間に認められる者となったが、また真理でも、道でも、いのちでもない部外者とみなされるようになった。次の真実を知るものは一人もいない:わたしの言葉は永遠に変わらない真理である。わたしは人間にとっては、いのちを与える者であり、人類の唯一の案内人である。わたしの言葉の価値と意味は、人間に認められているかどうか、受け入れられているかどうかではなく、言葉自体の本質によって決定される。たとえこの地上でだれひとりわたしの言葉を受け入れることができないとしても、わたしの言葉の価値と、どれだけそれが人類の助けになるかは、人には計り知れない。だから、わたしの言葉に逆らい、反論し、あるいはわたしの言葉を全く軽蔑している人たちに直面するとき、わたしの変わらない姿勢はこうである。時と事実をわたしの証人とし、わたしの言葉が確かに真理であり、道であり、いのちであることを示させよう。そして、わたしが言ったことはすべて正しく、人はそれを備えるべきであり、さらに人はそれを受け入れるべきであることを、時と事実の実証させよう。わたしはわたしに従うすべての者たちに次の事実を知らせる。わたしの言葉を完全に受け入れることができない人たち、わたしの言葉を実践できない人たち、わたしの言葉に目的を見いだせない人たち、そしてわたしの言葉によって救いを受け入れることができない人たちは、わたしの言葉によって罪に定められた人たちであり、さらには、わたしの救いを失った人たちである。そして、わたしのむちは決して彼らから離れることはない。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがたは自分の行いを考慮すべきである」より

48. あなたがたは何年もの間わたしに従ってきたものの、忠実の片鱗さえわたしに示したことはない。そのかわりに、自分が愛する人々や自分の気に入るものの周りを回ってきただけである。そうするあまりに、いつでも、どこへ行こうとも、あなたがたは

これらを心に留め、見捨てたことはない。あなたがたが自分の愛する何か一つのこと  
に夢中になったり情熱的になったりするの、必ずわたしに従っているときや、さらには  
わたしの言葉に耳と傾けているときである。それゆえ、わたしがあなたがたに求める忠  
実を、あなたがたは「愛玩物」に忠実であり、それを可愛がるために代わりに使ってい  
る、とわたしは言うのである。あなたがたはわたしのために犠牲の一つや二つ払うかも  
しれないが、それはあなたがたのすべてを表しておらず、あなたがたが本当に忠実なの  
はわたしであると示してもいい。あなたがたは自分が情熱を感じる活動に関わる。息  
子や娘に忠実な人もいれば、夫や妻、富や仕事、上司、地位、女性に忠実な人もいる。  
自分が忠実なことについては、うんざり感じたり悩まされたりすることは決してない。  
それどころか、そういうものをさらに大量に、さらに高品質のものを所有することにま  
すます熱心になり、決してあきらめない。わたしとわたしの言葉は、あなたがたの情熱  
の対象の後ろに押しやられる。それらは最下位に置かれるより他にない。この最下位を  
これから発見し、忠実になるもののために空けておく人さえいる。そのような人の心の  
中にわたしの形跡がわずかでもあったことはない。わたしがあなたがたに求め過ぎると  
か、あなたがたを不当に非難しているとか、あなたがたは思うかもしれない。しかし、  
あなたがたが家族と幸せなひと時を過ごしているあいだに、わたしに忠実であったこと  
は一度としてなかったという事実を少しでも考えたことがあるだろうか。そのような時  
にあなたがたは痛みを感じないのか。心が喜びで満たされるとき、労働の報いを受ける  
とき、あなたがたは自分には十分な真理が備わっていないことに失望しないのか。わた  
しの承認を受けられなかったためにあなたがたはいつ泣いたのか。あなたがたは自分の  
息子や娘のために知恵を絞り苦心するが、それでも満足しない。彼らのためにはまだ十  
分に勤勉ではない、彼らのためにできる限りのことをしていないと信じる。しかし、わ  
たしに対しては、あなたがたはいつも怠惰で不注意であった。わたしはあなたがたの記  
憶の中にいるだけで、心の中に長く留まることはない。わたしの献身と努力をあなたが  
たを感じることは永遠になく、その価値を深く感じたことはない。少しのあいだ考える  
だけで、それで十分だと信じる。このような「忠実」はわたしが長いあいだ切望してき  
たものではなく、長いあいだ嫌悪してきたものである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは誰に忠実なのか」より

49. もし今わたしがあなたがたの前に現金を置いて選択の自由を与えたならば、そ  
してその選択を理由にあなたがたを非難しないならば、あなたがたのほとんどが現金を  
選び、真理を放棄するであろう。あなたがたのうち優秀な人は現金をあきらめ、しぶし

ぶ真理を選ぶ。一方、中間の人は片手に現金をつかみ、もう片手に真理をつかむ。あなたがたの真の姿がこのように明らかになるのではないだろうか。真理と自分の忠実の対象のどちらかを選ぶとき、あなたがたは皆このような選択をするが、あなたがたの態度に変化はない。そうではないだろうか。あなたがたのうちには正誤のあいだを揺れ動いた人が多くいるのではないのか。是と非、黒と白の対立において、家族か神か、子どもか神か、平和か分裂か、富か貧困か、地位か平凡か、支持されるか捨てられるかなどについて、あなたがたは自分がした選択を知っているはずである。平和な家族と崩壊した家族では、あなたがたは前者を選び、躊躇することなくそのように選択した。富と本分でも、岸边に戻る<sup>(b)</sup>覚悟さえないまま再び前者を選んだ。贅沢と貧困でも前者を選んだ。息子、娘、妻、夫とわたしでも前者を選び、観念と真理でも再び前者を選んだ。あなたがたのありとあらゆる邪惡な行いに直面して、わたしはあなたがたへの信頼を完全に失った。あなたがたの心が柔和にされることにここまで抵抗するとは、わたしはただただ驚く。長年の献身と努力は明らかにあなたがたの放棄と絶望しかわたしにもたらさなかった。しかし、あなたがたへのわたしの希望は日ごとに大きくなる。わたしの日はすべての人の面前に完全にさらけ出されているからである。それなのに、あなたがたは暗く邪惡なものを求めることに固執し、それを手離すことを拒否する。それでは、あなたがたの行く末はどうなるのか。あなたがたはこのことを注意深く考えたことがあるのか。もし再び選択するように言われたならば、あなたがたはどういう立場を取るのか。やはり前者を選ぶのか。やはりあなたがたは失望と痛ましい悲しみをわたしにもたらすのであろうか。やはりあなたがたの心には温かさはわずかしかなないのであろうか。やはりあなたがたはわたしの心を慰めるために何をするべきか気づかないのであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは誰に忠実なのか」より

50. わたしは、人間が忙しい時には身を隠し、暇な時に姿を現す。人間は、わたしをあらゆる願いをかなえる全能の神であると思っている。だから、たいていは、わたしを知りたいという欲求からではなく、神の助けを求めてわたしの前に来る。病の苦しみにあるとき、人間はわたしにあわてて助けを求める。困難な状態にあるとき、人間は、自分たちの難儀を除くことをひたすらに願って、自分たちの苦しみについて打ち明ける。しかし、安楽な時にわたしを愛することのできた者は一人もいない。自分たちが安らかで幸福な時に、喜びを分かち合おうと、わたしに手を伸べた者は一人もいない。自分のささやかな家庭が幸福で安らかな時には、人間はいつもわたしを押しつけ、あるいは戸口から締め出し、入れないようにする。そして、家庭の幸福を楽しむ。人間の心はあ

まりに狭いので、愛情深く、慈悲深く、親しみやすい神である私を受け入れさえしない。楽しい笑いの場で、何度、わたしは人間に拒絶されたことか。人間が倒れたとき、何度、彼らはわたしを支えにしようと、寄りかかってきたか。何度、病に苦しむ人間に、医者役目を強いられたか。人間とは何と残酷なのだ。まったく理不尽で不道德だ。人間に備わっているはずの感情さえ、彼らの内に見いだせない。彼らには人間性の痕跡がほとんど完全にはない。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十四章」より

51. 神の国では、わたしは王だ——しかし、人間は、わたしを王として扱う代わりに、わたしを天から降りてきた救い主として扱う。そのため、人間はわたしから施しをもらうことを期待し、わたしを知ることを追求しない。まことに大勢が、わたしの前で乞食のように叫んだ。まことに大勢が「袋」を開いて、生きるための食物をくれるよう願った。まことに大勢が、飢えた狼のように、わたしを食べ尽くし、腹を膨らませようと、貪欲な目で見つめた。まことに大勢が、自分たちの罪のために恥じて、黙って頭を垂れ、寛容を祈り、あるいはわたしの刑罰を受けようとした。わたしが話すと、さまざまな人間の愚行が不合理に思われる。そして、人間の真の姿が光の中に明かされると、輝く光の中で人間は自分を許すことができない。そこで、急いでわたしの前に来てひれ伏し、罪を告白する。人間の「正直さ」のため、わたしはもう一度救いの車に載せる。人間はわたしに感謝し、わたしを愛情のこもった目で見ると、しかし、それでも人間は、まだほんとうにわたしの内に逃げ込むつもりはなく、完全にわたしに心を捧げてはいない。人間はただわたしのことを誇るが、ほんとうにわたしを愛しているのではない。心をわたしに向けていないからだ。その人の体はわたしの前にあるが、その心はわたしの後ろにある。規則に関して、人間の理解はあまりに不十分であり、また、わたしの前に来ることには関心がないので、わたしは適切な助けを与え、頑固な無知の状態を改めさせようとする。これがまさに、わたしが人間に与える憐みであり、わたしが人間を救うために奮闘する方法である。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十二章」より

52. わたしの家にいる人みなを含め、今日の世の人々の中で、誰が本当にわたしの内に保護を求めているのか。誰が、わたしの支払ったものの代価として、心を差し出しているのか。かつて誰が、わたしの家に安らかに住んだのか。かつて誰が、ほんとうに自らをわたしに差し出したのか。わたしが人間に何かを要求すると、相手はすぐさま「小さな倉庫」を閉ざす。わたしが人間に与えると、相手はすぐさま、わたしの富をこっ

そり得ようと、口を開ける。そして、その心は、わたしが反撃するのではないかと深く恐れて、震える。だから、人間の口は半分開き、半分閉ざされているのだ。そこで、わたしの与える富を真に享受することができない。わたしは安易に人間を罪に定めない。しかし、人間はいつでもわたしの手を取り、憐みをかけてくれと願う。人間が願ったときにだけ、わたしは再び「憐み」をかける。そして、わたしの口から最も厳しい言葉を与えるので、人は直ちに恥じ入り、直接わたしの「憐み」を受け取る事ができず、別の人に渡してもらうようにする。人間が完全にわたしの言葉を把握すると、わたしの願いどおりの成長を遂げ、その嘆願は実を結び、むなしく無益なものではなくなる。わたしは、見せかけではない、人類の心からの嘆願を祝福する。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十八章」より

53. 人々はわたしを知らず、その本性はわたしに逆らうものなので、わたしに忠実な者たちでさえ、おのが快樂を追求している。しかし何か悲しみをもたらすことが起こると、彼らの心はすぐに変わり、わたしのそばから退くことを望む。これはサタンの本性である。あなたは自分自身が忠実であるという意見に固執してはならない。己のために益になることが何もないければ、この獣の群れはわたしに忠誠を尽くすことが全くできない。わたしがわたしの行政命令を宣言しなかったならば、あなたがたはずっと前に退いていただろう。あなたがたは皆、鍋と火の間に挟まれたまま、わたしのために奉仕する意欲がない一方、わたしの手によって打たれることも望んでいない。誰であれわたしに逆らう者には大きな災いが今にも降りかかろうとしていることをわたしが告げなかったならば、あなたがたはずっと以前に退いていたであろう。人の心がどれほど狭いか、わたしは知らないだろうか？ほとんどの人たちが今、小さな希望を抱いているが、その希望が失望に転じると、それ以上先に進む意欲を失い、引き返すことを求める。前にも言ったが、わたしは本人の意志に反して誰もここに引き留めることはしない。だから、結果があなたにとってどうなるのか、慎重に考慮せよ。これは事実であり、あなたに対するわたしの空脅しではない。わたし以外には、人間の本性を探ることができる者はいない。彼らは皆、自分の忠誠が不純であることを知らずに、自分たちがわたしに忠実であると思い込んでいる。これらの不純は、人々を破滅させであろう。というのは、それは赤い大きな竜の計略であるからだ。このことは、はるか昔にわたしによって露わにされた。わたしは全能なる神である。わたしがこれほど単純なことを理解しないことなどだろうか？わたしはあなたの血肉を透して、あなたの意図を見ることができる。わたしにとって、人間の本性を見抜くことは難しくないが、人々は自分の意図を知っている

者は自分以外にはいないと考えて、利口ぶる。彼らは、全能なる神が天と地と万物の中に存在することを知らないのか？

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第百十八章」より

54. 彼らがどのようにして試されるとしても、心の中に神が存在する者の忠誠は変わることがない。しかし、心の中に神が存在しない者たちは、神の働きが自分の肉に有利でないならば、神に対する見解を変え、神から去ることさえある。最後に確固として立つことができない者、神の祝福を求めるだけで、神のために尽くし、神に自らを捧げる意欲が一切無い者はこのようである。このような下劣な人々は、神の働きが終わりを迎える時に全員追放され、同情に値しない者たちである。人間性が欠如している者は、神を真に愛することができない。状況が安全で平穏な時、あるいは彼らが利益を得られる時は、彼らは神に対して完全に従順であるが、一旦自分の望みが損なわれたり、最終的に否定されたりすると、彼らは直ちに反乱を起こす。ほんのひと晩のうちに、彼らは、にこやかで「心優しい」人間から、醜く残忍な死刑執行人となり、何の根拠も無く、昨日までの恩人を生かしておけない敵として扱う。瞬く間に殺しを行うこれらの悪魔らが追放されていないなら、それらは、さらなる苦難の源となるのではなかろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

55. 人間は苦痛の中でわたしを求め、試練の中であって、わたしを探す。平和の時にはわたしを楽しみ、危険になると、わたしを否定する。忙しい時にはわたしを忘れ、暇な時には、わたしに対しておざなりな態度をとる。しかし、けっして誰も生涯を通じてわたしを愛しはしない。人間がわたしの前で熱心であればいいと思う。わたしに何かよこせとは言わない。ただ、すべての人がわたしを真剣に受け止め、わたしを欺くのではなく、誠意を人間の内に取り戻せるようにしたいのだ。わたしの啓きや照らし、努力はすべての人にあまねく行き渡る。しかし、人間のあらゆる行動の真相も人々にあまねく行き渡り、それはわたしに対する欺きも同じである。人間には母の胎にいたときから欺きの種が備わっていたものででもあるかのようだ。生まれながら欺きの特別の技術をもっているかのようだ。そのうえ、人間はけっしてそのことを漏らさない。誰一人、そうした欺きの技術の源を見通した者はいない。その結果、人間はそれと気付かずに欺きの中で生き、自身を許しているかのようで、それが、自分で意図的にわたしを騙そうとしているのではなく、神の計らいでもあるかのようには振る舞う。これこそが、人間がわたしを欺く原因なのではないか。これは人間の狡猾なしわざではないのか。わたしはけっして人間の巧みな言葉に惑わされたことはない。わたしはずっと以前に人間の

本質を見抜いていたのだから。人間の血にどれほどの不純物が含まれているか、どれほどサタンの毒がその髓に潜んでいるか、誰が知っているのか。人間は日々にそれに慣れ、サタンのしわざに無感覚になり、「健康的な生き方」を見つけることには何の関心もない。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十一章」より

56. わたしは何度も霊で人間に呼びかけた。しかし、人間は、わたしが突き刺しでもしたかのように振る舞い、わたしが別の世界に連れて行こうとしているのではないかと、ひどく恐れ、離れた所からわたしを見ている。何度も人間の霊に問いかけてみたが、人間はまったく気づかないで、わたしが彼の家に入って、その機会に持ち物をすべて奪うのではないかと、深く恐れている。そこで、わたしを締め出すので、わたしは、冷たい、固く閉ざされた「扉」に向かい合うことになった。人間が倒れ、わたしが助けたことは何度もあるが、人間は気がつく、すぐさまわたしを去り、わたしの愛に触れず、用心深い目を向ける。人間の心が温くなることはなかった。人間は感情のない冷血動物だ。わたしの抱擁に温まっても、けっしてそれで深く動かされることがない。人間は山の野蛮人のようなものだ。人間は一度たりとも、わたしの人類に対する思いを大切に思ったことがない。人間はわたしに近づきたがらず、山々の中に住むことを好む。ここでは野獣に脅かされているのだが、それでも、わたしの内に逃げ込もうとはしない。わたしは人間に強制しない。わたしの働きをするだけだ。陸地のすべての富を楽しみ、海に飲み込まれる危険から解放されようと、いつの日か人間は大海原をわたしに向かって泳ぐことだろう。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十章」より

57. あなたがたの心の中にある欺瞞をわたしは深く理解している。あなたがたのほとんどは好奇心からわたしに従い、空虚からわたしを求めて来たのだ。あなたがたの第3の希望——平和で幸せな人生という願い——が叶わなかった時、あなたがたの好奇心は消散する。あなたがた一人ひとりの心の中にある欺瞞は、あなたがたの言葉と行いを通して明るみになる。率直に話すならば、あなたがたはただわたしに対して好奇心を持っているだけで、恐れてはいない。あなたがたは言葉に気をつけず、行動を抑えることはさらにない。そうであれば、あなたがたの信仰とはどうなのか、本当のところ。純粋なものなのだろうか。あなたがたはわたしの言葉を単に心配をなくし、退屈を軽減するために利用しているにすぎない。あなたの空虚な空間を埋めるために。あなたがたのうちの誰がわたしの言葉を実践したのか。誰が純正な信仰を持っているのか。あなたがた

は、神は人々の心を深く見通す神であると叫び続けているが、あなたがたが心に叫んでいる神はわたしとどう互換性があるのか。このように叫んでいるなら、なぜそんな風に行動するのか。そういった愛でわたしに返済しようとしているということなのだろうか。あなたがたの唇は非常に大きな献身が語られているのだが、あなたがたの実際の捧げ物は、そして良き行いはどこにあるのか。わたしの耳に届くあなたがたの言葉がなければ、わたしはどうあなたがたをこれほど憎むことができようか。あなたがたがわたしを真に信じるのならば、なぜそのような苦痛の状態に陥ることができるのだろうか。あなたがたはまるで地獄で裁判を受けているかのような、落ち込んだ表情を浮かべている。活力がなく、内なる声について弱々しく語っており、実は文句と呪いの言葉で満ちているのだ。あなたがたはとうの昔にわたしの働きについて信頼を失っており、元来持っていた信頼も消え去った。それでどのように最後まで従うことができるのか。そのようなやり方でどのように救われることができるのか。

『言葉は肉において現れる』の「若者と老人に向けた言葉」より

58. 人間が神を信じていても、その心には神がいないままであり、神をどう愛するかも分からず、神を愛したいとも思わない。人間の心は神に近付いたことがなく、常に神を避けているからである。その結果、人間の心は神から遠く離れてしまっている。では人間の心はどこにあるのか。実際には、人間の心はどこかに行ってしまったわけではない。人間は自分の心を神に明け渡したり、神に見て頂こうと神の前に明らかにする代わりに、自分の中に閉じ込めてしまった。「ああ神様、私の心を見てください。あなたは私の考えることを全てご存知です」などとしばしば祈る人もあり、中には自分の心を神の前に明らかにすると誓い、誓いを守らなければ罰を受けることすら厭わないとまで言うが、事実はその逆なのである。たとえ人間が、神に自分の心を見せたとしても、それは人間が神の導きと采配に従えるという意味でもなく、自分の運命や将来を手放し、全てを神の支配に委ねるという意味でもない。したがって、あなたが神に立てる誓いや、あなたが神に宣言したことに関わらず、あなたの心は神の目には閉ざされたままなのである。神に自分の心を見せはしても、それを支配することは許可していないのだから。別の言い方をすれば、あなたは神に自分の心を捧げてなどおらず、神に対して聞こえのいい言葉を並べているに過ぎないのである。一方で、あなたは諸々の不誠実な考えや企て、陰謀、計画を神には見られないようにし、自分の将来と運命を神に取り上げられるのではないかと深く恐れて手放そうとしない。このように、人間の神に対する誠実さというものを、神は見ることがない。神は人間の心の奥深くを見ており、人間の考えや



願い、人間が心にしまい込んであるものを見ることができが、それでも人間の心は神に属しておらず、人間はその心を神に明け渡してもいい。つまり、神に人間の心を見る権利があっても、それを支配する権利はないのである。主観的な認識に囚われて、人間は自分を神の意のままにして欲しいとも、してもらおうとも思わない。神から自らを閉ざし、それだけでなく、どうしたら自分の心を覆い隠せるかを考えようとさえする。聞こえのよい言葉とお世辞を並べてその印象を偽り、そうすることで神の信頼を得、本当の姿を神の目から隠そうとするのである。人間が神にその心を見せたがらないのは、人間が自分の本当の姿を神に知られたくないからである。彼らは神に心を明け渡したいとは思わず、手放さずにいたいと思っている。人間は自分がすること、欲することは全て自分で計画済みで計算済みで、自分で決定済みだということなのである。神に自分の計画に参加してもらう必要も、仲介してもらう必要もなく、ましてや神の指揮や采配など無用なのである。したがって、神の命令、神が与える任務、あるいは神が人間に要求することに関わらず、人間は自分の考えや利益に基づいて判断し、その時の状態や状況に沿って判断するのである。人間は常に自分が馴染みのある知識と見識、そして自分の知性を使ってゆくべき道を判断し選択し、神が仲介し制御することを許さない。これが神から見た人間の心である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

59. 人々は神からの試練をしばしば懸念し、恐れながらも常にサタンの罠の中に生き、サタンに攻撃されて虐待される危険な領域で生活している。それでも人々は恐れることもなく、落ち着いている。どういうことなのだろうか。人間の信仰は、その人が見える範囲のものに限られる。人間は神の人間に対する愛や労り、優しさや配慮に対して全く感謝することがない。神の試練、裁き、刑罰、威厳、怒りに対する僅かな不安と恐れがなかったならば、人間は神の善なる意図を全く理解しないのである。試練と聞いただけで神にあたかも隠れた動機があり、神には悪い計画があるとさえ思い込む者もいる。そして神が本当に何をしようとしているかを理解することはない。それゆえ、神の主権と計画に従うと叫んでいながらも、人間に対する神の主権と計画に対してあらゆる手段で抵抗する。気をつけていなければ神に間違った方向へ連れていかれてしまう、自分の運命にしがみついていなければ持っているものを全て神に取り上げられてしまい、人生が終わってしまうかもしれないとすら思っているからである。人間はサタンの陣営にいながらサタンに虐待されることを恐れず、サタンに虐待されていながらサタンの虜になることを恐れない。人間は神の救いを受けると言いながら、神に信頼することはなく

神がサタンの爪から真に救うとも信じない。人がヨブのように神の采配と計画に従うことができ、自分の全てを神の手に委ねることができれば、ヨブ同様、最後に神の祝福を受け取るのではないのだろうか。神の主権に従うことができたのならば、人が失うものなどあるだろうか。それだから、あなた方は自分の行いに注意し、自分に降りかかること全てに注意するように。軽はずみに何かをしたり衝動的に何かをしたりすることのないように。そして神、あるいは神があなたに用意した人や物事を、自分の激情や天性に頼って、または自分の想像や観念に従って扱ってはならない。自分の行いに注意深くし、更に祈り、求め、神の怒りを招くことのないようにしなさい。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

60. あなた方の信仰はとても素晴らしい。あなた方は喜んで自分の人生をわたしの働きに捧げると言う。そのためにありとあらゆることをすると言う。しかし、あなた方の性質はあまり変わっていない。あなた方の言葉はいつでも傲慢で、その行動は不快なものであった。まるで、舌と唇は天国にあるが、足は遥か地上にあるかのようだ。だから、人の言葉と行いと評判は、未だに酷いまである。あなた方の評判は崩れ、振る舞いの品格が落ち、話し方は卑しい。あなた方の人生は卑怯で、人間性は全て卑しい。他人に対して心が狭く、些細なことまでことごとくゴネる。自分の評判や地位のためには口喧嘩も辞さず、そのためには地獄や火の湖にまであえて落ちるほどだ。あなた方が現在発している言葉と行いだけで、あなたを罪深いと断定するに十分である。わたしの働きに対するあなた方の態度は、あなたをよこしまな者と判断するのに十分で、あなたの全性質は、あなたの魂が嫌悪すべきものに満ちた穢れたものであると言うのに十分である。あなた方が示すものや表わすものは、あなた方が穢れた霊の血を十分飲んだと判断するのに十分である。神の国に入ることにに関してあなた方に語られる時、感情を露わにしないことだ。今のあり方が、天にあるわたしの国の門を通るに相応しいと信じているのか。あなた方は自分の言葉と行いがわたしの試験を通ることなく、わたしの働きと言葉の聖なる地に入れると信じているのか。誰がわたしの二つの目をうまく欺けるだろうか。どうしてあなたの卑劣で卑しい行動と会話がわたしの目から逃れることができようか。わたしはあなた方の生活を、穢れた霊の血を飲み肉を喰らうものと断定した。なぜなら、毎日あなた方はわたしの目の前で彼らの姿を呈しているからだ。わたしの前であなたの振る舞いはとりわけ酷い。それで嫌悪を感じずにいられようか。あなたの発言には、穢れた霊の不純さがある。まるで魔術師であるかのように、そして、欺き、よこしまな者の血を飲む人々のように、あなた方は欺き、隠し、お世辞を言う。人間の表わ

すものは全て極めてよこしまである。それならば、義なる人々のいる聖なる地にどうして全ての人が置かれることなどあるだろう。あなた方の卑劣な振る舞いが、不義なる人々と区別されると思うのか。あなたの蛇のような舌は、破滅と嫌悪すべきものを引き起こすその肉体を滅ぼすだろう。穢れた霊の血で覆われたあなた方の手もまた、あなた方の魂を地獄へと引きずり込む。それなのになぜ、真っ先にこの機会を利用して、その穢れに満ちた手を清めないのか。なぜ真っ先にこの機会を利用して、不義の言葉を語るその舌を切り取らないのか。自ら進んで自分の2本の手、舌と唇を地獄の炎で苦しめたいのか。わたしはこの目であらゆる人々の心を見守り続ける。わたしが人類を創造する遙か以前に、わたしは自らの手中に彼らの心を掴んだからだ。わたしは遙か昔、人間の心を見通していた。どうして人の心の思いがわたしの目を逃れることができようか。わたしの霊の炎から逃れるよう、どう間に合わせることができようか。

『言葉は肉において現れる』の「あなた方はみな人格が卑しすぎる」より

61. あなたの唇は鳩より優しいが、あなたの心は古代の蛇より悪意がある。あなたの唇はレバノンの女性ほど美しいが、あなたの心はレバノンの女性ほど優しくはなく、カナン人の美しさの比較対象になどならないことは言うまでもない。あなたの心はあまりに欺きに満ちている。わたしが忌み嫌うのは、専らよこしまな人々の唇とその心である。わたしの要求は聖人より高いものではない。わたしはひたすらよこしまな人々の邪悪な行いを忌み嫌い、彼らが自分の穢れを捨て去り、現在の窮地から脱することによこしまな人々と一線を画し、義なる者達とともに生き、ともに聖なるものとなるよう望んでいるのである。あなた方とわたしの状況は同じだが、あなた方は穢れで覆われており、創造当初の人間と少しも似ていない。あなた方は毎日穢れた霊に倣い、穢れた霊と同じ行動をとり同じ言葉を発し、穢れた霊の汚い水にあなた方全体、舌や唇までも浸っている。あなた方の全てが完全にそのような穢れた染みで覆われており、わたしの働きに用いることのできる部分がひとつもないほどだ。実に悲しい。そんなまるで馬や牛の世界に住んでいながら、あなたは平気である。しかも喜びで満たされて、自由に、気楽に生きている。そんな汚水の中で泳ぎ回っていながら、自分の陥ってしまった状況を理解していない。毎日穢れた霊と付き合い、「糞便」と関わる。あなたの人生は実に卑しいが、人間の世界で生き延びられていない事、自分の人生をしっかり保てていないことに気づいていない。あなたの人生はとうの昔に穢れた霊によって踏みにじられ、あなたの人格はとっくに汚水で汚れてしまっていることに気づかないのか。あなたは自分が地上の楽園に生き、幸福の只中にいると思っているのか。穢れた霊と人生を共にし、穢れた

霊があなたに用意したもので生きて来たことを知らないのか。あなたが生きていることに意味などあろうか。あなたの人生に価値などあろうか。穢れた霊である両親のために今まで忙しく走り回って来たが、あなたを陥れたのが、あなたを生み、育てた穢れた霊だと気づかない。更には、あなたの穢れが彼らによるものだとは知らず、彼らは「楽しみ」は与えるが、罰を与えたり裁いたりすることはせず、呪うことなど到底ないと思っている。あなたに向けて怒りを爆発させたことなどなく、あなたに対して愛想良く、親切にする。彼らの言葉はあなたの心を養い、あなたを虜にする。そうすることであなたが迷い、知らず知らずのうちに引き込まれ、進んで彼らに尽くすようになり、あなたは彼らのはけ口となり、しもべとなるようにする。あなたは不平ひとつ言わず、彼らの思うままになる―彼らにだまされているのだ。それゆえ、わたしが行う働きにあなたは全く反応しない。いつでも密かにわたしの手をすり抜けるのも、わたしの好意を騙し取るために、いつも甘い言葉を言いたがるのも、不思議ではない。結局あなたには別の計画があったのだ。全能者であるわたしの行いも僅かに見てはいるものの、わたしの裁きと刑罰は微塵もしらない。わたしの刑罰がいつ始まったのかをあなたは知らず、どうやってわたしをそそのかすかだけを知っており、わたしが人間の違反行為を容赦しないことは知らない。

『言葉は肉において現れる』の「あなた方はみな人格が卑しすぎる」より

62. わたしはずっとあなた方の間にいて、いくつもの春と秋を過ごし、久しくあなた方の間におり、共に過ごした。あなた方の卑劣な行動のうち、どのくらいわたしの目をすり抜けただろうか。あなた方の心からの言葉は常にわたしの耳に響いた。わたしの祭壇で、あなた方は何百万もの望みを唱えた。数えられないほどの望みを。にもかかわらず、あなた方が捧げたもの、費やしたものは皆無である。ひとしずくの誠意すらわたしの祭壇に捧げられてはいない。わたしに対する信仰の実りはどこにあるのだ。あなた方はどこまでも続く恵みを受け、果てしなく続く天の奥義を見た。わたしは天の炎さえもあなたがたに見せたが、あなた方を焼き尽くすような心は持っていなかった。それなのにあなた方はその報いとしてどれ程をわたしに捧げただろうか。どれ程のものを進んで捧げるだろうか。わたしから与えられていた食物を携えて、あたかも自分が汗水たらして得たものかのようにわたしに差し出し、自分もつ全てのものを捧げるかのような言い方をする。あなたからの「寄付」は全てわたしの祭壇から盗んだものだとして分からないのか。そのような物をわたしに捧げて、それはごまかしではないのか。今日わたしが喜ぶものは、わたしの祭壇に捧げられたものであり、あなたが労苦した見返り

として得たものでわたしに差し出したものではないことがどうして分からないのか。あなたは事実このようにわたしを騙しているのだから、あなたを許せる筈がない。こんな状態をこれ以上耐え続けられる筈がない。わたしはあなた方に全てを与えた。わたしはあなた方に全てを解放し、必要を満たし、あなた方の目を開いた。にも関わらず、あなた方はこうしてわたしを騙し、良心を無視する。わたしは無欲にもあなた方に全てを与えた。それ故、苦しみの中にあっても、わたしが天からもたらした全てをあなた方は得ることができた。しかし、あなた方から捧げるものは何もなく、ほんの少し寄付すれば、後になって精算した。あなたが捧げたものなど無に等しいのではないか。自分は砂粒ひとつだけを差し出しておいて、わたしには金1トンほども要求する。理不尽そのものではないか。わたしはあなた方の間で働きをする。わたしの受けるべき1割をあなた方が捧げた形跡など全くなり、追加のいけにえを捧げたことなど勿論ない。更には、信心深い者たちの捧げた1割を不道德者が取り上げている。あなた方は皆、わたしから離れているのではないか。皆、わたしに敵対しているのではないのか。皆、わたしの祭壇を破壊しているのではないか。そのような人間が、わたしの目に宝と映ることなどあろうか。わたしの嫌う豚や犬ではないのか。あなた方の邪悪な行いを宝物と呼ぶことなどどうしてできようか。

『言葉は肉において現れる』の「あなた方はみな人格が卑しすぎる」より

63. 私は他者を疑わない者を好む。そして真実を快く受け入れる者を好む。この二種類の人々を私は大いに保護しよう。私から見ると彼らは正直な人々だからである。もしあなたが嘘つきなら、全ての人々や物事に対し慎重で疑い深くなるだろうから、私に対するあなたの信仰も疑念を基盤にして成り立つことになる。そのような信仰を私は決して認めない。真の信仰がないあなたには、真の愛はなおさらない。そして気の向くままに神を疑い、神への憶測を巡らすなら、あなたは間違いなくあらゆる人々の中で最も不正直である。あなたは神が人間のようにありうるかどうか憶測する。許し難いほど罪深く、狭量な性質で公正さと分別に欠け、正義感がなく、邪悪な策略に溺れ、不誠実でずるく、悪事や闇を喜ぶ、といった具合である。人は神のことを少しも知らないがゆえに、このような考えをもつのではないか。このような信仰は罪以外の何物でもない。中には、私を喜ばせるのはまさに媚びへつらいごまをする者たちであり、そのような技量のない者は神の家では歓迎されずに居場所を失う、と信じている者すらいる。長年かけてあなた方が得た知識はこれだけなのか。これがあなた方の手に入れたものなのか。私に関するあなた方の知識はこのような誤解にとどまらない。さらに悪しきは、あなた方

による神の霊への冒涇と、天に対する悪口である。あなた方のような信仰のせいで、あなた方はますます私から逸れていき、私とさらにひどく敵対するだけだと私が言うのは、それゆえである。

『言葉は肉において現れる』の「どのように地上の神を知るか」より

64. 神と人を同等なものとして語ることはできない。神の本質と神の働きは人にとって最も深遠で理解しがたい。神が人の世でみずから働きを行わず、言葉を話さなかったら、人は決して神の意志を理解することはできないし、全生涯を神に捧げてきた人々でさえ、神の承認を得ることはできない。神の働きがなければ、人の行いがどんなによくても無駄である。神の考えはいつも人の考えより高く、神の英知は人にとって測り知れないものだからである。そこで、神と神の働きが「はっきりと見える」人々は無力で、皆傲慢で無知だとわたしは言う。人は神の働きを決め付けるべきではないし、その上、人は神の働きを決め付けることはできない。神の目には人は蟻よりも小さいのに、どうして人が神の働きを推し測ることなどできようか。「神はあんな方法やこんな方法では働かない」とか「神はこのようである、あのようである」といつも言っている人々――彼らは皆高慢ではないだろうか。わたしたちは皆、肉体を持つすべての人々はサタンによって墮落させられていることを知るべきである。神に反抗するのは彼らの本性であり、彼らは神と同等ではなく、ましてや神の働きに助言することなどできない。神が人をいかに導くかは神自身の働きである。人は服従するべきであり、これこれしかじかの意見を持つべきではない。人はちり芥にすぎないのだから。わたしたちは神を見つけようとしているのであり、神が考慮すべき神の働きの上に自分たちの観念を重ね合わせるべきではないし、神の働きに故意に反対するために自分たちの墮落した性質を用いることなどもってのほかである。そのような行為はわたしたちを反キリストにさせるのではないだろうか。どうしてそのような人々が神を信じているなどと言えるだろう。わたしたちは神の存在を信じているので、神を満足させ、神を見たいと望んでいるので、真理の道を求め、神と融和するための道を探すべきである。わたしたちはかたくなに神に反抗するべきではない。そのような行動に何の益があるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

65. 多くの人が神に反抗し、聖霊の働きを邪魔するのは、彼らが様々な、多岐にわたる神の働きを認識しないからであり、さらに、彼らがごく僅かな知識と教義しか持ち合わせておらず、それで聖霊の働きを判断するためではないのか。そのような人たちは、経験は上辺だけのものなのに、本性が放漫かつ甘やかされており、聖霊の働きを軽視

し、聖霊の懲らしめを無視し、さらには自分の取るに足らない古い論拠を用いて聖霊の働きを「確認」する。また彼らはもったいぶって、自分たちの知識と博識を全面的に確信し、世界中を駆け回ることができると思い込んでいる。そのような人たちは聖霊に軽蔑されて拒絶されるのではないのか、そして新しい時代には排除されるのではないのか。神の前に来て公然と神に反抗する人々は、狭量で偏狭な人々で、単に自分たちがいかに賢いかを見せびらかそうとしているだけではないのか。彼らは、聖書についての僅かな知識だけで天下の「学界」にまたがり、人に教える上辺だけの教義でもって、聖霊の働きを覆し、自分たちの思考過程を中心に転回させようと試み、目先のことしか見えないのに、一目で6000年に及ぶ神の働きを見極めようとするのである。この人たちは理性と呼べるようなものをもちあわせていない。実際、神についてよく知っている人ほど、神の働きを評価するのに時間をかける。さらに、彼らは今日の神の働きについて知っていることを僅かしか語らないが、判断することは急がない。神に対して認識がない人ほど、傲慢で自信過剰で、気まぐれに神の存在そのものを言いふらすが、彼らは理論を語っているだけで、実際の証拠は提供しない。このような人は少しも価値のない人である。聖霊の働きを冗談事と捉える人たちはあさはかである。聖霊の新たな働きに出会うとき、慎重にせずべらべら言いふらして、早まった判断を下し、本能にまかせて聖霊の働きの正しさを否定し、さらには聖霊の働きを侮辱し冒涇する人たち、つまりそんな無礼な人たちは聖霊の働きに対して無知であると言えるのではないか。さらに、そのような人たちは、傲慢で、生まれつき高慢で、そして手に負えない人間ではなかろうか。このような人はいつか聖霊の新しい働きを受け入れる日が来ても、神は彼らを寛容には扱わないだろう。そういう人たちは、神のために働く人たちを見下すだけでなく、神自身をも冒涇しているのである。そのような無謀な人たちは、この世でも後の世でも赦されることがないし、永久に地獄で滅びるだろう。このように無礼でいい加減な人たちは、神を信じているふりをしているだけで、そうすればするほど、行政命令に触れやすくなる。生まれつき放逸で、一度も誰かに従ったことがない、傲慢な人間はすべて、このような道を歩いているのではないか。彼らは、常に新しくて古くならない神に来る日も来る日も反抗しているのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

66. あなた方が神の働きに逆らう、あるいは自分の観念により今日の働きを判断するのは、あなた方が神の働く原則を知らないからであり、またあなた方が聖霊の働きを真剣に受け止めないからだということを認識しなさい。あなた方が神に反抗し、聖霊の

働きを邪魔するのは、あなた方自身の観念と生まれつきの尊大さのせいである。それは神の働きが間違っているからではなく、あなた方が元々あまりにも反抗的だからである。人によっては、神への信仰を持った後に、人がどこから来たのかということさえ確信をもって言えないのに、あえて聖霊の働きが正しいかそうでないかについて演説を行ったりする。彼らは、聖霊の新しい働きを持つ使徒たちに説教したり、意見したり、立場をわきまえないで余計な口を挟んだりさえする。彼らは人間性が非常に低俗で、思慮分別のかけらも持っていないのである。このような人が聖霊の働きによって拒絶され、地獄の火に焼かれる日が来るのではないか。彼らは、神の働きを認識しない代わりに、神の働きを批判し、しかも神に対して働き方の指図までする。このように理不尽な人たちがどうして神を知ることができるだろう。人は、神を求め、経験する過程で、神に対する認識を得るようになる。つまり、気まぐれに神を批判する中で聖霊の啓発を受けて神を認識するのではない。神に対する認識が正しいほど、人は神に反発しなくなる。逆に、神への認識が少ないほど、人は神に逆らう。あなたの観念、古くからの本性、人間性、性格や道徳観は、あなたが神に逆らう「資本」であり、あなたが墮落して下劣で低俗であるほど、あなたはますます神の敵対者になる。欲深い観念の持ち主や独りよがりな性質の者は、さらに受肉した神の憎しみを買い、そのような人たちは反キリストである。もしあなたの観念が正されなければ、常に神に敵対することになり、永久に神と融和することができず、そしていつも神から離れていることになる。

『言葉は肉において現れる』の「神の三つの段階の働きを認識することは神を認識する道である」より

67. 自分がすべてを理解していると考えてはいけない。あなたがこれまで目にし、経験してきたことは、すべてわたしの経営計画の千分の一を理解するのにさえ十分ではないとわたしは言う。ではなぜそんなに傲慢なのか。あなたの持っているほんのわずかな才能と最小限の認識では、イエスの働きの一秒に使用するのにさえ不十分である。あなたは実際どれほどの経験を持っているのか。あなたが生涯で見てきたもの、耳にしてきたすべて、想像してきたことは、わたしが一瞬で行う働きより少ない。あら探しをしたり、欠点をみつけたりしないほうがよい。どんなに傲慢でも、あなたはまだアリ以下の被造物なのだ。あなたの腹の中にあるすべては、アリの腹の中にあるすべてよりも少ない。自分が多くを経験し、先輩になったので、思うがままの横柄さで語り、行動してもよいと考えてはならない。あなたの経験があり、先輩であるのは、わたしが発した言葉の結果ではないのか。自分の労働や苦勞と引き換えにそれらを獲得したと信じているのか。今日、あなたはわたしの受肉を見て、その結果、たっぴりと観念を持ち、そこか



ら数え切れないほどの勝手な考えが出て来る。わたしの受肉がなかったら、あなたの才能がどんなに並外れたものであっても、これほどの観念を持つことはないだろう。勝手な考えが生まれるのはここからではないのか。イエスの初めて受肉がなければ、あなたは受肉について何を知っているだろうか。あなたが二度目の受肉を厚かましくも大胆に批判するのは一度目の受肉を知っているからではないのか。いったいなぜ素直に従う代わりに細かく調べなければならないのか。あなたはこの流れに入り、受肉した神の前に来た。どうしてあなたに研究することが許されようか。あなたが自分の家族史を研究するのは結構なことだが、神の「家族史」を研究するなら、今日の神はあなたがそうすることをどうして許せようか。あなたは盲目ではないのか。あなたは自ら屈辱を受けようとしているのではないのか。

『言葉は肉において現れる』の「二度の受肉が、受肉の意義を完成させる」より

68. 今日の生き方を追求するのに最も適切な方法は何か。追求において自らをどのような者とみなすべきか。あなたは自らに今降りかかってくるあらゆることに対応する術を知っておかねばならない。それが試練であれ、苦しみであれ、無慈悲な刑罰であれ、呪いであれ、これらの全てを慎重に考えねばならない。なぜわたしはこのように言うのか。それは結局のところ、今あなたに降りかかっているのは、次から次に降りかかってくる小さな試練だからだ。おそらくあなたにとって今この試練は大きなストレスではないのだろう。だから自らの進歩を追求するための貴重な富として試練を考えて対応せず、物事をなすがまま流れに任せているのだ。あなたは迂闊すぎる。実際にはあなたは目の前を漂い流れゆく雲であるかのように、この貴重な富を捉えている。しかも、大打撃が次々に小さな出来事として起こるので、あなたにはそれほど辛く思えず、このような出来事を重要視していない。あなたは小さな出来事を冷静に傍観するだけで、真剣に受け止めていない。時折このような出来事が壁にぶつかって行き詰まるのをみているだけだ。あなたは傲慢すぎる。あなたは次から次に起こる激しく荒々しい攻撃に対して尊大な態度を取っているだけであり、時には冷静に微笑んで無関心な様子を露呈することさえある。これはあなたがなぜ自分がこのような「不運」に何度も苦しむのかについて考えたことがないからである。もしかするとわたしは人々にあまりに不公平だろうか。わたしはあなたのあら探しをしているだけだろうか。あなたの考えはわたしが説明したほど真剣ではないが、その冷静な態度はあなたの心の内面世界を鮮明に描き出している。言うまでもなく、あなたの心の奥深くに隠されているのは、無分別な悪口雑言と終わりがなきかすかな悲しみ以外の何物でもない。これは他人にはほとんどわからない

ものである。これはあなたがこのような試練に苦しんでおり、それをとても不当だと感じているからだ。だからこそ、あなたはこのような方法で悪口雑言を浴びせているのだ。これはこれらの試練が原因で、あなたが世界は荒廃していると感じているからだ。だからこそ、あなたは憂鬱でたまらない。あなたは次から次へと降りかかる打撃や懲らしめを最高の保護として捉えておらず、天からの不当な挑発や自分に対する妥当な天罰であるとみなしている。あなたはとても無知である。あなたは容赦なく最高の時を暗闇に閉じ込め、素晴らしい試練と懲らしめを敵からの攻撃であるとみなすことが度々あるのだ。あなたはこのような環境に適応できないだけでなく、更に言えば、適応するつもりさえないのだ。これはあなたが次から次に起こる刑罰を無慈悲だとみなして、刑罰から何も得る気がないためである。あなたは求めもせず探求もしない。天の意思に身を任せている。あなたはその結果として、そこがどこであれ、今の場所にいるのだ。あなたが無慈悲とみなす懲らしめによって、あなたの心は全く変わらなかった。そのような懲らしめがあなたの心を占めたこともない。その代り、あなたの心が傷ついただけである。あなたはこの人生においてこの「無慈悲な刑罰」を敵視しただけで、何も得ていない。あなたは独り善がりすぎる。自分があまりに卑しいからこのような試練を課されているのだとあなたが考えることはまずない。むしろ、あなたは自分がとても不運だと考えている。更に、あなたはわたしがいつもあなたのあら探しをしていると言う。今までずっと、あなたはわたしの言葉や行動を実際にどのくらい理解してきたのか。自分を生まれながらの天才であり、自分は地上にそびえ立つ存在で、天に届くには高さが少々足りないだけだなどと考えないことだ。あなたは地上の他の人々より賢くはない。あなたは自分を過大評価しており、地上の他の分別ある人間より小生意気なほど愚かだと言えるだろう。未だかつてあなたが劣等感を持ったことなどないのだ。まるであなたが水晶のようにはっきりとわたしの全ての行動を見通しているかのようである。だが実際にはあなたは分別ある人にはほど遠い。これはわたしが何をしようとしているのかがあなたには全くわかっておらず、わたしが今していることについては更にわかっていないためである。だからこそわたしは言う。人生というものを自覚していないが、天からの恵みに農業を頼っている老練な農夫と比較することはできないのだと。あなたは自分自身の人生についてとても投げやりである。自分自身の評価がわかっていない。自己認識は更に乏しい。あなたは「横柄なお偉方」でありすぎる。わたしが本当に懸念しているのは、あなたのようなプレイボーイ達や優雅な淑女達が更に強くて荒々しい風や波の攻撃に耐えられるのかということだ。プレイボーイ達は今自分達が置かれているこのような環境について全く気にしていない。くだらないことに思えて、このようなことに関心がない

のだ。彼らに否定的な発想はなく、自分達を卑しい存在であるとみなしていない。その代り、今でも涼みながら「並木道」をのんびり散歩したり歩き回ったりしている。学ばず何もわかっていないこれらの「大物たち」には、なぜわたしがこのようなことを彼らに言うのか見当もつかない。けんか腰の彼らは自分自身のことが少しわかっているだけなのだ。その後、彼らの悪の道に変化はない。彼らはわたしのもとを去った後も、世界の至る所に存在し、威張り散らして騙し続けるのだ。あなたの顔の表情はあまりに目まぐるしく変わる。そうやってあなたは今もわたしを欺いている。あなたは厚かましすぎる。そして優雅な若い淑女達は本当に滑稽だ。彼女達はわたしの切迫した発言を聞き、自分達がいる環境に気づいて、涙を流さざるを得ない。まるで魔法をかけようとしているかのように、自分の体をクネクネひねるのだ。これはあまりにおぞましい。彼女は自分の霊的背丈を見てベッドに横たわり、そのままベッドにいる。泣き止まずに。まるでほとんど窒息寸前であるかのようなのだ。このような言葉から自分自身の未熟さと卑しさに気づいた彼女は、その後、否定的な発想でいっぱいになる。うつろに見つめるその瞳には光がない。彼女は不満を言わない。わたしを憎んではいない——ただ動くことさえしないほど後ろ向きの発想なのだ。彼女もまた学ばず何も知らない。わたしのもとを去った後、彼女はまたジョークを言ったりふざけたりするようになる。その銀色のベルのような笑いは、まさしく「シルバー・ベルのお姫様」なのだ。双方ともあまりに脆く、自己憐憫がなさすぎる。人類のなかでも傷物といわれる人々よ、あなたがたは皆、あまりに人間性が欠けている。あなたがたは自己愛や自己保護というものを知らない。理性というものを理解していない。真の道を求めることをせず、真の光を愛することもしない。特に自分自身を大切にする方法を知らない。何度も心の片隅にわたしの教えの言葉を押しやり、遊びの時間を楽しむためにわたしの言葉を使うことさえしてきた。わたしの言葉をいつも自分自身のお守りとして使ってきた。悪魔に批判されたら、ちょっと祈るだけだ。後ろ向きの気持ちの時は眠り、幸せな気持ちの時には狂ったように走り回る。わたしに叱責されると頷いてお辞儀をするが、わたしのもとを去る時には残忍に笑う。人々の中ではあなたはいつも最高で、あなたが自分のことを最もうぬぼれが強い人間だと思ったことなど一度もない。あなたはいつも横柄なお偉方で、自己満足に浸っており、ひどく傲慢である。果たしてどのようにしたら、学ばず何も知らないこのような「若者」、「若い淑女」、「紳士」又は「淑女」がわたしの言葉を大切な宝物のように扱うことができるのだろうか。更にあなたに問う。今までずっとわたしの言葉とわたしの働きからあなたは何を本当に学んできたのかと。あなたのごまかしの方がもっと賢いのか。あなたの肉の方がもっと高尚なのか。あなたのわたしに対する態度の方がもっと尊大

なのか。あなたに率直に言おう。昔あなたの勇氣はネズミ程度の勇氣だったが、わたしがこれほど大きな仕事をしたおかげで、今あなたの勇敢は実際にもっと偉大なものになったのだ。あなたのわたしに対する畏怖は日に日に弱くなっていく。なぜならわたしが慈悲深すぎるからだ。わたしは今まで暴力的な方法を使ってあなたの肉を罰したことがない。わたしは口できついことを言っているだけだと、おそらくあなたは思っているだろう。しかし、ほとんどの場合、わたしは微笑みながらあなたと対面しており、今まで面と向かってあなたを批判したことはほとんどない。これは特にわたしがいつもあなたの弱点に配慮しているからなのだ。それゆえ、あなたはまるで蛇が優しい農夫に対応するかのよう、わたしに対応してきた。他人を慎重に品定めするという人類のスキルに、わたしは本当に感服している。本当に素晴らしい、最高である。あなたに真実を伝えよう。今日あなたが畏敬の念を持っているかどうかは、重要ではないのだ。わたしは神経質になっていないし、心配してもいい。しかし、あなたにこれも伝えよう。学ばず何も知らないあなたという「天才」は、最後には己の自画自賛というちっぽけな浅知恵で滅びるのだ。苦しむのはあなたである。そして罰されるのはあなたである。わたしは今後もあなたの道連れになって地獄に行き、苦しみ続けるほど愚かではない。なぜならあなたとわたしは同類ではないからだ。忘れるな。あなたはわたしに呪われた創造物であることを。そしてわたしから教わり、わたしに救われた創造物であることを。あなたの中にわたしが渴望する物はない。わたしがいつ働こうとも、わたしが人々や出来事、物事に操られることはない。人類に対するわたしの態度や見方はいつも同じで変化したことがなかったと言えるだろう。あなたに対して特にえこひいきはしない。なぜならあなたはわたしの経営の付属物だからだ。あなたは決して他の物よりも強くはない。あなたにアドバイスしよう。自分が創造物でしかないことをいつも覚えておけと。あなたはわたしと共に生きているが、自分の身分を知って自分自身をあまり高く評価しないことだ。たとえわたしがあなたを批判しなくても、あなたを取り扱わなくても、わたしが微笑みながらあなたに接していても、それであなたとわたしが同類だと証明されたわけではない。あなたは真理を求めているのであって、あなた自身は真理ではないと心得ておくべきである。あなたはわたしの言葉に従っていつ何時でも変わらねばならない——これから逃れることはできない。わたしはあなたにアドバイスしよう。素晴らしい時を過ごしている真っ最中に、この類まれな機会があるうちに、何かを学べと。そしてわたしを騙そうとするなど。わたしを欺くのにお世辞を言う必要はない。あなたがわたしを求めるのは、わたしのためではない——あなたのためである。

69. 人間が本分を尽くすということは、実際のところ、人間に本来備わっているもの、即ち、人間に可能なことをすべて成し遂げることである。そうすると、人間の本分は尽くされる。奉仕する最中の人間の欠点は、徐々に経験を積むことと裁きを体験する過程を通して少しずつ減少する。それらは人間の本分を妨げることも影響することもない。奉仕の中にあるかもしれない欠点を恐れて、奉仕をやめたり妥協したり退いたりする者たちは、すべての人々の中で最も臆病である。もし人間が奉仕する中で表明すべきことを表明できず、人間として本来可能なことを成し遂げず、その代わりにのらくらし、形だけ奉仕しているふりをするならば、その人は被造物が本来備えているはずの役割を失ったのである。こうした人間は凡庸なくだらない者で、無用の長物であるとみなされる。どうしてこんな者が被造物という呼び名に値するのか。彼らは、外見は立派でも中身は腐った墮落した存在ではないのか。人間が自分を神と称しながらも、神性を示し、神自身の働きをし、あるいは神を表すことができないなら、それは間違いなく神ではない。というのは、その人には神の本質がなく、神が本来成し遂げ得ることがその人の内にはないからである。もし人間が人間として本来達成可能なことを失うなら、その人はもはや人間とはみなされない。その人は被造物として存在し、神の前に来て神に仕える資格はない。さらに、そんな者は神の恵みを受け、神に見守られ、保護され、神によって完全にされる資格はない。神の信頼を失った多くの者は、いずれ神の恵みを失う。そうした人々は、自分たちの悪行を恥ないどころか、ずうずうしくも神の道が間違っているという考えを言い広める。そして、そのような反抗的な者たちは、神の存在を否定さえする。どうしてそのような反抗的な人間が神の恵みを享受する特権をもてようか。自分の本分を果たすことのできなかつた人間は、神に対して極めて反抗的で、多くを神に負っている。それにもかかわらず、彼らは反対に、神が間違っていると激しく非難する。そうした人間がどうして完全にされるに値するのか。これは、神に取り除かれ、罰される先触れではないのか。神の前で自らの本分を果たさない者は、すでに最も憎むべき罪を犯している。その罪に対しては、死さえも十分な罰ではない。しかし、人間はずうずうしくも神に反論し、自らを神に比べる。そんな人間を完全にする値打ちがどこにあるだろうか。もし人間が自分の本分を果たさないなら、その人間は罪悪感と負い目を感じるべきである。自らの弱さ、無用さ、反抗心、墮落、を恥じ、神のために自らのいのちと血を犠牲にするべきである。そうしてはじめて、人間は真に神を愛する被造物となり、そうした人間だけが神の祝福と約束を享受し、神によって完全にされる資格がある。では、あなたたちの大多数はどうであろうか。あなたたちの間で生きている神を、どう扱っているのか。神の前でどのように本分を尽くしてきたのか。あなたたちは、す

るように命じられたすべてのことを、命がけでさえ為し遂げたことがあるのか。あなたたちは何を犠牲にしたのか。わたしから多くを受けているのではないのか。あなたたちは区別ができるのか。あなたたちは、どれほどわたしに忠実なのか。あなたたちは、どのようにわたしに仕えてきたのか。また、わたしがあなたたちに授け、あなたたちのためにしたあらゆることは、どうなのか。あなたたちは、その大きさを測ったことがあるのか。それを、あなたたちは皆、ささやかながら内にもつ良心のすべてに照らして判断したのか。あなたたちの言動はいったい誰に相応しいのか。そんなにもちっぽけなあなたたちの犠牲が、わたしがあなたたちに授けたものすべてにふさわしいとでもいうのか。わたしはそうするしかないので、心からあなたたちに献身してきたが、あなたたちはわたしについて邪悪な疑念をもち、いい加減な気持ちでいる。あなたたちの本分はこの程度で、それがあなたたちの唯一の役割である。そうではないのか。あなたたちは自分が被造物としての本分を全く果たしていないことが分らないのか。どうしてあなたたちが被造物とみなされることができるのか。あなたたちは、自分たちがいったい何を表明し、何を生かし出しているのかが、はっきりわかっていないのか。あなたたちは自分の本分を果たすことを怠ったにもかかわらず、神の憐れみと豊かな恵みを得えることを求めている。このような恵みはあなたたちのように無価値で卑劣な者たちのためではなく、何も求めず喜んで自らを犠牲にする人々のために用意されている。あなたたちのような人々、これほどに凡庸な取るに足りない人々は、天の恵みを享受するにまったく値しない。苦難と絶え間ない罰だけがあなたたちの生涯につきまとうだろう。わたしに忠実であることができないのなら、あなたたちの運命は苦しみに満ちたものになる。わたしの言葉とわたしの働きに対して自分の行為を説明できないのなら、あなたたちの分け前は罰だけである。どんな恵みも祝福も、神の国でのすばらしい生活も、あなたたちには無縁である。これがあなたたちに相応しい結末であり、それは自ら招いた結果である。

『言葉は肉において現れる』の「受肉した神の職分と人間の本分の違い」より

70. 次に、「あなたがたに言うておく。宮よりも大いなる者がここにいる。『わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない』とはどういう意味か知っていたなら、あなたがたは罪のない者をとがめなかったであろう。人の子は安息日の主である。」（マタイによる福音書12章6～8節）という聖句について検討する。ここでいう「宮」とは、何であろうか。「宮」とは、簡単に言えば高い大きな建物を指し、律法の時代は、宮とは司祭が神を礼拝する場であった。主イエスが「宮よりも大いなる者がここ

にいる。」と言った時、「者」とは誰をさしていたであろうか。ここで「者」とは、明らかに肉体を持つ主イエスを指す。なぜなら、神殿よりも偉大なものは主イエスのみだったからである。この聖句は人々に何を伝えているだろうか。この聖句では、神殿の外に出るよう、人々に伝えている。なぜなら、神は既に神殿の外に出ており、神は神殿では何も行っていなかったの、人々は神の足取りに続き、神の新たな業における段階に従うべきだったからである。主イエスがこうした言葉を伝えた背景には、律法のもとにおいては、神殿が神そのものよりも偉大なものであると人々が考えるようになっていたということがある。すなわち、人々は神ではなく、神殿を礼拝したので、主イエスは人々に対して偶像を崇拝せず、神は至高の存在であるので、神を崇拝するよう警告したのだ。そうしたわけで、主は「わたしが好むのは、あわれみであって、いけにえではない」と述べたのである。主イエスから見て、律法のもとでは、人々はもはやヤーウェ神を礼拝しておらず、単にいけにえを捧げる手続に従っていただけであったことは明瞭であり、したがって主イエスはその手続を偶像崇拝であると判断された。これらの偶像崇拝者は、神殿を神よりも偉大で崇高なものと考えていた。こうした者の心には神殿がなく、神は存在しなかったの、神殿を失った場合、こうした者はすみかを失った。神殿無くしては、こうした者は礼拝を行うために訪れる場所がなく、いけにえを捧げることができなかった。ここでいう、こうした者のすみかとは、ヤーウェ神の礼拝という名目で活動を行っていた場所であり、こうした者は神殿に滞在して自分たちの私事を行うことができた。ここでいう、こうした者が「いけにえを捧げる」とは、神殿で礼拝を行うという口実のもとに、自分の個人的な恥ずべき取引を行う、ということであった。当時の人々が、神殿は神よりも偉大であると考えていたのは、このためであった。こうした者は、神殿を隠れ蓑として利用し、いけにえを人々と神を欺くための口実として利用していたの、主イエスは人々に警告したのだった。こうした言葉を現在に当てはめた場合、こうした言葉は当時と同様に正当であり、適切である。現在の人々は律法時代の人々とは異なる業を経験してはいるが、人々の本質は同じである。現在における業に関しても、「神殿は神よりも偉大である」という考えと同様の物事を人々は依然として行っている。たとえば、人々は自分の任務を遂行することを職務と考えており、神を証しすること、大きな赤い龍と戦うことを、人権保護や民主主義、自由のための政治活動であると考えている。また人々は自分の技能を活用する任務を職務とするが、神を畏れ、悪を忌み嫌うことは、単に守らなければならない宗教的教義として扱うなどしている。こうした人間の表出は「神殿は神よりも偉大である」という表出と本質的に同じではなかろうか。2000年前は、人々は自分の職務を物理的な神殿で行っていたのに対し、現

在においては、人々は自分の職務を無形の神殿で行っているというだけのことである。規則を重視する人々は、規則を神よりも偉大であると考え、地位を好む人々は、地位を神よりも偉大であると考え、職務を好む人々は、職務を神よりも偉大であると考えなど、全ての表出の結果として言えるのは、「人々は、口では神を最も偉大であるとして褒めたたえるが、人々の目には、あらゆる物事が神よりも偉大であるように映る」ということである。その理由は、人々が、自分が神に付き従う道で自分自身の才能を示し、あるいは自分自身の業務ないし職務を遂行する機会を見出すとすぐに、人々は神から離れ、自分が好む職務に没頭してしまうからである。神がこうした人々に託した物事や、神の旨については、捨て去られて久しい。こうした状況のなかで、これらの人々と、二千年前に神殿で自分の個人的な取り引きを行っていた人々と何か違うであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

71. 多くの人々がわたしに隠れて地位の恩恵をむやみに欲しがり、食べ物をむさぼり食い、眠り呆け、思うことは肉の思いばかりで、肉の快楽から離れることをいつも恐れている。彼らは教会で通常の役割を果たさず、無料で食べ、あるいは、兄弟姉妹をわたしの言葉で訓戒し、自分を高くして、他人に対して威張る。これらの人々は神の旨を行っていると言い張って、自分は神と心をつににする者だといつも言う――これはばかばかしくないだろうか。あなたが正しい動機を持っていても、神の旨に沿って仕えることができなければ、あなたは愚かなのだ。しかし動機が正しくないのに、それでもまだ神に仕えていると言うなら、あなたは神に背く者であり、神から罰を受けるべきである。わたしはそのような人々にはまったく同情しない。神の家で、彼らは無料で食べ、いつも肉の安逸をやたらに求め、神の益となることは全く考慮しない。彼らはいつも自分たちに益になるものばかりを求め、神の心には何の注意も払わない。彼らのすることは神の霊に見られることはない。彼らはいつも状況を操り、兄弟姉妹に対して陰謀を企んでいる。彼らは二心の者で、ブドウ畑の狐のように、いつもブドウを盗み、ブドウ畑を踏み荒らしている。そのような人々が神と心をつににする者になれるだろうか。あなたは神の祝福を受けるにふさわしいだろうか。あなたは自分のいのちにも教会にも責任を持っていないのに、神の任務を受けるのにふさわしいだろうか。あなたのような人を誰があえて信頼するだろうか。あなたがこのような形で仕えるなら、神はあなたにあえて大きな任務を託すだろうか。あなたは物事を先延ばしにしているのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「神の心にかなうように仕えるには」より



72. 人類とはなんと残酷で残忍だろうか！狡猾で陰謀を企て、互いに争い、名声や富の為に争い合い、殺し合う――そのようなことは一体いつ終わるのだろうか。神は何十万の言葉を話したのに、誰も理解しなかった。彼らは自分たちの家族や、息子や娘たちのために、また自分たちの職業や将来、地位、虚栄心、金銭のために、また衣服や、食物、肉のために働いて来た――誰の行動が真に神のためなのだろうか。神のために行動している者たちにしても、神を知る者たちはほとんどいない。自分たちの利益のために行動していない人たちは一体何人いるだろうか。自分たちの地位を維持するために周りの人たちを圧迫も差別もしない人たちは何人いるだろうか。このように、神は数えきれないほど何度も力づくで死の宣告を受け、数えきれないほど野蛮な裁判が神に有罪判決を下し、もう一度神を十字架に釘づけにした。神のために真に働いたので、義人と呼ばれる人たちが何人いるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「悪人は必ず罰を受ける」より

73. あなたがたが今日何を行っているのか自覚したことがあるだろうか。世界中で暴れ回り、互いに陰謀を企て、騙し合い、こっそりと、恥じ入ることもなく不誠実に振舞い、真理も知らず、ひねくれて、人を欺き、お世辞を言い、自分は常に正しく他人よりも優れていると思い、自惚れ、山の野生動物のようにどう猛な振る舞いをし、獣の王のように荒っぽい。――これが人間の姿だと言えるのか。あなたは無礼で理不尽だ。あなた方はわたしの言葉を宝としたことはなく、軽蔑的な態度をとった。このようなことで、何かを達成することや、真の人生と美しい希望はどこからくるのか。あなたの過剰な想像力が、本当にあなたを虎の口から救うのか。本当にあなたを燃える炎から救うのか。わたしの働きを真に価値ある宝と見なしていたら、あなたはここまで墮落していただろうか。あなたの運命はほんとうに変えられないということだろうか。そのような後悔を抱いたまま死にたいと思うのか。

『言葉は肉において現れる』の「人の本質と地位」より

74. あなた方一人ひとは、群衆の最高の高みに昇りつめた。あなた方は昇りつめて群衆の祖先となった。あなた方は極めて身勝手であり、蛆虫の間で暴れまわりながら、安らぎの場所を求め、自分よりも小さい蛆虫を貪ろうとしている。あなた方は海底に沈んだ幽霊にも増して心の内に悪意と邪悪を持っている。あなた方は糞の最下層に住み、蛆虫を上から下まで邪魔して心穏やかにさせないようにし、争い合っているかと思えば静かになっている。あなた方は自分の身分も知らないが、それでも糞の中で争い合う。そのような争いから何が得られるのであろうか。あなた方がわたしに対し真に畏敬の

念を持っているならば、わたしの陰でどうして争い合うことができようか。身分がどんなに高くても、あなたは糞の中にいる臭く取るに足らない虫であることに変わりはないではないか。あなたは、羽を生やして空を翔ける鳩になることができようか。

『言葉は肉において現れる』の「落ち葉が土に還る時、あなたは行ったあらゆる悪事を後悔するであろう」より

75. あなたがたにとっては、自己を知るという真理にさらなる努力を捧げるのが最善であろう。なぜあなたがたは神に気に入られていないのか。なぜあなたがたの性質は神に嫌われるのか。なぜあなたがたの話す言葉は神にとっていまわしいのか。少々の忠実を示したとたんに、あなたがたは自分を称賛し、わずかな犠牲に対する褒美を要求する。ほんの少しの従順を示しただけで、他者を見下し、ささいな業を達成しただけで、神を軽蔑する。神を迎えもてなす代償として、金、贈り物、称賛を要求する。硬貨を一、二枚与えると、心が痛む。硬貨を十枚与えると、祝福と特別扱いを望む。あなたがたのそのような人間性は、話すのも聞くのも正に不快である。あなたがたの言動に何か称賛に価するものはあるのか。本分を尽くす人と尽くさない人、指導者と追随者、神を迎えもてなす人としらない人、寄付する人としらない人、言葉を説く人と受ける人など、このような人々は皆、自分を称賛する。これを可笑しいとは思わないのか。自分は神を信じていると十分に知りつつ、あなたがたはそれでも神と相容れることができない。自分には全然とりえがないことを十分に知りつつ、それでも自慢することにこだわる。あなたがたはもはや自制心をもたないところまで自分の理知が劣化してしまったとは感じないのか。そのような理知しかなくて、どうして神と関わる資格があるのか。あなたがたはこの重大事に自分のことが心配ではないのか。あなたがたの性質は既に、神と相容れることができないところまで劣化している。このような状態で、あなたがたの信仰は滑稽ではないか。あなたがたの信仰はばかげていないだろうか。あなたは自分の未来にどのように向かって行くつもりなのか。歩くべき道をどのように選ぶつもりなのか。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である」より

76. 今、わたしは地上に暮らし、人々のもとで生活している。人々は皆、わたしの働きを経験したり、わたしの発言を見守ったりしている。またそれとともに、わたしの追随者たちがわたしからいのちを受け、それゆえに彼らがたどることのできる道を得られるように、彼ら一人ひとりにあらゆる真理を授ける。わたしは神、いのちを与えるものだからである。わたしの何年もの働きのあいだ、人間は多くを受け、多くをあきらめてきたが、それでも人間は真にわたしを信じていないとわたしは言う。なぜなら、人間はわたしが神であること口先では認めはするものの、わたしが話す真理には異議を唱え

、わたしが彼らに要求する真理の実践を行なうことなど尚更ないからである。つまり、人間は神の存在だけを認め、真理の存在は認めない。神の存在だけを認め、いのちの存在は認めない。神の名だけを認め、神の本質は認めない。その熱心さゆえに、人間はわたしにとって嫌悪するべきものとなった。人間はわたしを欺くために、耳に心地よい言葉を使うだけで、わたしを真の心をもって礼拝する者はいないからである。あなたがたの言葉には、蛇の誘惑がある。さらに、それは極端なまでに不遜で、まさに大天使の宣言そのものである。その上に、あなたがたの行いは不名誉なほどにボロのように破れている。あなたがたの過度の欲望や貪欲なもくろみは聞くに堪えない。あなたがたは皆、わたしの家の蛾、嫌悪をもって捨て去られる対象になった。あなたがたの誰も真理を愛する人ではなく、むしろ祝福を欲し、天に昇ることを欲し、キリストが地上でその力を振るう荘厳な光景を見ることを欲する人だからである。しかし、そこまで深く墮落し、神が何であるかを全く知らないあなたがたのような人が、どうして神に従うに値することがあり得るのかを考えたことがあるのか。どうして天に昇れるというのだろうか。壮麗さにおいて前例のないその荘厳さを見るのに、どうして値することがあり得るというのか。あなたがたの口は欺きと汚物、裏切りと傲慢の言葉で満ちている。誠実な言葉をわたしに語ったこともなければ、聖なる言葉も、わたしの言葉を経験しても、わたしへの服従の言葉も語ったことがない。最後には、あなたがたの信仰はどのようになるのだろうか。あなたがたの心は欲望と富で、あなたがたの頭は物質的なもので満ちている。日々、あなたがたはいかにして何かをわたしから得ようかと、どれほどの富と幾つの物質的なものがあるかを計算している。日々、さらに多くの、もっと良い享受されるものが享受できるようにと、あなたがたにさらなる祝福が施されるのを待っている。あなたがたの考えにいつ何時もあるのはわたしではなく、わたしから来る真理でもなく、むしろあなたがたの夫（妻）や息子、娘、あるいは食べたり着たりするもの、あなたがたの楽しみがいかに増え、さらに良くなることができるかということである。たとえ限界まで満腹したところで、あなたがたは死体とほとんど変わらないのではないのか。たとえ外見を豪華に着飾ったところで、あなたがたはいまだに、いのちのない歩く屍ではないのか。あなたがたは食べ物のために、髪に白髪が交じるまで懸命に働くが、わたしの働きのために毛一本犠牲にする者は誰もいない。あなたがたは常に、体を酷使し頭を悩ませて、自分の肉体のため、息子や娘のために働きづめだが、わたしの心に気づかいを見せる者はひとりとしていない。あなたがたがわたしからまだ得ることを期待しているものは何なのか。

『言葉は肉において現れる』の「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」より

77. あなたがたの心は悪、裏切り、欺きで満ちている。そのような状態であるならば、あなたがたの愛には幾つの不純物があるのか。あなたがたは、自分はわたしのためにすでに十分あきらめてきたと思っている。自分のわたしへの愛はすでに十分だと考えている。しかし、それならば、あなたがたの言葉と行動にはなぜいつも反抗と欺きがあるのか。あなたがたはわたしに従うものの、わたしの言葉を認めない。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしを脇へ置く。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしに疑いをもっている。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしの存在を受け入れられない。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、わたしが誰であるかに相応しくわたしを扱わず、あらゆる機会にわたしにとって物事を困難にする。これを愛とみなすのか。わたしに従うものの、あらゆる事柄においてわたしをからかい欺こうとする。これを愛とみなすのか。わたしに仕えるものの、わたしを恐れない。これを愛とみなすのか。あなたがたはあらゆる面で、あらゆる事柄においてわたしに反対する。これをすべて愛とみなすのか。あなたがたはかなりの犠牲を捧げてきたのは確かである。しかし、わたしがあなたがたに要求することを実践したことが全くない。これを愛とみなすことができるだろうか。注意深く検討すると、あなたがたの中にはわたしへの愛のほんの少しのほんのめかしもないことがわかる。これほど長年の働きとあれだけ多くの言葉を与えてきた後、あなたがたは実際にどれほどのことを得てきたのか。このことは注意深く振り返り検討する価値がないだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」より

78. 神の意志を理解しない人々は神の敵対者である。神の意志を理解するが、真理を実行しない人々は神の敵対者である。神の言葉を飲食するが、なおも神の言葉の本質に逆らう人々は神の敵対者である。受肉した神の観念を持ち、故意に反抗する人々は神の敵対者である。神を裁く人々は神の敵対者である。神を知ることができず、神を証しすることができない者は誰でも神の敵対者である。それゆえ、わたしの忠告を聞きなさい。あなたがたが本当にこの道を歩む信念を持っているなら、その道をたどり続けなさい。神に敵対するのをやめることができないなら、手遅れにならないうちに立ち去るのが一番良い。そうでなければ、良くなるどころかかえって先が思いやられるだろう。なぜならあなたがたの本性はあまりにも堕落しているからである。あなたがたは、微塵ほどの忠誠心や服従心も、義や真理を渴望する心も持っていない。神に対する愛もほんの少しも持ち合わせていない。神を前にしたあなたがたの状態はまったくひどい有様である。あなたがたは守るべきものを守ることができず、言うべきことが言えない。実行す

べきことが実行できず、果たすべき役割を果たすことができない。持つべき忠誠心、良心、服従心、あるいは決意を持っていない。耐えるべき苦しみに耐えておらず、持つべき信仰を持っていない。あなたがたはいかなる長所にも全く欠けている。あなたがたは生存していくための自尊心をもっているだろうか。あなたがたは目を閉じて永遠の眠りについての方がまだましだと、わたしは言わざるを得ない。そうすれば神はあなたがたのために心配したり、苦しみに耐えたりする必要はなくなる。あなたがたは神の存在を信じているが、神の意志を知らない。あなたがたは神の言葉を飲食するが、神の要求に応じることができない。あなたがたは神を信じているが、神を知らない。そして追い求める目的もなしに生きている。あなたがたは何の価値も目的も持っていない。あなたがたは人として生きているが、何の良心も、品位も、わずかな信頼性も持たない。どうしてあなたがたを人とみなすことができようか。あなたがたは神を信じているのに神をだます。そのうえ、あなたがたは神の金を奪い、神の捧げものから食べるが、結局、神の感情への配慮や神への良心はまったく示さない。最も些細な神の要求にさえ応じることができない。そんなあなたがたをどうして人とみなすことができようか。あなたがたが食する食べ物、呼吸する空気は神から来ており、あなたがたは神の恵みを享受しているのに、結局は、神についてほんの僅かの認識さえ持っていない。それどころか、あなたがたは神に敵対するろくでなしになってしまった。それでは、あなたがたは犬同然の獣ではないのだろうか。動物の中であなたがたよりたちの悪い動物はいるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神を知らない人はすべて神に反対する人である」より

79. あなたがたの忠誠心は言葉の中のみにあり、あなたがたの認識は単に知的で観念的であり、あなたがたの労働は天国の祝福を受けるためのものであるが、それではあなたがたの信仰はどのようなものでなければならないのか。今日なお、あなたがたは真理の言葉の一つ一つに対し、耳を貸そうとしない。あなたがたは神が何かを知らない。キリストが何かを知らない。あなたがたはヤーウェを畏れる方法を知らない。どのように聖霊の働きに入っていくのかを知らない。あなたがたは神自身の働きと人の惑わしの区別の仕方を知らない。ただ、自分の考えに沿わない、神が表した真理の言葉を非難することだけを知っている。あなたの謙虚さはどこにあるのか。あなたの従順はどこにあるのか。あなたの忠誠心はどこにあるのか。真理を求める気持ちはどこにあるのか。あなたの神への畏敬はどこにあるのか。わたしはあなたがたに言う。しるし故に神を信じる者は、滅ぼされる部類であることは確かである。肉に戻ったイエスの言葉を受け入れ

ることができない者は、地獄の子孫であり、天使長の末裔であり、永遠の破滅を逃れることのできない部類である。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

80. 男女を問わず、あなたがたはそれぞれ、一日中何に気を取られているであろうか。あなたがたは自分の食事を誰に依存しているか、知っているであろうか。自分の衣服や、刈り取って自分の手の中にあるものを見て、自分の腹をさすって見るがいい。あなたがたが注いだ血と汗の結果は、何であろうか。あなたは依然として観光旅行に出掛けようとしたり、悪臭を放つ自分の肉を飾ろうとしたりしている。それにどのような価値があるというのか。あなたは正常であるよう求められているのに、正常でないどころか、その反対である。そうしたものが、どうして厚かましくもわたしの前に来ることが出来ようか。こうした人間性で、自分の肉を示して闊歩し、常に肉の欲の中で生活しているのであれば、あなたは不浄な悪魔と悪霊の末裔ではなかろうか。わたしはそうした不浄な悪魔を長く生かしてはおかない。そして、あなたの心にある考えをわたしが知らないと思わないように。あなたは自分の欲と肉を厳しく律しているかも知れないが、あなたの心にある考えや、あなたの目が望む物事を、わたしが知らないことがあり得るだろうか。あなたがた若い女性達が花のように愛らしい化粧をしているのは、自分の肉を誇示するためではなかろうか。あなたがた女性諸君にとって、男性の存在とは何であろうか。男性は苦難の海から本当にあなたがたを救い出すことが出来るであろうか。また、遊び歩いている男性諸君は、紳士的で目立つ装いだが、それは自分の容姿を自慢するためでは無かろうか。それに、あなたがたは、誰のためにそうしているのだろうか。あなたがた男性諸君にとって、女性はどうのような利益があるであろうか。女性はあなたがたにとって罪の源ではなかろうか。あなたがた男性諸君と女性諸君に対し、わたしは多くの言葉を述べてきたが、そのうち、あなたがたが応じている言葉はほんの僅かである。あなたがたの耳はこもり、目はかすみ、心は冷酷になり、身体には欲望だけしか無くなる。あなたがたはそうした状態から抜け出せない。汚物の中でもがくうじのようなあなたがたに、誰が近付きたいと思うだろうか。あなたがたは、肥やしの中からわたしが取り上げた者でしかないこと、そして元来、正常な人間性を備えていなかったことを忘れてはならない。わたしがあなたがたに求めているのは、元来あなたがたに備わっていなかった正常な人間性である。わたしは、あなたがたが自分の欲望を誇示することや、長年にわたって悪魔により鍛えられた悪臭を放つ肉を自由にさせることは求めて居ない。あなたがたがそのように着飾る時、自分が一層深い罠に陥ることを恐れないであろう

か。あなたがたは、元来自分が罪深いということを知らないのだろうか。あなたがたは、自分の体が肉欲に満ちていることを知らないのだろうか。あなたがたの欲望は、あなたがたの衣服から染み出て、あなたがたの耐えがたいほど醜く汚れた悪魔としての状態が現れるほどである。あなたがたにとって、それは最も明瞭な事ではなかろうか。あなたがたの心や目や唇は、すべて不浄な悪魔に汚されているのではなかろうか。あなたの心や目や唇は、不浄ではなかろうか。あなたは、倫理に反する<sup>80</sup>ことをしない限り、自分は最も聖いと思っている。また、可愛らしく着飾れば自分の卑しい魂を隠すことが出来ると考えているが、そのようなことは決して出来ない。わたしはあなたに、一層現実的になるよう、助言する。欺いたり偽ったりしてはならない。また自分を誇示してはならない。あなたがたは自分の欲望を互いに誇示するが、あなたがたが得るのは、永遠の苦難と冷酷な懲らしめだけである。あなたは、どのような必要性があって互いに戯れ、恋するのであろうか。それは、あなたがたの清廉さであらうか。それにより、あなたがたは正直になるであらうか。わたしは、あなたがたのうち魔法の薬や魔術を行う者や、自分の肉を愛する若い男女を忌み嫌う。あなたがたは、自制するのが理想的である。なぜなら、今日わたしがあなたに求めているのは、あなたの欲望を誇示することではなく、正常な人間性を備えることだからである。あなたがたは、常にあらゆる機会を利用している。なぜなら、あなたがたの肉や欲望が大きすぎるからである。

『言葉は肉において現れる』の「実践(7)」より

81. わたしの業の期間において、あなたがたは常にわたしに反対する行動を取り、決してわたしの言葉に従わなかった。わたしは自分の業を行い、あなたは、あなたの業を行い、あなたは自分の小さな王国を建てる。あなたがたは、きつねと犬の群れのようにであり、あなたがたの行動は、全てわたしに反対するものである。あなたがたは常に、自分のことだけを愛するものを抱こうとする。あなたがたの敬愛は何処にあるのか。あなたがたの行動は、すべて偽りである。あなたがたには、服従や敬愛が一切無い。あなたがたの行動は、全て偽りであり、冒瀆である。そうした人々が救われ得るであらうか。性的倫理が欠如し、好色な男性は、常に妖艶な売春婦を惹き付けて「享楽」に耽溺することを望む。わたしはそうした性的倫理が欠如した悪魔を救わず、そうした不浄な悪魔を忌み嫌う。その好色さ、妖艶さにより、あなたがたは陰府に落とされた。あなたがたは、自分に対して何を述べるであらうか。あなたがたのように不浄な悪魔や悪霊のような者は、極めて凶悪である。あなたがたは非常に不快である。どうしてそうしたくずのような人々が救われるであらうか。罪から抜け出せずにいる人々は、それでも救われ

るであろうか。これらの真理、この道、そしてこのいのちは、あなたにとって何の魅力も無い。あなたがたは罪深さ、金銭、地位や名声、利益、肉の享楽、男性の端正さ、女性の色っぽさに惹かれる。あなたがたには、どのような資格があって、わたしの国に入るといえるのか。あなたがたの像は、神よりも尊大であり、あなたがたの地位は神よりも高く、人々の中でのあなたがたの名声は言うまでも無い。あなたがたは、他人に崇拜される偶像となっている。あなたは、大天使となったのではなかろうか。人間の最後が示される時は、救いの業が完了する時でもあり、あなたがたのうち多くの者が、救いの限界を超えた屍となっており、排除されなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「実践(7)」より

82. 人間は自身を大切にしないので、価値のない不幸な人たちと言える。もし彼らが自分自身さえ愛せず、踏みにじるならば、彼らは価値がないことになるではないか。人類は自分をもてあそび、進んで他人に汚されようとする不道德な女性のようなものである。しかし、たとえそうであっても、人類はまだ自分がどんなに卑しいかわからない。彼らは他人のために働くことや、自分を他人の支配下に置いて話すことに喜びを見出す。これは実に人類の汚さではないだろうか。わたしは人類の中で人生を経験していないし、真に人間の生活を経験していないが、人間のあらゆる動き、あらゆる行動、あらゆる言葉、あらゆる行いを非常に明確に理解している。わたしは人類を最も強い羞恥心に晒すこと、彼らがもはや自分自身のごまかしを見せられなくなるまで、自分の願望に譲歩しなくなるまで、その身を晒させることさえできる。殻の中に退くカタツムリのように、彼らはもはや自分の醜い状態をあえてさらけ出しはしない。人類は自分自身を知らないで、その最大の欠点は、醜い顔つきを見せびらかしながら自分たちの魅力を他人に見せびらかすのを厭わないことであり、これは神がもっとも嫌うことである。人々の間の関係は異常であり、正常な人間関係は存在しないので、ましてや神との関係は正常<sup>33</sup>ではない。神は多くを語っており、そうする中での神の主要な目的は人類の心の中に一定の場所を占めることであり、人々の心の中からすべての偶像を取り除かせることなのだ。それができた時には、神は全人類に力をふるい、地上に神が存在する目的を達成することができる。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十四章」より

83. わたしはこのようにあなたがたの間で働き、語った。わたしは多くの力と努力をつぎ込んだが、あなたがたは、わたしがはっきりと語った言葉にいつ耳を傾けたのだろうか。あなたがたは全能者であるわたしにどこでひれ伏したのか。あなたがたはなぜわ



たしをこのように扱うのか。なぜあなたがたが話すこと、することのすべてがわたしの怒りを呼び起こすのか。なぜあなたがたの心はそれほど頑ななのか。わたしはあなたがたを打ち倒したことがあるか。なぜあなたがたはわたしを悲しませ、心配させることしかしないのか。あなたがたは、わたしヤーウェの怒りの日があなたがたに臨むのを待っているのか。あなたがたの不服従により呼び起こされた怒りをわたしが注ぐのを待っているのか。わたしがするすべてのことは、あなたがたのためではないのか。それなのに、あなたがたはいつもわたしヤーウェをこのように扱ってきた。わたしの捧げ物を盗み、わたしの祭壇のいけにえを家に持って帰り、オオカミの穴にいる子や孫を養っている。「人々」は互いに戦い、怒りに満ちたまなざしで、剣と槍を持って向かい合い、全能者であるわたしの言葉を便所に投げ込み、排泄物のようにけがれたものになっている。あなたがたの人格はどこにあるのか。あなたがたの人間性は獣性になってしまった。あなたがたの「心」はずっと前に石になってしまっている。あなたがたは、わたしの怒りの日が来るときこそ、今日あなたがたが全能者であるわたしに対して行う悪をわたしが裁くときであることを知らないのか。このようにわたしをだまし、わたしの言葉を沼地に投げ込んで耳を傾けず、わたしの背後でこのようにふるまって、わたしの怒りの目を逃れられると思うのか。あなたがたがわたしのいけにえを盗み、わたしの財産をむやみに欲しがったとき、あなたがたはわたしヤーウェの目に既に見られていたことを知らないのか。あなたがたがわたしのいけにえを盗んだとき、それはいけにえが捧げられる祭壇の前であったことを知らないのか。このようにわたしをだませるほど自分たちが賢いなどどうして思えるのか。あなたがたの憎むべき罪から、どうしてわたしの怒りが去るであろうか。どうしてわたしの燃える怒りが、あなたがたの悪行を行き過ぎるだろうか。あなたがたが今日行う悪は、あなたがたに逃げ道を開くことはなく、あなたがたの明日に刑罰を積み上げる。それは、あなたがたに対して、全能者であるわたしの刑罰を引き起こす。あなたがたの悪行と悪しき言葉が、どうしてわたしの刑罰から逃れられるだろうか。どうしてあなたがたの祈りがわたしの耳に届くだろうか。どうしてあなたがたの不義に、わたしが逃げ道を用意するだろうか。どうしてわたしに逆らって行うあなたがたの悪行をそのままにしておけるだろうか。蛇の舌のように毒に満ちたあなたがたの舌を切らずにいられようか。あなたがたは自分の義のためにわたしに依り頼まず、自分の不義の結果として、わたしの怒りを積み上げている。どうしてわたしがあなたがたを赦せようか。全能者であるわたしの目には、あなたがたの言葉と行いはけがれている。全能者であるわたしの目は、あなたがたの不義を無限の刑罰と見なす。どうしてわたしの義なる刑罰と裁きがあなたがたから離れるだろうか。あなたがたがわたしにこんなこ

とをして、わたしを悲しませ怒らせるのに、どうしてあなたがたをわたしの手から逃れさせ、わたしヤーウェがあなたがたを罰して呪う日から離れさせることなどできようか。あなたがたのすべての悪しき言葉が、すでにわたしの耳に届いていることを知らないのか。あなたがたの不義がすでにわたしの聖なる義の衣を汚したことを知らないのか。あなたがたの不服従がすでにわたしの激しい怒りを呼び起こしたことを知らないのか。あなたがたがわたしを長い間怒りに煮えくり返るまま放置し、わたしの忍耐をずっと試してきたことを知らないのか。既にあなたがたがわたしの肉体をぼろぼろに傷つけたことを知らないのか。わたしはこれまで我慢してきたが、わたしはわたしの怒りを放ち、あなたがたをもう容赦しない。あなたがたの悪行がすでにわたしの目に届き、わたしの叫びがすでにわたしの父の耳に届いていることを知らないのか。どうして彼が、あなたがたがわたしをこのように扱うことを許すだろうか。わたしがあなたがたに行くすべての働きは、あなたがたのためではないか。それなのに、あなたがたのうち誰が、わたしヤーウェの働きをさらに愛するようになっただろうか。わたしが弱いからといって、わたしが苦しみを受けたからといって、わたしがわたしの父の旨に忠実でないことなどあり得ようか。あなたがたにはわたしの心が分からないのか。わたしはヤーウェがしたようにあなたがたに語る。あなたがたのためにわたしは多くを捧げたではないか。わたしは父の働きのためにこのすべての苦しみに喜んで耐えるけれども、わたしの苦しみの結果としてあなたがたの上にもたらす刑罰を、あなたがたがどうして免れようか。あなたがたはわたしの多くを享受したではないか。今日、わたしは、わたしの父によってあなたがたに授けられたのだ。あなたがたは、わたしの豊富な言葉よりも、はるかに多くのものを享受していることを知らないのか。わたしの命が、あなたがたの命、及びあなたがたが享受するものと引き換えられたことを知らないのか。わたしの父がサタンと戦うためにわたしの命を使ったこと、またわたしの命をあなたがたに与えて、あなたがたが百倍を受けるようにし、多くの誘惑を避けられるようにしたことを知らないのか。あなたがたが多くの誘惑と、また多くの火の刑罰を免れたのは、ただわたしの働きによってであることを知らないのか。あなたがたがこれまで楽しむことをわたしの父が許しているのは、ただわたしの故であることを知らないのか。どうしてあなたがたの心は今日、たこができてしまったかのように、頑ななままなのか。あなたがたが今日犯す悪は、わたしが地上から去った後に来る怒りの日から、どうして逃れられるだろうか。これほど心の頑なな者たちを、わたしはどうしてヤーウェの怒りから逃れさせることができようか。

84. 臭く取るに足らない虫であるあなた方は、わたし、ヤーウェの祭壇から生贄を盗む。そうする中で、墮落し、衰えている自らの名を回復して、イスラエルの選民になることができようか。あなた方は恥知らずの哀れな存在である。祭壇の生贄は人々がわたしにささげた物であり、わたしを恐れる人々の情け深さを表している。それらはわたしが支配するためのものであり、わたしが用いるためのものであるのに、人々が捧げた小さなキジバトをどうしてわたしから奪うことができようか。あなたはユダになることを恐れないのであろうか。あなたの地が血に染まった荒野となることを恐れないのであろうか。恥知らずな者よ。あなたは、人々が捧げたキジバトが蛆虫であるあなたの腹を養うためだけの物であると思っているのか。わたしがあなたに与えた物は、わたしが喜んで与えた物である。わたしがあなたに与えなかった物はわたしが好きなようにできるのであって、あなたがわたしへの捧げ物をただ盗むことはできない。働く者はわたし、ヤーウェー創造の神であり、人々が生贄を捧げるのは、わたしのためである。あなたは、それがあくせくしているあなたへの報酬であると思うのか。あなたは本当に恥知らずである。あなたがあくせくするのは、誰のためであるか。自分のためではないか。なぜわたしの生贄を盗むのか。なぜわたしの金袋から金を盗むのか。あなたはユダ・イスカリオテの息子ではないか。わたし、ヤーウェの生贄は、祭司が享受するものである。あなたは祭司であるのか。あなたは、うぬぼれてわたしの生贄を食べ、食卓に並べさえるのか。あなたには何の価値もない。あなたは何の価値もない、哀れな存在である。わたし、ヤーウェの火は、あなたを燃えつくすであろう。

『言葉は肉において現れる』の「落ち葉が土に還る時、あなたは行ったあらゆる悪事を後悔するであろう」より

85. あなたの長年の神への信仰の日々において、あなたは誰ものろったことはなく、何も悪いことをしたことがないかもしれない。しかし、あなたのキリストとの関わりにおいて、あなたは真実を語れず、誠実に振る舞えず、キリストの言葉に従えない。そのため、あなたは世界で一番腹黒く邪悪な人である、とわたしは言う。あなたは親戚、友人、妻（あるいは夫）、息子や娘、両親には極めて親切で献身的で、決して他人を利用したりはしないかもしれない。しかし、キリストと相容れることができないのなら、キリストと調和して交流することができないのなら、たとえあなたが隣人を助けるためにすべてを捧げたり、父や母、その他の家族を細やかに世話したりしても、あなたはそれでも悪意があり、さらにずるがしこい策略に満ちている、とわたしは言う。他人と仲良くしているからや少しの善行を行うからというだけで、自分はキリストと相容れると思ってはならない。あなたは自分の親切な意図が天の恵みをだまし取れると思っている

のか。少しの善行をすることが、従順になることの代わりになると思っているのか。あなたがたのうち誰も取り扱われ、刈り込まれることを受け入れることができず、皆がキリストの普通の人間性を受け入れることに困難を感じる。それにもかかわらず、自分の神への従順をいつも自慢している。あなたがたのこんな信仰はそれに相応しい報いを引き起こす。気まぐれな幻想にふけり、キリストを見たいと望むのはやめなさい。あなたがたの霊的背丈はあまりに小さく、それゆえキリストを見る資格さえないからである。反抗心を完全に拭い去り、キリストと調和できるようになったときに、神は自然にあなたに現れる。もしあなたが刈り込みや裁きを経験せずに神を見に行くのであれば、あなたは疑いなく神の敵になり、破滅することになる。人間の本性は元来神に敵対している。すべての人間はサタンの深遠なる墮落にさらされたからである。もし人間がその墮落の只中から神と関わろうとしても、そこから何一つ良いものが生まれないことは確実である。人間の言動は、あらゆる節目に人間の墮落を確実にさらけ出し、神との関わりにおいて、人間の反抗心はあらゆる面で明らかにされる。知らず知らずに、人間はキリストに反対し、キリストを欺き、キリストを見捨てるようになる。これが起こると、人間はますます危険な状態に陥り、これが続けば、人間は懲罰の対象になるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である」より

86. わたしは実に多くの言葉を発した。また、わたしの心と性質を明らかにしてきた。それなのに、人々はまだわたしを知り、わたしを信じることができずにいる。あるいは、人々はまだわたしに従えずにいると言える。聖書の中に生きる人々、律法に囲まれて生きる人々、十字架上で生きる人々、教義に従って生きる人々、わたしが今日している働きの中で生きている人々——この中の誰がわたしと融和しているであろうか。あなたたちは、祝福とねぎらいを受け取ることを考え、どうしたらわたしと融和できるか、どうしたらわたしの敵になることがないかということを少しも考えようとしたことがない。わたしは、ほんとうにあなたたちに失望した。わたしは実に多くをあなたたちに与えてきたのに、ほとんど何もあなたたちから受けていないのだから。あなたたちの欺き、あなたたちの傲慢、あなたたちの貪欲、あなたたちの途方もない欲求、あなたたちの裏切り、あなたたちの不服従——このどれにわたしが気づかずにいるのか。あなたたちはわたしをごまかし、わたしをからかい、わたしを侮辱し、わたしを欺き、わたしに要求し、わたしに犠牲を強要する——そうした悪行がどうしてわたしの罰を免れることができようか。あなたたちの邪悪な行為は、わたしへの敵意の証拠、あなたたちがわたしと融和しない証拠である。あなたたちの一人一人が、自分はわたしの心になう

と信じているが、もしそうなら、誰にその反論できない証拠が適用されるのか。あなたたちは、自分はわたしにこのうえなく誠実で忠実だと信じている。あなたたちは、自分はまことに親切で、思いやりがあり、わたしに多くを捧げてきたと思っている。あなたたちは、自分はわたしに十分奉仕したと思っている。しかし、そうした考えを自身の行いに引き比べてみたことがあるだろうか。わたしに言わせれば、あなたたちはひどく傲慢で、ひどく貪欲でひどくいい加減だ。あなたたちがわたしをばかにする手口は、とても狡猾で、愚かな意図や愚かしい手段をいろいろもっている。あなたたちの忠誠はごくわずかでしかなく、あなたたちの誠意はあまりに薄く、あなたたちの良心は、さらに乏しい。あなたたちの心にはあまりに多くの悪意があって、誰もその悪意から免れられない。わたしでさえ。あなたたちは、自分の子ども、夫、あるいは自己保存のためにわたしを締め出す。わたしのことを気にする代わりに、あなたたちは自分の家族、子供、地位、将来、自分の欲求充足を気にかけている。あなたたちは、話し行動しながらわたしのことを考えたことがいつあったであろうか。寒いとき、あなたたちは自分の子供、夫、妻、あるいは親のことを思う。暑いときもまた、わたしはあなたたちの思いの内に入っていない。務めを果たしている時、あなたは、自分の利益、自分の身の安全、自分の家族のことを考えている。あなたがわたしのために何をしたことがあるというのか。あなたは、いつ、わたしのことを考えたのか。あなたは、わたしとわたしの働きのために惜しむことなく身を捧げたことがいつあったであろうか。あなたがわたしの味方である証拠はどこにあるのか。あなたのわたしへの忠誠はどこに実在しているのか。あなたのわたしへの従順さはどこに実在しているのか。あなたの意図が、わたしから祝福を受けるためではなかったことがいつあったであろうか。あなたたちはわたしをだまし、欺き、真理を弄び、真理の存在を隠し、真理の本質を裏切る。あなたたちはわたしに敵対している。それでは、あなたたちの未来には何が待っているのか。あなたたちはただ、漠然とした神の心になおおうとして、単に漠然とした信仰を追究しているが、あなたたちはキリストと融和しない。あなたたちの悪事は、邪悪な者たちが当然受けるものと同じ報復を受けるのではないか。その時、あなたたちは、キリストと融和しない者で、怒りの日を免れることのできる者はいないことに気づくであろう。あなたたちはまた、キリストに敵対する者にどのような報復が行われるかを知ることになるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと融和する道を探せ」より

87. あなた方はみな、神の前で報われ、神の寵愛を受けたいと願っている。神を信じ始めた者は誰でもそのようなことを望むものである。誰もが高尚な物事を追い求める

ことに夢中になり、誰ひとり他者に後れを取りたくないからである。これが人というものである。まさにそれゆえに、あなた方の多くが絶えず天の神の機嫌を取ろうとしているのだが、実際には、あなた方の神に対する忠実さと正直さは、自分自身に対する忠実さと正直さよりもはるかに劣る。私はなぜそう言うのか。なぜなら私は、神に対するあなた方の忠実さを全く認めておらず、それどころか、あなた方の心の中にいる神の存在を否定しているからである。言うなれば、あなた方が崇拝する神、あなた方が敬慕する漠然とした神は、そもそも存在していないのである。私がこれほどまでに断言できるのは、あなた方が真の神からあまりにも遠ざかっているからである。あなた方の忠実さの根拠は、あなた方の心の中にある偶像である。一方、私から見れば、あなた方は偉大とも非力とも思っていない神を、言葉で認めているにすぎない。神から遠ざかっていると言うのは、あなた方が漠然とした神を身近に感じている一方で、真の神からは遠く離れているということである。「偉大ではない」と言うのは、今日あなた方の信じている神が、大した能力のない人間、大して高貴ではない人間のようにしか見えていないことを指している。そして「非力ではない」と言うのは、その人物が雲を呼び雨を降らせることはできないにしても、神の霊に呼びかけて天と地を揺るがすほどの働きをさせ、人々をすっかり困惑させることができるという意味である。表面上、あなた方はみな地上のキリストに極めて従順なようだが、実質的にはキリストを信仰してもいなければ愛してもいない。つまり、あなた方が本当に信じているのは自分自身の感情という漠然とした神であり、あなた方が本当に愛しているのは、日夜恋い慕うものの直接会ったことがない神なのである。キリストに対するあなた方の信仰はわずかでしかなく、愛はない。信仰とは信じることと信頼することである。愛とは心の中で崇拝して敬慕し、決して離れないことである。しかし、今日のキリストに対するあなた方の信仰と愛は、そこにまったく至っていない。信仰について言えば、あなた方はキリストをどのように信仰しているのか。愛について言えば、あなた方はキリストをどのように愛しているのか。あなた方はキリストの性質を全く理解しておらず、ましてやキリストの実質などなおさら知らないのに、どのようにしてキリストを信仰するというのか。キリストに対するあなた方の信仰の実体はどこにあるのか。どのようにキリストを愛しているのか。キリストに対するあなた方の愛の実体はどこにあるのか。

『言葉は肉において現れる』の「どのように地上の神を知るか」より

88. イエスを見る前には、つまり、受肉した神を見る前には、たとえばイエスの外観、話し方、生き方などについて、あなたがたはあらゆる考えを抱くことであろう。し

かし、ひとたび本当にイエスを見たら、あなたがたの考えはすぐ変わる。なぜか。その理由を知りたいか。人間の考えを見過ごすことはできないというのは本当である。しかしそれ以上に、キリストの本質は人間が変えることを許さない。あなたがたはキリストは神仙であり、あるいは賢人としてとらえており、誰一人としてキリストを神聖な本質をもつ普通の人としてとらえていない。したがって、昼も夜も神に会うことを切望している人の多くが実は神の敵であり、神と相容れないのである。これは人間側の間違いではないだろうか。今でさえ、あなたがたは自分の信心と忠実は十分なので自分はキリストの顔を見るのに相応しいと考えている。しかし、わたしはあなたがたに実際的なものをさらに多く備えるように強く勧告する。これは、過去、現在、未来において、キリストと触れ合う人の多くが失敗したから、また失敗するからである。彼らは皆パリサイ人の役割を演じる。あなたがたの失敗の理由は何か。それはまさに、あなたがたの観念の中に立派で称賛に値する神がいることである。しかし実際は人間が望むとおりではない。キリストは立派でないだけでなく、特に矮小である。キリストは人間であるというだけでなく、ごく普通の人間である。キリストは天に上がることができないだけでなく、地上を自由に動き回ることもできない。そのため、人々はキリストを普通の人間として扱う。人々はキリストと共にいるときにキリストを気軽に扱い、不注意に話しかけ、しかも同時に「真のキリスト」の到来をいまだに待っている。あなたがたは既に到来したキリストを普通の人間とみなし、その言葉を普通の人間の言葉とみなしている。このため、あなたがたはキリストから何も受け取っておらず、代わりに自らの醜さを完全に光にさらけ出しているのである。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である」より

89. キリストと触れ合う前に、あなたは自分の性質が完全に变化したと、自分はキリストの忠実な追随者であり、キリストの祝福を受けるに自分ほど値する人は他にいないと、多くの道を旅し、かなりの働きを行ない、多くの成果をもたらしてきたので、あなたは最後に栄冠を受ける人の一人になるに違いないと信じているかもしれない。しかし、あなたが知らないかもしれない真実が一つある。すなわち、人間の墮落した性質と反抗心と抵抗は、人間がキリストを見るときに暴露され、そのときに暴露される反抗心や抵抗は他のどの時よりも絶対的に完全に暴露される。それは、キリストは人の子、すなわち普通の人間性をもつ人の子であるため、人間はキリストに栄誉を与えることも尊敬することもないからである。神が肉において生きているために、人間の反抗心は徹底的に、詳細まで鮮明に光にさらけ出される。それで、キリストの到来は人類の反抗心を

すべて明るみに出し、人類の本性を際立たせた、とわたしは言うのである。これは「山から虎をおびき出す」、「洞窟から狼をおびき出す」と呼ばれる。あなたは自分は神に忠実であるとあつかましくも言うのか。自分は神に絶対的な服従を示しているとあつかましくも言うのか。自分は反抗的ではないとあつかましくも言うのか。「神がわたしを新しい環境に配置するたびに、わたしはいつも不平を言わずに服従し、さらに、神についての観念も一切抱かない」と言う人がいる。また、「神がわたしに何を課しても、わたしは力の限りを尽くし、決して怠けない」と言う人もいる。ならば、わたしはあなたがたに問う。キリストと共に生きるとき、あなたがたはキリストと相容れることができるのか。そして、どれだけの時間のあいだ、キリストと相容れるのか。一日か。二日か。一時間か。二時間か。あなたがたの信仰は確かに称賛すべきものかもしれないが、粘り強さという点では、あなたがたは大したことはない。ひとたび本当にキリストと共に生きようになると、あなたの独善性とうぬぼれは言葉と行動をとおして少しずつさらけ出され、あなたの行き過ぎた欲望、不服従な考え方、不満もまた自然に明らかになる。最終的には、あなたの傲慢はさらに大きくなり、水と油のように、あなたとキリストは相容れなくなり、そうなるあなたの本性は完全に露わになる。そのとき、あなたの観念はそれ以上隠すことはできなくなり、あなたの不満も自然に表れ、あなたのいやしい人間性は完全にさらけ出される。しかし、そのときでさえ、あなたは自分の反抗心を否定し続け、代わりに、このようなキリストは人間には受け入れ難く、人間に対して厳し過ぎ、もしキリストがもっと優しくれば完全に服従するだろうと考える。あなたがたは自分の反抗心には正当な理由があり、キリストが自分に何かを強要しすぎるときだけキリストに反抗するのだと考える。あなたがたは自分がキリストを神として見ておらず、キリストに従う意志がないことを一度たりとも考慮したことがない。むしろ、キリストがあなたの望みどおりに働きを行うことを執拗なまでに主張し、キリストがあなたの考え方と一致しないことを一つでもすれば、直ちにキリストは神ではなく、一人の人間だと考える。あなたがたの中には、このようにキリストと争ったことがある人が多くいるのではないのか。あなたがたが信じているのは結局のところ誰なのか。そして、あなたがたはどのように追い求めているのか。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である」より

90. あなたがたはキリストを見たいと常に思っているが、自分をそのように高く評価しないことをわたしは勧める。誰でもキリストを見ることができるが、誰もそうするに相応しくない、とわたしは言う。人間の本性は邪悪、傲慢、反抗心に満ちているため



、キリストを見た瞬間にあなたの本性はあなたを破壊し、あなたを死に至らせる。あなたの兄弟（あるいは姉妹）との関わりは、あなたについて特に何も示さないが、あなたがキリストと関わる時には、事はそのように単純ではない。何時でも、観念が根を張り、傲慢が芽を出し、反抗心はイチジクの実をつけるかもしれない。そのような人間性をもっていて、どうしてあなたがキリストと関わるに相応しくなれるのだろうか。あなたは毎日、その一瞬一瞬に本当にキリストを神として扱うことができるのか。あなたは本当に神への服従という現実をもっているのか。あなたがたは心の中で立派な神をヤーウェとして礼拝しつつ、目に見えるキリストを人間とみなしている。あなたがたの理知はあまりに劣っており、あなたがたの人間性はあまりに卑しい。あなたがたはキリストを神として常に見ることができない。ときどき、そのような気分になったときだけ、あなたがたはキリストをひつつかまえて、神として礼拝する。このため、あなたがたは神の信者ではなく、キリストと戦う共犯者の集団である、とわたしは言うのである。他人に親切にする人でさえ報われるのに、キリストはあなたがたのあいだでそのような働きをしたものの、人間からは愛も報いも従順も受け取っていない。これは胸が張り裂けるようなことではないのか。

『言葉は肉において現れる』の「キリストと相容れない人は疑いなく神の敵である」より

91. キリストの神性はすべての人を超越するもので、ゆえに彼はあらゆる被造物の最高の権威である。この権威はキリストの神性、すなわち神自身の性質と存在そのものであり、それは彼の身分を決定する。よって彼の人間性がいかに普通であっても、神自身の身分を持っていることは否定できない。彼がどのような観点から語り、どのように神の心に従っても、神自身ではないと言うことはできない。愚かで無知な者はしばしばキリストの普通の人間性を欠陥と見なす。人はどれほど自身の神性を現して明らかにしたキリストをも、キリストと認めることができない。そしてキリストが服従と謙遜を示せば示すほど、愚かな人間は益々キリストを軽くあしらう。キリストに対して排他的、侮蔑的な態度をとり、一方で尊大な姿の「偉人たち」を高い地位に置いて崇拝する者たちさえいる。人の神に対する抵抗と不従順は、肉となった神の本質が神の心に従うという事実と、キリストの普通の人間性とから来る。ここに人の神に対する抵抗と不従順の根源がある。もしキリストが人間としての外観を持たず、被造物としての観点から父なる神の心を求めることもせず、超人間性を持っていたならば、不従順になる人間はおそらくいないだろう。人が常に天にいる目に見えない神の存在を信じようとする理由は、

天にいる神は人間性を持たず、被造物としての性質を一つも持たないからである。そのため人は常に天にいる神には最大の畏敬を抱き、キリストには侮蔑的な態度をとる。

『言葉は肉において現れる』の「キリストの本質は父なる神の心への従順」より

92. 信仰に関して言えば、信仰があるので神に付き従うのであり、もしそうでなければ、そのような苦しみに耐えることはない多くの者は考えるかもしれない。それではわたしは尋ねる。あなたは神の存在を信じているのに、決して神を畏れないのはなぜなのか。もしあなたが神の存在を信じているなら、それではなぜ、心に神に対する恐れをいだかないのだろうか。キリストは神の受肉であるということを受け入れるなら、それではなぜ、あなたはそれほどに彼を侮り、それほど不敬な態度で振るまうのだろうか。なぜあなたはあからさまに彼を批判するのだろうか。なぜいつも彼の所在を詮索するのだろうか。なぜあなたは彼の采配に従わないのだろうか。なぜ彼の言葉に従って行動しないのだろうか。なぜあなたは彼をゆすり、捧げ物を奪い取ろうとするのだろうか。なぜあなたはキリストに成り代わって話すのだろうか。なぜあなたは、彼の働きと言葉が正しいかどうかを判断するのだろうか。なぜ彼のいないところでずうずうしくも彼を冒涇するのだろうか。このようなこと、さらにほかのことがあなたがたの信仰を形成しているのだろうか。

あなたがたの話すことと行いのあらゆる部分が、あなたがたが内面に抱くキリストへの不信仰の要素を露呈する。あなたがたの行いの動機と目的には、不信仰が浸み込んでおり、あなたがたのまなざしから発するその意図さえそのような要素で汚れている。つまり、あなたがた一人ひとりが、一瞬一瞬、不信仰の要素を抱いているのである。そうであれば、あなたがたの体の中を巡る血には、この肉となった神に対する不信仰が浸み込んでいるので、あなたがたはどの瞬間にもキリストを裏切る危険性があるということである。したがって、あなたがたが神への信仰の道に残す足跡には深さがないとわたしは言う。この神への信仰の道に行く旅路において、あなたがたはしっかりと地に足をつけておらず、単に動作を行なっているに過ぎない。あなたがたはいつもキリストの言葉を完全に信じず、すぐに実践に移せないのである。これが、あなたがたにキリストへの信仰がない理由である。いつもキリストについて観念を持っていることが、あなたがたがキリストを信じないもうひとつの理由である。キリストの働きに対していつも懐疑心を持つこと、キリストの言葉に耳を傾けようとしないこと、キリストが行なう働きが何であれ、それにいつも意見を持ち、それを適切に理解できないこと、どんな説明を受けなくても、観念を手放すことに苦労することなど、これらはすべて、あなたがたの心の中に

混入している不信仰の要素なのである。あなたがたはキリストの働きに付き従い、決して遅れをとらないが、あなたがたの心の中にはあまりにも反逆が入り混じっている。この反逆は、あなたがたの神への信仰における不純物なのである。おそらくあなたがたは同意しないであろうが、もしあなたがその不純物から来る自らの意図を認識できないなら、あなたは間違いなく滅びる者の一人となる。なぜなら、神は、彼を本当に信じる者だけを完全にするのであり、彼に懐疑的な者、ましてや彼に渋々従ってはいても決して彼が神であるとは信じない者を完全にしないからである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは本当に神を信じる人なのか」より

93. 一部の人々は真理を喜ばず、裁きとなればもっと喜ばない。むしろ、人々は権力と富に喜びを見出すのであり、そのような人々は俗物と呼ばれる。彼らはもっぱら、影響力を持つ世界中の宗派や、神学校出身の牧師や教師を探し求める。真理の道を受け入れたにもかかわらず、彼らはどこまでも懐疑的で、自分自身を完全に献げることができない。彼らは神のために犠牲を捧げることについて話しはするものの、その目は偉大な牧師や教師に注がれ、キリストは無視されている。彼らの心は名声、富、栄誉にばかり向けられている。彼らは、そのような取るに足りない人がそれほど多くの者を征服することができ、そのような平凡な人が人を完全にすることができるなどと全く信じない。塵と糞の中にいるこれらのとるに足りない人々が神に選ばれているとは信じないのである。もしそのような人々が神の救いの対象であれば、天と地がひっくり返し、すべての人間が大笑いするだろうと彼らは信じている。彼らは、もし神がそのような取るに足りない人々を完全にするために選んだのであれば、先に挙げたような偉大な人たちは神そのものになると信じている。彼らの考え方は不信仰によって汚れている。実際のところ、不信仰どころか、彼らは、ばかげたけだものである。なぜなら、彼らは地位、名声、権力だけに価値を置き、重要視するものは大組織や宗派であるからである。彼らはキリストに導かれる者のことを全く考慮しない。キリストに、真理に、そしていのちに背をむけた裏切り者でしかないのである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは本当に神を信じる人なのか」より

94. あなたが敬慕するのはキリストのへりくだりではなく、目立った地位にある偽の牧者たちである。あなたはキリストの素晴らしさや知恵を愛さないが、邪悪な世と交わりを持つ奔放な者たちを愛している。あなたは、枕するところもないキリストの苦しみを笑うが、捧げものを奪い取り放蕩な生活を送る屍たちを賞賛するのである。あなたはキリストのそばで苦しむ覚悟はないが、あなたに肉、言葉、支配しか与えない無謀な

反キリスト者たちの腕の中に喜んで飛び込む。今でもあなたの心は、彼らに、彼らの評判に、彼らの地位に、そして彼らの影響力に向いている。それなのに、あなたはキリストの働きを飲み込みがたいものにする態度をとり続け、進んでそれを受け入れようとしない。だから、あなたにはキリストを認める信仰がないとわたしは言うのである。あなたが今日に至るまでキリストに従ってきたのは、あなたが強いられていたからに過ぎない。一連の気高いイメージが、あなたの心にいつまでもそびえている。彼らの言葉や行いのひとつひとつが忘れられず、彼らの影響力ある言葉や手も忘れられない。あなたの心の中では、彼らは永遠に至高で、永遠に英雄なのである。しかし、これは今日のキリストにはあてはまらない。彼はあなたの心の中で永遠に取るに足らない存在であり、永遠に畏敬に値しない。なぜなら、彼はあまりにも普通すぎ、あまりにも影響力がなさ過ぎ、高遠さからははるかにかけ離れているからである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは本当に神を信じる人なのか」より

95. 今なお、あなたがたのうちに大いに不信仰がある。あなたがた自身の内側をよく見てみよ。そうすれば、必ず答えが見つかる。あなたが真の答えを見つけるとき、あなたは自分が神を信じる人ではなく、むしろ神を欺き、冒瀆し、裏切る者であり、神に忠実でない者であることを認める。そのときあなたは、キリストは人ではなく、神であると悟る。その日が訪れると、あなたはキリストを畏敬し、恐れ、真に愛する。今、信仰はあなたがたの心の30パーセントしか占めておらず、残りの70パーセントは疑いが占めている。キリストによってなされたいかなる行いも、話されたいかなる言葉も、あなたがたにキリストについての観念や意見を形づくらせる。このような観念や意見は、キリストに対するあなたがたの完全な不信仰から生じるのである。あなたがたは天にいます目に見えない神だけを敬慕し恐れ、地上の生けるキリストを全く重んじないのである。これもあなたがたの不信仰ではないだろうか。あなたがたは、過去に働いた神だけを慕い、今日のキリストを直視しようとしな。このすべてが、あなたがたの心にいつまでも混ざり合い、今日のキリストへの信仰を欠いた「信仰」なのである。わたしは決してあなたがたを過小評価しない。あなたがたの内にはあまりにも多くの不信仰があり、あなたがたには不純で、詳細に吟味されねばならないところが多すぎるからである。このような不純物は、あなたがたが全く信仰を持たないことのしるしである。このような不純物はあなたがキリストを放棄したことの目印であり、あなたがたにキリストの裏切り者の烙印を押す。このような不純物は、キリストについてのあなたがたの認識を覆い隠すベールであり、あなたがたがキリストのものとされることに対する障壁であり、

あなたがたがキリストと相容れるのを妨げる障害物であり、そしてキリストがあなたがたを承認しないという証拠なのである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは本当に神を信じる人なのか」より

96. 長年にわたる働きを通じて、あなた方は多くの真理を目の当たりにしてきた。しかしどのような事柄が私の耳に入ってきたか、あなた方は知っているのか。あなた方のうち喜んで真理を受け入れる人はどれほどいるのか。あなた方はみな、自分たちは喜んで真理の代価を払うと信じているが、真理のために本当に苦しんだ者が、あなた方の中にどれほどいるというのか。あなた方の心の中には不義しかなく、そのため誰もが同じように不正直で心が曲がっていると思うのである。受肉した神が普通の人間のように優しい心や慈愛を持ち合わせていないこともありうる、と信じるに至るほどに。さらに、あなた方は高潔さや慈悲深く慈愛に満ちた性質は天の神にのみ存在すると信じている。あなた方は、そのような聖人は存在せず、ただ闇と悪が地上を支配するのみだと信じているが、その一方で神とは、人々が善きものや美しきものに対する自らの切望を託す先であり、人々によって作られた伝説上の人物なのである。あなた方の頭の中では、天の神とは非常に立派で正しく偉大な、崇拜し敬慕する価値のあるものであり、一方、地上の神は天の神の単なる代役、単なる道具にすぎないということになっている。あなた方は、この地上の神は天の神に等しいはずがない、まして天の神と比較するなど話にならないと信じている。神の偉大さと栄誉に関して言えば、これらは天の神の栄光の一部だが、人間の本性や堕落となると、それらは地上の神も関わっている特質だというのである。天の神は永遠に高貴だが、地上の神は永遠に取るに足りず、弱く、無能である。地上の神は感情的になることなく、ひたすら義であるが、地上の神には利己的な動機しかなく、公平さも分別もない。天の神は少しも曲った所がなく永遠に誠実だが、地上の神には常に不正直な面がある。天の神は人間を深く愛するが、地上の神が人間に示す配慮は不十分で、人間を全く顧みないことすらある。このような誤った知識がもう長い間あなた方の心の中にあり、将来にわたり永続する可能性もある。あなた方はキリストの全ての行いを不義な視点から見ており、キリストの働きの全ても、キリストの正体も実体も、悪人の視点から評価する。あなた方は重大な過ちを犯し、先人の誰もがなさなかったことをなしてきた。つまり、あなた方は頭に王冠を戴せた高貴な天の神だけに仕え、取るに足りないと思ふあまり自分の目には映らない地上の神には、決して耳も貸さないのである。これはあなた方の罪ではないか。神の摂理に背くあなた方の典型的な例ではないか。あなた方は天の神を崇拜する。あなた方は高貴な像を崇拜し、雄弁で名高

い者たちを尊ぶ。あなたは、その手を富で満たしてくれる神の命令には喜んで従い、望みを全て叶えてくれる神を渴望する。あなたが崇拜しない唯一の神は高貴でないその神であり、あなたが嫌う唯一のことは、誰からも高く評価されないその神と関わることである。あなたがやりたがらない唯一のことは、あなたに一銭ももたらさないその神に仕えることであり、あなたが恋い慕うよう仕向けることのできない唯一の者は、魅力のないその神である。この種の神はあなたの視野を広げられず、あたかも宝物を見つけたかのように感じさせることもできず、ましてやあなたの願いをかなえることもできない。ならば、なぜあなたはその神について行くのか。このような問いについて考えたことはあるのか。あなたのしていることはキリストに背くだけではない。より重大なのは、天の神に背くということである。これが神を信仰するあなた方の目的ではあるまい。

『言葉は肉において現れる』の「どのように地上の神を知るか」より

97. あなた方は神に喜んでもらうことを切望するが、神から遠く離れている。何が問題なのか。あなた方は神の言葉こそ受け入れるものの、神の取り扱い、神の刈り込みは受け入れず、まして神の采配の一つ一つを受け入れること、神を完全に信仰することなどできない。ならば何が問題なのか。つまるところ、あなた方の信仰とは、ひよこが生まれることのない空っぽの卵の殻なのである。あなた方の信仰は真理をもたらすこともいのちも与えることもなく、代わりに支えと希望という錯覚を与えてきた。この支えと希望という錯覚こそが、あなた方が神を信じる際の目標であり、真理やいのちが目的ではないのである。だからこそ私は、あなた方の神への信仰の流れが、盲従と無恥によって神の機嫌を取ろうとする行為以外の何物でもなく、決して真の信仰と見なすことはできない、と言うのである。このような信仰からどうしてひよこが生まれようか。言い換えれば、このような信仰が何を成しうるだろうか。神に対するあなたの信仰の目的は、あなた方自身の目標を達成するために神を使うことである。これは神の性質に背いたことを表すさらなる事実ではないか。あなた方は天の神の存在は信じ、地上の神の存在を否定するが、私はあなた方の見方を認めない。私は地に足を着け地上の神に仕える人だけを賞賛し、地上のキリストを認めようとしない人は決して賞賛しない。そのような人は、どれほど天の神に忠実であろうとも、最後は悪人を罰する私の手から逃れられない。このような人は悪人である。彼らは神に敵対し、キリストに喜んで従ったことのない邪悪な者たちである。無論、キリストを知らない者、さらにはキリストを認めない者もみなこれに含まれる。

『言葉は肉において現れる』の「どのように地上の神を知るか」より

98. どの教会にも、教会を混乱させ、神の業を阻害する者が居る。こうした人々は、すべて神の家族に身を隠したサタンである。この種の人物はとりわけ演技に優れており、自らの目的を果たすため、敬意をもってわたしの前に出て、うなずいて頭を下げ、みすばらしい犬のように振る舞い、自分の「すべて」を捧げているが、兄弟姉妹の前では醜惡な素性を露わにする。こうした者が真理を実践している人を見ると、攻撃して排除し、自分自身よりも手に負えない人を見ると、その人にお世辞を言って機嫌を取り、教会の中では暴君のように振る舞う。この種の「地域の下劣なへび」、あるいは「愛玩犬」は、殆どの教会の中に居ると言えるであろう。この種の者は集まってこそこそと歩き回り、ウインクや秘密の合図を送り合う。この種の者の中に真理を実践する者は皆無である。最も強い毒を持つ者が「悪魔の頭」であり、最も評判の高い者が他の者を従え、一味の旗を高く掲げる。この種の人々は教会内を荒らし回り、否定性を広め、死をもたらし、したい放題、言いたい放題に振る舞い、誰もそれを止める者は居らず、サタンの性質に満ちあふれている。この種の者が妨害し始めるとすぐに、教会内に死の空気が入る。教会内で真理を実践する者は見捨てられ、その者は潜在能力を発揮できない一方、教会を妨害し、死を広める者は、教会内で放縦に行動する。さらに、殆どの人々がこうした者に従う。こうした教会は、明らかにサタンの支配下にあり、そこでは悪魔が教会の王である。教会の人々が立ち上がってこうした悪魔の頭を追放しなかった場合、教会の人々もまた、遅かれ早かれ破滅するであろう。今後は、こうした教会への対策を実施する必要がある。多少の真理を実践できる者が追求していない場合、その教会は追放されるであろう。真理を実践することを望む者や、神の証しに立つことが出来る者が教会内に不在の場合、その教会は完全に追放される必要があり、その教会と他の教会との関係は断絶される必要がある。これを、死を葬り、サタンを追ひ払う、と呼ぶ。教会に、地域の下劣なへびのような者と、そのへびに従う、分別の無い小ばえのような者が居て、教会に居る者が、真理を理解してなお、そうしたへびのような者の呪縛と操作を駆逐できなかった場合、そうした愚か者は最終的に排除されるであろう。そうした小ばえのような者は、何ら劣惡な事をしていないかもしれないが、ことさら狡猾でずる賢く、そうした者も全て排除されるであろう。そうした者はひとり残らず消し去られるのだ。サタンに属す者はサタンへと戻されるが、神に従う者は間違い無く真理を探し求めるであろう。これは、そうした者の本性により決められる。サタンに従う者を全て滅ぼすことである。こうした者は決して憐れまれることが無いであろう。真理を探し求める者に糧を得させ、心ゆくまで神の言葉を堪能させることである。神は義であり、人間を不公平に扱うことは無い。あなたは、自分が悪魔であれば、真理を実践出来ないであろう。

あなたが真理を探し求める者であれば、あなたがサタンの虜にならないことは確実であり、それについて全く疑う余地は無い。

『言葉は肉において現れる』の「真理を実践しない者に対する警告」より

99. 進歩を求めない者は、常に他の者が自分自身と同様に悲観的であり怠惰であることを望み、真理を実践しない者は、真理を実践する者に嫉妬する。真理を実践しない者は、常に混迷している者や分別が無い者を欺くことを求める。こうした者が放つ物事は、あなたを退化させ、引きずり落とし、異常を引き起こし、内面を闇で満たすおそれがあり、またあなたを神から遠ざけ、あなたに肉を愛させ、自らの欲望を満たすようにさせる。真理を愛さず、常にうわべだけで神に接する者は、己を知らず、そうした者の性質により、人々は誘惑されて罪を犯し、神に反抗する。こうした者は真理を実践せず、また他人が真理を実践することを許さない。こうした者は罪を愛し、自分自身を忌み嫌うことは全く無い。こうした者は己を知らず、また他人が己を知ることや、真理を求めることを阻む。こうした者が欺く人々は、光を見ることができずに闇に落ち、己を知らず、真理を明瞭に理解しておらず、神から遠ざかってゆく。こうした者は真理を実践せず、また他人が真理を実践することを阻み、愚かな人々を自らの前に来させる。こうした者は、神を信じるというよりも、自らの祖先を信じている、こうした者が信じているのは、自らの心の中の偶像である、と言った方が良い。神に付き従っていると言う者にとって、自らの目を開き、自分が信じているのが誰かを良く見るのが最善であろう。あなたが信じているのは、本当に神であるか、それともサタンであるか。あなたは、自分が信じているのが神ではなく、自分にとっての偶像であることを知っている場合、自分は信者であると述べずにいるのが最善であろう。あなたは、自分が誰を信じているのか知らないならば、同様に、自分は信者であるとは言わないのが最善であろう。そうであると言うのは、冒涇である。あなたに、神を信じることを無理強いしている者は居ない。わたしを信じている、という言葉は、とうの昔に聞き飽きており、二度と聞きたいとは思わないので、そうした言葉を言わないで欲しい。なぜなら、あなたがたが信じているのは、あなたがたの心の中の偶像であり、あなたがたの中にいる地域の下劣なへびだからである。真理を聞いた時に首を横に振り、死の言葉を聞いた時に満面の笑みを浮かべる者は、サタンの子孫であり、そうした者は全て排除対象となる。教会には識見の無い者が多数居て、何かしら偽りの出来事があると、そうした者はサタンに味方をする。こうした者は、自分がサタンの僕と呼ばれると、不当な扱いを受けたと感じる。こうした者は全く識見が無いと言う者もいるが、こうした者は常に真理の無い側に味方する



。重要な時期に、こうした者が真理の味方をしたことや、真理のために立ち上がって議論をしたことは一度も無いが、こうした者は本当に識見が無いのであろうか。こうした者が常にサタンの味方をするのは、何故だろうか。何故、こうした者は真理について正当な言葉も合理的な言葉も決して述べないのだろうか。こうした状況は、本当に一時的な混乱から生まれるのだろうか。ある者の識見が少なければ少ないほど、その者が真理の味方をする能力も低くなる。それは何を示すのであろうか。それは、識見の無い者が邪悪を愛していることを示して居るのではなかろうか。それは、識見の無い者がサタンの忠実な子孫であることを示して居るのではなかろうか。こうした者が常にサタンの味方をし、サタンと同じ言葉を述べる事が出来るのは何故だろうか。こうした者のあらゆる行動、言動、表現は、こうした者が決して真理を愛する者ではなく、むしろ真理を忌み嫌う者であることを十分に示している。こうした者がサタンの味方をする事が出来ることは、こうしたサタンのために一生涯を通して戦う小悪魔をサタンが真に愛していることを十分に示している。こうした事実は、全て十分に明白ではなかろうか。あなたが本当に真理を愛する者であるならば、真理を実践する者を全く認める事が出来ず、真理を実践しない者が僅かに表情を変えた時、その者に直ちに従うのは、何故だろうか。これはどのような問題であらうか。わたしは、あなたに識見があるかどうかや、あなたがどれほど甚大な代償を払ったか、あなたの勢力がどれほど強いのか、あなたが地域の卑劣なへびであるか、旗を掲げる主導者であるかを問題とはしない。あなたの勢力が強いのであれば、それは単にサタンの支援を得ているということであり、あなたが高位にあるのであれば、それは単にあなたの周囲に真理を実践しない者が多すぎるということであり、あなたがまだ排除されていないのであれば、それは今が追放の業の時ではなく、むしろ排除の業の時期だからである。今あなたを追放する喫緊性は無い。わたしは、単にあなたが排除された後の罰を与える日の到来を待つのみである。真理を実践しない者は、全て排除されるであらう。

『言葉は肉において現れる』の「真理を実践しない者に対する警告」より

100. 神を真に信じる者は、神の言葉を実践することを望み、真理を実践することを望む者である。本当に神の証しに立てる者は、神の言葉を実践する意志のある者でもあり、こうした者は本当に真理の味方となる事が出来る者である。謀る者や不正を行う者は、すべて真理の無い者であり、そうした者は皆、神に恥辱をもたらす。教会に居る者のうち、論争する者はサタンの僕であり、サタンの化身である。こうした者は悪意が過ぎる。識見が無く、真理に味方出来ない者には、すべて邪悪な意図を抱き、真理を汚

す。こうした者は、より典型的にサタンを代表する者であり、こうした者に贖いの業は及ばず、全員が間違い無く排除対象となる。真理を実践しない者も、意図的に教会を崩壊させる者も、神の家族として居残ることを許されてはならない。しかしわたしが追放の業を行うのは今ではない。こうした者は、単にあばかれ、最終的に排除されるのみである。こうした者には、これ以上無意味な業はなされない。サタンに属する者は真理に味方出来ない者であるが、真理を探し求める者は真理に味方出来る。真理を実践しない者は、真理の道を聞く価値も、真理の証しに立つ価値も無い者である。基本的に、真理はそうした者が聞くための物ではなく、むしろ真理を実践する者のために述べられる。教会を混乱させ、業を阻害する者は、各人の結末が明示される前に、まず片方によけられる。業が完了した後、こうした者は順番に暴き出されてから排除される。真理を与える時、こうした者はしばらく無視される。人間に対して全ての真理が明示された後、こうした者が排除される。なぜなら、その時は全ての人々が、その種類により分別される時でもあるからである。見識の無い者は、賢明さに劣っているがために、邪悪な者の手により滅ぼされ、惑わされて、戻ることが出来ない。こうした者を、そのように扱う必要があるのは、こうした者が真理を愛さず、真理の味方になることが出来ず、邪悪な者に付き従い、邪悪な者の味方となり、結託して神に反抗するからである。こうした人々は、邪悪な人々が邪悪さを放っていることを完全に知っているが、決心を固めてそうした邪悪な者に付き従い、真理と反対方向へと進む。こうした、真理を実行せず、しかし破壊的で忌まわしい行動を行う人々は、すべて邪悪ではなかろうか。そうした者の中には、自らを「王」のように装う者と、それに追随する者が居るが、両者の神に反逆する性質は全く同じではなかろうか。こうした者は、神は自分達を救わないと言うが、どうして弁解できようか。また、こうした者は、神は義ではないと言うが、どうして弁解できようか。こうした者を滅ぼすのは、自らの邪悪ではなかろうか。こうした者を地獄へ落とすのは、自らの反逆心ではなかろうか。真理を実践する者は、最終的に救われ、真理により完全にされるであろう。真理を実践しない者は、最終的に真理により滅びを得る。これらが、真理を実践するものと、実践しない者を待ち受ける最後である。

『言葉は肉において現れる』の「真理を実践しない者に対する警告」より

101. あなたは神を信じているので、あなたは神の言葉とその働きの全てに信仰を持たなければならない。つまり、あなたは神を信じているので、神に従わなければならないということである。それが出来なければ、あなたが神を信じているかどうかなど問題ではない。もしあなたが長年神を信じており、それでも神に従ったことがないか、神の

言葉を全て受け入れたことはないばかりか、神が自分に従うよう求めたり、自分の観念に沿って行動するように求めたりするようであれば、あなたは最も反抗的な人間であり、神を信じない者である。そのような人間が、人の観念とは一致しない神の言葉や働きに従うことなど出来るだろうか。最も反抗的な者とは、意図的に神に逆らい拒絶する者である。そのような者は神の敵であり、反キリストである。そのような者は常に神の新しい働きに対して敵対する態度をとり、従う意志など微塵も示さず、喜んで服従を示すことや謙虚になることなど一度たりともないのである。他の人たちの前で得意になり、誰に対しても従うことをしない。神の前では、自分が説教者として最も長けており、他の人に働きかけることに自分が一番熟練していると考える。自分が獲得した宝を決して手放そうとせず、家宝として拝み、説教の題材にし、自分を崇拜するような愚か者への訓戒に用いる。このような人が、教会内に確かに数名存在する。このような人々は、「不屈の英雄」と呼ぶことができ、世代を超えて神の家に留まるのである。彼らは神の言葉（教義）を語ることを自分の最高位の本分と解釈する。何年も、何世代も、彼らは精力的に自らの「神聖で犯すべからざる」本分を続ける。彼らに触れる者は誰ひとりおらず、公然と非難する者もひとりもない。神の家で「王」となり、何代にも亘ってはびこり、他の者を圧制する。このような悪魔の一団は、互いに手を組んでわたしの働きを潰そうとする。このような生きた悪魔をわたしの目の前に生かしておけるだろうか。半分だけ従っている者でさえ最後まで歩き続けることはできないのに、従う気持ちが微塵もないこのような暴君が最後まで歩き続けられないのは尚更である。神の働きは人間によって簡単に獲得されるものではない。人間が全力を尽くしても、その一部だけを得て最後に完全にされるだけである。そうであれば、神の働きを潰そうとしている大天使の後代はどうであろうか。彼らが神のものとなる望みは更に薄いのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「真心で神に従う者は確かに神のものとされる」より

102. なたがたはパリサイ人がイエスに逆らったことの根源を知りたいか。あなたがたはパリサイ人の本質を知りたいか。彼らはメシアに関する空想に満ちていた。さらに、彼らはメシアが来ると信じていただけで、いのちの真理を求めなかった。だから今日になっても未だに彼らはメシアを待ち続けている。いのちの道に関して何の認識もなく、真理の道がどのようなものかも知らないからである。これほど愚かで頑固で無知な人々が、神の祝福を得ることなどあり得ようか。彼らがメシアを見ることなどできるだろうか。彼らは聖霊の働きの方角を知らなかったために、イエスの語った真理の道を知らなかったために、さらにはメシアを理解しなかったためにイエスに敵対した。彼らはメ

シアに会ったことがなく、メシアとともに過ごしたこともないために、彼らはみなメシアの名前をむなしく守りながら、どのようなことをしてでもメシアの本質に逆らうという過ちを犯した。これらのパリサイ人は本質的に頑固で、傲慢で、真理に従わなかった。彼らの神への信仰の原則は、「どれほど説教が奥深く、どれほど権威が高かろうとも、あなたがメシアと呼ばれない限り、あなたはキリストではない」というものである。これらの見方は不合理でばかばかしくないであろうか。あなたがたにもう一度問う。あなたがたが全くイエスを理解してこなかったことを考えれば、最初のパリサイ人たちと同じ誤りを簡単に起こしてしまうのではないか。あなたは真理の道を識別することはできるのか。あなたがキリストに逆らわないとあなたは本当に請け合えるか。あなたは聖霊の働きに従うことができるのか。自分がキリストに逆らうかどうか分からないのなら、あなたは既に死ぬぎりぎりのところに生きているとわたしは言う。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

103. 神の働きの目的を理解しない者は誰でも神に敵対する人々であり、神の働きの目的が分かっているのに神を満足させようとししない人々はなおさら敵対する。荘厳な教会で聖書を読む者たちは毎日聖書を暗唱するが、一人として神の働きの目的を理解しない。一人として神を知ることができない。さらに、一人として神の心と一致していない。彼らは皆価値のない、卑劣な人々だが、それぞれ神を教えるために高い地位に就いている。彼らは神の名をこれ見よがしに振りかざすが、故意に神に反抗している。彼らは自分たちを神を信じる者と呼びはするが、人の肉を食し、その血を飲んでいる者たちである。そのような人々は皆人の魂を貪り食う悪魔、正しい道に一步踏み出そうとする人々を故意に混乱させる悪霊のかしら、神を探し求める人々の道を妨げる躓きの石である。彼らは「健全な肉体」の者たちであるが、彼らの信者たちはどうしたら彼らが人を神に敵対する方向へ導く反キリストであると知ることができるだろうか。どうしたら彼らが魂を好んで求めては貪り食う悪魔の権化であることを知ることができるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神を知らない人はすべて神に反対する人である」より

104. 悪魔と悪霊は、地上を暴れ回り、神の心と丹精を込めた努力を封じ込めて、それらを浸透不可能なものとしている。何という大罪であろうか。どうして神が不安にならずにいられようか。どうして神が怒らずにいられようか。悪魔は、神の業に対して重篤な妨害や反対を引き起こしている。まったく反逆的過ぎる。そうした大小の悪魔は、自分よりも強力な悪魔に対してでさえも、横柄な態度を取って波乱を引き起こす。悪魔

は真理を明瞭に理解しているにもかかわらず、故意に真理に逆らう。まさに反逆の子である。それは、地獄にいる悪魔達の王が玉座に就いたので、自惚れて他人を全て侮辱しているかのようである。真理を求め、義に付き従う者は、何人いるだろうか。そうした悪魔は皆、糞の中のはえがたかった、ぶたや犬のような、頭を振って混乱を招く<sup>[21]</sup>獣である。そうした悪魔は、自分達が腐敗物に群がるはえに過ぎないことには気づかず、地獄にいる自分達の王が、全ての王の中で至高の存在であると考えている。それだけではなく、自分達のぶたや犬の両親に頼り、神の存在に対して中傷的なことを述べる。そうした小ばえのような者は、自分達の両親がハクジラ<sup>[22]</sup>のように大きいものであると考えている。そうした者は、自分達は極めて小さい存在であるが、自分達の両親は自分達よりも10億倍大きく不浄なぶたや犬であることに気付かないのであろうか。そうした者は、自分の卑しさに気付かず、ぶたや犬の腐った臭いを根拠として暴れ回り、将来の世代を生み出す妄想にとらわれる。これは完全なる厚顔無恥である。そうした者は、自分の背中に緑色の羽根がある(自分が神を信仰していると主張することを指す)ことで、自惚れて自分の美しさと魅力を至るところで自慢するようになり、密かに自らの不浄を人間になすりつける。さらに、そうした者の自惚れは、あたかも虹色の羽根が自分の不浄を隠すことが出来るかのようであり、それゆえに真の神の存在を迫害する(これは、宗教界の内情を指す)。人間は殆ど知らないが、はえの羽根は美しく魅力的だが、所詮は不浄に満ち、細菌に覆われた、小さなハエである。そうした者は、両親であるぶたや犬の力を借り、圧倒的な凶暴さで地の上で暴れ回る(これは、真の神と真理を裏切る国家の強力な支援を受けて神を迫害する宗教関係者を指す)。それは、あたかもユダヤのパリサイ人の幽霊が、古巣である赤い大きな竜の国家へと、神と共に戻ったかのようである。そうした者は、自らの迫害の業を再開し、その数千年にわたる業を継続する。こうした墮落した者の集団が最後に地の上で滅びることは確実である。数千年が経過した後、不浄な霊は、さらに狡猾で悪賢くなっているようである。そうした者は、密かに神の業を台無しにする術を常に考えている。そうした者は狡猾で悪賢く、自国で数千年前の悲劇を再現することを望んでいる。そうした行いにより、神は突き動かされて大声で叫ぶ寸前の状態にされ、神は第三の天に戻ってそうした者を滅ぼさずにいられない。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(7)」より

105. 聖書によると、イエスと、主イエスの行動に対するパリサイ人の評価は「気が狂ったと思った…『彼はベルゼブルにとりつかれている』…『悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ』」(マルコによる福音書3章21～22節)というも

のであった。律法学者とパリサイ人による主イエスに対する審判は、何の根拠もなく下されたものではなく、律法学者とパリサイ人が主イエスの行動について見たこと、聞いたことに基づいた結論であった。その審判は、表層的には法に基づき行われ、人々は、それが十分な根拠に基づくものと考えたが、イエスを裁いたその傲慢さを、律法学者とパリサイ人は抑えることが出来なかった。人々の主イエスに対する激昂した憎悪のエネルギーが、神を拒絶する邪悪な本性とともに、人々の向こう見ずな野望と邪悪なサタンのような形相に現れていた。主イエスの審判で律法学者とパリサイ人が口にしたことは、人々の向こう見ずな野望、嫉妬、そして人々の神と真理に対する敵意の、醜く邪悪な本性を動機とするものであった。律法学者とパリサイ人は主イエスの行動が何によるものかを調査せず、イエスの言動の本質を調査することもなかった。その代わりに、律法学者とパリサイ人は、主イエスが取った行動を、盲目的に、苛立って、狂気のように、そして計画的な悪意をもって非難し、卑しめた。それは、主イエスの霊すなわち聖霊、神の霊を見境なく卑しめるような状態にまで達していた。律法学者とパリサイ人が「気が狂った」、「ベルゼブル」と「悪霊どものかしら」と言うのは、そうしたことを意味するものであった。つまり、神の霊はベルゼブルであり、悪霊の頭である、と言ったのであった。彼らは、受肉した神の霊による業を、狂気であるとした。彼らは神の霊をベルゼブル、悪霊の頭として冒瀆したのみならず、神の業を罪であるとした。律法学者とパリサイ人は、主イエスを有罪とし、冒瀆した。彼らの神に対する反逆的、冒瀆的本質は、サタンと悪魔の神に対する反逆的、冒瀆的本質と同じである。彼らが象徴するものは、腐敗した人間だけでなく、サタンの権化でもあった。彼らはサタンと人類の繋いでおり、サタンに力を貸す伝令であった。主イエス・キリストに対する彼らの冒瀆と誹謗の本質は、神の地位を奪おうとする奮闘努力であり、終わることのない神への反抗、挑戦であった。彼らの神への反抗、神に対する敵対心の本質、そして言葉や考え方が、神の霊を直接冒瀆し、怒らせた。それゆえに、神は律法学者とパリサイ人の言葉と行動に妥当な裁きを下し、その行動を聖霊に対する冒瀆の罪であるとした。この罪は、この世でもきたるべき世でも赦されることがないのは、聖句に「聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない」、また「聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない」とある通りである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

106. あなたの心の中には非常に大きな秘密がある。あなたはそのことにまだ気がついていない。なぜなら光のない世界ですずっと生きてきたからである。あなたの心と霊は

あの悪い者に取上げられてしまった。あなたの目は暗闇のせいで見えなくなり、空の太陽も夜のきらめく星も見ることができない。あなたの耳は欺瞞的な言葉で塞がれ、ヤーウェのとどろきわたる声も玉座から流れる水の音も聞こえない。あなたは正当にあなたのものであるすべて、全能者があなたに与えたものすべてを失った。あなたは終わりのない苦しみの中に入った。救出する力もなく、生き残る希望もなく、ただもがき駆け回ることしかできず…。その瞬間から、あなたはあの悪い者に苦しめられるように運命づけられ、全能者の祝福から遠く離れ、全能者の施しの届かないところにおり、後戻りできない道を歩いている。百万回の呼び声もあなたの心と霊を奮い起こす見込みはない。あなたはあの悪い者の手の中で深い眠りにについている。悪い者は境界も、方向も、道しるべもない広大な領域へとあなたを誘惑した。それ以来、あなたは本来の純粋さと無邪気さを失い、全能者の気づかいを避けるようになった。あなたの心の中では、あの悪い者があらゆることにおいてあなたを操縦し、あなたのいのちになった。あなたはもはや悪い者を恐れることも、避けることも、疑うこともしない。代わりにあなたは悪い者を心の中で神として扱う。あなたは悪い者を祀り、礼拝するようになる。あなたと彼は物体とその影のように切り離せなくなり、生においても死においても互いに委ねあっている。あなたは自分がどこから来て、なぜ生まれ、なぜ死ぬのか全く知らない。あなたは全能者を見知らぬ人として見る。あなたは全能者の起源を知らず、ましてあなたのために全能者が行った全てのことなど知るよしもない。全能者から来るあらゆることがあなたにとって憎むべきものになった。あなたはそれを大事にしないし、その価値も知らない。全能者からあなたが施しを受けた日から、あなたはあの悪い者とともに歩いている。あなたは悪い者とともに何千年もの風雨を耐え抜いてきて、悪い者とともにあなたのいのちの源であった神に立ち向かう。あなたは悔い改めを一切知らず、ましてや自分が滅亡の淵に達したことなど知りもしない。あなたは悪い者があなたを誘惑し苦しめてきたことを忘れてしまった。あなたは自分の起源を忘れてしまった。そのようにしてきょうこの日まで、一步一步悪い者はあなたに害を与えてきた。あなたの心と霊は麻痺し、腐敗してしまった。あなたはもはや人の世の苦悩について不満を言うこともなく、世の中が不公平であるとは信じない。まして、全能者が存在するかどうかなど気にかけることもない。このようになったのは、あなたが随分前に悪い者を真の父と思うようになり、もはや彼から離れることはできないからである。これがあなたの心の中の秘密である。

107. 夜明けが到来すると、明けの明星が東に輝きだす。それは以前にはそこになかった星で、静寂な星空を照らし、人々の心の中で消された光を再び燃え立たせる。人々はこの光のおかげでもはや孤独ではない。この光はあなたも他人も同様に照らす。しかし、あなただけが暗夜に眠りについたままである。あなたには音も聞こえず光も見えない。あなたは新天新地、新しい時代の到来にも気付かない。なぜなら、あなたの父が、「我が子よ、起きなくてよい。まだ早い。外は寒い。外に出るな。剣や槍があなたの目を射抜かないように」とあなたに言うからである。あなたは自分の父の忠告だけを信じる。なぜなら父はあなたより年を取っており、あなたを心から愛しているので、父だけが正しいと信じているからである。そのような忠告と愛があるために、あなたはもはや世界には光があるという言い伝えを信じなくなり、世界にまだ真理があるかどうかを気にかけなくなる。あなたはもはや全能者からの救済を望むなどということはしない。あなたは現状に満足していて、もはや光の到来を期待しないし、言い伝えられる全能者の出現に注意することもない。あなたに関する限り、あらゆる美しいものは復活させることができず、存在することもできない。あなたの目には、人類の明日、人類の未来は消滅し、跡形もなくなっている。あなたは父の衣に必死になってしがみつき、共に苦しむことを気にせず、あなたの旅の友、長旅の方角を失うことを恐れている。広大でもやの掛かった人の世があなたがたの多くを作り上げ、この世の様々な役割を満たすことにひるまず屈せず立ち向かうようにさせた。それにより、死を全く恐れない多くの「戦士」が作り出された。さらには、自らの創造の目的さえ知らない無感覚で麻痺した人間の群れが次々に生まれた。全能者の目はこの苛酷な苦しみにある人類の一人ひとりを眺めている。全能者に聞こえるのは苦しむ人々の泣き叫ぶ声であり、全能者に見えるのは苦しめられた人々の恥知らずな有様であり、全能者が感じるのは救いの恩恵を失った人類の無力と不安である。人類は全能者の配慮を拒絶し、自らの道を歩くことを選び、全能者の目による詮索を避けようとする。彼らはむしろ深海の苦さを、最後の一滴まで、かの敵とともに味わう方を好む。全能者のため息は人類にはもはや聞こえない。全能者の手はもはやこの悲劇的な人類に進んで優しく触れることはない。全能者は何度も何度も奪還し、何度も何度も失う。このように全能者の働きは繰り返される。その瞬間から全能者は疲れ、うんざり感じ始め、その掌中にある働きを止め、人々の間をさまよい歩くのを止める…。人間はこのような変化の一切、このような全能者の行き来にも、全能者の悲しみと憂いにもまったく気づかない。



108. 夜が静かにしのび寄って来ても、人は気づかない。なぜなら、人の心は夜がどのようにして近づくのかも、それがどこから来るのかも感知できないからである。夜が静かに過ぎ去ると、人は日の光を歓迎するが、光がどこから来て、どのように夜の闇を追い払ったかについては、なおさら知るよしもなく、まして気づいてもいない。こうして繰り返される昼と夜の移り変わりによって、人は一つの時期から次の時期へ、一つの歴史的背景から次の歴史的背景へと導かれ、それと同時に、それぞれの時期における神の働きと、それぞれの時代における神の計画が確実に遂行される。人は神と共にこれらの時期を歩んできたが、神が万物と全ての生けるものの運命を支配することも、神がどのように万物を指揮し導くのかも知らない。これは太古の昔から現代まで、人には知るよしもないことであった。その理由は、神の業があまりにも隠され過ぎているからでも、神の計画がまだ実現されていないからでもない。それは、人の心と霊が神からあまりに遠く離れているため、神に従いながらもサタンに仕え続けるまでなり、しかも、まだそのことに気づいていないからである。神の足跡と顕現を積極的に探し求める者は一人もいない。また進んで神の配慮と加護の中で生存しようとする者もいない。その代わりに、この世と邪悪な人類が従う生存の掟に適応するために、邪悪な者、サタンの腐敗に頼ることを人は望む。この時点で人の心と霊は、サタンへの貢物となり、その餌食となった。その上、人間の心と霊はサタンの住みかとなり、サタンの恰好の遊び場となった。こうして人間は、人間であることの原則について、また人間存在の価値と意義についての理解を気づかないうちに失うのである。神の律法、そして神と人の間で交わされた契約は、人の心の中で次第に薄れ、人は神を求めることも神に注意を払うことも止めてしまう。時間が経つにつれ、人は神が人間を創造した理由も、神の口から出る言葉や神から来る全てをもはや理解しなくなる。それから人は神の律法と掟に抵抗し始め、人の心と霊は麻痺してしまう……。神は自らが最初に創造した人間を失い、人間はその始まりの根源を失う。これが人類の悲哀である。

『言葉は肉において現れる』の「神は人間のいのちの源である」より

#### 脚注

1. 「略奪」は人間の不従順さを露わにするために用いられている。
2. 「敵意の表情と冷淡な不満の意味をこめて振られる千本の人差し指が向けられた。神は、それを忍んで頭を下げ、おとなしく従う牛のように人々に仕えるしか無い」は原文では一文であるが、意味をより明確にするために、ここでは二文に分けてある。最初

の文は人間の行為を指し、次の文は神が受けた苦難と、神が謙り隠れていることを示している。

3.「偏見」は人間の不従順なふるまいを指す。

4.「絶対的な権力の掌握」は人間の不従順な行動を指す。人間は自らを高くし、他の者を束縛し、自分に従わせ、自分のために苦難を受けるようにさせる。そうした者が神に敵対する勢力である。

5.「操り人形」は、神を知らない者を揶揄するために用いられている。

6.「激化を続ける」は、人間の卑しい行動を強調するために用いられている。

7.「チョークとチーズを見分けることが出来ない」は人間が神の旨を歪めてサタンのようなものにする場合のこと、広義には神を拒む人々の行動を指す。

8.「黒と白を混同する」は、真理を妄想と、また義を悪と混同することを指す。

9.「盗賊」は人間が非常識で識見に欠けていることを示すために用いられている。

10.「屑と残飯」は、人間が神を弾圧する行動を示すために用いられている。

11.「激昂して」は、激怒し、憤慨した醜悪な人間の顔を指す。

12.「ぬけぬけと」とは、人間が無謀になって神に対する畏敬の念が一切無くなった状態を指す。

13.「人間の『入ること』」とは、ここでは人間の不従順なふるまいを指す。人間が真にいのちに入ること（これは良いことである）を指すのではなく、人間の悪いふるまいと行動を指す。この語句は包括的に、神に反抗する人間の行動を指す。

14.「架空の恐怖に苛まれている」は、人間の見当違いな人間としての生活を揶揄するために用いられている。悪魔と共生している醜悪な人間の生活を指す。

15.「最も得意とする」は揶揄的に言われている。

16.「熱狂していく一方であり」とは、人間の醜悪な状態を揶揄的に指す。

17.「周到な計画を胸に秘め」は揶揄的に言われており、人間がどれほど自分を知らないか、自分の本当の霊的背丈に無知であることを意味している。

18.「尊敬すべき」は揶揄的に言われている。

19.「放ちそう」とは、神に打ち負かされて怒りで湯気が立っている醜悪な人間の状態を指す。神に対する人間の反抗の度合いを示す。

20.「周到な計画を胸に秘め」とは、人間がどれほど自分を知らないか、自分の本当の背丈を知らないかを指して揶揄的に用いられている。

21.「混乱を招く」とは、悪魔的性質の者が暴動を起こし、神の業を阻害し、神の業に反対することを指す。

22.「ハクジラ」は嘲笑的に用いられている。ハエが極めて小さく、ハエにとって、ぶたや犬はクジラのように大きく見えることの比喩表現。

a. 原文では、ここに「の金貨」が続く。

b.中国の諺。文字上の意味は「山を占領して自分が王であると宣言する山賊」である。

d.これは中国のたとえ話である。

e.原文には「～に対する欲望」という語句が含まれていない。

f.「ひじを外側に向けて曲げる」とは中国の慣用句で、両親、子供、親戚または兄弟姉妹などの近親者を犠牲にして他人を助ける人を意味する。

g.寒號鳥の話はイソップのアリとキリギリスの寓話によく似ている。寒號鳥は温暖な気候の時は巣を作らずに眠っていることを好み、隣に住むカササギが繰り返し警告したにも関わらず巣を作らず、冬が来ると寒號鳥は凍死してしまう。

h.「岸边に戻る」とは中国語の慣用句で、「悪の道から離れる」という意味。

i.「岸边に戻る」とは中国語の慣用句で、「悪の道から離れる」という意味。

j.原文では「正常な」は省かれている。

## X 神の国の時代の憲法、行政命令、戒律についての代表的な言葉

1. わたしの計画した働きは、一瞬もやむことなく進行している。神の国の時代に入って、あなたがたをわたしの国にわが民として移したので、新たにあなたがたに要求することがある。つまり、あなたがたの前に、この時代を統治する憲法の公布を始めるのである。

わが民と呼ばれているのだから、わたしの名に栄光をもたらさなければならない、つまり、試練の只中において証しするのである。もし誰かがわたしを欺いて真実をわたしから隠そうとしたり、わたしの陰で不名誉な行為を働こうとしたりするなら、そのような者は例外なくわたしの家から追い出されて排除され、わたしに取り扱われるのを待つことになる。過去にわたしに対して不誠実で不従順であって、今日、再び立ち上がって、公然とわたしを裁こうとする人々は、その人たちもまた、わたしの家から追い出される。わが民である人々は、常にわたしの負担を気づかい、また、わたしの言葉を知るように努めなければいけない。そうした人々だけをわたしは啓き、彼らは必ずわたしの導きと示しの下で生き、けっして刑罰を受けない。わたしの負担を思いやらず、自分の未来を計画することに集中する者、つまり、行いによってわたしの心を満足させることを目指さず、それよりは施しをねだる者、そうした乞食のような人々を使うことをわたしは絶対に拒む。そうした人々は、生まれたときから、わたしの負担を思いやるということの意味を何も知らないからである。彼らは、異常な理知の持ち主である。そうした人々は、脳の「栄養不足」に陥っていて、何か「栄養」をとるために家に帰らなければならない。わたしは、そうした人々に何の用もない。わが民の中で、すべての人はわたしを知ること、食べる、着る、眠るといった、一瞬も忘れないことのように、最後まで行うべき必須の務めとみなし、しまいには、わたしを知ることが食べることのように慣れ親しんだ技術、何の努力もなしにする手馴れた動作になるようにしなければならない。わたしの話す言葉については、どの一言も絶対に確かなものとし、完全に吸収されなければならない。おざなりの、その場しのぎであってはならない。誰でも、わたしの言葉に注意を払わない者は、真っ向からわたしに敵対しているとみなされる。誰でも、わたしの言葉を食べない者、あるいは、知ろうとしない者は、わたしに注意を払っていない者とみなされ、すぐさま、わたしの家の戸口から掃き出される。なぜなら、わたしが以前に述べたように、わたしが望むのは大勢の人々ではなく、選りすぐりの少数だから

である。百人の中から、たった一人がわたしの言葉を介してわたしを知るようになるなら、わたしは喜んでその他の者たちを捨て去り、そのたった一人を集中的に啓き照らそう。このことから、多数だけでは必ずしもわたしを表現し、生きることができないことがわかる。わたしが望むのは、（実が詰まっていなくとも）麦であり、（たとえ実がいっぱいに詰まった立派なものでも）毒麦ではない。追い求めることには関心がなく、怠惰な行動をする者たちは、自分から立ち去るべきである。わたしはもう彼らを見たくない。彼らがわたしの名を汚すことのないように。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第五章」より

2. わたしは今、わたしの国の行政命令を布告する。すべてのことがわたしの裁きの内にあり、すべてのことがわたしの義の中にあり、すべてのことがわたしの威厳の中にあり、義がすべての者に実施される。わたしを信じていると言いながら、心の中でわたしに反する者、あるいはその心がわたしを捨てた者は、追い出されるが、それは全てわたしの時に応じてである。人に知られないようにだが、わたしのことを皮肉を込めて話す者は、すぐに死ぬであろう（彼らは霊、魂、肉体において死ぬだろう）。わたしが愛する人たちを弾圧したり冷遇する者については、わたしの憤りが直ちに彼らを裁くだろう。つまり、わたしが愛する人たちに対して嫉妬心を抱き、わたしのことを義ではないと思う者は、わたしが愛する人たちに引き渡され裁かれるであろう。品行方正な者、質素な者、正直な者たち（知恵がない者も含む）、そして一心にわたしに誠実を尽くす者たちは、皆わたしの国に留まるだろう。訓練を受けていない人たち、つまり知恵と見識に欠けているが正直な人たちは、わたしの国で権力を持つであろう。しかし、彼らもまた、取り扱いと碎かれることを体験してきた。彼らが訓練を受けていないということは、絶対的なことではなく、むしろこれらのことを通して、わたしはわたしの全能性と知恵をすべての者に示すのである。わたしは今もなおわたしを疑っている者を追放する。わたしはその一人も要らない（このような時に、まだわたしを疑う者をわたしは忌み嫌う）。わたしが全宇宙に渡って行う業によって、わたしは、わたしの行為の素晴らしさを誠実な人たちに示し、そうして彼らの知恵、見識、識別力を高めるだろう。また、わたしの素晴らしい行為によって、偽り者たちが一瞬のうちに滅ぼされるようにする。最初にわたしの名を受け入れた長子たち（それらの聖なる傷のない者、誠実な人々を意味する）は皆、真っ先に神の国に入り、わたしと共に万国万民を支配し、神の国で王として治め、万国万民と一緒に裁くであろう（神の国のすべての長子たちを意味し、他の者ではない）。裁きを受けて悔い改めた、万国万民は、わたしの国に入り、わたしの民と

なる。また、頑なで悔い改められない者たちは、底なしの穴に投げ込まれる（永遠に滅びるように）。神の国での裁きが最後の時となり、それはわたしが世界を完全に清める時となる。その時は、もはやどんな不正も、悲しみも、涙も、嘆息もなくなり、それ以上に、世界は存在しなくなる。すべてはキリストの現れとなり、すべてがキリストの国となるだろう。何という栄光だ！何という栄光だろう！

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十九章」より

3. 今、わたしは行政命令をあなた方に公布する（これは公布したその日から有効で、人々に応じてそれぞれの刑罰を割り当てる）。

わたしは約束を守り、すべてはわたしの手の中にある。疑う者は誰でも必ず殺される。考慮する余地はない。彼らは直ちに根絶やしにされ、わたしの心からは嫌悪が取り除かれる。（このことから、殺されるものは誰もわたしの国に属する者の一人であるはずはなく、サタンの子孫に違いないことが確認できる。）

長子たちとしてあなた方は自分の立場を守り、自分の本分をしっかりと尽くし、他人のことに首を突っ込む人になってはいけない。あなた方はわたしの経営（救いの）計画のために身を捧げるべきであり、行く先々でわたしへのよい証しをして、わたしの名を賛美すべきである。恥ずべきことはせず、すべてのわたしの子らやわたしの民の模範となるべきである。一瞬たりとも慎みをなくしてはいけない。いつも長子という身分で皆の前に現れ、卑屈な態度ではなく、胸を張って堂々と歩かなければならない。わたしはあなた方にわたしの名前を侮辱するのではなく、称えることを要求している。長子たちはそれぞれ自分の役割を持っており、何でもして良いわけではない。これはわたしがあなた方に与えた責任であり、義務を怠ることはできず、わたしがあなた方に委ねたことを全身全霊で、全力を用いて果たすことに専念しなければならない。

この後、長子たちには、世界中の至る所ですべてのわたしの子らと民を牧養するという義務が委ねられ、全身全霊でそれを遂行できない者には誰でも、わたしは罰を与えるだろう。これはわたしの義である――わたしは長子たちでさえ容赦しないし、寛大な処置を与えない。

わたしの子らか、わたしの民の中に、わたしの長子たちの一人を馬鹿にしたり、侮辱したりする者がいたら、わたしはその者を厳しく罰するだろう。わたしの長子たちはわたし自身を表し、誰かが彼らに対してすることは、わたしに対してすることでもあるからだ。これはわたしの行政命令の中でもっとも厳しいものである。わたしはわたしの子

らや民の中の誰であれ、この命令に背く者に対しては、長子たちに、わたしの義を思うさま実施させる。

誰であれわたしを軽薄な態度で見る者をわたしは着々と見捨てていく。たとえば、わたしの食べ物、衣服、睡眠にだけ注目する者、わたしの外面的事柄だけに関心を向け、わたしの重荷を考慮しない者、自分自身の役目をきちんと果たすことに注意を払わない者などである。これは聞く耳を持つ者すべてに向けられる。

わたしへの奉仕を終える者は誰でも素直に引き下がり、言い争わないようにしなさい。注意しなさい。さもないと、わたしはあなたにつらく当たるだろう。（これは補足である。）

わたしの長子たちは今から鉄の鞭を手に取り、わたしの権威を示す行動を始め、すべての国家や民族を統治し、すべての国家や民族の間を歩き、わたしの裁き、義、威厳をすべての国家や民族の中で実行する。わたしの子らやわたしの民は止むことなくわたしを畏れ、褒め称え、わたしに喝采を送り、わたしを賛美する。わたしの経営（救いの）計画は実行され、わたしの長子たちはわたしと共に支配することができるからである。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第八十八章」より

4. 今日人が守るべきことにおいて、次のことよりも重要なことはない。あなたの目の前にいる神を欺いたり、神から何か隠したりしてはならない。あなたの前にいる神の前で、みだらなことや傲慢なことを言うてはならない。神の信頼を得ようとして、あなたの目の前の神を上手い言葉やたくみな話で欺いてはならない。神の前で不遜なふるまいをしてはならない。あなたは神の口から出る全ての言葉に従うべきであり、それに対し抵抗したり、逆らったり、反論してはならない。神の口から出る言葉を自分勝手に解釈してはならない。あなたの舌を戒めなければならない。悪い者の偽りの計略に陥らないよう、あなたは口を慎むべきである。神があなたのために定めた境界線を超えないよう、あなたの歩みに注意しなければならない。そんなことをすればあなたは、神の観点から、自惚れた大げさな言葉を話すことになり、その結果神に忌み嫌われる。神の口から出た言葉をむやみに繰り返してはならない。でなければ他人があなたをあざけり悪魔が嘲笑するだろう。今日の神の働きの全てに従わなければならない。たとえそれが理解できなくても、それを裁いてはならない。あなたにできることは、ひたすら探求し、交わりを持つことだけである。誰も神の本来の地位を超えてはならない。あなたにできるのは、人間としての立場から、今日の神に奉仕することだけである。人間としての立場

から今日の神を教えてはならない——そうすることは道に外れたことである。誰も神によって証しされている者の地位に立ってはならない。あなたがたの言葉、行動、最奥の思いにおいて、人間としての立場に立ちなさい。これは守るべきことであり、人間の責任であり、変更することは誰にも許されず、そうすることは神の行政命令に背くことである。これは全ての人が覚えておくべきことである。

『言葉は肉において現れる』の「新時代の戒め」より

5.

(一篇の御言葉)

### **神の国の時代に神に選ばれた人々が従わなければならない行政命令十項目**

1.人は自分を大きく見せてはならないし、崇めてもいいけない。人は神を崇め、賛美するべきである。

2.あなたは神の働きのためになることは何でもするべきであり、神の働きに有害なことは一切してはならない。神の名、神の証し、神の働きを守るべきである。

3.金銭、物質、神の家のすべての財産は、人が提供すべき捧げものである。これらの捧げものを享受するのは祭司と神だけである。人からの捧げものは神が享受するためのものであり、神はこれらの捧げものを祭司とだけ分かち合い、ほかの誰も、捧げもののいかなる部分であれ、享受するに相応しくなく、またそうする資格はないからである。人からの捧げものはすべて（金銭や享受できる物質的なものを含め）神に捧げられ、人には与えられない。それゆえ、これらのものを人は享受すべきではない。捧げものを享受するなら、その人は捧げものを盗んでいるのである。誰でもこのようなことをする人はユダである。ユダは裏切り者であることに加えて、金袋に入っているものも勝手に使ったからである。

4.人の性質は墮落している。その上、人はさまざまな感情を持っている。そこで、男女が二人きりで一緒に働き、神に仕えることは絶対に禁止される。誰でもそうしていることが見つかった者は除名され、これに例外はなく、誰も免除されない。

5.あなたは神を批判してはならず、不用意に神に関連する事柄について話してはならない。人が行動すべき仕方で行動し、話すべき仕方話し、自分の限度を越えてはならず、自分の境界を逸脱してもならない。口を慎み、自分の歩みに気をつけなさい。これらはすべて、神の性質を犯すことを防ぐであろう。



6.人が行うべきことを行い、自分の責務を実行し、責任を果たし、本分を忠実に守るべきである。あなたは神を信じているのだから、神の働きに貢献するべきである。そうしなければ、あなたは神の言葉を飲食する資格がなく、神の家で暮らす資格もない。

7.教会の仕事や事柄に関し、神に従うことは別として、すべてのことについて聖霊に用いられている人の指示に従うべきである。ほんのわずかな違反も受け入れられない。絶対的に順守するべきであり、正誤を分析してはならない。何が正しいか、間違っているかはあなたには関係がない。あなたは全面的に服従することだけを気かけなければならない。

8.神を信じる人は神に従い、神を礼拝すべきである。どんな人物をも、崇めたり、仰ぎ見たりするべきではない。神を第一位とし、仰ぎ見る人々を第二位とし、自分自身を第三位とすべきではない。誰もあなたの心の中に場所を占めるべきではなく、あなたは人々を、とりわけあなたが崇拝する人々を、神と劣らず、神と同等なものと考えてはならない。これは神にとって耐えられないことである。

9.あなたの思いは教会の仕事にあるべきで、自分の肉体の将来的展望は脇にやり、家庭問題については決然とし、心から神の働きに自己を捧げ、神の働きを第一にし、自分自身の生活は第二にするべきである。これが聖徒の礼儀正しさである。

10.信仰のない家族（あなたの子供たち、夫または妻、姉妹、両親など）は強制的に教会に入会させられるべきではない。神の家はメンバーに不足しておらず、役に立たない人々で数を作り出す必要もない。喜んで信じない人は誰も、教会に導き入れてはならない。この命令はすべての人に向けられる。この件に関し、あなたたちはお互いに確認し、監視し、注意するべきである。だれでもこれを犯してはいけない。信仰のない家族が不本意に教会に入る時でさえ、彼らに書籍を与えたり、新しい名前を与えたりしてはならない。そのような人々は神の家には属しておらず、必要ないかなる手段を用いても彼らが教会に入ることは止めなければならない。もし悪魔が侵入したために教会に問題が持ち込まれたなら、あなた自身が除名されるか、またはいくつかの制約が課せられる。要するに、誰もがこの件に関して責任があり、無謀なことをしてはならず、個人的恨みを晴らすために使ってはならない。

『言葉は肉において現れる』より

6. 人々は自分の為すべき多くの本分を固守しなければならないということである。これが、人々が守りまた実行すべきことである。聖霊によって為されるべきことは、聖

霊にまかせなさい。そこには人間の介入する余地はない。人間は人間によって為されるべきことを固守すべきであり、そこに聖霊との関係はない。これが正に人の為すべきことであり、それは旧約の時代に律法を守るのとちょうど同じように、戒めとして守るべきなのである。今は律法の時代ではないが、律法の時代の言葉と同一の多くの言葉がやはり存在し、それらを守らなければならない。そして、それらの言葉は、ただ聖霊によって感動させられることに頼ることで実行されるのではなく、それらは人が守るべき事である。例えば、実際の神の働きを裁いてはならない。神によって証しされている者に反抗してはならない。神の前では、自分の立場をわきまえ、放蕩であってはならない。あなたは口を慎み、自分の言葉と行動が神によって証しされている者の采配に従うものでなければならない。あなたは神の証しを敬い畏れなければならない。神の働きと神の口から出る言葉を見做してはならない。神の言葉の口調と目的を真似てはならない。外から見て、神が証しする者に明らかに逆らうことは一切してはならない。そしてその他のことも。これらは各人が守るべき事である。

『言葉は肉において現れる』の「新時代の戒め」より

7. あなた方はわたしが言うことを心の中に留めなければならない。わたしの言葉を通してわたしの心を理解し、わたしの重荷への配慮を示さなければならない。そうすれば、あなた方はわたしの全能性を知るようになり、わたしという存在を見るようになるだろう。わたしの言葉は知恵の言葉であり、誰もわたしの言葉の背後にある原則や法則を理解することはできないからである。人々は、わたしが詐欺や曲がったことを行っていると思い、また、わたしの言葉を通してわたしを知ることがないが、逆にわたしを冒瀆する。彼らは非常に盲目で無知である。そして彼らには何の識別力もない。わたしが言うすべての文は、権威と裁きを持っており、誰もそれを変えることはできない。一旦わたしの言葉が発せられたら、物事はわたしの言葉に従って成し遂げられるだろう。そして、これはわたしの性質である。わたしの言葉は権威であり、誰であれそれを改定する者はわたしの刑罰に反するので、わたしは彼らを打ち倒さなければならない。深刻な場合は、彼らは自分のいのちに滅びを招き、ハデスカ、底なしの穴に落ちる。これが、わたしが人類を扱う唯一の方法であり、人間にそれを変えるすべはない——これがわたしの行政命令である。これを憶えておきなさい。誰もわたしの行政命令に違反してはならない。これはわたしの旨に従って行われなければならない。過去には、わたしはあなた方に甘くし過ぎて、あなた方はわたしの言葉にだけ向き合った。人々を打ちのめすことについてわたしが語った言葉は、まだ実現していなかった。しかし、今日から、すべ

ての災害（わたしの行政命令に関連するこれらの災害）は、わたしの旨に従わないすべての者たちを罰するために、次から次へと降りかかるだろう。事実の出現がなければならぬ、そうでなければ人々はわたしの怒りを見ることができず、繰り返し放蕩するだろう。これはわたしの経営（救いの）計画の一段階であり、また、わたしの働きの次の段階を行う方法である。あなた方が違反を犯すことを避け、永遠の地獄の苦しみを避けることができるように、わたしはこれをあなた方にあらかじめ伝えておく。つまり、わたしは今日から、わたしの長子を除くすべての人々を、わたしの旨に従って適切な場所に就かせ、彼らを一人ずつ罰する。わたしは彼らのうちの一人ですえ放免しないであろう。あなた方は再び放蕩しようとする。あなた方は再び反抗的になろうとする。わたしは感情の欠片もなくすべての者に対して義である、と以前わたしは言った。そして、これはわたしの性質を侵害してはならないことを示している。これがわたしの存在である。誰もこれを変えることはできない。すべての人々がわたしの言葉を聞き、すべての人々がわたしの栄光ある顔を見る。すべての人々はわたしに完全に、そして絶対に従わなければならない——これはわたしの行政命令である。宇宙の果てにいるすべての人々はわたしを賛美し、わたしに栄光を帰さなければならない。何故なら、わたしは唯一の神自身であり、わたしは神の存在であるからだ。誰もわたしの言葉や発言、わたしの話やふるまいを変えることはできない。何故なら、これらはわたしだけの事柄であり、わたしが永遠に所有し、永久に存在するものだからである。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第百章」より

8. あなた方はみなわたしの行政命令について識見を得るべきである。さもなくば、あなた方はほんの少しの恐れも持たず、わたしの前で不注意になり、わたしが完全にしたいもの、完成させたいもの、わたしが得たいもの、わたしの国がどのような人間を必要としているかを知ることはないだろう。

わたしの行政命令は。

- 1.誰であれ、心の中でわたしに逆らう者は裁かれる。
- 2.わたしが選んだ者たちについては、間違った考えを持とうと即座に鍛錬される。
- 3.わたしを信じない者は脇へ置いておき、最後の最後まで不注意に話し行動するままにさせておき、そして彼らを徹底的に罰し、分類する。
- 4.わたしを信じる者たちについては、わたしはいかなる時にも彼らを世話し守るであろう。わたしはいかなる時も救いの手段を使って、彼らをいのちで満たす。これらの人

々はわたしの愛を得、決して躓いたり、道を見失ったりすることはない。彼らの持つどんな弱点も一時的なものであり、わたしは決してそれらを思い出さない。

5.信じているように見えるが本当は信じてない者たち、すなわち神がいることを信じているがキリストを求めず、かといって抵抗しない者たち、この種の人々は最も惨めであるが、わたしの業をとおしてわたしは彼らにはっきりと見せる。わたしの行為をとおして、わたしはこの種の人々を救い、取りを戻すだろう。

6.わたしの名を一番最初に受け入れた神の長子らは祝福されるであろう。わたしは必ずあなた方に最高の祝福を授け、あなた方は心ゆくまで楽しむだろう。誰一人それを妨げようとはしないだろう。これがわたしの行政命令であるため、すべてがあなた方のために完全に用意されているのだ。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第五十六章」より

9. わたしの裁きはすべての者に下り、わたしの行政命令はすべての者に及び、わたしの言葉と人間の存在はすべての者に現される。これはわたしの霊の大いなる働きの時である（この時、祝福される者と災いを受ける者が区別される）。わたしの言葉が発せられるやいなや、わたしは祝福される者と災いを受ける者を区別する。それは完全明瞭であり、わたしはそれを一目で見ることができる。（それはわたしの人間性について述べられているので、わたしの予定と選択とに矛盾しない。）わたしは山と川とあらゆる物と宇宙空間を行き巡り、あらゆる場所を観察し、すべての場所を清める。それは、わたしの言葉によって、それらの汚れた場所と墮落した地がすべて消えて無くなり、燃え尽くされ、無に帰すためである。わたしにとっては、すべてが容易である。もし今が世界を滅ぼすようにわたしが予定した時であるなら、わたしはそれを一つの言葉で呑み込むこともできるが、今はその時ではない。わたしの計画を混乱させ、わたしの経営を妨げることがないように、わたしがこの働きをする前に、すべてのことが準備されなければならない。わたしは合理的にそれを行う方法を知っている。わたしにはわたしの知恵があり、わたしの采配がある。人々は指一本動かしてはならない—わたしの手によって殺されないように気をつけなさい—それはすでにわたしの行政命令に触れることである。このことから、人は、わたしの行政命令の厳しさを見ることができ、次のような二つの側面を含む、わたしの行政命令の原則を見ることができる。一方で、わたしは、わたしの旨と一致しないすべての者とわたしの行政命令に違反するすべての者を殺す。また一方では、わたしの怒りの中で、わたしは、わたしの行政命令に違反するすべての者を呪う。これらの二つの側面は不可欠であり、それはわたしの行政命令の方針原則である

。すべての人々は、どんなに忠実であろうと、感情を伴わずに、これらの二つの原則に従って取り扱われる。これはわたしの義を示し、わたしの威厳とわたしの怒りを示すのに十分であり、それは、地上のすべてのもの、世のすべてのもの、そして、わたしの旨と一致しないすべてのものを焼き尽くすだろう。わたしの言葉の中には隠された奥義があり、またわたしの言葉の中には明らかにされた奥義があるので、人間の観念、人間の心の中では、わたしの言葉は永遠に理解することができず、わたしの心は永遠に計り知れないのである。言い換えれば、わたしは人間から観念と思考を追い払わなければならない。これはわたしの経営（救いの）計画の中の最も重要な項目である。わたしの長子たちを獲得し、わたしがしたいことを達成するためには、わたしはこのようにそれを行わなければならない。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第百三章」より

10. 古い世界が存続する間、わたしは国々の上に怒りを投げつけ、わたしの行政を全宇宙に公布し、違反する者には刑罰を下す。

わたしが全宇宙に向かって話すと、人間はみなわたしの声を聞き、そこで、わたしが全宇宙で行ってきた業を見る。わたしの心に逆らう者、つまり、人間の行いでわたしに敵対する者は、わたしの刑罰を受けて倒れる。わたしは天の多くの星々を取ってそれらを新しくし、わたしにより、太陽と月は新たになる——空はもはや以前のものではない。地上の無数の物事が新たになる。すべては、わたしの言葉により完全になる。全宇宙の多くの国々は、新たに区切られ、わたしの国に置き換わる。地上の国々は永遠に消え去り、わたしを崇める一つの国になる。地上のすべての国々は破壊され、存在しなくなる。全宇宙の人間のうち、悪魔に属する者はみな、滅ぼし尽くされる。サタンを礼拝する者はみな、わたしの燃える炎に倒れる——つまり、今、流れの中にいる者以外は、灰になるのだ。わたしが多くの民を罰するとき、宗教界にいる者は、わたしの業に征服され、程度の差はあれ、わたしの国に戻る。彼らは聖なる方が白い雲の上に乗って降臨するのを見たからである。人間はみな、種類に従い、それぞれの行いに応じて刑罰を受ける。わたしに敵対した者たちは、みな滅びる。地上での行いがわたしと関わりのなかった人たち、その人たちは、自分たちの行いによって、地上にわたしの子らとわが民の支配下で存在を続ける。わたしは無数の人々と無数の国々にわたしを現し、わたしは自ら声を発して地上にわたしの大いなる働きの完了を告げ、全人類が自分たちの目でそれを見られるようにする。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十六章」より

## XI 真理の現実に入ることについての代表的な言葉

## (I) 神への信仰についての言葉

1. 神への真の信仰は、救われるために神を信じることではないどころか、よい人であることでさえありません。また人間らしさを持つために神を信じることでもありません。実際、信仰というものを、単に神の存在を信じていることとして見るべきではありません。つまり、神は真理であり、道であり、いのちであり、それにつきると信じさえすればよい、ということではないのです。また、神を認め、神は万物の支配者にして全能であり、この世のすべてのものを創造し、唯一にして至高であると信じればよいということでもありません。信仰はあなたにこれらの事実を信じさせるだけのものではありません。あなたの存在全体と心が神に与えられ、神に服従すべきだというのが神の旨です。つまり、神に従い、神があなたを用いられるようにし、神のために力を尽くすことを喜び、神のために何でもするべきなのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理の追求だけが神への真の信仰である」より

2. 「神への信仰」とは神の存在を信じることを意味し、これは神に対する信仰の最も単純な考えである。さらに、神の存在を信じることは、真に神を信じることと同じではない。むしろそれは強い宗教的含みを持つ単純な信仰である。神への真の信仰とは、神はすべてのことに支配権を持つという信念に基づいて神の言葉と働きを経験することを意味する。墮落した性質から解放され、神の望みに応じ、神を知ることができる。そのような道程を経てのみ、神を信じていると言える。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

3. 今日、神に対する真の信仰とは何だろうか。それは、神の真の愛を達成するために、神の言葉をあなたのいのちの真実として受け入れることであり、神の言葉から神を知ることである。明確にするために言うと以下のように言える。すなわち神への信仰は、あなたが神に従うこと、神を愛すること、さらに、神の被造物によって為されるべき本分を遂行することに資するものである。これが、神を信じることの目的である。あなたは、神の美しさ、神がいかに尊敬に値するか、造ったものの中で、神がいかに救いの働きを行いそして彼らを完全にしているかについての認識を達成しなければならない。これが、あなたが神への信仰において所有しなければならない最低限である。神への信仰は主として、肉における生活から神を愛する生活への転換、自然のままの生活から神という存在の内部での生活への転換である。そしてそれは、サタンの領域下から出て神の配慮と保護の下で生きることであり、肉への従順ではなく神への従順を達成できるこ

とであり、神があなたの心のすべてを獲得しあなたを完全にすることを可能にすることであり、さらにあなた自身を墮落したサタンのような性質から自由にすることである。神への信仰は主として、神の力と栄光があなたの中で明らかに示されるためである。その結果、あなたは、神の旨を行い、神の計画を成し遂げることができ、さらに、サタンの前で神への証しとなることができるようになる。神への信仰は、しるしや不思議を見るためであってはいけなし、あなたの個人的な肉のためであってもいけない。それは、神を知ること、神に従うことができること、そしてペテロのように、死を賭してまで神に従うことを追求する行為でなければならない。これが、信仰を達成するために必要な主なものである。神の言葉を食べて飲むことは、神を知るためであり、神を満足させるためである。神の言葉を食べて飲むことは、あなたに神についてのより大きな認識を与える。そして、そうやってはじめて、あなたは神に従うことができる。あなたは神を知ってはじめて、神を愛することができ、そしてこの目的の達成は、人が神への信仰において持つべき唯一の目的である。もし、あなたの神への信仰において、あなたがいつも、しるしや不思議を見ようとするなら、そのような神への信仰の考え方は間違っている。神への信仰とは、主に、いのちの真実として神の言葉を受け入れることである。神自身の口から出た言葉を実践し、あなた自身の内部でそれらの言葉を成し遂げることだけが、神の目的の達成である。神を信じることに於いて、人は神によって完全にされること、神に服従することができること、そして神への完全な従順を、追求すべきである。もしあなたが不平もなく神に従うことができ、神の希望を心に留め、ペテロの霊的背丈に達し、そして神が言うところのペテロの流儀を所有するなら、それはあなたが神への信仰に成功したときであり、そしてそれは、あなたが神のものとされたことを意味するだろう。

『言葉は肉において現れる』の「すべては神の言葉が達成する」より

4. 神を信じているのだから、神の言葉を飲み食いし、神の言葉を体験し、神の言葉を生き抜かなければならない。それだけが神を信じることであると言える。口では神を信じると言いながら、どの神の言葉を実践することも、どんな現実を引き出すこともできないなら、それは神を信じることであるとは言えない。そうではなく、それは「飢えを満たすためにパンを求めること」である。取るに足らない証しや役に立たない事柄、表面的な物事について話すだけで、現実をほんの少しも得ていないのは神への信仰ではなく、神を信じる正しい道も全然把握していないことになる。なぜ可能な限りに多くの神の言葉を飲み食いしなければならないのか。もし神の言葉を飲み食いしないが、天に



昇ることだけを求めるならば、それは神を信じることであろうか。神を信じる人が進むべき最初の一步は何か。神はどのような道により人間を完全にするのか。神の言葉を飲み食いすることなく人は完全にされることができなのか。神の言葉を現実としてもたずに、神の国に属する民とみなされることができだろうか。神への信仰とは正確には何なのか。神を信じる人々は、少なくとも外見上はよい振る舞いをしなければならない。何よりも重要なことは、神の言葉をもっていることである。どうなろうとも、神の言葉から決して離れることはできない。神を知ること、神の心を満たすことはすべて神の言葉をとおして達成される。将来において、すべての国、教派、宗教、領域は言葉をとおして征服される。神は直接話し、すべての人々は神の言葉をその手に抱く。これにより、人類は完全にされる。内にも外にも、神の言葉はあらゆるところに行き渡る。人類は自らの口で神の言葉を語り、神の言葉にそって実践し、神の言葉を内に留め、内も外も神の言葉に満たされる。このようにして人は完全にされる。神の心を満たし、神の証しを立てることができ人々は、神の言葉を現実として自分のものにする人々である。

『言葉は肉において現れる』の「神の国の時代は言葉の時代」より

5. 今日、実際の神を信じるので、正しい軌道に乗らなければならない。神を信じる者としてただ祝福を求めるのではなく、神を愛し、神を知ることが求めるべきである。神の導きや示しと自身の追求を通して、神の言葉を飲食し、神への真の認識において成長し、心からの真の神への愛を持つことができるようになる。すなわち、あなたの神への愛は本物で、誰もあなたの神への愛を壊したり、立ちは大かたりすることはできない。それならあなたは神への信仰の正しい軌道に乗っているということである。それはあなたが神に属していることを証明する。あなたの心は神によって所有され、他の誰にも所有されることはあり得ないからである。あなたの経験、あなたが支払った代価、そして神の働きのおかげで、あなたは神に対する自発的な愛を育むことができる。それからあなたはサタンの支配から解放され、神の言葉の光の中に生きる。あなたが暗闇の影響から自由になったときにのみ、あなたは神を得たと言うことができる。あなたが神を信じるにあたり、これを目標としなければならない。これはあなたが一人一人に課せられた義務である。誰もあるがままの状態に満足すべきではない。神の働きにおいて二心であったり、軽々しく見なしたりすべきではない。あなたがたは神のことをあらゆる点において、また常に考え、神のために全てのことをなすべきである。そして、あなたがたの言行においてまず神の家の利益を優先すべきである。これしか神の心と一致するものはない。

6. 今、全ての人々は、神に仕える者は神のためにどのように苦しむかを知ることだけでなく、更に、神を信じるということは、神を愛することを求めるためであることを理解すべきである、ということを知っている。神があなたを用いるのは、単にあなたを精錬したり、苦しませたりするためではなく、あなたが神の行為を知るようになるためであり、人生の真の意義、とりわけ、神に仕えることは容易な業ではないことをあなたが知るようになるためである。神の業を体験することは、恵みを楽しむというよりも、むしろあなたの神への愛のために苦しむことである。あなたは神の恵みを享受しているのであるから、神の刑罰も享受すべきである——あなたは、これらのこと全てを体験しなければならない。あなたは神があなたの内に与える啓示を体験できることもあれば、あなたへの神の取り扱いと裁きを体験できることもある。そのようにして、あなたは全ての側面を体験する。神は、あなたに裁きの業を行い、また刑罰の業も行った。神の言葉は、あなたを取り扱ったが、それはまた、あなたに啓示と明察も与えた。あなたが逃げたいと思う時、神の手は依然としてあなたを捉えている。こうした業は、全部人間に関する全てのことが神の意のままであることをあなたが知るようになるためである。あなたは神を信じることは、苦難を受けること、または神のために多くの事を行うこと、あるいは自分の肉の平穩のため、自分にとって全てのことがうまくいき、全てが快適であることのためだと思うかも知れない——しかし、神を信じるためには、こうした目的はいずれも人間が持っていてはならないものである。あなたがそのように信じているのであれば、それは誤った見方であり、あなたは決して完全にされることはない。神の行い、神の義なる性質、神の知恵、神の言葉、そして神の驚異とはかり知れない性質は、全て人々が理解すべきことである。そうした理解により、個人的な要望、及び自分個人の希望、心中の観念を取り除きなさい。これらのことを排除してはじめて、あなたは神の要求する条件を満たすことができる。このことを通してのみ、あなたはいのちを得、神を満足させることができるのである。神を信じることは、この値なき人々の群れを通して神の行いと栄光が表出されるために、神を満足させ、神が求める性質を実際に生き抜くためのものである。これが、神を信じるための正しい観点であり、あなたが追求すべき目標でもある。あなたは、神を信じるための正しい観点をもち、神の言葉を得ることを求めなければならない。あなたは、神の言葉を食べ飲みし、真理を実際に生き抜き、とりわけ神の実際の行い、遍く全宇宙において為される神の素晴らしい業、また、神が肉の内に為す実際の業を見る必要がある。実際の体験を通して、人々は神がどのように自分の業を彼らの上に行うのか、また、彼らに対する神の意志は何であることを理

解することができる。これらの全てはあなたの墮落したサタンによる性質を排除するためである。あなたの中にある汚れと不義を払拭し、誤った意図を取り除けば、あなたは神への真の信仰を育むことができる。真の信仰を持つことによってのみ、あなたは神を真に愛することができる。あなたは、神への信仰を基礎としてのみ、ほんとうに神を愛することができる。神を信じずに神を愛することができるだろうか。あなたは神を信じているのだから、それについては考えが混乱することはないはずである。ある人々は、神への信仰が自分に祝福をもたらすことを見るとすぐに活力に満ちる。しかし、精錬で苦しまなければならないと知るとすぐに全ての精力を失う。これが神を信じることだろうか。最終的に、あなたは信仰において神の前での完全無欠の服従を成し遂げなければならない。あなたは神を信じているが、まだ神に要求している。また、捨てきれない多くの宗教的観念がある。諦めきれない個人的な利益がある。そして、依然として肉の祝福を求め、神があなたの肉を助け出し、あなたの魂を救うことをねがう——これらは全て誤った観点を持つ人々が表すことである。宗教的信念を持つ人々は、神を信仰しているものの、性質を変えることや、神に関する認識を追い求めず、自分の肉の利益のみを追求している。あなたがたのうち多くの者は、宗教的信念の域に属する信仰を持っている。それは神への真の信仰ではない。神を信じるためには、人々は、神のために苦しむ心と、自分自身を捧げる意志を持っていなければならない。この二つの条件を満たさない限り、それは神への信仰とはみなされず、彼らは性質における変化を達成することはできないであろう。心から真理を追い求め、神に関する認識を求め、いのちを追い求める人々だけが、神を真に信仰している者である。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

7. 人が神に信仰を持つ上での最大の過ちは彼の信仰が言葉だけであり、実生活の中に全く神が存在していないということである。確かに、人は神の存在を信じているが、神は人の日常生活の一部ではない。人の口からは神への多くの祈りが聞かれるが、人の心には神が存在する場所はほとんどなく、神は幾度も人を試す。人は汚れているので、神が人を試すことで人が恥じ入り試練を通して自分自身を知るようにするしか方法がないのである。そうでなければ、人はすべて天使長の子どもとなり、ますます墮落していくだろう。人が神を信じている間は、神によって絶え間なく清められるので、多くの個人的動機や目的は捨てられる。さもなければ、誰も神によって用いられることはできない。神がすべき働きを人にする方法はない。神はまず人を清める。この過程において、人が自分自身を知りようになり、神が人を変える。この後でしか、神のいのちは人に働

かれない。この方法でしか、人の心は完全に神に向けられない。だから、神を信じることは人が言うように簡単なことではない。神がそれを見られるように、もしあなたに認識しかなく、いのちとしての神の言葉をもっていないなら、また、もしあなたが自分自身の認識しかなく、真理を実践することも、神の言葉を生かし出すこともできないなら、これはまだあなたが神に対して愛の心を持っていないという証明で、またあなたの心は神に属していないことを示している。神を信じることで神を知るようになること、これこそ最終目標で、人が求めることである。神の言葉を実行できるよう、生かし出すことに全力を尽くさなければならない。もしあなたが教義上の認識しか持っていないなら、あなたの神への信仰は無意味なものになるだろう。もしあなたが神の言葉を実践し、言葉を生かし出すなら、あなたの信仰は完全であり、神の心と一致していると見なされる。

『言葉は肉において現れる』の「神を信じるなら真理のために生きるべきである」より

8. あなたは神を信じ、神に付き従っているのだから、心で神を愛さなければならない。自分自身の堕落した性質は脱ぎ捨て、神の望みを叶えることを追い求め、被造物としての本分を尽くさなければならない。あなたは、神を信じ付き従う以上、あなたの持つすべてを神に捧げ、自分の個人的な選択や要求は持たず、神の望みを満たすことを成し遂げるべきである。造られた者として自分を造った神に従うべきである。これは、あなたが元々自分を支配することができず、自分の終着点を決める能力も持ち合わせていないからである。あなたは神を信じる者である以上、聖さと変化を追い求めるべきなのである。あなたは被造物であるから、本分を守り、自らの立場を守り、その本分を超えてはならない。これはあなたを束縛したり、教義によって抑えつけたりするものではなく、ひたすらあなたが本分を尽くすための道であり、義を尽くす人には必ず到達できる、また到達されるべき道である。

『言葉は肉において現れる』の「成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている」より

9. 人が神を信じるために最も基本的なことは、その人が誠実な心を持ち、完全に自分を捧げ、また本当に従うことである。人にとって最も困難なことは、真実なる信仰を得ることと引き換えに、自らの全人生を捧げることだが、それができれば、人は完全なる真理を得ることができ、被造物としての本分を尽くすことができるのである。これは、失敗した人たちは会得できないものであり、キリストに出会うことができない人にとっては更に到達できないことなのである。人は、神にそのすべてを捧げることが得意でなく、創造主に対する本分を進んで尽くそうともせず、真理を知ったにも関わらずその

道を避けて自分の道を行き、これまで失敗した人の道に沿って追い求め、常に天に背くことで常に失敗し、サタンの誘惑に負け、自らしかけた罠に落ちてしまうのである。人はキリストを知らず、真理を理解し経験することに長けておらず、パウロを過剰に崇拜し、天国に入る欲求だけ強く、キリストが人に従うことを常に要求し、そしてひたすら神に対してもあれこれ指示をする。それだから、偉人と言われる人たちやこの世の苦難を経験した人たちでさえも死を免れず、神の刑罰により死ぬのである。このような人たちについては、非業の死を遂げると言うしかないが、彼らの結末、つまりその死は正当化するだけの理由があるのだ。そういう人たちの失敗は、天の法則にとってさらに耐えがたい事ではないだろうか。真理とは、人の世から出るが、人の世の真理は、キリストによって伝えられるのである。真理とはキリスト、すなわち神自身から来るものであって、人には達成できないものなのだ。しかし、キリストは真理を提供するだけであって、人が真理を追い求めるのに成功するかどうかを決めるために来るのではない。よって、真理を追い求めるのに成功するか失敗するかは、すべて人の追求にかかっている。これは元々キリストとは一切関係がないものであり、人の追求によって決まるものなのだ。人の終着点やその成功と失敗の責任を神に押し付け、その責任を負わせてはならない。なぜなら、それは神自身には関係がなく、被造物が尽くすべき本分に直結していることだからである。多くの人は、パウロやペテロが追い求めたこと、そして二人の終着点くらいは知っていても、二人の結末以上には何も知らず、ペテロの成功の裏にある秘訣あるいはパウロの失敗を招いた欠点については何も知らない。だから、彼らの追求の本質を見極めることが全くできないのであれば、あなたがたの追求のほとんどは失敗に終わるだろうし、あなたがたの内僅かな者が成功したとしても、ペテロの成功の比ではない。あなたの追求の道が正しいものであれば、成功への希望がもてるだろうが、あなたの真理を追求する道が間違っただけであるならば、永遠に成功することはできず、パウロと同じ結末を迎えることになる。

『言葉は肉において現れる』の「成功するかどうかはその人の歩む道にかかっている」より

10. 要約すると、神への信仰においてペテロの道を歩むとは、真理を追い求める道を歩むことであり、その道はまた真に自分自身を知り、自らの性質を変える道でもあります。ペテロの道を歩むことでのみ、人は神によって完全にされる道を進むのです。ペテロの道を正確に言ってどのように歩むのか、またそれをどのように実践に移すかははっきり知らなければなりません。第一に、自分自身の意図や不適切な追求だけでなく、自分の家族や肉体にかかわるすべてのことさえも協へのける必要があります。心から献

身的であらねばなりません。つまり、神の御言葉に自分自身を完全に捧げ、神の御言葉を飲み食いすること、真理を探求すること、そして神の御言葉の中にある神の意図を探し求めることに集中し、すべてにおいて神の心を把握しようと努めなければなりません。それが最も根本的にして極めて重要な実践の方法です。ペテロが主イエスを見たあとに行なったのもそれであり、そのように実践することでのみ、人は最高の結果を得られます。神の御言葉への心からの献身はおもに、真理を探し求めること、神の御言葉の中にある神の心を探し求めること、神の心を把握することに集中すること、神の御言葉からさらなる真理を理解し獲得することです。神の御言葉を読むとき、ペテロは教義を理解することにも、さらには神学的な知識を得ることにさえ集中していませんでした。その代わりに真理を理解すること、神の心を把握すること、そして神の性質と愛らしさを認識することに心を砕いたのです。ペテロはまた、神の御言葉から人間の様々な堕落した状態を、また人間の堕落した本性や実際の欠点を認識しようと努め、それにより神が人間に課す要求のすべての側面を満たし、神を満足させました。ペテロは神の御言葉において数多くの正しい実践を行ないました。それは神の心にもっともかなっており、また神の働きを経験しつつ人が行なうことのできる最高の協力方法です。神から来る数百もの試練を経験するとき、ペテロは人間に対する神の裁き、暴露、および要求の言葉の一つひとつを鏡として自分自身を厳しく吟味し、これらの言葉の意味を理解しようと努めました。また主イエスが彼に言ったあらゆる言葉を真摯に考え、心にとどめようとし、極めて優れた結果を残しました。このような実践の方法を通じて、ペテロは神の御言葉から自分自身を認識するにいたり、人間の様々な堕落した状態だけでなく、人間の本质、本性、様々な欠点をも理解するようになったのです。これが本当に自己を理解するということの意味です。ペテロは神の御言葉から、自身を本当に理解しただけでなく、神の御言葉において表現されるもの、すなわち神の義なる性質、神が所有するものと神そのもの、働きに関する神の心、神の人間への要求といったことの御言葉から、神を完全に知るようになりました。ペテロは神の性質と本質を知り、神が所有するものと神そのものに加え、神の愛らしさ、そして神の人間への要求を知り理解するようになったのです。当時、神は今日ほど多くを話しませんでした、これらの側面においてペテロに成果がそれでも達成されたのです。これは希にして貴重なことです。ペテロは数百の試練を経ましたが、無駄に苦しんだわけではありません。神の御言葉と働きから自己を認識するようになっただけでなく、神を知るようにもなったのです。加えて、ペテロは特に神の御言葉の中にある人類への要求を重視しました。どの側面において人間が神を満足させ、その心意に一致すべきであるにせよ、ペテロはそれらの側面に大きな努力を払

い、完全にはっきりさせることができました。これは彼自身の入りにとって極めて有益なことでした。神が何を語ろうと、その言葉が自分のいのちになり得る限り、ペテロはそれを心に刻み、常にじっくり考え、正しく認識することができたのです。主イエスの言葉を聞いたあと、ペテロはそれを心に留めることができたが、そのことは、彼がとりわけ神の御言葉に集中し、最後は本当に成果を挙げたことを示しています。つまり、ペテロは神の御言葉を自由自在に実践すること、真理を正確に実践すること、神の心意と一致すること、完全に神の意図に従って行動すること、自分の個人的な意見や想像を捨てることができたのです。このようにして、ペテロは神の言葉の現実に入りました。

『キリストの言葉の記録』の「ペテロの道を歩むには」より

## (II) 神に祈り、神を崇拝することについての言葉

11. 祈りはある種の儀式ではありません。それは神と人との真の交わりであり、そこには深い意義があります。人の祈りから、人が直接神に仕えていることが分かります。もしあなたが祈りを儀式として捉えるなら、あなたが神にしっかり仕えることがないのは確実です。あなたの祈りが熱意や誠実さを伴わないなら、神の観点からは、あなたは人として存在していないと言えます。そうであれば、どうしてあなたが聖霊の働きを受けることができるのでしょうか。結果的に、しばらく働いただけで、あなたは疲れてしまうだけです。今からは、祈りなしでは働くことはできません。働きをもたらすのは祈りであり、奉仕をもたらすのは祈りなのです。もしあなたが指導者であり神に仕える者でありながら、祈りに専念することも、真剣に祈ることもなかったならば、あなたの仕え方はいずれはあなたを躓かせます。…

12. 神が人類を創造し、霊を与えた後、もし彼らが神を呼び求めなければ、彼らは神の霊と繋がることができず、したがって天からの「衛星テレビ放送」は地上で受信できないように神が定めた。神がもはや人々の霊の中にいなければ、他のものが入り込める空席が残され、そこにサタンが入り込む機会をつかむ。人々が心から神と繋がれば、サタンはただちにパニックに陥り、大急ぎで逃げ出す。人類の叫びによって神は彼らに必要なものを与えるが、初めから彼らの中に「住む」ことはない。神は彼らの叫び求める声によっていつも援助するだけで、人々はその内面の力から忍耐力を得るので、サタンは思うままに人の心に入って「遊ぶ」ことはしない。このように、人々が常に神の霊と結びついていれば、サタンは混乱を引き起こしに来ようとはしない。サタンが混乱を起こさなければ、人々のすべての生活は正常であり、神はまったく妨害なしに彼らの中で働く機会を得る。こうして、神が行いたいと思うことは人間を通して達成することができる。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十七章」より

13.

(一篇の御言葉)

### 祈りの実践について

あなたがたは日常生活において祈りに心を留めることが全くない。人々はいつも祈りを見過ごしてきた。従来彼らが祈る時は、いい加減にひととおりの身振りをするだけで



、誰ひとり自分の心を完全に神の前に捧げて真の祈りをする者はなかった。人々が神に祈るのは、自分に何かあった時だけである。あなたは、今までに本当の意味で神に祈ったことがあるだろうか。神の前で痛恨の涙を流したことがあるだろうか。神の前で自分自身を知ったことがあるだろうか。神と心を通して祈ったことがあるだろうか。祈りというものは漸進的に実践される。あなたが普段自宅で祈らないのであれば、教会で祈ることは全くないであろう。また普段小規模な集会で祈らないのであれば、大規模な集会で祈ることは不可能であろう。あなたが普段から神に近付き、神の言葉を熟考しないのであれば、祈る時になって、あなたには言うことが何もないであろう。そして、あなたがたとえ祈ったとしても、それは口先だけで、本当の祈りにはなっていないだろう。

真に祈るとは何を意味するであろうか。それはあなたの心の中にある言葉を神に話すことであり、神の意志を把握し、神の言葉に基づいて神と交わることを意味する。またそれは殊更に神を身近に感じ、神が自分の目の前にいて、あなたには何か神に言いたいことがあると感じることである。またそれは、自分の心の中に光が射すのを著しく感じ、神が殊更に愛しいと感じることである。あなたは著しく霊の動きを感じるだろう。するとあなたの兄弟姉妹は、あなたの話を聞いて喜びに満たされるだろう。彼らは、あなたが話す言葉が、彼らの心の内の言葉であり、彼らが言いたいと願っていた言葉だと感じるだろう。あなたが言うことが、彼らが言いたいことを代表していると感じるだろう。真に祈るとは、このことを意味する。真に祈った後、あなたは心の中に安らぎを感じ、喜びに満たされるであろう。神を愛する強さが向上し、あなたは全生涯で、神を愛する事以上に価値があり大切なことは無いと感じるであろう。そして、これら全ては、あなたの祈りが効果的であったことを証明するであろう。あなたは、このように祈ったことがあるだろうか。

また、祈りの内容についてはどうであろうか。あなたは、自分の実際の状態と聖霊によって為されるべき働きに従って段階的に祈る必要があり、また神の意志と人間に対する要求に則して神と交わるべきである。あなたが祈りの実践を開始する時は、まず最初に自分の心を神に捧げなさい。神の意志を把握しようとしてはならない。ただあなたの心の内にある言葉を神に話そうとしなさい。神の前に来て、こう言いなさい。「おお神よ、私は今日になって初めて、あなたに服従していなかったことを知りました。私は本当に墮落した、忌み嫌われるべき存在です。以前、私は時間を無駄にしていました。私は今日からあなたのために生き、意義のある人生を行動で示し、あなたの意志を満足させます。私があるあなたの前で響きわたるような力強い証をし、あなたの栄光とあなたの証

しと、私たちの内にあるあなたの勝利の証拠をサタンに示すことが出来るよう、私は、あなたの霊がいつも私の内で働き、常に私に光と悟りを与えることを望みます。」あなたがこのように祈る時、あなたの心は完全に解放されるであろう。このように祈ったことで、あなたの心は神にいつそう近付くであろう。そして頻繁にこのように祈ることで、聖霊は必然的にあなたの中で働くであろう。あなたが常にこうして神を呼び求め、神の前で決意を固めるならば、あなたの決意が神の前で受け容れられ、あなたの心と存在全てが神のものとされる日がやがて来るだろう。そして、最終的にあなたは神によって完全にされるであろう。祈りとは、あなたがたにとって極めて重要なものである。あなたが祈る時、あなたは聖霊の働きを受け、あなたの心は、それを通して神に触れられるのだ。そして、神を愛するための力があなたの内に溢れてくるのだ。あなたが自分の心で祈らず、自分の心を開いて神と交わらないならば、神はあなたの中で全く働きようが無いであろう。もし、すでに祈り、自分の胸中の言葉を全部話してしまっても、神の霊が働かず、自分の中で心が動かされたと感じ無いのであれば、それはあなたの心が真剣でなく、あなたの言葉が真実でなく、不純であることを示している。もし祈ってから心が喜びで満たされたならば、それは、あなたの祈りが神に受け容れられ、神の霊があなたの中で働いたのである。あなたは、神の前に仕える者として、祈らずにいてはならない。あなたが神との交わりを有意義で、貴いものであると本当に思うのなら、祈りを止めたりなど出来るだろうか。神と交わらずにいることが出来る者など一人もいない。祈りが無ければ、あなたは肉の中で生き、サタンの呪縛の中で生きる。真の祈りが無ければ、あなたは闇の影響の下で生きる。わたしは、兄弟姉妹が日々真に祈ることが出来ることを願っている。これは教理に固執することではなく、ひとつの達成すべき効果である。夜明けに朝の祈りを捧げ神の言葉を楽しむために、少しばかりの睡眠と快楽を犠牲にする意欲があなたにはあるか。あなたがこのように純粋な心で祈り、神の言葉を食べ飲みするならば、その時あなたは神に一層受け容れられるであろう。あなたが毎日そうして、自らの心を神に捧げて神と交わることを実践するならば、神に関するあなたの認識は必ず増し加わり、神の意志をもっとよく把握出来るようになるであろう。あなたは、次のように言うべきである。「神よ、私は自分の本分を尽くすことを望みます。私達の中であなたが栄光を受け、私達という人間の集団の中の証しを得ることが出来るようにするために私ができることは、私の全存在をあなたに奉げ尽くすことだけです。願わくは、私がおあなたを真に愛し、満足させ、あなたを私が追求する目的とすることが出来るよう、私達の中で御業を行ってください。」あなたがこの重荷を負う時、神は必ずあなたを完全にするであろう。あなたは、自分のためだけでなく、神の意志を行ない、神

を愛するために祈るべきである。これが最も真なる祈りである。あなたは神の意志を行なうために祈るであろうか。

以前あなたがたはどのように祈れば良いか分からず、祈りを軽視していた。今日、あなたがたは祈るために自分を訓練をするよう最善を尽くす必要がある。あなたが自分の内にある力を振り絞って神を愛することが出来なければ、どうしてあなたは祈ることが出来ようか。あなたはこう言うべきである。「神よ、私の心はあなたを真に愛することが出来ません。私はあなたを愛することを望んでいますが、私にはその力がありません。私はどうすれば良いでしょうか。私があるあなたの前に一切の消極的な態度を捨て去り、いかなる人や物事にも拘束されることがないように、あなたが私の霊の眼を開き、あなたの霊が私の心に触れますように。私は自分の心の全てをあなたの前に曝け出します。そうして私の全存在があるあなたの前に捧げられますように。また、あなたが私を思いのままに試すことができますように。今私は自分の将来性を考えることも、死に縛られることもありません。私は、あなたを愛する心で、いのちの道を求めることを望みます。あらゆる物事があなたの掌中にあり、また私の運命もあなたの手の中にあります。それどころか、私の一生はあなたの御手によって支配されています。今、私はあなたを愛することを追い求め、私があるあなたを愛することを、あなたがお許しになるかどうかを問わず、また、サタンがいかにして邪魔しようと、私は意を決してあなたを愛します。」あなたがそのようなことにぶつかった時は、このように祈るべきである。あなたが毎日そのようにして祈るならば、神を愛する強さは次第に向上するであろう。

人間は、どのようにして真の祈りの境地に入ることができるだろうか。

祈る時、あなたの心は神の前に静まっていなければならない、また真摯でなければならない。あなたは真に神と交わり、神に対して祈りを捧げなければならない。また、美辞麗句で神を欺こうとしてはならない。祈りは、神が今日完成することを望んでいる物事を中心としなければならない。自分に一層の啓き照らしを与えるよう神に願い、自分の実状や問題を神の前にさし出して祈りなさい。そして神の前で決意を固めなさい。祈りは手順に従うことではなく、真の心で神を求めることである。神があるあなたの心を守ってくれるように求めなさい。そうして、自分の心をいつも神の前で静めることができるように。また、神があるあなたのために準備した環境において、自分を知り、忌み嫌い、自分を捨て去ることができるように。よってあなたが神との正常な関係を持つことが出来るようになり、あなたが真に神を愛する者とされるように。

祈りの重要性とは何であろうか。

祈りは人間が神と協力する方法のひとつであり、人間が神を呼び求める手段であり、人間が神の霊に動かされる過程である。祈りのない者は霊の無い死んだ者であると言える。それは、彼らには神によって心を動かされる能力が欠けている証拠である。祈りが無ければ、人は正常な霊的生活を実現できず、まして、聖霊の働きに従うことなどできない。祈りが無ければ、彼らは神との関係を絶ち切り、神の承認を得ることが出来ない。神を信じる者として、あなたが祈れば祈るほど、神によって触れられることも多くなる。このような人々にはより強い決意があり、神から最新の啓きをもっと受けることができる。その結果このような人々だけが、最も早く聖霊によって完全にされ得るのだ。

祈りにより達成されるべき効果とは、何であろうか。

人々は祈りを実践し、祈りの重要性を理解することが出来るが、祈りにより達成されるべき効果とは、単純なことではない。祈りとはひととおりの儀礼を行うことでも、手順に従うことでも、神の言葉を暗唱することでもない。すなわち祈りとは言葉を模倣し、他人を真似ることではない。祈りにおいて、あなたは心を神に捧げなければならない。そして、神に心を触れられるよう、自分の胸中の言葉を神と分かち合わなければならない。あなたの祈りが効果的であるためには、その祈りはあなたが神の言葉を読むことに基づいていなければならない。神の言葉の中で祈ることによってのみ、あなたはもっと多くの啓き照らしを得ることが可能となる。真の祈りは、神による要求を待ち焦がれる心を持ち、それらの要求を自ら進んで果たすことにより示される。あなたは神が憎む物事全てを憎み、それを基礎として、神が説明する真理について知り、明瞭に理解するようになるであろう。決意と信仰、認識、また、祈った後に実践するための道を持つこと。それのみが真の祈りであり、このような祈りだけが効果的であり得るのである。しかし、あなたが神の言葉を享受すること、神の言葉の中で神と交わること。また、あなたの心が神を求めることができ、神の前で静まっていること。それらのことの基盤の上に、祈りは建て上げられねばならない。このような祈りは、既に神との真の交わりを持つ境地に達しているのである。

### 祈りの基礎知識

1.何でも思いついた言葉をやみくもに述べてはならない。あなたは心の内に重荷を持たなければならない。つまり、あなたは、祈る時目標を持たなければならない。

2.あなたの祈りには、神の言葉が含まれていなければならない。すなわち、あなたの祈りは神の言葉に基づいていなければならない。

3.祈る時は、昔のことを蒸し返してはならない。過ぎ去った事柄を挙げてはならない。あなたは聖霊の現在の言葉を話すよう、自分を特に訓練すべきである。そうすることで初めて、神との繋がりを持つことが出来るようになる。

4.集会での祈りでは、今日の聖霊の働きを中心に据えなければならない。

5.全ての者が他人のために祈る方法を習得しなければならない。神の言葉の中に、祈り捧げたい言葉を見出し、それを基礎として重荷を負い、頻繁に祈る必要がある。それは、神の意志に対する配慮の現れのひとつである。

個人の祈りの生活は、祈りの重要性と基礎知識を理解することを基盤としている。人間は、日常生活の中で、自分の欠点のために頻繁に祈る必要があり、また自分のいのちの性質の変化を遂げるために、神の言葉に関する認識を基礎として祈らなければならない。人間はそれぞれ独自の祈りの生活を確立すべきであり、神の言葉に基づいた認識を得るために祈り、神の業に関する認識を求めるために祈るべきである。自分の現況を神の前にさし出し、実際的になる必要があり、方法に気を取られてはならない。要は、真の認識を得ることと、神の言葉を実際に体験することである。霊的生活に入ることを追求する者は誰でも、様々な方法で祈ることが出来なければならない。それは、沈黙して祈ること、神の言葉の考察、神の業を知ることなどである。この的を絞った交わりの業は、正常な霊的生活に入ることを達成し、神の前における自分の状況をより良いものにし、自分のいのちにおいて更に大きな発展を遂げるためのものである。要するに、あなたが為すことは、それが神の言葉の食べ飲みであれ、黙って祈ることであれ、大声で宣言する時であれ、すべて神の言葉と業、そして、神があなたの中で獲得しようと願っていることを明瞭に理解するためのものである。さらに重要な事として、それは神が要求する基準に到達し、あなたのいのちを次の段階へと進めるためのものである。神が人々に要求する最低基準は、自分の心を神に開くことができることである。人が神に対して真心を捧げ、心の中にある本音を告げるならば、神はその人の内に働くことをよしとする。神は人の曲がった心ではなく、純粹で正直な心を求めている。人が神に自分の心の真実を話さないならば、神はその人の心を動かすことも、その人の中で働くことも無いであろう。したがって、祈りに関して極めて重要なことは、自分の本心から来る言葉を話し、自分の欠点や反抗的な性質を神に告げ、ありのままの自分を神に曝け出すことである。そうして初めて、神はあなたの祈りに関心を抱くであろう。そうでなければ、神はあなたから顔を隠すであろう。祈りの最低基準として、あなたは自分の心を神の前で平静に保つことが出来なければならない。また心が神から離れてはならない。おそらく

この期間、あなたは新しい、もしくはより高い観点を得ていないかも知れないが、あなたは祈りを用いて現状を維持しなければならない。後戻りすることは許されない。これこそがあなたが果たさなければならない最小限である。それすら実現出来ないならば、それはあなたの霊的生活が正しい道に入っていない証拠である。その結果、あなたは元来のビジョンを持ち続けることが出来ず、神への信仰を失い、それに次いであなたの決意は消失するであろう。あなたが霊的生活に入ることは、あなたの祈りが正しい道に入ったかどうかにより特徴付けられる。全ての人がこの現実に対して真摯に取り組み、祈りにおいて自らを意識的に訓練しなければならない。消極的に待っているのではなく、意識的に聖霊に触れられることを求めなければならない。そうして初めて、彼らは真に神を求める人となるであろう。

あなたが祈りを始める時は、現実的でなければならない。無理をし過ぎてはならない。口を開けばすぐに聖霊により触れられ、啓き照らされ、大きな恵みを授かることを願うような大それた要求をしてはならない。それは不可能なことである。神は超自然的なことは行わない。神は、自分の時に応じて人の祈りを成就する。また、時にはあなたが神の前に忠実であるか否かを見るために、あなたの信仰を試すこともある。あなたが祈る時には、信仰、根気、決意を備えている必要がある。ほとんどの人が自分で祈りの訓練を始める時、聖霊に触れられたと感じず、失望してしまう。それではいけない。あなたは粘り強さを持たなければならない。聖霊に触れられるのを感じることを、また追い求め探究することに集中しなさい。時にはあなたの行動する道が間違っていたり、あなたの動機と観念が神の前で揺るぎなく立脚できないこともある。そのために神の霊があなたを動かさない場合もある。また、神はあなたが忠実であるか否かを確かめることもある。要するに、あなたは自己訓練に一層努める必要がある。あなたが行動すべき道から逸脱していることが分かった場合は、祈り方を変えればよい。あなたが真に求め、切実に望んでいるかぎり、聖霊はあなたを必ずその現実の中へと導くだろう。時に真の心で祈るが、特に心が触れられたと感じないこともある。そうした場合、あなたは自分の信仰に依り頼み、神は、あなたが祈るのを見ていることを信頼しなければならない。あなたは、祈ることにおいて不屈の忍耐を持たねばならぬ。

あなたは正直でなければならない。また、自分の心の中の狡賢さを取り除くために祈らなければならない。あなたが必要な時にはいつでも自分を清め、神の霊に触れられるために祈りを用いるにつれて、あなたの性質は次第に変化するであろう。真の霊的生活とは祈りの生活であり、それは聖霊に触れられる生活である。聖霊に触れられる過程は

、人間の性質を変える過程である。聖霊に触れられることのない生活は霊的生活ではなく、依然として宗教儀式である。聖霊により頻繁に触れられ、啓き照らされる者だけが、霊的生活に入った人々である。人の性質は、その人が祈るにつれて継続して変化し、聖霊に触れられれば触れられるほど、その人は一層積極的かつ従順になる。また、その人の心も次第に清められ、その後その人の性質は次第に変化するであろう。これこそが真の祈りの効果である。

『言葉は肉において現れる』より

14. 跪いて祈るときにさえ、人は実態の無い領域において神に語りかけているのですが、その祈りもまた聖霊の働きを受けとることができる経路のようなものであることを、はっきりと理解しなくてはなりません。正しい状態で祈り求めるとき、聖霊も同時に働いているのです。これは神と人との、異なる二つの視点からの調和のようなものです。言い換えるならば、人が何らかの問題に対処を神が助けているのです。これは神の前に来たときの人からの協力の一種です。そしてまた、神が人を救い清めるための方法の一種でもあります。さらには、人がいのちに適切に入っていくための道であり、儀式のようなものではないのです。祈りはただ人の熱意をかりたてることではありません。もしそれだけであれば、形式通りのことを行いスローガンを叫ぶだけで十分で、何かを求めることも礼拝も敬虔さも無用になります。祈りの意義は極めて深いのです。頻繁に祈るのであれば、そして祈り方を知っているのならば、つまり従順さと理知をもって頻繁に祈るのであれば、人の内面はいつも正常です。何の重荷を感じることもなく、自分の祈りのどの部分が理知的で、どの言葉が理性を欠いているか、また、どのような話し方が真の礼拝でないかを考えることなく祈りながら決まり文句をしょっちゅう唱え、またこれらのことに真剣でないのならば、祈りが上手く行くことはなく、あなたは常に異常な内面状態を持つことになります。正常な理知が何であるか、真の従順が何であるか、真の礼拝が何であるか、祈における自分の立ち位置がどこであるべきかを深く学ぶことは決してありません。これらはみな繊細な事柄です。

『キリストの言葉の記録』より

15. あなた方の神への祈りはあまりに理知を欠いています。あなた方はいつも次のような調子で祈ります。「神よ。あなたが私にこの本分を尽くすようにされたのですから、私のすることすべてを適切なものとし、あなたの働きが妨げられず、神の家の利益が損なわれないようにして下さらなければなりません。あなたは私を守ってくださらなければならぬのです…」」。このような祈りはあまりに理知を欠いています。違います

か。… 主イエスの祈りを見てごらんなさい（イエスの祈りにここで触れるのは、イエスの立場や地位を人にとらせるためではありませんが）。ゲッセマネの園において、イエスは「もしできることでしたら…」と祈りました。つまり、「もしそうすることができたら」ということです。これは話し合いのように言われたのです。イエスは「どうかお願いします」とは言いませんでした。従順な心と状態で、イエスは、「もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさってください」（マタイによる福音書26:39）と祈りました。イエスは初めの二回このように祈り、三回目は、「御心の通りになりますように。」と祈りました。父なる神の旨を理解したイエスは、「御心の通りになりますように。」と言いました。自分自身ではまったくなにも選択せずに、イエスは完全に従うことができたのです。イエスは言いました。「もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」。これはどういう意味ですか。イエスがそのように祈ったのは、十字架にかかって血を流し、息絶える苦しみを思ったからです。これは死にかかわる問題だったのです。そして、イエスはまだ父なる神の旨を完全に把握していなかったからです。十字架の苦しみを思ってもなお、イエスがこのように祈ることができたのであれば、イエスは確かにとても従順でした。イエスの祈り方は正常でした。イエスは祈りの中で条件を提案せず、杯は取り除かれるべきだとも言いませんでした。むしろイエスの祈りの目的は、自分の理解できない状況の中で神の意図を追い求めることでした。最初に祈ったとき、イエスは父なる神の意図を完全に理解せず、こう言いました。「もしできることでしたら…しかし、みこころのままになさってください」。イエスは従順な状態で神に祈りました。二度目も、イエスは同じように祈りました。合計三度祈りましたが（もちろん、この三度の祈りはほんの三日間にわたって起こった訳ではありません）、最後の祈りでイエスは神の意図を完全に理解するに至り、その後イエスが何かを懇願することはありませんでした。初めの二度の祈りにおいて、イエスは従順に求めたのです。ところが人がそのように祈ることはまずありません。祈るとき、人は次のように言います。「神よ、お願いですから、ああして、こうしてください。わたしをあれこれにおいて導き、良い状況を整えて下さい…」。もしかすると神はあなたのために好ましい状況を整えず、あなたに苦労を経験させるかもしれません。人がいつも「神よ、わたしのために物事を整え、わたしに力をあたえてください」と言ったならば、このような祈りは理知をかなり欠いています。祈るときには理知的であるべきであり、まず従順であることを前提に祈らなければなりません。自分の祈りを制限してはなりません。祈り始めるすでにその前に、既に制限して次のように考えます。「神に



懇願し、これこれをしてもらわなければ」。このような祈りは理知をあまりに欠いています。

『キリストの言葉の記録』より

16. あなたが神の言葉を享受しているときに、あなたの霊が動かされ、神を愛さないわけにはいかないと感じる時がある。あなたの内に大きな力があり、放棄できないものは何もないと感じる。このように感じるならば、あなたは神の霊によって動かされたのであり、あなたの心は完全に神に向き、あなたは神に祈り、このように言うだろう。

「神よ。私たちは本当にあなたにより前もって定められ、選ばれました。あなたの栄光は私に誇りを与え、神の民の一人であることを光栄に感じます。私はあらゆるものを費やし、あらゆるものを捧げて、あなたの御旨を行い、私のすべての年月と一生の努力をあなたに献上します」このように祈るとき、あなたの心に神への終わりのない愛と真の服従がある。このような経験をしたことがあるだろうか。神の霊に頻繁に動かされると、人々は祈りの中で特に自発的に自らを神に捧げる。「神よ、私はあなたの栄光の日を見たいと願い、あなたのために生きたいと願います。あなたのために生きるより価値や意義のあることはなく、サタンや肉のために生きたいという望みは少しもありません。今日あなたのために私が生きられるようにしてくださることで、あなたはわたしを引き上げてくださいます」このように祈ったならば、神にあなたの心を捧げずにはいられず、神を得なければならず、生きている間に神を得ずに死ぬのは耐えられないと感じるだろう。そのように祈った後では、あなたの内に無尽蔵な力があり、あなたはその力がどこから来るのか分からない。あなたの心の中に無限の力があり、神はとても美しく、愛する価値があると強く感じる。神に動かされた時はこのようになる。このような経験をした人々はみな神に動かされたのである。神に頻繁に動かされる人々には、いのちに変化が起こる。決断を下すことができ、完全に神を得ようとする。心の中で神への愛はさらに強くなり、心は完全に神に向かい、家族、世間、複雑な人間関係や自分の未来への心残りはなく、一生の努力を神に捧げようとする。神の霊に動かされた人々はみな真理を追求する人々であり、神により完全にされる見込みのある人々である。

『言葉は肉において現れる』の「神の最新の働きを知り、神の歩みに従え」より

17. ペテロという人は、すばらしい素質の持ち主だったが、彼の境遇はパウロのそれとは異なっていた。彼の両親はわたしを迫害した。彼らはサタンにとりつかれた悪魔の側にいた。だから、二人がペテロに道を教えたとは言えない。ペテロは頭脳明晰で、生まれながらに豊かな知性を持ち、子供のころから両親に可愛がられて育った。しかし

ながら、成長してからは両親の敵になった。というのも、ペテロはいつもわたしを知ることをお願い、その結果、両親に背を向けることになったからである。それはつまり、第一に、彼は天と地と万物は全能者の手の内にあり、すべてのよいものは神に発し、サタンの手を経ることなく、神から直接来ていると信じたからである。両親の悪い手本が引き立て役を務め、ペテロはかえってわたしの愛と憐れみとを直ちにみてとることができ、そうして、わたしを求める欲求がより強く燃え上がることになった。彼はわたしの言葉を飲み食いするだけではなく、わたしの意図するところを把握しようと注意を払った。そして、常に思慮深く慎重に考えた。だから、彼はいつでも霊が敏感で、その行いのすべてにおいて、わたしの心に適うことができた。ふだんの生活では、失敗の網にかかるようなことを深く恐れ、過去に失敗した人々の教訓を元に、より大きな働きができるように自らを励ました。ペテロはまた、遠い昔から神を愛した人々すべての信仰と愛から学んだ。このようにして、ペテロは、否定的な側面においてだけでなく、より重要なことに肯定的な側面においても急速に成長し、わたしの前で最もよくわたしを知る者になった。このため、想像に難くないことだが、彼は所有するもののすべてをわたしの手に託し、もはや食べることに着ること、眠ること、どこに宿るかにおいてさえ、自分の主人であることをやめ、あらゆることにおいてわたしを満足させることを自らの基盤とし、それゆえにわたしの恵みを豊かに得たのである。わたしは何度もペテロに試練を与え、そのため、もちろん彼は死にかけたのだが、そうした何百もの試練の中にあっても、彼は一度たりともわたしへの信仰を失ったり、わたしに失望したりしなかった。わたしがもう彼を捨て去ったと告げた時でさえ、ペテロの心が弱ってしまったり、絶望してしまったりすることはなく、それまでと同じように、わたしを実際的なやり方で愛するために自分の信念を貫き続けた。わたしは彼に、たとえおまえがわたしを愛しても、おまえをほめず、最後にはサタンの手中に投げ込む、と言った。そうした試練の只中、それは肉への試練ではなく、言葉による試練であったのだが、ペテロはそれでもわたしに祈った。「おお、神よ。天と地ともろもろのものの中にあって、人間や生き物、あるいはその他のもので、全能者の手の中にないものが何かあるでしょうか。あなたが私に憐れみをお示しになりたいとき、その憐れみのために私の心は大いに喜びます。あなたが私に裁きを下されるとき、私はそれに相応しい者ではありませんが、その御業に計り知れない奥義をますます深く感じるのです。なぜなら、神は権威と知恵とに満ちておられるからです。私の肉は苦しみを受けても、霊においては慰められます。どうして神の知恵と御業とをたたえずにおられましょう。たとえ神を知った後に死ぬとしても、常に備えと心構えができています。おお、全能者よ。まことに、わたしに神のお姿を見させ

ることを真に望んでおられないということではないでしょう。まことに、私は神の裁きを受けるに欠けてふさわしくないということではないでしょう。私の中に、ご覧になりたくないものがあるということなのではないでしょうか。」このような試練の中であって、ペテロはわたしの意図を正確に把握することはできなかったが、わたしに用いられることを（たとえそれが、人類にわたしの威厳と怒りとを示すため、裁きを受けるだけだったとしても）誇りと栄光であると考え、試練にさらされても心碎けることがなかった。わたしの前で忠実であったため、また、わたしの与えた恵みのゆえに、ペテロは数千年もの間、人類のための手本、見習うべき者となった。これこそは、あなたがたが見習うべき例ではないのか。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第六章」より

18. ペテロが神により罰せられた時、ペテロは祈って言った。「神よ、私の肉は不従順で、あなたは私を罰し、裁かれます。私はあなたの刑罰と裁きの中で喜び、たとえあなたが私を求められなくとも、私はあなたの裁きの中に、あなたの聖なる義のご性質を目の当たりにします。あなたの裁きの中に他の人たちがあなたの義なるご性質を目にすることができるように、あなたが私を裁かれる時、私は満足です。私の唯一の願いは、あなたのご性質が示され、あらゆる創造物があなたの義なるご性質を見ることができるようになり、あなたの裁きをとおして私がもっと純粹にあなたを愛することができるようになり、義なる者の姿に達することができることです。あなたの裁きは良いものです。なぜなら、それがあなたの恵み深い御心だからです。自分には未だに反抗的な部分が多く、わたしはあなたの御前に出るに相応しくないことを知っています。過酷な環境や大いなる患難を通して、あなたが私を一層裁かれることを望みます。あなたが何をなさろうとも、私にとってそれは貴いものです。あなたの愛は非常に深遠なので、私は一切不平を言わずに進んで自らをあなたの憐れみに委ねます。」これは、神の働きを経験した後のペテロの認識であり、神に対するペテロの愛の証しでもある。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

### (Ⅲ) 神に頼り、神を仰ぎ見ることについての言葉

19. 全能神は万物とすべての事象の上に君臨している。我々がいかなる時も心の中で神を仰ぎ、霊に入って神と交わる限り、神は我々が求めるすべてのことを示し、神の旨が必ず我々に明らかにされる。そうすれば我々の心は喜びと平安を得、完全な明晰さによって安定するだろう。神の言葉に従って行動できることが肝心である。神の旨を把握することができること、神の言葉に頼って生きること——これのみが真の経験である。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七章」より

20. 万物の長である全能神は、玉座から王としての権力を振るう。神は宇宙と万物を支配し、全地で私たちを導いている。私たちは頻繁に神に近づき、静まって神の前に出る。私たちは一瞬の時をも決して逃してはならない。そして、いかなる時にも学ぶべき事がある。私たちの周りの環境、人々、事柄、事物のすべては神の玉座によって許可されている。心に不平不満を持ってはならない。さもないと、神はあなたに恵みを授けない。病を患うとき、それは神の愛によるもので、神の善意が必ずその背後にあるのだ。たとえあなたの体が苦しみに耐えている時でも、サタンによる思いを受け入れてはならない。病気の只中で神を賛美し、あなたの賛美の只中で神を楽しみなさい。病気に直面しても心を失ってはならない。求め続けなさい。決してあきらめてはならない。そうすれば、神はあなたの上に光を輝かせるだろう。ヨブはどれほど忠実だっただろうか。全能神は全能の医者である。病の中に留まれば、病気になる。しかし霊の中に留まれば、健やかになるのだ。あなたに最後の息があるかぎり、神はあなたを死なせはしない。

復活のキリストのいのちが私たちの内にある。神の前で私たちは本当に信仰に欠けている。神が私たちの内に真の信仰を与えて下さるように。神の言葉はまことに甘美である。神の言葉は良く効く薬だ。悪魔とサタンを恥じ入らせよ。私たちが神の言葉を把握すれば、私たちは支えられ、神の言葉は即座に私たちの心を救うだろう。それはすべてのものを一掃し、すべてに平和をもたらす。信仰とは一本の丸太橋のようなものである。卑屈になって命にしがみつく者がそれを渡るのは困難だが、自らを進んで犠牲にする者には不安なく渡ることができる。臆病と恐怖を抱いている者はサタンに騙されているのだ。サタンは私たちが信仰の橋を渡って神の中に入ることを恐れている。サタンはあらゆる手段を講じて、私たちにサタンの考えを送り込もうとする。私たちは神の光が私た

ちを照らすよう、常に祈らなければならない。そして、私たちがサタンの毒から清められるために、いつも神に拠り頼まなければならない。私たちは神に近づくために、常に霊において実践しなければならない。私たちは、神が私たちの全存在を支配するようにしなければならないのである。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第六章」より

21. それは、あなたの信仰が立派だとか、純粹だとかいうことではなく、むしろ、わたしの働きが不思議だということである。全てはわたしの憐れみに拠る。あなたには利己的とか傲慢といった墮落した性質がほんの少しもあってはならない。さもないと、あなたに対するわたしの働きは前進しない。人間が倒れてしまうか、それとも堅く立つかは、彼ら自身によるのではなく、わたしの故であることを、明確に理解しなくてはならない。今日、もしあなたがこの段階をはっきりと理解しないのなら、あなたは神の国に入るには遠く及ばないであろう。今日行われていることが、神の奇しい業であることを明確に理解しなければならない。それは人間とは無関係である。人間の行いが何になるであろうか。身勝手さ、傲慢、誇らしさを見せない時は、神の経営を邪魔し、神の計画を壊す。墮落した人間たちよ！今日、わたしにより頼まなければならない。もしそうしないのなら、今日あなたに言う。あなたは何一つ達成しないと。全ては虚しく、あなたの試みには価値がないであろう。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第三十八章」より

22. あなたは聖霊が教えるすべての言葉に耳を傾けなければならない。道端でそれらを落としてはいけない。あなたは幾度もわたしの言葉を聞いたが、それらを忘れてしまった。ああ、軽率な者たちよ。あなたは非常に多くの祝福を失った。注意深く耳を傾け、わたしの言葉に注意を払い、もっとわたしと交わり、わたしに近づきなさい。わたしはあなたが理解していないことは何であれあなたに教え、あなた方を進むべき道へ導く。今は文字や教義を説く者たちが多くいて、ほんとうにわたしの現実を持っている者たちは極僅かなので、他の人々と交わることにあまり注意を払ってはならない。彼らの交わりを聞けば、あなたは混乱し、麻痺してしまい、どのように進めば良いか分からなくなるだろう。たとえ彼らに耳を傾けていても、文字や教義についてもう少し理解するようになるだけである。あなた方は自分の歩みに注意し、自分の心を守らなければならない。そして常にわたしの前に生き、わたしと交わり、わたしに近づかなければならない。そうすれば、わたしはあなたが理解しないことをあなたに見せるだろう。あなたは

自分が言うことに気をつけ、自分の心を常に注意深く見張り、わたしが歩む道を歩まなければならない。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第二十六章」より

23. あなたは積極的にわたしに協力しなければならない。勤勉に働きなさい。決して怠けてはならない。常にわたしと交わりを持ち、より深い親密さを持ちなさい。理解しないのなら、慌てて早急に成果をあげようとしてはならない。わたしがあなたに語らないのではない。わたしの前にいる時あなたがわたしに頼るかどうか、確信を持ってわたしに頼り頼むかどうか、わたしはそれを知りたいのだ。あなたは常にわたしの近くに留まり、すべてのことをわたしの手に委ねなければならない。虚しく後戻りしてはならない。あなたが知らぬ間にしばらくの間わたしの側に留まった後、わたしの意図があなたに明らかにされる。あなたがそれを把握するなら、その時あなたはまことにわたしと顔と顔を合わせることになるだろう。そして、あなたはほんとうにわたしの顔を見出さるだろう。あなたの心の中はとても明瞭になり、安定し、あなたは何か頼り頼むものを持ち、また、力と自信も得るであろう。あなたはまた前途に道を見出し、あらゆることがあなたにとって容易になるであろう。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第九章」より

24. ためらったり、落胆したり、弱気になったりしてはならない。霊において直接もっとわたしと交わり、辛抱強く待ちなさい。そうすれば、わたしはわたしの時に応じて必ず啓示を与えよう。あなたは本当に、絶対に注意し、あなたへのわたしの努力が無駄にならないようにしなければならない。そして一時も無駄にしてはならない。あなたの心が常にわたしとの交わりの中にあるとき、あなたの心が絶えずわたしの前に生きているときは、何者も、どんな出来事も、どんな物も、夫も、息子も、娘も、あなたの心の中でのわたしとの交わりを邪魔することはできない。あなたの心が常に聖霊によって抑制され、あなたがいつもわたしと交わっているとき、わたしの旨はきっとあなたに明らかにされるだろう。あなたの状況やあなたが直面する出来事に関わらず、このようにあなたが常にわたしに近づくな、あなたが誰に、あるいは何に遭遇しようと、あなたは混乱することがなく、進むべき道が開けるだろう。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第八章」より

25. 神を仰ぐとき、神があなたに何の感情も明確な考えも与えず、ましてやはっきりした指示など与えることもないのに、何らかの理解を許すことがあります。また、今

回は何も理解しなかったということもあるでしょうが、神を仰ぐのは正しいことです。このような実践は規則に従うことではありません。むしろそれは、人の心が必要とすること、人が実践すべきことなのです。あなたが神を仰いだり神に呼びかけたりするたびに、啓きや導きが得られるということではありません。人間のいのちにおけるこのような霊的状态は正常で自然であり、神を仰ぐことは人の心における神との正常な交わりなのです。

神を仰ぎ見ることが、具体的な言葉を用いて神に何かをしてもらおうと頼んだり、神に具体的な導きや保護を求めたりすることを意味しないときがあります。むしろそれは、何らかの問題に遭遇したとき、誠実に神を呼び求められるということです。では、人が神を呼び求めるとき、神は何をしていますか。誰かの心が動いて、「ああ神様、私にはできません。どうすればいいかわからなくて、弱く消極的に感じてしまいます」と考えるとき、神はそれを知っていますか。このような考えが人の頭に浮かぶとき、その心は誠実ですか。このように人が誠実に神を呼び求めるとき、神は助けることに同意しますか。たとえ一言も話さなかったとしても、その人は誠実さを示すので、神は助けることに同意します。特に厄介な困難に出会ったものの、頼れる人がおらず、とりわけ無力に感じるとき、その人は唯一の希望を神にかけます。その人の祈りはどのようなものですか。心の状態はどうですか。誠実ですか。そのとき不純なものがありますか。あなたの心が誠実であるのは、神が助けてくださることを願って、自分のいのちを救うためにしがみついた最後の藁であるかのように神を頼るときだけです。たとえあまり話さなかったとしても、あなたの心はすでに動いています。つまり、あなたは自分の誠実な心を神に捧げ、神は耳を傾けるのです。神はあなたの困難を見ると、あなたを啓き、導き、助けます。

『キリストの言葉の記録』の「信者はまず世界の悪しき風潮を見通さなければならない」より

26. 霊的背丈の大小や自分が置かれた環境、あるいはどれほど多くの真理を理解しているか、どれだけ本分を尽くしてきたか、本分を尽くす中でどれほど多く経験してきたかにかかわらず、何をなすにしても神を仰いで神に頼ることが不可欠です。これこそがもっとも偉大な知恵なのです。もっとも偉大な知恵とわたしが言うのはなぜですか。何らかの真理を理解するようになったとしても、神に頼らなければ何の役に立ちますか。中には、少しだけ長く神を信じたあと、真理をいくつか理解するようになり、二、三の試練を受けた人がいます。そのような人は実際の経験を少しは積んだかもしれませんが、神に頼ることを知らず、いかに神を仰いで神に頼るべきかを理解していません。そ

のような人は知恵を有していますか。彼らはもっとも愚かな人であり、自分のことを賢いと思っているような人です。彼らは神を畏れず、悪を避けません。中には、「私は多くの真理を理解し、真理の現実を自分のものにしている。原則に従うやり方で物事を行えばそれでいい。私は神に忠実だし、どうやって神に近づけばよいかを知っている。真理に頼れば十分ではないか」と言う人がいます。教義の面から言えば、「真理に頼る」のは立派なことです。しかし多くの場合、あるいは多くの状況において、人は真理とは何か、真理の原則とは何かを知りません。実際の経験がある人はみなこのことを知っています。何らかの問題に遭遇したとき、その問題に関係する真理がどのように実践されるべきか、どのように適用されるべきかを知らないとすれば、あなたはこのようなときに何をすべきですか。どれほど実際の経験を積んでいようとも、あらゆる状況において真理を自分のものにすることはできません。何年にわたって神を信じてきたとしても、どれだけ多くのことを経験したとしても、どれだけ多くの刈り込みや取り扱いや鍛錬を経験したとしても、あなたは真理の源泉なのですか。中には、「私は『言葉は肉において現れる』という本の有名な言葉や文章をいくつも暗記している。神に頼る必要も、神を仰ぐ必要もない。その時が来ても、神のこれらの言葉に頼るだけで大丈夫だろう」と言う人がいます。あなたが暗記した言葉は静的なものですが、あなたが遭遇する環境やあなたの状態は動的なものです。言葉の文字どおりの意味を把握したり、多くの霊的な教義について話したりしても、真理の理解には達しませんし、ましてやあらゆる状況において神の旨を理解することにもなりません。ゆえに、ここには学ぶべきとても重要な教訓があります。それは、万事において神を仰ぐ必要があるということです。万事において神を仰げば神を信頼することができますし、神に頼る人だけが辿るべき道を持ちます。そうでなければ、物事を正しく、真理の原則と一致する形で行なえたとしても、神に頼らなければ、あなたがすることは単に人間の行ないであり、必ずしも神を満足させません。人の真理に関する理解はかくも浅薄なので、異なる状況に直面しても同じ真理を用いて規則に従い、字句や教義にあくまで固執するでしょう。真理の原則とおおむね合致する形で多くの物事が成し遂げられる可能性もありますが、そこに神の導きはなく、聖霊の働きも存在しません。そこには深刻な問題があります。つまり、人は自分の経験、自分が理解した規則、あるいは何らかの人間的な想像力に依存して多くの物事を行なうのです。最高の成果は、神を仰ぎ神に祈って神の旨を理解すること、そして神の働きと導きに頼ることから生じるものですが、人にはそうした成果を挙げるのがほとんどできません。だからこそ、最大の知恵とは万事において神を仰ぎ、神に頼ることだとわたしは言うのです。



『キリストの言葉の記録』の「信者はまず世界の悪しき風潮を見通さなければならない」より

## 脚注

- a. 原文には「行われていること」という語句が含まれていない

## (IV) 神の働きと人間の働きの違いに関する言葉

27. 神自身の働きは全人類に対する働きを含み、時代全体に対する働きも表す。すなわち、神自身の働きは聖霊の働きすべての活動と動向を表し、一方使徒の働きは神自身の働きに従うことであり、時代を導くことはないし、時代全体において聖霊が働く動向を表すこともない。彼らは人がなすべき働きをするだけで、経営の働きは全く含まれない。神自身の働きは、経営する働きの範囲内の計画である。人の働きは用いられる人々の本分だけであり、経営の働きとは何の関係もない。働きのアイデンティティや表すものが異なるため、どちらも聖霊の働きであるという事実にもかかわらず、神自身の働きと人の働きの間には明確で、実質的な違いがある。さらに、異なるアイデンティティをもつ対象に作用する聖霊の働きの程度もさまざまである。これらが聖霊の働きの原則と範囲である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

28. どうして神の言葉が啓示を受けた人間の言葉と同じでありえようか。人の姿になった神の言葉は新しい時代を開始し、人類全体を導き、奥義を明らかにし、人に新しい時代に向かう方向を示す。人が獲得する啓示は単純な実践、あるいは認識にすぎず、人類全体を新しい時代に導くことはできないし、神自身の奥義を明らかにすることもできない。神は結局神であり、人は人である。神は神の本質を持っており、人は人の本質を持っている。

『言葉は肉において現れる』の「序文」より

29. 受肉した神は、神によって用いられる人々とは本質的に異なる。受肉した神は神性の働きを行なえるが、神によって用いられる人々にはできない。それぞれの時代の始まりにおいて、神の霊は自ら語り、新しい時代を始め、人間を新しい始まりへと導く。神が語り終えたときは、それは神性における神の働きが終了したことを意味する。その後は、人々はみな神によって用いられる人々の導きに従い、いのちの経験に入る。

『言葉は肉において現れる』の「受肉した神と神に使われる人々との本質的な違い」より

30. 受肉した神の働きは新たな時代を開き、神の働きを続ける人々は、神に用いられる者たちだ。人間による働きはみな、受肉した神の職分の範囲内で、その範囲を出るものではない。もし受肉した神が働きを行うために来なければ、人間は古い時代を終わらせることができず、新たな時代を開くこともできない。人間による働きは、単に人間

に可能な範囲の任務であり、神の働きの代わりにはならない。受肉した神だけが、すべき働きを完了するべく来ることができるのであり、神においては誰一人代わってその働きをすることができない。もちろん、わたしの言っているのは、受肉しての働きのことである。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人類には受肉した神による救いの方が必要である」より

31. 神が用いる人が行う働きは、キリストや聖霊の働きに協力するためのものである。この人は、人間の間であって神により立てられ、神により選ばれた者全員を率いるために存在する。また、その人は、人間が協力して行う働きをするよう神に立てられている。人間が協力して行う働きができるこうした人にとっては、神が人間に対して求めるものの更に多くと、人間の間であって聖霊が行わなければならない働きが、その人を通じて実現されるのである。別の言葉で言うと、次のようになる。神がその人を用いる目的は、神に従う者全員が神の心をより良く理解し、神の要求をより多く達成できるようにするためである。人間は直接神の言葉や神の心を理解できないため、神はそうした働きを行うために用いる人を立てたのである。神が用いるそういう人は、神が人々を導くための手段とも、神と人々との間であって意思を伝える「通訳者」とも言えるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神が人間を用いるということ」より

32. 神が用いる人は神により立てられ、神の働きのために神により整えられ、神自身の働きに協力する。そうした人の仕事には決して誰も代わりとなることができないであろう。神性の働きに不可欠なのは人間の協力である。一方、他の働き手や使徒が行う働きは、その時々における教会に関する取り決めの多くの側面を伝えて実行するに過ぎないか、教会の生活を維持するために単にいのちを施すという働きのみをする。そうした働き手や使徒は神に任命されたのではなく、聖霊が用いる者と呼ばれることはなおさらない。彼らは教会の中から選ばれ、一定期間訓練を受け養成された後、適した者が残され、適していない者は元いた場所に帰される。こうした人々は教会の中から選ばれるため、中にはリーダーになるとその本性を現す人もおり、様々な悪事を働いて排除される人すらもいる。しかし、神が用いる人は神により整えられた人であり、ある種の器量を備え、人間性を持ち合わせているのである。そういう人は聖霊により前もって整えられ、完全にされており、聖霊によって全てが導かれ、特にその働きについては聖霊により指導され、命じられる－そしてその結果、神に選ばれし者らを導く道からは逸れるこ

とがない。なぜなら、神は確実に自らの働きに責任を持ち、神は常に自らの働きを行うからである。

『言葉は肉において現れる』の「神が人間を用いるということ」より

33. 神自身が行なう働きはすべて、神の経営（救いの）計画の中で神が行なおうとする働きであり、偉大な経営（救い）に関係している。人（聖霊に用いられる人）によってなされる働きは、その人の個人的体験を提供することである。それは以前の人たちが歩いた道を越えて新しい体験の道を見つけ、兄弟姉妹を聖霊の指導の下で導くことである。この人たちが提供するの、彼ら個人の体験や霊的な人たちの霊的書物である。彼らは聖霊によって用いられているが、その働きは六千年計画の偉大な経営（救い）の働きとは関係していない。彼らはただ自分たちが果たしている役目が終わるか、自分たちの生涯が終わるまでの間、聖霊の流れの中で人々を導くために、様々な時代に聖霊によって立てられている人たちにすぎない。彼らが行なう働きはただ神のために適切な道を用意するか、あるいは地上における神自身による経営（救い）のある側面を続けていくことだけである。そのような人たちは、神の経営（救い）の中で偉大な働きをすることはできず、新しい道を開拓することもできず、ましてや前の時代からの神のすべての働きを終わらせることなどできない。よって、彼らがする働きはただ被造物が己の役目を果たすことを表しているだけで、神自身が行なう職分を表すことはできない。これは、彼らがする働きは神自身の行なうものとは同じではないからである。新しい時代を招き入れる働きは神に代わって人がすることはできない。神以外の誰によってもなされることはない。人がする働きのすべては被造物の一人としての本分を果たすことだけで、聖霊によって動かされ、啓かれたときに果たされる。そのような人たちが与える指導は、人が日常生活でどのように実践し、神の心に一致してどのように行動すべきかということを示すことである。人の働きは神の経営（救い）に関わることも霊の働きを表すこともない。…聖霊によって用いられる人たちはまた新しい働きをするかもしれないし、また昔なされた働きを排除するかもしれないが、彼らの働きは新しい時代の神の性質や心を表現することはできない。彼らはただ前代の働きを取り除くためだけに働き、神の性質を直接表すために新しい働きをするわけではない。このように、彼らがどれだけ多くの時代遅れの実践を廃止し、新しい実践を導入しようとも、彼らは依然として人や被造物を代表しているのである。しかし、神自身が働くとき、神は公然と古い時代の実践の撤廃を宣言したり、新しい時代の始まりを直接宣言することはない。神はその働きにおいて直接的で率直である。神は意図する働きを遂行する上で率直である。すなわ

ち、神は自身がもたらした働きを直接表現し、本来意図したように自身の働きを遂行し、神であることと神の性質を表現する。人の見方では、神の性質、また神の働きはかつての時代とは異なっている。しかし、神の見地からは、これは神の働きの継続でありさらなる展開に過ぎない。神自身が働くとき、神はその言葉を表現し、直接新しい働きをもたらす。それとは対照的に、人が働くときは、熟考と研究によってなされるか、あるいは他人の働きに基づいて築かれた知識の発展と実践の体系化である。すなわち、人によってなされる働きの本質は設立された秩序に従い「新しい靴で古い道を歩く」ことである。これは聖霊に用いられる人が歩く道でさえ神自身によって開かれたものに基づいているという意味である。所詮人は人であり、神は神である。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（１）」より

34. 預言者たちや、聖霊に用いられる者たちの言葉と働きはみな、人間としての本分を尽くしていたのであり、被造物として自分の役割を果たし、人間がやるべきことを為していたのであった。しかしながら、受肉の神の言葉と働きとは、神の職分を実行することであった。受肉の神の外形は被造物と同じだが、その働きは、その役割を果たすことではなく、神の職分を遂行することであった。「本分」とは、被造物に関して用いられ、一方「職分」とは受肉の神の「肉」に関して用いられる。両者には本質的な違いがあり、この二つを置き換えることはできない。人間の働きはその本分を尽くすことだけであるが、神の働きとは、経営する（救い）ことと、神の職分を行うことである。だから、多くの使徒が聖霊に用いられ、多くの預言者たちが聖霊に満たされたが、その働きと言葉は単に被造物としての本分を尽くすことであった。彼らの預言は受肉した神の語ったいのちの道よりも偉大であったかもしれないが、また、彼らの人間性は受肉した神よりも非凡なものであったが、彼らは本分を尽くしていたのであって、職分を果たしたのではない。人間の本分とは、人間の役割のことをいい、人間が達成できるものである。しかしながら、受肉した神に行われる職分は、神の経営に関連しており、これは人間には達成できない。語ることであれ、働きを為すことであれ、ふしぎを現すことであれ、受肉の神はその経営の中で偉大な働きを行っているのであり、このような働きは、人間が受肉の神に代わってすることはできない。人間の働きは、神の経営の働きのある段階において被造物としてただその本分を尽くすことである。神の経営なしに、つまり、受肉の神の職分が失われるならば、被造物の本分もまたそうなるであろう。自分の職分を遂行する受肉の神の働きは人間を経営する（救い）ことであり、他方、本分を尽くしている人間は、創造主の要求に応えるために自分の義務を実行しているのであって、

職分を果たしているとはいわれることは決してない。神の元来の本質、つまり、神の霊にとって、神の働きとはその経営のことであるが、創られたものと同じ外形をまとう受肉の神にとって、その働きとは、職分を果たすことである。どのような働きを受肉の神が行なおうと、それは自分の職分を果たすことであり、人間にできるのは、神の経営の範囲内で神に導かれて最善を尽くすだけである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉した神の職分と人間の本分の違い」より

35. わたしの言うことは人が経験することではなく、人に見えるものではなく、触れることができるものでもなく、わたしそのものである。一部の人はわたしが話すことは、わたしが経験したものであることだけは認めるが、聖霊の直接的表現であることを認識しない。もちろん、わたしの言うことはわたしが経験したことである。6000年にわたり、経営の働きをしてきたのはわたしである。わたしは人類創造の始めから今に至るまですべてを経験してきた。わたしがそのことについて語れないわけがあるのか。人の本性のこととなると、わたしはそれをはっきり見たし、長いこと観察してきた。それについてははっきり語れないわけがあるのか。人の本質をはっきり見てきたので、わたしには人を罰したり、裁いたりする資格がある。人はすべてわたしからもたらされたのに、サタンによって墮落させられたからである。もちろん、わたしはこれまでわたしが行ってきた働きを評価する資格もある。この働きはわたしの肉によってなされることではないが、聖霊の直接的表現であり、これはわたしが持っているもの、わたしそのものである。したがって、わたしはそれを表し、わたしのなすべき働きを行う資格がある。人が言うことは彼らが経験してきたことであり、見てきたもの、彼らの精神が到達できるもの、彼らの判断力で感じるすることができるものである。それなら彼らは語るすることができる。人間の姿をした神の肉が語る言葉は聖霊の直接的表現であり、聖霊によってなされた働きを表している。肉はそれを経験しても、見てもいないが、それでも神の存在を表しているのは、肉の本質は聖霊であり、神は聖霊の働きを示しているからである。肉では到達することができなくても、それは聖霊によってすでになされた働きである。受肉のあと、肉の表現を通して神は人々に神の存在を知らしめ、人々が神の性質、ならびに神がした働きを見ることを許す。人の働きによって、人々は何において成長するべきか、何を理解するべきかについてもっと明確にすることができる。人の働きには、真理を理解し、経験する方向に人々を導くことが含まれる。人の働きは人々を支えることである。神の働きは人類のために新しい道を開拓し、新しい時代を開拓し、人々に、普通の

人間には知られていないことを明らかにし、神の性質をわからせることである。神の働きは人類すべてを導くことである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

36. 人の働きはその人の経験と人間性を表す。人が提供するものと、人が行う働きがその人を表す。人の見識、人の推論、人の論理と豊かな想像力はすべてその人の働きの中に含まれている。特に、人の経験はいっそうその人の働きを表すことができ、人が経験してきたことはその働きの構成要素になるだろう。人の働きはその人の経験を表すことができる。人々が受動的状態で経験していると、彼らの交わりのほとんどは消極的要素で構成される。彼らの経験がしばらくのあいだ積極的で、彼らがとりわけ積極的側の道を持っていれば、彼らが分かち合うものは非常な励みになり、人々は彼らから積極的な供給を得られるだろう。働き手がしばらくのあいだ消極的になれば、彼の分かち合うものはいつも消極的要素を含んでいることになるだろう。この種の交わりは重苦しいもので、他の人たちは彼と交わった後は、無意識のうちに気が滅入ってしまう。信奉者の状態は導き手の状態によって変化する。働き手が本来どのような人物かはその人の表現するものでわかり、聖霊の働きは人の状態によってしばしば変化する。聖霊は人の経験に従って働き、人を強要せず、その人の通常の経験過程に応じて要求を出す。すなわち、人の分かち合うものは神の言葉とは違う。人の分かち合うものはその人の個人的見識や経験を伝え、神の働きを基にして見るものや経験するものを表す。彼らの責任は、神の働きや話の後、自分たちが何を実行すべきか、または何において成長すべきかを見つけ、次にそれを従う者たちに伝えることである。したがって、人の働きはその人の成長と実践を表す。もちろん、そのような働きには人の教訓と経験、あるいは人間的考えの一部が混入している。聖霊がどのように働こうとも、聖霊が人に働き掛けようと、肉となった神で働こうと、自分たちが何であることを表わすのはいつも働き手である。働くのは聖霊であるが、働きは人が本質的に何であるかに基づいている。なぜなら聖霊は基礎なしには働かないからである。言い換えれば、働きは無からなされることはなく、いつも実際の状況や現実の条件に応じている。このようにしてのみ、人の性質は変換させることができ、人の古い見解や思考も変えられる。人が表すものは自分が見るもの、経験するもの、想像できるものである。教義、あるいは見解であっても、これらはすべて人が考えれば到達可能である。人の働きは大きさに関係なく、人の経験、見るもの、想像、あるいは思いつけるものの範囲を越えることはできない。神が表すものは神自身であり、これは人の力が及ばないもの、つまり、人の考えの及ばないものである。神は

すべての人類を導くという働きを表し、これは人の経験の詳細とは関係なく、むしろ神自身の経営に関係している。人は自分の経験を表し、神は自身の存在を表す——この存在は神に固有の性質であり、人の力の及ばないものである。人の経験は、神が表した神の存在に基づいて獲得した見識や認識である。このような見識や認識は人の存在と呼ばれる。それらは人の本来備わっている性質、および人の実際の力量を基礎に表される。そこで、それらも人の存在と呼ばれる。人は自分が経験するものや見るものを分かち合うことができる。経験したことも、見たこともないもの、あるいは心が到達できないもの、すなわち、自分の心の中に持っていないものを分かち合うことはできない。人が表すものが自分の経験でなければ、それは想像、あるいは教義である。一言でいうと、その言葉には現実性がない。社会の状況と接触がなかったら、あなたは社会の複雑な関係を明確に話すことはできないだろう。家族がないのに、他の人々が家族問題について話していたら、あなたは彼らが話していたことの大半を理解できないだろう。そこで、人が話すことや行う働きは、その人の内面存在を表す。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

37. 人の働きには範囲と限界がある。一人では一定の段階の働きしかできず、時代全体の働きをすることはできない——さもないと、その人は人々を規則に導くだろう。人の働きは特定の時間または段階にしか適用できない。人の経験には範囲があるからである。人の働きを神の働きと比較することはできない。人の実践方法と真理の認識はすべて特定の範囲に適用される。人が歩む道は完全に聖霊の意志であると言うことはできない。人は聖霊によって啓発されるだけで、聖霊で完全に満たされることはできないからである。人が経験できることはすべて通常の人間の範囲内のもので、通常の人間の心の中の考えの範囲を越えることはできない。実践的表現をする人々はすべてこの範囲内で経験する。彼らが真理を経験するとき、それはいつも聖霊の啓発を受けた通常の人間生活の経験であり、通常の人間生活から逸脱した方法による経験ではない。彼らは人間生活に基づいて聖霊に啓発された真理を経験する。そのうえ、この真理は人によって異なり、その深さは人の状態に関連している。彼らが歩む道は真理を追及する人の通常の人間生活であり、その道は聖霊によって啓発された通常の人間が歩む道であると言えるだけである。彼らが歩む道は聖霊が取る道であると言うことはできない。通常の人間の経験では、追求する人々が異なるので、聖霊の働きも異なっている。さらに、彼らが経験する環境や経験の範囲は同じではなく、彼らの精神や考えが混ざり合うため、その経験の混ざり合う程度もさまざまになる。各人は個々の異なる条件に従って真理を理解



する。真理の本当の意味を完全に理解することはなく、ほんの一部にすぎない。人が真理を経験する範囲はいつも個人の異なる条件に基づいているため、同じにはならない。こうして、同じ真理を表した認識でも人が異なれば同じにはならない。つまり、人の経験にはいつも限界があり、聖霊の意志を完全に表すことはできず、たとえ人の表すものが神の心にかなり一致していても、たとえ人の経験が聖霊の実行する人を完全にする働きに非常に近くても、人の働きを神の働きとして把握することはできない。人は神の僕にすぎず、神に任せられた働きしかできない。人は聖霊の啓発を受けた認識や自分の個人的経験から得た真理しか表すことはできない。人は無資格で、聖霊の流出口となる条件を持たない。人の働きは神の働きであると言う資格は与えられていない。人には人の働く原則があり、すべての人は異なる経験を持ち、さまざまな条件を所有している。人の働きには聖霊の啓発を受けたその人の経験のすべてが含まれる。これらの経験は人の存在を表すだけで神の存在、あるいは聖霊の意志は表さない。したがって、人が歩む道は聖霊が歩む道ということとはできない。なぜなら人の働きは神の働きを表すことはできず、人の働きと人の経験は聖霊の完全な意志ではないからである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

38. 人の働きは規則に陥りがちであり、その方法はすぐに限られた範囲に限定されてしまい、人々を自由な道に導くことはできない。ほとんどの信奉者は限られた範囲内に住んでいて、彼らの経験する道もその範囲内に限られている。人の経験はいつも限られている。働く方法もいくつかに限られており、聖霊の働きや神自身の働きと比較することはできない——これは、人の経験が結局は限られているからである。神がどのように働きを行おうと、それには規則がない。どのようになされようと、神の働きは一方向に限られはしない。神の働きに規則はまったくなく、働きはすべて自由に解放される。どんなに多くの時間をかけて神に従おうとも、人々は神が働く方法のいかなる規範も総括することはできない。神の働きは原則に基づいているが、いつも新しい方法で行われ、いつも新しい進展があり、人の手の届く範囲のものではない。一期間の間に、神はいくつかの異なる種類の働き、異なる導き方を示すことがあり、人々がいつも新たな成長や新たな変化を持てるようにする。神の働きの規範を見つけ出すことができないのは、神がいつも新しい方法で働いているからである。このようにしてのみ、神の信奉者は規則に陥らないで済む。神自身の働きはいつも人々の見解を避け、彼らの見解に反論する。本当の心で神に従い、神を追い求める人々だけが自分の性質を変えることができ、いかなる規則にも支配されず、いかなる宗教的見解にも拘束されず、自由に生きることが

できる。人の働きが人々に要求することはその人自身の経験および自分自身が達成できることに基づいている。これらの要求の基準は一定の範囲内に限られており、実践方法も非常に限られている。したがって信奉者は無意識のうちにこの限られた範囲内で生きることになる。時が経つにつれてそれらは規則と儀式になる。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

39. 人が働きを行なうために用いられるようになるまでには、長期にわたる教育と完全にされることが必要で、それには特別に高位の人間性が必要とされている。人間は普通の人間としての理知を維持できなければならないだけでなく、他人との関係における行動をつかさどる原則や規則を多く理解し、その上、人の知恵や道徳についてさらに多くを学ばなければならない。これが人が備えていなければならないものである。しかし、受肉した神に関してはそうではない。というのは、神の働きは人を表すのでもないから。むしろ、それは神自身の直接的表現であり、神が行なわなければならない働きの直接的遂行である。（当然、神の働きは行なわれるべき時に行なわれ、気軽に無作為に行なわれるのではない。むしろ、神の働きはその職分を全うするべき時に始まる）。神は人の生活や人の働きに関与しない。つまり、神の人間性はこれらのどれも備えていない（しかし、これは神の働きに影響しない）。神はその職分を全うするべき時に、するだけである。神の地位が何であっても、神はすべき働きをただ進めるだけである。人が神について何を知っていようと、あるいは神についての意見が何であろうと、神の働きは影響されない。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（3）」より

40. おそらく、働きにおける人の経験は特に高い、あるいは想像力や論理的思考は特に高く、人間性は特に良い。これらのことは人々の称賛は得られても、畏敬の念や畏れを喚起することはできない。働く能力を持ち、特に深い経験を持ち、真理を実践できる人々は誰もが称賛するが、彼らは畏敬の念を呼び起こすことは決してできず、称賛と羨望がせいぜいである。しかし神の働きを経験した人々は神を称賛するのではなく、その代わり、神の働きは人間の力の及ばないもので、人には計り知れず、新鮮で素晴らしいと感じる。人々が神の働きを経験する時、神に対して最初に持つ認識は、神は計り知れず、賢明で素晴らしいということであり、彼らは無意識のうちに神を敬い、神の働きの神秘性を感じ、人の考えの及ばないものだと思う。人々はひとえに神の要求に応じられること、神の希望を満たせることを望み、神を超えようとは思わない。なぜなら、神の働きは人の考えや想像のおよばないものであり、人が神に代わって行うことはできな

いからである。人自身が自分の力不足を知らないのに、神は新しい道を開拓して、人をより新しく、より美しい世界へ至らせるようにしたので、人類は新たに進歩し、新しいスタートを切った。神に対して人が感じるのは称賛ではない、というより、称賛だけではない。彼らのもっとも深い経験は畏敬の念と愛であり、彼らの抱く感情は、神は実に素晴らしいということである。神は人ができない働きをし、人が言えないことを言う。神の働きを経験した人々はいつも言葉では言い表せない感情を経験する。より深い経験を持つ人々は特に神を愛する。彼らはいつも神の素晴らしさを感じ、神の働きは非常に賢く、非常にみごとだと感じ、そう感じることによって彼らの中には限りない力が生み出される。それは恐れ、あるいは時折生じる愛と尊敬ではなく、人に対する神の慈悲と寛容を深く感じる気持ちである。しかし、神の刑罰と裁きを経験した人々は、神を威厳で、犯すことができないと感じる。神の働きを数多く経験してきた人々でさえ、神を深く理解することはできない。本当に神をあがめているすべての人は、神の働きは人々の見解とは一致せず、いつも反していることを知っている。神は人々が神を完全に称賛したり、神に服従しているように見せたりすることを必要とせず、むしろ本当に畏敬の念を持ち、本当に服従することを必要とする。神の大半の働きにおいて、本当の経験を持つ人はだれでも神に対する畏敬の念を感じるが、それは称賛よりも高い。人々は神の刑罰と裁きの働きによって神の性質を見た。したがって心の中で神を畏れる。神があがめられ、従われるのは、神の存在と性質が被造物のものとは同じでなく、上回っているからである。神は創造された存在ではなく、神のみが畏敬の念と服従を受けるに値する。人にはその資格がない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

41. 恵みの時代、イエスもまた多くを語り、多くの働きを為した。イエスはイザヤとはどう違っていたか。イエスはダニエルとどう違っていたのか。イエスは預言者だったのか？何故彼はキリストだと言われるのか。彼らの間の違いとは何であろうか。彼らは皆言葉を語ったが、彼らの言葉は、人間にはだいたい同じもののように思われた。彼らは皆語り、働きを行った。旧約聖書の預言者は預言し、同様にイエスもそれができた。なぜそうなのか。ここでの違いは、働きの性質による。このことを識別するには、肉の性質を考慮することはできない。また、語られた言葉の深さ浅さを考察すべきではない。イエスの働きと、その働きが人間の内にもたらした成果をいつも第一に考えなければいけない。当時預言者たちによって告げられた預言は、人間にいのちを与えなかった。また、イザヤやダニエルのような人々の受け取った言葉は単なる預言であって、いの

ちの道ではなかった。ヤーウェの直接の啓示がなければ、誰一人その仕事ができなかっただろう。それはただの人間には不可能である。イエスもまた、多くを語ったが、その言葉はいのちの道で、そこから人間は実践の道を見出すことができた。つまり、第一に、イエスは人間にいのちを与えることができた。何故ならイエスはいのちだからである。第二に、イエスは人間の逸脱を正常に戻すことができた。第三に、イエスの働きはヤーウェの働きをひき継ぎ、その時代を進めるものだった。第四に、イエスは人間の内なる必要を把握し、何が人間に欠けているのかを理解できた。第五に、イエスは古い時代を終わらせて、新しい時代を招き入れることができた。だから、彼は神、そしてキリストと呼ばれたのである。イエスはイザヤだけではなく、他のすべての預言者とも異なっていた。比較のため、イザヤを例に預言者たちの働きをみてみよう。第一に、イザヤは人間にいのちを与えることができなかった。第二に、彼には新たな時代の先駆けとなることができなかった。イザヤはヤーウェに導かれて働いたのであって、新たな時代の到来を告げるためではなかった。第三に、彼の語ったことは、彼自身にも理解できないことだった。彼は神の霊から直接啓示を受けていたのだが、他の人々はそれを聞いても理解できなかった。これらの点だけでも、イザヤの言葉は預言にすぎなかったこと、ヤーウェの代わりに行った働きの一面でしかなかったことが十分に証明される。しかしながら、イザヤは完全にヤーウェの代理となることはできなかった。彼はヤーウェのしもべで、ヤーウェの働きの道具であった。イザヤはただ律法の時代にヤーウェの働きの範囲内で働いていただけである。イザヤは律法の時代を超えて働かなかった。それに対して、イエスの働きは異なっていた。イエスはヤーウェの働きの範囲を超えていた。イエスは受肉した神として働き、全人類を贖うために十字架につけられた。つまり、イエスはヤーウェの行った働きの範囲外で新たな働きを行った。それが新たな時代を招き入れたということである。もう一つの点は、イエスは人間には達成することが不可能なことについて語ることができた。イエスの働きは神の経営（救い）のうちにあり、全人類に関わるものだった。イエスはほんの数人に働きかけたのではないし、その働きは限られた数の人間を導くものでもなかった。神がどのように受肉して人間になったか、聖霊が当時どのように啓示を与え、聖霊が働きを為すためにどのように人間の上に降臨したのかということに関しては、こうしたことは人間には見ることも触れることもできないことである。これらの真理が、イエスが受肉した神であるという証拠になることは、まったくありえない。だから、人間に触知できる神の言葉と働きにおいてのみ、区別できるのである。これだけが現実的である。何故なら、霊のことはあなたの目には見えず、神自身にだけははっきり知られているものだからであり、受肉した神でさえ、すべてを知って

いるわけではないからである。<sup>[a]</sup>その働きによって確かめられるだけである。その働きを見ると、まず、イエスは新たな時代を開くことができたことがわかる。第二に、イエスは人間にいのちを与え、行くべき道を示すことができた。イエスが神そのものであることを証拠立てるにはこれで充分である。少なくとも、イエスの行う働きは神の霊を完全に表すことができ、そうした働きから、神の霊がイエスの内にいることがわかる。受肉した神の行った働きは、おもに新たな時代の到来を告げ、新たな働きを先導し、新たな状況を展開することであったが、これらのいくつかの条件だけでも、イエスが神そのものであることを実証するのに充分である。つまり、これがイエスがイザヤやダニエル、他の偉大な預言者たちとの違いである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉した神の職分と人間の本分の違い」より

42. こう尋ねる人たちもいるだろう。「受肉した神によってなされる働きと、昔の預言者たちや使徒たちの働きとでは、何が違うのか。ダビデも主と呼ばれていたし、イエスもそう呼ばれていた。二人が行った働きは違ったが、呼ばれ方は同じだった。あなたはなぜ二人の身分が同じではなかったと言うのだろうか。ヨハネが目撃したのは一つのビジョンであり、それは聖霊から出たものでもあり、ヨハネは聖霊が伝えようとする言葉を話すことができた。それでは、なぜヨハネの身分はイエスの身分と違うのか」イエスによって話された言葉は、完全に神を現すことができ、神の働きを完全に現すことができた。ヨハネが見たものは一つのビジョンであって、神の働きを完全に現すことはできなかった。ヨハネ、ペテロ、そしてパウロは、イエスと同様多くの言葉を語ったが、彼らがイエスと同じ身分を持っていなかったのはなぜか。それは主に、彼らの働きが違ったからである。イエスは神の霊を現し、彼には神の霊が直接働いていたのである。イエスは、新しい時代の働き、それまで誰も行ったことのない働きをしたのである。イエスは新たな道を切り開き、ヤーウェを現し、神自身を現したのである。一方、ペテロやパウロやダビデは、彼らが何と呼ばれていたかに関係なく、被造物としての身分を現しただけ、また、イエスかヤーウェによって遣わされたただけであった。だから、いかに多くの働きをしようとも、どれほど大きな奇跡を行おうとも、彼らはやはり神の被造物にすぎず、神の霊を現すことはできなかったのである。彼らは神の名によって、もしくは神に遣わされて働いたのである。更に、彼らはイエスあるいはヤーウェによって始められた時代の中で働いたのであり、彼らが行った働きはその時代と切り離されるものではなかった。結局のところ、彼らは神の被造物にすぎなかった。

『言葉は肉において現れる』の「呼び名と身分について」より

43. イエスの働きとヨハネの働きの違いは正確に言って何だったのだろうか。ヨハネはイエスのために道を整える人であったことが唯一の理由だろうか。あるいは、神にあらかじめ定められたからだろうか。ヨハネはまた「悔い改めよ、天国は近づいた」と言って、天の国の福音も宣べ伝えたが、彼の働きはさらに展開されず、導入部分だけであった。それとは対照的に、イエスは新しい時代を切り開き古い時代を終わらせたが、イエスはまた旧約聖書の律法を成就した。イエスの働きはヨハネの働きより偉大で、さらにイエスは全人類を贖うために来たのであり、その段階の働きを達成した。ヨハネはただ道を整えただけであった。彼の働きは偉大で、言葉もたくさん語り、彼に従った弟子たちも数多かったが、ヨハネの働きは人に新しい始まりをもたらす以上のことは何もなかった。人は彼からいのちも、道も、より深い真理も受けておらず、彼を通して神の旨の理解を得ることもなかった。ヨハネはイエスの働きのために新境地を切り開き、選ばれた人を準備した偉大な預言者（エリヤ）であった。ヨハネは恵みの時代の先駆者であった。そのような事柄はただ彼らの普通の人間の外観を見ていても分からない。特にヨハネは、極めて偉大で、その上聖霊に約束され、聖霊によって支えられた働きをしていたので余計にそうである。だから彼らのそれぞれの身分はその働きを通してでなければ区別することはできない。というのは人の外観からその人の本質を知ることはできないし、人は聖霊の真の証を確認することはできないからである。ヨハネによってなされた働きとイエスの働きとは同じではなく、性質が違っている。それが、神であるかどうかを決定するものである。イエスの働きとは、始めて、続けて、終わらせて、達成することであった。これらの段階をそれぞれイエスは実行したが、一方ヨハネの働きは、始まりの働き以上ではなかった。最初にイエスは福音を伝え、悔い改めの道を説き、それから人々にバプテスマを授け、病を癒し、悪霊を追い出した。最後にイエスは人類を罪から贖い、その時代全体のための働きを完成した。イエスは人々に説教し、あらゆる場所で天の国の福音を宣べ伝えた。この点ではイエスとヨハネは同じであったが、イエスは新しい時代の到来を告げ、人間に恵みの時代をもたらしたという違いがあった。人が恵みの時代に実践すべきことと従うべき道に関する言葉がイエスの口から発せられた。そして、最終的にイエスは贖いの働きを終えた。ヨハネはそのような働きを決して実行することはできなかった。だから、神自身の働きを行なったのはイエスで、イエスが神自身であり、神を直接表すのもイエスである。

44. あなた方は神の働きと人の働きの区別の仕方を知らなければならない。あなたは人の働きから何を見ることができるか。人の働きの中には人の経験による要素がたくさんある。人が表すものはその人そのものである。神自身の働きも神そのものを表すが、神そのものは人そのものとは異なる。人そのものは人の経験や人生を表し（人生やその人が持つ人生哲学において人が経験したり、遭遇したりするもの）、異なる環境に住む人々は異なる存在を表す。あなたに社会的経験があるか否か、あなたが家族の中で実際どのように生活し、経験しているかはあなたが表すものの中に見ることができるが、あなたは肉となった神の働きから神に社会的経験があるか否か見ることはできない。神は人の本質を十分承知しており、あらゆる種類の人々に関連するあらゆる種類の行為を明らかにすることができる。神は人間の墮落した性質や反抗的行動を明らかにするのはなおさら得意である。神は世俗的な人々の中には住まわれないが、人間の本性や世俗的な人々の墮落のすべてを承知している。これこそが神である。神は世間を取り扱わないが、世間を取り扱う規則は知っている。なぜなら人間の本性を十分に理解しているからである。神は人の目では見ることのできず、人の耳では聞くことのできない聖霊の働きについて、現在のものも、過去のものも知っている。これには、人生哲学ではない知恵や、人々が推測するのは難しいと思う奇跡も含まれている。これが、人々に明らかにされており、また隠されてもいる神そのものである。神が表すものは、特別な人のことではなく、聖霊に本来備わっている特質と存在である。神は世界中を巡回しないが世界のすべてを知っている。神は知識も洞察力もない「類人猿」と接触するが、知識よりも高く、偉人を超えた言葉を述べる。神は、人間性を持たず、人間の慣習や生活を理解しない鈍感で頭の鈍い人々の集団の中で暮らすが、人類に通常の人間性のままに生きるよう要求し、同時に人類の卑劣で粗野な人間性を明らかにする。このすべてが、どの生身の人間そのものよりも高い神そのものである。神は、なさなければならない仕事をし、墮落した人間の本質を完全に明らかにするために、複雑で、扱いにくく、浅ましい社会生活を経験する必要はない。浅ましい社会生活は、神の肉を啓発しない。神の働きと言葉は人の不従順を明らかにするだけで、人に世界と取り組むための経験や教訓を与えはしない。神が人にいのちを与えるとき、社会や人の家族を調べる必要はない。人を暴き、裁くことは神の肉の経験の表現ではない。それは人の不従順を長いこと知り、人類の墮落を忌み嫌ったあと、人の不義を明らかにすることである。神が行う働きはすべて、神の性質を人に明らかにし、神であることを表すことである。この働きができるのは神のみであり、生身の人々が達成できることではない。

## 脚注

- a. 原文には「イエスが神であるかどうかは、」という言葉は含まれていない。



## (V) 聖霊の働きを認識し、悪霊の働きを識別することについて の言葉

45. このように、聖霊の働きは3つの部分、すなわち、神自身の働き、用いられる人々の働き、聖霊の流れの中ですべての人に作用する働きの3つに分けることができる。その中で、神自身の働きは時代全体を導くことであり、用いられる人々の働きは、神自身の働きの後に送りだされたり、命令を受けたりすることによって、神の信奉者全員を導くことであり、これらの人々は神の働きに協力する人々である。流れの中で人々に作用する聖霊の働きは自身の働きをすべて維持すること、すなわち、経営全体を維持し、証を維持し、それと同時に完成させることのできる人々を完成することである。これら3つの働きは聖霊の完全な業であるが、神自身の働きがなければ、経営の働き全体は停滞してしまうだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

46. 聖霊の流れの中での働きは、それが神自身の働きであろうと、用いられている人々の働きであろうと、聖霊の働きである。神自身の本質は聖霊であり、聖霊あるいは7倍に強化された聖霊と呼ぶことができる。とにかく、それらは神の霊であり、時代によって神の霊の呼び方が異なっているだけのことなのだ。しかしそれでも本質は一つである。したがって、神自身の働きは聖霊の働きであり、肉となった神の働きは働いている聖霊以外の何物でもない。用いられている人々の働きも聖霊の働きである。神の働きは聖霊の完全な表現というだけのことで、違いはまったくないのだが、一方用いられている人々の働きは多くの人間らしい事情と混ぜ合わされており、聖霊の直接的表現ではなく、ましてや完全な表現ではない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

47. 聖霊は多くの異なった方法で、多くの原則に従って働くにもかかわらず、どのように働きが行われようと、どのような人々に作用しようと、本質はつねに異なり、異なる人々に行う働きすべてには原則があり、すべては働きの対象の本質を表すことができる。これは聖霊の働きがはっきり限定されており、非常に計画的だからである。人間の姿をした神の肉でなされる働きは人々を対象とする働きと同じではなく、その働きは人々の力量の違いによっても変化する。人間の姿をした肉でなされる働きは人々に対しては行われず、人間の姿をした肉では、人々に対する働きと同じ働きは行わない。一言で言えば、聖霊がどのように働こうとも、対象が異なれば働きは決して同じではなく、

働きに用いる原則はさまざまな人々の状態や本性に応じて異なってくる。聖霊は、人々に本来備わっている本質に基づいてさまざまな人々に働きかけ、本来備わっている本質を越えた要求はしないし、実際の力量を越えた働きかけもしない。そこで、聖霊の人に対する働きによって人々はその働きの対象の本質を知ることができる。人に本来備わっている本質は変化しないし、人の実際の力量は限られている。聖霊が人々を用いようと、人々に対して働こうと、人々が働きから恩恵を受けられるように、その働きはつねに人々の力量の限界に応じている。用いられる人々に聖霊が働きかけるとき、彼らの賜物も実際の力量も活動させられ、使わずに残されておかれることはない。彼らの実際の力量は働きに役立たせるためにすべて引き出される。聖霊は働きの成果を達成するために、人々の利用できる部分は使って働くと言うことができる。それに反して、人間の姿をした肉でなされる働きは聖霊の働きを直接表すことであり、人間の心や考えと混ぜ合わされることはなく、人の賜物や経験、あるいは生来の条件では到達不可能である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

48. 聖霊の流れの中にいる者たちは皆、聖霊の臨在と鍛錬を備えており、聖霊の流れの中にいない者たちはサタンの支配下にあり、そうした者には聖霊の働きがまったくない。聖霊の流れの中にいる人々は、神の新たな働きを受け入れ、神の新たな働きの中で協力する者である。現在において、その流れの中にいる者たちが協力できず、神に要求された通りに真理を実践できないとすれば、そうした者は鍛錬を受け、最悪の場合は聖霊に見捨てられるであろう。聖霊の新たな働きを受け入れる者は聖霊の流れの中で生き、聖霊の配慮と守りを授かるであろう。真理を実践することを望む者は、聖霊により啓かれ、真理を実践することを望まない者は、聖霊から鍛錬を受け、罰を受けることさえあるだろう。そうした者がどのような人間であれ、そうした者が聖霊の流れの中にいる限り、新たな働きを神の名において受け入れる者全てについて、神は責任を負うであろう。神の名を讃美し、神の言葉を実践することを望む者は、神の祝福を得るであろう。神に反抗し、神の言葉を実践しない者は、神の罰を受けるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

49. 聖霊の働きとは積極的な導きと前向きな啓示の一種だ。それは人々が受け身であることを許さない。それは慰めをもたらし、信仰と決心を与え、人々が神によって完全な者となれるようにする。聖霊が働く時、人々は盛んに成長することができる。受け身でもなく、強制されることもなく、積極的に成長する。聖霊が働く時、人々は喜んで、自ら進んで従おうとし、謙虚になることを喜び、内側では痛みや弱さがあっても、協

力しようと決意し、喜んで苦しみ、従うことができる。そして人間の意志によって汚されず、人の考えによって汚されず、間違いなく人間的な欲望や動機に汚されないのである。人々が聖霊の働きを経験する時、彼らの内面は特に清い。聖霊の働きを所有する人々は神の愛、兄弟姉妹への愛を体現し、神を喜ばせることを喜びとし、神の嫌うことを嫌う。聖霊の働きによって触れられた人々は正常な人間性を持ち、人間らしさをもって常に真理を追い求めている。聖霊が人々の内側で働く時、彼らの状態はより良くなっていき、その人間性はより正常になっていく。そして彼らの協力は愚かなものの時もあるかもしれないが、彼らの動機は正しいものであり、彼らの成長は肯定的で、邪魔をしようとしたりはせず、心には悪意がないのだ。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

50. 何かがあなたに起こる時、それは聖霊から来ておりあなたはそれに従うべきなのか、あるいは拒否すべきなのか。人々の実際の行いは人間の意志によるものを多く生じさせるが、人々が常に信じているものは聖霊から来ている。悪霊から来るものもあるが、人々はそれが聖霊から生まれたものだと考える。時に聖霊は人々を内側から導くが、人々はそういった導きはサタンから来るものだと恐れ、実は聖霊の啓示であるにも関わらず従おうとしなかったりする。よって、識別力なしには、こういった経験があなたに起こっている時にそれを経験することはできない。そして識別力なしにいのちを得ることはできない。聖霊はどのようにして働くのか。悪霊はどのように働くのか。人の意志から来るものは何か。聖霊の導きと啓示とから生まれるものはなにか。もし人の内で行われる聖霊の働きの規則を理解するなら、あなたの知識は増し、日々の生活の中で識別することができるようになり、実際の経験の中で神を知るようになり、サタンを理解し識別できるようになり、神に従い、神を求めることにおいて混乱することもなくなるだろう。そして思考がはっきりとした、聖霊の働きに従う者となるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

51. 神はある時は人を試したり、人を鍛えるための環境を作り出したり、またある時は人を導き欠点を改めるための言葉を発したりしながら、人々に実に多くの働きをする。人々が自分たちに欠けている多くのものを知らず知らずのうちに発見するようにと神が用意した環境へ、聖霊が人々を導くこともある。自分が言うことやすること、他の人に対する接し方、物事の対処の仕方を通して、知らず知らずのうちに聖霊がそれまで知らなかったことを気づかせ、物事や人々をもっとよく理解できるようにさせ、それまで気づかなかったことを多く見るようにさせる。

52. 神は、あなたに、時々特定の種の感覚を与える――あなたは内なる喜びを失ったり、神の臨在を失ったり、自分が闇の中にいると覚えることがある。これは、一種の精錬である。何をしてもうまく行かなかったり、壁にぶち当たることがある。これは神の鍛錬である。あなたは、何かしらの行動をしても、そのことについて覚える事が無く、他人もそれを知らないだろうが、神はそれを知っている。神はあなたを立ち去らせず、訓練する。聖霊の業は極めてきめ細やかである。聖霊は、人々の一つひとつの言動、一つひとつの行動と動き、人々のあらゆる思いと考えを注意深く観察する。それは、人々がこれらのことについて内面的認識を得ることが出来るようになるためである。あなたが一度何かをしてうまく行かず、再びやってもまだうまく行かないと、あなたは少しずつ聖霊の業を理解するようになる。多くの訓練の時を通して、あなたは神の意志と一致するには何をすべきか、また、神の意志と一致しないものは何であるかを知る。最終的に、あなたは、自分の内面から来る聖霊の導きに対し、正確に反応するようになるであろう。あなたは時には反抗的になり、内面から神により叱責されることもあるであろう。この全ては、神の鍛錬から来るのである。神を大切にせず、神の業を軽視した場合、神はあなたのことを一切気にかけないであろう。あなたが神の言葉を真剣に捉えれば捉えるほど、神はあなたに一層啓示を与えるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

53. あなたを啓いて何かを理解させようとするとき、聖霊は非常に素早く働きを行なうこともあれば、あなたにしばらく経験させてから、徐々に理解させるようにすることもあります。それは、先に何かを経験させることなく、聖霊があなたに直接何かを明らかにしたり、あなたを啓いたり、少しばかりの光を与えたりすることでもなければ、単に無味乾燥な言葉や教義に関する理解を与えることでもありません。聖霊はどのような原則に従って働きますか。あなたが教訓を学んで徐々に成長することができるよう、聖霊はあなたのために環境や人、出来事、物事を配することで働きます。聖霊はあなたがこの経験と成長の過程を通して徐々に真理を理解できるようにします。ゆえに、聖霊は極めて自然な原則によって働きを行ないます。つまり、人間の自然な成長パターンに完全に従って、何ら強制することなく働くのです。

『キリストの言葉の記録』の「真心を神に捧げると真理を得ることができる」より

54. 聖霊は、各人において歩むべき道を持ち、各人に完全にされる機会を与える。あなたは自らの否定性をおして自らの墮落を知らしめられ、その後否定性を払拭する

ことにより実践の道を見いだすが、それがあなたの完全化である。さらに、あなたの中の肯定的な物事の幾つかによる継続的な導きと照らしによって、あなたは積極的に自らの役割を果たし、識見を増やして分別を身に付ける。状態が良好な時、あなたは神の言葉を読むことや神に祈ることを殊更に望み、また聞いた説教を自らの状態と関連づけることができる。そうした時、神はあなたの中で啓き照らし、あなたに肯定的側面の物事を幾つか理解させる。これが肯定的側面におけるあなたの完全化である。否定的な状態において、あなたが弱く否定的で、自分には神がいないと感じる時であっても、神はあなたを照らし、あなたが実践の道を見いだすのを助ける。こんな状態からの脱却が、否定的側面における完全化の達成である。

『言葉は肉において現れる』の「実践を重視する者だけが完全にされることができる」より

55. 人々の協調を通して、人々が積極的に祈り、探求して神に近づくことで成果が達成し、聖霊による啓発を受け、光に照らされる。聖霊が一方的に行動する、あるいは人が一方的に行動するということはない。両者の行動が必要不可欠である。人々が聖霊と協力すればするほど、そして、神の要求する基準に達することを求めれば求めるほど、聖霊の働きは大きくなる。聖霊の働きに人々の真の協力が伴ってのみ、神の言葉の本当の経験と実質的な認識が生まれる。このような経験を通して徐々に、完全にされた人が最終的に生み出される。神は超自然的なことは行わない。人は、神が全能で、全てのことが神によってなされるという観念を持っている。その結果、人々は消極的に待ち、神の言葉を読んだり、祈ったりせず、聖霊に触れられることを待っているだけである。しかし正しい理解を持っている人々は次のように信じている。「神の行いは私が協力する範囲にのみに及び、私の中における神の働きの効果は、私がどう神と協力するかにかかっている。神が語られるときには、私は神の言葉を求め、神の言葉に向かって突き進むために、あらゆる努力をすべきだ。これが私の達成すべきことだ。」

『言葉は肉において現れる』の「現実をどのように知るか」より

56. 人間に対する聖霊の業には、ひとつだけ条件がある。人間が渴望して求め、神の行いに気持ち半分でもなく疑念を抱いても居らず、自分の本分を常に守ることが出来るのであれば、人間は聖霊の業を得ることが出来る。神の業の各段階において、人間に要求されているのは、途方も無く大きい確信と、神の前において求めることであり、神がいかに愛すべき存在であるか、聖霊が人間に対してどのように業を行うかを人間が理解できるのは、経験によるほか無い。あなたが経験せず、経験により手探りで進まず、求めなかったとしたら、あなたが得るものは無いであろう。あなたは、自分の経験によ

り模索する必要があり、神の業を理解し、神の奇しさ、計り知れなさを知ることが出来るようになるには、経験によるほか無い。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは神への忠誠を保たなければならない」より

57. 聖霊の働きとは正常で現実的なものであり、聖霊は、人の通常の生活における規則にしがたって働き、正常な人々の求めに応じて啓き、導く。聖霊が人々の内に働く時、聖霊は人々を通常の人々が持つ必要に応じて導き啓示し、人々の必要に基づいて施す。そして聖霊は人々が欠いているもの、欠乏しているものに基づき前向きに導き、啓示する。聖霊が働く時、この働きは人の通常の生活での規則に調和して行われるものであり、人々が聖霊の働きを見ることができるのは現実の生活の中でのみである。もし、日常生活の中で、人々が前向きな状態であり、通常の霊的生活を送っているのなら、彼らは聖霊の働きを持っている。そういった状態の中では、神の言葉を飲食するなら信仰を得、祈るなら霊的に励まされ、彼らに何か起きたなら彼らは受け身にはならず、それが起きている最中に神が彼らに学ばせようと課している教訓が何なのか見ることができ、受け身でも脆弱な状態でもなく、現実の困難の中にあっても、神のすべての采配に自ら従おうとするのだ。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

58. あなたが神を理解することを追求しないのであれば、聖霊はあなたの中では働かないであろう。神は、神の言葉を求め貴ぶ者たちの中で業を行う。あなたが神の言葉を貴べば貴ぶほど、神の霊はもっとあなたの中で働くだろう。人が神の言葉を貴べば貴ぶほど、その人が神により完全にされる確率も高くなる。神は神を真に愛する者たちを完全にする。神は、自らの心が神の前に安らいでいる者たちを完全にする。あなたが神の全ての言葉を大切にし、神の啓示を貴び、神の臨在を貴び、神の心配と守りを大切にし、神の言葉がいかにしてあなたの現実といのちの糧となるかを貴ぶならば、あなたは神の心に最も適っている。あなたが神の業を貴び、神があなたのために為した全ての業を貴ぶならば、神はあなたを祝福し、あなたが所有する全てのものを倍增させるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神は神の心に適う者を完全にする」より

59. 聖霊が人々を啓発するために働く時、聖霊は通常人々に神の働き、および彼らの真の霊的歩みと本当の状態についての知識を与える。また彼らに決意も与え、今日の人に対する神の熱心な意図や要求を人々に理解させ、あらゆる道を開く決意を与える。

流血や命の犠牲を経験する時でさえ、人々は神のために行動しなければならず、迫害や逆境に遭遇する時でさえ、神を愛さなければならず、悔いることなく、神のために証しするために立ち上がらなければならない。このような決意は聖霊による激励、聖霊の働きである――しかしあなたは刻一刻そのような激励を受けるわけではないことを覚えておきなさい。ときどき集会であなたは非常に感動し、霊によって動かされるのを感じることができ、あなたは大いに賛美し踊る。あなたは、他の人々が分かち合っていることを自分でも信じられないほど理解しているのを感じる。心の中が一新されるのを感じ、あなたの心は澄み切って、虚しさは全くない――これはすべて聖霊の働きに属している。もしあなたが指導的立場の人で、あなたが教会に働きに出かける時、聖霊があなたに並外れた啓示と光を与え、あなたを仕事において信じられないほど熱心で、責任感を持ち、真剣にさせるならば、これはすべて聖霊の働きに属している。

『言葉は肉において現れる』の「実践（１）」より

60. 聖霊の働きによって成し遂げられる効果とは何か。あなたは愚かかもしれないし、あなたの内には識別力がないかもしれないが、聖霊はあなたの内に信仰が生まれ、あなたがいつもどれほど神を愛しても愛しきれないと感じ、先にどのような大きな困難があろうとも自ら協力したいと思えるように働くだけなのだ。問題が起こり、それらが神から来ているのかサタンから来ているのかははっきりとはわからないのだが、あなたは待つことができ、受け身にも怠惰にもならない。これは聖霊の通常の働きである。聖霊が人々の内に働く際にも彼らは現実の困難に向き合い、時には涙し、乗り越えられない問題に直面することもあるが、これらはすべて聖霊の普通の働きの一段階だ。たとえ人々がそういったことを乗り越えることができなくても、またその時には弱く不平を言ったとしても、のちになって神を絶対的な信仰をもって愛することができるようになるのだ。受け身であったとしても、それが人々の普通の経験から遠ざけることはなく、他の人々がなんと言おうと、あるいはどう攻撃しようとも、彼らは神を愛することができるのだ。祈りの中では常に、かつて神に借りがあったと感じ、そして神を満足させよう、再びそういったことに遭遇したなら肉を放棄しようと思心するのである。この力は聖霊の働きが彼らの内にあることを示すものであるし、これこそが聖霊の働きの正常な状態なのである。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

61. 神は同じ業を繰り返しはしない。現実的でない働きは行なわない。神は人間に過大な要求をしない。また、神は人間の理知の外にある業は行なわない。神が為す業は

みな、人間の正常の理知の範囲内で行われ、本来の人間の理知の外には及ばない。また、神の働きは人間の正常な必要に沿ったものである。もしそれが聖霊による働きであるなら、人間はずっと正常になり、その人間性はさらに正常になる。人間はサタンのような堕落した自分の性質、人間の本質についての認識を増し、真理への渴望は更に大きくなる。これはつまり、人間のいのちがどんどん成長し、人間の堕落した性質においては、より一層の変化が可能となる。これら全てが神が人間のいのちになるということの意味である。

『言葉は肉において現れる』の「神とその働きを知る者だけが神の心にかなう」より

62. サタンから来る働きとは何か。サタンから来る働きにおいては、人々のビジョンは曖昧で抽象的であり、正常な人間性を持たず、彼らの行動の背後にある動機は間違っている。そして神を愛したいと願いはしても、常に心に自責の念があり、そういった自責の念や思いが内で互いに干渉し、彼らのいのちの成長を制約し、神の前に正常な状態を持てないようにする。つまり、人々の内にサタンの働きが始まるやいなや、彼らの心は神の前に平安を失い、自分でもどうしたら良いかわからず、兄弟姉妹の集まりが目に入れば逃げたくなり、他の人が祈る時に目を閉じることができない。悪霊の働きは人と神との正常な関係を壊し、人々がそれまで持っていたビジョンや、以前のいのちの入りへの道を混乱させる。心の中で彼らは神に近くことが決してできず、いつも彼らに分裂を引き起こし、足かせとなるような事が起こり、心は平安を見つけられず、神への愛の力はなくなり、霊が沈んでいく。こういったことがサタンの働きの顕現なのだ。サタンの働きは次のような事柄に現れる。堅く立っていることができずに証しとなることができず、それがあなたを神の前に落ち度のある者、神への忠実さを全く持たない者とさせる。サタンからの干渉により、あなたは自らの内に神への愛や忠実さを失う。あなたは神との正常な関係を剥ぎ取られ、真理や自らを改善することを求めず、後戻りし、受け身となり、自分を甘やかし、罪が広がるのをなすがままにし、罪を憎まなくなる。さらに、サタンからの干渉はあなたをふしだらにし、神があなたの中で触れたものは消えてしまう。そしてあなたは、神について不平を言って神に対抗し、そして神を疑うようになり、そこにはさらにあなたが神を離れる危険性もある。このすべてはサタンの働きである。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

63. 確かに、現在では人間を騙すために超自然的なものを通して働く邪悪な霊がいる。これは、現在は聖霊が行わない働きを通して人間を騙そうとする邪悪な霊による模



倣にすぎない。多くの邪悪な霊が奇跡や病の癒しなどの働きを模倣する。これは邪悪や霊の働き以外の何物でもない。現在は聖霊はもはやこのような働きをしないからである。以降、聖霊の働きを模倣するのは、すべて邪悪な霊である。当時イスラエルで行なわれた働きはすべて、超自然的なものであった。だが今では、聖霊はそのようなやり方では働かない。これ以上のそのような働きはサタンによる業と妨害であり、悪霊から来る。しかし、超自然的なものの全てが悪霊の行為であるとは言えない。それは、神の働きのどの時代かによる。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（１）」より

64. この時代に、しるしや不思議を起こし、悪霊を追い払い、病人を癒やし、多くの奇跡を起こせる人が現れて、またその人が再来したイエスであると主張したなら、それは悪霊が偽ってイエスのまねをしているのである。これを覚えておきなさい。神は同じ働きを繰り返さない。イエスの段階の働きはすでに完了し、神は二度と再びその段階の働きをしない。…もし終わりの日に神がしるしや奇跡を示し、まだ悪霊を追い払ったり病人を癒やしたりしていたら——それならば、神はイエスの働きと同じ働きを繰り返していることになり、イエスの働きは無意味で無価値ということになる。だから、神は、時代ごとにひとつの段階の働きをするのだ。ひとたびその段階の働きが完了すれば、すぐさまそれを悪霊がまねをし、サタンが神のすぐ後ろからついていく。神は方法を変更する。一度神がその段階の働きを完了すると、悪霊がまねをする。それを理解しておきなさい。

『言葉は肉において現れる』の「今日の神の働きを知ること」より

65. 悪霊に取りつかれ「私が神だ！」としつこく叫んでいる人たちがいる。しかし、最後まで彼らは立ち続けていることはできない。というのは、彼らは自分が何を表しているかに関して誤っているからである。彼らはサタンを表し、聖霊は彼らに何の注意も払わない。自分をどれほど高く褒めたてても、どれほど力強く叫んでも、あなたは依然として被造物であり、サタンに属する者である。…あなたは新しい道を作ること、霊を表すこともできない。霊の働きや、霊が話す言葉を表現することもできない。神自身の働きや霊の働きを遂行することもできない。神の知恵、不思議、計り難さを表現することも、神が人を罰する性質の全てを表現することもできない。だから、あなたが神であると主張しようとするのは意味がない。あなたは名前があるだけで、実体が全く伴っていない。

『言葉は肉において現れる』の「受肉の奥義（１）」より

66. 聖霊は自分の中で常に業を行っている、という者も居る。それは不可能である。仮に、そうした者が、聖霊は常に自分と共にあると言うのであれば、それは現実的であろう。仮に、そうした者が、自分の思考や理知は常に正常である、と言うのであれば、それもまた現実的であり、それは、聖霊がそうした者と共にあることを示すであろう。だが、聖霊は常に自分の中で業を行っている、どの瞬間も、自分は神により啓かれ、聖霊に触れられ、常に新たな認識を得ている、とあなたが言う場合、それは正常ではない。それは極めて超自然的である。そうした人々が悪霊であることに何の疑いも無い。神の霊が受肉した時でさえ、時には休息し、また食事をする必要があったのだから、あなたにそのようなことが必要なことは言うまでもない。悪霊に取り憑かれた者は、肉の弱さが無いように思われる。そうした者はあらゆる物事に背いて捨て去ることが可能であり、冷淡であり、苦悩に耐えることが可能であり、肉体を超越したかのように、全く疲労を感じない。これは極めて超自然的ではないだろうか。悪霊の業は超自然的であり、人間には出来ない業である。区別がつけられない人々は、そうした者を見ると羨み、そうした者の神への信仰は極めて強く、優れており、そうした者は弱いことが決してないと言う。実のところ、これは悪霊の業の表れである。なぜなら、正常な人間には必然的に人間の弱みがあり、それが聖霊の存在が有る者の正常な状態だからである。

『言葉は肉において現れる』の「実践（４）」より

67. 神についていくらかの認識をもつとき、人間は神のために喜んで苦しんだり生きたりします。しかし、サタンはそれでも人間の弱さを支配しており、人間を苦しませることができます。悪霊は今なお人々の中で働き、彼らに干渉したり、精神的な混乱状態に追い込んだり、気を狂わせたり、精神的にかき乱したり、あらゆる物事において干渉に苦しんだりするようにします。人間の内側には、サタンによって支配され操作され得る、精神または魂にかかわる物事があります。病気になったり、問題を抱えたり、自殺を考えたり、そして時々、世界は荒れ果てているとか、人生には何の意味もないとか感じたりするのは、これが理由です。つまり、こうした苦しみはいまだサタンの支配下にあり、それが人間の致命的な弱さの一つなのです。サタンは今でも自分が墮落させ、踏みにじったこれらの物事を利用することができます。それらは、サタンが人間に対して利用できる武器なのです。… 悪霊は機会を逃しません。悪霊はあなたの内側から語りかけたり、あなたの耳元にささやいたり、あるいはあなたの考えや精神をかき乱したり、聖霊がもたらす感動を抑えてあなたがそれを感じられないようにすることができます。その後、悪霊はあなたへの干渉を始め、考えや頭を混乱させて不安かつ錯乱した状

態に陥れます。これが悪霊の働きであり、それを識別できない限り、あなたは大きな危険に陥ります

『キリストの言葉の記録』の「神がこの世の苦痛を経験したことの意味」より

68. 聖霊の働きは積極的な進歩だが、一方でサタンの働きとは後退と受動であり、神に対する不従順、神への反抗、神に対する信仰の喪失、そして賛美歌を歌うことや、立ち上がって踊ることさえしたくなくなってしまうことだ。聖霊の啓示から来るものはあなたに対して強制的なものではなく、特別自然なものだ。もしあなたがそれに従うなら、真理を得るし、もし従わないのならのちに非難があるだろう。もし聖霊による啓示なのであれば、あなたのすることは何も干渉や拘束をされることはなく、あなたは自由にされ、行動をもって実践する道ができ、何に対しても制約されることなく、神の心にそって行動できるようになるだろう。サタンの働きはあなたへの妨害となる多くのことをもたらし、あなたが祈りたくないようにさせ、神の言葉を飲食するのが面倒になるようにし、教会の生活に気が向かなくなり、あなたを霊的な生活から引き離す。聖霊の働きはあなたの日常生活に干渉はせず、正常な霊的生活の成長において邪魔することはない。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

69. 日常生活であなたに何かが起きる際、あなたはそれが聖霊の働きから来るものなのか、サタンの働きから来るものなのか、どのように識別すべきだろうか。人々の状態が正常な時には、彼らの霊的な生活と肉における生活は正常であり、理性も正常で秩序がある。一般的には、彼らがこの時点で経験し、自らの内で知るようになることは聖霊に触れられたことによるものだと言える（神の言葉を飲食する際に洞察力を持ち、浅い認識を所有すること、あるいは何かが起きた時に忠実であること、何かが起きた時に神を愛する力があること---これらは皆、聖霊によるものである）。人の内における聖霊の働きは特に正常だ。人はそれを感じられないし、人自身から発したもののように思われるが、実際にはそれは聖霊の働きなのだ。日常生活では、聖霊はすべての人の内側に大きなことも小さなことも両方行われ、単にこの働きの度合いが様々であるというだけのことだ。ある人々は力量があり、物事を素早く理解し、聖霊による啓示は彼らの中で特に大きい。一方である人々は力量が乏しく、物事を理解するのにより時間がかかるが、聖霊は彼らの内側にも触れられ、彼らもまた神への忠実を遂げることができるようになる。聖霊は神を求める人々すべての中に働かれる。日常生活において人々が神に反対せず、あるいは反抗せず、神の経営に調和しないことは行わず、神の働きに干渉しな

いのであれば、神の霊は一人ひとりのうちに大なり小なり働かれ、彼らに触れ、啓示を与え、信仰を与え、力を与えて、彼らが怠惰になって肉の楽しみをむさぼるのではなく、積極的に成長するようにさせ、自ら進んで真理を実践しようとし、神の言葉を慕い求めるようにと動かすのだ。このすべては聖霊から来る働きである。

人々の状態が正常でない時、彼らは聖霊に見捨てられ、内側には不平があり、動機は間違っており、怠惰で、肉の欲にふけり、彼らの心は真理に敵対する。これらはすべてサタンから来るものだ。人々の状態が正常でない時、心の中が暗く、正常な理性を失っている時、聖霊に見捨てられ、自分の内に神を感じられない時、サタンが彼らの内側に働いている。人々の心のうちに常に力があり、常に神を愛するなら、物事が起きた場合にそれは通常聖霊によるものであり、彼らが出会う人々は神の采配によるものである。つまり、あなたの状態が正常である時、聖霊の偉大な働きの中にいる時であれば、サタンがあなたを揺るがすことは不可能だ。この礎に立っているならば、全てのものは聖霊によってもたらされると言える。そして、誤った考えを持ってはいても、あなたがたはそれを放棄することができ、従うことはない。これは全て聖霊の働きから来る。サタンが干渉するのはどのような状況だろうか。あなたの状態が正常でなく、神に触れられておらず、神があなたに働いておらず、心のうちは乾燥して不毛となっており、神に祈っても何もつかめず、神の言葉を飲食しても導き示されることも光に照らされることもない時—そういった時には、サタンがあなたの内に働きかけるのは簡単だ。言い換えれば、聖霊に見捨てられ、あなたが神を感じられない時には、サタンの誘惑による多くの事が起こる。サタンは聖霊が働くのと同時に働き、聖霊が人の内側に触れると同時に、人に干渉する。しかしそういった際には、聖霊の働きが先導的な立場にあり、正常な状態の人々は勝利することができる。これは聖霊の働きのサタンの働きに対する勝利である。聖霊が働く時、サタンの働きはほとんどなされない。聖霊が働く時、人々の中にはまだ不従順な態度があり、もともと彼らが持っていたものがまだそこにある。しかし聖霊の働きにより、人々は簡単に自分たちの本質的な事柄や神に対する反抗的な態度について—そういったものを自分たちの中から取り除いていけるのは徐々に起こる働きの中でのみだが一知ることができるのである。聖霊の働きは特に普通なものであり、聖霊が人々の中に働く時、人々はなお問題を抱え、泣き、苦しみ、まだ弱くて、はっきりとはわからないことがたくさんあるのだが、それでもそういった状態にある時、人々は信仰が後退しないよう自らを制止させ、神を愛することができるのだ。そして泣いたり、心が苦しくなったりするが、彼らはなお神を賛美することができる。聖霊の働きは特に普通

のことであり、超自然的なことは全くない。ほとんどの人々は、聖霊が働かれ始めるとすぐにその状態が変化し、彼らの本質的な物は取り除かれると信じている。そういった考え方は誤りである。聖霊が人の内に働く時、人の受動的な性質はまだそこにあって、その人の霊的背丈は変わっていないのだが、聖霊によって光を与えられ、啓かれているので、より前向きになり、内側の状態は正常で、その人は急速に変化する。現実の体験においては、人々は主に聖霊かサタンかどちらかの働きを経験する。そしてもし彼らがこの二つの状態について理解できず、その違いを識別できないなら、現実の経験は不可能であり、性質が変化することが不可能なことは言うまでもない。よって、神の働きを体験するための鍵とは、こういった物事を見抜けることであり、そうなることで、実際に経験することが容易になる。

『言葉は肉において現れる』の「聖霊の働きとサタンの働き」より

## (VI) 自分のサタンの的な性質と本性をいかに認識するかについて の言葉

70. 自分の言葉や行動により自分のほんとうの顔を表すことは、誰にでも出来る。このほんとうの顔がもちろんその者の本性である。もしあなたが、たいへん回りくどい話し方をする者であるならば、あなたには、ひねくれた本性がある。あなたの本性がとても狡猾であるならば、あなたの手口は極めて巧妙で狡猾く、人々をあなたによってとても欺されやすくする。あなたの本性が極めて陰険であれば、あなたの言葉は聞いていて心地良いかもしれないが、あなたの行動はその陰険なやり方を覆い隠すことは出来ない。あなたの本性がとても怠惰である場合、あなたの言う事は、すべて自分のいい加減な性格や怠惰さに対する非難や責任を逃れることばかりを意図とし、あなたの行動は非常に遅く、おざなりで、真実を隠すことにたいへん優れている。あなたの本性が非常に同情的である場合、あなたの言葉は合理的であり、行動もまた真理にたいへん良く則しているであろう。あなたの本性が非常に忠実である場合、あなたの言葉は誠実であり、あなたの行動のしかたは堅実であり、あなたの主人が不信感を抱くようなことはないにちがいない。あなたの本性が極めて好色あるいは金銭に貪欲であれば、あなたの心はいつもそれらのことで一杯であり、無意識のうちに常軌を逸した不道德的な行動をとり、そのために人々はそれをどうしても忘れることができず、さらには、ひどい嫌悪感を抱くであろう。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り(1)」より

71. 自分を認識しようとするなら、自分の本当の状態を理解しなければなりません。自分の状態を理解する上で最も重要なのは、自分の思いや考えを把握することです。あらゆる時代において、人の考えは一つの大きな事柄によって支配されてきました。自分の考えを把握できれば、その背後にあるものを把握できます。人は自分の思いや考えを支配できませんが、これらの思考がどこから生じるのか、それらの背後にある動機は何か、これらの思考がどのように生み出されるのか、それらを支配するものは何か、それらの本性は何かは知る必要があります。性質が変化すると、思いや考え、心が追求める欲望、追求している物事への見方など、あなたの中で変化を遂げた部分から生み出される事柄は違ったものになります。あなたの中で変化を遂げていない部分から生じる思考、あなたがはっきり理解していない事柄、真理の経験に置き換えていない物事は、不潔で汚れていて醜いものです。数年にわたって神の働きを経験してきた今日の人には

、これらのことに関する認識と感覚がいくらかあります。短期間しか神の働きを経験していない人はこれらのことをまだ理解していません。いまだに不明瞭なのです。そのような人は、自分のアキレス腱はどこなのか、どの方面で容易につまずきがちなのかを知りません。あなたがたは今のところ、自分がどのような人間なのかを知らず、またあなたがたのような人間なのか、他人はある程度まで見ることもかかわらず、あなたはそれを感じ取ることができません。自分の普段の考えや意図をはっきり認識しておらず、これらのことの本質は何かも明確に理解していません。一つの側面を深く認識すればするほど、あなたはその側面においてさらに変化します。そのようにして、あなたが行なう物事は真理と一致し、あなたは神の要求を満たすことができ、神の旨に近づきます。このように追い求めることでのみ、成果を挙げることができます。

『キリストの言葉の記録』より

73. 自分自身の本性を知るとは、どういうことですか。どうすれば知ることができますか。どの側面から知るものですか。さらに、人が明らかにする物事とおして、その人の本性をどのように具体的にとらえるべきですか。まず第一に、人の本性は、その人の興味のあることからわかるものです。例えば、特に踊ることが好きな人、特に歌手や映画スターが好きな人、また特定の有名人を特に偶像化する人がいます。このような関心事項から見て、このような人の本性はどのようなものですか。もう一つ簡単な例を挙げましょう。特定の歌手を本当に偶像化して、その歌手の動きという動き、微笑みという微笑み、言葉という言葉にとりこになってしまう人もいるでしょう。その歌手が着ている物すべてを写真に撮り、真似することさえあります。これほどの偶像化は、その人の本性について何を表していますか。このような人の心には、そのような物事しかなく、神はいない、ということを表しています。この人が考え、愛し、求めるものはすべてがサタンが完全に暴露します。このような物事がこの人の心を占め、心はこのような物事に明け渡されてしまっています。ここでの問題は何ですか。何かを極端に愛すると、その物事がその人のいのちとなり心を占め、その人が神を欲せず代わりに悪魔を愛する偶像崇拝者であることが完全に証明されます。そこで、このような人の本性は、悪魔を愛し崇拝し、真理を愛さず神を欲しないものであると結論付けることができます。これは人の本性を見る完全に正しい方法です。このようにして一人の人間の本性を細かく分析するのはです。例えば、パウロを特に偶像化する人がいます。出かけて行って演説をし、働くのが好きで、集まるのを好みます。人が自分の話を聞いてくれ、自分を崇拝してくれ、自分の周りに集まってくれるのが好きです。人の心の中に地位を持つのが好き

で、人が自分のイメージを高く評価してくれると喜びます。このような振る舞いから、この人の本性を分析してみましょう。このような振る舞いの人はどのような本性を有していますか。本当にこのように振る舞うなら、傲慢で思い上がっていることはそれで十分にわかります。神をまったく崇拝していないのです。高い地位を求め、人に対し権威を持ちたい、人を占有したい、人の心の中の地位が欲しいと願います。その本性の際立った側面は、傲慢さと思い上がり、神を崇拝する気のなさ、そして人から崇拝されたいという願望です。これはサタンの典型的な姿です。このような振る舞いにより、その本性をはっきりと見極めることができます。

『キリストの言葉の記録』の「どのようにして人間の本性を知ればよいか」より

74. 人の本性を知ることに関しては、人の世界観、人生観、価値観から知ることが最も重要です。悪魔に属する人はみな、自分自身のために生きています。その人生観と座右の銘は、おもに「己を怠る者は、天罰を受け地が滅ぼす」のようなサタンの言い回しから来ています。この世の悪魔や偉人や哲学者の語る言葉が、その人のいのちとなっています。特に、中国人に「賢者」として喧伝されている孔子の言葉のほとんどが、人々のいのちとなっています。また、仏教や道教の有名なことわざや、様々な有名人物のよく引用される古典的な言葉もあります。これらはみな、サタンの哲学とサタンの本性の骨子です。これらはまた、サタンの本性を最もよく描写し、説明するものでもあります。人の心に染み込んだこのような毒は、みなサタンから来ています。神から来ているものなど、そこにはひとかけらもありません。そのような嘘やたわ言は、神の言葉と正反対でもあります。肯定的な物事すべての現実には神から来るものであり、人を毒する否定的な物事はすべてサタンから来るものだということは、まったくもって明らかです。したがって、人の本性と、その人が誰に属しているのかは、その人の人生観と価値観から見極めることができるのです。サタンは国家政府や有名人・偉人による教育や影響を通して人間を堕落させます。これらの人々のたわ言は、人間のいのちとなり、本性となっています。「己を怠る者は、天罰を受け地が滅ぼす」は、有名なサタンの格言であり、全ての人に浸透し、人のいのちとなっています。ほかにもこれに類似する人生哲学の格言があります。サタンは各国の洗練された伝統文化を利用して人を教育し、人類を広大な破滅の淵へ落とし入れます。最終的に、人間はサタンに仕え神に抵抗しているために、神に滅ぼされます。何十年も社会で活動してきた人に、「あなたは長いことこの世に生きて、多くのことを成し遂げてきましたが、あなたが生きる上で頼りにしている有名な諺は何ですか」と質問したとしましょう。すると相手は「一番大切なのは『長い



ものには巻かれよ』です」と答えるでしょう。そのような言葉はその人の本性を表わしてはいませんか。地位を得るためには手段を選ばない、というのがその人の本性です。「長いもの」になることがその人の生き甲斐なのです。人の生活、物事の取り扱い、振る舞い、そして他人との接し方には、サタンの害毒がいまだ数多く存在します。それらに真理はほぼまったくありません。例えば、人の人生哲学、物事の仕方、金言は赤い大きな竜の害毒に満ち、それはすべてサタンから生じたものです。ゆえに、人の血肉に流れているのはどれもサタンの物事なのです。「長いもの」、つまりそれらの権力者や成功者が歩んだ道や成功の秘訣は、彼らの本性を完全に表わしてはいませんか。彼らはこの世でかくも大きなことを成し遂げましたが、それらの偉業の裏にある企みを見抜ける人はいません。そのことは、彼らの本性がかくも狡猾で悪意に満ちていることを示しています。人類はサタンによって深く堕落させられてきました。サタンの害毒がすべての人の血に流れており、人間の本性が堕落し、悪であり、反動的であり、サタンの哲学に満ちていることが見て取れます。それはひとえに神に背く本性です。人が神に抵抗し、神と敵対するのはそれが理由です。このように分析すれば、人の本性は誰でも知ることができます。

『キリストの言葉の記録』の「どのようにして人間の本性を知ればよいか」より

75. 自己認識があまりに浅い場合、人が問題を解決するのは不可能で、そうすると自分のいのちの性質はどうしても変わりません。自分自身を深く知る、つまり自らの本性を知ること、そしてその本性にはどのような要素が含まれているのか、それはどのように生まれ、どこから来ているのかを知ることが必要です。さらに、あなたはこれらを実際に憎むことができますか。自分の醜い魂と邪悪な本性を見ましたか。自分自身の真実を本当に見ることができるなら、自分を忌み嫌うようになります。自分を忌み嫌い、それから神の言葉を実践すると、肉に背くことができ、難なく真理を実行する強さを持つことができます。なぜ多くの人は自分の肉体的な好みに従うのでしょうか。それは人は自分を極めて良いと思うからです。自分は正しく、正当化され、落ち度もなく、完全に道理があるとすら思っているのです。そのため、正義は自分の側にあるという前提で行動することができてしまうのです。自分の真の本性が何なのか、どれほど醜く、卑劣で、哀れであるかに気が付くと、人は自らをあまり誇りに思わず、ひどく傲慢ではいられず、以前のように自分には自分にそれほど満足しません。「私は真面目で地に足をつけていなければならない、神の言葉をいくつか実践しなければならない。そうでなければ、人であるという基準に達せず、神の面前で生きるのが恥ずかしくなるだろう」とその人は感

じます。その人は自分はちっぽけで取るに足らないと本当にわかります。この段階では、その人が真理を実践するのは簡単で、より人間らしく見えます。自分自身を真に忌み嫌って初めて、人は肉に背くことができます。自身を忌み嫌わないのなら、肉に背くことはできません。自分自身を真に憎むことは、二、三のことから成ります。第一に、自分の本性を知ること。第二に、自分自身を貧しく哀れであり、極めて小さく取るに足りない者に見なし、自分の哀れで汚れた魂を見ることです。自分が本当は何であるのかを完全に悟ったとき、そしてこの結果が得られたとき、人は自分自身を真に知り、完全な自己認識を得るに至った、とすることができます。そうして初めて、自分自身を呪うほどに真に憎むことができ、人間とは似ても似つかぬほどサタンによって深く墮落させられたと真に感じるができるのです。そうすると、ある日、死の脅威が現れると、そのような人は思います。

「これは神の義なる罰なのだ。神は本当に義なる方だ。かくも汚れ墮落した私は神に消し去られるべきなのだ。私のような魂は地上で生きる資格などない」

この時、この人は神に不平を言おうとも、抵抗しようとも、ましてや背こうともしません。自分自身を知らずに、いまだに自分を極めて良いと思っている人は、死が近づいて来たら、こう思います。

「私は信仰においてこんなによくやってきた。どんなに努力して追い求めてきたことか。こんなにも与え、こんなにも苦しんできた。なのに最後は、神は私に死ねと言うのか。神の義はどこにあるのか。なぜ神は私に死ねと言うのか。私みたいな人間でさえ死ななければならないのなら、誰が救われるというのか。人類は終わりを迎えようとしているのではないのか」

まず第一に、この人は神について観念を抱いています。第二に、この人は不平を言い、服従の欠片も見られません。これはまさにパウロと同じです。パウロは亡くなる寸前にも自分自身を知りませんでした。そして神の罰がそばに迫った時には、悔いても遅かったのです。

『キリストの言葉の記録』の「自らを知ることは主に人間の本性を知ること」より

76. 人が自分を認識できるよう、神は多くの異なる方法を用いてきました。神は人に経験を通じて自己認識を徐々に得られるようにします。それが試練であれ、裁きであれ、刑罰であれ、神は人に神の言葉と実際の事実において絶えず経験できるようにするのです。人は神の言葉による裁き、刑罰、鍛錬を経験し、また神の言葉の啓きと照らし

も経験します。それと同時に、神は人に自らの墮落、反抗心、本性を認識できるようにします。では、これらすべての最終目標は何ですか。その最終目標は、一人ひとりが神の働きを経験し、人とは何かを知るようにすることです。「人とは何か」という言葉には何が含まれますか。そこには、人が自分の身分、立場、本分、責任を認識できるようにすることが含まれます。つまりそれは、自分が何者かを知るようにさせることなのです。これが、神が人に自分自身を知るようにさせることの最終目標です。

『キリストの言葉の記録』の「唯一無二の神自身 3」より

77. 私たちの心に存在するありとあらゆることは、神に反対するものです。そこには、私たちがよいと考えているものや、肯定的であるとすでに信じているものさえ含まれます。私たちはこれらの事柄を、真理、正常な人間性の一部、肯定的なものとして列挙しますが、神の観点から見れば、これらは神が忌み嫌う事柄です。私たちが考えることと神が語る真理とのあいだには、どれほど広大な溝がありますか。それは計り知れない溝です。だから、私たちは自分自身を知らなければなりません。自分の思考や視点や行動から、自分が受けた文化的教育に至る一つ一つの事柄に、深く掘り下げ徹底的に分析する価値があるのです。その中には社会環境に由来するものもあれば、家庭に由来するもの、学校教育に由来するもの、書籍に由来するものもあります。また自分の想像や観念に由来するものもあります。このような事柄は最も恐ろしいものです。なぜなら、それらは私たちの言動を縛って操り、精神を支配し、行動における動機や意図や目標を導くからです。これらのことを掘り起こさなければ、自分の中に神の言葉を完全に受け入れることはなく、神の要求を無条件に受け入れることも、それを実践することも決してありません。自分の見解や観点、あるいは自分が正しいと信じる事柄についての確信を抱くかぎり、あなたは神の言葉を十分かつ全面的に受け入れず、それを本来の形で実践することもあります。まず自分の心で処理してからでないと、きっとそれを実践に移さないのです。それがあなたのやり方となり、また他人を助ける方法ともなります。またあなたは神の言葉を少しばかり交わりもしますが、いつも自分の不純物が混ざっています。それなのに、そのように振る舞うことは自分が真理を実践していること、真理を理解したこと、すべてを自分のものにしたことを意味していると信じるのです。人間の状態はあわれではありませんか。恐ろしくはありませんか。

『キリストの言葉の記録』より

78. 自分を知るためには、自分が露わにしている墮落、致命的な弱点、性質、本性と実質を認識しなければなりません。また、自宅にいようと教会にいようと、集会に出

席しているときであれ、神の言葉を飲み食いしているときであれ、また直面する一つ一つの問題においても、日常生活において露わにされるもの、つまりあらゆる事柄に関する動機や視点や態度を詳細に至るまで認識する必要があります。それらを通じて自分を認識するようにならないければならないのです。より深く自分を認識するには神の言葉と一体化する必要があります。神の言葉を基に自分を認識して初めて、あなたは成果を挙げることができるのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることの重要性とその道」より

79. 性質の変化を遂げる鍵となるのは、自分自身の本性を知ることであり、これは神の啓示に従って起こらなければなりません。神の言葉においてのみ、人は自分のひどく醜い本性を知り、本性にあるサタンの様々な毒を認識し、自分が愚かで無知だと気づき、本性の弱点や消極的要素を認識できるのです。これらをすっかり知り、自分自身を憎み、肉に背き、神の言葉を着実に実行し、聖霊の働きと神の言葉に絶対的に従う意志を持つことが本当にできて初めて、ペテロの道を踏み出したことになるのです。

『キリストの言葉の記録』の「自らを知ることは主に人間の本性を知ること」より

80. ある人の本質がどのようなものであるかをどのようにして知ることができますか。その人が何もしなかったり、ささいなことしかしなかったりなら、その人の本性や本質がどのようなものであるかを知ることはできません。本性や本質は、日常生活において何かが起きたときに人が露呈することや、その人の行動の背後にある動機や意図や欲求や、その人が歩む道に見えます。さらに重要なことに、神が用意した環境に遭遇したときにどう反応するかに表れます。また、神がその人に直接したこと何かに遭遇したとき、神により試され、精錬一百され、取り扱われ刈り込まれるときに見えます。また、神がその人を直接啓き、導くときにも見えます。このようなものが人の本性と本質を露わにするのです。これらはみな何に関係していますか。人の行動、生き方、振る舞いの原則に関係しています。そしてまた、その人の追い求める方向と目標、追い求めるのに用いる手段、進む道、生きるためのよりどころ、存在の基礎に関係しています。

『キリストの言葉の記録』の「パウロの本性と本質をいかに識別するか」より

81. 自己反省と自分を知ることの鍵については、以下の通りです。ある分野において自分がよくやってきた、あるいは正しいことをしてきたと感じれば感じるほど、または、自分はその分野で神の旨を満足させられるとか、自慢に値するなどと考えれば考えるほど、その分野で自分自身を知り、それを深く掘り下げ、自分の中にどんな不純なも

のがあるのか、自分の中の何が神の旨を満足させられないのかを認識する価値が増します。パウロを例にとりましょう。パウロはとりわけ知識があり、説教の働きにおいても苦しみました。多くの人が彼のことをとりわけ崇拜しました。その結果、パウロは多くの働きを成し遂げたあと、自分のために王冠が取っておかれるだろうと思い込んでしまいました。そのせいでますます間違った道を進んでいき、最後は神によって罰せられたのです。そのとき自分を反省し分析していれば、そのようには考えなかったでしょう。言い換えれば、パウロは主イエスの言葉から真理を求めることに集中せず、自分の観念と想像を信じるだけでした。いくつかのよい行ないをし、よい振る舞いを示すかぎり、神に讃えられ報いられると考えていたのです。結局のところ、パウロの観念と想像は、彼の霊の目を塞ぎ、本当の顔を覆い隠しました。しかし、人々はこのことを知らず、神がそれを明るみに出すこともなかったので、パウロのことを到達すべき水準、生きるべき模範とし続け、彼のようになることを切望しました。パウロは人々が追い求める対象、模倣の対象になったのです。パウロに関するこの話は、神を信じるあらゆる人への警告となります。つまり、自分がとりわけよくできたと感じるときや、何らかの点でとりわけ才能に恵まれ、変わる必要も取り扱われる必要もないと信じるたび、その点についてさらに自分自身を知るよう努めなければなりません。それは、自分がよくできたと思う点について、実はそこに神への反抗が含まれているかどうかを確かめるべく、掘り起こすことも、注目することも、分析することもしていないからです。

『キリストの言葉の記録』より

82. 自己の本性に関する人の認識はあまりに表面的であり、神の裁きと啓示の言葉から遠くかけ離れています。これは、神が明らかにすることに誤りがあるのではなく、むしろ人間が自己の本性に関する深い認識を欠いているのです。人には根源的、実質的な自己認識がありません。その代わり、自分の行動や表に現われることに集中し、そこに精力を費やすのです。自分を認識することについて誰かが時々何かを言ったとしても、それはさほど深いものではありません。誰一人として、こんなことをしたから、あるいは何かを露呈したから自分はこのような人間だとか、このような本性をもっているなどと考えたことはありません。神は人の本性と本質を明らかにしましたが、人間は自分の物事のやり方や話し方に欠点があって不完全なのだと理解します。ゆえに、人が真理を実践するのは骨の折れることなのです。人は、自分の過ちは一時的な表われに過ぎず、それが自分の本性の表われというよりは、不注意に露呈してしまったものだと考えます。自分をこのように見なす人は、真理を実践することができません。真理を真理とし

て受け入れることができず、真理を渴望しないからです。したがって、そのような人は真理を実践するとき、おざなりに規則に従うだけです。人は自分の本性があまりに墮落しているとは見なさず、滅ぼされたり罰せられたりするほど自分はひどくないと信じています。時々嘘をつくのは大したことではなく、自分は過去に比べてずっとよくなったと考えます。しかし実際のところ、基準に従えば、そこには大きな差異があります。外面的には真理に背かない行動をとるだけなのですが、それが実際には真理を実践していないことになるからです。

『キリストの言葉の記録』より

83. 人が神の働きを経験し、真理を得るまで、人を内側から管理し支配するのはサタンの本性です。この本性は特に何を引き起こすでしょうか。例えば、あなたはなぜ利己的なのですか。なぜ自分の地位を守るのですか。なぜあなたの感情はそんなに強いのですか。なぜ不義な物事を愛するのですか。なぜそのような悪を好むのですか。そのようなことを好む根本原因は何ですか。それはどこから来るのですか。このようなの背後にある主たる原因として、そこにはすべてサタンの毒が含まれていることをあなた方は今ではみな理解しています。サタンの毒とは何かといえば、それは言葉で十分表現できます。例えば、邪悪な行いをする人に、なぜそのような事をするのかと聞くならば、こう答えるでしょう。「己を怠る者は、天罰を受け地が滅ぼす。」この言葉が問題の根源を表しています。サタンの論理が人々のいのちとな人は物事をさまざまな目的で行いますが、とにかく全て自分の為に行ないます。「己を怠る者は、天罰を受け地が滅ぼす」と人はみな考えます。これが人のいのちであり、哲学であり、また人の本性を表しています。「己を怠る者は、天罰を受け地が滅ぼす」。この言い習わしこそサタンの毒であり、人の中に取り込まれるとそれは人の本性となるのです。サタンの本性はこの言葉をとおして暴露されています。サタンの本性を完全に表現しています。この毒は人のいのちとなり、人の生存の基礎ともなります。何千年もの間、墮落した人類はこれに支配されてきました。サタンの行動は、全てサタン自身のためのものです。サタンは神を超越し、神から自由なり、自ら権力を振りかざし、神が創造した万物を所有したいのです。人間がサタンに墮落させられてから、人間は傲慢でうぬぼれて、自己中心的で卑しくなり、自分の利益だけを考えています。つまり、人間の本性はサタンの本性なのです。実際、多くの人の座右の銘が、その人たちの本性を表し、反映することができます。どんなにごまかそうとしても、人の言動のすべてにおいて本性を隠すことなどできないのです。決して真理を語らず、見せかけに長けた人がいますが、他者がその人と交流すれば

、その人の本性は露わになります。最後には、他者はこう結論付けるでしょう。この人は真理を一言も語らず、嘘つきであると。この言葉が、そのような人の本性を証言し、説明しています。そのような人の人生哲学とは、誰にも真理を語らないこと、そして誰も信じないことです。人間の本性にはサタンの哲学が大いに含まれています。あなた自身が気づきさえせず、理解していない場合もありますが、それでもあなたの人生の一瞬一瞬が、それにもとづいているのです。その上、あなたはこの哲学が正しく理にかなっていると思っています。サタンの哲学が人間の真理となってしまう、人間はサタンの哲学に完全に従って生きており、それに一切抗うこともありません。ですから、人はそのサタンの本性を絶えず露呈し、あらゆる側面でサタンの哲学に沿った生き方をしているのです。サタンの本性は人間のいのちなのです

『キリストの言葉の記録』の「ペテロの道を歩むには」より

## (VII) いかに正直な人となるかについての言葉

84. 神は正直な人を喜ぶということを知っておきなさい。神は本質的に信実で、その言葉は常に信頼できる。さらに、神の業には誤りも疑問の余地もない。だから神は、自分に絶対的に正直な者を愛する。正直であるとは、神に心を捧げること——何事においても神を偽らないこと、あらゆることにおいて、神に率直であること、事実を隠そうとしないこと、上の者に対して偽りなく、下の者を惑わさないこと、そして、神に取り入る為だけに何かを決してしないこと。つまり、正直であるということは、言動において不純でないことであり、神をも人をも欺かないということである。わたしの言っていることはまことに単純なことだが、あなたがたにとっては二重に困難なことである。言行において正直であるよりは、地獄に落とされたほうがましだと思う人は多いだろう。当然ながら、不正直な人々のために別の処遇が用意されている。もちろん、あなたがたが正直な人間であるために直面する大きな困難は、わたしも分かっている。あなたがたはとても賢く、自分の観点から他人を裁くのに巧みだ。それだからわたしの仕事はずっと簡単だ。あなたがたは、それぞれ心に秘密を抱いている。それでは、あなたがた一人一人に火の「試練」を下し、わたしの言葉への信仰に心から従うよう、仕向けよう。最後に、あなたがたの口から「神は信実な御方である」という言葉をねじり取ろう。そうすれば、あなたがたは自分の胸をたたいて、「人間の心は曲がっている」と嘆くことになる。そうすると、あなたがたの心はどういう状態になるだろう。今のように自尊心にまかせて行動することはなくなるだろう。今のように「自分は深遠すぎて理解されない」と言っているわけにはいなくなるだろう。神の前ではきちんと振る舞い、とりわけ「礼儀正しい」けれど、霊の前では反抗的で放埒な行いをする者もいる。そのような人をあなたがたなら正直な者の数に入れるだろうか。もしあなたが偽善者で「社交」上手であるなら、あなたは神を軽んじていると断言しよう。もしあなたの言葉が言い訳と無価値な正当化だらけだとしたら、あなたには、真理を行おうという気持ちがないのだ。もしあなたが他人に言うことのできない秘密を多数抱え込んでいながら、光明を求めて自分の秘密——自分の中にあるやっかいな部分——を他人に打ち明けないでいるとしたら、あなたが救いを受けることは難しく、闇から抜け出すことも容易ではない。もしあなたが真理の道を求めることに喜びを感じるのなら、あなたはしばしば光の中に生きている。神の家で効力者であることを喜ぶ人で、人に知られなくとも勤勉に、良心的な仕事をし、決して何かを得ようとせず、常に与える者であるのなら、その人は忠実な聖徒だと言おう。報いを求めず、ただ正直であるのだから。率直であろうとし、すべてを与



える覚悟があり、神のために命を犠牲にして証しすることができるのなら、神を満足させることだけを考え、自分のことは考えず、自分のためには何も求めないほど正直なら、そのような人は光に養われ、神の国で永遠に生きる人である、とわたしは言おう。

『言葉は肉において現れる』の「三つの訓戒」より

85. あなたがたの終着点と運命は、あなたがたにとって極めて重要であり、由々しき懸念である。十分注意して行動しなかったならば、それは終着点が無くなり、運命の破滅に等しいとあなたがたは考えている。しかし、努力が自分の終着点のためだけであるならば、それは空しい努力であることにあなたがたはこれまで気が付いたことがあるだろうか。そのような努力は本物ではなく、虚偽である。その場合、自分の終着点のために努力する者は、最終的に失敗するであろう。なぜならば、神への信仰における人々の失敗は偽りに起因するからである。わたしは媚びへつらわれたり、熱狂的に扱われるのを好まないと前に述べた。わたしは、わたしの真理や期待と向き合う正直な者を好む。それ以上に、わたしの心に出来るだけ配慮し、わたしのために全てを捨て去ることの出来る者を好む。わたしの心が慰められるのは、こうした場合のみである。

『言葉は肉において現れる』の「終着点について」より

86.

『キリストの言葉の記録』の「いのちの進歩を表す六つの指標」より

87. 誠実であるためには、まず自分の心をさらけだし、皆がそれを見てあなたが考えていることのすべて、あなたの真の顔を見ることができるようにななければならない。取り繕ったり、自分自身を隠そうとしてはならない。そうしてのみ、他人はあなたを信じ、誠実だと思う。これが誠実であることの最も基本的な実践であり、前提条件である。あなたはいつも見せかけていて、聖さや高潔さ、偉大さに加え、高尚な道徳的特質を常に装っています。自分の墮落や欠点を人に見せません。あなたは立派で、偉大で、自己犠牲をいとわず、公平で、無私だと思われようと、人に偽りの姿を見せます。それは不正直です。何かのふりをして自分を装ってはなりません。代わりに自分と自分の心を人にさらけ出し、見えるようにしなさい。人に見えるように心をさらけ出す、つまり心の中で考えもくろんでいることをすべてさらけ出すことができれば、その正否に関係なく、あなたは正直ではありませんか。人に見えるように自分をさらけ出すことができれば、神はあなたを見て「あなたは人に見えるように自分をさらけ出したので、私の前でもたしかに正直だ」と言います。あなたが人に見えないところで神にだけ自分をさら

け出し、人前では立派で高潔、あるいは公平で無私であるかのようなふりをいつもしているなら、神はどう考え何と言いますか。神はこう言います。「あなたは本当に不正直だ。まったく偽善的で狭量で、正直ではない」。そうしてあなたを断罪します。正直でありたいならば、神の前で、あるいは人前で何をするかに関係なく、心を開いて自分をさらけ出すことができなければなりません。

『キリストの言葉の記録』の「正直であることの最も基本的な実践」より

88. 今日、ほとんどの人々は、恐ろしくて自分の行いを神の前に示すことができない。また、あなたは神の肉を欺くかもしれないが、神の霊を欺くことはできない。神の監督に耐えられない物事は、いずれも真理に一致しないので、捨て去れねばならない。さもなければ、それは神に対する罪である。だから、祈る時であれ、兄弟姉妹と話し、交わりを持つ時であれ、自分の任務を果たし、自分の業務に携わる時であれ、あなたは自分の心を神の前に捧げなければならない。あなたが自分の役割を果たす時、神はあなたと共にいる。そして、あなたの意図が正しく、神の家の業のためになるのであれば、神はあなたの為すこと全てを受け入れるであろう。だからあなたは自分の役割を果たすよう熱心に献身すべきである。あなたが祈る時、心の中に神への愛があり、神の配慮と守りと監督を求めることがあなたの意図であれば、あなたの祈りには効果があるであろう。たとえば、あなたが集会で祈る時、自分の心を開いて神に祈り、偽りを述べることなく心の中の思いを神に話すなら、あなたの祈りは効果的なものとなるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神は神の心に適う者を完全にする」より

89. 現在、神による監督を受け入れることができない者は誰でも、神からの承認を受けることができず、また、受肉の神を知らない者は完全にされることはない。あなたの為す全てのことを見て、それを神の前にさし出すことができるかどうか考えてみなさい。あなたが為す全てのことを神の前に示すことができないのであれば、それはあなたが悪を行う者であることを示している。悪を行う者が完全にされ得るであろうか。あなたが為す全てのこと、一つひとつの行い、一つひとつの意図、一つひとつの反応を神の前に示さなければならない。あなたの日々の霊的生活、つまり、あなたの祈り、神との親密さ、神の言葉を食べ、飲むこと、兄弟姉妹との交わり、教会生活をおくること、そしてあなたの共同の奉仕さえも神の前に示し、神によって監督されねばならない。あなたがいのちにおいて成熟するのを助けるのはこのような実践である。神の監督を受け入れる過程は、清めの過程である。あなたが神の監督を受け入れれば受け入れるほど、あなたは一層清められ、神の意志と一致するので、放蕩や放縦に陥らなくなり、あなたの

心は神の前で生きるだろう。あなたが神の監督を受け入れれば受け入れるほど、サタンは一層辱められ、あなたはさらに肉を捨てることができる。したがって、神の監督を受け入れることは、人間が実践しなければならない道である。あなたが何を為そうと、兄弟姉妹との交わりの最中でさえ、あなたが自分の行いを神の前にさし出して神による監督を求め、あなたの意図が神自身に従うことであるならば、あなたが実践することは一層適切なものとなるであろう。あなたが為すこと全てを神の前にさし出して神の監督を受け入れて初めて、あなたは神の臨在で生きる者となることができる。

『言葉は肉において現れる』の「神は神の心に適う者を完全にする」より

90. 真の信仰と真の忠実さとが内にあるかどうか、神のために苦難を受けたことがあるかどうか、神に心から従っているかどうか、自分の心に尋ねればわかるだろう。もし、そうしたものが欠けているのなら、あなたの心の内には、不服従、欺き、貪り、不満が残っている。心が正直でないから、神に認められたこともなく、光の中で生きたこともない。人間の運命が最後にどうなるかは、正直で赤い血の通った心があるか、清い魂があるかどうかにかかっている。極めて不正直で、悪意に満ち、汚れた魂をもっているなら、運命の記録は人が罰せられる場所に確実におかれている。もし自分は正直だと言いながら、真理に適う行いをする 것도、真実を語ることもないとしたら、それでも神があなたを報いてくれるのを期待するのか。それでも神が、あなたを目に入れても痛くないものとして扱ってくれるのを期待するのか。そんな考えは非常識ではないだろうか。あらゆることで神を欺いていながら、どうしてあなたのように手の汚れた者を神の家が受け入れることができようか。

『言葉は肉において現れる』の「三つの訓戒」より

91. 正常な人々の性質にはひねくれた点や不正直さはなく、人々はお互いに正常な関係にあり、孤立していないし、その生活は凡庸でもなければ退廃的でもない。そこで神もすべてのものから褒め称えられ、神の言葉は人間の間を広がり、人々はお互い平和に神の配慮と保護のもとに暮らし、地上は調和で満たされ、サタンの妨害はなく、神の栄光が人間の間で最も重要なものになっている。このような人々はまるで天使である。純粹で、活気があり、けっして神について不平を言わず、地上の神の栄光だけに、ひたすら努力を捧げる。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十六章」より

## (VIII) いかにかに神に従うかについての言葉

92. 聖霊の働きは日毎に変化し、段階毎に高まっている。明日の啓示は今日よりも高く、段階が進むにつれてさらに高まる。これが神が人間を完全に作る働きである。人がこれに付いて行けないのであれば、いつでも取り残されうる。人間が従順な心でいなければ、最後まで従うことはできない。これまでの時代は過ぎ去った。今は新しい時代である。新しい時代には新しい働きがされなければならない。とりわけ、人間が完全にされる最後の時代になると、神はそれまでになく素早く新しい働きをする。それゆえ、人が従順な心を持たないならば、神の足跡を辿ることを困難と感じる。神はいかなる規則に従うこともなく、自身のどの働きの段階をも不変のものとして扱うことはない。むしろ、神の為す働きは常に新しく、常に高みへと登り続ける。神の働きは段階を追うごとに益々実践的になり、益々人間の実際の必要に則したものとなる。人間はこのような働きを経験して初めて、最終的な性質の変化を遂げることができる。人のいのちに対する認識はますます高まり、同様に、神の働きも益々高みへと上る。このようにしてのみ、人は完全にされ、神に用いられるに相応しい者となることができる。神はこのように働いて人間の観念に反論し、覆す一方で、人を高みへ、そしてより現実的な状態、神への信仰の最高の領域へ導き、その結果、最終的に神の旨が成就するのである。

『言葉は肉において現れる』の「真心で神に従う者は確かに神のものとされる」より

93. 神の働きは時代ごとに異なるのである。もしあなたが、ある局面では立派に従うが、次の局面になるとそれ程従わないか全く従わないというのであれば、神はあなたを見捨てるだろう。今の段階を神が上がっていくにつれ神に付いて行っているのであれば、次の段階でも神に付いて行かなければならない。そうして初めて、あなたは聖霊に従順な者となる。あなたは神を信じているのだから、絶えず従順でなければならない。従いたい時にだけ従い、従いたくない時は従わないということではいけない。そのような従い方は神に認められない。わたしが語る新しい働きに付いて来ることができず、昔聞いたことに固執するのであれば、どうしてあなたのいのちが進歩できるだろう。神の働きというのは、神の言葉を通してあなたに施すことなのだ。あなたが神の言葉に従って受け入れるのであれば、聖霊があなたの中で間違いなく働くのである。聖霊はわたしが語る通りに働く。わたしの言う通りを行いなさい。そうすれば聖霊はすぐにあなたの中で働く。わたしはあなたの方のために新たな光を放ち、あなたの方がその光を見て現在の光へ来るようにする。あなたがこの光の中へ入っていく時、聖霊はあなたの中で直ちに働く。「わたしはあなたの言う通りにはしない」などと言う扱い難い人もいるかもし

れない。そのような人に言う。あなたの道は先がない。あなたはもうこれまでで、あなたの命は終わる。それだから、自分の性質の変化を経験するときに最も重要なのは、今の光に付いて行くことなのである。

『言葉は肉において現れる』の「真心で神に従う者は確かに神のものとされる」より

94. 聖霊の語ることに何でも従い、それを求めるなら、あなたは神に従う者であり、そのようにして、性質を変化させることができるだろう。人間の性質は、聖霊の現在の言葉により変化する。あなたがいつも遠い過去の経験や規則を掲げるならば、あなたの性質は変化しないだろう。今日、聖霊が語り全ての人々に正常な人間性のいのちの中に入ることを教えたにもかかわらず、あなたが表面的なことに重点を置き、現実性に関して混乱し、それを真剣に受け止めないなら、あなたは神の業について行けない者となり、聖霊によって導かれる道に入る者とはならないであろう。あなたの性質が変化できるかどうかは、あなたが聖霊の現在の言葉に遅れずについて行き、真の理解を持つかどうかによる。これは以前あなたがたが理解していたこととは異なる。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変化した者たちとは神の言葉の現実の中へ入った人々である」より

95. 実生活の問題に対処する時、神の権威と神による統治をどのように知り、理解すべきであろうか。こうした問題をどのように理解し、取り扱い、経験すべきかを知らない場合、どのような姿勢で神による統治と計画に従っている自分の意向、願望、そして事実を示すべきであろうか。あなたは、まず待つこと、次に探し求めること、その後に従うことを覚える必要がある。「待つ」とは、神の時を待つことであり、あなたのために神が計画した人々、出来事、物事を待つことであり、また神の旨が徐々に明示されてゆくのを待つことである。「探し求める」とは、神が計画した人々、出来事、物事により、あなたに対する神の入念な旨を観察し、理解すること、それらの物事により真理を理解すること、人間が達成すべき物事や従うべき道を理解すること、人間に対して神がどのような結果を実現しようとしているか、人間に対して何を達成しようとしているかを理解することである。当然ながら、「従う」とは、神が計画した人々、出来事、物事を受け入れ、神による統治を受け入れ、それにより創造主が人間の運命をどのように支配しているか、どのようにして神が人間に神のいのちを与えるか、神はどのようにして人間に真理を備えさせようとしているかを知ることである。神の采配と統治の下にある全ての物事は自然の法則に従っているのです、自らの全てを神の采配と支配に委ねるとあなたが決心したのであれば、あなたは待つこと、探し求めること、そして従うことを覚える必要がある。それが神の権威に服従することを望む者全てが取るべき姿勢であり

、神による采配と計画を受け入れることを望む者全てに備わっているべき基本的な資質である。そのような姿勢を取り、そのような資質を備えるには、一層の努力が必要である。そうした努力をして初めて、あなたがたは本当の現実に入ることが出来る。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

96.創造主が被造物を扱う究極の原則がありますが、これはまた最も基本的な原則でもあります。彼による被造物の扱いは、彼自身の経営（救いの）計画と要求に完全に則っています。だれに相談する必要もなく、だれの同意も必要としません。彼自身がすべきことをし、扱うべく人を扱います。何をしようと、人をどのように扱おうと、それはすべて創造主の働きの原則に一致しています。被造物がすべきことは、ただ服従するだけです。他に選択肢はありません。これは何を示しているのでしょうか。創造主は常に創造主です。彼は自身が欲するままにいかなる被造物も指揮し支配する権力と資格を有しており、そのための理由を必要としません。これが彼の権威です。では被造物はどうでしょうか。いかなる被造物も、創造主がどう行動すべきか、あるいは創造主のすることが正しいか否かと判定する権力も資格もなければ、被造物が創造主に支配されるべきか、指揮されるべきか、創造主に采配を振られるべきかを選ぶ権利も資格もありません。同様に、いかなる被造物も、創造主にどのように支配され、どのように采配を振られるかを選ぶ権利もありません。これは最高の真理です。創造主が被造物に何をしようとも、そしてそれをどのように行なおうとも、創造主が造った人間がすべきことはひとつだけです。つまり、創造主の定めるこの事実を求め、従い、知り、受け入れることです。最終的な結果は、創造主がその経営計画を完了し、自身の働きを達成し、経営計画が何のものにも妨害されずに進行するようにすることです。同時に、被造物は創造主の支配と采配を受け入れたため、そして創造主の支配と采配に従ったため、被造物は真理を得、創造主の旨を理解し、その性質を知るに至ります。

『キリストの言葉の記録』の「真理を求めることでのみ神の業を知ることができる」より

97. ノアが神に指示されたことを実行したとき、ノアは神の意図を知らなかった。神が何を成し遂げたいのかをわかっていなかった。神はノアに命令を与え、すべきことを伝えただけで、あまり説明はしなかったが、ノアはとにかく実行した。ノアは神の意図を自分なりに理解しようとしたり、神を拒絶したり、疑いを抱いたりすることはなかった。彼は純粋でシンプルな心でただ従ったのである。神がノアにするよう導いたことをノアは全て行った。そして神の言葉に従順に聞き従うことはノアが事を行ううえでの信念だった。神に任されたことを、ノアはそのようにまっすぐに、シンプルに行った。

彼の本質、すなわち彼の行動の本質は従順であり、先読みしたり、拒否したりせず、さらに自分の私的な利益や損得を考えなかったことだ。さらに言えば、神が洪水で世界を滅ぼすと言ったとき、ノアはそれがいつであるとか、その真意を問うといったことはせず、どのように世界を滅ぼすのかも聞かなかった。ノアはただ、神が命じたように行ったのである。箱舟を何でどのように造るのか、神が指示した通りにノアはそれを造り、しかも直ちにとりかかった。彼は神の指示に従い、神に満足していただきたい一心で行動したのだ。彼は自分が災害から逃れるためにこれを行っただろうか。それは違う。世界が滅ぼされるまでにあとどれほどの年月が残されているかを彼は神に聞いただろうか。いや、聞いていない。箱舟を作るのにどれくらいの時間がかかるのかを、彼は神に聞いたか、あるいは知っていただろうか。それも彼は知らなかった。彼はただ従い、聞き、言われた通りに行ったのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 1」より

98. 神に対して取り引きの話をしたり、神になにかを要求したり、命令したりするようなことはなかった。ヨブが神の名を称えたのは、すべてを支配するその偉大な力と権力故であり、祝福を受けたからとか、災いに遭ったからというものではない。ヨブは神が人々に祝福をもたらすか災いをもたらすかに関わらず、神の力と主権は不変であり、故にその人の状況に関係なく神の名は褒めたたえられるべきだと信じていた。神の主権故に人は祝福されるのであり、人に災いが降りかかるのもまた、神の主権故である。神の力と権威は人間のすべてを支配し計らう。様々な人間の富は神の力と権威の現れであり、人がどう見ようと、神の名は褒めたたえられるべきである。ヨブはそれを自らの人生で経験し、悟ったのである。ヨブの考えたことと行なったことのすべてが神の耳に届き、明らかにされ、それは神に重要なものと見なされた。ヨブの認識と、ヨブがそのような心の持ち主であることを神は大切に思った。ヨブの心は常に、どこにいても神の命令を待ち、自分にいつ何が起ころうとも、すべてを歓迎した。ヨブが神に何かを要求することはなく、彼はひたすら神の計らいを待ち、神の計らいを受け入れ、向き合い、従った。ヨブはそれを自身の本分とし、それこそ神がヨブに望んでいたものである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

99. 神が肉にある期間において、神が人間に対して要求する従順さは、批判したり拒否したりしないなど、人間が想像するようなものではない。むしろ、人間が神の言葉を自らの人生の原則とし、生存の基礎とすること、神の言葉の本質を絶対的に実践し、絶対的に神の心を満たすことを神は要求している。人間に対して受肉した神への服従を

要求することの一側面は神の言葉を実践することであり、もう一つの側面は神の平常性と実際性に従うことが出来ることである。これらは両方とも絶対的でなければならない。これらの側面を両方とも実現出来るのは皆、神への真の愛でできた心をもつ者である。それは皆、神により得られた者であり、自分のいのちを愛するように神を愛する。

『言葉は肉において現れる』の「神の実際性に絶対的に服従できる者は真に神を愛する者である」より

100.神の明白な証しに立つことは、実践の神に関する認識があるか如何、そしてその平凡であるだけでなく普通の人物の前に従い、今後も死ぬまで従い続けられるか如何に専ら関連する。この従順さによって真に神の証しに立つならば、それはあなたが神により得られたことを意味する。死ぬまで従い、神の前で不満がなく、批判したり中傷したりせず、観念を抱かず、その他いかなる意図ももたないことにより、神は栄光を得るであろう。人々により蔑まれている普通の人物の前における従順さと、死ぬまで観念を抱かずに従うことが出来ることが、真の証しである。神が人間に対して入るよう要求する現実とは、あなたが神の言葉に従い、神の言葉を実践し、実際の神に服従し、自らの墮落を知り、神の前で自らの心を開き、最終的には神の言葉によって神に得られることが出来ることである。神は、そうした言葉があなたを征服し、あなたを完全に神に対して従順にする時、栄光を得る。それによって神はサタンを辱め、神の働きを完了する。受肉した神の実際性に関して、あなたが何も観念を抱かないのであれば、すなわちこの試練において揺るぎなく立つならば、あなたは良い証しを立てている。実践の神に関して完全に理解し、ペテロのように死ぬまで神に従うことが出来る日が来るならば、あなたは神により得られ、完全にされるであろう。神が行うことがあなたの観念に則していないことは、あなたにとっては試練である。あなたの観念に則していたならば、あなたはそのために苦しんだり精錬されたりする必要はないであろう。観念を払拭する必要があるのは、神の働きが極めて実践的であり、あなたの観念に則していないからである。それがあなたにとって試練であるのはそのためである。全ての人間が試練の最中にあるのは、神の実際性のためである。神の働きは実践的であり、超自然的ではない。神の実践的言葉、実践的発言を観念なしで完全に理解し、神の働きが実践的となるほどに神を真に愛することが出来ることによって、あなたは神によって得られるであろう。神が得る人の集団は、神すなわち神の実際性を知る人々の集団であり、それにも増して神の実践的な働きに従うことが出来る人々である。

『言葉は肉において現れる』の「神の実際性に絶対的に服従できる者は真に神を愛する者である」より



101. 受肉した神は人間の集団を得ることを今日望んでいるが、それは、神の心になう人々の集団である。人間はただ神の働きに従い、天の神の考えに常にとらわれず、曖昧さの中で生活せず、受肉した神に困難を与えなければよい。神に従うことが出来るのは、神の言葉を絶対的に聞き、神の采配に従う者である。そうした者は天の神が実際にはどのような存在か、現在天の神はどのような働きを人間に対して行っているかを一切気にすることなく、自らの心を地上にある神へ完全に捧げ、自分の存在全体を神の前に置く。決して自らの安全を省みることなく、受肉した神の平常性や実際性に関して騒ぎ立てることがない。受肉した神に従う者は、神により完全にされることが出来る。天にある神を信じる者は、何も得ることがないであろう。なぜなら、人間に対して約束したり恵みを授けたりするのは天にある神ではなく、地上にある神だからである。人間は、常に天にある神を誇大視し、地上にある神を凡人とみなしてはならない。それは不公平である。天にある神は偉大で素晴らしく、驚異的な知恵を持つが、それは全く実在しない。地上にある神は至って普通で小さな存在であり、また極めて平凡である。地上にある神には非凡な精神も地を揺るがすような業もない。地上にある神は至って普通で実際的に働き、話をする。地上にある神は雷により言葉を述べたり雨風を起こしたりしないが、真に天にある神の受肉であり、人間のもとで生活する神である。人間は自分が理解できないが、自分の想像に合う存在を神として誇張したり、自分が受け容れられず、想像もつかない存在を卑しいとみなしてはならない。そうしたことは、全て人間の反逆性であり、神に対する人間の反抗の源である。

『言葉は肉において現れる』の「神の実際性に絶対的に服従できる者は真に神を愛する者である」より

102. 人が神に従えるかどうかを決めるにあたり、目を向けるべき重要なことは、その人が神から贅沢な何かを欲しがるかどう、その他の意図があるかどうかです。いつも神に要求をしているなら、それは神にまだ従っていないことを証明します。自分に何が起きようと、それを神から受け取れず、真理を求めることができず、いつも主観的な推論で語り、いつも自分だけが正しいと思い、神を疑うことさえできるなら、必ずや問題に見舞われます。このような人は最も傲慢で、神に最も従順でない人です。神に要求してばかりいる人は、決して本当に神に従えません。あなたが神に要求をしているなら、それは神と取引していること、自分の考えを選んでいること、そして自分の考えに従って行動していることを証明しています。あなたはその点で神を裏切っており、従順ではありません。神に要求をすることには理知がありません。神は神であると心から信じているなら、それが理性的であろうとなかろうと、あえて神に要求をすることはなく

、またそうする資格もないはずです。あなたが神への真の信仰を持ち、神は神であると信じているなら、神を崇拜して神に従うしか選択肢はありません。現在の人には選択肢があるだけでなく、自分の考えに従って神が振る舞うことさえ要求し、自分が神の意図に従って振る舞うことは必要としません。ゆえに、そのような人に神への真の信仰はなく、その信仰は実質を伴っていません。神への要求を少なくできれば真の信仰と従順さが増し、あなたの理知も比較的正常になります。

『キリストの言葉の記録』の「人はあまりに多くを神に要求する」より

103. 自分の信仰において神への従順を求めない者は皆神に反抗する者なのだ。神は、人々が真理を求め、神の言葉を渴望し、神の言葉を飲食し、それを実行に移し、その結果神への従順に達することを求めている。これがあなたの本当の動機ならば、神は必ずあなたを高め、必ずあなたに対し恵み深くなる。このことに疑問の余地はないし、誰もこれを変えることはできない。あなたの動機が神への従順のためではなく、何か他の目的があるならば、あなたが言うこと、行うことのすべては――神の前での祈り、さらにはあなたの行動の一つひとつさえ――神に反するものである。あなたの話し方は穏やかで、温厚かもしれないし、あなたの一つひとつの行動や表現はすべて正しく思われ、あなたは神に従う者のように見えるかもしれない。しかし、あなたの動機と神への信仰におけるあなたの見解に関して言えば、あなたの為すことのすべては神に反しており悪である。表面は羊のように従順に見えるが、心に邪悪な意図を抱いている人々は羊の皮を被った狼であり、直接神を犯し、神は彼らを一人として容赦しない。聖霊は彼ら一人ひとりを暴露するので、偽善者は全て必ず聖霊に忌み嫌われ、拒絶されることは誰の目にも明らかになる。心配しなくてもよい。神は彼ら一人ひとりに応じて取り扱い、解消する。

『言葉は肉において現れる』の「神への信仰において、あなたは神に従うべきだ」より

## (IX) 自分の本分を十分に尽くすことについての言葉

104. 人類の一員として、また敬虔なクリスチャンとして、神が委ねた任務を全うするために心と体を捧げるのは私たちすべての責任であり、義務である。何故なら、私たちの全存在は神から来たものであり、神の支配のおかげで存在しているからである。私たちの心と体が神の委ねた任務のためでも、人類の正義の目的のためでもないなら、私たちの魂は神が委ねた任務のために殉教した人々に値しなくなり、ましてや、私たちに全てを与えた神には値しなくなる。

『言葉は肉において現れる』の「神は全人類の運命を支配する」より

105. 神から託された任務をどう扱うかは非常に重大な問題です。神から託されたことを完了できなければ、あなたは神の前で生きるのに適しておらず、懲罰されなければなりません。神から託されることを人間が完了させるのは、天の法であり地の原則です。それが人間にとって最高位の責任であり、いのちと同じくらい重要なことです。神から託された任務を真剣に捉えないなら、あなたは最も深刻な形で神を裏切っていることになります。それはユダよりも嘆かわしいことであり、呪われるに価します。神から自分に託されることをどう見るべきか、人は完全に認識しなくてはならず、少なくとも神が人間に託しているということを理解する必要があります。それは神によって高められること、神の特別な好意であり、極めて輝かしいことです。他の物事はどれも捨てることができます。自分の命を犠牲にしなければならなくても、神から託されたことは成し遂げなければなりません。

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることでのみ、性質の変化を成し遂げられる」より

106. 人の本分とその人が祝福を受けるか呪われるかの間には、何の相互関係もない。本分は人間が全うすべきことで、それは人間が果たすべき必須の使命であって、報酬や条件、理由に左右されるべきではない。そうしてはじめて、本分を尽くしているといえる。祝福された人は裁きの後で完全にされた時に、幸いを享受する。呪われた者は、刑罰と裁きの後もその性質が変わらないのなら、即ち完全にされていないなら、罰を受ける。被造物として、祝福されるか呪われるかに関わらず、人間はその本分を果たし、自分のすべきことをし、できることをしなければいけない。これが神を求める者として、人間の最も基本的な条件である。あなたは幸いを受けるためだけに本分を果たそうとしてはいけない。また、呪われることへの恐れから、行動することを拒んではいけない。一つだけ言っておこう。人間が自分の本分を尽くすことができるということは、そ

の人がしなければいけないことを遂行するということである。もし人間が本分を尽くせないのなら、それは人間の反抗心の現れである。人間が徐々に変えられるのは、いつも人が自分の本分を尽くす過程を通してである。また、その過程で、その人は自らの忠実を実証する。だから、本分を尽くすことができるほど、あなたはより多くの真理を受け、あなたの表現はもっと実地的なものになる。ただ形の上だけで本分を尽くしているふりをして、真理を求めない者は、最後には淘汰される。何故ならそのような者たちは真理の実践において自分の本分を果たさず、その本分を果たすことにおいて真理を実行しないからである。そうした人は変わらない人で、呪われる。彼らの表すものは不純であるだけでなく、邪悪なものばかりである。

『言葉は肉において現れる』の「受肉した神の職分と人間の本分の違い」より

107. 神を信じる者はみな神の旨を理解しなければなりません。自分の本分を正しく尽くす人だけが神に満足してもらえます。また神から託された任務を完了させることでのみ、基準を満たす形で本分を尽くせます。神の委託を成し遂げる基準があります。主イエスはこう言いました。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ」神を愛することは、神が人に求めることの一側面です。実際、神が人に委託をし、人が信仰心から本分を尽くすとき、神が求める基準は、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くすということです。あなたがそこにいるのに、心ここにあらずならば、任務について頭で考え記憶しながらも心を込めなければ、自分の能力を使って物事を成し遂げるならば、それは神の委託を完了させることになりませんか。では、正しく本分を尽くし、神があなたに託したことを成し遂げ、忠実に自分の本分を尽くすためには、どのような基準を達成しなければなりませんか。それは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして自分の本分を尽くすことです。神を愛する心がなければ、正しく本分を尽くそうとしても尽くせません。神への愛がより強く、ますます本物になれば、自然と心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして本分を尽くすことができるようになります。

『キリストの言葉の記録』の「人が生きるために頼ってきたもの」より

108. あなたが何をしようと、なぜそれをするのか、それをするように仕向ける意図は何か、自分がそれをするものの意義は何か、自分がしているのは肯定的なことか、否定的なことかをまず理解しなければなりません。これらすべてについてはっきり理解しなければならぬのです。原則をもって行動できるためには、この理解が極めて必要です。自分の本分を尽くすために何かをしているのであれば、「どのようにこれをすべき

か。おざなりにならないようにするためには、どうやって立派に本分を尽くすべきか」と熟考すべきです。この点について、神に近づくべきです。神に近づくとは、この点についての真理を求めること、実践の道を求めること、神の旨を求めること、神を満足させるにはどう実践すべきか求めることを意味します。これが、行なうすべてのことにおいて神に近づく方法です。宗教儀式を執り行なうことや外面的な行為はそこに含まれません。それは、神の旨を求めてから真理に従って実践するという目的のためになされます。何一つしなかったときでも常に「神に感謝」と言いながら、何かを行なうときに自分の望む方法でそうし続けるなら、そのような感謝は外面的な行為に過ぎません。本分を尽くすとき、あるいは何かの働きをしているとき、あなたは絶えずこう考えるべきです。「この本分をどのように尽くすべきか。神の意図は何か」。行なうことを通して神に近づきなさい。そうすることで、あなたは自分の行動の背後にある原則と真理を、また神の意図を求めることになり、何をするにしても神から離れることはありません。そのような人だけが真に神を信じているのです。

『キリストの言葉の記録』より

109. どんな本分を尽くしていようと、神の旨を把握し、自分の本分に関して神が何を求めているかを理解するよう、絶えず求めなければなりません。そうして初めて、原則に従う形で物事を扱うことができます。本分を尽くすにあたって、個人的な好みに従い、自分のしたいこと、自分を幸せにしたり快適にしたりすること、あるいは自分をよく見せることを何でも行なうことでそれを進めては絶対にいけません。自分の個人的な好みを神に無理矢理押しつけたり、それをあたかも真理のように実践したりして、それが真理の原則であるかのように従うならば、あなたは本分を尽くしているのではなく、そのように本分を尽くしても神の記憶には残りません。中には真理を理解しておらず、本分を尽くすとはどういうことかを知らない人がいます。そのような人は、自分は心と努力をそこに傾け、肉を捨てた結果苦しんだのだから、自分の本分の遂行は基準を満たしているはずだと感じています。ならば、神がいつも不満なのはなぜですか。これらの人はどこで間違えたのですか。彼らの間違いは、神の要求を探し求めず、代わりに自分の意図に従って行動したことです。つまり自分の欲求や好みを真理として扱い、それらが神の好みであり、神の基準と要求を満たしているかのように扱ったのです。彼らは自分が正しく、善で、美しいと信じるものを真理と見なしたのです。これは間違いです。何かについてそれが正しいと考えることもあるでしょうが、それでも真理の原則を求め、自分の考えていることが神の要求を満たすかどうかを確かめなければなりません。そ

れがたまたま神の要求と相反するなら、自分が正しいと思ったことを捨てなければなりません。神の要求と基準に従い、人間の主観的な欲求ではなく真理の原則にもとづいて行動するならば、あなたの本分の遂行は基準に達します。

『キリストの言葉の記録』の「真理の原則を探し求めることでのみ、本分をよく尽くすことができる」より

110. 本分を尽くしている一人ひとりにとって、真理の理解の深さがどれほどであろうと、真理の現実に入ることを望むなら、自分が行なうすべてのことにおいて神の家の益を考え、自分の利己的な欲求、個人的な意図、動機、面子、地位を捨てるのが最も簡単な実践の方法です。神の家の益を第一にしましょう。これが行なうべき最低限のことです。本分を尽くしている人がこの程度のことさえできないのであれば、その人は効力者であって本分を尽くしていません。まずは神の家の益を考え、神自身の益を考え、神の働きを考え、これらのことを第一に、最優先に考えなければなりません。その後で初めて、自分の地位の安定や、他人が自分をどう見るかを考えるべきです。このような数段階に分け、妥協をすれば少し簡単になると感じませんか。しばらくそのようにしていたら、神を満足させるのが難しいことではないとを感じるようになります。加えて、自分の責任と義務を果たし、本分を尽くし、自分の利己的な欲求や意図や動機を捨て去り、神の旨を考慮し、神と神の家の益を第一にすることができるなら、そのような経験をしばらく積んだ後、それがよい生き方だと感じるようになります。それは卑劣で役立たずな人間になることなく、正直かつ誠実に生きること、心が狭かったり卑しかったりするよりむしろ、公正かつ高潔に生きることです。人はそのように生きて振る舞うべきだと感じるようになります。

『キリストの言葉の記録』の「真心を神に捧げると真理を得ることができる」より

もし自分のすること全てにおいて、神の旨を満たすことに忠実でいたいと願うのであれば、単にひとつの本分を果たすのはいけません。神が与えるどのような任務も受け入れなければなりません。それがあなたの好みに合うかどうか、あなたに興味があることかどうかに関わらず、そしてたとえそれがあなたにとって楽しくないことでも、これまでにしたことがないことでも、難しいことでも、あなたはそれを受け入れて服従しなければなりません。それを受け入れるだけでなく、積極的に協力し、それについて学び、それに入っていかなければなりません。たとえ苦しみという犠牲を払うことになっても、たとえ目立つことができなくても、忠実に行なわなければなりません。それを個人的な仕事ではなく、全うすべき本分とみなさなければなりません。人は自分の本分をどう理解すべきでしょうか。創造主である神が誰かに何らかの任務を与えると、その時点

でその人の本分が発生します。神があなたに与える仕事、神があなたに与える任務、それがあなたの本分です。それを自分のゴールとして遂行し、あなたに真に神を愛する心があるならば、神からの任務を拒否するでしょうか。全てのことを忠実に言い、神の旨を満たしなさい。ここで言う「全てのこと」とは、必ずしもあなたが好きなことや得意なことではなく、ましてやあなたがよく知っていることでもありません。時には学ばなければならず、また時には困難に直面し、そしてまた時には苦しまなくてはなりません。それでも、あなたに任された任務が何であれ、神から託された限り、あなたはそれを神から受け入れ、自分の本分とみなし、それを全うすることに忠実であり、神の旨を満たさなければなりません。これが実践の道です。

『キリストの言葉の記録』より

112. あなたがたは開かれた正直な心でもって出来る限り自分の本分を尽くし、そのためなら喜んで何でもする覚悟をもたなければならない。あなたがたが述べた通り、その日が来た時、神のために苦難を受けて代償を払った者に神が注意を払わないことは一切無い。このような信念は保つ価値のあるものであり、決して忘れてはならないものである。あなたがたに関してわたしの気が安まるのは、こうするよりほか無い。さもなければ、あなたがたに関してわたしの気が安まることは無く、あなたがたは永遠にわたしの嫌悪の対象となるであろう。あなたがた全員が自らの良心に従い、わたしのために全てを与え、わたしの働きのために出来る限り努め、わたしの福音の働きに対して努力の生涯を捧げるならば、わたしの心はあなたがたのために歓喜して飛び跳ねるのではなかろうか。あなたがたに関してわたしの心は完全に安らぐことが出来るのではなかろうか。

『言葉は肉において現れる』の「終着点について」より

さて、実践の原則の一つについてあなたがたに話します。何に遭遇しようと、たとえそれがあなたを試練に遭わせるようなものであれ試すようなものであれ、あなたが扱われる状況であれ、他の人があなたをどのように扱おうと、あなたはまずそれを脇に置いて神の前に祈らなければなりません。あなたは霊に戻り、霊において調和を取り戻し、自分の状態を調整しなければなりません。これが最初に解決すべき事です。「それがどれほど大きなことであれ、たとえ空が落ちて来ても、ナイフが降り注いでも、私は自分の本分をしっかりと尽くさなければなりません。息のある限り、私は自分の本分を諦めることはできません」とあなたは言います。それでどうやって本分をしっかりと尽くすことができますか。本分を尽くすということは、ただ形式通りのことをすることでも、体

はそこにあっても心は伴わなくてよいことでもありません。あなたの心を本分を尽くすことに注がなければならないのです。遭遇するかもしれない問題がどれほど大きくても、それを脇に置いて神に立ち返り、神に満足してもらうためにいかに本分をしっかりと尽くすべきかを求めなければなりません。次のように考えなければなりません。

「今日この問題に直面したが、本分を尽くするためには何をすべきだろうか。以前はいいかげんにしか物事をしなかったが、今日はやり方を変えて、もっとうまく対処して申し分ないようにしなければならない。重要なのは、神をがっかりさせないことだ。神を安心させ、私は本分を尽くすあいだ振る舞いも良く従順であるだけでなく、献身的であることを見てもらわなければならない」

もしあなたがこのように実践し、そしてこのことに努力するならば、あなたの本分が悪影響を受けることはなく、しっかりと本分を尽くすことができます。そして祈り、調整を続けるならば、あなたの状態は正常さを増し、その後は本分を尽くす能力が向上していきます。

『キリストの言葉の記録』より

114. 神があなたに何を求めようとも、あなたはそれにあなたのすべてを捧げさえすればよい。最終的に神の前にあなたの忠誠心を示し得ることが望ましい。玉座にいる神の満足そうな笑みを見ることが出来る限り、たとえ死に際しても、あなたは微笑みながら目を閉じられるはずである。あなたは地上にいる間に神のために最後の本分を果たさなければならない。昔、ペテロは神のために逆さ磔にされた。しかし、あなたは最後に神を満足させ、神のために持てるエネルギーのすべてを使い尽くすべきである。神に作られた者は神のために何ができるだろう。そこで、あなたはすぐにでも神の主宰に身を委ねるべきである。神が喜び、満足している間に、神が望むことを何でもしてもらおうではないか。人間には不平を言う権利などないのだから。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第四十一章」より

115. 現在、あなた方が達成するよう要求されている事は、追加の要求では無く、人間の本分であり、すべての人々が行うべき事である。あなた方が自分の本分を尽くすこと、それを十分に行うことさえもできないのであれば、それは自らに問題を招くことではなかろうか。あなた方は死を招いているのではなかろうか。あなたは、どうして未来や将来の展望を期待することなどできようか。神の働きは人類のためのものであり、人間の協力は、神の経営のためのものである。神が為すべき働きを全て行われた後、人間



は惜しむことなく実践し、神と協力することを要求されている。神の働きにおいて、人間は努力を惜しまずに、自分の忠誠を捧げ尽くすべきであり、数多くの観念に耽ったり、受動的にただ座って死を待っていてはならない。神は人間のために自らを犠牲にできる。それでは何故、人間は自分の忠誠を神に捧げられないのであろうか。神が人間に対して心と思いをひとつにしているのであれば、何故人間は少しばかり協力できないのであろうか。神が人間のために働きを行うのであれば、何故人間が神の経営のために、自分の幾つかを実行できないのであろうか。神の働きは現在まで長期にわたり続いているが、あなた方は見ているだけで行動せず、聞くだけで動こうとしない。このような人々は滅びの対象ではなかろうか。神は既に自身の全てを人間のために捧げたが、それではなぜ人間は今日、熱心に自分の本分を尽くすことができないのだろうか。神にとって、その働きは第一優先であり、神による経営の働きは極めて重要なことである。人間にとっては、神の言葉を実践し、神の要求を満たすことが第一優先である。あなた方は皆、それを理解すべきである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

## (X) 神を畏れ悪を避けることについての言葉

116. まず、神の性質が威厳であり怒りであることは、わたし達全員が知っている。神は誰かに殺される羊ではなく、ましてや人間の思い通りになる操り人形などではない。神は人間の言いなりになる空気のような存在でもない。あなたが神の存在を本当に信じているならば、神を畏れる心を持ち、神の本質を怒らせてはならないことを知る必要がある。この怒りを引き起こすものは、言葉かもしれないし、考えやあるいは下劣な行動かもしれない。あるいは穏やかな行動、人間の目と倫理から見て容認できる行動、教義、理論などに起因する場合がある。しかし、あなたがひとたび神の怒りに触れると、あなたの機会は失われ、あなたは終わりの時を迎える。それは極めて悲慘なことである。神に反することが許されないということを理解していなければ、あなた方は神を畏れず、常に神に反している可能性がある。どのようにして神を畏れるかを知らなければ、神を畏れることは出来ず、どのように神の道を歩み、神を畏れ、悪を避ければよいかわからない。それを知った後は、神に反してはならないことを意識し、神を畏れ、悪を避けるとは何かを知ることが出来るであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

117. 神の性質を理解しなければ、神のためにあなたが行うべき働きを成すことは不可能である。神の本質を知らなければ、神に対する畏怖および畏敬の念を保つことも不可能であり、いいかげんな形式主義と投げやりな態度だけで、さらには救い難い冒涇のみが残るであろう。神の性質を理解することは極めて重要であり、神の本質についての認識は疎かにできないものの、これを徹底的に調べ、掘り下げて考える者はいなかった。わたしが発布した行政を皆が見過ごしているのは明らかである。神の性質を理解しなければ、神の性質を簡単に犯すことになる。このような悪行は、神自身を激怒させることに等しく、最終的には行政に触れるだろう。ここで認識すべきことは、神の本質を知るときに神の性質を理解できること、そして神の性質を理解することは行政を理解することに等しいということである。もちろん、行政の多くは神の性質が関わるものであるが、それらに神の性質の全てが表されているわけではないため、神の性質をさらによく理解することが必要となる。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質を理解することは極めて重要である」より

118. 愛は神の本質の一部であり、また神は全ての人間に憐れみを与えるが、神の本質が威厳でもあることを人間は軽視し、忘れてしまう。神に愛があることは、人間が自

由に神に反することが可能であり、神には感情も反応も無い、ということではない。神に憐れみがあることは、神による人間の取り扱いに原則が無い、ということではない。神は生きており、現実存在する。神は想像上の操り人形などでは無い。神は存在するので、人間は神の心の言葉を注意して聞き、神の姿勢に注意し、神の感情を理解する必要がある。人間は、人間自身の想像により神を定義したり、人間が神に関して思うことや望むことを神に強制したり、神に人間の流儀で人間の取り扱いかたを考えさせたりしてはならない。そのようなことをするなら、あなたは神の怒りを買ひ、神の怒りを試し、神の威厳を挑発しているに等しい。したがって、あなた方がこの問題の重要性を理解した後は、あなた方一人ひとりが自分の行動に注意し、用心することを勧める。自分の言葉に注意し、用心すること。あなた方が神をどのように扱うかについて、注意し、用心すればするほど良い。神の姿勢が分からない場合、不注意に発言したり、行動したり、レッテルを貼ったりしないこと。更に、みだりに結論を出さず、待つことと求めることが必要である。それもまた、神を畏れ、悪を避けることの現れである。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

119. 神を畏れるとは、どのようなことなのか。また人はいかにして悪を避けられるのか。

「神を畏れる」とは、得体の知れない恐れや恐怖でも、回避することでも距離をおくことでもなく、偶像化することでも迷信でもない。「神を畏れる」こととは、むしろ、敬慕、尊敬、信頼、理解、思いやり、服従、献身、愛であり、無条件かつ不平のない礼拝、報い、帰服である。神に関する真の認識なくしては、人間に真の敬慕、真の信頼、真の理解、真の思いやりと服従は存在せず、ただ恐怖と不安、懷疑、誤解、回避、逃避があるのみである。神に関する真の認識なくしては、人間に真の献身や報いはあり得ない。神に関する真の認識なくしては、人間に真の礼拝や帰服はあり得ず、盲目的な偶像化と迷信があるのみである。神に関する真の認識なくしては、人類は神の道に沿って行動することも、神を畏れることも、悪を避けることもとうてい出来ない。反対に、人間が関与するあらゆる活動や行為は、反抗や挑戦、神についての中傷的な非難や中傷的な裁き、そして真理や神の言葉の真の意味に反する悪行に満ちるであろう。

いったん真に神を信頼すると、人類は真に神に従い、神を頼る。真に神を信頼し、頼ってはじめて、人類は真の理解と認識を得る。神に関する真の理解には、神に対する真の思いやりが伴う。神に対する真の思いやりがあってはじめて、人間は真に服従できるようになる。神に対する真の服従があってはじめて、人類は真に献身することができる

。神に対する真の献身があってはじめて、人類は無条件に、不満なく報いることができる。真の信頼と依存、真の理解と思いやり、真の服従、真の献身と報いがあってはじめて、人類は神の性質と本質を本当に知り、創造主の身分を知ることができる。創造主を本当に知ってはじめて、人類は真の礼拝と帰服を自らのうちに目覚めさせることができる。創造主に対する真の礼拝と帰服があってはじめて、人類はその悪の道を脇へ置くこと、つまり悪を避けることが本当にできるようになる。

これらのことが「神を畏れ、悪を避ける」ことの全過程を成し、またこれらが神を畏れ、悪を避けるということの全容であり、それは神を畏れ、悪を避けることに達するために辿らなければならない道である。

『言葉は肉において現れる』の「神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道」より

120. 何時の時代においても、神はこの世で業を行う時、真理を伝える言葉を人間に与える。こうした真理は、人間が守るべき道、通るべき道、神を畏れ、悪を避けられるようにする道、生活や人生の旅路の中で実践し、そして遵守すべき道として機能する。これが、神がこれらの言葉を与える理由である。神に由来するこれらの言葉は、人間が守るべきものであり、人間にとって、それを守ることはいのちを授かることを意味する。人間がそうした言葉を守らず、実行せず、人生を神の言葉通りに生きなかった場合、その者は真理を実行していないことになる。そして、人間が真理を実行しなかった場合、人間は神を畏れず、悪を避けておらず、神に満足してもらえない。ある者が神に満足してもらえない場合、その者は神の賞賛を得られないので、その者には良い結末が無い。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

121. いのちにおいて成長しようとするときに、理解しなければならない主な事とは何ですか。それは、神の語る言葉のすべてにおいて、それがどの側面に触れていようと、人に対する神の要求と基準は何かを突き止め、その範囲で実践の道を求めなければならないということです。そしてそれを用いて自分の生活における行動とものの見方を調べ、神の要求と基準に対する自分の状態と表現のすべても調べるのです。更に重要なこととして、これらの基準に従って、どのように物事を行うべきか、本分を尽くす過程においてどのように神の旨を満たすべきか、どのように神の要求と完全に一致して行動できるかを決めなければなりません。真理の現実を有する人となりなさい。言葉や教理、宗教理論を身に付けるだけの人であってはなりません。霊的であるふりをしてはなりません。

せん。偽りの霊的人間になってはいけません。神の言葉を実践し用いることに集中し、自分自身の状態を比較し、反省し、あらゆる状況に対処する際の観点と姿勢を変えなさい。最終的に、どのような状況にあっても神を畏れ敬うことができるようになり、自分の考えに沿って軽率な行動を取ったり、自分の欲求に従って物事を行なったり、墮落した性質の中に生きたりすることがなくなります。代わりに、言動のすべては神の言葉にもとづき、真理と一致するものとなります。そのようにして、あなたは徐々に神への畏敬を覚えるようになります。神を畏れる心は真理を追い求めるあいだに生まれます。それは抑制からは生まれません。自制が生むのは、一種類の振る舞いだけであり、それは外的な拘束です。神への純粋な畏敬は、神を信じる過程で真理を理解し、真理に従って実践し、徐々に自分の墮落した性質を減らし、少しずつ自分の状態を向上させて神の前に頻繁に来られるようになることから生まれます。このような過程が純粋な畏敬の念を生むのです。そうすると、神を畏れ敬うことの意味をあなたは知り、そしてまた、真に神を畏れ、神への畏敬の念を示すようになるには、どのような態度を、どのような状態を、どのような性質を有するべきかに気づくのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理を実践する者だけが神を畏れる心を持つ」より

122. あなたは頻繁に神の前に出て、神の御言葉を飲食し、神の御言葉について熟考し、神による鍛えと導きを受け入れなくてはなりません。神があなたのために備えたあらゆる環境、人、物事に従うことができなくてはならず、完全に理解できない事柄に関しては、真理を求めつつ頻繁に祈らなければなりません。神の旨を理解して初めて、進むべき道を見つけることができるのです。あなた方は神を畏れ、すべきことを慎重に行なわなければなりません。頻繁に神の前で平安でなくてはならず、放蕩であってはなりません。少なくとも、何かが自分に起こったなら、最初の反応は落ち着き、そしてすぐに祈ることであるべきです。祈り、待ち、求めることで、神の旨を理解するのです。これは神に対して畏敬の念を表わす態度ではありませんか。もし心の奥底で神を畏れ、神に従い、神の前に静まって神の旨を把握できるならば、そのような協調と実践により、あなたは守られます。試みに遭遇することもなく、神の経営の働きを妨害することもなく、神に嫌悪をかき立てるようなことをすることはありません。神を畏れる心があるので、神を不快にさせることを恐れます。試みに遭遇した瞬間、あなたは神の前に生き、恐れに震え、あらゆることにおいて神に従い神を満足させることを望みます。このように実践し、頻繁にこのような状態に生き、頻繁に神の前で平安であって初めて、あなたは無意識に自分自身を試みや悪から遠ざけることができるのです。

『キリストの言葉の記録』の「常に神の前で生きてのみ、救いの道を歩くことができる」より

123. 神の道を歩むことは、表面的な規則に従うことではない。それは、ある物事に直面した時、まず、それを神の采配によるもの、神から与えられた責任、あるいは神から委ねられた物事であることを認識し、また直面したその物事に対し、それを神の試練であるとすら捉える必要がある、ということである。この問題に直面する時、あなたには一定の基準がなくてはならず、それが神から与えられたものであると考える必要がある。自分の責任を果たし、神に忠誠を尽くすために、その問題をどう扱うかを考慮する必要がある。神の怒りを買ったり、神の性質を侵害したりせずにそれを実行する方法を考慮する必要がある。…神の道を歩むためには、自分自身に関する事柄や、自分の周囲で起こる事柄は、小さいことでも、すべてないがしろには出来ない。自分がそれに注意すべきであるかどうかを問わず、問題に直面している限り、それを無視してはならない。そうした事柄は、全て神からの試験であるとみなす必要がある。こうした姿勢は、どのようなものであろうか。あなたが、こうした姿勢をとっている場合、それにより、ある事実が確認される。すなわち、あなたの心が神を畏れていること、そして悪を避けることを望んでいるということである。あなたに、神に満足してほしいという願望があるなら、あなたが実行する事柄は神を畏れ、悪を避ける基準とかけ離れていることは無い。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

124. 常に神は神を真に信じる者の心にあり、そうした者の内部には、常に神を崇め愛する心がある。神を信じる者は、注意深く慎重な心持ちで行動し、自分の行動全てが神の要求に従い、神の心を満たすことが出来るものである必要がある。そうした者は、強情であってはならず、自分が望むままに行動してはならない。そうした事柄は聖なる礼節に不適である。人間は神の旗印を誇示して暴れ回ったり、威勢を張ったり、詐欺を働いたりしてはならない。そうした行いは最も反逆的な行為である。家族の間には規則があり、国には法があるのだから、神の家族には、どれほど厳格な基準があるだろうか。当然行政命令があるのではなかろうか。人間は、何でも望むままを行うことが出来るが、神の行政命令を思うままに変えることはできない。神は人々に自身を侵害させることを許さず、人間を死に至らしめる神であることを、本当にわきまえているだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「真理を実践しない者に対する警告」より

125. ヨブの神への畏れと従順は人類の模範となるものであり、彼の完全さ正しさは人間が持つべき人間性の頂点である。彼は神を見ることはなかったが、神は存在すると

認識しており、ゆえに神を畏れた。そして神への畏れのゆえに、彼は神に従うことができた。彼は神が自分の持てるもの全てを自由に上げ下げすることを許し、そしてそのことを不満に思うこともなく、神の前にひれ伏し、たとえその瞬間に神が自分の肉体を取り上げることがあろうとも、不満など言わずに喜んで受け入れると言ったのである。彼の行動全てが彼の完全で正しい人間性によるものだった。つまり、彼の純粋さ、正直さ、優しさの結果、神の存在に対する経験と確信は揺らぐことがなかったのである。そしてこのようなものが基礎となって、神による導きと彼が万物において目にしてきた神の行いに沿って、自分にすべきことを課し、神の前での考え方や振る舞い、行いや行動の原則を標準化したのである。時間とともに、ヨブの経験は、神に対する現実的で実質的な畏れをヨブの中に生じさせ、悪を避けるようにさせた。これがヨブの誠実さの根源となっているものである。ヨブは正直で、汚れない、優しい人間性を持っており、実際に神を畏れ、神に従い、悪を避けるという経験をしており、それと同時に「ヤーウェが与え、ヤーウェが取られたのだ」という認識を持っていた。これらの理由だけで、サタンのあれだけひどい攻撃を受けながらも固く立ち、神の証人となることができた。またこれらの理由だけで、神の試練を受けた時にも神を失望させず、神に満足する答えを返すことができたのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

126. ヨブは神の顔を見たこともなければ神の声を聞いたこともなく、ましてや神の業を直接経験したこともなかった。それでもヨブの神に対して抱く畏れと、試練の中でも証しとなったことは人々が認めており、神に愛され、喜ばれ、称えられた。人々はヨブをうらやみ、高く評価し、さらに讃美を捧げた。ヨブの人生自体が偉大であったわけでも非凡であったわけでもない。他の人達と変わらない、普通の生活であった。日が昇れば仕事に出かけ、日が落ちると帰宅して休息した。他の人たちと違っていたのは、その数十年間に、ヨブが神の道を見分けることができるようになり、神の偉大な力と主権を知るようになり、それが他の人が誰も成し得ないほどであったということである。他の人たちよりヨブが賢かった訳でもなく、ヨブの生き方が執着心の強いものであったわけでもない。ましてや彼に何か隠れた能力があったなどということはない。だがヨブには正直で、心優しく、正しく、公正と義を愛し、善きものを愛するという性格があった。これらはいずれも普通の人間にはないものである。ヨブは愛と憎しみを区別し、義を見分けることができた。自分の信じるものを譲ることも変わることもなかった。自らの考えに喜びを感じていたため、地上での普通の生活を送る中で神の驚くべき業を見るこ

とができ、神の偉大さ、聖さ、義を見ることができ、人間に対する神の労り、恵み深さ、守りを知り、至高の神が褒めたたえられるべきであり、主権を握っていることを知ることができた。他の誰も獲得できなかったこれらのことをヨブが獲得することができた第一の理由は、ヨブが純粋な心の持ち主であり、ヨブの心は神に属しており、創造主により導かれていたからである。第二の理由はヨブが追求したものである。ヨブは全き者となること、天の心と一致することを求め、神に愛されて悪を避けることを追い求めた。神を見ることが神の言葉を聞くこともできなかったヨブがこれらのものを獲得し、追い求めたのである。神を見たことはなかったが、神がどのように全てを支配するかをヨブは理解し、また、神が全てを支配するその知恵を理解するようになったのである。ヨブは神の語る言葉を聞いたことはなかったが、人に報いることも取り上げることも神によるものであると知っていた。ヨブの人生は普通の人のそれと何ら変わらなかったが、それだからと言って全てのものにおける神の主権に関する認識を妥協せず、神を畏れ悪を避ける道への服従を妥協することはなかった。ヨブの目には、全てのものにおける法則は神の業で満ちており、神の主権は人生のいたるところで確認できるものであった。ヨブは神を見たことがなかったが、神の業をいたるところで認識することができ、彼の地上の生活のあらゆるところで、神の驚くべき不思議な業を見ることができ、神の不思議な計画を知ることができた。神が隠していたことと無言であったことはヨブが神の業を認識する上で障害とはならず、全てのものにおける神の主権を知る障害にもならなかった。ヨブの人生は、あらゆるものの中にあって隠されている神の主権と采配を認識する日々であった。それだけでなく、ヨブは日々の生活の中で、あらゆるものの中で無言でありながら、万物の法則を支配することで心の声と言葉をあらわす神の、心の声と言葉を聞き、理解した。人々がヨブと同じ人間性と追求する姿勢を持っていたならば、彼らもヨブと同じ認識と知識を得ることができ、全てのものにおける神の主権に対する理解と知識をヨブ同様に獲得することができるであろうことがこれで理解できる。神はヨブに現れても語ってもいないが、ヨブは全き者となることができ、正しいものとなることができ、神を畏れ悪を避けることができた。つまり、神が現れることも直接語ることもなくても、全てのものにおける神の業と全てのものに対する神の主権により、人間は神の存在、力、そして権威を認識することができ、神の力と権威は人間に神を畏れさせ悪を避けさせるのに十分だということである。



127. 「神を畏れ、悪を避ける」ことと神を知るとは、無数の線で綿密に繋がっており、またその関連性は自明である。悪を避けたいならば、人はまず神を真に畏れなければならない。神を真に畏れることを望む者は、まず神に関する真の認識を得なければならない。神に関する真の認識を得たいのであれば、まず神の言葉を体験し、神の言葉の現実の中に入り、神の懲らしめと訓練、神の刑罰と裁きを経験しなければならない。神の言葉を経験したいと望むのであれば、まず神の言葉と向き合い、神と顔を合わせ、人、出来事、物事に関連するあらゆる環境の中で神の言葉を体験する機会を神が備えてくれるよう求めなければならない。神や神の言葉と向き合うことを望むのであれば、人はまず単純かつ正直な心を持ち、いつでも真理を受け入れる準備をし、苦難に耐える意志、悪を避ける決意と勇気、真の被造物になりたいという志を持たなければならない。……このようにして、一步一步前進すれば、あなたは神にますます近づき、あなたの心はますます純粋になり、あなたの人生と生きる価値が、神に関わる認識とともに一層有意義で、輝かしいものとなってゆくだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道」より

## (XI) 人間と神の関係についての言葉

128. 神の性質というのは隠されたものではなく、いつでもわたしたちに開かれているものだ。というのは、神は決して意識的に何人を避けるのではなく、自分が人に知られないように、あるいは理解されないように敢えて自分を隠すようなことはしないからである。神の性質はいつでも開かれており、いつでも一人ひとり率直に対面しているのである。神が経営する期間、神は全ての人に相対して働くのである。そして、神の働きは一人ひとりに対して行われている。神がその業を行うにあたって、神は絶えず自身の性質を現し、自身の本質と、神であるもの、神の持っているものを用いて一人ひとりを導き、そして一人ひとりに与える。どのような時代や段階にあっても、状況の善し悪しにかかわらず、神の性質はいつでも一人ひとりに対して開かれており、神の持っているもの、神であるものは一人ひとりに対して開かれている。それは神のいのちが絶えることなく人間に与え続け、また人間を支え続けているのと同じである。にも関わらず、ある人たちにとっては神の性質は隠されたもののように思えるのである。なぜだろうか。それは、彼らが神の働きの中で生き、神に従っていたとしても、神をもっと深く知りたいと願ったり、ましてや神と親しくなりたいと思ったりしたことがないからである。そのような人たちにとって、神の性質を理解するということは、彼らの終わりの時が近づいているということであり、神の性質によって裁かれ、罪に定められるということである。彼らは神自身やその性質を知りたいと願ったことがなく、神の意志についてのより深い理解や知識も切望しない。彼らは意識的に協力することで神の意志を理解しようとは思わないのである。彼らは自分がしたいと思うことを行い楽しむことに飽くことがない。彼らが信じているのは自分にとって都合のいい神、自分の想像や観念の中にのみ存在する神であり、日々の生活から離れないでいてくれる神なのである。しかし本物の神自身となると、彼らは完全に拒絶する。神を理解しようという気もなく、神に目を向けることもなく、神とより親しくなろうなどとは思わない。彼らは神が語った言葉を、自分自身の上辺を飾って綺麗に包装するための表現に用いているのである。そして、そのことで自分が「成功している信者」であり、自分は本心から神への信仰を持っていると思っているのである。しかし実際には、彼らが導かれているのは自分自身の想像や観念、さらにいえば、自分のイメージにあった神なのである。一方で、本物の神自身は彼らとは全く関係がない。というのも、もし彼らが本物の神とその性質を理解し、神の持っているものと神であるものを理解するなら、このことは彼らの行動や信仰、そして求めていることは罪に定められることを意味するからである。それゆえに彼らは神の本質を

理解しようとはせず、神自身について、そして神の意志と性質についてよりよく知るために自ら求めたり祈ったりしようとはしないのである。むしろ彼らは、神が、人間が作り上げた中身の無いぼんやりとした存在であることを望んでいるのである。彼らが望んでいるのは、自分の想像通りの神で、自分たちの思うとおりになり、限りなく与え、自分がいて欲しい時にはいつでもいてくれる神なのである。彼らが神の恵みを享受したいと思うときには、神自身ではなく、その恵みだけを求める。彼らが神の祝福を必要とするときには、神自身ではなく、その祝福だけを求める。彼らが逆境にあるときには、自分たちを励まし、安全網となってくれることを求める。このような人々の神への認識は恵みと祝福の範囲を出ることがない。また、彼らの神の働き、神の性質、そして神自身への理解は自分の想像の中だけのものであり、字句と教義上だけのものである。しかし神の性質を本当に追い求める人たちもいる。それは心から神自身を知りたいと思い、神の性質と神の持っているもの、神であるものを本当に理解したいと願っている人たちである。そのような人たちは、真理の現実、そして神の救いを求め、神が自分を征服し、救い、完全にしてくださることを望んでいる。そのような人たちは心から神の言葉を読み、心から自分の周りの人や物事、そして状況、神が準備した事を認識し、心から祈り、求めるのである。彼らが欲しているのは何よりも神の意志を知ることであり、神の性質と本質を理解することだ。そうすれば彼らが二度と神に反することなく、経験を通して神の素晴らしさや神の真実の一面をさらに知ることができるからである。そして、最早想像や概念や不明瞭さの狭間に生きることはないであろうまさに正真正銘の神が彼らの心の中に宿り、神が心に居場所も又確保するであろう。彼らが神の性質と本質を切実に理解することを願い追求するのは、人間の経験においても、神の性質と本質は常に必要なものであり、人生を通していのちを与えるものだからである。一旦神の性質を理解したら、神をより畏れ、神の計画に協力し、神の意志をより配慮し、持てる力の全てで自分の本分を果たすことができるようになる。神の性質に対する人間の態度には2種類ある。一つ目は、神の性質を理解したくないという態度である。彼らは口では神の性質を理解し、神自身を知り、神の持っているものと神であるものを知りたいと言い、心から神の意志に認めたいと言うのだが、心の奥底では神が存在しなければよいと思っている。というのは、彼らは一貫して神に不従順で、神に抵抗しているからである。自分の心の中の支配権を神と争い、しばしば神の存在を疑ったり拒否すらしたりする。彼らは神の性質あるいは本物の神が自分たちの心を支配することを望まない。彼らの望みは、自分の欲望が、想像力が野心が満たされることだけである。つまり彼らは神を信じ、従い、家庭や仕事を神に捧げてはいるかもしれないが、悪の道を進み続けるのである。ひ

どい場合には献金を盗んだり浪費したり、私生活で神を呪う言葉を言ったりする者もあれば、自分の地位を利用して繰り返し自分に有利な証言をして自分の立場を強化し、人や地位に関して神と争おうとするのである。彼らはあらゆる手段を用いて人々に自分を崇拜させ、常に人々の心を虜にし、支配しようとする。さらにひどい場合には意図的に彼ら自身が神であるかのように扱われると考えさせるように誤って導くのである。彼らは自分が墮落しているとは決して言わない。自分も墮落した高慢な存在であり、崇拜の対象にはなりえないことを人々に決して伝えない。また彼らがどれだけ立派にやっているとしても、それは神の行ったことのゆえであり、単にすべきことをしているに過ぎないとは言わない。なぜ彼らはこの事実を伝えないのか。それは人々が自分に見向きもしなくなるのを恐れているからである。このような者は神を理解しようとしたことがないので、決して神をあがめず、神の証人とはならないのである。神を理解することなく神を知ることはできるだろうか。不可能だ。ゆえにこの「神の働き、神の性質、そして神自身」というテーマはシンプルなようだが、人によってその意味するところは異ってくるのである。このテーマは、真理の現実を追い求め、神の意志を知るために神の前にしばしば立つものにはまさに魚に水だが、神に従わず、神に抵抗し、神に敵対する者にとっては罪の責めをもたらすものだ。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 1」より

129. 神が目覚めた時、神が最初に考えたことは、常に神とともに生きる人、すなわち命ある人間を創ることであった。この人間は神の言葉を聞き、神が信頼して話すことのできる者であった。次に、神はまずひと握りの土を取り上げ、神が考えていた最初の人間を創り、その人間をアダムと名付けた。命を持ち、息をする人間を創った後、神は何を感じたであろうか。神は、ともに過ごす愛すべき人間が居ることの喜びを、初めて感じたのである。また神は、父としての責任と、それに伴う憂いを初めて感じた。この生ける人間という存在は、神に幸福と喜びを与えたので、神は初めて慰めを感じた。これが、神が自身の考えや言葉だけでなく、自身のふたつの手によって実現した最初の業であった。こうした命を持ち、息をして、肉と血で創られた身体を持ち、神と話ができて人間の存在が神の前に現れた時、神は嘗てない喜びを感じた。神は責任を真剣に感じ、人間という生き物に心惹かれるだけでなく、人間の行動すべてが神を感動させ、神の心を和ませた。こうして、この人間という生き物が神の前に現れたときに初めて、神は、更なる人間を得たいという考えを持った。こうした一連の出来事は、こうした神の当初の考えから始まったことである。神にとって、こうした出来事は初めてのことであ

たが、その当初の出来事においては、神が感じたのが喜びであれ、責任であれ、憂いであれ、神が感じたことを分かち合う相手が、神には存在しなかったのである。この時以降、神は、それまで感じることのなかった、真の寂しさと悲しさを感じた。神は、人間が神の愛と憂いや、神の人間に対する意志を受け容れることも理解することも出来ないと感じたので、神は引き続き悲しみと心の痛みを感じていた。神は人間に対してこのようなことを行ったにもかかわらず、人間はそれに気付くことがなく、理解することもなかった。人間が神に与えた喜びと慰めは、幸福のほか、ほどなくして悲しみと寂しさも神に与えたのであった。以上が、この時点で神が考え、感じていたことである。そうした事を行っている間、神の心には憂いが入り交じり、それは喜びから悲しみへ、そして悲しみから痛みへと変化していった。神が望んだのは、人間に神の心にある事柄を早急に知らせて、神の旨を理解させることのみであった。そうすれば、人間が神に従うようになり、神と調和するようになる。人間は神の言葉を聞いてなお黙していることがなくなり、神の業をどのように支援するかを知らずにいることはなくなり、そしてなによりも、人間が神の要望に無関心でいることはなくなるであろう。こうした神が最初に完了した事柄は、極めて有意義であり、神の経営計画と現在の人間にとって大いに有意義であった。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

130. 創世記第二章15～17節 ヤーウェ神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。ヤーウェ神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

この箇所からあなたがたは何かを学んだだろうか。この箇所をあなたがたはどのように感じただろうか。なぜ「アダムへの神の命令」を聖書から取り上げるのだろうか。神とアダムが心に描けただろうか。想像してみてほしい……もしあなたがたがこのシーンの中にいたら、神をどのような存在と思うだろうか。あなたがたはどのような感情を抱くだろうか。これは感動の、心温まるシーンである。そこには神と人間しかおらず、その関係の親密さは羨ましいほどだ。神のあふれんばかりの愛は惜しみなく人間に注がれ、人間を包んできた。人間は純粹で、無邪気で、気楽、気ままで、神に見守られて満足して生きている。神は人間を心配してくださり、そして人間は神の護りと祝福の中で生きていた。人間の全ての言動は、神と密接に関係し、神と切り離すことはできない。

この命令は神が人間を創造以来、最初に与えた命令だったといえる。ではこの命令は何を表しているのだろうか。それは神の意志を表しているが、同時に神の人類に対する懸念も表している。これは神の最初の命令であり、そしてこの時初めて神は、人間のことを心配した。どういうことかといえば、神は人間を創った瞬間から、人間に対して責任を持っていたということである。その責任とはどのようなものだろうか。それは人間を守り、顧みるという責任である。人間が神を信頼し従うことを神は望んだ。そしてそれは神が人間に抱いた最初の期待でもある。神はその期待とともに、次のように言った。「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。このシンプルな命令に神の意志が現れている。そして神の人間に対する心配をすでに表していたこともわかる。被造物にあって、アダムだけが神の姿に似せて造られ、アダムだけが神の息を吹き込まれ、神と歩み、神と対話できる存在だった。それゆえに神はそのような命令を人間に与えたのである。神はこのことを命じたとき、非常に分かりやすい形で人間が何をすればよいのか、そして何をしてはいけないのかを伝えた。

この極めてシンプルな言葉から、神の心をうかがい知ることができる。わたしたちはここからどのような神の心を見て取れるだろうか。神の心に愛はあるだろうか。そこに神の配慮は現れているのだろうか。この聖書箇所を示されている神の愛と配慮は、頭で理解できるだけでなく、実際に感じるができることだ。そうではないか。わたしは今これらのことを述べてきたが、あなたがたはまだ、これが単なる言葉だと思うだろうか。それほど簡単なものではないのではないか。このことに気づいたことが今までにあるだろうか。神がもし直接あなたにこれらのことを語ったら、あなたはどのように感じるだろうか。もしあなたが無慈悲で、心が冷え切っているなら、何も感じないだろうし、神の愛も理解できず、神の心を理解しようとしないだろう。しかしもしあなたに良心があり、人間性があるなら、見方は違ったものになる。もしそのような人間であるならば、温かみを感じ、愛され守られていると感じ、また幸せを感じるができるだろう。違うだろうか。これらのことを感じるならば、あなたは神に対しどのように行動するだろうか。神とのつながりを感じるだろうか。心の底から神を愛し、敬うだろうか。あなたの心は神に近づくだろうか。神の愛が人間にとってどれだけ重要かということが、ここから見て取れるだろう。しかしそれよりさらに重要なのは、人間がその神の愛を深く知り、理解することである。

131. この「ヤーウェ神は人とその妻とのために皮の着物を造って、彼らに着せられた」という部分では、アダムとエバと共にいた神は彼らにとってどのような役割をしたのだろうか。人間が2人しかいないこの世界で、神は自身をどのような役割を持つ者として現しただろうか。神としての役割であっただろうか。…あなたがたの中には、神はアダムとエバの家族の一員として現れると言う人もいれば、神は家族の長として現れると言う人もあり、また、親として現れると言う人もいる。これらの答えは全て適切だ。だが、わたしが言おうとしていることは何か。神はこの2人の人間を創り、2人を自身の友として扱った。2人の唯一の家族として、神は彼らの生活を見守り、基本的な必要において面倒を見たのである。ここでは、神はアダムとエバの親として現れている。その間、人は神がどれだけ高尚であるか見ることをせず、神の至高、その奥義、そして特に怒りや威厳を見ることをしなかった。人が見るのは神の謙遜、慈愛、人間への思い、神の責任及び配慮である。神の態度やアダムとエバの扱い方は、人間の親が自分の子どもに対して心配するものと同種である。人間の親が自分の息子や娘を愛し、世話をし、面倒を見るのに似ている――現実的で、見ることができ、触れて感知することができる。自身を高く、威厳のある者として位置付けるのではなく、神は人間のために動物の皮で衣服を作ったのである。その毛皮のコートが、裸の身体を覆うためだったか、寒さから守るためだったかは問題ではない。要するに、人間の体を覆うための衣服は神が自分の手で作ったということだ。人間が想像するような、神の考えだけで衣服を作ったり、奇跡的な方法で作ったりしたのではなく、むしろ神にはできない、神がするべきないと人が考えるような方法で作ったのである。そのような簡単なことを敢えて言うまでもないと思う人もいるかもしれない。しかし神に従ってはいたが、神についてぼんやりとしたイメージしか持っていなかった人たちにとっては、この箇所を見ることで神の真実さ、魅力、忠実さ、謙遜をはっきり見るようになる。そして自分が位の高い、力ある存在と考えるどうしようもなく高慢な人たちに、神の真実さや謙遜の前に自分を恥じ入らせ、自惚れていたその頭を下げさせる。ここで現されている神の真実さや謙遜を通して、神の魅力を知るようになる。人の心の中の大きく、愛すべきであり、全能である神が小さく、醜い、吹けば飛ぶようなものになってしまっている。この聖句を読み、ストーリーを聞くと、このようなことをした神をあなたは見下すだろうか。そういう人もいるかもしれない。しかしある人にとっては全く逆で、神を真実で愛すべきとして捉え、その真実さと愛すべき性質に心動かされるだろう。本当の神の側面をより知っていくことで、神の愛、神が自分の心の中にいてもらえることの重要性、そして神がどんなときも共にいてもらえることに、より深い理解を得るようになる。

132. 創造のはじめから今日まで、人間だけが神と対話できる存在である。つまり、全ての生き物および被造物の中で、人間だけが神と対話できるということである。人間には聞くための耳があり、見るための目があり、言葉を持ち、自分の考え、そして自由意志を持っている。人間は神が語るのを聞き、神の心を理解し、神に与えられた任務を受け容れるために必要なもの全てを持ち合わせており、そのような人間に対して、神は自身のあらゆる望みを置き、自身と同じ心を持ち、語り合うことのできる友になりたいと考える。神が経営を始めて以来、神は人間にその心を捧げてほしい、そうすることで清められ、整えられ、神が満足できるものとなり愛されるものとなり、神を敬い悪を避けるものとなって欲しいと願っている。神は人間がそのようになる日を心待ちにしている。

133. 神は、人間を経営し救うことが、何よりも重要であると考え。神はこうした業を、自身の考えのみで行うのでもなく、また言葉のみ行うのでもなく、とりわけ何気なく行うのではない。神は、こうした業のすべてを計画に基づき、目的をもって、基準を定め、神の旨にしたがって行う。こうした人間を救う業は、神と人間の両方にとって極めて重要であることは明白である。業がいかに困難であったとしても、障害がいかに大きかったとしても、人間がいかに弱かったとしても、あるいは人間の反逆心が強かったとしても、神にとっては、そのいずれも困難とはならない。神は絶え間なく丹念な努力を続け、神が行う意向である業を経営する。また、神はすべてを計画し、すべての人間と、神が完了させたいと望むすべての業を経営しているが、そうした業はそのいずれも嘗て行われたことがない。神がそうした方法によって、人間を経営し救う大規模な計画に対して甚大な犠牲を払ったのは初めてである。神がこうした業を行っているうちに、神は、神の甚大な努力、神の中にある物事、神の存在、神の英知と全能たる存在、そして神の様々な性質について、人間に対し、少しずつ、かつ率直に示す。神は、従前行われたことがなかった啓示を、そうした事柄のすべてについて、少しずつ、かつ率直に行う。したがって、全宇宙において、神が経営し、救おうとする人間を除いては、神にそれほど近づき、緊密な関係を持つ生命体は存在しない。神の心において、神が経営し、救うことを望む人間が最も重要であり、したがって神はこうした人間を最も重要視する。たとえ神がこうした人間のために甚大な犠牲を払ったとしても、またこうした人間により神がひたすら傷つけられ、背かれたとしても、神はこうした人間を見捨てること



は決してなく、不平不満を言うことも後悔することもなく、神の業をひたすら続行する。これは、遅かれ早かれ人間は神の呼び声で目覚め、神の言葉により動かされ、神が創造主であることを認め、神のもとへ戻ることを、神が知っているからである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

134. 聖書を読んだことのある者は誰も、主イエスが生まれた時、多くの出来事があったことを知っている。これらのうち、最も甚大なものは、悪魔の王の狩りにより、その地域の2歳以下の幼児が虐殺された事件である。神は人間の中で受肉するにあたり、大きな危険を冒したことは明らかである。さらに、人間を救うという経営の業を遂行する上で、神が払った大きな代償もまた、明らかである。また、人間の中において、受肉した神が行った業に対して神が抱いていた大いなる希望も、明らかである。神の身体が人間の中で業を行うことが出来た時、神はどう感じたであろうか。人間は神がどう感じたかを、多少理解する必要があるだろう。神は神の新たな業を人間の中で発現することが出来たので、少なくとも神は幸せであった。主イエスが洗礼を受け、正式に業を開始した時、神は、長年にわたり準備をして待ち続けた末、遂に普通の人間の身体を身に付けて、人々が見て触ることの出来る血と肉を持つ人の姿で新たな業を行うことが出来るようになったので、神の心は幸福で満ち溢れた。神はついに、人間の身分で、人間と対面し、心と心で話をすることが出来るようになった。神はついに、人間の言葉で人間として、人間と対面することが出来るようになった。神は人間に施し、啓きを与え、人間の言葉で人間を助けることが出来るようになった。神は、人間と同じ食卓で食事をして、人間と同じ空間で生活することが出来るようになった。また神は人間がするように、さらに人間自身の目を通して、人間を見、物を見、全てのものを見ることが出来るようになった。神にとって、これは神が受肉して行った業の最初の成功であった。また、これは大いなる業の成功であったということも出来るであろう。無論、神が最も喜んだのは、この成功であった。この時神は、人間の中で行う業に、ある種の慰めを感じはじめていた。これらの出来事は、すべて実践的であり、自然であり、神が感じた慰めは、極めて確かなものであった。人間にとって、神の業の新たな段階が実現した時、神が満足した時というのは、すべて人間が神に近づくことが出来る時であり、人々が救いに近づくことが出来る時である。神にとって、この時は、神の経営計画が一段階先へと進み、更には神の旨が完全に達成される、神の新たな業の開始の時でもあった。人間にとって、そうした機会の到来は幸運であり、極めて良い事であった。神の救いを待つ者すべてにとって、これは極めて重要な知らせである。神が業の新たな段階を行う時、神は新た

な始まりを迎え、この新たな業と新たな始まりが人間に採り入れられた時とは、この業の段階の結果が既に決定し、達成され、神は最終的な効果と実りを知っている時である。またこの時は、こうした効果により神が満足し、無論神の心は幸福である。なぜなら、神の観点から見ると、神は探していた人々を既に見て、決めており、この人々の集団を既に獲得しているからである。この集団は神の業を成功させ、神に満足を与えることができるので、神は確信し、懸念を払拭でき、幸福を感じる。換言すれば、神の身体が人間の中で新たな業を開始することができ、神が行う必要のある業を障害なく開始し、神が全て達成したとを感じる時、神は既に終わりの時を見ている。その終わりの時のため、神は満足し、幸福な心でいる。神の幸福は、どのように表出されるか、想像がつくであろうか。神は泣くだろうか。神は泣くことができるだろうか。神は拍手ができるだろうか。神は踊ることができるだろうか。神は歌うことができるだろうか。神はどのような歌を歌うだろうか。無論、神は美しく感動的な歌、神の心の喜びと幸福を表出する歌を歌うことができる。神は人間に対して、自身に対して、そして万物に対して、その歌を歌うことができる。神の幸福は、あらゆる方法で表出されるが、それは全て普通のことである。なぜなら、神には喜びと悲しみがあり、神の様々な気持ちは、様々な方法で表出されるからである。これは神の権利であり、極めて普通のことである。これについて、その他のことを考えるべきではない。またあなたがたは自分自身の制約を神に対して想定して、神はこうすべきではない、ああすべきではないと述べたり、神のこの行動は良くない、あの行動は良くない、などと神に対して述べたりして、神の幸福やその他の感情を制限すべきではない。人間の心の中では、神は幸福になること、涙を流すこと、すすり泣くことなどなく、神が感情を表出することは有り得ない。このことについては、すでに二度述べたので、あなたがたはもはや神をそのような存在と考えてはおらず、神が自由であり開放されているものと考えていることと思う。それは非常に好ましいことである。今後あなたがたが、神が悲しんでいると聞いた時に、神の悲しみを真に感じること、神が幸せであると聞いた時に、神の幸福を真に感じること（少なくとも神が幸せである理由や神が悲しんでいる理由を明確に知ること）が出来るのであれば、また神が悲しんでいることが原因で悲しみを感じ、神が幸せであることが原因で幸せを感じることが出来るのであれば、神はあなたの心を完全に獲得しており、神との間には一切の障壁は存在しないであろう。あなたは人間の想像や考え、知識により神を制約しようとするのがなくなるであろう。この時、神はあなたの心の中に生き、その存在が鮮明になるであろう。神はあなたのいのちの神となり、あなたの全ての主となるであろう。

あなたがたは、こうしたことを熱望しているであろうか。あなたがたには、こうしたことを実現する確信があるであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

135. これらの喩えは、神が普通の人間となり、人間と共に生活し、通常の生活で用いられる言葉を使用し、人間の言葉を用いて人間と意思疎通し、人間に必要な物事を授けている、という考えを示している。神が受肉して人間の中で長期にわたって生活したとき、人間の様々な生活様式を経験し、目の当たりにした後、そうした経験は、神が、神の神性の言葉を人間性の言葉へと変換する際の参考となった。無論、人の子が生活の中で見聞きした事柄により、人の子の人間としての経験は豊富なものとなった。一部の真理や、神の旨を人間に理解させることを望んだ時、人の子は上記と類似の喩えを用いて、神の旨や神の人間に対する要求について人間に伝えることが出来た。これらの喩えは、すべて人間生活と関連しており、人間生活に無関係の喩えは一切ない。主イエスが人間とともに生活した時、イエスは農民が作物の手入れをしているのを見、毒麦とは何か、パン種とは何かを知っていた。またイエスは人間が宝を好む事を知っていたので、宝と真珠の喩えを用いた。さらにイエスは漁師が網を投げるのを頻繁に見るなどしていた。その他の喩えについても同様である。主イエスは、こうした人間生活における活動を見、またそうした生活を経験していた。イエスは通常の人間と全く同様に、人間が食べる1日3回の食事など、日々繰り返される活動を経験していた。イエスは一般的な人間生活を自ら経験し、その他の者の生活を見た。イエスがこうした事柄を目の当たりにし、自ら経験したときに考えたのは、どうすれば良い生活を送れるか、どうすれば一層自由で快適な生活を送れるか、といったことではない。主イエスが実際の人間生活を経験した時、主イエスは、サタンの腐敗に支配されサタンの領域で生活し、罪の中で生きる人々の困難、悲惨さ、そして悲しさを目の当たりにした。イエスが自ら人間生活を経験している時に、イエスは腐敗の中で生きる人々がいかに無力であるかを経験し、また罪の中で生き、サタンや悪による拷問のなかで迷う人々の悲劇を見て、経験した。主イエスがこれらの事を見た時、主はこれらの事柄を神性で見たであろうか、それとも人間性で見たであろうか。主イエスの人間性は実際に存在し、それは極めて鮮明であった。イエスはこれらの事を経験し、見る事が可能であり、無論イエスの本質、つまりイエスの神性においてもそうした事柄を見た。つまり、キリスト自身、人間であった主イエスがそれを見、見た事柄のすべてが、神が肉にあって行った業の重要性と必要性を自身に強く感じさせた。イエス自身は、受肉して行う事柄に対する責任が極めて重大である

ことや、自分が直面する痛みがいかに残忍であるかを知っていたものの、罪の中にある哀れな人々を見、そうした人々の悲惨な生活や、律法に基づく力ない奮闘努力を見た時、イエスは一層深い悲しみを感じ、人間を罪から救うことに対する切望が強くなっていった。イエスが直面する困難がどのようなものであれ、またイエスが受ける痛みがどのようなものであれ、罪の中で生きる人間を贖い出そうという神の決意は次第に強固なものとなっていった。この過程において、主イエスは、自身が行う必要のある業と、自身に託された物事を、一層明確に理解した、と言えるであろう。またイエスは、自身が行う業を完遂させたいという希望を徐々に強めていった。人間のあらゆる罪を負い、人間を贖い、そうすることで人間が罪の中で生きることがなくなり、罪のためのいけにえにより自身が人間の罪を忘れることができるように、そしてそれにより人類の救いの業を一層進展させたいという思いを、徐々に強めていった。主イエスは、心のなかで、自らを人類に進んで捧げ、自らを進んで犠牲にした、と言えるであろう。またイエスは進んで罪のためのいけにえとなり、十字架にはり付けになり、この業を完遂することを望んでいた。イエスが人間生活の悲惨な状態を見た時、一分一秒も遅れることなく、早急に自身の使命を成し遂げることを、一層強く求めた。こうした喫緊の必要性を認識した時、イエスは自身の受ける痛みがどれほど酷いものか、どれほどの恥辱に耐えなければならぬかなどとは考えていなかった。イエスの心にあったのは、自らを捧げ、罪のためのいけにえとして十字架にはり付けられる限りにおいて、神の旨が実行されて新たな業を始めることが出来る、罪の中にある人間生活、罪の中に存在する人間の状態が全く別のものに一変する、という確信のみであった。イエスの確信と、実行を決意した業は、人間の救いに関連するものであり、イエスの唯一の目的は、神の旨を行って業の次の段階を開始出来るようにすることであった。この時主イエスの心にあったのは、そのようなことであった。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

136. 神が受肉し、普通の人間になり、人間の中で人々と共に生活していた時、神は人間の生活における方法や律法、哲学を理解できなかったであろうか。こうした生活における方法や律法は、神にとってどう感じたであろうか。神は心の中で強い嫌悪感を抱いたであろうか。神が強い嫌悪感を抱いたのは何故だろうか。人間の生活における様式や律法とは何であろうか。それらはどのような原則に基づくものでであろうか。それらは何に基づくものでであろうか。人間の生活における様式や律法等は、すべてサタンの理論、知識、哲学に基づいている。この種の律法に基づいて生きる人間には人間性も真理も

ない。こうした人間は全員真理に逆らい、神を敵対視している。神の本質について検討すると、神の本質は、サタンの理論、知識、そして哲学とは正反対であることが分かる。神の本質は正義、真理、聖さその他の肯定的な事柄の真実で満たされている。こうした本質を持ちつつ、人間の中に生きていた神の心は何を感じたであろうか。それは苦痛ばかりではなかろうか。神の心は苦痛を感じ、その痛みに気付いて理解する人間は誰も居ない。神が直面し、見聞きし、経験する全ての物事が、人間の腐敗、邪悪、そして真理に対する反逆と反抗である。人間に由来する全ての物事が、神の苦難の原因である。つまり、神の本質は腐敗した人間とは異なるため、人間の腐敗が神の最大の苦難の原因となる。神が受肉した時、神は、神と共通の言葉を持つ人間を見つけられることが出来るであろうか。人間の中に、そうした者を見つけることは出来ない。こうした意思疎通や対話を行うことの出来る者を見つけることは出来ないのであれば、神はどのような気持ちであろうか。人々が語り合う物事、好む物事、追求する物事、望む物事は、すべて罪と関連し、邪悪の傾向がある。神がこうした物事に直面するのであれば、それは神の心にとって刃のようではなかろうか。こうした物事に直面して神の心は喜んだであろうか。神は慰めを見つけることが出来たであろうか。神と共に生活していた者たちは、反逆と邪悪に満ちていたのであるから、その心が苦しまずにいられようか。この苦難は、いかに甚大だったであろうか。また誰がそれを懸念したであろうか。誰が注意を払ったであろうか。そして誰がそれを理解できたであろうか。人々が神の心を理解する術は全くない。神の苦難は人間がとりわけ理解不可能な事柄であり、人間の冷淡さと愚鈍さにより、神の苦難は一層深まる。

キリストの窮状に頻繁に共感する人々が居るが、それは「きつねには穴があり、鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらす所がない」と述べる聖句があるからである。人々がこれを聞いた時、人々はそれに共感し、それは神が堪え忍んだ大いなる苦難であり、キリストが堪え忍んだ大いなる苦難であると考え。しかるに、それを事実という観点から見た場合、実際にそうした状況であろうか。神は、そうした問題が苦難であるとは考えない。神が肉の問題の不当なことに対して悲しんだことも、人間に対して神に対する何らかの代償を要求したこともない。しかし、腐敗した生活や腐敗した人間の邪悪、人間がサタンに支配されていること、サタンの捕らわれの身となり逃れることができないこと、罪の中で生きる人々が真理とは何かを知らないことなど、人間の全てを神が目当たりにする時、神はこうした罪のすべてに耐えることが出来ない。人間に対する神の強い嫌悪感は日ごとに増していくが、神はそれに耐えねばならない。これが神

の甚大な苦難である。神は自身に従う者に対して心の声や感情すらすべて表出することが出来ず、神に従う者のなかに、神の苦難を完全に理解できる者は居ない。誰ひとりとして、神の心を理解し、慰めようとする事さえしない。神の心は、毎日、毎年、そして幾度となく、この苦難に堪え忍ぶ。このことから何が分かるであろうか。神は、神が授けた物事に対する見返りを人間に要求してはいないが、神の本質が原因となり、神は人間の邪悪、腐敗、罪を見過ごすことが全く出来ず、強い嫌悪と憎しみを感じるので、神の心と身体は終わることのない苦難を受ける。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

137. 主イエスが復活後に述べた言葉と行った業は、思いやりがあるものであり、親切な旨をもって行ったものである、と言えるであろう。こうした言葉や業は、神の人間に対する親切さと愛情、神が受肉した時に築き上げられた人間との親密な関係に対する認識と周到な慈しみに満たされていた。さらに、そうした言葉と業は、受肉した神が自身に付き従う者と飲食を共にしていた頃に対する懐古と希望で満たされていた。そうしたわけで、人間が神との間に距離を感じることも、人間が神から距離を置くことも、神は望まなかった。さらに、神は復活した主イエスが、もはや人間と親密であった時の主ではない、また主が霊の世界、人間が決して見ることも触れることも出来ない神の元へ戻ったので、もはや人間と共にはいない、と感じることを望まなかった。神は、自身と人間との立場に相違があると人間が感じることを望まなかった。神に付き従いたいと望みながら、神との間に敬意として相応しい距離を置いていた人間を神が見た時、神は心を傷めた。なぜなら、それは人間の心が神から遠く離れていること、神が人間の心を得るのは極めて困難であることを意味するからである。そうしたわけで、仮にイエスが誰も見ることも触れることも出来ない霊的存在として人々の前に来ていたとしたら、再び人間を神から遠ざけてしまい、またその結果として、復活後のキリストは、高尚な、人間とは違う存在となり、人間は罪深く、汚れ、決して神には近づくことの出来ない存在であるから、人間と食卓を共にできない存在となった、といった人間の誤解を招いていたことであろう。こうした人間の誤解を払拭するため、聖書に「パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられる。」とあるとおり、主イエスは、受肉していた時に頻繁に行っていた多くの業を行った。また主は、従前のように、人々に聖句を説明した。こうしたイエスの業により、主イエスと会った人々は皆、イエスが変わっていないと感じ、またイエスが依然として主イエスであると感じた。イエスは十字架にはり付けられ、死んだのだが、復活し、人間から去っては居なかった。イエスは人間の中に戻り、しかも

全く変わっていなかった。人々の前に現れた人の子は、依然として人々が従前知っていた主イエスであった。イエスの態度や人々との会話は、なじみ深いものであった。イエスは依然として親愛、恵み、そして寛容さに溢れていた。自らと同様に人々を愛し、人間を七の七十倍赦すことのできる主イエスであった。従前通り人間と食事を共にし、人々と聖句について話し、またとりわけ重要なこととして、従前と同様に、見て触れることのできる肉と血のある姿であった。こうした人の子の姿により、人々はそうした親密さを感じ、くつろぎを感じ、失った何かを取り戻した喜びを感じ、また人々は安心できたので、果敢かつ確信をもって、人類の罪を贖うことのできる人の子を頼りとして敬うようになった。また人々は、主の恵みと祝福を得、主からの平和と喜び、そして慈しみと保護を得るため、ためらいなく主イエスの名において祈りを捧げるようになり、また主の名において癒しを行い、悪魔を追い出すようになった。

受肉した主イエスが業を行っていた間、イエスに付き従う者の殆どが、イエスの身分やその言葉を完全に認識できなかった。イエスが十字架にかけられた時、イエスに付き従っていた者たちの態度は、何らかの期待であった。イエスが十字架に釘で打ち付けられたときから墓に入れられた時まで、人々の主に対する態度は、落胆であった。この時、受肉したイエスが言われた言葉に関し、人々の心は疑念から否定へと移り変わり始めていた。そして主が墓から出て、ひとりずつ人々の前に現れた時、イエスを自らの目で見たり、イエスが復活したという知らせを聞いたりした人々の殆どが、否定から懷疑へと次第に変わっていった。主イエスがトマスにわき腹を手で触れさせた時、また復活した主イエスがパンを裂いて人々の前で食べた時、そしてその後人々の前で焼き魚を食べた時、そこで初めて人々は主イエスが受肉したキリストであるという事実を真に受け容れた。それは、人々の前に現れた、肉と血のある霊的存在が、その人々をひとり残らず夢から醒めさせたようであった、とすることが出来るであろう。人々の前に立っている人の子は、永遠の過去から存在していたお方であった。彼には形も、肉と骨もあり、また長いこと人間と生きて食事をしていた……この時、人々は、イエスの存在は全くの真実であり、実に素晴らしいと感じた。また人々は大きな喜びと幸福にあふれ、同時に感極まった。イエスが再び現れたことにより、人々はイエスの謙遜を真に理解し、人間に対する近親さ、ひたむきな望みと愛情を感じる事ができた。この束の間の再会により、主イエスに会った人々は、自分が既にこの世を去ったかのように感じた。人々の心は、迷い、困惑し、恐れ、不安になり、思慕をつのらせ、愚鈍になっていたが、そうした人々の心は安息を得た。人々は、疑うことや落胆することを止めた。なぜなら、その時

希望が生まれ、信じることのできるものが生まれたからである。人々の前に立っている人の子は、永遠に人々の味方となり、人々の堅固なやぐらとなり、常に存在する逃げ場となる。

主イエスは復活したが、イエスの心と業は、人間から去らなかった。イエスは人々の前に現れ、自身がどのような形で存在しようと、人々に付き添い、共に歩み、いつでもどこでも人間と共にある。そして、あらゆる時、あらゆる場所で、人間に施し、牧養し、自身を見て、触れ、決して再び絶望しないようにする。また主イエスは、この世における生活では、孤独ではない、ということを理解するよう、人間に対して求めた。人間には、神の配慮があり、神は人間と共にあり、人間は常に神をよりどころとすることができる。神は、神に付き従う者たち全てにとって、家族である。よりどころとすることのできる神の存在のため、人間は孤独になることも絶望することも一切なく、またイエスを罪のためのいけにえとして認める者は罪に縛られることがない。人間から見ると、復活した後に主イエスが行った業は、極めて小さなことであるものの、わたしから見ると、それら全てが有意義であり、貴重であり、またそうした業はすべて極めて重要である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

138. 人間が神に敵意を抱いていたため、神は人間を忌み嫌った。しかし神の人間に対する思い、配慮、憐れみは変わることがなかった。人間を滅ぼした時でさえ、神の心は変わってはいなかった。人間が堕落と神への不従順に満ち、それが一定の程度に達したとき、神は自身の性質と本質、そして神の原則のゆえにこのような人間を滅ぼさなければならなかった。しかし、神の本質のゆえに、神はそれでも人間を憐れみ、様々な方法で人間を贖い、彼らを生かし続けたいとすら願った。しかしながら人間は神に反逆し、神への不従順を続け、神の救いを受け入れることを拒絶した——つまり神のよい意図を受け入れることを拒んだ。神がどのように人間に呼びかけ、思い出させ、与え、助け、寛容に接しても、人間はそのことを理解または感謝せず、あるいは注意を払うこともしなかった。痛みの中にあっても、神は人間が心を改めるのを待ち、最大限の寛容を人間に与えることを忘れなかった。そして神が自身の限界に達した後、神は自身が行わなければならなかったことを迷いなく行った。別の言い方をすれば、神が人間を滅ぼすことを計画し始めた時から、実際に人間を滅ぼす働きを正式に始めるまでの間には、一定の期間と過程があったということだ。この過程は人間が心を改める機会を与えるために存在した。そしてそれは神が人間に与えた最後のチャンスだった。では神が実際に人間



を滅ぼすまでの期間、神は何をしていたのだろうか。神は人間に思い起こさせ、忠告するために多くの働きをしていたのである。神の心がどれほどの痛みと悲しみにあったかに関わらず、神は人間を配慮し、心配し、溢れるほどの憐れみを人間に注ぎ続けたのである。このことからわたしたちは何を見るだろうか。神の人間に対する愛が真実であって、お世辞のようなものだけでないことがはっきり見て取れる。その愛は実際に存在し、感じ知ることができ、偽物ではなく、汚れたり、欺いたり、あるいは偽装したりしていないものである。神は自分が愛すべき者であることを人々に見させるために、騙したり、イメージを繕ったりすることは決してしない。偽証によって自分の魅力の人々に見せようとすることも、自分の魅力や聖さを誇示することもない。このような神の性質は人間の愛を受けるに値するものではないか。礼拝されるに値するのではないだろうか。大切にされるに値するのではないだろうか。ここで、わたしはあなたがたに尋ねたい。これらのことを聞いた今、神の偉大さは単に紙に書かれている言葉だけのものだと思うか。神の魅力はただの虚しい言葉か。違う。絶対に違う。神の至高、偉大さ、聖さ、寛大さ、愛……これら全ての様々な神の性質と本質の側面は、神が業を行うたびに現れるものであり、神の人間に対する意志が具現化されたものであり、そして全ての人間に対し履行され、反映されるものである。あなたがこれまでにそう感じたことがあるかどうかに関わらず、神は全ての人をあらゆる方法の限りを尽くして思いをはせ、一人一人の心を温めるため、そして一人一人の霊を呼び覚ますため、誠実な心、知恵、そして様々な方法を用いている。これは議論の余地のない事実だ。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 1」より

139. 神が人間を創造した。彼らが墮落していようと神に付き従っていようと、神は人間を自分の愛する者として、あるいは人間的な言い方をすれば「最愛の存在」として接し、オモチャのように扱わなかった。神は自分が創造主であり、人間は神が創造したものだと言っている。ということは、そこには少しの格の違いがあるように思われるが、実際には神が人間に対し行ってきたことというのは、この関係の性質をはるかに越えるものである。神は人間を愛し、思い、そして配慮してくれる。そして常に絶えることなく人間に与え続けてくれる。神はそれを心の中で余計な仕事とも、多くの賛辞に値することとも感じていない。また神は人間を救い、彼らに与え、全てを与えることを人間への大きな貢献とも思っていない。神はただ静かに、神自身のやり方で、神自身の本質を通して、自身の持っているものとその存在そのものを与えてくれるのである。どれだけ人間に与えてくれていても、どれだけ助けても、神はそれを手柄と考えたり、それ

によって手柄をたてようと考えたりしない。これは神の本質によるものであり、そしてまさしく神の性質の真なる表現なのである。それゆえ、聖書その他の本の中に神が自身の考えを現わしているものを見つけることもできなければ、また、自身が行う働きに関して人間に対する大きな愛を説明したり表明したりして人間に自身への敬意を感じさせたり称賛させたりするようなものを見つけることはできないのである。神は傷ついている時や心が激しく痛む時でさえ、ひとり静かにひたすらその傷と痛みに耐えながら、人間に対する責任あるいは思いを忘れずにいる。その一方で神は、いつものように、人間に与え続けるのである。人間は神をしばしば賛美したり証しをしたりするが、それらのどれもが神に要求されているものではない。なぜなら神は、人間に感謝されたり見返りを得たりするために人間によい働きをすることなどないからである。神を畏れ悪を避ける人々、誠をもって神についていき、神にうかがい、神に忠実で神に従う人々は、神の祝福をしばしば受け取るのであり、神はたくさんの祝福を惜しみなくこれらの人々に与えるのである。さらに、人々が神から受け取る祝福は、しばしば人間の想像を超えるものであり、人間が自らの行いや自らが払った犠牲に対する代価として受け取れるものをはるかに超えている。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 1」より

#### 140. 人間の運命は、神に対する人間の姿勢で決定される

神は、生きている神であり、人間が様々な状況に対して様々な方法で対応するように、そうした行動に対する神の姿勢も異なる。なぜなら、神は操り人形でも、空気のような存在でもないからである。神の姿勢について知ることは、人間にとって追究の意義があることである。人間は、神の姿勢を知ることにより、神の性質を知り、神の心を少しずつ理解できることを知る必要がある。神の心を少しずつ理解する時、神を畏れ、悪を避けることは、実行するのが困難だとは感じなくなるであろう。さらに、あなたが神を理解した時、神に関して結論を出すことはおそらくない。神に関する結論を出すことを止めた時、あなたが神に背くことは恐らくなり、無意識のうちに神はあなたを導いて神に関する認識を与え、よってあなたは、心から神を畏れるようになるであろう。あなたは、自分が習得した教義や字句、理論などで神を定義するのを止めるであろう。そのかわりに、万事において神の心意を常に求めることにより、あなたは無意識のうちに神の心を求める人間となる。

神の業は、人間が目で見ること、触れることも出来ないものであるが、神に関しては、各人のあらゆる行動と、神に対する姿勢は、神にとって認識できるだけでなく、見る

ことが出来るものである。このことは、全ての人が認識し、明確に理解する必要のある事柄である。あなたは、常々自分に対して「神は、私がここで何をしているか知っているだろうか。神は、私が今何を考えているか分かるだろうか。知っているのだろうか、それとも知らないのだろうか。」などと問いかけるであろう。あなたがこのような観点で、神に付き従い、神を信仰しつつ、神の業や存在を疑っているのであれば、遅かれ早かれ神の怒りに触れる日が訪れるであろう。なぜなら、あなたは既に危険な崖の縁をよろめき歩いているからである。これまでに、長年にわたり神を信仰し続けてきたものの、真理の現実を未だに得ておらず、神の心を理解していない人々を大勢見てきた。こうした者のいのちと霊的背丈は、極めて浅薄な教義に従うだけで、全く進歩していない。これは、そうした者が、神の言葉を自らのいのちとして捉えず、神の存在を直視して神の存在を認めたことが無いからである。あなたは、神がこうした者を見て、喜びに満たされると思うであろうか。こうした人々に神の心が安らぐであろうか。その場合、人間の運命は、人間が神を信仰する方法により決まる。問題となるのが、あなたがどう神を求めるかであれ、どう神を扱うかであれ、最も重要なのは、あなたの姿勢である。神を、あなたの頭の後ろにある空気のようなものとして軽視しないこと。あなたが信仰する神を、常に生きている神、実在する神と考えること。神は手持ち無沙汰で第三の天にいることは無く、神は常に人間それぞれの心や、それぞれ何をしているか、些細な発言や行動、神に対してどのような態度であるか、どのような姿勢であるかを、くまなく見ている。あなたが進んで自らを神に捧げるか如何を問わず、あなたのあらゆる態度、心の奥深くにある考えや思いのすべてが、神の前にあり、神に見られている。あなたに関する神の意見や姿勢は、あなたの態度、行動、神に対する姿勢に従って、継続的に変化している。あたかも神があなたを溺愛しなければならず、神があなたから離れることが出来ず、神のあなたに対する姿勢が永遠に変わらないかのように、神の手の中にいる乳児のような立場に自らを置く者に勧告するが、そのような空想は捨てること。神は、人間ひとりひとりの扱いにおいて、義である。神は、人間の征服と救いの業に、熱心に取り組んでいる。それが神による経営である。神は人間ひとりひとりを、愛玩動物のようにではなく、真剣に取り組む。神の人間に対する愛は過保護や甘やかしではなく、人間に対する神の慈悲と寛容は、大目にみることも無頓着でもない。むしろ、神の人間に対する愛は、大切にし、憐れみ、いのちを敬うことである。神の哀れみと寛容は、神の人間に対する期待を伝えるものであり、人類の存続に必要なものである。神は生きており、実在する。神の人間に対する姿勢には原則があり、一切独善的ではなく、また変化しうるものである。人類に対する神の心は、時間や状況、各人の姿勢に従って、徐々に変

化している。したがって、あなたは、このことについて明確に理解し、また神の本質は変化し得ず、神の性質は様々な時期に様々な状況で表出することを理解すべきである。あなたはこれが深刻な問題であると考えず、自分自身の考え方をを用いて、神がどのように業を行うべきかを想像するかも知れない。しかし、あなたの観点とは全く正反対の物事が真実である場合もあり、自分自身の考え方で神を試みて神を測ることにより、あなたは既に神の怒りを買っている。これは、神はあなたが考えるように物事を対処するのではなく、またこの問題に対する神の対処方法も、あなたが言うような方法では無いからである。ゆえに、身の回りの物事全てに対し、注意深く慎重に接し、全てのことに對して、神を畏れ、悪を避けるという原則に従って神の道を歩むことを学ぶよう、あなたに伝えておく。あなたは、神の心と神の姿勢に関する諸問題を確実に理解する必要がある。あなたに伝えることのできる目が開かれた人々を見つけて熱心に求めるように。自分が信じる神を、操り人形のようなものと捉えたり、任意に判断して勝手に結論を出したり、神に相応しい敬いの念をもって神を扱わないようなことの無いように。神の救いの過程や神があなたの結末を決定する時、神があなたに与えるのが、哀れみであるか、寛容であるか、裁きであるか、刑罰であるかを問わず、あなたに対する神の姿勢は一定ではない。その姿勢は、あなたの神に対する姿勢や、あなたの神に関する理解により異なる。あなたの一時的な認識や解釈で神を永久的に定義しないこと。死んだ神でなく、生きている神を信仰すること。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

#### 141. 運命を信じることは、創造主による統治に関する認識に代わるものではない

運命に関する認識について、長年にわたり神に付き従って来たあなたがたの認識と俗世人の認識には大きな違いがあるであろうか。あなたがたは、創造主による定めを真に理解し、創造主による統治を真に知ったであろうか。「それが運命である」という言葉について深い思いのこもった認識がある者もいるが、そうした者は神による統治や、人間の運命は神により定められ、指揮されているということを一切信じず、神による統治に服従したがる。そうした者は、あたかも大海原に漂流し、波にもまれ、潮に流されるように、受け身で運命に身を委ねるほか無い。しかし、人間の運命は神による統治下にあることをそうした者は気づかない。彼らは人間の自発性への神の統治に気づくことができず、ゆえに、神の権威を知り、神の采配や計画に従い、運命に逆らうのを止め、神の慈しみと保護、導きの下で生きることが出来ない。換言すると、運命を受け入れることは、創造主による統治に従うこととは異なり、運命を信じる事は、神による統治

を受け入れ、認め、知ることではなく、単にその事実と外的現象を認めることである。それは、創造主が人間の運命をどのように支配するかを知る事、神が万物の運命を支配する元であることを認める事、さらには創造主による人間の運命に対する采配と計画に服従する事とは、異なるものである。ある者が運命のみを信じ、それについて深く理解しているが、それにより人間の運命の創造主による統治を知り、認め、それに服従し、それを受け入れることが出来なければ、その者の人生は悲惨なものとなり、虚無のうちに生きる人生となり、創造主による統治に服従する者となることも、造られた人間という言葉が真に意味するところの存在となることも、創造主の是認を享受することも出来ない。創造主による統治を本当に知り、経験する者は、受動的でも絶望的でもなく、能動的であるべきだ。その者は、全てが運命であることを認めると同時に、全てのいのちは創造主による統治下にあるという人生と運命の正確な定義を知っている必要がある。ある者が自分の歩んで来た道程を振り返り、旅路のそれぞれの段階を回想すると、その道の苦楽を問わず、その者は、それぞれの段階で神が自分の進む道を導き、計画していたことを知る。その者が気付かぬうちにその者を今日まで導いてきたのは、神の周到な采配と入念な計画である。創造主による統治を受け入れ、神の救いを得ることが出来るということは、何と幸運なことであろうか。ある者の自分の運命に対する姿勢が受動的である場合、それは、神がその者のために用意したあらゆる物事をその者が拒否し、従順な姿勢ではないということを意味する。神による人間の運命統治に対するその者の姿勢が能動的である場合、その者が自分の旅路を回顧し、神による統治を真に把握するようになった時、その者は神が用意した物事の全てに従うことを一層強く望むようになり、その者の運命において神が指揮すること、それ以上神に反抗しないことに、一層強い決断と確信を得るであろう。運命や神による統治を理解せず、霧の中を敢えて手探りでよろめきながらさまよった時、旅路は困難で悲痛すぎるものになることが分かる。したがって、人間の運命の神による統治を人間が認めた時、賢明な者は、それを知り、受け入れて、引き続き運命に逆らい、いわゆる人生の目標を自分のやり方で追究する代わりに、自らの手で良い人生を作り上げようとしていた悲痛な日々と訣別する。神の存在もなく、神を見ることもなく、神の統治も知らなければ、毎日は無意味で、無価値で、惨めである。どこで何をしても、人の生き方と目標への追求は終わりのない悲しみと深刻な苦痛しかもたらさず、回想するに堪えない。創造主の統治、その指揮と采配を受け入れ、真の人生を求めて初めて、人は徐々に悲しみや苦痛から解き放たれ、人生の虚無感を払拭できるのだ。

## 142. 創造主による統治に従う者のみが真の自由を得ることができる

人間は神の指揮と統治を認めないので、常に反抗的な姿勢で運命に立ち向かい、神の権威や統治、待ち受ける運命を捨て去ることを望み、現状と運命を変えようとする。しかし、人間は決してそれに成功することは無く、あらゆる行動が妨害される。その者の魂の奥深い所で発生するそうした葛藤は苦痛であり、その苦痛は忘れられないものであり、その者は常に自分の人生を浪費する。こうした痛みの原因は何であろうか。神による統治が原因であろうか、それともその者が生まれた時から不運であったことが原因であろうか。あきらかに、そのいずれも原因ではない。根底にある、人間が進む道、人間が選択する生活方法が原因となっている。こうした物事に気付かない者もいる。しかし、神が人間の運命を統治していることをあなたが真に知り、それを真に認め、自分のために神が計画し、決定した物事の全てが大きな利益であり、大いなる保護であるということを真に理解した場合、その痛みが次第に緩和され、心身共にくつろいだ気持ちになり、自由になり、解放される。大部分の人々の状態から判断すると、主観的には、従前のような生活を望まず、苦痛から解放されることを望んでいるが、客観的には、創造主による人間の運命統治の実際の価値や意義を真に把握出来ず、創造主による統治を認め、それに従う事も出来ず、まして創造主の指揮や采配を求め、受け入れる方法を知ることなど出来ない。そうしたわけで、ある者が、創造主が人間の運命と、人類のあらゆる物事を統治しているという事実を真に認められず、創造主による統治に真に服従できない場合、その者にとって、「人間の運命は自分の掌中にある」という観念に駆られたり捕らわれたりすることを避けること、運命や神の権威に対抗する厳しい葛藤による痛みを払拭するのは困難であろう。またその者にとって、真に解放されて自由になり、神を礼拝する者となることも困難であるのは、言うまでもない。こうした状態から自由になるための非常に簡単な方法がある。それは、自分の以前の生活様式や人生の目標と訣別し、以前の生活様式、人生観、追求、願望、理想を概括し、分析し、それを神の旨や人間への要求と比較し、それらのいずれかが、神の旨や要求と一致しているか、人生の正しい価値をもたらすか、一層深い真理の理解へと導くか、人間性と人間らしさとともに生きることを可能にするかを確認することである。人々が追求する人生の様々な目標や生活様式を繰り返し調査し、注意深く分析すると、創造主が人類を創った時の創造主の本来の意図と一致するものがひとつも無いことが分かる。それらは全て人間を創造主による統治と慈しみから引き離し、人間を墮落させて地獄へと導く罠である。このことを確認した後の作業は、以前の人生観を捨て、様々な罠から離れ、自分の人生を神に託し

て神による采配に委ね、神の指揮と導きのみに従うよう心がけ、それ以外の選択肢をもたない神を崇拝する者となることである。これは簡単に思えるが、行うのは困難である。苦痛を感じるものと、感じない者がいるであろう。喜んで従うものと、そうでないものがいる。喜んで従わない者は、それを行う事を望む気持ちと決意が不足している。つまり、そうした者は、神による統治を明確に認識し、人間の運命を計画し、采配を行われるのは神であることを完全に知っているが、それでもなお反抗しようとあがき、自分の運命を神の掌中に委ねることを許さず、神の統治に従わず、神の指揮と采配に立腹している。そうしたわけで、自分の能力を知りたい者が常に存在する。そうした者は自分の運命を自らの手で変えること、自分の力で幸福になること、神の権威の範囲を出て、神による統治を超えることが出来るかどうかを試すことを望む。人間の悲しみは、人間が幸せな人生を望むことや、富や名声を望むこと、霧の中で自分の運命に立ち向かうことではなく、創造主の存在を知り、創造主が人間の運命を統治しているという事実を知ってなお、自分自身のあり方を正し、泥沼から抜けられずに、自分の過ちを頑固に押し通そうとすることである。人間は、全く悔い改めることなく、泥の中で戦い続け、頑固に創造主による統治に反抗し続け、悲惨な結末を見るまで拒否を続ける方が良いと考え、うちひしがれ、負傷して倒れた時、やっと諦めて戦いを止める。これが、人間の真の悲しみである。そうしたわけで、服従した者は賢者であり、逃れようとしたものは意固地になっていると言える。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

#### 143. 富と名声を追求した人生は、人間を臨終時に途方に暮れさせる

創造主による統治と定めのために、影形の無いものとして誕生した孤独な魂は、両親と家族を得、人類の一員となる機会、そして人間の生活を体験して世界を見る機会を得る。またその魂は、創造主による統治を経験する機会、創造主による創造の素晴らしさを知る機会、そして何よりも、神の権威を知り、その対象となる機会を得る。しかし大部分の者が、こうした稀少で束の間の機会を本当に掴むことは無い。人間は一生涯のエネルギーを運命に立ち向かうことに費やし、家族を養おうと必至で働き、富と地位の間を行き来して、全ての時間を費やす。人間が大切にすることは、家族、金銭、名声であり、人間はこれらを人生において最も価値の高いものとみなす。あらゆる人々が自分の運命に不満であるが、人間は何故生きているのか、人間はどう生きるべきか、人生の価値と意味は何であるか、という最も喫緊に検討して理解する必要のある問題を心の中で常に先送りする。人々は、その生涯が何年であるかを問わず、若さを失い白髪とシワが

現れるまで、富と名声で人間の老化を止めることが出来ず、金銭で心の空虚感を埋められないことを悟るまで、そして出生、老化、疾病、死の法則の例外となる者や、待ち受ける運命から逃れられる者はいないことを悟るまで、一生涯を通して、せわしなく富と名声を追い求めるのみである。人間は、人生最後の節目に直面せざるを得なくなった時に初めて、巨額の財産があったとしても、特権のある高い地位にあったとしても、死を免れられる者はおらず、全ての者が元来の何も無い孤独な魂に還るということを理解する。両親のいる者は両親が全てであると考え、財産のある者は金が自分の頼みの綱であり、生きる上での資産であると考え。立派な地位があれば、人間はそれにしがみついて、そのために命を賭ける。この世を去ろうとする時になって初めて、人間は自分が生涯をかけて追究してきた物事が、空を渡り行く雲のようなものであり、いずれも掴み続けることも、死後の世界に持っていくことも出来ないものであり、自分を死から免れさせる力が無いものであり、この世を去る時に持参することも、慰めを与えることも出来ないものであり、また特にそうした物事のなかに、死を超越する救済を与えることの出来るものは無いということに気付く。物質世界で得る富と名声は、その者に一時的な満足感、束の間の悦楽、安楽の錯覚を与え、その者に道を踏み誤らせる。そうしたわけで、広大な人間の世界で翻弄されて平和と慰め、心の静寂を求めるうちに、人間は何度も波に吞まれる。人間は何処から来て、何故生きていて、どこへ行くのか、など、理解すべき最も重要な問題を理解せずにいる時、人間は富や名声により魅惑され、迷わされ、支配され、完全に道を見失う。時の流れは速く、年月は瞬くうちに過ぎ去ってゆく。人間は、気付かぬうちに、人生の壮年期に別れを告げる。人間がこの世を去ろうとする時、人間は、この世の物事は全て流れ去って行き、自分の所有物を保持できなくなるという漸進的な認識に達する。その後、人間は、泣いている幼児と同様に、自分が何も所有していないと実感する。この時点において、人間は人生で何を成し遂げたか、生きていくことの価値とその意味、その者がこの世に現れた理由を考えさせられる。そしてこの時点において、人間は来世や天国、報いが実在するかを知りたい気持ちが次第に強くなる。人間が死に近ければ近いほど、人間は人生とは何かを知りたい気持ちが強くなる。死に近ければ近いほど、人間の心は益々空虚になり、絶望感が強くなるので、死に対する恐れが日々強くなってゆく。人間が死に近付く時このような思いになる理由は2つある。1つ目の理由は、自分の人生を依存してきた富と名声を失いつつあり、この世の目に見える物事すべてから去ろうとしていることである。2つ目の理由は、愛する人々や支援の手段が存在しない、足を踏み入れるのが不安になるような、馴染みのない世界、神秘的な未確認の領域に独りで立ち向かおうとしていることである。この2つの理由の



ため、人間は死に直面すると、皆不安になり、それまで知らなかった混乱と絶望感を覚える。人間は、この時点になって初めて、この世に現れた時、最初に理解すべきことは、人間がどこから来るのか、何故生きているのか、人間の運命を支配するのは誰か、人間の存在に糧を施し、それを統治するのは誰であるかを知る。それらを知っていることは人が生きる上で真の資産であり、人間の生存に不可欠な基盤であって、自分の家族を養う方法や、富や名声を得る方法を知る事でも、人々よりも卓越した存在となる方法、一層豊かに生活する方法を知る事でもなく、ましてや他人を超越し、競争に勝つ術を覚えることなどでは無い。人間が生涯をかけて覚える生存のための様々な技能により、物質的な快樂を豊富に得ることが出来るものの、そうした技能は人間の精神に真の平和と慰みをもたらすことは決して無く、むしろ継続的に人間に道を踏み誤らせ、自分を掌握するのを難しくさせ、人生の意味を知る機会を全て失わせ、適切に死を迎える方法に関し、隠された問題を造り出す。こうして、人々の人生は無駄になる。創造主は、全ての人間を平等に扱い、生涯にわたり創造主による統治を経験し、知る機会を全ての者に与えるが、人間は、死に近づき、自分に死の恐怖が差し迫って初めて光が見えるようになり、その時は、既に手遅れである。

人間は、金銭と名声を求めて人生を過ごし、そうしたわらしべを握りしめて、あたかもそれがあれば生き長らえて死から免れられるかのように、それが唯一の助けであると考え。しかし、死が迫る時になって初めて、こうした物事がどれほど自分に無縁であるか、死に直面した自分がどれほど弱いか、どれほど脆いか、どれほど孤独であり、誰にも頼ることができず絶望的であるかを知る。人間は、いのちを金銭や名声で買うことが出来ないこと、いかに裕福であっても、いかに高い地位であっても、死に対して人間は皆同様に貧しく些細な存在であることを知る。人間は、金銭でいのちを買えないこと、名声で死を消し去れないこと、金銭も名声も、一分一秒たりとも人間の寿命を延ばせないことを知る。それを強く感じれば感じるほど、人間は生きていたいと切に願う気持ちが強くなり、死が近づくのを一層恐れる。人間は、自分のいのちが自分自身のものではなく、自分で制御出来るものではないこと、自分が生きるか死ぬかについて、自分自身は全く干渉できないこと、そうしたことが自分の制御出来る範囲外にあることを、この時点になるまで真に理解しない。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

#### 144. 創造主による統治を受け、安らかに臨終を迎える

ある者が生まれた時、孤独な魂は、創造主がその魂のために計画した、地上での生活経験、創造主の権威の経験を始める。その者すなわちその魂にとって、これが創造主による統治に関する認識を得て、創造主の権威を知り、それを自分で経験する格好の機会であることは言うまでも無い。人間は、創造主が人間のために定めた運命の法則に基づいて生活する。理知と良心のある者にとって、地上における数十年の間に創造主による統治を受け入れ、創造主の権威を知ることは、それほど困難ではない。したがって、数十年にわたる自分の人生経験の中で、あらゆる人間の運命は予め定められていることを認め、生きることの意味を把握あるいは概括することは、誰にとっても極めて容易なはずである。こうした人生の教訓を受けると同時に、次第に人間は、いのちがどこから来るかを理解し、心が本当に必要とするものは何か、人間を真の人生の道へと導くものは何か、人生の使命や目標であるべきものは何かを把握する。また次第に人間は、人間が創造主を拝まず、創造主による統治の対象とならなかった場合、その者が死に直面した時、すなわちその魂が再び創造主に対面するとき、その者の心は無限の恐怖と不安で満たされるということを認識する。ある者が、この世に数十年存在してきて、それでも人間のいのちがどこから来るかを知らず、人間の運命が誰の掌中にあるかを認めずにいるのであれば、その者は安らかに臨終を迎えられないのは当然である。数十年の人生経験の後に創造主による統治に関する認識を得た者は、人生の意味と価値を正しく理解し、人生の目的に関する深い認識を持ち、創造主による統治の真の経験と理解があり、さらに創造主の権威に服従出来る者である。そうした者は、神による人類創造の意味や、人間は創造主を拝むべきであること、人間の持つものが全て創造主に由来し、近い将来に創造主へと還ることを理解し、また創造主が人間の出生を計画し、人間の死を支配し、生と死の両方が創造主の権威により予め定められていることを理解する。したがって、その者がそうした事柄を真に把握した時、その者は自然と安らかに死を迎えることができ、この世の所有物全てを穏やかに手放し、その後の物事を喜んで受け入れ、またそれに従い、創造主により計画された人生最後の節目を、盲目的に恐れ、避けようともがくのではなく、それを歓迎出来るようになるであろう。ある者が、人生は創造主による統治を体験し、その権威を知る機会であり、その者が創造された人間として本分を尽くし、使命を果たす希な機会であると考えているのであれば、その者は必然的に正しい人生の見通しを得て、創造主により祝福され、導かれた人生を送り、創造主の光の中を歩み、創造主による統治を知り、創造主の支配に服従し、創造主の奇跡の業と権威の証をするものとなる。そうした者は必然的に創造主に愛されて受け入れられ、また死に対して安らかな姿勢を取る。人生の最後の節目を喜んで歓迎出来るのは、そうした者のみであ

る。ヨブは死に対して明らかにこの姿勢を取っていた。ヨブは人生最後の節目を喜んで受け入れる姿勢を取り、自分の人生の旅路を穏やかに終え、自分の人生における使命を全うして、創造主の許へと還っていった。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

145. 人間は、創造主による統治を受け入れることによってのみ、創造主の側に戻る事が出来る

ある者に、神による統治や采配に関する明瞭な認識や経験が無い場合、その者の運命や死に関する認識は必然的に支離滅裂なものとなる。人々は、こうした事柄が全て神の掌中にあることを明確に見ることが出来ず、神がそうした事柄を支配、統治していることに気付かず、その統治を放棄したり、統治から逃れたりできないことを認めないので、死に直面した時、そうした人々の最期の言葉や懸念、後悔には際限が無い。そうした人々は、過剰な重荷、過剰な抵抗、過剰な混迷を負っており、それが原因で死を恐れる。この世に生を受けた者すべてにとって、自分の出生は必然であり、死は不可避であり、そうした過程を超越することは出来ない。苦痛を感じることも無くこの世から去りたい、抵抗や懸念無く人生最後の節目と直面したいと願うのであれば、後悔しないようにすることが唯一の方法である。後悔せずに他界する唯一の方法は、創造主の統治と権威を知り、それらに服従することである。人間は、この方法のみにより、人間同士の不和、邪悪、サタンの拘束から離れることが可能となる。この方法のみにより、ヨブのような創造主に導かれ、祝福される人生、自由で解放された人生、価値と意味のある人生、正直で率直な人生を送ることが可能となる。そしてこの方法のみにより、ヨブのように創造主により試され、奪われるに従い、創造主による指揮と采配に服従することが可能となる。この方法のみにより、ヨブのように生涯を通して創造主を拝み、創造主の賞讃を得て、創造主の声を聞き、創造主が現れるのを目撃することが可能となる。この方法のみにより、ヨブのように苦痛や懸念、後悔無く幸福に生活して幸福に死ぬことが可能となり、この方法のみにより、ヨブのように光の中で生活し、光の中で人生のひとつひとつの節目を過ごし、光の中で穏やかに生涯を閉じ、造られた人間として創造主の統治を経験し、学び、知るという自らの使命を果たし、光の中で死んで、造られた人間として、永遠に創造主の側にあり、創造主の賞讃を受けることが可能となる。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

146. ある者が創造主による統治を知るという問題に初めて直面する時から、その者が創造主による統治という事実を認めることが出来るようになり、その後それに服従出来るまでの過程は、極めて長期的な過程である。しかしながら、人間の存在に関する通常の法則によれば、その年月を数えると、そのように報われる機会があるのは、わずか30年ないし40年程度であると言える。しかるに、人間は、祝福を得るという自らの願望や大望に夢中になり、人生の本質が何処にあるかを見分けることが出来ず、創造主による統治を知ることの重要性を理解しないことが多々ある。そうしたわけで、人間の世界で人間の生活を送って創造主による統治を経験するという貴重な機会を大切にせず、創造主による個人的な導きを享受することが造られた人間にとってどれほど貴重であるかを認識することも無い。したがって、創造主を直ちに直接見て、近いうちに祝福されることが出来るよう、神の業が迅速に終わり、神が人間の終わりの時を出来るだけ早期に計画することを望む者は、最も重い反逆の罪の裁きを受ける究極的に愚かな者であると言える。その一方、限られた時間に、創造主による統治を知る機会を得ることを望む者は、賢く聡明な者であると言える。こうした2種類の願望は、2種類の全く異なる見通しと追求を露見させる。祝福を求める者は自己中心であり、卑劣であり、神の旨に対する配慮を全く示さず、決して神による統治を知ろうとも、それに従おうともせず、単に自分の好きなように生きることを望む。そうした者は浮かれて墮落した者であり、滅ぼされるべき種類である。神を知ることが望む者は、自分の欲望を捨てることが可能であり、神による統治と計画に進んで服従し、神の権威に従う者、神の望まれる事柄を満たす者になろうとする。こうした者は光と神の祝福の中で生活し、確実に神の賞讃を享受する。いかなる場合であっても、人間が選ぶ物事は無益であり、神の業の所要期間について干渉出来ない。人間にとって、自らを神の采配に委ね、神による統治に服従する方が良い。あなたが自らを神の采配に委ねないとしたら、あなたに何が出来るであろうか。神に損害が及ぶであろうか。神の采配に自らを委ねずに、自らが担い手になろうとした場合、あなたの選択は愚かであり、最終的に損害が及ぶのは、あなたである。人間が出来る限り早く神に協力し、急いで神の采配を受け入れ、神の権威を知り、神の人間に対する業のすべてを理解した場合に限り、人間に希望があり、人間は人生を無駄に生きること無く、救いを得るであろう。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

147. 自分の唯一の主として神を受け入れることが、救いを得る第一歩である

神の権威に関する真理は、全ての者が真剣に取り扱い、心で経験して理解すべき真理である。なぜなら、こうした真理は全ての者の人生、過去、現在、そして未来と関係があり、また人生において全ての人間が通らなければならない重要な節目、人間の神による統治に関する認識、そして神の権威に対して取るべき姿勢と関係があり、必然的に全ての者の終着点と関係があるからである。したがって、こうした物事を知り、理解するには、一生涯の努力が必要となる。神の権威を深刻に捉え、神による統治を受け入れた時、人間は、神の権威は実在することに次第に気づき、理解する。しかし、神の権威を認めず、神による統治を受け入れなかったならば、何年生きていようとも、神による統治に関する認識は少しも得る事が出来ないであろう。神の権威を真に知り、理解しなかった場合、終着点に到達した時に、それまで何十年神を信じていようとも、人生において見せるべきものが全く無く、神による人間の運命の統治に関する認識は必然的に皆無となる。それは非常に悲しいことではなかろうか。したがって、人生の道をどの程度進んで来たか、現在何歳であるか、残りの旅路がどの程度あるかを問わず、まず神の権威を認め、それを深刻に捉え、神が自分の唯一の主であるという事実を受け入れる必要がある。神による人間の運命の統治に関する明瞭かつ正確な認識と理解を得ることは、全ての者にとって必須の経験であり、人生を知り真理を得る鍵となるものであり、また全ての者が日々直面する、避けることの出来ない、神を知る生活と基本的な課業である。この目標を達成する近道を通りたいと思う者がいるかもしれないので、その者に言うておくが、それは不可能である。あなたがたの中に、神による統治から逃れたい者がいるかも知れないが、それはなおさら不可能である。神は人間の唯一の主であり、神は人間の運命の唯一の主である。したがって、人間にとって自分の運命を決定し、支配することは不可能である。その者の能力が如何に優れていても、その者は他人の運命に影響を与えられず、ましてや指揮したり、予定したり、制御したり変更することは出来ない。人間のすべてを支配するのは、唯一の神自身のみである。なぜなら、人間の運命に対する統治を担う唯一の権威があるのは神のみであり、したがって創造主は人間の唯一の主だからである。神の権威は、人間だけでなく、人間には見えない創造物以外の生き物や、惑星、宇宙の統治も担う。これは異論の余地の無い、実在する事実であり、人間や物が変わられない物事である。もし、物事の現在の状態に不満であり、自分には何らかの特別な技能や能力があると考え、運が良ければ現状を変えたり現状から逃れられたりすると考えている者がいたり、人間の力で自分の運命を変えたい、他人よりも卓越し、名声と富を得ようとしている者がいたとすれば、その者に言うておくが、その者は自分で物事を困難にし、問題を買って出て、墓穴を掘っているのだ。遅かれ早かれ、その者は

自分が選択を誤っていること、無駄な努力をしていることに気付くであろう。あなたの運命に立ち向かう志と願望、大それた行動は、あなたを取り返しのつかない状態へと続く道へと導き、そのために辛い代償を払うこととなるであろう。今はその結果の重大性が分からないかも知れないが、神が人間の運命の主であるという真理を一層深く経験し、認識するにつれ、わたしが言うこととその真意が徐々に分かるであろう。あなたに真の心と霊があるか、あなたが真理を愛する者であるかは、神による統治と真理に対して、あなたがどのような姿勢を取るかにより決まる。そして必然的に、その姿勢により、あなたが神の権威を真に知り、理解しているかが決まる。人生において神による統治と采配を感じたことが無く、ましてや神の権威を認め、受け入れたことなど無いのであれば、あなたは全く無価値であり、あなたが選んだ道と選択肢が原因となって、神が嫌い捨てる対象となることは間違い無い。しかし、神の業により、神からの試練と神による統治を受け入れ、神の権威に服従し、徐々に神の言葉に関する真の体験を得る者は、神の権威に関する真の認識と神による統治に関する真の理解を得て、真に創造主に従う者となるであろう。真に救われるのは、そのような者だけである。そうした者は、神による統治を知り、それを受け入れたため、そうした者の神による人間の運命の統治の認識と、その統治への服従は真正かつ正確である。そうした者が死に直面した場合、そうした者は、ヨブのように死を恐れない精神を得て、個人的な選択や願望無く神の采配と計画に従うことができるであろう。真に創造された人間として、創造主の許へと還ることができるのは、そうした者だけである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 3」より

148. 神と人類の最大の相違点は、神は万物を支配し、すべてを与えるということです。神は万物の源であり、人間は神が与える万物を享受します。つまり、神が万物に与えるいのちを人間が受け入れる時、人間は万物を享受するということです。人類は神の万物創造の成果を享受するのに対し、神は主です。それでは、万物の立場から見ると、神と人類の相違点は何ですか。神は万物の成長法則を明瞭に見ることができ、万物の成長法則を制御し、支配します。すなわち、万物は神の目の中にあり、神の監視範囲内にあります。人間には万物が見えますか。人間に見えるものには制限があります。それはただ人間の目に見えるものに過ぎません。もし人間が山に登ると、人間に見えるのは、その山です。その山の反対側にあるものは見えません。人間が海岸へ行くと、人間に見えるのは目の前にある海ですが、その対岸の海がどのようなものであるかは知りません。人間が森に辿り着くと、人間には自分の周囲と目の前にある植物が見えますが、その先に何

があるかは見えません。人間は高い場所、遠い場所、深い場所を見ることができません。人間に見えるものは、目の前にあるものと、視野の中にあるものだけです。人間が一年間の四季の法則や万物の成長法則を知っていたとしても、万物を管理したり支配したりすることはできません。その一方、神の万物の見方は、あたかも神が自ら製作した機械を見るようなものです。神はそれぞれの部品について熟知しているのです。その原則が何か、その法則は何か、その目的は何かについて、神はこれらのことすべてを明白に知っています。それゆえに、神は神であり、人間は人間なのです。たとえ人間が科学や万物の法則の研究を続けたとしても、それは依然として限界のある範囲内であり、その一方で神は万物を支配しています。それは人間にとって無限です。もし人間が神が行った極めて小さな何かを研究したならば、生涯を研究に捧げても、何ら実質的な成果を達成しないことがあります。もしあなたが知識や学習した事柄を用いて神を研究しても、神を知ることと理解することも決してできないのは、このためです。しかし、もし真理を求め、神を求める道を用い、神を知ろうとするという観点から神を見つめるのならば、やがて神の業と知恵が随所にあることを認め、また神が万物の主、そして万物のいのちの源であると言われるのはなぜかを知るでしょう。そうした認識をさらに得れば得るほど、神がなぜ万物の主と呼ばれるのかを一層理解するでしょう。あなた自身を含めた万物、すべてのものは、神から安定した施しを間断なく受け取っています。また、あなたは这个世界で、人類の只中に、万物の存在を支配し、管理し、維持するこのような力と本質をもつことのできるのは、神を除いて存在しないことを明らかに感じることができます。あなたがこうした理解を得る時、あなたは神があなたの神であることを真に認めるでしょう。あなたがこの点に達する時、あなたは神を真に受け入れ、神をあなたの神であり主であるとしたのです。あなたがそうした認識を得、あなたのいのちがそのような点に達した時、神はもはやあなたを試したり、裁いたりせず、またあなたに対して要求しなくなります。なぜなら、あなたは神を理解し、神の心を知り、神をあなたの心の中で真に受け入れたからです。このことは、神の万物支配と管理に関するこれらのことを伝える重要な理由です。このことは、人々により一層の認識と理解を与えるためであり、単にあなたに神の業を認めさせるだけでなく、それについてのさらなる実践的な認識と理解を与えるためです。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 8」より

## (XII) 神を認識することについての言葉

149. 神への信仰とは神を知ることへの第一歩である。この初期の神への信仰から最深の信仰へと前進する過程は、神を知ようになる過程であり、神の働きを経験する過程である。もし神を信じるためだけに神を信じ、神を知ようになるためでないのであれば、あなたの信仰には現実性がなく、その信仰が純粹であることはあり得ない。このことに疑いはない。もし神の働きを経験する過程において、人が徐々に神を知ようになると、人の性質は次第に変化し、その信仰はますます真実なものになる。このようにして、神への信仰において成功するとき、人は完全に神を得ている。神が自らその働きを行なうために、これほどの大変な苦勞をして再び肉となった理由は、人間が神を知ることができ、神を見ることができるようになるためであった。神を知ること<sup>[a]</sup>は、神の働きの結末において達成される最後の成果である。それは神の人類への最後の要求である。神がこれを行なう理由は、神の最終的な証のためである。神がこの働きを行なうのは、人がついに完全に神に向かうようにである。神を知ることによってのみ、人は神を愛するようになることができ、神を愛するためには人は神を知らなければならない。人がどのように求めようと、何を得ようと求めようと、人は神についての認識を達成できなければならない。こうしてのみ、人は神の心を満足させることができる。神を知ることによってのみ、人は神への真の信仰をもつことができ、そして神を知ることによってのみ、神を真に畏れ神に従うことができる。神を知らない人々は、神への真の服従と畏敬に決して到達することはない。神を知ることには、神の性質を知り、神の心を理解し、神であるものを理解することが含まれる。しかし、どの側面を知ようになるにせよ、それぞれが人に代価を払うこと、従う意思を要求する。それなしには誰も最後まで従い続けることはできないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神を知る者だけが神に証しを立てることができる」より

150. 実践的な神についてあなたが知るべきことは何だろうか。実践的な神自身は、霊、人、そして、言葉から成り立っている。これが実践的な神自身の本当の意味である。あなたがこの人だけを知っていて——つまり、彼の習慣と性格のみを知っていて——霊の働きを知らなければ、あるいは、霊が肉の中で何をするのかを知らず、ただ霊と言葉に注意を払って、霊の前で祈るだけで、実践的な神の中で神の霊の働きを知らなければ、それは、あなたがまだ実践的な神を知ってはいない証拠である。実践的な神を知ることには、神の言葉を知り、経験すること、聖霊の働きの規則と原則を理解すること、そして、神の霊が肉の内でのどのように働くかを把握することが含まれる。その中には更に、肉と



なった神のすべての行為は聖霊によって支配されており、彼が語る言葉は聖霊が直接表現したものであるということを理解することも含まれている。したがって、あなたが実践的神を知りたいと願うならば、人間性においてまた神性において、神がどのように働くかをまず知らなければならない。そのことはすべての人々が関係している霊の表現というものにつながってゆく。

『言葉は肉において現れる』の「実際の神は神自身であることを知るべきである」より

151.神が所有するもの、神の存在そのもの、神の本質、神の性質——これら全ては神の言葉の中で人間に知らしめられている。神の言葉を体験する時、人間は、神の言葉を実行する過程において、神が語る言葉の背後にある目的、神の言葉の根源と背景を理解し、神の言葉の意図されている効果を理解し察するようになる。これらの事は全て、真理といのちを獲得し、神の意図を把握し、性質が変えられ、神の支配と采配に服従できるようになるために、人間が経験し、把握し、獲得しなければならないものである。これらのことを経験し、把握し、獲得すると同時に、人間は徐々に神を理解し、その時、様々な度合いで神に関する認識を獲得するようになる。この理解と認識は人間が想像したり構築したりした物事からではなく、むしろ人間が自分自身の内部で理解し、経験し、感じ、確証した物事から生まれる。これらの事を理解し、経験し、感じ、確証したとき初めて、人間の神に関する認識が中身のあるものとなる。この時人間が得る認識のみが实际的であり、現実的であり、正確であるのだ。そして神の言葉を理解し、経験し、感じ、確証することにより神に関する真の理解と認識を得る過程こそが、まさしく人間と神との真の交わりとなるのである。こうした交わりのなかで、人間は神の意図を真に理解し、把握し、神の所有するものと神の存在そのものを本当に理解し、知るようになり、神の本質を真に理解し、知り、神の性質を徐々に理解し、知るようになり、神があらゆる創造物を支配しているという事実についての真の確信と正しい定義に達し、神の身分と地位についての本質的な理解と認識を得る。こうした交わりのなかで、人間の神に関する考えが徐々に変化し、何の根拠もなく神のことを想像しなくなり、また神への疑念を勝手に膨らませたり、神を誤解したり、罪に定めたりしなくなり、あるいは神を裁いたり、疑ったりしなくなる。結その果、神と議論することや、神と対立することが減り、神に反抗することも減るだろう。逆に、神を思いやり、神に服従することがさらに多くなり、神に対する畏敬がより实际的で深遠なものとなるだろう。こうした交わりのなかで、人間は真理の備えといのちのバプテスマを受けるだけでなく、それと同時に、神に関する真の認識を得るであろう。こうした交わりのなかで、人間は、性質が変

えられて救いを得るだけではなく、同時に、被造物として神を畏敬し礼拝することを獲得するだろう。こうした交わりの後、神への信仰はもはや、白紙の状態、あるいは言葉だけの約束、一種の盲目的な追求や偶像化では無くなるだろう。こうした交わりによってのみ、人間のいのちは成熟に向かって日々成長するのである。そして、その時初めて、人間の性質は次第に変えられ、神への信仰が徐々に漠然とした不確実なものから、真の服従と思いやりと、本当の畏敬へと変化し、また人間は、神を求める際、しだいに消極的な態度から積極的な態度へ、受け身の姿勢から能動的姿勢へと移行する。こうした交わりによってのみ、人間は神に関して真の理解と把握、真の認識に達する。

『言葉は肉において現れる』の「神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道」より

152. イエスに従っている間、ペテロはイエスについて多くの意見を持ち、常に自らの観点からイエスのことを判断していた。ペテロはある程度は霊について理解していたけれども、あまり啓発されることもなかったのも、彼は「天の父によって遣わされたお方に従わなければならない。聖霊によって選ばれたお方を認めなければならない」という言葉を発したのである。ペテロはイエスが行ったことを理解していなかったし、何の啓示も受けていなかった。しばらくイエスに従った後、ペテロはイエスが行うこと、言うこと、またイエス自身に次第に興味を持ちはじめた。ペテロはイエスが愛と尊敬の念を呼び起こすのを感じるようになり、イエスと交わり、イエスのそばにいたいと思うようになった。そして、イエスの言葉を聞くことによって彼は、満たしと助けを得た。長らくイエスに従って、ペテロはイエスの生活の全て、つまりイエスの行動、言葉、動作、表情などを観察し、心に留めた。ペテロはイエスが尋常の人のようではないことを深く理解した。イエスの人間としての外観は極めて普通であったが、イエスは人間に対する愛、哀れみ、寛容で満ちていた。イエスが行ったこと、言ったことの全てが他の人々の大きな助けとなり、ペテロはイエスの側で今まで見たことも得たこともないことを見たり学んだりした。イエスには大きな背丈や並外れた人間性はなかったが、実に驚くべき尋常でない雰囲気があることをペテロは見た。ペテロはそれを完全には説明できなかったけれども、イエスの行動が他の誰とも違っていることを見ることができた。というのは、イエスは普通の人やることとは遥かに違うことをしたからである。ペテロはイエスと接するようになってから、イエスの性格が普通の人とは違っていることにも気づいた。イエスは常に落ち着いて行動し、決して焦ることも、誇張することもなく、物事を控えめに表現することもなく、ごく普通で称賛に値するような生活を送った。イエスは会話においては、上品で、優雅で、率直で、朗らかでありながらも、穏やかで、働きを

実行するときも決して威厳を失うことはなかった。ペテロは、イエスがあるときは無口になったり、またあるときは絶え間なく話したりするのを見た。イエスは時には嬉しくて、鳩のように敏しょうに、いきいきとふるまい、時には悲しみの余り、まるで風雨にさらされた母親のように、まったく口をきかないこともあった。時としてイエスは、勇敢な兵士が敵を殺すために突進するように、また時には吠え猛るライオンのように憤りで一杯になることさえあった。イエスは時には笑い、時には祈り泣くこともあった。イエスがどのように行動するかに関わらず、ペテロは限りのない愛と敬意をイエスに抱くようになった。イエスの笑い声はペテロを幸せで満たし、イエスの悲しみはペテロを嘆きに落とし入れ、イエスの怒りはペテロを脅かしたが、その一方、イエスの憐れみ、赦し、厳しさによって、ペテロはイエスに対して真の畏敬と憧れを抱くようになり、ほんとうにイエスを愛するようになった。もちろん、これらのこと全ては、ペテロが数年イエスのもとで生活して、次第に分かってきたことである。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロはどのようにしてイエスを知るようになったか」より

153.ペテロは何年にもわたりイエスに従い、人々が持っていない多くのことをイエスの中に見た。一年間イエスに従った後、ペテロはイエスによって十二使徒の筆頭に選ばれた。（もちろん、これはイエスの心だけでのことで、人々にはまったくわからなかった。）イエスの動きのすべてが生涯ペテロの手本になり、イエスの説教は特にペテロの心に刻まれた。彼はイエスに対して非常に思いやりがあり、忠実であり、決してイエスに不平不満を持たなかった。こういうわけで、彼はイエスが行くところどこでもその忠実な伴侶となった。ペテロはイエスの教え、イエスの穏やかな言葉、食べるもの、着るもの、日々の生活、旅を観察した。ペテロはあらゆる点でイエスのやり方に従った。彼は独善的ではなく、以前の古臭い事柄をすべて投げ捨て、言葉や行動においてイエスの例に従った。ペテロが天地万物は全能者の手の中にあることを感じたのはこのような時で、そのような理由から、彼は自分で選択はせず、イエスという存在のすべてを手本として吸収した。こうした生活を通して、ペテロはイエスがその行動において独善的ではなく、自慢することもなく、それどころか、人々を愛によって動かすことを見て取ることができた。さまざまな状況で、ペテロはイエスという存在を見ることができた。こうして、イエスのすべてがペテロの自己形成の目標となった。経験を重ねていくうちに、彼はますますイエスの素晴らしさを感じた。彼は次のようなことを語った。「私は世界に全能者を探し求め、天と地、万物の不思議さを見た。それゆえ私は全能者の素晴らしさを深く実感した。しかし、私は心に純粋な愛を抱いたことはなく、直接全能者の素晴

らしさを見たこともなかった。今日、私は全能者の目に、好意を持って見ていただいている。私はついに、神の素晴らしさを感じ、人が神を愛するようになるのは、神が万物を創造したからだけではないことが、ようやくわかった。日常生活の中で、私は神の無限の素晴らしさを見つけた。今日のこの状況だけに限ることなどどうしてできようか。」

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの一生」より

154.神を理解せず、神の性質を知ることなく、神に対して本当の意味で心が開かれることはあり得ない。人々は、神を理解して初めて、神の心にある物事に関心を抱き、信仰心をもって理解し、感じるようになる。神の心にある物事を理解し、感じた時、神に対して心が少しずつ開かれてゆく。神に対して心が開いた時、神とのやりとりや神に対する要求、自分自身の過度な欲望がどれほど恥辱的で卑劣であるかを感じるようになる。神に対して真に心を開いた時、神の心が無限の世界であることや、自分が未体験の領域へと入ってゆくのが分かる。この領域には、欺きや欺瞞、闇や邪悪が全く存在しない。そこにあるのは誠実さと忠実さ、光と正しさ、義と優しさだけである。この領域は愛と思いやり、慈悲と寛容さにあふれ、この領域により生きていることの幸福と喜びを感じることができる。神に心を開いた時、神が啓示するのは、こうした事柄である。この無限世界は神の知恵と全能性、また神の愛と権威に満ちている。この無限世界では、神の中にある物事、神の存在、神に喜びをもたらす事柄、神が憂いを抱く理由、神が悲しむ理由、神が怒りを抱く理由のあらゆる側面を理解できる。神に対して心を開き、神を受け容れた者はみな、こうした事柄を理解する。神があなたの心に入ることができるのは、あなたが神に対して心を開いている場合のみである。神の中にある物事、神の存在、あなたに対する神の旨をあなたが理解できるのは、神があなたの心に入った場合のみである。この時、神に関する全ての物事が尊いものであること、神の中にある物事、神の存在が貴重なものであることを理解する。それに比べると、あなたの周囲の人々、生活の中にある物事、あなたの愛する家族、あなたの交際相手、あなたが愛する物事は、述べる価値もない。こうした人や物事は小さく卑しいもので、物理的な何かが自分を引き付けることは二度となく、あなたがそうした何かのために代償を払うことは一切ないと感じる。神の謙虚さの中から、神の偉大さと優越を見出し、さらに神の業で、小さな事と考えられた事柄の中から神の無限の英知と寛容さを見出し、神の忍耐強さ、神のあなたに対する理解を見出す。こうした事柄により、あなたの中に神への愛が生まれる。ここにおいて、人間がとてつもなく汚れた世の中で生活していること、身近な人々や生

活の中の出来事、そして自分が愛する人々や、そうした人々のあなたに対する愛、そして保護と呼ばれるものや懸念までもが、述べる価値すらないものと感じられ、あなたが愛するのは神のみであり、あなたにとって最も貴重な存在は神のみであると感じる。この日が来た時、あなたに「神の愛は甚大であり、神の本質は極めて聖なるものである。神には欺瞞、邪悪、ねたみ、争いが皆無であり、正義と信頼性があるのみであり、神の中にある物事や神の存在は人間が望むべきものである。人間はそれを求めて努力し、熱望すべきである。」などと言う者が居るであろう。それでは、そうした物事や存在を得る人間の能力は、何を基盤としているのだろうか。そうした能力は、神の性質や本質に関する人間の理解を基盤としている。したがって、神の性質や神の中にある物事、神の存在を理解することは、自分の気質を変え、神を知ろうと努力するあらゆる者にとって生涯をかけて学び、生涯をかけて追求することである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

155.神を知りたい、神を真に知りたいのであれば、ただ神の働きの三段階に限ってはいけません。神が以前に行なった働きの話だけに限ってはいけません。そのようにして神を知ろうとするのならば、神を一定の制限内に留めていることになります。神をあまりに無意味にみなしています。そうした結果は、あなたにどのような影響を及ぼすでしょうか。あなたは神の驚異性や崇高性、神の力や全能性、そして神の権威の範囲を決して知ることはないでしょう。そのような認識は、神が万物の支配者であるという真理をあなたが受け入れる能力、そして神の真の身分と地位に関するあなたの認識に影響を及ぼすでしょう。すなわち、もし神に関するあなたの認識の範囲が限られているならば、あなたが受け取ることのできるものも限られています。範囲を拡張して視野を広げる必要があるのは、このためである。それが神の働きの、神の経営の、神の支配の、あるいは神に支配され管理されている万物の範囲であるかに関わらず、あなたはそれらすべてを知り、その中にある神の業を知るべきです。そのような理解方法により、あなたは神が万物を支配し、管理し、万物にあらゆるものを供給しているということを感じないうちに感じるでしょう。それと同時に、あなたは自分が万物の一部であり、万物の一員であることを実感するでしょう。神は万物を供給するので、あなたも神の支配と供給を受け入れます。これは誰も否定することのできない事実です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 8」より

156.神の権威や力、神に固有の身分、神の本質に関する認識は、人間の想像に依存して得られるものではない。神の権威を知る上で想像に依存できないのであれば、どのよ

うにしたら神の権威に関する真の認識を得られるであろうか。神の言葉を飲食すること、交わり、そして神の言葉を体験して、神の権威に関する漸進的な経験と確認を得ることにより、神の権威に関する漸進的理解を得、累進的な知識量が得られるだろう。神の権威に関する認識を得る近道は存在せず、この方法によるほか無い。想像の回避を要求することは、何もせず受動的に破壊を待つようにさせることや、あらゆる行動を禁止することとは違う。自分の頭脳で考え、想像するのを避けるということは、論理を用いて推測するのを避け、知識を用いて分析するのを避け、科学を根拠とせず、その代わりに、自分が信じる神に権威があること、神が自分の運命を支配していること、神の力により常に神が神自身であることが証明されていることを、神の言葉、真理、自分が人生で経験するあらゆる物事により理解し、確認することを意味する。誰であれ神に関する理解を得ることができる方法は、これしかない。一部の者は、この目的を達成する簡単な方法を見つけ出そうとするが、そのような簡単な方法は思い当たるだろうか。考えるまでも無く、それ以外の方法は存在しない。神が述べたひとつひとつの言葉や行なった業の全てにより、神の中にある物事や神の存在を丁寧に、確実に知ることが、唯一の方法である。神を知る方法は、これしかない。神の中にある物事や神の存在、そして神の全ては空虚ではなく、実在するものである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

157.ある者の心の中にある神に関する認識の程度により、神がその者の心をどの程度掴んでいるかが決まる。その者が心の中でどれほど神を知っていようと、それがその者の心における神の偉大さである。あなたの知る神が空虚で曖昧な場合、あなたが信じる神もまた空虚で曖昧である。あなたの知る神が、あなたの範囲に限定されている場合、あなたの神は極めて小さい神であり、真の神と何の関係もない。ゆえに、神の実際の業や神の実際、神の全能性、神自身の真の身分、神が所有するものと神そのもの、神が万物において示した事柄を知ることが、神の認識を求める者それぞれにとって、極めて重要である。これらの事柄は、人が真理の現実に入れるか否かに直接関係している。神に関する認識を、言葉だけに限定した場合、あるいは自分自身の数少ない経験やあなた自身が数えるだけの神の恵み、神への証しだけに限定した場合、あなたが信じる神は、絶対に真の神では無いと言える。また、あなたが信じる神は想像上の神であり、真の神では無いとも言える。それは、真の神は、万物を支配し、万物と共にあり、万物を管理する神であるからである。その神こそが、人類全体と万物の運命を握っている神である。わたしが話をしている神の業は、ごく一部の人々に限定されていない。つまり、そうし

た業は、現在神に付き従う者に限定されていない。神の業は、万物に、すなわち万物の生存、万物の変化の法則において表されている。

あなたが神の万物における業を認識出来ないのであれば、あなたは神の業の証に立つことは出来ない。あなたが神の証に立つことが出来ない場合、自分が知っている小さな神、自分だけの考えに限定された、自分の狭い心の中に居る神とやらについて語り続ける場合、神があなたの信仰を讃えることは決して無いであろう。あなたが神の証に立つ時、自分がいかにして神の恵みを享受し、神の鍛錬と懲らしめを受け、神の祝福を享受しているかだけで神の証をするのであれば、それは甚だ不適切であり、神に満足してもらうには程遠いものである。神の心に沿う方法で神の証をすること、真の神自身の証に立つことを望むのであれば、神の業から神が持っているものや神が何であるかを理解する必要がある。あなたは、神による万物支配から神の権威を理解し、神が全人類に対して施すという事実を理解する必要がある。自分の食料や飲料、生活必需品が神に由来することを認めるのみで、神が万物により全人類に対して施すという事実、神が万物を支配することにより全人類を導いているという事実を理解しないのであれば、神の証に立つことは決して出来ない。あなたがたは、これで完全に理解したのである。わたしは、何を目的として話をしているであろうか。わたしの話の目的は、あなたがたがこの真理を軽視しないようにすること、わたしが話をしている事柄が、あなたがた自身がいのちに入ることと無関係であると考えないようにすること、そしてこれらの事項が単なる知識や原理であると思わないようにすることである。そうした態度でこの話を聞いた場合、あなたがたが得るものは皆無である。あなたがたは神を知る好機を失うであろう。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 9」より

158.人々は、神を知ることとは簡単ではない、と言うことが多々ある。しかし、わたしは、神を知ることが困難なことは全く無い、と述べている。なぜなら、神は人間が業を目にすることを頻繁に許しているからである。現在に至るまで、神が人間との対話を辞めたことは無い。神が人間から隠れ去ったことも無く、自らが隠れたことも無い。神の心、神の言葉、神の業は、全て人間に対して明示されている。したがって、人間が神を知ることを望む限り、様々な方法で人間は神を知ることが出来る。神は人間をことさらに避けている、神は故意に人類から隠れている、神には人間が神を理解することを許可するつもりが全く無い、などと人間が盲目に考える理由は、人間が神の存在を知らず、神を知ることを望まず、そして何よりも人間が創造主の心、言葉、業などに無関心だからである。事実を述べると、もし誰かが、余暇に創造主の言葉や業について考え、理解

し、創造主の心と、その心による言葉に注意を払ったとすれば、神の心、言葉、業は見ることが出来るものであり、明瞭なものであることに気付くのは困難ではない。同様に、創造主は常に人間の中にあり、人間や創造物すべてとの対話を行い、新たな業を毎日行っていることに気付くのに、努力はそれほど必要とされない。神の本質と性質は、神と人間との対話の中で表出され、神の心と考えは、神の業においてすべて明示されており、神は常に人間と共にあり、人間を見守っている。神は人間や創造物のすべてに対して、落ち着いた声で静かに語りかけ、「わたしは天にあり、わたしは万物の中にある、わたしは見守り、待っている。わたしはあなたの傍らにある」と述べている。神の手は温かく力強い。神の足取りは軽やかである。神の声は温和で優しい。神の身体はすれ違いざまに振り向いて人類すべてを抱擁する。神の表情は優美である。神は、立ち去ることも、消え去ることも無かった。神は、昼も夜も、常に人間と共にある。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 2」より

159.いつの日か、創造主はあなたにとって不可解なものでなく、隠された存在でもないと感じることができ、創造主があなたの前から隠れていたことは一切無く、決してあなたから遠く離れた存在でもないと感じることができ、また、創造主は、あなたが絶えず心の中で切望する方ではなく、あなたの感情が届かないような方ではなく、実際にあなたの左右に立ってあなたを見守り、あなたのいのちを満たし、あなたの運命を支配する方であると感じることができるようになるまで。神は遠く離れた地平線の彼方に存在するのでも、また雲の上に隠れている存在でもない。神は、あなたのすぐ側におり、あなたのすべてを支配し、あなたが持っているすべてであり、あなたが持っている唯一の方である。こうした神は、あなたが神を心から愛すること、神にすがりつくこと、神に寄り添うこと、神を敬愛することを許し、あなたに神を失うことを恐れさせ、あなたが神を放棄すること、神に従わないことを望まないようにし、また神を避けること、神から遠ざかることを望まないようにさせるのだ。あなたの唯一の望みは、神を思いやり、神に服従し、神が与えるすべてに報い、彼の支配に従うことだけになる。もはやあなたは、神に道を示され、神に与えられ、見守られ、保護されることを拒まなくなり、もう神が命じること、定めることを拒まなくなる。あなたの唯一の望みは、神に従い、神の左右と共に歩み、自分にとって唯一のいのち、唯一の主、唯一の神として神を受け入れることのみである。

『言葉は肉において現れる』の「神を知ることこそ、神を畏れ悪を避ける道」より



a.原文では「神を知る働き」。

## (XIII) 神を愛することをいかに追い求めるかについての言葉

160.神の本質は、ただ人間が信じるためだけのものではない。それ以上に、愛すべきものなのだ。しかし、神を信じる者の多くは、この「秘密」を見いだすことができない。人々はあえて神を愛そうとせず、また、愛そうと試みることもない。人々は神には愛すべき点が数多くあることを見つけだしておらず、神が人間を愛していること、人間にとって神が愛すべき存在であることを見つけだしていない。神の優れている点は、その働きに示されている。神の業を経験してはじめて、人は神のすばらしさを見つけだす。実際に体験してはじめて、神のすばらしさを認識するのであって、実際に体験することがなければ、誰一人神のすばらしさを見つけだせない。神の敬愛すべき点はまことに数多いのに、実際に神に触れることがなければ、人々はそれを見つけだせない。それはつまり、もし神が受肉しなければ、人々は実際に神に触れることができず、実際に神に触れることができないならば、その働きを経験することができず、そこで、人々の神への愛には偽りや想像が介在することになる。天にいる神への愛は、地上にいる神への愛ほどの真実味がない。天にいる神についての認識は、その目で見たり実際に体験したりしたことではなく、想像によるものだからだ。神が地上に来ると、人々は神の業とすばらしさをその目で見られる。神の実際的で正常な性質のすべてを見られるのだ。それらはみな、天にいる神についての認識より数千倍も現実的なものなのだ。人々が天の神をどれほど愛そうと、その愛に真実は何もない。人間の考えたものばかりだ。地上にいる神への愛がどれほどささやかなものであっても、その愛は実際的である。たとえごくわずかであっても、それでも現実のものなのだ。神は実際の働きを通して人々に自分を知らせになる。そして、その知識によって人々の愛を得られる。これはペテロと同じことだ。もし彼がイエスと共に暮らしたことがなければ、イエスを愛することは不可能だったろう。ペテロのイエスへの忠誠心もまた同じで、イエスとの交わりを通して築かれたものだ。人間が自分を愛するようになるため、神はおいでになって人々と共に生きた。そして人々が見て経験するものはみな、神の実際なのである。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる」より

161.神を愛することから学ぶ教訓ほど意味の深い教訓はなく、人々が生涯抱き続けた信仰から学ぶ教訓は、いかに神を愛するかであると言える。つまり、神を信じるなら、神を愛さなければならない。神を信じるだけで、神を愛さず、神についての認識を獲得

しておらず、心の底から湧き上がる本当の愛で神を愛したことがなければ、神に対するあなたの信仰は無益である。神を信じていても神を愛さなければ、あなたは無駄に生きていることになり、あなたの全人生はあらゆる人間の人生の中で最も低いものになる。あなたが生涯を通じて神を愛することも、神に満足してもらうこともなかったら、あなたが生きていることの意味は何なのだろう。あなたが神を信じることの意味は何なのだろう。それは無駄な努力ではないだろうか。つまり、人々が神を信じ、愛するつもりならば、代償を払わなければならない。何らかのやり方で外へ向かって行動しようとするよりはむしろ、彼らは自分の心の奥底にある本当の見識を求めるべきである。あなたが歌やダンスに夢中になっていても、真理を実践することができなければ、あなたが神を愛していると言えるだろうか。神を愛するには、あらゆる事において神の心を求めることが必要で、しかもあなたに何かが起きた時には心の中で深く探り、神の心を把握し、この件に関する神の心は何か、神はあなたに何を達成して欲しいのか、どのように神の心を覚えるべきかを知ろうとしなければならない。例えば、あなたが困難に耐えなければならない何かが生じたら、その時、あなたは神の心が何であるか、どのように神の心を大切にするかを理解するべきである。自分自身を満足させてはならない。まず自分自身のことは脇へどけておきなさい。肉体ほど卑しむべきものはない。あなたは神に満足してもらおうとしなければならないし、あなたの本分を果たさなければならない。そのように考えていれば、神はこの件に関してあなたに特別な啓発を与え、あなたの心も安心するだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

162.「愛」と呼ばれるものは、純粹できずのない感情を指し、心をもって愛し、感じ、思いやりをもつ。愛においては条件、障壁、距離がない。愛においては疑念、欺き、悪賢さもない。愛においては距離も不純なものもない。愛するならば、欺いたり、不平を言ったり、裏切ったり、反抗したり、強要したり、何か、何らかの額や量を得ようとしたりすることはない。もし愛するならば、喜んで犠牲を払い、苦労に耐え、わたしと融和するようになる。あなたは自分のすべてをわたしのためにあきらめるだろう。家族、将来、青春、そして婚姻をあきらめる。そうでなければ、あなたの愛は愛などではなく、欺きと裏切りである。

『言葉は肉において現れる』の「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」より

163.人々が自分の心で神に接し、その心が完全に神の方を向くことができる時、それは人間が神を愛することにおける第一歩である。神を愛したいのであれば、まず自分の

心を神に向けることができないかもしれない。心を神に向けるとはどういうことだろうか。それは、あなたの心の中で追求する全てが、神を愛し神を得るためである時のことであり、それはあなたが自分の心を完全に神の方へ向けたことを示す。あなたの心の中には神と神の言葉の他は、ほとんど何もない（家族、富、夫、妻、子、その他）。たとえ他に何かがあったとしても、それらがあなたの心を占めることはない。またあなたは、自分の将来性については考えず、ひたすら神を愛することを追い求める。この時、あなたは、完全に自分の心を神の方へ向けたことになるのだ。あなたが依然として心の中で自分自身の計画を立て、常に自分個人の利益を追求し、「いつになったら神にちょっとした願い事ができるだろう。私の家族はいつ裕福になるだろうか。もう少し上等な衣服はどうしたら手に入るだろうか。」などといつも考えているとしよう。このような態度で生活しているのであれば、それはあなたの心が完全には神の方を向いていないことを示している。あなたの心の中にあるのが神の言葉だけであり、あたかも神がとても親しいかのように、また神があなたの中にいてあなたが神の中にいるかのように、あなたが常に神に祈り、どんな時でも神に近づくことができる状態にあるならば、それは、あなたの心が神の臨在の中にあることを意味する。あなたが毎日神に祈り、神の言葉を食べて飲み、教会での働きのことをいつも考え、神の意志への配慮を示し、自分の心で神を真に愛し、神の心を満足させるのであれば、その時あなたの心は神のものになる。あなたの心が、それ以外の多くのことで占められているなら、あなたの心はまだサタンに占拠されており、ほんとうの意味では神の方に向いてはいない。ある者の心がほんとうに神の方へ向いている時、その人には神への真の自発的な愛があり、神の業のことを配慮することができるようになるだろう。その人の心は、依然として愚かで分別の無い状態であるものの、神の家の益のために、神の業のために、また性質の変化のために、配慮することができるだろう。その人の心は、完全に正されるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「神への真の愛は自発的である」より

164.人々にすべてが起こるのは、彼らが神に対する証しに固く立つことを神が必要とする時である。当面、あなたには重要なことは何も起こっていないし、あなたは重大な証しはしていないが、あなたの毎日の生活の詳細はすべて神への証しに関連している。あなたが兄弟姉妹、あなたの家族、あなたの周囲のすべての人から称賛を得られたら、また、いつか不信心者が来て、あなたの行うことのすべてを称賛し、神の行うすべては素晴らしいことがわかったら、その時、あなたは証しをしたことになるのである。あなたには洞察力がないし、能力は乏しいが、神があなたを全き者とすることによって、あ

あなたは神に満足してもらうことができ、神の心に留意することができる。他の人々は、最も能力の乏しい人々に神がとても偉大な働きを行ったことがわかるだろう。人々は神を知るようになり、サタンの前で克服者になり、ある程度神に忠実になる。この一群の人々ほど気骨を持っている人はいないだろう。これが最大の証しである。あなたは偉大な仕事をするとはできないが、神に満足してもらうことはできる。他の人々は自分の観念を脇にどけておくことができないが、あなたにはできる。他の人々は自分が実際に経験している間、神に証しをすることはできないが、あなたは実際の背丈と行動を使って神の愛に報い、神に対するはっきりとした証しをすることができる。これだけが実際に神を愛することとみなされる。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

165.人はサタンの影響から解き放たれることはなく、鎖につながれ暗闇の中で生きて来た。サタンに大きく影響を受けてから、人の性質はますます墮落してしまった。すなわち、人は絶えず墮落したサタンの性質を持ち、真に神を愛することもできず生きている。今後、人が神を愛したいと願うなら、独善、自尊心、高慢、うぬぼれ、そしてサタンの性質に属するすべてのものを取り除かねばならない。さもないと、人の愛は不純で、まさにサタンの愛そのものであり、そのままで神の承認を受けることなど断じてできない。もし人が聖霊によって直接完全にされ、扱われ、砕かれ、刈り込められ、訓練され、懲らしめ、練られるのでなければ、誰も神を真に愛することはできない。

『言葉は肉において現れる』の「墮落した人間は神を体現することができない」より

166.今日、大抵の人々はそのような認識を持っていない。そういう人々は、苦しみには価値がなく、自分は世の中から見捨てられており、家庭生活には問題があり、神に愛されておらず、将来は暗いと考えている。一部の人々にあっては、苦しみがある点に達し、死を考えるようになる。しかし、それは真の神への愛ではない。そうした人は臆病者であり、忍耐力を持たず、弱く、無力なのである。神は人に愛されることを強く願っているが、人が神を愛するほどその苦しみは大きく、より愛すればより人の試練も大きくなる。もしあなたが神を愛すれば、あらゆる苦しみがあなたにもたらされるであろう——そしてもし神を愛さなければ、多分何もかもが順調にゆき、あなたの周囲では何もかもが平和であろう。あなたが神を愛する時、周囲の多くの事が克服し難いと感じ、あなたの霊的背丈があまりにも小さいために精錬されるであろう。さらに、あなたは神を満足させることができず、神の旨はあまりにも崇高で、人の及ばぬところにあるといつも感じるであろう。そうした事すべてのために、あなたは精錬されるのである——内に

弱さが多くあり、神の旨を満足させられないものが多くあるため、内を精錬されるのである。しかし、あなたがたは、穢れは精錬によってしか拭い去れないとはっきり知らなければならない。このように、終わりの日に、あなたは神に対して証しとならなければならない。あなたの苦しみがいかに大きくても、最後まで経験しなければならず、あなたの呼吸が止まるまで神に対して忠実であり続け、神に身を委ねていなければならない。これのみが真に神を愛するという事であり、これのみが強く確固とした証しとなるのである。サタンの誘惑を受けたら、「私の心は神のものであり、神は既に私を得た。私はあなたを満足させることはできない——私のすべてをもって神が満足されるようにしなければならない」と言うべきである。神を満足させるほど、神はあなたに祝福を与え、神へのあなたの愛は強くなる。そして、信仰と決意を持ち、神を愛して生きることほど価値や意義があるものはないと思うであろう。神を愛すれば、悲しみがなくなるとも言える。肉が弱く、多くの深刻な問題に悩む時があっても、その間あなたは真に神に頼り、霊の内に慰めを得、確信を持ち、頼るものがあると感じるであろう。このようにして、あなたは多くの状況を克服することができ、降りかかる苦しみのために神に対し不平を言うことはないであろう。あなたは歌い、踊り、祈り、集って交わり、神のことを考えたいと思うであろう。そして、あなたの周囲にある、神によって整えられたすべての人々や物事はふさわしいものと感じるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「辛い試練を経験して初めて、神の素晴らしさを知ることができる」より

167. 人がサタンの影響を最も受けやすくなるのは苦しい精錬の間である。そのような精錬の間にどのようにあなたは神を愛すれば良いのだろうか？強い意志を持ち、あなたの心を神の前に明け渡し、持てる時間全てを神に捧げるべきである。神がどのようにあなたを精錬しても、あなたは真理を実践して神の意を満たし、自ら神を求め、神との交わりを求めるべきである。このような時には、消極的になるほどより否定的になり、容易に後退してしまうだろう。自分に与えられている役割を果たすことが必要なときは、たとえうまくできないとしてもできる限りのことを行いなさい。神へのあなたの愛だけを使って行いなさい。あなたがうまく行ったとか失敗したなどと他人は言うだろうが、他人が何を言おうとあなたの動機は正しく、あなたは独善的ではない。あなたは神のために行動しているからである。他人があなたを誤解しても、あなたは神に祈り、このように言うことができる。「ああ神様！私は他人が私に寛容であることも私をよく扱うことも願いませんし、私を理解したり認めたりすることも願いません。あなたを愛することができ、心穏やかになり、私の良心が澄み切っていることだけを願います。他人が

私を賞賛することや高く評価することを私は望みません。私は心からあなたの意を満たすことを求めるだけです。できる限りのことを行って私の役割を果たします。私は拙く、愚かで、力量もなく、盲目ですが、神は愛らしいと知っており、私が持つものすべてを喜んであなたに捧げます。」このように祈ればすぐに神へのあなたの愛が現れ、あなたの心はさらに安心する。これが神への愛を実践することの意味である。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

168.精錬の間に人はどのように神を愛するべきか？神を愛する決意をして神の精錬を受け入れることによってである。精錬されている間、あなたは心の内に苦しみを抱く。それはあたかもナイフで心をえぐられるかのようであるが、それでもあなたは神を愛する心により神の意を満たそうとし、肉を労わろうとはしない。これが神への愛を実践することの意味である。内面で傷つき、痛みはあるレベルに達しているが、あなたは依然喜んで神の前に来てこう祈る。「ああ神様！私はあなたから離れることはできません。私の中には暗闇がありますが、それでもあなたの意を満たしたいのです。あなたは私の心をご存知です。あなたの更なる愛を授かりたいのです。」これが精錬の間の実践である。神への愛を基礎として使えば、精錬によりあなたは更に神に近づき、神との親密さが増す。あなたは神を信じているのだから、神の前にあなたの心を差し出さねばならない。神の前であなたの心を捧げ、あなたの心を神に委ねるなら、精錬の間にあなたが神を否定することや神から離れることはできなくなるだろう。このようにして神とのあなたの関係はより親密により正常になり、神との交わりはより頻繁になるだろう。常にこのように実践すれば、あなたはさらに多くの時間を神の光の中で過ごし、神の言葉の導きの下でより多くの時間を過ごし、あなたの性質にもより多くの変化が起き、認識は日々増えるだろう。その日が来て神の試練が突然降りかかっても、あなたは神の側に立つことができるだけでなく、神への証も立てることができるだろう。その時、あなたはヨブやペテロのようであるだろう。神への証を立て、あなたは真に神を愛し、喜んで神のために命を投げだすだろう。あなたは神の証人であり、神に愛される者となろう。精錬を経た愛は強く、弱くはない。いつ、どのように神があなたを試練にあわせるかにかかわらず、あなたは自らの生死に悩むことなく、喜んで神のためにすべてを捨て、神のためにどんなことでも耐えることができる。かくして、あなたの愛は純粹になり、信仰は真となるだろう。そうして初めてあなたは真に神に愛される者となり、神により全き者となるのである。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

169.神がどのように働くのか、あなたがどんな状況に置かれているのかに関わらず、いのちを追い求め、あなたの内で神の業が行なわれることを求め、真理を追求することが出来るなら、神の働きに関する認識を得て、真理に従って行動出来るなら、それはあなたの真の信仰であり、あなたが神への望みを失っていないことを示している。あなたがなおも精錬を通して真理を追求し、神を真に愛し、神への疑念を募らせない場合にのみ、神がどんなことをしようと、あなたがそれでも神を満足させるために真理を実践し、神の意志を深く追求し、神の意志に気を配ることが出来る場合にのみ、それはあなたが神への真の信仰を持つことを意味する。以前、神が、あなたが王として治めるであろうと語った時、あなたは神を愛した。また、神があなたに自身を明らかに示した時は、あなたは神を追い求めていた。現在、神は隠され、あなたは神を見ることができない。そして、あなたは多くの問題にぶつかっている。こんな時、あなたは神への望みを失うだろうか。故に、あなたは、どんな時にもいのちを追い求め、神の意志を満足させることを求めなければならない。これが真の信仰というものであり、最も真実で美しい愛である。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

170.そしてペテロは何を一番後悔したのだろうか。イエスはペテロに別の質問をした（それはこのようには聖書に記録されていないが）。それは、ペテロが、「あなたは生ける神の子です。」と言ってから間もないことで、それは、「ペテロよ、あなたはかつてわたしを愛したことがあるのか。」という質問だった。ペテロにはイエスの言ったことの意味が分かった。そして、「主よ！私はかつて天の父を愛しましたが、私はあなたを愛したことがなかったことを認めます。」と答えた。するとイエスは、「人が天の父を愛さないなら、地上の子をどうして愛することができるのだろうか。もし人が神によって遣わされた子を愛さないなら、彼らは天の父をどうして愛することができるのだろうか。もし人が地上の子を本当に愛するなら、彼らは天の父も本当に愛しているのだ。」と言った。ペテロはこれらの言葉を聞いたとき、自分の欠点に気づいた。彼はいつも「私はかつて天の父を愛しましたが、あなたを愛したことは一度もありませんでした。」と言って涙を流すほど後悔した。イエスが復活し、昇天してから、ペテロはさらに自責の念にかられ、悲しんだ。自分の昔の働きや現在の背丈を思い出して、彼は神の願いを満たしていなかったことや、神の基準に達していなかったことを常に後悔し、負い目を感じて、しばしば祈りの中でイエスのもとへ行った。これらのことは彼の最大の重荷となった。ペテロは、「いつか私は、私が持っているもの全てと、私の全てをあなたに捧げ



ます。私はもっとも価値あるものをなんでもあなたに捧げます。」と言った。また彼は、「神よ、私には一つの信仰と一つの愛しかありません。私の命には何の価値もありませんし、私の体にも何の価値もありません。私には一つの信仰と一つの愛しかないのです。私の思いの中ではあなたへの信仰を持っており、心の中ではあなたへの愛を持っています。あなたに捧げるものはこの二つしかなく、他には何もありません。」と言った。ペテロはイエスの言葉で大いに励まされた。それは、十字架につけられる前にイエスがペテロに「わたしはこの世の者ではない。あなたもこの世のものではない。」と言ったからである。後に、ペテロが苦悩の絶頂に達したとき、「ペテロよ、あなたは忘れてしまったのか。わたしはこの世のものではない。わたしが早く去って行ったのは、わたしの働きのためだけだ。あなたもこの世のものではない。忘れてしまったのか。あなたに2度言ったが、覚えていないのか。」とイエスは彼に思い出させた。ペテロはイエスの言葉を聞いて「私は忘れていません！」と言った。それからイエスは言った。「あなたは天で一度わたしと幸せな時を過ごし、わたしのそばでしばらく過ごしていた。あなたはわたしがいなくて寂しく思っているが、わたしもあなたがいなくて寂しい。わたしの目には被造物は言うに値しないが、純朴で愛しい者をどうして愛さずにはいられようか。あなたはわたしの約束を忘れてしまったのだろうか。あなたは地上でわたしが与えた使命を受け入れなければならない。わたしが託した任務を果たさなければならない。いつかあなたを必ずわたしのそばに導くであろう。」これを聞いて、ペテロは増々励まされ、さらに大きな靈感を受け、その結果、彼が十字架につけられたとき、「神よ！私はあなたをいくら愛しても十分ではありません。たとえあなたが私に死ねと言われても、やはり私は十分愛したとは言えません。あなたが私の魂をどこに送られても、あなたが約束を果たされても果たされなくても、あなたがその後何をなされても、私はあなたを愛し、信じます。」とすることができた。彼がしっかり持っていたのは彼の信仰と真の愛だった。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロはどのようにしてイエスを知るようになったか」より

171.晩年ペテロは、完全にされた後、「神よ、もし私の余命があと数年であるならば、あなたへの一層清く深い愛を達成することを望みます。」と述べた。ペテロは、十字架に釘付けにされる直前に、心の中でこう祈った。「神よ、ついにあなたの時が来ました。あなたが私のために用意された時が来ました。私はあなたのために十字架に架けられ、この証しをしなければなりません。私の愛があなたの要求を満たし、一層清くなることを願います。今日あなたのために死ぬること、あなたのために十字架に架けられる

ことは、私にとって慰めとなり、励みとなります。なぜなら、あなたのために十字架に釘付けにされ、あなたの望みを満たし、自らをあなたに捧げ、私の命をあなたに捧げることができることはこの上ない喜びだからです。神よ、あなたはほんとうに愛しいお方です。もし私が生きることをあなたが許されるならば、私は一層あなたを愛することを望むでしょう。生きている限り、私はあなたを愛するでしょう。私は、あなたを一層深く愛することを望みます。あなたは私を裁かれ、刑罰を与えられ、私を試されます。なぜなら私が不義であり、罪を犯したからです。そして、あなたの義なるご性質が私には一層明らかになります。それは私にとって祝福です。なぜなら、私はあなたを一層深く愛することができ、あなたが私を愛されなかったとしても、私はあなたをこうして愛することを望むからです。私はあなたの義なるご性質を見ることを望みます。なぜなら、そうすることにより、私は有意義な人生を実際に生きることができるようになるからです。私の人生は今より有意義であると感じます。なぜなら、私があなたのために十字架に架けられ、あなたのために死ぬことは意味のあることだからです。しかしながら、私はまだ満足していません。なぜなら、私はあなたのことをほとんどほんの少ししか知らず、私はあなたの望みを完全に満たせず、あなたにほとんどほんの僅かしか報いなかったからです。私は人生において私のすべてをあなたに報いることができずにおり、それには遠く及びません。今、振り返ってみると、私はあなたに大きな負債があり、自分のすべての過ちと、わたしがあなたに報いなかった全ての愛を償うために、私にはこの瞬間しかありません。」

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

172.神を愛する者だけが神を証しでき、彼らだけが神の証人であり、彼らだけが神の祝福を受け、彼らだけが神からの約束を受け取る。神を愛する者は神と親しい者であり、神に愛され、神と共に幸いを享受できる。こうした人々だけが永遠に生き、また、こうした人々だけが神の顧みと守りの下、永遠に生きる。神は愛するべき対象であり、人々に愛されるにふさわしい対象だが、すべての人が神を愛せるわけではない。誰もが神を証しして、神と共に力をもつわけでもない。神を証しできるので、すべての努力を神の働きに捧げられるので、真に神を愛する者は天下のどこを歩いてもあえて敵対しようとする者がいない。また、地において力を振るい、神の民みなを支配できる。こうした人々は世界中からやって来る。話す言葉は違い、肌の色も異なっているが、その存在は同じ意味を持っている。彼らには神を愛する心があり、みな同じ証しをし、同じ決意を持ち、同じことを願っている。神を愛する者は世界中を自由に歩くことができ、神を証

しする者は、全宇宙を旅できる。こうした人々が、神の愛する者であり、その人たちは神の祝福を受けており、神の光の中で永遠に生きる。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる」より

## (XIV) 裁きと刑罰、試練と精錬をいかに経験するかについての言葉

173. 人間の状態と神に対する態度に直面し、神は新しい働きを行い、神に対する認識と服従を人に得させ、愛と証しの両方をも得させた。従って、人は神による精錬、神の裁き、取り扱いや刈り込みを経験しなければならず、それなしでは人は神を知ることにも決してなく、神を真に愛し、神への証を立てることもできない。神による人間の精錬は一方的な効果のためだけでなく多面的な効果のためである。決意と愛を完璧にするため、このような方法でのみ、真理を求めようとする人々の中で神が精錬の働きを行う。真理を求めようとする人々、そして神を慕う人々には、このような精錬より意味のあるもの、大きな援助となるものはない。つまるところ神は神であり、神の性質はそれほど容易に人により知られ理解されるものではない。一日の終わりに神が人と同じ性質を持つようなことはなく、したがって人が神の性質を知ることが容易ではない。真理は人が本質的に持っているものではなく、サタンによって墮落した人々が容易に理解するものではない。人には真理がなく、真理を実践する決意がなく、苦しみを受け、精錬されるいは裁かれなければ、人の決意は決して完璧にならないだろう。すべての人々にとって精錬は耐えがたく、受け入れ難いものであるが、神が義なる性質を人に明らかにし、人に対する要求を公にし、より多くの啓きとより現実的な刈り込みと取り扱いを与えるのは精錬の間である。事実と真理の比較により、神は人自らについてのより大きな認識と真理を人に与え、神の心をより深く理解させ、そうしてより真理に近く純粋な神への愛を人に得させる。それらは精錬を実行する神の諸目的である。人の中で神が行う働きのすべてには固有の目的と意義がある。神は無意味な働きをせず、人に恩恵がない働きもしない。精錬は人々を神の前から取り除くことを意味するものではなく、地獄で人々を滅ぼすことも意味しない。それは精錬の間に人の性質を変え、動機や従来の方見を変え、神に対する人の愛を変え、人の一生を変えることを意味する。精錬は人の真の試練のひとつであり、真の鍛錬の一形態であり、精錬の間のみ人の愛はその本質的な機能を果たすことができる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

174. 人が神への信仰において求めるのは、将来のための祝福を得ることです。それが人の信仰における目的なのです。誰もがこの意図と望みを持っていますが、人間の本性にある墮落は試練を通じて解決されなければなりません。あなたが清められていない

側面はどれも、あなたが精錬されなければならない側面です。これが神の采配です。神はあなたのためにある環境を作り、そこで強制的に精錬されるようにすることで、自らの墮落を知ることができるようにさせます。最終的に、あなたはむしろ死んで自分の企みや欲望を捨て、神の主権と采配に服従したいと思うまでになります。それゆえ、数年間の精錬を受けておらず、ある程度の苦難を経ている人は誰も、自身の考えや心における肉の墮落の束縛を捨て去ることが出来ないでしょう。あなたはどの側面においてもいまだサタンに束縛され、自分の欲望と要求を抱いていますが、それらの側面において試練を受けなければなりません。人は試練を通じることでのみ教訓を学び、真理を得て、神の意図を理解することができます。実際、多くの真理はつらい試練を経験することで理解されます。楽な環境にいるときや状況が好都合なとき、神の考えを理解したり、神の全能性と知恵を認識したり、神の義なる性質を正しく理解したりすることは誰にもできません。そのようなことはありえないでしょう。

『キリストの言葉の記録』の「試練のさなかに神を満足させるには」より

175. 神の性質を知らなければ、あなたは試練の最中に必ず倒れるだろう。なぜならあなたは神がどのように人々を完全にするか気づいていないし、どのような手段で神が人々を完全にするか、いつ神の試練があなたに降りかかり、それらがあなたの観念に合わないかを気付かないので、しっかり立っていることができないからである。神の本当の愛は神の全性質であり、神の全性質があなたに示される時、これはあなたの肉体に何をもたらすだろう。神の義である性質があなたに示される時、あなたの肉体は必然的に多くの痛みを苦しむだろう。あなたがこの痛みを苦しまなければ、あなたは神によって全き者とされないし、本当の愛を神に捧げることもできないだろう。神があなたを全き者とすれば、神は必ずその全性質をあなたに示すだろう。天地創造の時から今日まで、神は全性質を見せたことはなかった――しかし、終わりの日の間、神は運命づけて、選んだこの人々の一群に神の性質を明らかにし、人々を全き者とさせることによって神の性質をさらけ出し、それによって人々の一群を完全にする。それが人々に対する神の本当の愛である。人々に対する神の本当の愛を経験するには、激しい痛みを耐え、高い代償を払うことが要求される。その後ようやく人々は神のものとされ、彼らの本当の愛を神に還元することができ、そうして初めて神の心は満ち足りる。人々が神により全き者とされることを望むなら、また、神の意志を行い、彼らの本当の愛を十分に神に捧げることを望むなら、彼らは多くの苦しみとたくさんの苦痛を周囲の状況から経験しなければならず、死よりもひどい痛みを苦しむためには、結局彼らは本当の心を神に還元する

ことを強いられる。本当に神を愛しているかどうかは困難と純化の期間に明らかにされる。神は人々の愛を清めるが、これも困難と純化の真ただ中でしか達成されない。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛することだけが本当に神を信じることである」より

176. 人間は、自分で自分の性質を変化させることができない。人々は神の言葉による裁き、刑罰、そして辛い精錬を受けるか、あるいは神の言葉による取り扱いと懲らしめ、刈り込みを受けなければならない。その後初めて、彼らは神への従順と献身を実現することができ、神を欺こうとしたり、いい加減に神に対応したりしなくなる。神の言葉による精錬のもとで、人間の性質は変化するのである。神の言葉による暴露、裁き、懲らしめ、そして取り扱いを受ける者のみが、見境なく行動しなくなり、平静沈着となる。最も重要な点は、神の現在の言葉と業に従えることであり、たとえそれが人間の観念と一致しない場合でも、それらの観念を捨てて、意図的に従うことができる、ということである。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変化した者たちとは神の言葉の現実の中へ入った人々である」より

177. 墮落を清められ、いのちの性質の変化を経たいと思うなら、真理を愛し、真理を受け入れることができればなりません。どのように真理を受け入れますか。真理を受け入れるとは、自分にどのような墮落した性質があらうと、あるいは赤い大きな竜のどのような害毒に本性が冒されていようと、神の言葉によって暴かれたらそれを認め、神の言葉に服従するということです。理由も選択の余地ももたないまま、無条件でそれを受け入れ、神の言葉に従って自分を知るのです。それが神の言葉を受け入れるということです。神が何と言おうと、どのような言葉を用いようと、それらの言葉がどれほどあなたの心を刺し貫こうと、真理である限りそれを受け入れることができ、現実と一致する限りそれを認めることができます。自分がどれほど深く理解しているにかかわらず神の言葉に服従でき、兄弟姉妹が伝える聖霊からの啓きの光を受け入れ、それに従います。このような人による真理の追求がある段階に達すると、真理を得て性質の変化を成し遂げることができます。

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることでのみ、性質の変化を成し遂げられる」より

178. 神の言葉の裁きを受けるとき、苦しみを恐れたり、痛みを心配したりしてはいけません。まして、神の言葉が自分の心を刺し通すのではないかと恐れてはいけません。神が私たちをどのように裁いて罰するか、私たちの墮落した本質をどのように暴くかについて、私たちは神の発する言葉をもっと読むべきであり、神の言葉を読みながら、

もっと頻繁に自分とそれらを比べなければなりません。私たちにはこれらの墮落がどれもありますが、私たちは誰しもそれと向き合うことができます。…私たちは信仰の中で、神の言葉が真実であることを固く保たなければなりません。それは実際に真実なので、理知的に受け入れなければなりません。それを認識したり認めたりすることができようとできまいと、神の言葉に対する私たちの態度はまず絶対的な受容の態度でなければなりません。神の言葉の各文はある特定の状態に関するものです。つまり、神の発言の各文はみな外面的な現象に関するものではなく、ましてや外面的な規則に関するものでも、人々の単純な行動形態を暴くものでもありません。神の発言の各文を、人間の単純な行動あるいは外面的な現象を暴くものとして見るならば、あなたには霊的理解が一切なく、真理とは何かを理解していません。神が露わにするのはひとえに人の墮落した性質と、人のいのちの中にある、根深く本質的な要素に関することなのです。それらは外面的な現象ではなく、外面的な振る舞いでは特にありません。外面的な現象から人を見るならば、誰もが申し分なく見えるでしょう。しかし、神はなぜ、悪霊である人間もいれば、汚れた霊である人間もいると言うのですか。それは本質に関係する問題であり、あなたに見えるものではありません。ゆえに、外面的現象をもって神の言葉と比較することはできないのです。…

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることの重要性とその道」より

179. 神の支配を信じるなら、毎日起きる物事はよいことであれ悪いことであれ、偶然の出来事ではないことを信じなければなりません。神の支配を信じるなら、毎日起きる物事はよいことであれ悪いことであれ、偶然の出来事ではないことを信じなければなりません。誰かがわざとあなたにつらく当たったり、あなたを標的にしたりしているのではなく、実はすべて神が采配し、指揮しているのです。神は何のためにこれらの物事を指揮するのですか。あなたの短所を暴くためでも、あなたを露わにするためでもありません。あなたを露わにすることは最終目標ではないのです。最終目標はあなたを完全誰かがわざとあなたにつらく当たったり、あなたを標的にしたりしているのではなく、実はすべて神が采配し、編成しているのです。神は何のためにこれらの物事を編成するのですか。あなたの短所を暴くためでも、あなたを露わにするためでもありません。あなたを露わにすることは最終目標ではないのです。最終目標はあなたを完全に救うことです。神はどのようにそれを行ないますか。まず、神はあなたの墮落した性質、本性と本質、短所、そして欠けているものをあなたに気づかせます。これらのことを心の中で理解して初めて、真理を追い求めて墮落した性質を徐々に捨て去ることができます

。これは神が機会を与えているのです。あなたはこの機会をどのように掴むべきかを知らなければならず、神と角突き合わせてはいけません。とりわけ、神があなたの周りに配した人や出来事や物事に向き合うとき、自分の望み通りでないと考えたり、逃れようと思ったり、神を責めて誤解したりするばかりではいけません。それは神の働きを経験することではなく、真理の現実に入るのを非常に難しくします。完全には理解できない物事が何であっても、困難を抱えたときは服従することを学ばなければなりません。まずは神の前に出向いてもっと祈るべきです。そうすれば、知らないうちに自分の内なる状態が変わり、真理を求めて問題を解決できます。あなたは神の働きを体験できるので、その間にあなたの中で真理の現実が生じ、そのようにしてあなたは前進し、いのちの状態が変化します。いったんこの変化を経験して、そのような真理の現実を得たならば、あなたは霊的背丈を有するようになり、霊的背丈とともにいのちが生じます。

『キリストの言葉の記録』の「真理を得るには、周囲の人や物事から学ばなければならない」より

180. 神は一人ひとりの中で働きを行ないますが、その方法が何であれ、どのような人や物事を使って力を尽くすのであれ、言葉の調子がどういったものであれ、神の最終目標は一つしかありません。それはあなたを救うことです。あなたを救うとは、あなたを変えることを意味しますが、どうして少しばかりの苦しみを受けないでいられるでしょうか。あなたは苦しまなければなりません。この苦しみには多くのことが含まれます。ときに神はあなたの周囲に人や物事を配し、あなたを露わにし、あなたが自分自身を知るようにすることがあります。さもなければ直接あなたを取り扱い、刈り込み、露わにします。手術台の上の人と同じに、よい結末を迎えるにはいくらかの苦しみを経験しなければならないのです。神があなたを刈り込んだり取り扱ったりするたびに、人や物事を配するたびに、あなたの感情がかき立てられ、士気が高められるなら、そのような経験は正しく、あなたは霊的背丈を得て真理の現実に入ってゆきます。あなたが刈り込まれて取り扱われ、神に環境を配されるたび、何の苦痛も不快も覚え、まったく何も感じないなら、あるいは神の前に出てその心意を理解することも、祈ることも真理を求めることもしないなら、あなたは本当に麻痺しきっています。あまりに麻痺している人には霊的な感覚が決してありません。ゆえに、神には彼らに働きを行なう方法がありません。神はこう言うでしょう。「この人はあまりに麻痺していて、あまりに深く墮落させられてきた。私はこの人に多くのことを行ない、多くの努力を傾けてきた。それなのに、いまだ彼の心に呼びかけて霊を目覚めさせることができない。これは大いに問題であり、困難なことだ。」神があなたのために特定の環境や人や物事を采配し、あなたを



刈り込んで取り扱ったとき、あなたがそこから教訓を学び、神の前に出て真理を求めるようになり、知らぬ間に啓かれ照らされ、真理を得たなら、あなたがこれらの環境において変化を経験し、報いを受け取り、進歩を遂げたなら、あるいは神の意図を少し理解し始め、不満を言うことをやめたなら、それはどれも、あなたがこのような環境の試練のなかでしっかり立ち、試練に耐えたことを意味します。このようにして、あなたはこの試練を経るのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理を得るには、周囲の人や物事から学ばなければならない」より

181. 人の墮落した性質は人々のあらゆる思いや考え、人々のあらゆる行動の背後にある動機に潜んでいます。それは、神が行うすべてのことへの取り組みにおいて、人が持つ意見、理解、観点、欲求のひとつひとつに潜んでいます。では、神はどのようにして人のこれらの事柄に取り組みますか。神はあなたを明らかにする環境を整えます。神はあなたを明らかにするだけでなく、あなたを裁くでしょう。あなたが持つ墮落した性質が明らかにされる時、神に敵対する考えや見解があなたにあるなら、そして神と争う状態や観点があなたにあるなら、また、神を誤解したり、神に抵抗して反対したりするような状態があなたにあるなら、神はあなたを叱責し、裁き、罰し、時には懲罰して鍛錬することさえあるでしょう。あなたを鍛錬する目的は何ですか。それは、あなたが考えることは人間の観念であり、それらは間違っていることをあなたに理解させることです。あなたの意図はサタンから、人間の意思から生じており、神と相容れず、神の旨を満足させることもできません。神はそれを嫌い、憎み、激怒します。そのためそれを呪うほどです。いったんこのことを知ったなら、自分の意図を変えなければなりません。どうしたらそれを変えられますか。まず何より、神があなたに接する方法、そして神があなたのために配する環境、人、出来事、物事に従順でなければなりません。何事においても欠陥を見つけようとしてはならず、客観的な理由を探したり、自分の責任を回避したりしてはいけません。それに加え、神が行なっている物事の中に、自分が実践して入るべき真理は何かを探し求めなければなりません。神があなたに整える環境にあなたが従順であり得るように、そして最終的に、神の旨に従って、神があなたに求めることをあなたが実践できるよう、そして神の旨を満たすことができるように、あなたの墮落した性質とサタンの本質をあなたが認識することを神は望みます。

『キリストの言葉の記録』の「真に服従していることだけが本当の信仰である」より

183. 神の精錬が大きいほど人々は神をさらに愛することができる。人々の心の苦しみは人々のいのちに有益であり、神の前でより平穏になり、神との関係がより近くなり

、神の至高の愛と救いをよりよく理解できる。ペテロは何百回も精錬を経験し、ヨブはいくつかの試練を受けた。あなた方が神によって全き者になることを望むのであれば、あなた方も同じく何百回も精錬を経験しなければならない。この過程を通過してのみ、この過程に依拠することによってのみ、あなたは神の心を満たすことができ、神によって全き者になるのである。精錬は、神が人を完全にする最も良い手段である。精錬と厳しい試練だけが神への真の愛を人々の心にもたらす。苦難がなければ人々は神への真の愛に欠ける。もし人々が試練により試されず、真に精錬されなければ、人々の心は常に外側を漂い続けるだろう。ある程度まで精錬された後、あなたは自分の弱みと困難を理解し、どれほど欠けるところがあるか、遭遇する多くの問題をどれほど克服できないか、あなたの不従順がいかに大きなものかを知るようになるだろう。試練の間のみ人々は現実の状態を正しく知ることができるだろう。そして試練によって人々が全きものとなることがより可能になる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

184. 神が人間を精錬する業を行う時、人間は苦しむ。精錬が大きいほど人間の神への愛は深まり、人間の内に神の力がさらに現される。人間の精錬が少なければ少ないほど、人間の神への愛も少なくなり、人間の中に現される神の力も少なくなる。人間の精錬と苦痛、苦悶が多ければ多いほど、人間の神に対する真の愛が深まり、神への信仰も更に純粋なものとなり、神に関する人間の認識も深まる。多くの精錬と苦痛、多くの取り扱いと懲らしめを受ける者は、神への深い愛を持ち、神に関して、もっと深遠で鋭い認識を持つようになることを、あなたは経験の中で知るであろう。取り扱いを体験しなかった者には、表面的な認識しか無く、ただ「神は本当に良いお方だ。人々が神を楽しめるように、彼らに恵みを授けられる。」と言うことしか出来ない。取り扱いと訓練を体験した場合、人間は神に関する真の認識を話すことができるようになるのだ。したがって、神による人間の内なる業が驚異的であればあるほど、それは一層貴重であり、有意義なものである。あなたにとって、それが測り知れないものであればあるほど、またそれがあなたの見解と相容れないものであればあるほど、神の業は、さらにあなたを征服し、あなたを獲得し完全にすることができる。神の業の意義とは、かくも甚大である。もし神がこのように人間を精錬しなかったら、もし神がこのような方法によって働かなかったら、神の業は効果に乏しく、その意義を失ってしまうだろう。これが、神が終わりの日に一群の人々を選んだ特別な意義の背後にある理由である。神がこの会衆を選び獲得するであろうことは、以前に語られていた。神によってあなたがたの内に遂行さ

れる業が大きければ大きいほど、あなたがたの神に対する愛は一層深く純粋なものとなる。神の業が大きければ大きいほど、人は神の知恵を一層味わうことが出来るようになり、神に関する認識もより深くなる。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

185. 神の業の各段階において、従うべき人間の協力のしかたがある。神は、人間が精錬において確信を持てるように、人間を精錬する。神は、人間が神により完全なものとされることを確信し、進んで神の精錬を受け、神により取り扱われ、刈り込まれるように、人間を完全なものとする。神の霊は、人間を啓き照らして、人間を神に協力させ、実践させるために、人間の中で作用する。神は、精錬の最中に言葉を述べない。神は黙しているが、それでも人間がなすべき業は存在する。あなたは、すでにもっている物事を保ち、神のために祈れるべきであり、神のそばから離れず、神の前で証しに立つことが出来なければならない。そうすれば、あなたは自らの本分を尽くすことが出来るであろう。人間の確信と愛に対する神の試練においては、人間が神に対する祈りを増加させ、神の前で神の言葉を一層頻繁に味わうことが必要である、ということを、あなたがた全員が神の業から理解すべきである。神があなたを啓き、あなたに神の旨を理解させているにもかかわらず、あなたがそれを全く実践しなかったとしたら、あなたは何も得ないであろう。あなたは、神の言葉を実践する時でも神に対して祈ることが出来る必要があり、また神の言葉を味わう時は、落胆したり冷めたりせずに常に神の前で求め、神に対する確信に満ちていなければならない。神の言葉を実践しない者は、集会の時は活力に溢れているが、帰宅すると闇に陥ってしまう。中には、集会に参加することを望まない者さえ居る。そうしたわけで、あなたは人間が尽くすべき本分を明瞭に理解する必要がある。あなたは、神の旨が本当は何であるかを知らないかも知れないが、それでも自分の本分を尽くし、祈るべきときに祈り、真理を実践すべきときに実践し、人間がなすべきことを行うことが出来る。あなたは元来のビジョンを保つことができる。そうすることで、神の業の次の段階を受ける能力が高まるであろう。神が隠れたやり方で業を行う時に、あなたが求めなかった場合、それは問題である。神が集会で話し、説教をする時、あなたは熱心に聴き入るが、神が黙している時、あなたは活力が無くなって退散する。これはどのような種類の者であろうか。こうした者は、成り行きに身をまかせるだけの者である。こうした者には、心構えも証しもビジョンも無いのだ。殆どの人間が、このような者である。あなたがこうした状態を続けた場合、ある日、大きな試練に遭遇した時、懲罰に陥るであろう。心構えを持つことは、神が人間を完全とする上で極め

て重要である。あなたが神の業のいずれの段階も疑わず、人間の本分を尽くし、神が自分に実践させている物事を真摯に保つのであれば、すなわち、神の勧告に留意し、神が今どのような業を行っても神の勧告を忘れず、神の業に疑念を抱かず、自分の心構えを維持し、自分の証しを守り、その道のあらゆる段階で勝利するならば、最終的にあなたは神により完全にされて、勝利者となるであろう。あなたが、神の試練のあらゆる段階に揺るぎなく耐えることが可能であり、最後まで強く立っていることができるならば、あなたは勝利者であり、神により完全にされた者である。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは神への忠誠を保たなければならない」より

186. 人間が試練を受けている時に弱くなったり、自分に否定的になったり、神の意志や自分の実践の道に明瞭性を欠くのは、普通のことである。しかしいずれにせよ、あなたは、ヨブのように、神の業を信じ、神を否定しないようにする必要がある。ヨブは弱く、自分が生まれた日を呪ったにもかかわらず、人生においては万事がヤーウェにより与えられること、そしてその全てを奪うのもまたヤーウェであることを否定しなかった。いかにして試されようとも、ヨブはこの信念を堅持した。あなたが自らの経験の中で、神の言葉からどのような精錬を受けるかを問わず、神は人間の信仰を要求する。このように、完全にされるのは、人々の信仰と志である。あなたはそれに触れることも見ることも出来ない。あなたの信仰が必要とされるのはこれらの状況においてである。ある物事が肉眼で見えない時、人々の信仰が必要とされる。そして、あなたが自らの観念を捨てられない時、あなたの信仰が必要とされる。あなたが神の業について不明瞭な時必要とされるものは、あなたの信仰と、あなたが揺るぎなく立ち、証しすることである。ヨブがこのような状態に達した時、神がヨブの前に現れ、ヨブに対して語った。つまり、あなたの信仰の中からのみ、神を見ることが可能となり、あなたに信仰が有る時、神はあなたを完全にするのである。信仰が無ければ、神はそれを行うことが出来ない。神は、あなたが望む物事が何であれ、それを授けるであろう。あなたに信仰が無ければ、あなたは完全にされることが出来ず、神の業を見ることも出来ない。まして、神の全能性を見ることなど出来ないであろう。あなたに信仰があり、自分の実体験の中で神の業に触れることが出来るのであれば、神はあなたの前に現れ、あなたの内に啓示を与え、導くであろう。この信仰が無ければ、そのようなことは行うことが出来ないであろう。あなたが神への望みを失ったとしたら、どうして神の業を体験することが出来るか。したがって、唯一あなたが信仰を持ち、神に対して疑念を抱かず、神が何をするのかを問わず、神への真の信仰を持っている時のみ、神はあなたの経験の中であなたに啓示

と明察を与え、あなたは神の業を見ることが出来るであろう。これらのことは、全て信仰を通して達成され、信仰は精錬を通してのみ実現される――すなわち、精錬無くして信仰は育まれ得ない。信仰とは何を指すのであろうか。信仰とは、あるものを人間が見たり触れたり出来ない時、神の業が人間の観念と一致しない時、また、それが人間の手には届かない時に、人間が持つべき真の信念であり、誠実な心である。これこそが、わたしの言う信仰である。人々は、苦難や精錬の時、信仰を必要とする。そして信仰には精錬が伴う。これらは切り離せない。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

187. 精錬の業は、人々の信仰を完全にするためであり、最終的には立ち去りたいが立ち去れず、ある人々は、わずかな希望のかけらをも奪われてもなお信仰を維持し、自分の将来にもはや希望が無くなる状態に達するためである。そして、この時点に到達してはじめて、神の精錬が完了する。人類は、生と死の間を彷徨う段階には未だに達しておらず、死を味わったことがないので、精錬はまだ終わっていない。効力者の段階にある者たちでさえ、極限までには精錬されてはいなかったが、ヨブは頼れるものが何もなく、極限まで精錬されたのだ。人間は、希望を失い、頼るものがなにも無くなる時点まで、精錬を受けなければならない。その時はじめて、それはほんとうの意味で精錬となる。効力者の時期のあいだ、あなたの心が神の前で常に静まり、神が何を為すか、神の自分に対する意志が何であるかを問わず、常に神の采配に従ったなら、その道の果てに、神がなした全てを理解するだろう。ヨブの試練を受けることは、ペテロの試練を受けることでもある。ヨブが試された時、ヨブは証しに立ち、最終的にヤーウェがヨブの前に現された。ヨブが証しに立った後になってはじめて、ヨブは神の顔を仰ぎ見るに相応しい者となった。「わたしは汚れた地から隠れ、聖なる国に自分の姿を現わしているのか。」ということが言われたのは何故だろうか。それは、あなたが聖くなり、証しに立つ時のみ、あなたは神の顔を見るための品位を得ることが出来る、という意味である。もしあなたが神の証しに立つことが出来ないなら、あなたには神の顔を見るための品位が無い。精錬に直面し、あなたが退いたり、神に対して不平を言い、神の証しに立てず、サタンの笑い者となったとしたら、神の出現を得ることは出来ないであろう。あなたがヨブのように、試練の真っ只中で自らの肉を呪い、神に対して不平を言うことなく、また、不平を口にしたり、言葉で罪を犯す事がなく自らの肉を忌み嫌うことができれば、それが証しに立つということである。あなたがある程度の精錬を受けてなお、

ヨブと同様に、神の前で完全に服従し、他に神に対する要求や、自らの観念が無いのであれば、神はあなたの前に現れるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

188. 人が神のために苦しむことができ、ここに至ることができたのは、ある意味では神の愛により、別の意味では神の救いによるのであり、さらには神が人の内に為した裁きと刑罰の働きによるのである。もしあなたがたが神の裁き、刑罰、試練を受けることがなければ、そして神があなたがたに苦しみを与えることがなければ、率直に言って、あなたがたが真に神を愛することはない。人の内に為された神の働きが大きいほど、そして人の苦しみが深いほど、神の働きがどれほど意義深いものかを示すことができ、同時に、その人の心はより真に神を愛することができる。人はどのように神の愛し方を学ぶのであろうか。苦痛や精錬なしに、また、つらい試練なしに——さらに、もし神が人に与えたものが恵みと愛と慈悲だけであったなら——神への真の愛を全うすることはできるであろうか。神による試練にあって、人は自らの欠点を知るに至り、自分を取るに足らない、軽蔑すべき、卑しい存在であり、自分には何もなく、自分は何物でもないことを知る一方、神による試練にあって、神は、人が神の素晴らしさをより良く経験できるような新しい環境を作り出す。苦痛は非常に大きく、時として乗り越えられない——さらには、身も心も打ち砕くような悲しみにまで達することもある——しかし、それを経験することで、人はその内にある神の働きがいかに素晴らしいかを知り、その礎の上にのみ、人の内に神への真の愛が生まれるのである。今日、人は神の恵みと愛と慈悲だけでは、真に自分を知ることはできず、ましてや人の本質も知ることができないのを知っている。神の精錬と裁きによってのみ、また、そのような精錬の中にあってのみ、自分の欠点を知り、自分には何もないことを知るのである。このように、人の神への愛は神の精錬と裁きという礎の上に築かれる。

『言葉は肉において現れる』の「辛い試練を経験して初めて、神の素晴らしさを知ることができる」より

189. 最初に試練にあったヨブは彼の財産と子ども達を失ったが、ヨブはそれによって躓くことも神に対して言葉で罪を犯すこともなかった。ヨブはサタンの誘惑に勝利し、物質的財産と子孫に勝利し、世的な財産を失うという試練に勝利した。それはつまり、ヨブは神が彼から取ることに従い、そのことに感謝し、神を讃美することができたということである。それがサタンの最初の誘惑に対するヨブの振る舞いであり、それはまた、神の最初の試練におけるヨブの証しでもある。2度目の試練では、サタンはその手を伸ばしてヨブを苦しめた。ヨブは経験したことのない痛みを苦しむが、それでもヨブ

の証しは人々を驚かせるほどのものだった。ヨブはその不屈の精神、強い信念、神への従順、そして神への畏れにより、再びサタンに勝利した。ヨブの態度と証しはまたしても神に認められ、喜ばれた。この試練の間、ヨブはサタンに対し、肉の痛みが神への信仰と従順を揺るがすことはなく、神に対する献身と畏れを奪うことはできないということをその態度により表明している。彼は死に直面したからといって、神を放棄したり、自身の完全さと正しさを捨てたりはしない。ヨブの決意はサタンを弱腰にし、ヨブの信仰はサタンを怯えさせ震えさせた。サタンとの生死をかけた戦いにより、サタンの中の強い憎しみと恨みが膨らみ、ヨブの完全さと義の前にサタンは為す術もなく、ヨブへの攻撃を止め、ヤーウェ神の前でヨブを告発することを諦めたのである。これが意味するところは、ヨブが世に打ち勝ち、肉に打ち勝ち、サタンに打ち勝ち、そして死に勝ったということである。ヨブは正に、完全に神に属する人であった。この2度の試みの間、ヨブは自らの証に固く立ち、その完全さと正しさを生き通し、神を恐れ悪を避けるという生きる上での原則の適用範囲を広げた。ふたつの試練を通ったヨブは更に経験豊かになり、成熟し、鍛えられた。ヨブはそれまで以上に強くなり、更に強い確認に立ち、自身が手放さずに来た義と誠実さは更に確固たるものとなった。ヤーウェ神によるヨブへの試練はヨブに神の人間への配慮に対する深い理解と実感を与え、神の愛の尊さを理解させた。その結果ヨブは、神に対する畏れに加えて、思いやりと愛を持つようになったのである。ヤーウェ神による試みは、ヨブをヤーウェ神から遠ざけなかったばかりか、ヨブの心を神に近づけた。ヨブの肉の痛みが頂点に達した時、ヤーウェ神のヨブに対する労りを感じたヨブは、自分の生まれた日を呪うしかなかった。ヨブのこのような振る舞いは長期計画によるものではなく、神への配慮と愛の自然な表現であり、神への配慮と愛によるものである。つまり、ヨブは自身を嫌ったため、神を苦しめることを望まず、神を苦しめることに耐えられなかった。ゆえに、ヨブの配慮と愛は無私のレベルに達したのである。この時ヨブの長年の神への愛と神を切望する思い、そして献身の思いは、配慮と愛というレベルへ引き上げられたのである。同時に、ヨブの信仰と従順、そして神への畏れも、配慮と愛というレベルへ引き上げられた。ヨブは神にとって痛みの原因になり得ることは一切せず、神を傷つけることは一切せず、神にとって悲しみ、嘆き、さらには不幸の原因とはなるまいとした。神の目には以前と同じヨブであったが、ヨブの信仰、従順、神への畏れは神にとって満足するもので、喜びとなった。この時、神がヨブに対して期待した完全性をヨブは獲得し、神の目から見て、「完全であり義である」と呼ばれるに相応しい者となった。ヨブの義なる行いによりサタンに勝利し、神の証しに堅く立つものとなった。そうしてヨブの義の行いは彼を完全にし、完璧にし、い

のちの価値を引き上げさせ、これまでにはなかった高みに登らせ、二度とサタンによる攻撃や誘惑を受けない最初の人物とさせた。ヨブはその義の故にサタンに責められ、誘惑された。義の故に、サタンに渡された。そして義の故に、サタンに勝利し、サタンを打ち倒し、堅く証しに立った。そのようにして、ヨブは二度とサタンの手に渡されることのない最初の人となり、真に神の座の前に出た。そして神の祝福の中で、サタンの監視も破滅もなく、神の目には真の人となった——自由になったのだ……

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

190. 神の言葉の一つ一つが私達の急所を突き、私達は悲嘆にくれ、恐れる。神は私達の観念を明らかにし、想像を明らかにし、墮落した性質を明らかにする。私達の言動の全て、思いや考えの一つ一つを通して、私達の本性や本質は神の言葉によって明らかにされ、私達は辱められ、恐怖で震える。神は、私達の行動、目的と意図、それに自分でも知らなかった墮落した性質までを私達に示し、私達を徹底的にさらけ出された気持ちにさせ、さらには完全に納得した気持ちにさせる。神は、私達が神に反抗したことを裁き、神に対する冒涇と糾弾を理由に私達を罰し、私達は神の目には何の価値もなく、生きたサタンそのものであると思わせる。私達の希望は粉々にされ、もはや神に対する理不尽な要求や企てはしなくなり、私達の夢さえも一夜にして消える。これは、私達の誰も想像できず、受け入れることのできない事実である。一瞬、私達は心のバランスを失い、この先どうやって続けていけば良いのか、どうやって私達が信じることがらを保ちつつ続けていけば良いのか分らなくなる。まるで自分達の信仰が振り出しに戻り、主イエスに出会ったことも、親しんだこともなかったような気持ちになる。目の前のこと全てが私達を混乱させ、どこか漂流しているような気持ちにさせられる。私達は狼狽し、落胆し、そして心の奥深くには押さえきれない憤りと屈辱がある。私達はうっづんを晴らそうと試み、出口を探そうと試み、その上、救い主イエスを待ち続けて、胸の中を打ち明けようと試みる。表面上は放漫にも謙虚にも見えないときもあるが、私達は心の中でこれまでにない喪失感に苦しんでいる。ときには表面上はいつになく冷静に見えるかもしれないが、内面では波打つ海原のような苦悶に耐えている。神の裁きと刑罰は、私達の希望と夢の全てを奪い去り、私達の途方もない望みはもはや無く、あの人救い主で、私達を救うことができるということを信じようとはしない。神の裁きと刑罰は私達と神との間に深い溝を広げ、誰もそれを渡ろうとさえしない。神の裁きと刑罰によって、これほどの挫折と屈辱を初めて感じたのである。私達は、神の裁きと刑罰によって、神の名誉と人による侮辱に対する神の不寛容を本当に認識した。それと比べて私達は



なんと卑しく汚れていることか。神の裁きと刑罰によって私達は初めて、いかに自分達が傲慢で尊大であるか、そして人間は決して神と同等ではなく、神と肩を並べることはないことを悟らされた。神の裁きと刑罰によって、私達はこのような墮落した性質の中でもはや生きていけないことを切望するようになり、そのような本性と本質からできるだけ早く抜け出し、もう神から憎まれたり、神に嫌悪感を起こさせることのないようにと願うようになった。神の裁きと刑罰によって、私達は神の言葉に喜んで従うようになり、もはや神の指揮と計画に反抗する気持はなくなった。彼の裁きと刑罰によって、私達は再び生き残ることを切望するようになり、喜んで彼を救い主として受け入れるようになった。私達は、征服する働きから立ち去り、地獄から抜け出し、死の影の谷から抜け出た…全能神は、私達この集団に属する人間を得たのだ。神はサタンに打ち勝ち、全ての敵を倒したのだ。

『言葉は肉において現れる』の「神の裁きと刑罰に神の出現を見る」より

191. 長い年月の後、人間は、鍛錬と刑罰の試練を経験し、苦労が風貌に現れるようになった。人間は過去の「栄光」も「ロマン」も失ったが、無意識のうちに人間の行ないの原理を理解し、人類を救う神の長年にわたる献身がわかるようになってきた。人間はゆっくりと、自分の野蛮さを厭うようになる。自分の野蛮さ、神への誤解のすべて、神に向けた不当な要求の数々を憎むようになる。時間は戻らない。過去の出来事は人間の嘆かわしい記憶となり、神の言葉と愛とが人間の新たな生活の原動力となる。人間の傷は日ごとに癒え、体力が回復し、立ち上がって全能者の顔を見る…と、神はずっと傍らにいたこと、そしてその笑顔と美しい顔が依然として心揺さぶるものであることに気づく。神の心はまだ被造物である人類を気遣い、神の手は始まりの時同様、まだ暖かく、力強い。まるで、人間がエデンの園に戻ったようだが、今回は人間はもはや蛇の誘惑に耳を傾けず、もはやヤーウェの顔から目をそむけない。人間は神の前にひざまずき、神の笑顔を見上げ、心から最高の捧げ物をする——ああ！わが主、わが神！

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

## (XV) 神に仕え、神の証しをすることについての言葉

192. 働きと言うと、それは神のために奔走し、随所で説教を行い、神のために心血を注ぐことだと人間は考える。その考えは正しいものの、偏りすぎている。神が人間に求めているのは、神のために奔走することだけではない。むしろ霊の中において務め、与えることである。多くの兄弟姉妹は、長年の経験を経た後になっても、神のために働くことについて考えたことがない。なぜなら、人間が考える働きとは、神が求める働きと矛盾するからである。したがって、働きの問題について人間は一切関心を持たない。そしてそれがまさに、人間がいのちに入ることが極めて偏っていることの理由でもある。あなたがたは皆、働きの全ての面をよりよく経験出来るように、神のために働くことによりいのちに入ることを目指すべきである。これが、あなたがたが入るべきことである。働きとは、神のために奔走することを指すものではなく、人間のいのちと人間が生きながら示すことが神を楽しませることであるかどうかを指す。働きとは、人間がもつ神への信心、人間がもつ神に関する認識を用いて神の証しに立ち、人間を牧することを指す。これが人間の責任であり、全ての人間が気付くべきことである。換言すると、あなたがたがいのちに入ることが、あなたがたの働きである。あなたがたは神のための働きの過程においていのちに入ることを求めているのである。神を経験することとは、神の言葉を食べ飲み出来ることだけでなく、それよりも重要なこととして、神の証しに立ち、神に仕え、人間を牧し、人間に供給することが出来なければならない。これが働きであり、いのちに入ることでもある。これは、あらゆる者が実現すべきことである。神のために奔走して回り、方々で説教をすることだけに重点を置く一方で、自分の経験を軽視し、自分の霊的生活に入ることを無視する者が多数いる。神に仕える者が神に反抗するようになるのは、これが原因である。

『言葉は肉において現れる』の「働きと入ること(2)」より

193. 教会を導くことができ、人々にいのちを与えることができ、人々の使徒になることができる人々は実際の経験を持ち、霊的なものを正しく理解し、真理の正しい認識と経験を持っていなければならない。そのような人々だけが教会を導く働き手、あるいは使徒となる資格を有する。さもなければ、最も小さき者として後に従うだけで、導き手となることはできず、ましてや人々にいのちを与える使徒になることはできない。使徒の機能は走ったり、戦ったりすることではなく、いのちを与え、人の性質が変わるよう導くことだからである。それは重い責任を背負う権限を与えられている人々が行う機能であり、誰もがすることではない。この種の働きは生命の本質を持つ人々、すなわ

ち、真理の経験を持つ人々のみが請け負うことができる。諦められる人、走りまわられる人、喜んで費やす人が皆できるということではない。真理の経験のない人々、刈り込みを経験していなかったり、裁きを受けたりしたことのない人々はこの種の働きを行うことはできない。経験のない人々、すなわち、現実性のない人々は現実をはっきり見ることができない。彼ら自身がこの側面の本質をもっていないからである。そこで、この種の人物は人を導く働きができないだけでなく、長期間にわたり真理を持たなければ排除の対象になるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

194. あなたたちが神の旨に沿って仕えたいと望むならば、どのような人々が神を喜ばせるのか、どのような人々が神に忌み嫌われるのか、どのような人々が神によって完全にされるのか、どのような人々が神に仕える資格を与えられるのかをまず理解しなければならない。これはあなたたちが身に着けておかなければならない最小限のことである。その上、あなたたちは神の働きの目的と、神が今ここで行う働きを知るべきである。これを理解した後、神の言葉の導きを通して、あなたたちはまず入り、まず神の任務を受けるべきである。あなたたちが実際、神の言葉に基づいて経験し、本当に神の働きを知る時、あなたたちは神に仕える資格を与えられるだろう。そして、あなたたちが神に仕える時、神はあなたたちの霊の目を開き、あなたたちが神の働きをより深く理解し、いっそう明確に見ることができるようにする。あなたたちがこの現実に入ると、あなたたちの経験はより深く、現実的になる。そのような経験を持った者たちは皆、教会の間を巡り歩き、兄弟姉妹の必要を満たすことができるようになり、その結果、あなたたちは、自分の欠点を補うために、各々互いの力によって恩恵をこうむり、あなたがたの霊においてより豊かな認識を獲得するのである。この結果を達成して初めてあなたたちは神の旨に沿って仕えることができ、奉仕する過程で神によって完全にされる。

『言葉は肉において現れる』の「神の心にかなうように仕えるには」より

195. 神に仕える者は、神と心をつににする者でなければならず、神を喜ばせ、神に最大限の忠誠を示すことができないといけない。人々の後ろで行動しようと、前で行動しようと、あなたは神の前で神を喜ばすことができ、神の前ではしっかり立つことができる。また、他の人々があなたをどのように扱おうとも、あなたはいつも自分の道を歩み、神の重荷に一心に注意を払う。こういう者だけが神と心をつににする者なのだ。神に親しい者が直接神に仕えることができるのは、彼らが神から重大な任務や重荷を与えられているからである。彼らは神の心を自分の心とし、神の重荷を自分の重荷とする

ことができ、将来の展望を得るか、失うかなど一切考慮しない。将来の展望が何もなく、何も得るものがない時でさえ、彼らは常に愛に溢れる心で神を信じるだろう。そこでこのような人は神と心をつ一つとする者なのである。神と心をつ一つにする者は神の腹心でもある。神の腹心だけが、神の絶え間ない憂慮や神の願いを共有することができる。彼らの肉体は弱く、苦痛を味わうが、彼らは痛みに耐え、神を満足させるために、自分の愛するものを断念することができる。神はそのような人々にさらなる重荷を与え、神がしようとすることはこれらの人々を通して表現される。従って、これらの人々は神を喜ばせ、神自身の心に適った神の僕である。そして、このような人々だけが神と共に統治することができる。あなたが本当に神と心をつ一つにする者になった時が、正に神と共に統治する時なのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の心にかなうように仕えるには」より

196. イエスが神の任務——全人類を贖う業——を完了することができたのは、イエスが神の心に全ての注意を払い、彼には個人的な計画や思慮がなかったからである。だからイエスも神と心をつ一つにする者であった——神自身であった。それは、あなたたち皆がとてもよく理解しているとおりである。（実際、イエスは神によって証しされた神自身であった。わたしがこのことをここで述べるのは、イエスに関する事実を取り上げてこの問題を例証するためである。）イエスは神の経営（救いの）計画を全ての中心に置くことができ、いつも天の父に祈り、天の父の心を求めた。イエスは祈り、次のように語った。「父なる神よ。あなたの心にかなうことを成し遂げたまえ。わたしの思うようにではなく、あなたの計画によってことを為したまえ。人は弱いかもしれないが、なぜあなたは人のことを気遣うのですか。あなたの手の中では蟻のような人間が、どうしてあなたの配慮の対象になれるのでしょうか。わたしが心の中で願うのは、あなたの心を成就することだけです。わたしの望みは、あなたがわたしの内で行なう業を、あなたが自らの意図にしたがって為すことです。」エルサレムへ向かう途上、イエスは苦悶して、あたかもナイフが心の中で捻じ曲げられているかのように感じたが、神の言葉に背く思いは微塵もなかった。いつも強い力がイエスを磔刑の場所に向かって突き進ませた。最終的に、イエスは十字架に釘付けにされ、罪深い肉と同様になり、人類を贖う働きを完了し、死と黄泉の束縛を克服した。イエスの前に、死も、地獄もハデスも力を失い、イエスによって打ち負かされた。イエスは三十三年生きたが、生涯を通して彼はいつも全力を尽くし、その時の神の働きに従って神の心を全うした。決して自分の個人的損得は考慮せず、いつも父なる神の心のことを思った。従ってイエスが洗礼を受けた後、

神は次のように語った。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」イエスの神に対する奉仕は神の心にかなうものだったので、神はイエスの肩に全人類を贖うという大きな重荷を負わせ、それを成し遂げるためにイエスをつかわし前進させた。そして、イエスにはこの重要な任務を完成する資格と権限があった。生涯を通じて、イエスは神のために計り知れないほどの苦しみに耐え、幾度となくサタンの試みにあったが、決して落胆することはなかった。神がイエスにそのような任務を課したのはイエスを信頼し、愛していたからである。従って、神は自ら次のように語った。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」当時、イエスしかこの任務を果たすことができず、これは恵みの時代に全人類を贖うという神の働きを完成させることの一部であった。

もしあなたたちが、イエスのように神の重荷に一心に注意を払い、自分の肉に背を向けることができるなら、神は、重要な任務をあなたたちに委ね、あなたたちは神に仕える条件を満たすだろう。そのような状況の下でのみ、あなたたちは自分が神の旨を行い、神の任務を果たしていると思い切ってしまうことができ、その時初めてあなたたちは本当に神に仕えていると言い切れるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「神の心にかなうように仕えるには」より

197. あなたは、聖霊が人々に働きかける時に人々が置かれる多くの状況を理解しなければならない。特に、協調して神に仕える者たちは、聖霊が人々に働きかけることによってもたらされる様々な状況をよりしっかりと把握していなければならない。あなたが語るのが、単に多くの経験と成長する手段についてであるならば、その経験はあまりにも一方的である。自分の真の状態を知らず、あるいは真理の原則を把握していないならば、性質の変化を成し遂げることはできない。聖霊の働きの原則を知らず、あるいはそこから生まれる果実を理解していないならば、悪霊の業を見分けることは難しい。あなたは悪霊の業と人々の観念を明らかにし、単刀直入に問題の核心に触れなければならない。あなたは神を信じる上での、人々の実践における様々な逸脱や問題を指摘し、彼らがそれを認識できるようにしなければならない。少なくともあなたは、彼らに否定的で消極的な感情を持たせてはならない。しかし、あなたは大半の人々に客観的に存在する困難を理解する必要があり、あなたは不合理になってはならないし、「豚に歌を教えようと」してはならない。それは愚かな行為である。人々の様々な困難を解決するには、あなたは聖霊の働きの原動力を理解し、聖霊が様々な人にどのように働きかけるのかを理解し、人々の困難や欠点を理解し、その問題の重要課題を見抜き、問題の原因に触

れなければならず、逸脱や誤りがあってはならない。このような人間こそ、神に仕えるための調整役となる資格がある。

『言葉は肉において現れる』の「適切な牧者が備えておくべきもの」より

働きにおいて、教会指導者と働き人は二つのことに留意しなければなりません。一つは、働きの采配によって定められた原則に厳密に従って働き、決して原則を破ることなく、想像や自分の意図にもとづいて働かないことです。何をするにも、神の家の働きへの配慮を示し、その益を最優先することです。もうひとつの鍵となることは、何をするにも聖霊の導きに従うことに焦点を合わせ、何をするにも神の言葉に厳密に従うことです。もしいまだに聖霊の導きに逆らうことができるようであったり、頑なに自分の考えに従って自分の想像どおりに物事を行なったりするようであれば、あなたの行動は神に対する最も深刻な抵抗となります。聖霊の啓きと導きにしばしば背を向けても、行き詰まるだけです。聖霊の働きを失えば、あなたは働くことができなくなり、何とか働いたところで、何ひとつ達成できません。働きを行う際に従うべき二つの主要原則はこれです。一つは、上からの采配に厳密に従って働き、また上が制定した原則に従って行動することです。もう一つは、内なる聖霊の導きに従うことです。これら二点が把握できたならば、容易に間違いを犯すことはありません。

『キリストの言葉の記録』の「指導者と働き人の働き方に関する主要原則」より

199. 資格のある働き手の働きは人々を正しい道に連れてくることができ、真理にさらに深く入ることを許す。彼の行う働きは人々を神の前に連れてくることができる。そのうえ、彼の行う働きは個々の人によって変わることができ、規則にとらわれず、人々に解放と自由を認める。さらに、人々は徐々にそのいのちにおいて成長し、真理に向けて深く着実に進むことができる。資格のない働き手の働きははるかに不十分で、ばかげている。彼は人々を規則にはめ込むだけで、人々に要求することは個々の人によって変化しない。彼の働きは人々の実際のニーズに従っていない。この種の働きには規則や教義があまりにも多く、人々をいのちにおける現実や正常な成長の実践に至らせることができない。人々はわずかな価値のない規則を守ることができるようになるだけであり、この種の指導は人々を迷わせるだけである。彼はあなたを自分に似たものになるよう導く。あなたを彼が持っているものや彼そのもののものに引き込むことができる。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人の働き」より

200. 人の神への奉仕における最大の禁忌は何ですか。知っていますか。指導者として仕える人は、より大きな才能を有すること、人より勝っていること、また自分が本当にどれほど有能かを神にわかってもらえるように新しい巧妙なやり方を見つけ出すことを常に望んでいます。それなのに、真理を理解することや神の言葉の現実に入ることに集中しません。いつも自分を誇示したいと思っています。これはまさに傲慢な本性の表われではないですか。中には「私がこれをするので、きっと神は大喜びだ。神は本当に気に入るだろう。今度は私が神に見せて、見事に驚かせよう」などと言う人さえいます。このように見せつけた結果、聖霊の働きを失い神によって淘汰されます。心に浮かんだことを何でも無闇に行なってははいけません。自分の行為の結果を考えなくても大丈夫ということがあり得ますか。神の性質や行政命令に背いて淘汰されると、あなたが言うことは何も残っていません。あなたの意図が何であれ、それを意図的に行なうか否かにかかわらず、神の性質も神の旨も理解していないなら、あなたは簡単に神を侮辱し、簡単に神の行政命令に背いてしまいます。これは誰もが用心して避けなければならないことです。いったん神の行政命令や性質にひどく背けば、意図的にそうしたのか否かを神は考慮しません。このことははっきり理解する必要があります。この点を理解できなければ、あなたは間違いなく問題を抱えることになります。神に仕えるとき、人は大躍進を遂げ、偉大な物事をなし、偉大な言葉を語り、偉大な働きを行ない、大著を著わし、大集会を催し、偉大な指導者になりたいと望みます。あなたがいつも大それた野心を抱いているなら、きっと神の偉大な行政命令に背くことになります。このような人はすぐに死にます。神に仕えるにあたり、正直でも、敬虔でも、思慮深くもなければ、遅かれ早かれ神の行政命令に背くことになるのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理がなければ、神を侵すのは簡単である」より

201. 神に仕えることは単純な作業ではない。墮落した性質が変わらないままの人は決して神に仕えることはできない。もしあなたの性質が神の言葉により裁かれ、罰されていないのならば、その性質はいまだにサタンを表している。これは、あなたの奉仕があなた自身の善意から出ていることの十分な証明である。それはサタンの性質にもとづく奉仕である。あなたは自分の元来の性格のまま、また個人的好みに従って神に仕えている。さらに、自分が行いたいことが何であれ、神はそれを喜び、行ないたくないことが何であれ、神はそれを嫌うとあなたは思い続けている。そして働きにおいては、自分の好みに完全に左右されている。これを神への奉仕と呼ぶことができるであろうか。あなたのいのちの性質は、究極的には少しも変えられることはない。それどころか、自分

は神に仕えているのだからと、ますます頑固になり、そのため、墮落した性質はさらに深く根付いたものとなる。このようにして、おもに自分の性格にもとづいた神への奉仕に関する規則と、自分自身の性質に従った奉仕から派生する経験をあなたは内面的に作り上げるようになる。これは人間の経験から来る教訓である。人間の人生哲学である。このような人々はパリサイ人と宗教官僚に属する。このような人々は目を覚まし悔い改めないならば、最後には終わりの日に出現する偽キリストとなり、人間を騙す者となるであろう。話しにでる偽キリストと詐欺師は、この種の人から現れる。もし神に仕える人々が自分たちの性格に従い、自分たちの意思のままに行動したならば、彼らはいつでも追放される危険にある。他人の心を獲得し、見下すような態度で他人に訓戒し人々を制限するために自分の長年の経験を神への奉仕に応用する人、そして決して悔い改めず、自分の罪を告白せず、地位からくる恩恵を諦めない人は、神の前に倒れるであろう。このような人はパウロと同類の人間であり、自分の経歴の長さゆえに大胆に振る舞ったり、資格を見せびらかしたりする。神がこのような人々を完全にすることはない。このような奉仕は神の働き of the じゃまをする。人は古いものに固執することを好む。過去の観念、過去からの物事に固執する。これは奉仕への大きな障害である。それらを捨て去ることができなければ、それらがあなたの全生涯を圧迫するであろう。たとえ脚を折るほど走り回ったり、大変な労苦を背負っても、また神への奉仕において殉教したとしても、神は少しもあなたを褒めることはない。それどころか逆であり、神はあなたを邪悪な行いをする者だと言うであろう。

『言葉は肉において現れる』の「宗教的な奉仕の仕方は禁止されなければならない」より

202. そして何よりも、証しに立つためには、神の業や、神が人間をどう征服するか、どう救うか、どう変えるか、そして人間が征服され、完全にされ、救われることが可能となるよう、人間をどう導いて成長させるかについて話をする必要がある。証に立つとは、神の業と、あなた自身の全ての経験について話をする事である。神の業のみが神を表し、神の全体を公的に明示できるのは神の業のみである。神の業は、神の証しに立っている。神の業と神の言葉は、直接的に霊を表し、神が行う業は霊により行われ、神が述べる言葉は、霊により述べられる。こうした物事は、単に受肉した神の肉により表現される。実際には、そうした物事は霊の表れである。神が行う業と述べる言葉は、神の本質を表す。神が人間の中で肉をまとった後、神が言葉を述べることも業を行うことも無く、神の現実性、普通性、全能性を知るよう要求されるのであれば、あなたがたは知ることが出来るであろうか。あなたは、霊の本質を知る事が出来るだろうか。あなた



は、神の特質を知る事が出来るだろうか。神があなたがたに対して証に立つよう求められるのは、あなたがたが神の業の各段階を経験してきたからに他ならず、あなたがたがそれを経験していなかったとしたら、神はあなたがたに対してそうした要求をしないであろう。ゆえに、あなたが神の証しに立つ時、それは神の普通の人間性の外観ではなく、神が行う業と、神が導く道を証するものであり、あなたがどのようにして神に征服されたか、どの面で完全にされたかを証するものである。これが、あなたが立つべき証である。

『言葉は肉において現れる』の「実践（7）」より

203. 実践の神が人間を征服する時、人間を征服したのは、神の神性の言葉である。それは、人性には達成不可能であり、ただの人間が成し得ることではなく、人間のうち最高の能力を備えた者でも不可能なことである。なぜなら、神の神性は、いかなる被造物にも優るからである。人間にとって、それはたぐいまれである。結局のところ、創造主は、いかなる被造物よりも優れている。弟子は師を超えられないと言われてきた。被造物は創造主を超えることができない。仮に、あなたが神に優るとしたら、神はあなたを征服出来ないであろう。神があなたを征服出来るのは、神があなたに優るからである。全人類を征服できるのは創造主であり、創造主だけであり、創造主を除いてその業を行うことが出来る者は居ない。これは証である。あなたが立つべき証は、このような証である。あなたは、刑罰、裁き、精錬、試練、挫折、苦難の各段階を経験してきた。そして、あなたは征服を得て、肉の将来の見通し、自分の個人的動機、肉の個人的利益を捨てた。つまり、あらゆる者の心が神の言葉により征服された。あなたのいのちは神が要求する程度まで成長していないが、あなたはそうした物事を知り、神の業により完全に確信している。それならば、これは証であり、その証は本物である。神が来て行った業、すなわち裁きと刑罰は、人間を征服するためのものであるが、神はまた業を完了し、この時代を終わらせ、神の業の最終章を行う。神は、その時代全体を終わらせ、人類全てを救い、罪から完全に解放し、神が造った人類を完全に得る。これが、あなたが証に立つべき事の全てである。あなたは神の業を極めて多く経験し、自分の目で見て、個人的に経験してきたので、最終的にあなたが自分のなすべき役割さえも果たせなかったならば、それはどれほど残念なことであろうか。今後、福音が広められたとき、あなたは自分の認識を述べ、自分の心で得た物事の証に立ち、全力を尽くすことが出来なければならない。これが、被造物として人間が達成すべき物事である。この段階の神の業の意味は、何であろうか。その効果は、何であろうか。そして、そのうちどの程度が人間

の中で行われたであろうか。人間は何をすべきだろうか。あなたがたが、受肉した神が地に来た後の業について、全て明瞭に述べられるのであれば、あなたがたの証は完全なものとなるであろう。神の業の意味、内容、本質、それにより表される神の性質、そして神の業の原則という5つの物事について、あなたが明瞭に述べられるのであれば、それは、あなたが証に立つ事が出来ること、そして真に認識を備えていることを示す。わたしがあなたがたに求めている物事は、それほど多くは無く、真に追求する者が全員達成可能な物事である。あなたがたが神の証人のひとりとなることを決意したのであれば、神が忌み嫌う物事と神が愛する物事を理解する必要がある。あなたは、神の業を数多く経験して来たが、その業により神の性情と神が忌み嫌う物事、神が愛する物事を知り、神の旨と、神の人間に対する要求を理解し、それを用いて神の証しに立ち、自分の本分を尽くす必要がある。

『言葉は肉において現れる』の「実践（7）」より

204. 神の証しをするときは、神が人々をどのように裁き罰するか、人間を精錬してその性質を変えるためにどのような試練を用いるかを主に語るべきです。また、自分の経験においてどれだけ多くの墮落が表わされたか、自分がどれだけ耐えてきたか、最後はどのようにして神に征服されたか、神の働きに関する真の認識が自分にどれだけあるか、どのようにして神の証しをし、神の愛に報いるべきかも語るべきです。こうした言葉に中身を持たせつつ、簡潔に語りなさい。自分自身を誇示しようと、深遠に見えながらも空虚な理論で着飾ってはいけません。そうすることはかなり傲慢で理知に欠けるように見えます。現実の経験からもたらされた事実に基づく物事を心からもっと語りなさい。それが他人にとって最も有益であるとともに、彼らが目にするのに最適なのです。あなたたちはかつて、神に最も強く反対し、神に服従しようという気持ちが一番ない人々でしたが、今は神の言葉によって征服されています。それを忘れてはいけません。これらのことは入念に熟慮し、真剣に考える必要があります。いったんそれを理解すれば、どのように証しをすべきかがわかります。さもないと恥知らずで理知に欠ける行為をしがちになります。

『キリストの言葉の記録』の「人が有すべき基本的な理知」より

205. 神の働きのために証しするには、その働きが何であることを表現できなければならない。そして、それはあなたの体験、認識、また、あなたが耐え忍んだ苦しみを通して行われる。あなたは、神の働きのために証しする者であろうか。あなたには、そうした志があるだろうか。神の名、そしてさらに神の働きのために証しすることができ、神

の民に神が求める人間像を実際に生きることが出来るのであれば、あなたは神の証し人である。あなたは実際にどのようにして神のために証しするのであろうか。神の言葉を生きることが切に求めること。あなたの言葉を通して証しをすること。人々に神の働きを知らしめ、見せること――あなたが、まことにこれらのこと全てを求めるなら、神はあなたを完全にするのであろう。もし、あなたが求める全てが、神により完全なものとされ、最終的に祝福されることのみであるならば、あなたの神への信仰に対する見方は純粋ではない。あなたは、どのようにすれば神の業を実生活において見ることが出来るか、ということを追求しているべきである。神があなたにその意志を明らかにした時、どのように神を満足させるか、神の驚異と知恵をどのように証しするのかを求め、また、自分に対する神の訓練と取り扱いをどのように実際に示すかを追及しているべきである。これらのすべては、今あなたが解明しようとしているべき事である。神があなたを完全にした後、あなたは神の栄光にあずかることができるということだけのために神を愛するのであれば、それはまだ不充分であり、神の要求を満たさない。あなたは、神の行動を証しし、神の要求を満たし、神が人々の上に為した業を実践的に体験することが出来る必要がある。それが苦痛であれ、涙であれ、あるいは悲しみであれ、あなたはその全てを実践で体験しなければならない。それらは全て、あなたが神の証し人となることが出来るためである。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

206. あなたが完全にされることを追求する者であるならば、あなたは証ししてこう言うであろう。「この神による段階ごとの御働きにおいて、私は神の刑罰と裁きの御働きを受け入れた。また私は大いなる苦しみに耐えてきたが、神がどのようにして人間を完全にされるのかを知り、神が行われた御働きと神の義に関する認識を得て、神の刑罰により救われた。彼の義なるご性質が私の上に臨み、祝福と恵みをもたらした。私を守り、私を清めたのは神の裁きと刑罰である。もし私が神による刑罰と裁きを受けておらず、神の厳しい御言葉が私の上に臨んでいなかったとしたら、私は神を知らず、救われることがなかったであろう。現在、私は被造物として、創造主が造った万物を享受するだけでなく、それ以上に重要なことには、神のご性質は人間が享受するに値するので、あらゆる被造物は神の義なる性質を享受し、神の義なる裁きを享受しなければならない、ということを理解している。サタンに堕落させられた被造物として、神の義なるご性質を享受すべきである。神の義なるご性質には、刑罰と裁きがある他、それ以上に、大いなる愛がある。現在、私は神の愛を完全に得ることはできないが、それを見る幸運に

恵まれており、そのことにおいて、私は祝福されている。」これこそが、完全にされた者の歩んだ道であり、彼らが語る認識である。そうした者はペテロと同じであり、ペテロと同様の経験がある。このような人々は、いのちを得た者でもあり、また真理を持っている者である。彼らが、最後まで経験する時、神の裁きの時に、必ずサタンの影響を自分から取り除き、神のものとされるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

207. 人々の内で神がいのちになるやいなや、神を離れることはできなくなる。それは神の業ではないのだろうか。これ以上の証しはない。神は一定のところまで働いた。神は人々に、仕えよ、罰を受けよ、あるいは死ねと言ったが、人々は退いていない。このことは、彼らが神に征服されていることを示している。真理を持っている人々は、実体験から証しに固く立つことができ、その信仰的立場をしっかりと守り、神の側に立ち、決して退くことがなく、神を愛する他の人々と正常な関係を持つことができ、自分達に何かが起こった時は、完全に神に従い、そして死にまでも神に従う。日々の生活におけるあなたの実践と表現は神への証しであり、教えを実践することであり、神への証しなのであり、それが真に神の愛を享受しているということなのだ。この点まで経験を重ねてくると、しかるべき成果が生み出されていることになる。あなたは実際に生きることができ、その行いがみな他の人々から賞賛の目で見られる。服装や外見が凡庸であっても、最上の敬虔な生き方をしているのであり、神の言葉について交わるときも神に導かれ、神によって啓かれている。自分の言葉で神の心を語ることができ、現実的なことを伝えることができ、霊において奉仕することを深く理解している。話し方は率直で、礼儀正しく高潔で、争うことがなく、品があって、何かが降りかかった場合には、神の按配に従うことができ、証しに固く立つことができ、また、どんな場合にも穏やかで落ち着いていられる。このような人が真に神の愛を見たのである。また、まだ若くとも、年配の人のように振る舞う人々もいる。そうした人は成熟しており、真理を把握していて、他の人々から尊敬を受ける。そうした人々は、証しをすることができ、神の存在を示すことができる。

『言葉は肉において現れる』の「神を愛する人は永遠に神の光の中に生きる」より

208. 今日、あなたは、どのように征服されるか、征服された後、人々はどう振る舞うかを認識しているべきである。あなたは、自分はすでに征服されていると言うかもしれないが、死に至るまで服従できるだろうか。あなたは、自分の将来性があるかどうかにかかわらず、最後まで従うことができないなければならない。また、まわりの状況に関わ

らず、神への信仰を失ってはならない。最終的に、あなたは証しにおける二つの側面を達成しなければならない。ヨブの証し——すなわち死に至るまでの従順——そして、ペテロの証し——神への至上の愛だ。ある意味で、あなたはヨブのようであなければならない。ヨブは物質的なものを何も持っておらず、肉の痛みに苦しめられたが、それでもヤーウェの名を捨てなかった。これがヨブの証しだった。ペテロは死に至るまで神を愛することができた。ペテロが死んだとき——つまり十字架につけられたとき——彼はなおも神を愛していた。彼は自分の前途のことを思わず、輝かしい願いや途方もなく贅沢な思いを追い求めなかった。そして、ひたすら神を愛し、神のはからいのすべてに従うことだけを求めた。あなたが証しをしたと見なされることのできる前に、また、征服された後で完全にされた者になる前に、あなたはこのような水準に達しなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（２）」より

## (XVI) サタンの影響を振り払い、救いを成し遂げることに ついての言葉

209. 最初の人類は神の手の中にあったが、サタンによる誘惑と墮落によって、人はサタンに縛られ、悪しき者の手中に落ちてしまった。こうしてサタンは、神の経営（救い）の働きにおいて、打ち負かす対象となった。サタンは人間を自分の所有物としたが、人は神の全経営の資本であるので、人が救われるには、サタンの手から取り戻されなければならない。すなわち、人間はサタンの虜となった後に連れ戻されなければならないのである。かくして、サタンは、人間の古い性質の変化、人間の本来の理知を回復する変化によって打ち負かされなければならない、こうして、虜となっていた人間をサタンの手から取り戻すことができる。もし人がサタンの影響や束縛から自由になると、サタンは辱められ、人は最終的に取り戻され、サタンは打ち負かされるであろう。そして人はサタンの暗闇の影響から解放されたので、人はこのすべての戦いの戦利品となり、この戦いが終わるとサタンは懲罰の対象となるそのとき、人類を救う働きのすべてが完了するのである。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

210. 人の肉はサタンに属しており、不従順な性質に満ちており、嘆かわしいほど汚れており、不純なものである。人々は肉の喜びを過度に切望し、肉の現れは多過ぎ、そのため神は肉をある程度嫌っている。人々が、汚れて、墮落したサタンのものを置き去りにする時、神の救いを得る。しかし、彼らが汚れや墮落を投げ捨てることができないままにいるなら、相変わらずサタンの支配下にとどまるだろう。人々の狡猾さ、不正直さ、ねじれた心はサタンのものである。あなたを救うことによって、神はあなたをこれらのものから切り離す。神の働きは間違っていることはなく、すべては人々を闇から救うためである。あなたがある程度信じていて、肉体の墮落を脱ぎ捨てることができ、もはやこの墮落の束縛を受けない時、あなたは救われているのではないだろうか。サタンの支配下で暮らしている時、あなたは神を現わすことはできず、あなたは不潔で、神から与えられるものを受け取ることはない。いったん清められて、完全にされると、あなたは聖くなり、正常になり、神の祝福を受け、神に喜ばれる者となるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「実践(2)」より

211. 神が人間を造った時、それは、人間が神の豊かさを享受し、神を真に愛するためであって、人間はそうにして神の光の中で生きるようになるはずだった。今日、

神を愛すことの出来ない者、神の重荷に配慮しない者、自らの心を完全に神に捧げない者、神の心を自分の心とすることが出来ない者、神の重荷を自分の重荷として背負うことが出来ない者には神の光が照らされておらず、それゆえに、彼らはみな暗闇の影響の下で生きている。彼らは神の意志に真っ向から反する道を歩み、彼らの為すこと全てには真理の片鱗さえない。彼らはサタンと泥沼の中でのたうっており、暗闇の影響下で生きている者である。あなたが常に神の言葉を食し、飲むことが出来るとともに、神の意志に心を配り、神の言葉を実践することができるならば、あなたは神のものであり、神の言葉の中で生きている者である。あなたは、サタンの支配から逃れて神の光の中で生きることを望んでいるであろうか。あなたが神の言葉の中で生きるならば、聖霊には働きを行う機会があるであろう。あなたがサタンの影響下で生きるならば、聖霊には働きを行う機会が全く無いであろう。聖霊が人間に対して行う働き、聖霊が人間を照らす光、また、彼らに与える確信は、ほんの一瞬しか維持されない。もし人々が不注意で配慮を怠ったならば、人々は聖霊によって行われる働きを取り逃してしまうであろう。人間が神の言葉の中で生きるならば、聖霊は人間と共にいて、人間に対して働きを行うであろう。人間が神の言葉の中で生活していないならば、そうした人間はサタンの束縛の中で生きているのだ。墮落した性情の中で生活している者には、聖霊の働きもその臨在もない。あなたが神の言葉の範囲で生活し、神によって要求された状態の中で生活しているならば、あなたは神に属し、あなたの上に神の働きが行われるであろう。あなたが神の要求の範囲ではなく、サタンの支配のもとで生活しているならば、あなたがサタンの墮落の下で生活していることは確実である。神の言葉の中で生き、神に自分の心を捧げることによってのみ、あなたは神の要求を満たすことができる。あなたは神の言う通りに行動し、神の言葉を自分の存在の基礎とし、自分のいのちの現実としなければならない。そうして初めて、あなたは神のものとなるであろう。もしあなたが神の意志に従って真面目に実践するならば、神はあなたの上に働きを行い、あなたは神の恵みの下、神の顔の光の中で生き、聖霊が行う働きを理解し、神の臨在の中で喜びを感じるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「暗闇の影響から脱すればあなたは神のものとされるであろう」より

212. 暗闇の影響から脱するためには、まず神に対して忠実であり、真理を追い求める熱意がなければならない。そうしてはじめて、あなたは正しい状態にあるであろう。正しい状態で生活することが、暗闇の影響から脱する前提条件である。正しい状態になるということは、あなたが神に忠実でないこと、真理を求める熱意が無いことを意味す

る。これでは、暗闇の影響から脱することは問題外である。人間が暗闇の影響から脱することは、わたしの言葉に基づいているのであって、もし人間がわたしの言葉に従って実践出来なかったなら、そうした人間は暗闇の影響の束縛から逃れることは出来ないであろう。正しい状態の中で生活するということは、神の言葉の導きのもとで生き、神に対して忠実な状態で生活し、神のために誠実に尽くす現実の中で生活し、神を真に愛する状態で生きることである。このような状態と現実の中で生活する者たちは、真理の中に一層深く入るにつれて、次第に変化するであろう。また彼らは、働きが深まるとともに変化して、最終的に神のものとなることは確実であり、神を真に愛するようになるであろう。暗闇の影響から脱した者たちは、次第に神の意志を把握し、少しずつ神の意志を理解し、最終的に神の心を知る人になることが出来る。彼らには神に関する観念や神に対する反抗が無いだけでなく、以前抱いていた観念や反逆を一層忌み嫌い、その心に神への真の愛が芽生えるようになる。暗闇の影響から脱け出すことの出来ない者たちは、肉に占められており、反逆で満たされている。彼らの心は人間の観念と人生哲学、そして自らの意図と思案で満たされている。神は、人間の一心な愛、そして人間が神の言葉と神への愛に満たされることを求めている。神の言葉の中で生活すること、神の言葉の中から人間が求めるべきものを見出すこと、神の言葉の結果として神を愛すること、神の言葉のために奔走すること、神の言葉のために生きること――これら全ては人間が達成すべき事である。

『言葉は肉において現れる』の「暗闇の影響から脱すればあなたは神のものとされるであろう」より

213. もし、人々が生きている存在になり、神への証しを立て、神に認められることを望むならば、神の救いを受け入れ、神の裁きと刑罰に喜んで服従し、神による刈り込みや取り扱いを喜んで受け入れなければならない。そうして初めて神が要求する真理のすべてを実践することができ、そうして初めて神の救いを得て、本当に生きた存在になることができる。生きている人々は神によって救われ、神から裁きと刑罰を受けており、進んで神に身を捧げ、喜んで神に命を投げ出し、全人生を神に捧げる。生きている人々が神への証しをたてる時のみ、サタンを辱めることができ、生きている人々だけが神の福音の働きを広めることができ、生きている人々だけが神の心にかない、生きている人々だけが本当の人である。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは生き返った人か」より

214. 人は肉の中に生きるが、それは人間地獄の中で生きることであり、神の裁きと刑罰なくしては、人間はサタンと同様にけがれている。どうして人間が聖くなれようか



。ペテロは、神の刑罰と裁きは人間のための最高の守りであり、最も素晴らしい恵みであると信じていた。人間が目覚まし、肉を憎み、サタンを憎むことができるのは、神の刑罰と裁きによる他ない。神の厳しい鍛錬は、人間をサタンの影響から解放し、自分の狭い世界から解放し、神の顔の光の中で生きることができるようにする。刑罰と裁きよりも優れた救いはない。ペテロはこう祈った。「神よ、あなたが私を罰し、裁かれる限り、私はあなたが私を見捨てていないことを知るでしょう。たとえあなたが私に喜びや平安を与えられず、私を苦しみの中で生活させ、私に無数の懲らしめを科せられたとしても、あなたが私を見捨てない限り、私の心は安らぐでしょう。現在、あなたの刑罰と裁きは私にとって最高の守りであり、最も素晴らしい祝福となっています。あなたが私に与えられる恵みが私を守っています。現在あなたが私に授けられる恵みは、あなたの義なるご性質の表れであり、刑罰と裁きです。さらに、それは試練であり、なによりもそれは、苦難の生活です。」彼は肉の喜びを脇へ置き、一層深い愛と一層大きな守りを求めることができた。なぜなら、彼は神の刑罰と裁きから、極めて大きな恵みを得たからである。人生において、人が清められ、性質の変化を実現することを望み、有意義な人生を生き抜き、被造物としての自分の本分を尽くすことを望むのであれば、その人は神の刑罰と裁きを受け入れるべきであり、神の鍛錬と打ちのめしが自分から離れないようにし、そうすることで、サタンによる操りと影響から逃れて神の光の中で生きられるようにしなければならない。神の刑罰と裁きは光で有り、人間の救いの光であり、人間にとって、それ以上の祝福と恵みと守りはないということを知らなければならない。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

215. まだ救われていない人々の人生はしばしばサタンに介入され、支配されてさえている。言い換えれば、救われていない人はサタンの虜であり、彼らには自由がない。そのような人はサタンに解放されておらず、神を礼拝する資質も資格もない。そのような人々はサタンが近くで狙っており、激しく攻撃される。彼らには幸せがなく、普通の存在でいる資格もなく、更には尊厳もない。もしあなたが立ち上がり、神への信仰と従順、神に対する畏れを武器として用い、命がけでサタンと戦うのであれば、そしてサタンを完全に打ち負かし、サタンがあなたを見たのならしっぽを巻いて逃げるようになり、そうしてサタンの攻撃とあなたに対する非難から完全に離れることができるのであれば、その時あなたは救われて自由になれるのである。もしあなたがサタンとの関係を完全に断ち切ろうと決意していても、サタンを打ち負かす武器を身に付けていないのであれば、あなたにとってまだ危険な状態である。時が経ち、サタンにひどく苦しめられ、一

握りの力もあなたの中に残されておらず、それでもまだ証しとなることができず、サタンの非難と攻撃から完全に解放されていないのであれば、救われる望みはほとんどない。最後に神の業の完了が告げられる時、あなたはまだサタンの手の中におり、自らを解放することができず、従って救われる機会も望みもない。これが意味するのは、そのような人々は完全にサタンの虜になってしまうということである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

216.人は救われる前、サタンの暗い影響の下で暮らし、墮落したサタンの本性によって生きています。ゆえに神の視点から見れば、肉だけでなく霊や考えといった他のすべての側面を含めて、人の存在全体が死んでいるのです。表面上は呼吸をし、瞬きし、考えているように見えますが、絶えず考えていることはどれも悪であり、神に背いたり反抗したりすること、神が嫌い、憎み、断罪することを考えています。神の目から見れば、こうしたことはすべて肉に属するだけでなく、サタンと悪魔に完全に属してもいます。では、神の目から見て人は何ですか。人間ですか。神は人を悪魔、動物、生けるサタンとして見ます。人はサタンの本質によって生きており、神の目から見れば、人の皮を被った生けるサタンなのです。神はこのような人を歩く死体、死人と定義します。神はこのような人、つまり墮落したサタンの性質や墮落したサタンの本質によって生きるそうした歩く死体に現在の救いの働きをします。つまり、これらのいわゆる死体を生ける者へと変えるのです。それが救われることの意味です。

『キリストの言葉の記録』の「真に服従していることだけが本当の信仰である」より

217. 神の成すことは全て必要なことであり、特別な意味を持っている。なぜならば、神が人に対してすることは全て神の経営と人の救いに関連するからである。当然、ヨブに対してしたことも同じである。ヨブが神の目に完全で正しい人であったとしても、である。言い換えれば、神がすることが何であれ、その手段がどのようなものであれ、代償がどれほどであれ、方針がどのようなものであれ、神がすることの目的は変わらないということである。神の目的は、神の言葉、神が要求するもの、そして神の心を人間に対して働くことである。つまりそれは、神が自身の段階に沿って善と思うもの全てを行ない、人間が神の心を理解できるようにし、神の本質を理解できるようにし、神の支配に従えるようにし、そうすることによって神を畏れ悪を避けるようにするためである。これが神のすること全てにおける神の目的のひとつの側面である。もうひとつの側面は、サタンが引き立て役で神の働きにおいては仕えるものであるため、しばしば人間はサタンの手に渡されるのである。これは人間がサタンの誘惑と攻撃のただ中であって、

サタンの邪悪さ、醜さ、そして卑劣さを理解するために神が用いる手段であり、そうすることで人々がサタンを憎み、悪であるものを知り、理解できるようにするためである。このような過程を通ることにより、人々はサタンの支配から徐々に解放され、サタンの非難、妨害、攻撃から解放される。そして神の言葉により、彼らの知識と神への従順、神に対する信仰と畏れにより、サタンの攻撃に勝利し、サタンの非難に勝利する。そうして初めて、人々はサタンの支配から完全に解放される。サタンから解放されるということは、サタンが打ち負かされたということであり、彼らはサタンの獲物でなくなるということである。彼らを飲み込む代わりに、サタンは彼らを手放したのである。なぜなら、そのような人々は正しく、信仰を持っており、従順であり、神を畏れていたからであり、サタンと完全に決別したからである。彼らはサタンを辱め、怖じ気づかせ、完全に打ち負かした。神に付き従うという彼らの確信、神への従順と畏れがサタンを打ち負かし、そしてサタンに自分たちへの攻撃を諦めさせるのである。このような人々だけが真に神のものとされ、そうなることが正に人間に対する神の救いの最終目標なのである。彼らが救われることを願うのであれば、そして完全に神のものとされることを願うのであれば、神に従う全ての人は誘惑とサタンからの大小の攻撃に直面しなければならない。このような誘惑や攻撃から抜け出た者が、サタンに完全勝利することができる。このような者が、神に救われた者である。つまり、神により救われている者は神からの試練を経験したものであり、サタンの誘惑と攻撃を何度も受けたことのある者である。神により救われている者は神の心と要求を理解でき、ひたすら神の支配と采配に従い、サタンの誘惑のただ中であっても、神を恐れ悪を避ける道から逸れることがない。神により救われている者は正直であり、心優しく、愛と憎しみを区別し、義と理性を知っており、神を配慮し神の全てを大切にする。そのような人々はサタンに束縛されておらず、監視されておらず、非難されたり虐待されたりしていない。完全に解放されており、全く自由である。ヨブは正にそのような自由な人であり、それこそが、神が彼をサタンの手に渡したことの意義である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

218. 人間に対する神の不変の施しと支えの働きの間、神は自身の心全体と要求を人間に示し、自身の業、性質、そして神であることの全てを示す。神に付き従う中で、人間に必要な身丈にまでさせ、神の幾つもの真理を得ることができるようになることがその目的である。その真理とは、神により人間に与えられた武器であり、それによりサタンと戦うことができる。これらのものが備わったならば、人は神の試みに直面しなければ

ばならない。神は人間を試すための多くの手段や道を持っているが、どれも神の敵であるサタンの「協力」が必要となる。つまり、サタンと戦うための武器を人に与えた後、神は人をサタンの手に渡し、サタンが人の身丈を「試す」ことを許可する。人間がサタンの軍勢から脱出できるならば、サタンの包囲網から抜け出して生きていられるならば、試験に合格したということである。だがもしサタンの軍勢を離れることに失敗し、サタンに服従してしまうのであれば、試験に合格しなかったということである。神が人間を試す時、それがどのような側面をみるのであれ、神の基準はサタンの攻撃に対して人間がしっかりと証しに立っているかどうか、そして、サタンに誘惑されている間に神に背き、サタンに降伏して服従してしまうかどうかである。人間が救われるかどうかは、サタンに勝利してサタンを打ち倒せるかにかかっており、自由を獲得できるかどうかはその人間が神に与えられた武器を自ら取り上げてサタンの束縛から自らを解き放ち、サタンが完全に希望を失ってそれ以上攻撃しなくなるかどうかにかかっている。サタンが希望を失い、ある人を手放すのは、サタンは二度とその人を神から奪おうとはしない、二度と非難したり、妨害したり、気まぐれに苦しめたり攻撃したりしないという意味である。サタンをそのような状況に追い込むことができる人だけが、真に神のものとされるのである。神が人を自身のものとする過程はこのようなものである。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

219. ヨブの信仰、従順、サタンに勝利したことの証しは、人々にとって大きな助けとなり、励ましとなる。ヨブを通して、自分自身の救いの望みを見出し、信仰と神への畏れによってサタンを打ち負かし勝利することが可能であることを見出すからである。神の主権と采配に従い、全てを失っても神には背かない決意と信仰があるならば、サタンを辱めてサタンに打ち勝つことができると知るのである。また、たとえ命を失っても、証しに固く立つ決意と忍耐力があれば、サタンを怯えさせて退散させることができるのも知るのである。ヨブの証しは後の世代への警告である。つまり、後の世代がもし、サタンを打ち負かすことができなければ、サタンの非難と妨害から逃れることはできず、サタンの虐待と攻撃から抜け出すこともできないという警告である。ヨブの証しは後の世代に啓きを与えた。それにより、人々は、完全で正しくさえあれば、神を恐れ悪を避けることができることを教えている。つまり、神を恐れ悪を避けるならば、力強く生き生きとした神への証しを持つことができる。そして力強く生き生きとした神への証しを持つことができれば、サタンに支配されることはなく、神の導きと守りの中に生きることができる、そうして初めて真に救われるのだということを教えているのである。

。救いを求める者はだれでも、ヨブの人格とヨブの人生における追い求め方を見習うべきである。ヨブがその人生全てをどう生きたか、試練の中でどう振る舞ったか、神を畏れ悪を避ける道を追求する者たち全てにとって、それは大切な宝である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 2」より

220. 霊の事柄に関する認識を追求しない者、聖さを追求しない者、真理を実際に生きることが追求しない者、否定的な側面で征服されることにのみ満足して、真理を実際に生きることが表すこともできず、聖なる民のひとりとなれない者——このような者たちは皆救われていない人々である。なぜなら、人間に真理がない場合、人間は神の試練の時に揺るぎなく立つことができないからである。神の試練の中で揺るぎなく立つことができる者のみが、救われた者である。わたしが望むのは、完全にされることを求めるペテロのような人々である。現在の真理は、真理を切望し、求める者たちに与えられている。この救いは、神により救われることを切望する者たちに授けられており、あなた方が得るためだけのものではなく、あなた方が神によって得られるためでもある。神によって得られるために、あなた方は神を得るのだ。今日、わたしはあなた方にこの話をし、あなた方はそれを聞いたので、あなた方はこの言葉に従って実践すべきである。最終的に、あなた方がこれらの言葉を実践する時こそ、わたしがこの言葉によりあなた方を得る時である。それと同時に、あなた方はこれらの言葉を得る、すなわち、あなた方はこの至高の救いを得るであろう。あなた方が清められる時こそ、あなた方は真の人間となるであろう。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

221. 人にいのちを授けるとともに、神が人に要求するひとつのことは、人が神のいのちを受け取って自分のいのちとし、そのいのちを生きることです。人がそのいのちを生きるのを見ると、神は満足するのです。人が神から得るものは非常に貴重であり、しかも神はその何よりも貴重なものを人に授けながら、何も得ないのです。最大の受益者は人間です。人間の受け取る分が最も多く、人間が最大の受益者なのです。神の言葉を自分のいのちとして受け入れつつ、人間は真理を理解するようになり、人間であることの原則も得て、人間であるために必要な根を生やし、人間となるために歩むべき方向を得るのです。もはやサタンに惑わされることも縛られることもなくなり、邪悪な人に惑わされることも利用されることもなくなり、邪悪な流れに汚されず、退廃させられず、縛られず、誘惑されません。人間は天と地の間を自由に生き、解放されます。神の支配下において純粋に生きることができ、いかなる悪や闇の力によっても傷つけられること

はありません。つまり、このいのちを生きている限り、人間はいかなる痛みを経験することなくなり、幸せに、困難なく生きるのです。自由に生き、神と正常な関係を持つのです。もはや神に対して反抗も敵対もできません。むしろ、神の支配下にあって純粋に生きることができるのです。正しく、まっとうな人生を生き、内側からすべてが純粋な人間になるのです。

『キリストの言葉の記録』の「人間は神の経営計画の最大の受益者」より

## (XVII) 性質の変化と神によって完全にされることについて の言葉

222. 性質の変化とは何を指していますか。真理を愛する人が、神の働きを経験しつつ、神の言葉による裁きと刑罰を受け入れ、様々な苦難や精錬を経験すると、性質の変化は起こります。このような人は、内部にあるサタンの毒が浄化され、墮落した性質からは完全に解放されるため、神の言葉と神によるあらゆる采配や指揮を受け入れることができ、二度と神に逆らったり抵抗したりすることがなくなります。これが性質の変化です。…性質の変化とは、ある人が真理を愛し、真理を受け入れることができるので、自分の神に背く反抗的な本性をついに知るようになることです。その人は、人間の腐敗があまりに深刻なことで、また人間の愚かさと不正直さを理解します。その人は人間の貧しさと哀れさを認め、人間の本性と本質をついに認識します。これらのことを全て認識しているので、完全に自分を否定して捨て去り、神の言葉に従って生活し、あらゆることにおいて真理を実践することができます。これは神を知る人です。これは性質が変化した人です。

『キリストの言葉の記録』の「どのようにして人間の本性を知ればよいか」より

223. 性質の変化とは、人の本性の変化のことを言います。人の本性に関する物事は外面上の行いに見られるものではありません。そのような物事は、その生存の意義や価値とじかに関係しています。つまり、それらは人の人生観や価値観、魂の奥深くにあるもの、人の本質と直接かかわります。真理を受け入れられない人は、こういう面で変化を遂げません。神の働きを経験し、すっかり真理に入り、価値観と生存と人生についての見方を変え、自分の視点を神の視点と合わせ、完全に神に従い、忠実でいられるようになってのみ、性質が変わったと言えるのです。

『キリストの言葉の記録』の「性質の変化について知るべきこと」より

224. 人の性質は、その本質を知ることから始まり、考え方、本性、精神状態を変えることを通じて、つまり根本的变化を通じて変わるべきである。このようにしてのみ、人の性質に本当の変化が達成される。人の墮落した性質は、サタンによって毒を盛られ、踏みにじられていることと、サタンが人の考え方、倫理観、見識、理知に与えたひどい被害を根源としている。まさに人のこうした根本的事柄がサタンによって墮落させられ、神がもともと造ったものとは完全に違ってしまったため、人は神に反対し、真理を理解しないのである。したがって、人の性質を変えるには、まず人の考え方、見識、理

知を変え、それによって神に関する認識や真理に関する認識も変えることから始まるべきである。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

225. 神を信じる上で、人間が自らの性質の変化を望むならば、自分を日常生活から切り離すべきではない。日常生活においては自分を知り、自分を捨て、真理を実践し、万事における自己管理の原則や常識、規則を知った後、自らの漸進的な変化を実現することが出来る。理論的な認識のみに重点を置き、現実を深く検証することや日常生活に入り込むことなく、宗教儀式の中で生活するならば、あなたが現実に入ることは決してなく、自分自身や真理、神を知ることはなく、常に盲目で無知なままとなるであろう。…あなたは日常生活に入ることを実践し、自らの欠点と反抗、無知、そして異常な人間性と弱さを知らなければならない。そうすることで、あなたの認識は、全て自分の実際の状況や困難と統合される。こうした認識のみが本物であり、あなたが自分の状態の把握や性質の変化を実現することを可能にする。

『言葉は肉において現れる』の「教会生活と現実の生活について」より

226. 性質の変化を求めるにあたっては、自身の本性に潜むサタンの毒素を発見できるほどの自己認識の段階に到達しなければなりません。神を拒むとはどういう意味か、神に反抗するとはどういう意味か、万事において真理と一致するにはどのように振る舞うべきかを知らなければなりません。また、神の旨と、人に対する神の要求についてもいくらか理解する必要があります。神の前で良心と理知を有し、自慢げに語ったり神を欺いたり、これ以上神に反抗することをしたりしてはいけません。そうであれば、あなたの性質は変わっています。性質が変化した人は心の中で神を畏れ、神に対する反抗心は徐々に薄まります。さらに、そのような人は本分を尽くすにあたり、他人に心配してもらう必要はもはやなく、聖霊が絶えず鍛錬の働きをする必要もありません。基本的に神に服従でき、ものの見方に真理が存在します。これはすべて、神と相容れるようになったことに相当します。

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることでのみ、性質の変化を成し遂げられる」より

227. 性質の変化を経た人は真理を理解しており、あらゆる事柄を識別することができ、神の旨に沿うにはいかに行動するべきか、真理の原則に沿うにはいかに行動するべきか、神を満足させるにはいかに行動するべきかを知っており、自らが露わにする堕落の本質を理解しています。そのような人は自分の考えや観念が露わになると、識別力を



もちいて肉を捨て去ることができます。性質の変化はこのように現れます。性質の変化に関して主要な事は、彼らが明確に真理を理解しており、物事を実行するときにはある程度正確に真理を実践し、墮落した性質はさほど頻繁には露わにされないということです。一般的に、性質が変化した人にはとりわけ理知と識別力があるように見え、真理を理解しているために独善性や傲慢をさほど示しません。彼らは露わにされた墮落の大半を見通し識別することができるので、傲慢さを生じさせません。彼らは人間のあるべき立場をわきまえており、いかに理性的に振る舞うべきか、いかに忠実に本分を尽くすべきか、言うべき事とそうでない事、誰に何を言い行なうべきかをわきまえています。このような人々が比較的理性的だと言われるのはそのためです。性質を変える人々は真に人間の姿を生き、真理を自分のものにしています。彼らはいつも真理に従って物事を語ったり見たりすることができ、どんな人や物事にも影響されず、みな自分の見方を持ち真理の原則を保つことができます。彼らの性質は比較的安定しており、熱しやすく冷めやすいということはなく、状況がどうであろうと、本分をどうきちんと尽くすか、神に満足していただくためにどう物事を行なうべきかを理解しています。性質が変えられた人々は、表面的に自分を良く見せるために何をすべきかに重点を置いたりしません。彼らは神に満足してもらうためにどうすべきかを心の中で明確に把握しているのです。それ故、外面的には熱心には見えなかったり、偉大なことを成し遂げたようには見えなかったりするかもしれませんが、彼らのすること全ては意味があり、価値があり、現実的な結果をもたらします。

『キリストの言葉の記録』の「外面的な変化と性質の変化の相違」より

228. 性質が変えられた人々が真理を多く得ていることは確かです。このことは彼らの物事の見方や行動の原則を通して確認できます。真理を得ていない人々は絶対に性質の変化など経験していません。これは人間性において成熟し経験豊かであれば必ずや性質の変化を経験するということではありません。性質が変えられるというのは、人の本性の中にあるサタンの毒の一部が、神を認識して真理を理解することによって変えられることをまず第一に指します。つまり、そのようなサタンの毒素は清められ、神によって表される真理がそれらの人に根付き、いのちとなり、生存の基礎となるということです。そうやって初めて、人は新たにされ、そのようにして性質も変わるのです。性質の変化はその人の外的な性質が以前より柔和になったということでもなければ、傲慢だった人が理性的に語るようになるとか、相手の話を聞かなかった人が他人の話を聞けるようになったとかいうことではありません。このような外的変化を性質の変化とは

言えません。もちろん、性質の変化にはこれらの状態も含まれますが、何よりも重要なのはその人の内なるいのちが変えられたということです。神の表す真理が彼らのいのちそのものとなり、サタンの毒は取り除かれ、ものの見方が全く変わり、それらのどれも、この世のものとは全く違うものとなります。彼らには赤い大きな竜の策略と毒がはっきり分かります。彼らはいのちの真の本質を得ています。そのようにして彼らのいのちの価値が変わったのです。これが最も基本的な変化であり、性質の変化の本質なのです。

『キリストの言葉の記録』の「外面的な変化と性質の変化の相違」より

229. 神により完全にされることを求めるには、まず神により完全にされることの意味、完全にされるために満たすべき条件は何かを知る必要があります、そうした物事を把握した後に実践の道を追う必要がある。神により完全にされるためには、人間は特定の力量を備えている必要がある。あなたがたのうち多くの者が、その必要とされる能力を備えておらず、その能力は、あなたが特定の代償と主体的な努力が必要とされる。あなたの能力が乏しければ乏しいほど、あなたは一層主体的に努力しなければならない。神の言葉に関するあなたの知識が多ければ多いほど、そして神の言葉を多く実践すればするほど、あなたは神により完全にされる道を歩む時期も一層早まる。あなたは祈ることにより、祈りの最中に完全にされることが可能となる。神の言葉の飲食、その本質の把握、その実際性を行動で示すことにより、あなたは完全にされることが可能となる。神の言葉を毎日経験することにより、あなたは自分に欠如している物事を知り、またそれ以上に、自分の急所となっている物事や弱点を知り、そして神に祈りを捧げることにより、あなたは徐々に完全にされるであろう。完全にされる道、それは祈りを捧げること、神の言葉を飲食すること、神の言葉の本質を把握すること、神の言葉の経験において成長すること、自分に欠如している物事を知ること、神の業に従うこと、神の重荷に配慮し、愛する心で肉を捨てること、あなたの経験を豊かにする兄弟姉妹との交わりを頻繁に持つことである。社会生活であるか、個人生活であるかを問わず、また大規模な集会か、小規模な集会かを問わず、そうした物事は、すべてあなたが自分の心を神の前で静められ、神へと還ることが出来るようにするための経験と訓練を受けることを可能とする。こうした物事は、すべて完全にされることの過程である。語られている神の言葉を経験することは、あなたが神に対する一層大きな信仰と愛を備えられるように、神の言葉を実際に味わい、それをあなたが行動で示すことを可能とする。このようにして、あなたは次第にサタンのような堕落した性質を払拭し、不適切な動機から脱し、正常

な人間像を行動で示すであろう。神に対するあなたの愛が大きければ大きいほど、つまりあなたの中で神により完全にされている部分が多ければ多いほど、あなたがサタンにより腐敗させられる程度が低くなる。あなたの実際の経験により、あなたは次第に完全にされる道を進むようになるであろう。ゆえに、あなたが完全にされることを願うならば、神の旨に配慮することと、神の言葉を経験することは、特に重要である。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされるべく、神の旨に配慮せよ」より

230. あなたは完全にされることを本当に願っているか。あなたが神により完全にされたいと本当に願っているのであれば、自分の肉を捨てる勇気を持ち、消極的になることも弱ることもなく神の言葉を実行できる。神から出る全てのことに従うことができ、公の場であれ私的な場であれ、あなたの全ての行いは神の前に見せることができるものとなる。あなたが誠実な人間であれば、そして全てのことに於いて真理を実践するのであれば、あなたは全き者とされる。人前でする事と陰ですることが違うような偽りに満ちた者は、進んで完全にされようとはしていない。それは地獄と破滅の子であり、神ではなくサタンに属する者である。神に選ばれる種類の人間ではない。もしあなたの行動や振る舞いが神の前に見せられないものであったり、神の霊に見てもらえるものでない場合、あなたの何かが間違っていることの証拠である。神の裁きと刑罰を受け入れるのでなければ、そして性質の変化に重点を置くのでなければ、完全にされるための道に入ることはできない。もしあなたが本当に神に完全にされたいと願い、神の旨を行いたいと願っているのであれば、一切不平を言わず、あつかましくも神の働きを評価したり判定したりせず、神の全ての働きに従うべきである。これらが神に完全にされるための最低限の要求である。神によって全き者とされることを欲する者に必要なことはこれである。すなわち、全てのことを、神を愛する心で行うこと。「神を愛する心で行う」とはどういう意味であろうか。それは、あなたの行動や振る舞いが全て、神に見せる事ができるものであるという事である。あなたの意図は正しいので、あなたの行いが正しいかどうかに関係なく、神の前に、そして兄弟姉妹の前に、行動や振る舞いを見せることをあなたは恐れない。あなたは神の前にて、あなたのあらゆる意図、考え、思いが神の前にて検討されるに相応しいものであると誓うことさえいとわない。あなたがこのように実践し、進入していくならば、あなたのいのちの進歩は速いであろう。

『言葉は肉において現れる』の「真心で神に従う者は確かに神のものとされる」より

231. 現在、あなた方が主として追求すべきことは、すべての事柄において神によって完全にされることであり、そしてあなた方が向かい合っているすべての人、事柄、物

事を通して、神によって完全にされることである。そうすることによって、神という存在のより多くの方があなたの方の中へ取り込まれる。あなた方は神から、より多くより大きな祝福を受け継ぐ資格を得る前に、まず地上で、神からの嗣業を受け取らねばならない。今述べたことのすべてが、あなた方が追求すべきことであり、最初に理解すべきことである。あなたが、すべての事柄において神によって完全にされることを追求すればするほど、あなたは、すべての事柄において神の手を見ることができ、そしてそこから神の言葉の存在やその現実性において成長することを、異なる視点と異なる事柄を通して、積極的に求めるだろう。あなたは、単に罪を犯さない、あるいは観念を持たない、人生哲学を全く持たない、人間としての意思を持たないといった、否定的な状態に甘んじてはいけない。神は、いろいろなやり方で人を完全にする。結果的にあなたがあらゆる事柄において完全にされることは可能である。あなたは、肯定的なことから完全にされることが可能であるだけでなく、否定的なことからも完全にされることができ、結果的にあなたが得るものを豊かにする。毎日、神によって完全にされる好機そして神のものとされる時がある。そのような経験をする、あなたは大きく変わる。するとあなたは自然に、以前には理解できなかった多くの事柄に対し洞察力を獲得することができるだろう。すなわち、誰かがあなたに教える必要もなく、無意識のうちに、あなたは神によって啓かれ、あらゆる事柄において啓示を受け、細部に至るまで経験するようになる。神は、あなたを、どちらの側にも曲がって進まないように導くだろう。そしてあなたは、神によって完全にされる道を進むだろう。

神によって完全にされることは、神の言葉を飲み食いすることによって完全にされることに限定されない。このような経験のあり方は、あまりにも偏っていて、必要なものを網羅していない。人を非常に狭い範囲に閉じ込めるだけである。このような場合、大いに必要とされる心の養分が得られない。もし、あなたが神によって完全にされることを望むなら、あらゆる事柄を経験することを学び、直面するいかなる事柄においても、神の啓きを与えられなくてはならない。何かに向き合うときは常に、良いことであれ悪いことであれ、あなたにとって得るものがなければならない。あなたが消極的になることがあってはならない。何が起ころうと、あなたは、神の側に立ってそれを考えることが求められるのであって、人の観点から分析あるいは検討してはいけない（これは、あなたの経験における逸脱である）。もしあなたの経験の仕方がこのようであれば、あなたの心はいのちの重荷で一杯になるだろう。あなたは常に神の顔の光の下で生き、経験において容易に逸脱することはないだろう。そのような人は、大きな展望を持つ。

232. 神は今一群の人々を獲得することを望んでいる。彼らは、神と協力するよう尽力し、神の業に従うことができ、神の語る言葉が真実であると信じ、神の要求を實踐できる者たちである。彼らは、心の中に真の理解を備えている者たちである。彼らは、完全にされることが可能な者たちであり、必然的に完全への道を歩む。神の業をはっきり理解しない者、神の言葉を食べることも飲むこともしない者、神の言葉に全く注意を払わない者、心の中に神への愛が全く無い者、こういった人々は完全にされることがない。肉にある神を疑う者、神のことを未だに確信していない者、神の言葉について一度として真剣にならない者、常に神を欺く者は、神に反抗する者であり、サタンの者であり、このような人々を完全にする術は無い。

233. 聖霊が働くのは神に用いられる特定の人々だけではなく、教会においてそれ以上に働く。聖霊はどんなところでも働くことができる。今はあなたの中で働いているが、あなたがその働きを経験すると、次には別の人の中で働くということがある。急いでついて来なさい。今の光にしっかりついて来るなら、あなたのいのちは更に成長し、成熟する。どのような人間であれ、聖霊がその人の中で働いているなら、必ず従いなさい。その人の経験を自分の経験と重ねてそこから学びなさい。そうすれば、あなたは更に高尚なものを受けるであろう。そうすることで、あなたの進歩は更に速まる。これが人間が完全にされる道であり、いのちが成長する道である。完全にされる道には、聖霊の働きに従うことで到達する。あなたは、神がどのような人を通してあなたを完全にする働きをするかを知らず、どのような人、どのような出来事や物事を通してあなたを獲得し、あなたが識見を得るようにするかを知らない。あなたがこの正しい道を進むことができるのであれば、それはあなたには神によって完全にされる望みが大いにあるということを示している。もしあなたが正しい道を進むことができないのであれば、あなたの将来は暗く、光りがないということである。あなたが正しい道に入れば、全ての事において啓示が与えられる。聖霊が他の人たちに何を啓示するかを問わず、その人達の認識を基盤にして前進し、自らも経験するのであれば、それはあなたのいのちの一部となり、その経験を通して他の人たちに施すことができる。ただ言葉を真似て他の人たちに施す者は何の経験もない者である。まず他の人が受けた啓示や照らしを通して実践の方法を見つけ出し、それから自分の実際の経験や認識を語るようにしなさい。これはあなた自身のいのちに大いに益となる。あなたは、神から出る全ての事に従い、このように経

験しなさい。全ての事において神の旨を求め、全てのことを教訓とし、あなたのいのちが成長し、成熟するようにしなさい。このように実践するならば、極めて速い進歩が得られる。

『言葉は肉において現れる』の「真心で神に従う者は確かに神のものとされる」より

234. もしあなたが、神により用いられ、完全にされたいと望むのであれば、次に挙げる全てを備えていなければならない。苦しみを受ける意志、信仰、忍耐、服従そして、神の業を体験する能力、神の意志を把握し、神の悲しみを思い遣ることができる能力など。ひとりの人間を完全にすることは容易ではなく、あなたが体験する一つひとつの精錬において、あなたの信仰と愛が必要とされる。神によって完全にされたいのであれば、ただ路傍に繰り出すことも、単に努力を費やすことも充分ではない。神により完全にされる者となり得るためには、多くのものを備えていなければならない。苦難に直面した時、肉のことを考えず、神に対して不平を言わずに居ることが出来なければならない。神があなたから自身を隠している時は、あなたは神に付き従う信仰を持ち、以前の愛が揺るいだり、消え去ったりすることがないように維持出来なければならない。神が何を為そうが、神の意図に従い、神に対して不平を言うよりも、自らの肉を進んで呪わなければならない。あなたは、試練に直面する時、たとえ自分が愛するものと訣別する未練や苦い涙があっても、神を満足させなければならない。ただこれのみが真の愛、真の信仰と呼ぶことができる。あなたの実際の背丈がどの程度であるかを問わず、まず苦難を受ける意志、及び信仰を備え、また、肉を捨て去る意志を備えていなければならない。神の意志を満足させるために、あなたは自ら進んで個人的に苦難に耐え、自分の個人的利益を失うことを惜しんではならない。また、あなたは、自分自身を悔いる心を持たなければならない。過去に神を満足させることができなかったことを悔い、そして今自分自身を悔いることができなければならない。これらのうちのどれ一つとして欠かしてはならない。そうすれば神は、これらのことを通してあなたを完全にするだろう。これらの条件に欠けている場合、あなたは完全にされることはない。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされる者は精錬されることを体験しなければならない」より

235. その生涯を通じ、ペテロは数百の精錬を経験し多くの苦難を受けた。この精錬は神に対するペテロの至高な愛の基礎となり、ペテロの一生で最も重要な経験となった。ペテロが神への至高の愛を持つことができたのは、ある意味では、神を愛する決意ゆえであった。しかし、より重要なのは、それはペテロが経験した精錬と苦しみゆえであった。この苦しみは神を愛する行路の指針となり、ペテロにとって最も記憶に残ったも

のとなった。神を愛する際に人々が精錬の苦しみを受けなければ、人々の愛は自然さと嗜好に満ちたものである。そのような愛はサタンの考えに満ちており、神の心を満たすことはまったくできない。神を愛する決心を持つことは真に神を愛することと同じではない。人々の思考には人間的な発想がないかのように、人々の思考はすべて神のためであるかのように、心の中で考えることがすべて神を愛するためであり、神の意を満たすためであるとしても、その人々の思考が神の前に出された時、そのような思考は神により賞賛も祝福もされない。人々が真理をすべて十分に知り、すべての真理を完全に理解しても、それが神を愛することの印であるとは言えず、すべての真理を十分に理解した人々が実際に神を愛しているとは言えない。多くの真理を理解したにもかかわらず、精錬を経験していない人々は、これらの真理を実践することができない。精錬の間においてのみ人々はこれらの真理の本当の意味を理解し、そうして初めてそのような真理の内的な意味を純粋に認識できる。その時、人々が再び試みると、真理を適切に実践することができ、神の心と調和することができる。その時、人々の人間的な考えは少なくなっており、人間としての自然性の程度は下がり、人間的な感情は消え去る。そのような人々の実践は神への愛の真の表明となる。神への愛の真理の効果は話された認識や精神的な意思によって達成されるものではなく、単に理解することによっても達成することはできない。人々は代価を支払う必要があり、精錬されている間に多くの苦痛を受け、そうして初めて人々の愛は純粋になり、神自身の心を求めるものになる。

『言葉は肉において現れる』の「精錬を経ることでのみ、人は真の愛をもつことができる」より

236. ペテロが追求したのは、神の御言葉の精錬を通じて、また神が彼に与えた様々な試練において、自分自身を知り、自分自身の中で明らかになることを知ることでした。最後に自分自身を真に理解するにいたったペテロは、人間がどれほどひどく墮落しているか、どれほど無価値で神に仕えるに値しないかを理解し、人間は神の前で生きるにふさわしくないと悟ったのです。その時ペテロは神の前にひれ伏しました。ついに、ペテロは感じました。「神を知ることこそ最も尊いことだ。神を知らなければ、私の死は哀れになる。私は、神を知ることが最も重要で最も意味があることだと実感している。もし神を知らなければ、人は生きるに値せず、人生もない」ペテロの経験がここに到達する頃には、ペテロは自身の本性を相当に知っていましたし、またかなりよく理解していました。人が想像するほど徹底的には説明できなかったかもしれませんが、彼はその状態にたどり着いたのです。したがって、いのちを求める道と、神によって完全になることには、神の御言葉の中から自分自身の本性を深く理解すること、それに加えて自分

の本性の側面を把握して、言葉でそれを正確に描写することが含まれます。自分の古いいのち、つまり以前のサタンの本性からなるいのちを徹底的に理解することは、神の要求する結果を達成したことを意味します。認識がまだそこに達していないのに、自分自身を理解している、いのちを得たなどと主張するなら、それはただ自慢していることになりませんか。自分自身を知らず、神の前にいる自分が何であるのかも、人間としての基準に真に合致しているのかも、サタンの要素がまだどれほど自分にあるのかも、あなたは知らないのです。あなたは未だに自分が誰に属しているのかよくわかっておらず、自己認識が全くないのに、どうして神の前において理知をもちえるのでしょうか。ペテロがいのちを追求していたとき、試練をとおして自分自身を理解することと自分の性質を変えることに専念しました。彼は神を知ろうと懸命に努力し、最後にはこう考えました。「人は生きているうちに神を認識しようと努めなければならない。神を知ることは最も決定的なことなのだ。神を知らなければ、死んでも私は安らかに眠れない。ひとたび神を知れば、神が私を死なせても、喜んで死ぬ。私は一切不平を言わず、私の生涯は満たされる」ペテロは、神を信じるようになって初めてこの認識を得られたわけでもこの境地に達せたわけでもありません。幾多の試練に耐えなければなりませんでした。神を知ることの価値を感じられるまでには、彼の経験はある地点まで達しなければならず、完全な自己認識を得なければなりませんでした。ですから、ペテロの辿った道はいのちを得る道であり、完全にされる道だったのです。彼の具体的な実践は、おもにこの側面に集中していました。

『キリストの言葉の記録』の「ペテロの道を歩むには」より

237. 人々が完全への道に踏み出すと、彼らの古い性質は変えられる。さらに、彼らのいのちは成長を続け、彼らは徐々により深い真理の中へ入っていく。彼らは世を忌み嫌うことができ、真理を追い求めないすべての者たちを嫌悪をすることができる。彼らはとりわけ自分自身を嫌悪するが、ただそれだけではなく、彼らは明らかに自分自身を知っている。彼らには真理によって生きる意欲があり、真理を追い求めることを自分たちの目標とする。彼らは自分たちの脳が生み出した考えの中で生きるつもりはなく、人間の独善、傲慢、うぬぼれに深い嫌悪感を持つ。彼らは適切かどうかを強く意識して話し、識別力と知恵でもってものごとに対処し、神に忠実で従順である。もし彼らが刑罰と裁きとを経験することがあると、彼らは受動的になったり弱くなったりしないどころか、神による刑罰と裁きに感謝する。彼らは神の刑罰と裁きなしではやっていけないと信じている。彼らはそれを通して神の守りを受ける。彼らは平和と喜びと飢えを満たす



パンの信仰を求めない。まして、彼らは一時的な肉の快楽を追いかけることもない。これこそが完全にされた者が備えているものである。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内幕（４）」より

238. 自らの本分を尽くしながら神を満足させることができ、言動において原則をしっかりともち、真理のあらゆる側面の現実に入ることができるなら、その人は神により完全にされる人間です。神の働きと御言葉は、そのような人にとって完全に有効であり、神の御言葉はその人のいのちとなり、その人は真理を得て、神の御言葉に沿って生きることができる、とすることができます。その後、その人の肉体の本性、つまり、根源的存在の基礎そのものが、震えてばらばらになり崩壊します。神の御言葉を自らのいのちとして有するようになると、人は新しい人となります。神の御言葉が人のいのちとなり、神の働きのビジョン、人類への神の要求、人への神による暴露、神が人に達することを要求する真のいのちのための基準が人のいのちとなり、これらの御言葉と真理に従って生きるならば、人は神の御言葉によって完全にされます。そのような人は生まれ変わり、神の御言葉をとおして新しい人となったのです。

『キリストの言葉の記録』の「ペテロの道を歩むには」より

239. 神の性質について真の認識を有し、神の聖さと義を心から讃えることができるなら、その人は真に神を知り、真理を自分のものにしています。そのとき初めて、彼らは光の中で暮らしていることとなります。世界観と人生観が変わって初めて、その人は根本的に変化します。人生の目標があり、真理に従って行動し、神に絶対的に服従して神の言葉に従って生き、魂の奥底で平安と照らしを感じ、心に闇がなく、神の前で完全に自由に、かつ制限されずに生きて初めて、真の人間の生活を送り、真理を有する人となります。それに加え、あなたが有している真理はどれも、神の言葉と神自身に由来するものです。全宇宙と万物の支配者たる至高の神があなたを、真の人生を送る真の人間として承認するのです。神の承認以上に有意義なことがありますか。このような人が真理を有する人なのです。

『キリストの言葉の記録』の「真理を追い求めることでのみ、性質の変化を成し遂げられる」より

## XII 神の要求、励まし、慰め、警告についての言葉

## (I) 人間に対する神の要求についての言葉

1. あなたがたは、天における祝福のようなわたしの祝福を地上で受けたいと思っているのだろうか。あなたがたは、わたしについての理解、わたしの言葉の享受、わたしについての認識をあなたがたの人生で最も貴重で意味深いものとして扱うつもりがあるだろうか。あなたがたは自分の前途を考えることなく、わたしに従うことがほんとうにできるのか。あなたがたは羊のようにわたしに殺されたり、わたしに導かれたりすることがほんとうにできるのか。あなたがたの中にこのようなことをなし遂げ得る人はいるだろうか。わたしが受け入れ、わたしの約束を受ける人はみな、わたしの祝福を受ける人だということがあり得ようか。あなたがたはこうした言葉から何かを理解しているのだろうか。もしわたしがあなたがたを試したら、あなたがたはほんとうにわたしにすべてを委ね、そうした試練の中でわたしの意図を探り、わたしの心を理解することができるだろうか。わたしはあなたがたが多くの感動的な言葉を語ったり、興奮するような物語りを語れることを望まない。むしろ、わたしに立派な証しをすること、現実完全に深く入ることができることを求める。もしわたしが直接話さなければ、あなたは周囲のすべてを捨て、わたしに用いられることができただろうか。これがわたしが求める現実性なのではないか。誰がわたしの言葉の意味を把握できるだろうか。しかし、わたしはあなたがたがもはや不安に押しつぶされず、わたしの言葉の本質に入り把握することにおいて積極的になることを求める。これが、わたしの言葉を誤解したり、わたしの意味するところについて不明瞭であったり、わたしの行政令に触れたりすることを防ぐだろう。わたしがあなたがたについて意図していることをわたしの言葉の中に把握してくれることを願う。もはや自分の前途については考えず、すべての物事における神の采配に委ねるとわたしの前で決心したそのとおりに行動しなさい。わたしの家の内に立つ者はみな、できる限りの努力をしなければならない。わたしの地上での働きの最終部分に自己の最善を差し出さなければならない。あなたは、このように実践する気持ちがほんとうにあるだろうか。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第四章」より

2. 神の国の民に対する神の要求は次のとおりである。

1. 神の委託を受け入れなければならない。つまり、終わりの日の神の働きにおいて語られたすべての言葉を受け入れなければならない。

2. 神の国の訓練に入らなければならない。

3.神に動かされる心を持つよう求めなければならない。あなたの心が完全に神に向いて、正常な霊的生活があれば、あなたは自由の領域で生きることになり、それは神の労りと保護のもとで生きることを意味する。神の労りと保護のもとに生きるときにのみ、あなたは神に属するのである。

4.神によって得られなければならない。

5.地上で神の栄光の顕れとななければならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の最新の働きを知り、神の歩みに従え」より

3. わたしの民は常にサタンの狡猾な企みを警戒し、わたしの家の門をわたしのために守り、互いに支え合い、施し合わなくてはならない。そうすることで、あなた方はサタンの罠に陥ることがなくなるだろう。その時は、もう後悔しても手遅れなのだから。なぜわたしはこれほど早急にあなた方を訓練しているのか。なぜ霊の世界に関してあれこれ語るのか。なぜあなた方に何度も思い出させ、熱心に忠告するのか。あなた方はかつてこのことについて考えたことがあるだろうか。あなた方は理解したことがあるだろうか。このように、あなた方は過去の基盤に基づく熟練が必要なだけでなく、さらには今日のわたしの言葉に従って自分自身の中の不純物を追い出し、わたしの言葉の一語一語を根付かせ、あなた方の霊において花咲かせ、さらに重要なことには、もっと多くの実を結ばせなくてはならない。わたしが求めるものは明るく、繁茂した花ではなく、豊富な果実——さらには、悪くならない果実だからである。わたしの言葉の本当の意味がわかるだろうか。温室の花は星の数ほどあり、旅行者たちを惹きつけるが、いったん萎れるとサタンの偽りの計画のようにぼろぼろになり、誰も興味を示さなくなる。しかし、風に打たれ、太陽に照らされ、わたしに証しを立てる人々にとって、これらの花は美しくはないが、花が萎れると実がなる。これがわたしの要求だからだ。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第三章」より

4. わたしが求めるものは、今このときのあなたの忠誠心と服従、今この時のあなたの愛と証しである。たとえあなたが証しをするとは何か、愛とは何かをこの瞬間知らなくても、あなたのすべてをわたしに持ってくるべきで、あなたが持っている唯一の宝物、つまりあなたの忠誠心と服従心をわたしに差し出すべきである。わたしがサタンを打ち負かしたことに對する証しは人の忠誠心と従順に見ることができ、わたしが人を完全征服したことに對する証しもそうであることを、あなたは知るべきである。わたしへのあなたの信仰の義務はわたしの証人となること、わたしに忠実無二であること、最後ま

で従順であることである。わたしの働きの次のステップを始める前に、あなたはどのようにわたしの証人となるのか。あなたはいかにしてわたしに忠実であり、服従するのか。あなたの役目のためにすべての忠誠心を捧げるか、それとも単にあきらめるのか。あなたはむしろわたしのすべての取り決め(たとえそれが死であっても、あるいは滅びることであっても)に服従するか、それとも、わたしの刑罰を避けるために途中で逃げ出すか。わたしがあなたを罰するのはあなたがわたしの証人となり、忠誠を尽くしわたしに服従するためである。また、現在の刑罰はわたしの働きの次のステップが明らかにされ、仕事の進展が妨げられないためである。よって、わたしはあなたが賢くなり、あなたのいのちや存在の意義を価値のない砂のように取り扱わないよう勧告する。あなたはわたしのこれからの働きのどんなものになるか正確に分かるだろうか。あなたはこれからわたしがどのように働き、わたしの働きのどのように展開していくか知っているだろうか。あなたはわたしの働きに関するあなたの体験の意義、さらにわたしへのあなたの信仰の意義を知るべきである。わたしは多くの事を行ってきた。あなたが想像するように、わたしは途中であきらめることなどできようか。わたしはそのように幅広い働きをなしてきた。どうしてそれを台無しにすることなどできようか。確かに、わたしはこの時代を終わりにするために来た。これは本当だが、それ以上にわたしは新しい時代を始め、仕事を始め、そして何よりも、神の国の福音を広めようとしていることをあなたは知らなければならない。だからあなたは、現在の働きは時代を始めることだけであり、福音を伝えるための基盤を築き、将来に時代を終わらせるための基盤を築くことを知らなければならない。わたしの働きはあなたが思うほど単純ではないし、あなたが信じているほど価値がなく意味のないものではない。だから、わたしは前にも言ったように言う。あなたはわたしの働きのために自分を捧げ、それ以上にわたしの栄光のためにあなた自身を捧げるべきである。あなたがわたしの証しをすることをわたしは長い間待ち望み、それ以上に長く、あなたがわたしの福音を宣べ伝えるのを待ち望んでいた。あなたはわたしの心にあるものを理解すべきである。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは信仰について何を知っているか」より

5. 現在はわたしの霊が大いなることを行い、わたしが異邦人の諸国での働きを開始するときである。さらに、わたしがあらゆる被造物を分類し、一つひとつを種類ごとに仕分けし、わたしの働きのさらに早く効果的に進行するようにするときである。だから、わたしがあなたがたに要求することはやはり、自己の存在のすべてをわたしの働きのために捧げ、さらにわたしがあなたにおいて行なった働きのすべてを明確に認識、確信

し、わたしの働きがさらに効果的になるように自己の力のすべてをそれに注ぎ込むことである。これが理解しなければならないことである。あなたがたのあいだで争ったり、後戻りする道を探したり、肉体の快適さを求めるのをやめなさい。これらはわたしの働きを停滞させ、各自のすばらしい将来を台無しにする。これらはあなたを守ることができるところか、破壊をもたらす。それはあなたにとって愚かなことではないだろうか。今日あなたが貪欲に享受しているものが、まさにあなたの将来を台無しにするものであり、一方、今日あなたが苦しんでいる痛みが、まさにあなたを守っているのである。これらのことをはっきりと知り、抜け出すのに大変苦労することになる誘惑から逃れ、濃霧にはまり込むのを避け、太陽を見つけられるようにしなければならない。濃霧が消えると、あなたは大きな日の裁きの只中にいる自分を見つける。

『言葉は肉において現れる』の「福音を広める働きはまた人間を救う働きでもある」より

6. わたしは、誰もできない働きをしてきた。わたしの唯一の望みは、人が何らかの善行によりわたしに報いることだ。わたしに報いることができる人は僅かだが、それでもわたしはこの世での旅を終え、わたしの働きを現わす次の段階を始める。なぜなら、わたしが長年人々の間で行き来してきたことは実を結び、わたしはそれを非常に喜ばしく思っているからだ。わたしが気にするのは人の数ではなく、むしろ彼らの善行である。いずれにしても、わたしはあなたがたが自分たちの終着点に備えて、十分な善行を積むよう望んでいる。そうすれば、わたしは満足する。さもないと、あなたがたの誰も自分に降りかかる災いを免れないだろう。災いはわたしによりもたらされ、もちろんわたしが采配を振るものである。もしあなたがたがわたしの目に良いと映らなければ、災いの苦しみから免れることはないだろう。

『言葉は肉において現れる』の「終着点のために、善行を十分積まなければならない」より

7. 現在まで長年にわたり神を信じている者は、美しい終着点を望んで来ており、神を信じる全ての者は、幸運が突然自分に訪れることを望み、また知らないうちに、天国のどこかで安らかに落ち着いていたいと願う。しかし、こうした美しい考えを持った人々は、自分がそのような幸運を得たり、天国で居場所を得たりする資格があるかどうかを知らない。わたしは言う。現在のあなたがたは十分に自分のことを知っているが、それでも終わりの日の災いを逃れ、邪悪な者たちを罰する全能者の手から逃れることが出来るよう願っている。美しい夢を抱き、快適な人生を望むことは、誰かの思いつきではなく、サタンが腐敗させた人々全員の共通点であるかのように思われる。そうであっても、わたしはあなたがたの途方もない欲望と祝福を得ることへの熱望に終止符を

打ちたいと思う。あなたがたの過ちが多数有り、反抗した事実が多数あり、増え続ける一方であることを考えると、どうしてそうした事柄があなたがたの美しい未来像に含まれることが有り得るだろうか。自分が満足するままに誤ったままで生活を送ることを望み、自分を思い留まらせる物事が全く無いが、それでもなお夢を叶えたいというのであれば、朦朧としたまま意識を取り戻さないよう勧める。なぜなら、あなたの夢は空虚であり、義なる神の前において自分を例外とするためには役立たないからである。ただ夢を叶えたいのであれば、決して夢見ず、永遠に真理と事実を直視しなさい。あなたを救う方法は、これしかない。この方法には、具体的にはどのような項目があるだろうか。

最初の項目として、自分の過ちと、真理と一致しない行動、思想を全て検証する。

これは容易に実行できる項目であり、思考力のある者は、これを実行できるであろう。しかし、過ちと真理の意味を全く知らない者は、基本的に思考力が無い者なので、例外である。わたしは、神に認められ、正直であり、律法の重大な違反を犯したことが無く、自分の過ちを容易に認識できる人々に対して話をしている。これはわたしがあなたがたに要求する項目のうち、あなたがたにとって容易なものであるが、わたしが要求する項目はこれだけではない。あなたがたがいかなる場合もこの必要条件を個人的に笑い飛ばすことが無いこと、またそれにも増してそれを見下したり軽視したりしないことを願う。この項目を真剣に扱い、また無視してはならない。

2番目の項目として、自分の過ちと反抗の各事例について、それに相当する真理を探し、その真理でそれらの事例を解決させ、自らの過ちと反抗的な思想や行為を、真理の実践と置き換える。

3番目の項目として、常に賢く狡猾な者ではなく、正直者になるようにする。(この項目においても、わたしはあなたがたが正直者となることを求めている。)

この3項目全てを達成出来た場合、あなたは幸運であり、夢が叶う者であり、幸運を手にする者である。あなたがたはこの魅力に乏しい3つの項目を真剣に捉えるかも知れないし、無責任に扱うかも知れない。いずれにせよ、わたしの目的は、あなたがたの夢を叶え、自分の理想を実践することであり、あなたがたをからかったりばかにしたりすることではない。

『言葉は肉において現れる』の「過ちは人間を地獄へ送る」より

8. わたしの国の民として、あなたがたは赤い大きな竜を心の底から嫌っているのだから、行いによってわたしを満足させ、それによって、竜を辱めなくてはならない。あ

あなたがたは、ほんとうに赤い大きな竜を憎むべきものと感じているのだろうか。あなたがたは、ほんとうに竜が神の国の王の敵だと感じているのだろうか。あなたがたは、ほんとうに、わたしにすばらしい証しのできる信仰をもっているのだろうか。あなたがたは、ほんとうに赤い大きな竜を打ち破る信仰をもっているのだろうか。これが、あなたがたへの問いだ。わたしが必要なのは、ただあなたがたがこの段階まで行くことだ。あなたがたに、これができるだろうか。あなたがたは、この段階に至る信仰をもっているだろうか。人間に何ができるのだろうか。人間ではなく、わたしが自らするのではないのか。なぜ、わたしが自ら戦闘の行われる場所に降りると言っているのだろうか。わたしが望むのは、あなたがたの信仰であって、行いではない。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十章」より

9. 終わりの日の集団におけるわたしの業は前例のない事業であるため、わたしの栄光が宇宙を満たし、すべての人々がわたしのために最後の苦難に遭う。あなた方にはわたしの旨が分かるだろうか。これがわたしの人に対する最後の要求である。つまり、わたしは全ての人々が赤い大きな竜の前で、力強く、明確なわたしの証しとなれることを望む。最後に彼らがわたしのために自らを捧げ、最後にもう一度わたしの要求を満たすことを望む。あなた方にはこれが本当にできるか。かつてのあなた方はわたしの心を満たすことができなかった。最後の時にこの型を破ることができるか。わたしは人々に反省の機会を与え、最終的にわたしに答える前に深く考えさせる。そうすることは間違いなのか。わたしは人の応答を待つ。人から「手紙による返事」が来るのを待つ。あなた方にはわたしの要求を満たすだけの信仰があるだろうか。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第三十四章」より

10. わたしはずっと人にとっても厳しい規範を守らせてきた。己の考えによってわたしを欺き、条件をもってわたしに強要する者がわたしは大嫌いなので、もしあなたの忠実が意図や条件を伴うものであるなら、あなたの忠実と呼ばれるものなどむしろない方がよい。わたしが人に望むのは、わたしに絶対的に忠実であり、すべてのことをある一語のために、その一語を証明するために行なうことだけである。その一語とは「信仰」である。あなたがたがわたしを喜ばせようとして甘い言葉を使うのをわたしは軽蔑する。わたしはいつも、完全な誠実さをもってあなたがたに接しているので、わたしはあなたがたにも、わたしに対して本当の信仰をもってふるまってほしいと願う。

『言葉は肉において現れる』の「あなたは本当に神を信じる人なのか」より



11. あなたがたが今日受け継いだものは、昔の使徒や預言者たちすべてのそれに優るものであり、モーセやペテロにさえ優るものである。祝福を一日や二日で受けることはできない。それは多くの犠牲を通して獲得されねばならない。つまり、精錬された愛や、大きな信仰、そして神があなたがたに到達することを求める多くの真理を持たなくてはならない。それに加えて、義に面と向かい、おびえたり屈服したりすることなく、神に対して変わることなく尽きない愛を抱いていなくてはならない。あなたがたの決意が求められ、あなたがたのいのちの性質を変えることが求められる。あなたがたの堕落を改め、神の采配を不平不満なくすべて受け入れ、死にいたるまで従順でなければならない。これが、あなたがたが達成しなければならない事である。これが神の働きの最終目的であり、この一群の人々に神が求めることである。神はあなたがたに施すと同時に、あなたがたが神に報いてその要求を満たすことを求める。つまり、神のすべての働きには理由があり、このことから、なぜ神が何度も高い基準の働きを為し、厳しい要求をするのかが分かるだろう。このような訳で、あなたがたは神への信仰で満たされていないのである。要するに、あなたがたが神の嗣業を受け継ぐに相応しい者となるため、神はすべての働きをあなたがたのために行ったのだ。これは神自身の栄光のためというより、あなたがたの救いのため、そしてけがれた地でひどく苦しめられているこの一群の人々を完全にするためである。あなたがたは神の旨を理解しなければならない。だからこそわたしは見識や理知のない多くの愚かな人々にこう勧める。これ以上神を試みたり、抵抗したりしてはならない。神は人が経験したことのないようなすべての苦しみを耐え抜き、はるか昔に人間に代わってさらに多くの屈辱にも耐えた。あなたがたには他に何か手放せないものなどあるだろうか。神の旨以上に大切なものが何かあるだろうか。神の愛に優るものなどあるだろうか。このけがれた地において神がその働きを実行するにはすでに倍の困難を伴うが、もし人が承知の上で、意図的に背くのであれば、神の働きは長引かざるを得ないだろう。どのような場合にも、それは誰の得にも益にもならない。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きは人間が想像するほど簡単か」より

12. わたしの語る言葉は、特定の人や特定の種類の人に対するものではなく、すべての人に向かって示す真理である。だから、真理という観点からわたしの言葉を受け取ることにはただ集中しなさい、そして集中心と誠意を常に持ち続けなさい。わたしの語る言葉、また語る真理のひとつでも無視したり、軽蔑したりしてはいけない。わたしはあなたがたが日々の生活の中で、真理と無関係なことを数多く行っていることを分かって

いる。だから、わたしはあなたがたにはっきりとお願いしておきたい。真理のしもべとなり、邪悪さや醜さの奴隷となることがないように。真理を踏みにじって、神の家の片隅でも汚すことのないようにしなさい。これが、あなたがたへの忠告である。

『言葉は肉において現れる』の「三つの訓戒」より

13. わたしはただ、あなたがたがわたしの苦心の努力を無駄にせず、さらに、わたしの言葉を、あなたがたが一人の人間としてどのように行動するかということの基礎として扱い、わたしの配慮と思いやりの全てをあなたがたが理解できることを願うのみである。あなたがたは、それが自ら進んで聞きたい言葉であるかどうか、また喜んで受け容れる言葉か、不快に感じながら受け容れる言葉かを問わず、それらの言葉を真剣に考えなければならない。そうしなければ、あなたがたのいい加減で無神経な性質と態度により、わたしは極めて不快になり、さらには、吐き気がするぐらいの嫌悪感を覚えるであろう。あなたがた全員が、わたしの言葉を何度も何度も繰り返して読み——何千回でも——心に刻み込むことさえ出来るようにとわたしは切に願う。あなたがたに対するわたしの期待を裏切ることがないためには、そうすることによるほか無い。しかしながら、現在そのように生きている者は皆無である。それとは反対に、あなたがたは欲しいだけ飲み食いする放縦な生活に浸り、わたしの言葉で心とたましいを豊かにする者は一人もいない。そのことが、人間のほんとうの顔というのは常にわたしを裏切るものであり、わたしの言葉に完全に忠実となれる者は居ない、という結論をわたしがくだした理由である。

『言葉は肉において現れる』の「極めて深刻な問題——裏切り（1）」より

14. 人間そして神に付き従う者に対して神が要求する正確な条件を、次に述べる。神に付き従う者に対し、神は真の信仰、忠実な追随、完全な服従、真の認識、そして心からの崇敬という5つの事柄を要求する。

この5つの事柄において、神は人間に対して、神を疑わないこと、想像や、曖昧で抽象的な観点により神に付き従わないこと、想像や概念により神に付き従わないことを求めている。神は、神に付き従う者全員に対し、忠実に付き従い、気持ち半分あるいは曖昧な姿勢で神に付き従わないことを要求している。神があなたに必要な条件を提示する場合、あるいはあなたを試し、裁き、取り扱い、刈り込み、あるいは鍛錬し、打つ場合、あなたは神に対して完全に服従する必要がある。あなたは、その原因を尋ねたり、条件を付けたりしてはならず、ましてや根拠を述べたりしてはならない。あなたの服従は、

完全なものでなければならない。人間に最も足りない領域は、神を知ることである。人間は、神とは無関係な諺、発話や言葉が神に関する認識に関する最も正確な定義であると考え、神に対して、そうしたものを強要することが往々にしてある。こうした人間の想像や人間の勝手な理由付け、人間の知性に由来する諺には、神の本質に全く無関係であるということについて、人間は殆ど知らない。したがって、神が求めている人間の認識において、神は、神とその言葉を認めることを求めているだけでなく、神に関する人間の認識が正確であることを求めている。それは、たとえ人間がひと言だけしか述べられない場合や、ほんの少ししか知らない場合であっても、その僅かな認識が正確であり、真実であり、神自身の本質と一致するものである、ということである。なぜなら、神は、人間の見当違いで無分別な讃美を嫌悪するからである。さらに、神は人間が神のことを空気のように扱うことを忌み嫌う。神に関する事柄を話す時、人間が軽率な発言をしたり、何の躊躇も無く思いのままに適当な発言をしたりするのを、神は忌み嫌う。また、神を知っていると思い込み、その認識をうそぶき、何ら気兼ねすることなくみだりに神に関する事柄を語る者を、神は忌み嫌う。最後となる5つめの必要条件は、心からの崇敬である。これは、神に付き従う者全員に対する最終的な必要条件である。ある者に、神に関する正確な真の認識がある場合、その者は真に神を畏れ、悪を避けることができる。この崇敬は、その者の心の底から生まれるものであり、神がその者に強要したからではなく、自発的なものである。神は人間に対し、好感の持てる態度や行動などの表面的な贈り物を求めるのではなく、心の底から神を崇敬し、畏れることを求める。この崇敬は、人間のいのちの性質が変化することで実現される。なぜなら、その人間は神の認識を得ており、神の業を理解しており、神の本質を理解しており、自分が神の被造物であるという事実を認識しているからである。そうしたわけで、わたしが「心からの」という言葉を用いて崇敬を定義づける目的は、神に対する人間の崇敬は人間の心の底から生まれたものである必要があることを、人間が理解できるようにすることである。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 10」より

15. このように神が働くのは時間があまりないからである。あなたがたが自らのいのちを守っているように、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして神を愛することが望まれている。これは究極の意味の人生ではないだろうか。他のどこに人生の意味を見つけ得るのか。それほどあまりに盲目的ではないだろうか。あなたは神を愛するつもりか。神は人の愛にふさわしいだろうか。人々は人の崇拝に値するだろうか。だからあなたは何をすべきなのか。無条件で勇敢に神を愛し、神があなたに何を行うかを見よ。神

があなたを殺すか見よ。要するに、神を愛するという務めは、神のために何かを書き写したり書きとめることよりも重要なのである。あなたの人生がより意味を持ち、幸せに満ちるように、最も重要なものを最優先すべきである。そうして、あなたへの神の「判決」を待つべきである。あなたの計画には神を愛することが含まれているのだろうか。一人ひとりの計画が神によって成就されるものになり、現実になることを願う。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第四十二章」より

16. 人間は意味のある人生を実際に生きることを追い求めるべきであり、現状に満足してはならない。ペテロの模範を実際に生きるためには、人間はペテロの認識と経験を備えていなければならない。人間は、より高く、より深淵なことを追求しなければならない。人間は、神に対する一層深く純粋な愛と、価値と意義のある人生を追い求めなければならない。唯一これが人生であり、そうしてはじめて、人はペテロと同じようになれるのだ。あなたは、肯定的側面へ入ることに対して積極的になることに重点を置くべきであり、また一時的快楽のために、さらに深淵で、具体的で、実践的な真理を無視しつつ、追従的に後退することを許してはならない。あなたの愛は実践的でなければならない。あなたは、獣同然の墮落した気楽な生活から抜け出す方法を見出すべきである。あなたは意味のある人生、価値のある人生を実際に生きるべきであり、自分をごまかしたり、自分の人生を玩具のように弄んだりしてはならない。神を愛することを目指す全ての者にとって、獲得することのできない真理はなく、揺るぎなく立つことができない正義はない。あなたは、どのようにして自分の人生を生きるべきだろうか。あなたは、どのように神を愛し、その愛を用いて神の願いを満足させるべきであろうか。あなたの人生において、これより重要なことはない。あなたは、何よりもそうした大志と根気を持っていなければならない。骨抜きの弱虫のようであってはならない。あなたは有意義な人生を経験する方法を知り、有意義な真理を経験しなければならない。自分自身をそのようにいいかげんに扱ってはならない。あなたの人生は、気付かぬうちに過ぎてゆく。その後、あなたには神を愛する機会がもう一度あるだろうか。人は、死後に神を愛することができるだろうか。あなたは、ペテロと同様の熱意と良心を持っていなければならない。あなたの人生は有意義であるべきで、あなたは自分を弄んではならない。人間として、また神を追い求める者として、あなたは自分の人生をどのように扱うか、どのようにして自らを神に捧げるべきか、どのようにしてもっと有意義な神への信仰を持つべきか、そして、あなたは神を愛しているので、どのようにして一層清く、一層美しく、一層好ましく神を愛するべきかを慎重に考慮することができなければならない。

17. 被造物として、あなたはもちろん神を崇拝し、意味のある生活を追求すべきである。あなたが神を崇拝せず、汚れた肉体で暮らすならば、あなたは人間の衣装を身に着けたただの獣ではないだろうか。人間として、あなたは神のために費やし、すべての苦しみに耐えるべきである。あなたは喜んで、確実に、今日直面している小さな苦しみを受け入れ、ヨブのように、ペテロのように、意味のある生活を送るべきである。この世で、人は悪魔の服をまとい、悪魔に与えられる食べ物を食べ、悪魔の言いなりになって働き、仕え、汚れの中で踏みにじられる。あなたが人生の意味、または真の道を把握しないならば、あなたの生きる意味は何だろう。あなた方は正しい道を追求する人々、成長を求める人々である。あなた方は赤い大きな竜のいる国で立ち上がる人々、神が義人と呼ぶ人々である。それは最も意味のある人生ではないだろうか。

18. 神の本質をよく知ることは、ささいな事柄ではないのである。あなたは、神の性質を理解しなければならない。そうすることによって、神の本質を少しずつ知ることになることから、同時により素晴らしく、より美しい状態へと進歩するだろう。最後には、顔を見せることを恥じるほど、自分の醜悪な魂を恥だと感じるようになるであろう。その時、神の性質を犯すことがますます減り、あなたの心はますます神の心に近づき、徐々に神への愛が心の中に育つであろう。これは、人類が美しい状態になるしるしである。しかし、あなたがたはまだこの状態に達していない。自分の運命のためにそこかしこへ渡り歩くことで自分を疲れ果てさせているあなたがたの中に、努めて神の本質をよりよく知ろうと思う者がいるだろうか。この状態が続くならば、神の性質をほんのわずかしかわかっていないために、無意識のうちに行政に触れることになる。今あなたがたが行っていることは、神の性質を犯す行為の礎を築いていないだろうか。あなたがたに神の性質を理解するよう求めることは、わたしの働きに相反するものではない。度々行政に触れるならば、懲罰を逃れることができる人がいるであろうか。そうならば、わたしの働きの全てが無駄になるのではないか。このため、わたしは今もあなたがた自身の行いを入念に顧みることに加え、行う事柄に注意を払うようにあなたがたに求めるのである。これはあなたがたに対するより重大な要求であり、あなたがたがこれについてよく考え、大切な事柄として扱うことを願う。あなたがたの行いがわたしの激しい怒りを買う日が来るならば、その結果はあなたがただけが受け止めるものであり、あなたがたの代わりに罪を負う人は他にいないのである。

19. あなたがたは皆、自分自身のことを出来る限り迅速に検証し、自分の性格のうち、どの程度が依然としてわたしを裏切っているかを確認する必要がある。わたしは性急にあなたがたの答えを待っている。わたしを無視してはならない。わたしは決して人間に対していい加減な態度は取らない。わたしは言った事を必ず実行する。あなたがた全員が、わたしの言葉を真剣に捉え、それをSF小説のようなものであると考える者となれることを願っている。わたしが望むのは、あなたがたの具体的な行為であり、想像ではない。次に、あなたがたは、わたしの次の質問に答える必要がある。1.あなたは、自分が真に効力者であるならば、おざなりな要素や否定的要素無しで、わたしに忠実に奉仕できるであろうか。2.あなたは、わたしがあなたに感謝した事が無いと知った場合、依然として生涯を通してわたしのところに留まり、奉仕することが出来るであろうか。3.あなたが大いに努力しているにもかかわらず、わたしがあなたに対して冷淡であったとしたら、曖昧さの中でわたしのために業を行い続けることが出来るであろうか。4.あなたは、何かをわたしのために費やした後に、わたしがあなたの些細な要求を満たさなかったとしたら、わたしに失望し、落胆したり、さらには激怒したり罵声を浴びせたりするであろうか。5.あなたは、自分がわたしに対して常に忠実であり、わたしを愛しているにもかかわらず、病の苦痛や生活上の貧窮、友人や親戚に見捨てられること等の人生における不幸を受けたとしたら、わたしに対するあなたの忠誠や愛は依然として継続するであろうか。6.あなたが心に描いている物事のひとつとしてわたしの業と一致しなかったならば、あなたはどのようにして自分の将来の道を歩むであろうか。7.あなたは、自分が望む物事を一切授からなかった場合、引き続きわたしに付き従う者であり続けられるだろうか。8.あなたは、わたしの業の目的や意味を全く理解できなかった場合、勝手に判断したり結論を出したりしない、従順な者となることが出来るであろうか。9.わたしが人間と共にある時に述べた言葉とわたしが行った業のすべてを大切にすることが出来るだろうか。10.あなたはわたしに忠実に付き従う者となり、たとえ何も授からないとしても、生涯を通してわたしのために苦難を受けることが出来るだろうか。11.わたしのために、自分が将来生きる道を検討したり、計画したり、用意せずに居ることが出来るだろうか。これらの質問は、あなたがたに対するわたしの最終的な要求であり、あなたがた全員がわたしに対して返答できることを期待している。

## (Ⅱ) 人間に対する神の励ましと慰めについての言葉

20. 神の足跡を探し求めている私たちは、神の心と、神の言葉、神の発する声を探り求める必要がある。神の新しい言葉があるところには神の声があり、神の足跡があるところには神の業があるからである。神による表現があるところには神の現れがあり、神の現れがあるところには真理と、道と、いのちがある。神の足跡を探し求める中で、あなたがたは「神は真理であり、道であり、いのちなのです」という言葉を見無視していた。そのため、真理を受け取っても神の足跡を見出したとは思わない人が多いのである。ましてや、神の現れを認めることなどない。なんと大きな過ちだろうか。神の現れは人が思うようなかたちで来ることはない。ましてや神が人の言うままに現れるようなことはない。神は、自分の判断で動き、自分の計画に従って働く。さらに、神には神自身の目的と方法がある。神は自分のしよとすることを人に相談したり話し合ったりする必要はない。ましてや一人一人に自分がしよとすることを知らせるようなことはない。これが神の性質であり、それはすべての人が認めるべきことである。もし神の現れをその目で見たいと思うなら、神の足跡をたどりたいと願うなら、自分自身の観念というものを超越しなければならない。神にこれをせよあれをせよと命じることは許されない。ましてや神を自分の枠の中に閉じ込めたり、自分の観念の中に押し込めたりすべきでない。そうではなく、どのように神の足跡をたどるべきか、どのように神の現れを受け止めるべきか、どのように神の新しい働きに従うべきかと問うべきなのである。これが人のすべきことである。人は真理ではなく、真理を持っているわけでもない。だから人は探し求め、受け入れ、従うべきである。

『言葉は肉において現れる』の「神の現れによる新時代の到来」より

21. 神が現れるところでは、真理の現れと神の声がある。真理を受け取ることができる人だけが神の声を聞くことができる。そしてそういう人だけが神の現れを見ることができる。まずは、自分の観念を脇に置きなさい。立ち止まって、次の言葉をよく読みなさい。あなたが真理を慕い求めるなら、神はあなたの知性を明るくし、神の心と言葉を理解できるようにしてくれる。「ありえない」という思いを脇に置いておきなさい。人が不可能だと思えば思うほど、実際に可能になる。神の知恵は天より高く、神の思いは人の思いより高く、神の働きは人の思いや観念をはるかに超越するものだからである。不可能であればあるほど、そこには探し求めるべき真理がある。人の観念と想像を超えるものであればあるほど、そこには神の心が詰まっている。どこで自分を現そうとも、神は神だからである。神の本質が現れる場所や方法で変わることはない。神の性質は

、神の足跡がある場所によらず、いつも同じである。神の足跡がどこにあらうとも、神は全人類の神である。たとえば、主イエスはイスラエル人の神というだけでなく、アジア、ヨーロッパ、アメリカの人々の神でもある。さらに言えば、全宇宙で唯一無二の神である。だから、神の語る言葉から神の心を探し求め、神の現れを発見し、神の足跡に従おう。神は真理であり、道であり、いのちである。神の言葉とその現れは共存する。また、神の性質と足跡はいつでも人類に対して開いている。兄弟姉妹たちよ。ここに記した言葉に神の現れを見てとってほしい。そして、新しい時代に向かって神の足跡をたどってゆき、神の現れを待ち望む人々に用意された新天新地にたどりついてほしいのである。

『言葉は肉において現れる』の「神の現れによる新時代の到来」より

22. 私は、すべての民族、国家、そしてあらゆる業種の人々が神の声に耳を傾け、神の働きに目をやり、人類の運命に留意し、ひいては神をもっとも聖なる、至尊の、至高の、人類唯一の礼拝の対象とし、アブラハムの子孫がヤーウェの約束の下に暮らしたように、最初に神によって造られたアダムとエバがエデンの園で暮らしたように、人類全体が神の祝福の下に生きることができるようにすることを強く勧める。

神の働きは強く打ち寄せる大波のようなものである。誰も神を引き留めることはできないし、誰も神の歩みを停止させることはできない。神の言葉に注意深く耳を傾け、神を探し求め、渴望する人々だけ神の歩みをたどり、神の約束を受けることができる。そうしない者は圧倒的な災難を被り、当然の罰を受ける。

『言葉は肉において現れる』の「神は全人類の運命を支配する」より

23. イエスの再臨は、真理を受け入れることのできる者には大いなる救いであるが、真理を受け入れることのできない者にとっては、罪に定められるしるしである。あなたがたは自分自身の道を選ぶべきで、聖霊を冒瀆したり真理を拒んだりするべきではない。あなたがたは無知で傲慢な者でなく、聖霊の導きに従い真理を慕い求める者にならなければならない。そうすることでのみ、あなたがたの益となる。わたしは、注意深く神への信仰の道を歩むようにあなたがたに助言する。結論を急いではない。さらに、あなたがたは神への信仰において、無頓着であったり、のんきであってはならない。少なくとも、神を信じる者は謙虚で畏敬の念に満ちているべきだということを知らなければならない。真理を聞いたことがありながら鼻であしらうものは愚かで無知である。真理を聞いたことがありながら不注意に結論を急いだり非難したりする者は、おごりで



包まれている。イエスを信じる者は誰も、他人をののしったり非難したりする権利はない。あなたがたは皆、理知があり、真理を受け入れる者でなければならない。真理の道を聞き、いのちの言葉を読んだのち、自分の信念と聖書に沿っている言葉は一万語にひとつだと信じているかもしれない。そうであれば、その一万分の一の言葉の中で求め続けなければならない。それでもわたしはあなたに謙虚であり、自信過剰にならず、思い上がらないようにと助言する。あなたの心が抱いている神へのわずかな畏敬の念から、より大きな光を得ることになる。もしあなたがこれらの言葉をよく吟味し、繰り返し思い巡らすならば、それらが真理かどうか、それらがいのちかどうか分かるであろう。ほんの数行読んだだけで、「これは聖霊によるちょっとした照らしでしかない」とか、「これは人々を惑わすために来た偽キリストだ」と盲目的に非難する人たちもいるであろう。そのようなことを言う人たちは、無知ゆえに目が見えなくなっている。あなたは神の働きや知恵をほとんど理解していない。わたしはあなたに助言する。最初からやり直しなさい。終わりの日における偽キリストの出現のせいで、神の言葉を盲目的に非難してはならない。惑わされることを恐れる為に、聖霊を冒瀆する者となってはならない。それはとても残念なことではないだろうか。もし良く調べた後で、これらの言葉が真理ではない、道ではない、神が表したことではないと未だに信じるならば、あなたは最後に懲罰を受けなければならず、祝福されない。もしこれほどわかりやすく明確に話された真理を受け入れられないなら、あなたは神の救いにそぐわないのではないのか。あなたは神の玉座の前に戻るほど幸運ではない人ではないのか。このことを考えなさい。軽はずみで衝動的になってはいけない。神への信仰をまるでゲームのように考えてはいけない。あなたの終着点のために、前途のために、そしてあなたのいのちのために、考えなさい。自らをいい加減に扱ってはならない。あなたはこれらの言葉を受け入れることができるであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

24. 多くの人々が神の二度目の受肉について悪い感情をもっている。神が肉になって裁きの働きを行うということが、人には信じがたいからである。それでも、しばしば神の働きは人間の期待を大幅に超え、それは人間の知性には受け入れがたいことである、とわたしは言わなければならない。人は地上の蛆虫にすぎないが、一方、神は宇宙を満たす至高の存在であるからである。人の知性は蛆虫だけを生み出す汚水のたまった穴に似ており、一方、神の考えが指揮する働きの各段階は神の知恵の凝縮である。人は常に神に敵対しようとしているが、これに関しては、最後に誰が負けるかは自明であると

、わたしは言う。自分のことを黄金より価値があるとみなさないように、わたしはあなたがたに強く勧める。もし他人が神の裁きを受け入れられるなら、なぜあなたにはできないのか。他人に比べてあなたはどれくらい高位に立っているのか。もし他人が真理の前に頭を垂れるなら、なぜあなたもそうできないのか。神の働きには止めることのできない勢いがある。あなたのした「貢献」のためだけに神は裁きの働きを繰り返すことはなく、このような好機を逃すと、あなたは後悔に苛まれることになる。もしわたしの言葉を信じないなら、天空にある偉大な白い玉座があなたに裁きを下すのを待っていない。すべてのイスラエル人がイエスを拒絶し否定したが、それでもイエスによる人類の贖罪の事実は宇宙の果てまで広がったことを知らなければならない。これは神がはるか昔に成し遂げた一つの現実ではないのか。もしイエスがあなたを天に引き上げるのをいまだに待っているのなら、あなたは頑固な一片の枯れ木<sup>14</sup>であるとわたしは言う。あなたのような真理に不忠実で、祝福だけを求める偽信者をイエスは認めることはない。それどころか、何万年も焼かれように火の湖にあなたを投げ入れるのに憐れみを一切見せないであろう。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは真理を以てもって裁きの働きを行う」より

25. わたしはあなたがたを征服するため、あなたがたに何度も警告し、多くの真理を与えた。現在、あなたがたは従前よりも豊かであると感じ、人間のあるべき姿の原則を多数理解し、信心深い者が備えるべき常識を多数得ているであろう。それが、あなたがたが現在まで何年もかけて得た物事である。あなたがたの成果は否定しないが、その長い年月の間におけるあなたがたのわたしに対する数々の反抗や反逆もまた否定しないと、率直に述べる必要がある。なぜなら、あなたがたのうちには聖人は居らず、例外無くサタンにより腐敗させられた人間であり、キリストの敵だからである。現在までのあなたがたの過ちと反抗は無数に有るので、わたしが自分自身の言った事を常に何度も繰り返していることは、少しも奇妙なことではない。わたしはあなたがたとそのように暮らしたくはないが、あなたがたの将来と終着点のため、ここでもう一度、従前述べたことを繰り返す。あなたがたがわたしの望みを叶えてくれること、それ以上に、あなたがたがわたしの言葉を全て信じる事が出来ること、そしてさらにわたしの言葉の深い意味を推し量ることが出来ることを願っている。わたしの話に疑念を持たずに居ることや、勝手にわたしの言葉を選んで無視したりすることはさらにひどく、容赦できない。わたしの言葉を非難しないこと。ましてやわたしの言葉を軽視するのはなおのこと、わたしがいつもあなたがたを試しているなどと述べたり、さらにはあなたがたに対して述べ

た言葉が正確さに欠けるなどとは言わないこと。わたしはこれらの事柄を、容赦できない。あなたがたがわたしとわたしの話をそのような疑念をもって扱い、一切認めようとしないので、わたしはあなたがたそれぞれに対して真剣に言うが、わたしの話を哲学と関連づけたり、偽る者の嘘と一緒にしたり、わたしの言葉に侮蔑をもって応じたりしないこと。わたしがあなたがたに述べている物事を今後あなたがたに伝えたり、それほど慈悲深く語る事が出来る者や、ましてやそれらの要点を辛抱強く説明できる者は居ないであろう。今後の日々は、良き時代を回想し、むせび泣き、悲痛にうめきつつ過ごすか、あるいは暗い夜を、与えられた真理のかけらもいのちも無く過ごすか、あるいは単に絶望的に待って過ごすか、あるいは自分が不合理であることに関する苦い後悔の念とともに過ごすであろう。こうした可能性は、あなたがた各人にとって実質上不可避である。あなたがたのうちには、神を真に崇拝する立場の者は皆無であるからだ。あなたがたは放縦さと邪悪の世界に耽溺し、自分の考えや靈魂、身体に、いのちや真理とは無関係であり、また実際にはそれらに反する無数の物事を採り入れる。そうしたわけで、わたしがあなたがたに望むのは、あなたがたが光の道へ導かれることが出来ることである。あなたがたが自分を思いやり、世話をして、自分の終着点に重点を置きすぎず、自分の行動や過ちに対して無関心とならずに居られることが、わたしの望みの全てである。

『言葉は肉において現れる』の「過ちは人間を地獄へ送る」より

26. 現在、あなたは自分がどのようにして征服されたかにだけ満足してはならず、将来歩んで行く道についても考慮しなければならない。あなたは完全にされることへの熱意と勇気を持たなければならず、自分は無能だと常に思うべきではない。真理は人を選び好みするだろうか。真理は故意に人間に反対できるだろうか。あなたが真理を追求するなら、真理はあなたを圧倒できるだろうか。あなたが正義のために固く立つなら、正義はあなたを打ち倒すであろうか。いのちを追求することが本当にあなたの願望であれば、いのちはあなたから逃れることができるだろうか。あなたに真理がないのであれば、それは真理があなたを無視するからではなく、あなたが真理から遠ざかるからである。あなたが正義のために揺るぎなく立つことができないのであれば、それは正義に問題があるからではなく、あなたが正義は事実と一致しないと思っているからである。あなたが何年いのちを追求しても、いのちを得られずにいるのは、いのちがあなたに対して良心を持っていないからではなく、あなたがいのちに対して良心を持っておらず、いのちを追い払ったからである。あなたが光の中で生活しつつも、光を得ることができないのであれば、それは光があなたを照らすことができないからではなく、あなたが

光りの存在に注意を払わなかったので、光が静かにあなたから去ったからである。あなたが追求しないのであれば、あなたは価値の無い屑であり、自分の人生において全く勇気がなく、暗闇の勢力に対抗する霊がないと言う他ない。あなたは弱過ぎるのである。あなたは、自分を包囲するサタンの勢力から逃れられず、このような安全で平穏な生活を送り、無知のまま死ぬことのみを望んでいる。あなたが追求すべき事は、征服されることであり、それがあなたに課された本分である。自分が征服されたことに満足しているなら、あなたは光の存在を追い払うことになる。あなたは真理のために苦難を受け、真理に自分を捧げ、真理のために恥辱を忍ばねばならず、より多くの真理を得るためには、より多くの苦難を受けなければならない。これこそがあなたの為すべきことである。あなたは平穏な家庭生活のために真理を投げ捨ててはならず、一時的な享樂のために、あなたの一生の尊厳や品位を失ってはならない。あなたは、すべての美しく良いこと、また一層有意義な人生の道を追求すべきである。あなたがこのような俗悪な生活を送り、何の目的も追求しなかったならば、あなたは人生を無駄にすることになるのではない。そのような人生から何が得られるであろうか。あなたは、真理のために肉の享樂をすべて捨て去るべきであり、僅かばかりの享樂のために全ての真理を投げ捨ててはならない。このような人々には、品位も尊厳もなく、彼らの存在には何の意味もない。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

27. あなたの追求の目的が真理を求めることでないならば、これを機に俗世に戻ってそこでの成功を目指せばよいであろう。このようにして時間を無駄にするのは全く無価値である。なぜ自分を苦しめるのか。美しい世界であらゆる物事を楽しめないことがあるだろうか。金銭、美女、地位、虚飾、家庭、子供など、このような俗世の産物はどれもあなたが享受できる最高の物ではないのか。幸せになれる場所を探して、ここをさまよることが何の役に立つというのか。人の子が枕する所がないのであれば、どうしてあなたが安住の地を得る事が出来ようか。どうして主があなたのために美しい安住の地を造ることが出来ようか。それは可能であろうか。わたしの裁き以外に、現在あなたは真理に関する説教を受けることしか出来ない。あなたはわたしから安樂を得ることも、日夜思い描いているような幸福の巢を得る事も出来ない。わたしはあなたにこの世の富を与えない。あなたが真に追求するならば、わたしはあなたにいのちの道の全てを与え、あなたを水を得た魚のようにすることをいとわない。あなたが真に追求しないのであれば、わたしはそれを全て取り上げるであろう。安樂に貪欲で豚や犬のような者にわたしの口から言葉を与えるつもりはない。

『言葉は肉において現れる』の「なぜ進んで引き立て役になろうとしないのか」より

28. 受動的に神に従う者となってはならず、好奇心をそそることを追求してはならない。あなたは冷たくも熱くもないので、あなたは自分を滅ぼし、いのちの成長を遅れさせるだろう。あなたは、真理を得て、それを実際に生きることができるように、このような消極性と不活発を取り除き、肯定的なことの追求と自分の弱さを克服することに熟達しなければならない。あなたの弱みについて、恐れることは一切なく、あなたの欠点はあなたの最大の問題ではない。あなたの最大の問題であり、最大の欠点であるのは、あなたが冷たくも熱くもなく、真理を追求する願望に欠けていることである。あなた方すべての最大の問題は、臆病な精神によりことの現状に満足し、受動的に待っていることである。それがあなた方にとって最大の障害であり、あなた方が真理を追求することにおける最強の敵である。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

29. この道において、多くの人たちは多くの認識を語るが、死ぬ際には、目は涙で溢れ、生涯を無駄にして老齢になるまでいたずらに過ごしたことを嫌悪することになる。その人たちは教義を理解するだけで真理を実践することも神の証しをすることもできず、代わりにあちこち走り回ったり、蜂のように忙しくしているだけである。いったん死を目前にして、自分に真の証しがないこと、自分が神をまったく知らないことがようやくわかる。これでは遅くないだろうか。なぜ今日、自分が愛する真理を追い求めないのか。なぜ明日まで待っているのか。もし真理のために苦しまず、真理を得ることを求めないなら、死ぬ間際に後悔することを望んでいるのだろうか。もしそうなら、何故神を信じるのか。実際、もし人が少しでも努力するなら、真理を実践でき、神に満足してもらえ、事柄が沢山ある。人の心は絶えず悪魔に占領され、神のために行動することができない。むしろ、絶えず肉のためにあくせくして走り回り、最終的には何の利益も生まれない。人が絶えず困難や苦悩を抱えるのはこれらが理由である。それらはサタンからの苦痛ではないか。これは肉の墮落ではないか。あなたは口先だけで神を騙すべきではない。むしろ、実質的行動を取らなければならない。自分自身を欺くべきではない。そんなことをして何の意味があるのだろうか。肉のために生き、名声や富を得るために骨を折って、一体あなたは何を得ることができるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「神を信じるなら真理のために生きるべきである」より

30. 暖かい春になり、花々が開花し、そして天の下すべての緑に覆われ、地上のすべてのものがあるべき場所に納まると、すべての人々と物事は次第に神の刑罰を受け

ることになるだろう。そしてその時、地上における神のすべての働きは終わるだろう。神はもはや地上では働かないし、住まないだろう。神の偉大な働きが完了しているからである。人々はこの短い期間、自分の肉を忘れることはできないのだろうか。神と人の間の愛を裂き得るものは何だろうか。誰が神と人の間の愛を引き裂き得るだろうか。それは両親だろうか、夫か、姉妹か、妻か、それとも痛みをともなう精練だろうか。良心が持つ感情は人間の心の中の神の姿を消し去ることができるだろうか。人々の互いの恩義と行動は、自ら出た行為だろうか。それらを人間は矯正することができるのだろうか。誰が自分自身を守ることができるだろう。人々は自らに施すことができるだろうか。人生で強いのは誰だろう。わたしから離れて独り立ちできるのは誰だろう。自分を顧みるようにと、すべての人々に向かって神が幾度も要求するのはなぜだろう。なぜ神は次のように言うのだろうか。「自分の困難を自らの手で用意する人などあるだろうか。」

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十四章と第二十五章」より

31. おそらくあなたは、信仰がなければ、こうした刑罰やこのような裁きを受けて苦しまなくてもよかったはずだと言うだろう。しかし、信仰がなければ、こうした刑罰を受けることも、全能者からこのような配慮を受けることもできないだけでなく、創造主に会う機会を永遠に失うだろう。あなたは、人間の起源を知ることは決してないだろうし、人生の意義を知ることも決してないであろう。たとえあなたの体が死んで魂が離れても、あなたはまだ創造主の働きのすべてを理解できはしないだろう。まして、創造主が人類を創造した後、このような偉大な業を地上で為したことを、あなたは知りはないだろう。神が創造したこの人類の一員として、あなたは不可解にも、自ら進んでこのように闇の中に落ちて永遠の罰を受けようというのか。もしあなたが今日の刑罰と裁きから離れるなら、あなたにはいったいどういう運命が待っているのだろうか。あなたは、今の裁きから離れてしまえば、この困難な生活から逃れられるとでも思っているのだろうか。もし「この場所」を去ったなら、あなたが遭遇するのは、悲痛な苦悶と悪魔によって加えられる残酷な傷害であるということは、ほんとうではないのか。あなたは、耐え難い苦しみを日夜受けることになるのではないか。あなたは、今日この裁きを逃れたからといって、将来の責め苦を永久に避けられるとでも思っているのか。あなたの前途にあるのは何だろうか。それはほんとうに、あなたが望んでいる理想郷なのだろうか。あなたは、今やっているようにただ現実から逃げることで、その後の永遠の刑罰を逃れられるとでも思っているのだろうか。今日より後、あなたはこのような機会や祝福をほんとうに見出せるのだろうか。災厄が襲ってきた時、あなたはそれを見いだせるだろう

か。あなたは、すべての人間が安息に入るとき、それを見いだせるだろうか。あなたの現在の幸福な生活と調和あるささやかな家庭——これらがあなたの永遠の終着点にとって代われるだろうか。もしあなたが真の信仰を持っているのなら、また、あなたの信仰によって多くのものを得るのなら、そのすべては、あなた——ひとつの創られた存在——が獲得すべきもの、また、手に入れていたはずのものではないか。このような征服はあなたの信仰に最も有益であり、あなたのいのちに最も有益なものだ。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（１）」より

32. わたしの言葉の外で生き、試練を逃げている人々、彼らは世界を漂っていないだろうか。彼らはあちらこちらへひらひらと揺れる秋の葉のようで、休む場所もなく、ましてやわたしの慰めの言葉などない。わたしの刑罰や精錬が彼らの後を追うことはないが、彼らは天国の外の通りをあてもなくさまよう乞食ではないだろうか。世界は真に、あなたの安息の場所だろうか。あなたは本当に、わたしの刑罰を避けることでこの世から安堵の微笑みを得ることができるだろうか。あなたは本当に、つかの間の楽しみで隠しおおせない空虚さを覆うことができるだろうか。あなたは自分の家族ならだますことはできるだろうが、わたしをだますことは到底できない。あなたの信仰は貧弱なので、いのちが与える喜びを今日まで見出すことができないままだ。わたしはあなたに助言する——人生の全てを平凡で肉のための多忙な日々として送り、耐え難い苦しみを耐えて生きるより、その半分をわたしの為に真心から生きようにと。わたしの刑罰から逃げるほどまで、自身を大事にして何の役に立つのだろうか。永遠の苦難、永遠の刑罰の報いをただ取り込んでしまうためにわたしの一時的な刑罰から自身の身を隠すことは何のために役立つのだろうか。わたしは、実際には誰も強制的にわたしに従わせることはしない。もし人が、わたしの全ての計画に喜んで従うなら、わたしはその人を粗末には扱わない。しかし、わたしは、すべての人が、ヨブがわたしヤーウェを信じたようにわたしを信じることを要求する。もしあなた方の信仰がトマスのそれを超えているなら、わたしの称賛を得、あなた方の忠誠心はわたしの喜びを得、あなた方の日々においてわたしの栄光を見出すだろう。

『言葉は肉において現れる』の「本物の人とは何を意味するか」より

33. 大部分の人々は常に進取的であり、飽くことがない。彼らは皆、神が現在切望している意向に関する認識が欠如しているので、逃避願望を抱いている。彼らは手綱から解き放たれた野生の馬のように大自然の中を走り回ることが常に望んでいる。しかし、良きカナンの地に定住して人間的生活を求める者は希にしかない。乳と蜜の流れる

地に入ってもそれを享受しないなら、それ以上に何を望むのか。率直に言って、良きカナンの地の外はどこも荒野である。人々は安息の地に入った時でさえ、自らの本分を維持することが出来ない。そうした人々は単なる淫らな者ではないであろうか。その環境において神により完全にされる機会を失ったならば、それは余生を通して悔いる事となり、計り知れず遺憾に思うであろう。結局あなたは、カナンの地を見つめるだけでカナンでの生活を享受することができず、拳を強く握って後悔で満ちたまま死んでいったモーセのようになるであろう。それを恥ずかしいことだとは思わないのだろうか。他人に嘲笑われるのを恥辱だと思わないのだろうか。他人に辱められることをいとわないのであろうか。立派になろうと努める気持ちがないのであろうか。神により完全にされる誉れある正直な人間になる覚悟がないのであろうか。本当に決断力に欠けている者なのであろうか。他の道へと進む覚悟はないが、神が定めた道を歩む覚悟もないのだろうか。敢えて天の旨にはむかうのであろうか。あなたの技能が如何に優れていたとしても、本当に天に逆らうことが出来るのだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「道……（７）」より

34. 神は罰により人間を征服することを望まない。神は常に人間を強制することを望まない。神は、人間が神の言葉に従い、鍛錬された要領で働きを行い、これにより神の旨を満たすことを望んでいる。しかし、人間は恥知らずで、常に神に反逆する。それよりは神を満足させる最も簡明な方法を見出すこと、すなわち神の采配の全てに従うことが最善であるとわたしは考える。そして、真にこれを実現できるならば、あなたは完全にされるであろう。これは平易で楽しい事ではなかろうか。他人の言葉を気にせず、考えすぎずに、自分の歩むべき道を進みなさい。自分の将来や運命を自ら掌握しているのであろうか。常に逃げ出して世俗的な道を進みたがるのに、そこから抜け出せないのは何故だろうか。分かれ道で何年も躊躇し、結局またしてもこの道を選ぶことになるのは何故だろうか。長年彷徨い続けた後に、思わずこの家に戻っているのは何故だろうか。これは単にあなたの個人的問題だろうか。この流れにいる人々にとって、このことを信じないならば、わたしの言葉を聞くように。すなわち、離脱するつもりならば、そうすることを神が許すか否かをしばらく待って見極めよ。そして聖霊がどのようにあなたを動かすかを自分で経験するように。はっきり言えば、不幸に見舞われたとしても、この流れの中では苦難しなければならないのであり、そして苦難があるならば、その苦難を今ここで受けなければならず、他のどこへも行くことは出来ない。これが明瞭に理解できるだろうか。何処へ行くと言うのだろうか。これが神の行政命令である。神がこの



人間の集団を選ぶことは無意味だと考えているのであろうか。現在の神の働きにおいて、神は容易に怒ることがないが、人々が神の計画を阻害しようとするならば、神は表情を即座に晴天を曇天へと変えることもある。ゆえに、腰を据えて神の計画に従うこと、そして神があなたを完全にすることができるようになることを進言する。これが唯一の賢者となる方法である。

『言葉は肉において現れる』の「道……（７）」より

35. あなたが追求するのは、刑罰と裁きの後に征服されることであらうか、それとも、刑罰と裁きの後に清められ、守られ、世話されることであらうか。あなたが追求しているのは、どちらであらうか。あなたの人生は有意義なものであらうか、それとも意味も価値もないものであらうか。あなたが欲するのは、肉であらうか、それとも真理であらうか。あなたが望むのは、裁きであらうか、快楽であらうか。神の働きを非常にたくさん経験し、神の聖さと義を目の当たりにしてきたあなたは、どのように追求すべきであらうか。あなたは、どのようにしてこの道を歩むべきであらうか。神への愛を、どのように実践すべきであらうか。神の刑罰と裁きは、あなたの中で何らかの効果を達成したであらうか。あなたに神の刑罰や裁きに関する認識があるかどうかは、あなたが何を実際に生き、どの程度神を愛しているかに拠る。あなたの唇は、神を愛していると言うが、実際に生きていることは、古い堕落した性質である。あなたには神への畏れがなく、いわんや良心などない。そのような人々は、神を愛しているであらうか。そのような人々は、神に対して忠実であらうか。彼らは、神の刑罰や裁きを受け入れる者であらうか。あなたは神を愛し、信じていると言うが、自分の観念を捨てない。あなたの働き、成長、あなたが述べる言葉や生活において、神へのあなたの愛は全く表されておらず、神への畏敬が全くない。これが刑罰と裁きを得た者であらうか。このような者がペテロのようになれるであらうか。ペテロのような者たちが、認識を持っているだけで、それを実際に生きないということがあろうか。現在、人間が真の人生を生きるために要求される条件は何であらうか。ペテロの祈りは、単にペテロの口から出ただけのものであったであらうか。それは、ペテロの心の奥底から出た言葉ではなかったであらうか。ペテロは祈るだけで、真理を実践しなかったであらうか。あなたの追求は、誰のためであらうか。神の刑罰と裁きの期間に、あなたはどのようにして守りを得て、清められるべきであらうか。神の刑罰と裁きは、人間にとって全く無益なものであらうか。全ての裁きは懲罰であらうか。人間のいのちに有益なのは、平安と喜び、物質的な祝福、一時的な快楽だけであらうか。人間が快適で楽な環境で、裁きの生活なしに生きるのであれば、そ

の人は清められるであろうか。変化することと清められることを望むなら、人は、完全にされることを、どのように受け入れるべきであろうか。現在、あなたはどちらの道を選ぶべきであろうか。

『言葉は肉において現れる』の「ペテロの経験——刑罰と裁きに関するペテロの認識」より

36. 神の言葉の裁き、刑罰、打撃、精錬をあなたが受け入れることができ、しかも神の委託を受け入れることができることは、この世の始まる前に神が予め定めたことであり、そのためあなたが刑罰を受けるときあまりに苦しむ必要はない。あなたがたの内 でなされた働きと、あなたがたの内に授けられた祝福を取り除くことは誰にもできず、あなたがたに与えられたものすべてを取り去ることは誰にもできない。宗教の人々はあなたがたとの比較に堪えない。あなたがたには聖書に関する偉大なる専門知識はなく、宗教理論もないが、神があなたがたの中で働いたので、幾時代にも渡る誰よりも多くのものを得た。つまり、これがあなたがたの最大の祝福である。このため、あなたがたは神にさらに献身的でなければならず、神になおさら忠実でなければならない。神はあなたを引き上げるので、あなたは努力を強化しなければならず、神の委託を受け入れるために霊的背丈を整えなければならない。神があなたに与えた場所にしっかり立ち、神の民の一人になることを求め、神の国の訓練を受け入れ、神によって得られ、最終的には神への栄光の証とならねばならない。こうした決意をどれほどあなたは持っているであろうか。このような決意があれば、最終的にあなたは確かに神によって得られ、神への栄光の証となるだろう。主な委託は神によって得られ、神への栄光の証となることを理解しなければならない。これは神の心である。

『言葉は肉において現れる』の「神の最新の働きを知り、神の歩みに従え」より

37. わたしの声を聞いたすべての兄弟姉妹たちへ。あなた方はわたしの厳しい裁きの声を聞き、非常な苦しみに耐えてきた。しかし、あなた方は、わたしの厳しい声の後ろにはわたしの意志が隠されていることを知るべきである。わたしがあなた方を鍛錬するのはあなた方を救うためである。わたしの愛する子らのためにわたしがあなた方を訓練、刈り込み、まもなく完全なものにすることをあなた方は知るべきである。わたしの心は非常に切望しているが、あなた方はわたしの心を理解せず、わたしの言葉に従って行動しない。…わたしの考えは、熱心にわたしを欲する人々をわたしは欲するのであり、真心からわたしを求める人々だけがわたしを喜ばせることができるのだ——このような人々に対してわたしは自分の両手を差し出して援助し、彼らはどんな災難にも出会わないことを保証する。本当に神を欲する人々は進んで神の心を思いやり、わたしの意志

を行うだろう。そのようにして、まもなくあなた方は現実性に入り、わたしの言葉をあなた方のいのちとして受け入れるはずである——これがわたしの最大の重荷である。もし諸教会と聖者たちがすべて現実性に入り、すべてがわたしと直接交流することができるならば、わたしと向かい合い、真理と義を実行できるならば、そのとき初めて、彼らはわたしの愛する子らとなり、わたしは彼らに十分満足し、あらゆる大きな祝福を与えるだろう。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第二十三章」より

38. 全ての人々は、神の言葉の故に、精錬を受けている。神の受肉がなかったとしたら、人類はそのような苦しみにあずかるという祝福を受けることなど全くなかっただろう。それは次のように言い換えることもできる。神の言葉による試練を受け入れることができる者たちは祝福された人々である。人々の元来の器、行動、そして神に対する態度に基づいて判断すると、彼らはこのような精錬を受けるに値しない。人々がこの祝福を享受してきたのは、彼らが神によって高められたからである。人々はかつて、自分は神の顔を見るにも、神の言葉を聞くにも値しないと言っていた。現在人々が神の言葉による精錬を授かっているのは、もっぱら神によって高められたことと神の憐みのおかげである。これが終わりの日に生まれた者に一人残らず与えられる祝福である。あなたがたは自分自身それを体験しただろうか。人間がどの側面で苦難を受け、挫折を体験するかは、神によって予め定められており、人間自身の要求によるものではない。これは絶対にほんとうである。全ての信者が神の言葉による試練を体験し、神の言葉の中で苦難を受ける能力を持たなければならない。あなたがたは、このことをはっきりと見極められるだろうか。したがって、あなたが経験した苦難は、今日の祝福に引き換えられる。神のために苦しまないのであれば、あなたは神から称賛を得ることはできない。あなたは、かつて不平を言ったかも知れないが、どれだけ不平を言ったとしても、神は、あなたに関してそのことを思い出さない。もう今日という日が来たのだ。昨日のことを繰り返す理由はない。

『言葉は肉において現れる』の「神への真の愛は自発的である」より

39. あなたは神を信じる者の一人として、今日、終わりの日の神の働きやあなたに対する神の計画のすべての働きを受け取らる中で、あなたは神により引き上げられ、救いを受け取っていることを理解しなくてはならない。全宇宙における神のすべての働きは、この一群の人々に焦点を当てている。神はあなたがたにすべての努力を注ぎ、あなたがたのためにすべてを犠牲にした。そして全宇宙における聖霊のすべての働きを取り戻し

、あなたがたに与えたのだ。それが、あなたがたは幸運なのだとわたしが言う理由である。さらに神は、自らが選んだイスラエルの民から自分の栄光をあなたがたへと移した。それはあなたがた一団を通して、神の計画の目的を全て明らかにするためである。それゆえ、あなたがたは神の嗣業を受ける者、更には神の栄光の継承者となるのだ。あなたがたは皆このような言葉を覚えているだろう。「このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。」あなた方は皆過去にこの言葉を耳にしたことがあるが、その言葉の真意を理解した者はひとりもない。今日あなたがたは、この言葉の持つ真の意義をよく理解している。これらの言葉は終わりの日に神が成就するものである。そしてそれは、赤い大きな竜の横たわる地で、竜にひどく苦しめられている人々の上に成就する。赤い大きな竜は神を迫害する神の敵であり、よってこの地において神を信じる者たちは屈辱や迫害に晒されている。それ故、これらの言葉はあなたがた一群の中で実現するのだ。神に逆らう地において働きが行われるため、神のすべての働きは過度の妨害を受け、神の言葉の多くはすぐには達成されない。したがって、人々は神の言葉によって精錬される。これもまた、苦しみの要素である。赤い大きな竜の地で働きを実行することは神にとって非常に困難だが、神はこのような困難を通して、自分の働きのひとつの段階を行い、自分の知恵と不思議な業を明らかにする。神はこの機会を通して、この一群の人々を完全にする。人々の苦しみ、彼らの素質、そしてこのけがれた地の人々のサタンのすべての性質故に、神はその清めや征服の働きを行うことで栄光を手にし、神の業の証に立つ人々を得るのだ。これこそが、神がこの一群の人々のために行った全ての犠牲のすべての意義である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きは人間が想像するほど簡単か」より

40. 落胆してはならない。弱ってはならない。わたしはあなたに明らかにする。神の国への道は平坦ではない。何事もそう簡単ではないのだ。あなたはたやすく祝福を得たいのであろうか。今日、だれもが苦しい試練に直面しなければならない。そうでなければ、あなた方のわたしに対する愛の心がさらに強いものとなることはなく、わたしに真実の愛を抱くこともないであろう。たとえそれが些細な状況であっても、誰もがそれを通らねばならない。ただそれぞれ度合いが違うというだけのことである。その状況はわたしからの祝福のひとつなのだ。わたしの祝福を求めてわたしの前に頻繁に跪く者がどれだけいるだろうか。愚かな子たちだ。あなた方はいつでも、少しの幸運な言葉がわたしからの祝福であると感じるが、苦しみがわたしからの祝福の一部だとは感じない。わたしからの苦しみにあずかる者は、必ずわたしの甘美さにもあずかるだろう。これが

わたしの約束であり、あなた方に対するわたしからの祝福である。食べて飲み、享受することをためらってはならない。闇が過ぎ去れば光が訪れる。夜明け前が一番暗いのだ。その後徐々に明るくなり、やがて日が昇るのである。恐れたり、臆病になったりしてはならない。今日、わたしはわたしの子たちを支え、彼らのために力を発揮する。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第四十一章」より

41. 今日、義の裁きであろうと、無情な鍛錬や刑罰であろうと、すべては救いのためであることを知りなさい。今日種類に応じた各人の分類があろうと、人を分類する範疇が露わにされようと、神の発する言葉と業のすべては本当に神を愛する者たちを救うためである。義の裁きは人を清めるためであり、無情な鍛錬は人を清めるため、厳しい言葉、あるいは懲らしめはすべて人を純化するため、救うためである。従って、今日の救いの方法は過去のものとは違う。今日、義の裁きはあなたたちを救い、種類に応じてあなたたち各々を分類するためのよい道具であり、無情な刑罰はあなたたちに最高の救いをもたらす――この刑罰と裁きに直面する時あなたたちは何と言わなければならないだろうか。あなたたちは初めから終わりまで救いを享受しなかっただろうか。あなたたちは受肉の神を見たし、神の全能と知恵も悟った。そのうえ、あなたたちは繰り返し鞭打たれ、訓練も経験した。しかし、あなたたちは最高の恵みも受けたのではないか。あなたたちの祝福は他の誰のものより大きいではないか。あなたたちの恵みはソロモンが享受した栄光や富よりも遥かに豊富である。考えてもみなさい。もしわたしがやってきた意図があなたたちを罪に定め、罰するためであり、あなたたちを救うためでなかったなら、あなたたちの日々はこのように長く続いていただろうか。この罪深い肉と血から成る存在であるあなたたちは今日まで生き残れただろうか。もしそれがただあなたたちを罰するためだけなら、なぜわたしは肉となり、そのような大きな業に着手したのだろうか。ただの人間にすぎないあなたたちを罰するには、わずか一言発する時間で済むのではないか。わたしはあなたたちを罪に定めた後でもなお滅ぼす気なのだろうか。あなたたちはわたしのこうした言葉をまだ信じないのだろうか。わたしは慈愛と憐れみだけで人を救うことができるのだろうか。それともわたしは人を救うためにただ十字架だけしか使えないのだろうか。わたしの義の性質は人が完全に従順になることを一層促進するのではないだろうか。それは人をもっと完全に救うことができるのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたたちは地位の恩恵は脇に置き、人の救いをもたらす神の心を理解するべきである」より

42. あなたが将来祝福されるか呪われるかは、あなたが今為す行動によって決められる。あなたがたが神により完全にされるのであれば、正にこの時代がその時である。将来別の機会が訪れることはないであろう。神は今この時、あなたがたを完全にすることを真に望んでいる。そして、これは話だけの事ではない。将来あなたがたにどのような試練が降りかかるか、何が起こるか、どのような災いにみまわれるかに関わらず、神はあなたがたを完全にすることを願っている。これは確かであり、疑う余地のない事実である。何からそれが分かるであろうか。それは、神の言葉は、幾つもの時代と世代を経てきたが、現在ほどの高嶺に達したことは嘗てなかったという事実からである。それは絶頂まで達した。また、全ての人間たちにおける聖霊の働きは、今日前代未聞のものである。従来世代で、このようなことを経験したことのある者は、ほとんどいないであろう。イエスの時代でさえも、今日のような啓示はなかった。あなたがたに語られた言葉において、あなたがたが理解していること、また、あなたがたが体験していることにおいて、それは頂点にまで達したのである。あなたがたは、試練や刑罰の最中に立ち去ることはない。そして、そのことは、神の業が嘗てない輝かしさに達したことを証明するに充分である。これは人間が為し得ることでも、人間が保っていることでもない。それはむしろ神自身の業である。したがって、神の業に関する多くの事実から、神は人間を完全にすることを望んでおり、確かにあなたがたを完全にすることができる、ということが理解できる。あなたがたが、このことに目を留めることができ、このような新たな発見をすることができれば、あなたがたは、イエスの二度目の降臨を待つことなく、神が今の時代にあなたがたを完全にすることを許すであろう。したがって、あなたがたは、神によって完全にされるために、それぞれできる限りを尽くし、努力を一切惜しまないようにすべきである。

『言葉は肉において現れる』の「一人ひとりが自らの役割を果たすことについて」より

43. 現在の流れにおいては、神を真に愛する者一人ひとりに、神によって完全にされる機会がある。彼らが若いかに年老いているかに関わらず、神への従順さと畏敬の念が心の中にある限り、神によって完全にされることが可能であろう。神は、各人の違った役割に応じて、人間を完全にする。あなたが全力を尽くし、自分を神の業に服従させる限り、神によって完全にされることが可能であろう。現時点において、あなたがたのうちに完全な者は一人もいない。あなたがたは、一種類の役割を果たすことができる時もあれば、二種類の役割を果たすことができる時もある。神のために全力を尽くして自らを費やす限り、あなたがたは、最終的に神により完全にされるであろう。

44. 神による救いの業の期間、救われる人々はすべて、最大限まで救われ、誰ひとりとして見捨てられることはない。神の働きの目的は人を救うことだからである。神による人の救いの期間に、自分たちの性質の変化を達成できない者たち、また、完全に神に従うことのできない者たちはみな懲罰の対象となる。この段階における業——言葉の働き——は人が理解しないすべての道と奥義を人に明らかにし、人が神の心と人に対する神の要求を理解できるようにし、彼らが神の言葉を実行に移す条件を備え、自分たちの性質の変化を達成できるようにする。神は働を行うためにだけ言葉を使い、人々が少し反抗的だからといって彼らを罰したりすることはない。今は救いの業の時だからである。もし反抗的な者がひとり残らず罰せられるとしたら、誰にも救われる機会がないだろう。彼らはみな罰せられ黄泉の国に落ちるだろう。人を裁く言葉の目的は、人々に自分自身を知り、神に従うようにすることである。それは言葉による裁きによって彼らを罰することではない。言葉の働きの期間、多くの人々は彼らの反抗と反逆を曝け出し、受肉の神への不服従を露わにするだろう。しかし、神はこのためにこれらの人々すべてを罰したりはしない。そうではなく神は心の底まで墮落して、救いようのない人々を取り除くだけである。神は彼らの肉をサタンに与え、そのような例は少ないが、彼らの肉を終わらせる。残された者たちは従い続け、神の取り扱いと刈り込みを経験する。従っている間もなお神の取り扱いと刈り込みを受け入れることができず、ますます墮落していくならば、これらの人々は救いの機会を失ってしまうだろう。言葉による征服を受け入れた一人ひとりには救いの機会が豊富にあるだろう。これら一人ひとりの神による救いは、彼らに神の最大限の慈悲深さを表している。つまり、彼らには最大限の寛容さが示される。人々が間違った道から後戻りする限り、彼らが悔い改めることができる限り、神は彼らに神の救いを受ける機会を与える。人々が初めて神に反抗する時、神は彼らを殺すことは決して願わず、代わりに彼らを救うためにできる限りのことを為す。本当に救う余地がない者なら、神は取り除くだろう。神が誰かを罰するにおそいのは、救うことができる者たちのすべてを救いたいからである。神はただ言葉によって人々を裁き、啓発し、導くのであって、杖を使って彼らを殺すのではない。人々を救うために言葉を使うことは神の業の最終段階の目的と意義である。

45. 神は、人間の心を目覚めさせるために様々な方法を用いているものの、人間の心がついに目覚めるまでの道のりは、まだ先が長いです。わたしは、神に取り残され、無視され、見捨てられたように誰かが感じるのを見たくありません。わたしは、あなたがた全員が真理と神への理解を追求し、揺るがぬ意志で、不安や負担なく、勇気を持って前進することを望んでいます。あなたがこれまでどのような悪いことを行なったとしても、どれほど大きく道を外れたとしても、どれほど過ちを犯したとしても、そうしたことを神を知ろうとする追求における負担や重荷としてはなりません。絶えず前進なさい。それが何時起ころうと、人間の救いである神の心は決して変わりません。これが神の本質のなかで最も貴い部分です。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 6」より

46. 全能者は深い苦しみの中にあったこのような人々に慈しみを抱く。同時に、全能者は何の知覚もないこのような人々にうんざりしている。なぜなら、人間から答えを得るのに、あまりにも長く待たねばならなかったからである。全能者は探したい、あなたの心と霊を探し、あなたに水と食料を施したい、あなたを目覚めさせたいと思っている。それにより、もはやあなたが渇きと飢えを感じないようにである。あなたが疲れているとき、この世の荒廃のようなものを感じはじめるとき、途方に暮れてはならない、泣いてはならない。全能神という、見守る者がいつでもあなたが来るのを抱擁して迎えるからである。彼はあなたのそばで見守り、あなたが立ち返るのを待っている。あなたが記憶を突然回復する日を待っている。すなわち、あなたが神から来たのであり、いつであったかは不明だが道に迷い、いつであったかは不明だが路上で気を失い、いつであったかは不明だが「父」ができたことに気づく日を。さらに、全能者がずっと見守ってきたということ、とても長い間あなたが帰ってくることを待っていたということに気づく日を。全能者は切実な思いで見守り、そして答えのない応答を待っている。全能者の見守りはきわめて貴重であり、それは人間の心と霊のためである。この見守りは無期限かもしれないし、それは終わりの段階にあるのかもしれない。しかし、あなたは自らの心と霊がたった今どこにあるのかを正確に知らなくてはならない。

『言葉は肉において現れる』の「全能者のため息」より

47. 神の愛と憐れみが経営の働きの隅々に行き渡り、人間が神のよき意図を理解できるか否かに関わらず、神はいまだに疲れを知らず成就しようとする働きを続けている。人々がどれほど神の経営を理解しているかに関わらず、神の働きの恩恵と助けはすべての人が理解することができる。おそらく、今日、あなたは神が与える愛やいのちを一



切感じていない。しかし、あなたが神を捨てない限り、真理を追究しようという決意を諦めない限り、神の笑顔があなたに顕れる日は必ず来る。神の経営の働きの目的は、サタンの支配下にある人類を取り戻すことであり、サタンに墮落させられ、神に敵対する人類を見捨てることではないからである。

『言葉は肉において現れる』の「神の経営の中でのみ人は救われる」より

#### 脚注

- a. 「一片の枯れ木」とは、中国語の慣用句で、「救いがたい」という意味である。

### (Ⅲ) 人間に対する神の警告についての言葉

48. あなたがたの運命のため、神に認められることを求めなさい。それはつまり、神の家の一員であることを自覚しているのなら、あらゆる事において神に心に安らぎと満足をもたらさなければならない。つまり、自らの行いを律し、真理にそわなければいけないということである。もしそれが到底できないというのであれば、神に嫌われ、見捨てられ、みなから拒まれることになる。ひとたびそのような状態に陥ると、神の家の一員であることはできない。これが神の承認を受けられないということである。

『言葉は肉において現れる』の「三つの訓戒」より

49. わたしの要求は単純かもしれないが、わたしがあなたがたに伝えている事柄は、「 $1 + 1 = 2$ 」といった単純なものでは無い。あなたがたがこの事柄について出鱈目に意味も無くとりとめの無い大袈裟な話をするだけであれば、あなたがたの将来的な計画と望みは、永遠に白紙のままであろう。長年にわたって苦しみ、大いに努力しているが、その結果を示すことが出来ない者に対し、わたしは全く憐憫を感じることはないだろう。それとは反対に、わたしの要求に満たない者に与えるのは罰であり、報いでも、いわんや同情でも無い。おそらくあなたがたは、長年にわたって付き従ってきた者として、何であれ大いに努力してきたので、いずれにせよ自分は効力者として神の家で1杯の米を得られると想像しているであろう。あなたがたのうち殆どの者がこのように考えると言える。なぜなら、あなたがたは現在に至るまで、常に自分が利用されるのを防ぎ、何かを利用する原理を追求してきたからである。それゆえに、ここで真剣に伝えるが、わたしは、あなたの大いなる努力がどれほど賞讃に値するか、あなたの資格がどれほど素晴らしいか、どれほど忠実にわたしに従っているか、どれほど名高く、あなたの姿勢がどれほど改善されたかは問わない。あなたがわたしの要求した物事を行わない限り、あなたは決してわたしの賞讃を得ることができないであろう。そうしたすべての考えや打算は出来るだけ早く捨て、わたしの要求を真剣に扱い始めるように。さもなければ、わたしはあらゆる者を灰にしてわたしの業を終えるか、せいぜいわたしの長年にわたる業と苦難を無に帰するであろう。なぜなら、わたしの敵と、邪悪の臭気を持ちサタンに倣う者をわたしの国すなわち次の段階に入らせることは出来ないからである。

『言葉は肉において現れる』の「過ちは人間を地獄へ送る」より

50. あなたがたの追求が効果的であるか如何は、現在における追求と、あなたがたが現在備えている物事により判断される。こうした物事は、あなたがたの結末を決定す

るために用いられる。つまりあなたがたの結末は、あなたがたが払った代償と、あなたがたが取った行動により示される。あなたがたの結末は、あなたがたの追求、信仰、そしてあなたがたが取った行動により示される。あなたがたの中には、救われるための限度を既に超えている者が多数居る。なぜなら、現在は、人々の結末が示される時であり、わたしは愚かな方法で業を行い、救われ得ない者を次の時代へと導かないからである。わたしの業が終わる時が来るであろう。わたしは、救うことが出来ず、悪臭を放ち、魂の無い屍に対して業を行わない。現在は、人間の救いの終わりの日の時であり、わたしは何の役にも立たない業を決して行わない。天と地を罵ってはならない。世の終わりは迫っており、不可避である。事態はそうした段階まで進んでおり、それを阻止するために、人間として、あなたに出来ることは何も無く、それを思うように変えることは出来ない。昨日、あなたは代償を払わずに追求し、忠誠では無かった。今日、終わりの時が来て、あなたは救いようが無く、明日、あなたは排除されるであろう。あなたが救われる余地は無い。わたしの心は柔和であり、わたしはあなたを救うために最善を尽くすが、あなたが努力せず、全く反省しないのであれば、それはわたしと何の関係があるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「実践（7）」より

51. メシアを理解しなかった人々は皆、イエスに逆らい、イエスを拒絶し、イエスを中傷することができた。イエスを理解しない人々は皆、イエスを否定し、イエスをのしることができ、そればかりか、彼らはイエスの再臨をサタンの惑わしとして見ることができ、さらに多くの人々が受肉し再来したイエスを非難するであろう。これらのことのせいで、あなたがたは恐ろしくならないのか。あなたがたが直面することは聖霊に対する冒瀆であり、諸教会に向けた聖霊の言葉を台無しにし、イエスが表した全てをはねつけることとなる。それほど混乱しているのなら、イエスから何を得られるというのか。あなたがたが頑なに自分の間違いに気づくのを拒絶しているのならば、イエスが白い雲に乗って肉に戻ってくる時にイエスの働きをどのようにしてあなたがたが理解できるというのか。わたしは言う。真理を受け入れず白い雲に乗ったイエスの再臨を盲目的に待つ人々は、確実に聖霊を冒瀆することになり、彼らは滅ぼされる種類である。あなたがたは単にイエスの恵みを望んでおり、この上なく幸せな天国を楽しみたいだけであるが、イエスの語る言葉に従ったことはなく、肉に戻ったイエスが表した真理を受け入れてこなかった。あなたがたはイエスが白い雲に乗って戻るという事実と引き替えに何を差し出すのか。あなたがたが繰り返し罪を犯しては何度もその罪を告白するという誠

意か。白い雲に乗って戻ってくるイエスへの捧げ物としてあなたがたは何を差し出すのか。自らを称賛する長年の仕事という資本だろうか。あなたがたは戻ってきたイエスに信用してもらうために何を差し出すのだろうか。それはあなたがたの、いかなる真理にも従わない傲慢な本性だろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

52. わたしはあなたがたに言う。しるし故に神を信じる者は、滅ぼされる部類であることは確かである。肉に戻ったイエスの言葉を受け入れることができない者は、地獄の子孫であり、天使長の末裔であり、永遠の破滅を逃れることのできない部類である。多くの者はわたしの言うことに耳を傾けないかもしれない。だがそれでも、天からイエスが白い雲に乗って降臨するのをあなたがたが自分の目で見ると、これは義の太陽が公に現れることであると、わたしはイエスに付き従ういわゆる聖徒全員に伝えたい。おそらく、その時あなたにとって大いなる興奮の時となるであろう。だが、あなたがイエスが天から降臨するのを見る時は、あなたが地獄へ落ち、懲罰を受ける時でもあることをあなたは知るべきである。それは神の経営（救いの）計画の終わりを告げるものであり、神が善良な人々を報い、邪悪な者たちを罰する時である。神の裁きは人間がしるしを見る前に、真理の現れだけがある時には終わっている。真理を受け入れてしるしを求めることがなく、故に清められている人々は、神の玉座の前に戻り、造物主の胸に抱かれる。「白い雲に乗らないイエスは偽キリストだ」という信念に執着する者たちだけは、永久に続く懲罰を受けなければならない。彼らはただしるしを示すイエスしか信じず、厳しい裁きを宣言し真のいのちの道を解き放つイエスを認めないからである。そのような者たちは、イエスが白い雲に乗って公に戻ってくる時に取り扱うしかない。彼らはあまりに頑なで、自信過剰で、傲慢である。どうしてこのような墮落した者たちがイエスに報いてもらえるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「あなたがイエスの霊のからだを見る時は、神が天と地を新しくした時である」より

53. 地上には、あらゆる悪霊が果てしなく休みどころを求めてさまよい、いつも食べるための人間の死体を探している。わが民よ。あなたがたは、わたしの保護と世話の中にとどまりなさい。けっして自墮落なことをしてはいけない。けっして無謀なことをしてはいけない。そうではなく、わたしの家で忠誠をささげなさい。そして、忠誠によってのみ、あなたは悪魔の狡猾さに対抗できるのだ。いかなることがあっても、過去の

ように行動してはいけない。わたしの前で一つのことをし、わたしの後ろで別のことをする——そうすることで、その人は、すでに贖われなくなっている。まことに、わたしはこうしたことを十分以上に述べている、そうではないか。これは、人間の度しがたい本性のため、繰り返し思い起こさせているのである。飽きるのではない。わたしの言うことはみな、あなたがたの運命を確実なものにするためなのだ。サタンが必要とするのは、まさに穢れた汚い場所だ。人間は、どうしようもなく、救いようなく放蕩におぼれていればいるほど、抑制することを拒む。すると、穢れた霊がますますあらゆる機会を利用して、その人に取りつこうとするのだ。ひとたびこの道に至ると、その人の忠誠は口先だけのいい加減な、空虚なものとなり、決意は穢れた霊に食べ尽くされ、不服従になり、あるいはサタンのそそのかしに乗って、わたしの働きを妨害するために利用される。わたしはその気になればいつでもどこでも即座にあなたを打ち殺す。誰一人、この状態の深刻さを知らない。みな、自分たちの聞くことをたわごとだと思って、少しも用心しようとしな。過去に何が行われたかは覚えていない。あなたは、わたしがもう一度忘れて寛容にするのを待っているのか。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十章」より

54. あなたの過ちが多ければ多いほど、あなたが良い終着点を得る確率は低くなる。それと反対に、あなたの過ちが少なければ少ないほど、あなたが神に賞讃される確率は高くなる。あなたの過ちが増えすぎて、わたしがあなたを許せなくなったとしたら、あなたは自分が赦される機会を完全に台無しにしたことになるであろう。その場合、あなたの終着点は、天ではなく地の下となるであろう。あなたがわたしを信じないのであれば、大胆に間違ったことをして、その結果を知るがよいだろう。あなたが真理を実践する熱意ある者であるならば、あなたには、自らの過ちの赦しを得る機会が確実にあり、反抗する回数がますます減ってゆくであろう。あなたが真理を実践することを望まない者であるならば、神の前における過ちは確実に増えてゆき、反抗する回数もさらに増加を続けて、終局的には完全に滅ぼされる時が来るであろう。そしてそれこそがまさに、祝福を受けるあなたの美しい夢が無に帰する時である。自分の過ちを、未熟で愚かな者のミスであるとは考えてはならず、また真理を実践しなかったのは、自分の器量が劣っているために真理を実践できなかったからであるという言い訳をしてもならない。またそれにもまして、自分が犯した過ちを、単に他になすすべを知らない者の行動であるように考えてはならない。あなたが自らを赦すのが得意であり、自らに寛大になるのが得意であれば、あなたは、決して真理を得る事の無い臆病者であり、あなたの過ちは決

してあなたをつきまとうことをやめず、その過ちはあなたが真理の要求を満たすことを永遠に妨げ、あなたは永遠にサタンの忠実な仲間となるだろう、と言える。わたしの勧告は、依然として同じである。すなわち、自分の終着点のみに注意して隠された自分の過ちを見過ごししてはならない。自分の過ちを真剣に受け止め、終着点に関する懸念のために、自分の過ちを全て見過ごししてはならない。

『言葉は肉において現れる』の「過ちは人間を地獄へ送る」より

55. 今後あなたの前途において、策略をめぐらせたり、偽りや曲がったことに加わったりしてはならない。さもなければ、その結果は想像を絶するものになるであろう。偽りと曲がったことが何であるか、あなた方はまだ理解していない。あなたがわたしに見せられず、明るみに出すこともできない行動やふるまいは、どれも偽りと曲がったことである。今あなたはこれを理解すべきである。今後、偽りや曲がったことに加わるなら、分からない振りをしてはならない。それは、知っていながら過ちを犯すことであり、さらに罪深いことである。このようなことをすれば、あなたは火で焼かれるか、さらにひどい場合は、自分を滅ぼすことになるだろう。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第四十五章」より

56. 主がトマスの前に現れた時に述べた、聖書に記されているこの言葉は、恵みの時代のあらゆる人々にとって大いに役立つ。主がトマスのところへ来て述べた言葉は、その後何世代にもわたる人々に極めて大きな影響を与え、その言葉には永遠の意味がある。トマスは、神を信じつつ、神に疑念を抱いている信者の代表的存在である。こうした人々は疑い深い性格であり、悪意があり、不忠であり、神が成し遂げることの出来る業を信じていない。こうした人々は神の全能性や支配を信じず、受肉した神を信じていない。しかし、主イエスの復活は、こうした人々に対する顔面の平手打ちのような衝撃であり、こうした人々が抱く疑念について気づき、認識し、自らの不忠を認め、よって主イエスの存在と復活を心から信じるようになる機会でもあった。トマスに起こった出来事は、その後の世代の人々がトマスのように疑念を抱いたならば、闇へと落ちるであろうから、疑念を抱くことを避けるように、という警告であった。あなたが神を信じていながら、トマスのように常に主のわき腹や釘あとに触れ、神が存在するかどうかを憶測し、確かめることを望むのであれば、神はあなたを見捨てるであろう。そうしたわけで、主イエスは人々に対し、自分の目で見ることのできる物だけを信じたトマスのようにならず、純粹で正直な人間となり、神に対して疑念を抱かず、神を信じて付き従うこ

とを要求している。このような者は祝福されている。これは主イエスの人々に対する僅かな要求であり、また主に付き従う者に対する警告でもある。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

57. 自分の肉のことしか考えず、快適さを好む者、信仰が曖昧な者、魔法の薬や魔術を行う者、淫乱でふしだらな者、ヤーウェの犠牲や神の所有を盗む者、まいないを好む者、天国へ行くことを無為に夢見る者、傲慢で自惚れが強く、個人的な名声や富のためだけに努力する者、無礼な言葉を広める者、神自身を冒瀆する者、神自身を非難し、中傷する者、他の者と徒党を組んで独立しようとする者、自分を神以上に讃美する者、軽薄な若い男性と女性諸君、悪徳に陥れられた中高年の男性と女性諸君、個人的な名声と富を喜び、他人の中で個人的な地位を追求する男性と女性諸君、悔いることのない、罪の罠から抜け出せない者は、すべて救いの限度を超えているのではなかろうか。放縱、罪深さ、魔法の薬、魔術、冒瀆、無礼な言葉は、あなたがたの中で暴動を起こし、あなたがたの中で真理の言葉といのちは踏みにじられ、あなたがたの中で聖なる言葉は汚される。汚れと反逆に満ちた異邦人であるあなたがたは、最後にどうなるであろうか。肉を愛し、肉の邪惡を行い、不浄の中に陥った者は、どうして厚かましくも生き続けることが出来ようか。あなたがたのような者は、救いの限界を超えた、うじ虫であることを知らないというのか。どうしてあなたがたに、あれこれと要求する資格があるというのか。現在まで、真理を愛さず、肉だけを愛する者には、全く変化が無い。それならば、どうしてそうした者が救われ得るだろうか。現在でさえも、いのちの道を愛さない者、神を讃美せずに神の証しとならない者、自分の地位のために謀をする者、自らを賞揚する者は、依然として変わらないのではないか。そうした者を救うことに、何の価値があるだろうか。

『言葉は肉において現れる』の「実践（7）」より

58. 神を捨て去った者に関し、そうした者の神に対する卑劣な姿勢と真理を軽視する心により、神の性質が侵害される。こうした者が神に赦されることは決して無いであろう。既にこうした者は神の存在を知り、神は既に来たという知らせを受け、神の新たな業を経験してさえいる。こうした者が立ち去ることは、迷いに起因する事例でも、その事に関する理解が不明瞭であった事例でもない。まして、そうした者は、強制的に立ち去らされたものでは決して無い。むしろ、それはそうした者が意識的に、明瞭な精神状態で、神から去ることを選んだものである。そうした者が立ち去ったのは、道を見失ったものでも、捨て去られたものでもない。したがって、神の目から見ると、そうした

者は群れから迷い出た羊と同様の事例では無く、ましてや道を見失った放蕩息子と同様の事例でも無い。こうした者は罰を受けずに立ち去った者であり、そうした条件や状況により、神の性質が侵害され、その侵害に鑑みて、神はその者に絶望的な結末を与える。こうした結末は恐ろしいものではないだろうか。したがって、ある者が神を知らない場合、その者は神を侵害する恐れがある。それは決して些細なことでは無い。ある者が、神の姿勢を真剣に受け止めず、またその者は迷える子羊であり、神はその者が改心するのを待ち、その者が戻るのを心待ちにしていると考えているとしたら、その者は罰の日からそれほど離れていない。神はその者が戻るのを拒むだけではない。それは、その者が神の性質を侵害した2度目の事例であり、さらに酷い問題である。その者の不適切な姿勢により、神の行政命令が既に犯されている。神はその者が戻るのを許すであろうか。こうした問題に関する神の原則は、その者が既に真の道を確認しつつ、意識的かつ明瞭な精神状態で神を拒否し、神から離れた場合、神はその者の救いの道を遮断し、神の国の門は、それ以降その者に対して閉ざされる。その者が再び現れて門戸を叩いても、神はその者のために扉を二度と開かないであろう。その者は、永遠に閉め出される。

『言葉は肉において現れる』の「神の性質と神の働きが達成する成果をいかにして知るか」より

59. 天地創造の時から今日まで、多くの人々がわたしの言葉にそむき、そのためにわたしの回復の流れからうち捨てられ、除かれた。最終的に彼らの体は滅び、その霊はハデスに投げ込まれる。今日でも彼らはいまだに重い罰を受けている。多くの人々がわたしの言葉に従ったが、彼らはわたしの啓きと照らしにそむき、そのためわたしに退けられ、サタンの支配下に落ち、わたしに敵対する者になった。（今日、わたしに真っ向から敵対する者は、わたしの言葉の表面にだけ従い、わたしの言葉の本質には逆らう。）また、わたしが昨日語った言葉だけを聞いて、過去のくずにしがみつき、今日の産物を重んじない者が大勢いる。そうした人々はサタンにとらわれているだけではなく、永遠の罪人になり、わたしの敵になり、真っ向からわたしに反対している。そのような人々は、わたしの怒りの極致におけるわたしの裁きの対象であり、今日、まだ目が見えず、いまだに暗い牢獄にいる（つまり、そのような人々は腐ったサタンに操られるしなびた死体なのであり、彼らの目はわたしが覆っているのです、彼らは目が見えないと言うのである）。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第四章」より

60. おそらく多くの人たちが自分を神と比較してきただろうが、神に逆らうとき、どんな味がするのだろうか。それは苦いのだろうか、甘いのだろうか。あなたは、この



ことを心得るべきである——知らないふりをしてはならない。おそらく心の中では未だに納得していない人たちもいるだろうが、試してみるようあなたに勧める——どんな味がするのか試してみなさい。そうすることで、多くの人々が疑わないで済むのである。多くの人たちが神の言葉を読みながらも、心の中では神に逆らっている。そのように神に逆らった後、あなたはナイフで胸がえぐられるように感じないだろうか。それが家庭での不和でないとしても、それは身体の不調、または息子や娘たちに関する悩みではないだろうか。たとえあなたの肉体が死を免れたとしても、神の手から逃がれることはできない。あなたはそれをそれほど単純なことだと思っているのか。特にこれは、神に近い多くの者たちが注意すべきことである。あなたは、時が経つにつれてこのことを忘れ、気付かないうちに誘惑に陥り、全てのことに無頓着になり、そしてそれは、あなたが罪を犯すきっかけになるだろう。これは些細なことだと、あなたには思えるだろうか。もしこのことをうまくできれば、あなたは完全にされる機会を得る——神の前で、神の口から助言を受けるために。もしあなたが不注意なら、あなたは問題にぶつかるだろう——あなたは神に対し不遜になり、あなたの言葉と行動がはだらしくなり、遅かれ早かれ強風と巨大な波にさらわれるであろう。あなたがたは一人ひとり、これらの戒めを心に留めるべきである。もしそれらに違反するならば、神によって証しされている者は、あなたを罪に定めないかもしれないが、神の霊はあなたへの取り扱いを終えていないし、神の霊はあなたを容赦しない。それでもあなたは、神に対して罪を犯す勇気があるのか。そういうわけで、神が何を言おうが、あなたは神の言葉を実践し、あらゆる手段を尽くして忠実にそれらを守らなければならない。これは決して容易なことではない。

『言葉は肉において現れる』の「新時代の戒め」より

61. わたしが求めるのは、生き生きとした生き物である。死に染まった死体ではない。わたしはゆったりと国のテーブルにつき、地のすべての人々に、わたしの審査を受けよと命じる。わたしの前には、清くない者の存在を許さない。人間がわたしの働きの妨げをすることは、誰にも許さない。わたしの働きを妨げる者はみな、地下牢に放り込まれ、釈放された後でも、災いに見舞われる。地上の焼きつけるような炎を浴びるのだ。わたしが受肉しているとき、誰でも肉の体のわたしと、わたしの働きについて議論する者を、わたしは憎む。わたしには地上に身内がないのであり、誰であっても、わたしを同等の存在と見て、わたしを引き寄せて共に昔のことを語ろうとする者は滅ぼされるのだということを、すべての人間に、わたしは何度も思い起こさせた。これがわたしの権限である。そうしたことについて、わたしは人間に対して、まったく許容しない。わ

たしの働きを妨げてわたしに意見しようとする者は、刑罰を受ける。けっして赦されることがない。もしわたしが率直に話さなければ、人間はけっして理解するに至らず、気づかないままわたしの刑罰を受けることになる。人間は肉の体のわたしを知らないからである。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十章」より

62. あなたは天の神に忠実でありさえすれば、キリストに対して好きなように行動してもよいと思っているのか。それは誤りである。キリストに関するあなたの無知は、天の神に関する無知である。あなたがいかに天の神に忠実であろうとも、それは空論と見せかけにすぎない。地上の神は、人間が真理とより深遠な知識を受け取ることに貢献するだけでなく、それ以上に、人間を断罪し、そののちに事実を掴んで悪人を罰することに貢献する。これによる有益な結果と有害な結果をあなたは理解したのか。そのような結果をあなたは経験したのか。私は、あなた方が次の真理を早晚理解できるよう願っている。すなわち、神を知るには、天の神だけでなく、より重要なこととして地上の神を知らなければならない、ということである。優先順位を取り違えたり、主要なものよりも二次的なものを優先させたりしてはならない。このようにすることでのみ、あなたは神と真により関係を築くことができ、より神に近づき、あなたの心をより神に近づけることができるのである。あなたが私を長年信仰し、私と長らく関わってきたにもかかわらず、私から遠く離れたままならば、あなたは度々神の性質に背いており、あなたの最後は実に測りがたいものになるはずだ、と私は言う。私と長年関わっても、それによってあなたが人間性と真理を有する人物へと変化せず、その上さらに、あなたの本性に悪の道が根付き、傲慢さが以前の倍になるだけでなく、私に関する誤解も増大し、私を単なる仲間と見なすまでになってしまったのならば、あなたの苦痛はもはや皮膚の表面どころではなく、まさに骨まで貫いていることになる。あなたに残されたのは自分の葬儀の準備が整うのを待つことだけである。その時になって、あなたの神になるよう私に懇願するには及ばない。あなたは死に値する罪を、許されざる罪を犯したからである。たとえ私があなたを哀れむことがあったとしても、天の神はあなたの命を取り上げると断言するだろう。あなたが神の性質に背いたことはありふれた問題などではなく、非常に重大な本性をはらむ問題だからである。その時が来ても、前もって教えてくれなかったと私を責めてはならない。話は全てここに戻ってくる。あなたがキリスト、すなわち地上の神を普通の人間と見なして関わるならば、つまり、その神は一人の人間にすぎな

いと信じるならば、あなたは滅びる。これが、あなた方全員に対する私の唯一の警告である。

『言葉は肉において現れる』の「地上の神をどのように知るか」より

63. サタンの技能は人間の技能よりも優れており、サタンは人間には不可能な事が可能であるものの、サタンの行為を羨んだり望んだりするかどうか、またサタンの行動を憎んだり嫌悪したりしているか、またサタンの行動が理解できるかどうか、サタンがどの程度のことを達成するか、サタンが何人の者を騙してサタンを崇拜させたり祭ったりさせることができるか、あなたがサタンをどのように定義するかを問わず、サタンには神の権威と力があると言うことはできない。神は神であり、神はひとりしか存在しないこと、そしてそれ以上に、唯一神にのみ権威があり、万物を支配する力があることを認識する必要がある。人間を欺く能力がサタンにあるから、サタンは神になりすますことができるから、神の業のしるしや奇跡を模倣することができるから、神と似たようなことをしているからといって、あなたは、神が唯一の存在ではない、複数の神が存在する、それらの複数の神の技能は多かったり少なかったりする、行使できる力に差があるなどといった誤解をする。そうした神々の偉大さを、登場する順番や年齢で決めたり、唯一の神以外に神格が存在すると誤解し、神の権威と力は固有のものではないと考えたりする。あなたがこうした考えを持っている場合、神が唯一の存在であることを認めていない場合、神のみに権威があることを信じていない場合、多神主義に固執している場合、わたしはあなたに人間くずである、サタンの化身である、邪惡の権化であると言わざるを得ない。ここでわたしが説明しようとしていることを、あなた方は理解できるだろうか。時間、場所、あなたの背景を問わず、あなたは神と、人間、物事を混同してはならない。神の権威を知ることや、神の権威や神自身の本質に近づくことが、どれほど困難であると感じているか、またあなたの考え方や想像がどの程度サタンの行動や言葉と一致するか、そうした行動や言葉にあなたがどの程度満足しているかを問わず、あなたは愚かであってはならず、それらの概念に惑わされてはならず、神の地位と存在を否定してはならず、心の中の神を排除して、神の代わりにサタンを受け容れて、サタンを崇拜してはならない。そのようなことをした場合、どのような結末が待っているかは、あなた方に想像できることであると、わたしは確信している。

『言葉は肉において現れる』の「唯一無二の神自身 1」より

64. 神を崇め、震えるほど神を恐れる心がない者は、容易に神の行政に背いてしまうだろう。多くの人が感情に基づいて神に仕え、神の行政をも知らず、ましてや神の言

葉の深い意味など分からずにいる。そして良いことをしているつもりが、神の計画を妨げているようなことがしばしばある。深刻な妨げをする者は見捨てられ、もはや神に従う機会は与えられない——彼らは地獄に投げ込まれ、神の家とは何の関係もなくなる。そうした人は、神の家で無知な善意をもって働き、結果、神の怒りを引き起こしてしまう。人々は、役人や主君に仕えるやり方を神の家に持ち込み、そういうやり方がここで通用すると、無益に思い込んでいる。彼らには、神は羊ではなく、獅子の性質を持っているとは、思いもつかない。そのため、初めて神と関わった者は、神と交わることができない。神の心は人間のそれとは異なっているのだから。多くの真理を理解して初めて、いつでも神を知っていただけるようになる。この認識は文字や教義ではなく、神の心を知る宝、神があなたを喜んでいる証となるものである。真の認識を欠き、真理を自らのものとしていないのなら、あなたの感情に基づいた奉仕は神に嫌われ、憎まれるだけである。

『言葉は肉において現れる』の「三つの訓戒」より

65. 神を信じる者はみな、これまでたどってきた道のどこかで神に逆らい、神を欺いたことがある。過ちの中には、不正として記録する必要のないものもあるが、赦されないものもある。その多くは行政に背くものであり、神の性質に逆らうものだからである。自分の運命を心配する多くの人々は、それはどういう行いかと尋ねるだろう。あなたがたは、自分が本来、傲慢で尊大であり、事実を受け入れることを望んでいないということを知らなければならない。だから、まずあなたがたが自らを省みた後、少しずつ教えていこう。行政の内容をよく理解し、神の性質を知るようにしなさい。そうでなければ、唇を閉じていることができず、いつまでも偉そうなことをまくしたてるだろうから。無意識の中に神の性質に逆らい、闇に落ち、聖霊と光とを失うことになる。あなたがたは、行いにおいて無原則だからだ。してはいけないことをし、言うてはいけないことを言うなら、相応の罰を受けることになる。あなたは言葉と行いにおいて無原則であっても、神はそのいずれにおいても、まことに原則がある。あなたが罰を受けるのは、人にではなく、神に背いたからだ。もし、あなたの人生で神の性質に背くようなことを幾度もしたのであれば、あなたは地獄の子ということになる。人間の目には、真理に沿わないことを少ししただけのことと見えるだろう。しかしながら、神の目からすると、あなたのためには、もう罪を贖う捧げ物が無いのだということは、わかっているだろうか。あなたは行政に何度も背いていながら、悔い改めようとしなかった。そのため、地獄に落とされ、神の懲罰を受けるしかないのだ。

66. 神とその性質、神の中にある物事や神の存在に関して理解したことにより、神に対し、どのように処遇すべきかに関して、あなたがたは何らかの結論を得たであろうか。この質問への回答として、締めくくりに3つの警告をあなたがたに伝える。第1に、神を試してはならない。神について、いかに多くの事柄を理解していたとしても、神の性質に関していかに多くの事柄を知っていたとしても、決して神を試してはならない。第2に、地位をめぐって神と対立してはならない。神から授かった地位がどのようなものであれ、神から授かった務めがどのようなものであれ、神があなたを育み、実行させる本分がどのようなものであれ、あなたが神のために費やしたものと払った犠牲がどれほどであれ、決して地位をめぐって神と対立してはならない。第3に、神と競合してはならない。あなたに対する神の業について理解しているか、それに従うことが出来るか、また神があなたに用意したものが何であるか、神があなたにもたらす物事が何であるかを問わず、決して神と競合してはならない。あなたがこれらの警告に従うことが出来るのであれば、あなたは総じて安全であり、容易に神の怒りを買うことはないであろう。

67. おそらくあなたは、あなたの時に応じて十分に苦しんだだろう。しかし今なお、あなたは何も解かっていない。あなたはいのちにおけるすべてのことについて無知である。あなたは罰せられ裁かれたにもかかわらず、まったく変わらず、あなたの奥底ではまだいのちを獲得していない。あなたの働きを試す時が来ると、あなたは焼き尽くす炎のように激しい試練と、さらに大きな患難を体験するであろう。この炎はあなたの全存在を灰に変えるであろう。いのちを持たない者として、内に一かけらの純粋な金も持たない者として、いまだに古い墮落した性質から抜け出せない者として、また、脇役としてでさえ良い仕事ができない者として、どうしてあなたが取り除かれないことがあるうか。一文の価値もなく、いのちを持たない者のために、征服の業がなんの役に立つのだろうか。その時が来ると、あなたたちの日はノアやソドムの日よりももっと困難になるであろう。その時あなたの祈りは何の役にもたたない。一度救いの業が終わってしまえば、あなたはどうやってまた最初から悔い改めることができるというのか。一度すべての救いの業が完了すれば、さらなる救いの業はない。次に来るのは、悪を罰する業の開始である。あなたは抵抗し、逆らい、自分で悪だと分かっていることをしている。あなたは、厳しい罰の対象ではないのか。わたしは、あなたのためにこのことを今日、一

字一句説明しているのだ。あなたがわたしの言うことを聞こうとしないなら、後に患難があなたの上に臨む時にやっと後悔し始め、信じ始めたところで、それはもう遅過ぎるであろう。わたしは今日、あなたに悔い改める機会を与えているが、あなたは悔い改めようとはしない。あなたは、あとどれほど長く待ちたいというのか。刑罰の日までか。わたしは今日、あなたの過去の背きの罪を憶えてはいない。わたしは、あなたを幾度も幾度も赦す。あなたの消極的な面から目をそらし、あなたの積極的な面だけに目を留めて。何故なら、わたしの現在の言葉と業のすべては、あなたを救うためであり、わたしはあなたに対して何の悪意も持っていないからだ。それでもあなたはいのちに入ることが拒む。あなたは善悪を区別することができず、親切の価値に感謝することも知らない。このような人には、ただあの懲罰と義なる報復を待つことしかないのではないか。

『言葉は肉において現れる』の「征服の働きの内なる真実（１）」より

68. 人々は、わたしの到来を喜ばず、わたしの栄光の日々を尊びもしない。彼らは、わたしの刑罰を喜んで受け入れることはなく、ましてやわたしの栄光をわたしに復せようなどとはせず、悪魔の毒を進んで投げ捨てようとすることもない。人々は常にわたしをだまし、いつでも明るい微笑と幸せそうな顔を装う。彼らはわたしの栄光が去った後に直面する暗闇の深さに気づかず、とりわけ、わたしの日が人類全体にやってくる時、彼らの日々はノアの時代の人々のそれよりもなお一層厳しいことに気づいていない。なぜなら、彼らはわたしの栄光がイスラエルを去ったときの暗さがどれほどだったかを知らない。人は夜明けが訪れると、夜の真っ暗闇を通り抜けることがいかに厳しいかを忘れる。太陽が再び隠れ、夜の暗闇が人の上にのしかかるとき、彼は暗闇の中で再び、悲嘆にくれ歯ぎしりする。わたしの栄光がイスラエルから別れた時、イスラエルの人たちがその困難の中でどれほど苦しんだかを、あなた方は忘れたのか。今や、あなた方がわたしの栄光を見る日であり、あなた方がわたしと共に栄光の日を過ごしている時でもある。わたしの栄光がこの汚れた土地を去るとき、人は暗闇の中で嘆き悲しむだろう。今はわたしがわたしの働きを行っている栄光の日である。そして、わたしが人類を苦しみから免除している日でもある――わたしは人類と共に苦しく苛酷な日を通り抜けることがないからだ。わたしはただ、人類の完全な征服と、人類の邪悪なるものを根こそぎ打ち破ることを望む。

『言葉は肉において現れる』の「本物の人とは何を意味するか」より

69. 人々は、些かといえどもわたしの存在を信じず、わたしの到来を歓迎もしない。人類はただ渋々とわたしの要求に応え、一時的にそれらの要求に合意する。彼らは人

生の喜びや悲しみを心からわたしと共有したりしない。人々はわたしを不可解な存在と見るので、渋々わたしに微笑むふりをし、権力に擦り寄る姿をうっかり見せてしまう。これは、人々がわたしの働きについて、ましてや今日のわたしの意図について何の知識も持ち合わせないからである。わたしはあなた方すべてに正直に言う。その日が来ると、わたしを崇めるすべての人の苦しみは、あなた方の苦しみほどではないだろう。あなた方の信仰は実際、ヨブのそれを超えていない——ユダヤのパリサイ人の信仰ですら、あなた方の信仰を上回る——したがって、差し迫る、火で焼かれる日にあなた方は、イエスに非難される時にはパリサイ人達よりも多くの苦しみを受け、モーセに抵抗した250人のリーダーよりも多くの苦しみを受け、滅びのときに焼けるような炎の下に置かれたソドムよりも重い苦しみを受けるだろう。

『言葉は肉において現れる』の「本物の人とは何を意味するか」より

70. わたしがあなたがたに背を向ける日はあなたがたが死ぬ日であり、暗闇があなたがたを襲う日であり、あなたがたが光に見捨てられる日である。一言言わせてもらう。わたしはあなたがたのような獣以下の集団には決して慈悲深くはならない。わたしの言葉や行動には限度があり、あなたがたの現在の人間性や良心に対しては、わたしはもはやなんの働きもしない。なぜなら、あなたがたはあまりにも良心に欠け、わたしにあまりにも多くの苦しみを与え、あなたがたの卑劣なふるまいはあまりにもわたしに嫌悪感を起こさせるからである。こんなにも人間性や良心に欠けている人々に救いの機会は決して訪れない。わたしはそのような冷酷で、感謝の念を持たない人々は決して救わない。わたしの日が来たら、わたしは燃える炎を、かつてわたしを強烈に激怒させた不従順な者たちの上に永遠に雨あられとふりかけ、かつてわたしに悪口雑言を投げつけ、わたしを見捨てたあの獣たちに永続的懲罰を課し、かつてわたしと共に食べ、暮らしたがわたしを信じず、わたしを侮辱し、裏切った不従順な息子たちを怒りの火でいつまでも焼く。わたしは我が怒りを引き起こしたすべての人々に懲罰を与え、その怒りのすべてを、かつてわたしと対等の地位に立とうと望んだにもかかわらず、わたしを礼拝せず、従わなかった獣どもに雨あられと降り注ぐ。わたしが人を打つ鞭は、かつてわたしの顧みや、わたしが話した奥義を楽しみ、わたしから物質的楽しみを引き出そうとしたあの獣たちを攻撃する。わたしはわたしの地位を取ろうとする者は誰も許さない。わたしから食べものや衣服を奪おうとする者は誰も容赦しない。今のところ、あなたがたは損害を免れており、相変わらず背伸びしてわたしに無理な要求をしようとしている。怒りの日が来たら、あなたがたはわたしにこれ以上要求はしないだろう。その時、わたしはあ

なたがたを心ゆくまで「楽しませ」、あなたがたの顔を地中に押し込む。そうすれば二度と起き上がることができない。遅かれ早かれ、わたしはこの負債をあなたがたに「返す」——そしてあなたがたが辛抱強くこの日の来るのを待つことを望む。

『言葉は肉において現れる』の「性質が変わらないままなのは、神に敵対していることである」より

71. 秋には、落ち葉は土に還り、あなたは「父」の家に帰り、わたしは父の傍らに戻る。わたしは父の優しい愛と共にあり、あなたは父に踏みにじられる。わたしは父の栄光を手にし、あなたは父の辱めを受ける。わたしはあなたに向けるのをずっと控えてきた刑罰を用い、あなたは既に何万年も腐敗し続けている悪臭を放つ肉体をもってわたしの刑罰を受け止める。わたしはあなたの内において忍耐を伴ったわたしの言葉の働きを終え、あなたはわたしの言葉により苦悩の災いを受ける役割を果たし始める。わたしはイスラエルにおいて大いに喜び、働くが、あなたは悲嘆にくれて歯噛みをし、泥の中に生きて死ぬ。わたしは元の姿を取り始め、もはやあなたと共に汚れの中に留まることはないが、あなたは元の醜い姿のままであり、糞の山の中でうごめき続ける。わたしの働きと言葉が完了する時、わたしには喜びの日が訪れる。あなたの抵抗と反抗が終わる時、あなたには悲嘆の日が訪れる。わたしはあなたに同情することはなく、あなたがわたしを見ることは二度とないであろう。わたしはもはやあなたと言葉を交わすことはなく、あなたはもはやわたしに出会うことはないであろう。わたしはあなたの反抗を憎み、あなたはわたしの愛を懐かしむであろう。わたしはあなたを打ち、あなたはわたしを懐かしむであろう。わたしは喜んであなたから離れ、あなたはわたしに対する負い目に気付くであろう。わたしはあなたに二度と会うことはないが、あなたは常にわたしを待ち望むであろう。あなたが今わたしに抵抗するので、わたしはあなたを憎むであろうが、わたしが今あなたに刑罰を与えるので、あなたはわたしを懐かしむであろう。わたしはあなたと共に生きるのに気が進まないが、あなたはわたしにしたすべての事を悔やむので、わたしがあなたと共に生きるのを激しく切望し、永遠に悲嘆にくれるであろう。あなたは自分の抵抗と反抗を後悔し、後悔のあまりその顔を地に伏せ、わたしの前に身を投げ出して、これ以上わたしに逆らわないと誓うであろう。しかし、あなたは心の内でわたしを愛するだけで、わたしの声を二度と聞くことはできない。なぜなら、わたしはあなたを辱めるからである。

『言葉は肉において現れる』の「落ち葉が土に還る時、あなたは行ったあらゆる悪事を後悔するであろう」より



# XIII 人間の結末を決める神の基準、および各種の人間の最後 についての言葉

1. 今こそ、わたしは一人一人のために終わりを決めるときであり、人に働きかける段階ではない。わたしの手帳にひとりひとりの言葉や行動、わたしに従った道、本来の属性や最後の行いなどを書き留める。こうすることで、どのような人であってもわたしの手から逃れることはなく、あらゆる人たちはわたしが定めるように同類の人たちと共にいることになるだろう。わたしは、一人一人の終着点を、年齢や年功序列、苦しみの量、とりわけ憐れみを誘う度合いではなく、彼らが真理を持っているかどうかに基づいて決める。これ以外の選択肢はない。神の心に従わない人たちはすべて懲罰されることをあなたがたは悟らなければならない。これは不変の事実である。よって、懲罰される者たちすべては神の義ゆえに懲罰されるのであって、彼らの数々の邪悪な行為への報いである。

『言葉は肉において現れる』の「終着点のために、善行を十分積まなければならない」より

2. わたしは地上において、わたしの追従者となるように多くの人々を求めてきた。これら追従者の中には、祭司として仕える人々、先導する人々、子となる人々、民を形成する人々、奉仕をする人々がいる。彼らがわたしに見せる忠実により、わたしは彼らをこれら異なる種類に分ける。すべての人々がそれぞれの種類に従って分類されたとき、つまり人間の各種類の本性が明らかにされたとき、人類の救いというわたしの目的を実現できるように、わたしは人間一人ひとりをそのしかるべき種類の数の中に入れ、各種類をその相応しい場所に置く。さらに、わたしの家に戻るべく救うことを欲する人々の集団を呼び、これらの人々すべてが終わりの日のわたしの働きを受け入れることを許す。同時に、わたしは人間を種類に従って分類し、一人ひとりをその行いに基づいて報いるか罰する。これがわたしの働きを成す歩みである。

『言葉は肉において現れる』の「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」より

3. 人類が安息の中に入る前に、各々の種類の人々が罰せられるか、それとも報われるかどうかは、彼らが真理を求めるかどうか、神を知っているかどうか、目に見える神に従うことができるかどうかによって決まる。目に見える神に奉仕してきたが神を知らない人や従わない人はみな真理のない人である。このような人たちは悪を行う人であり、悪を行う人は間違いなく罰を受ける対象である。しかも彼らは、彼らの悪行に応じて罰せられる。神は人による信仰の対象であり、また人が従うに値する存在である。だが

、漠然とした目に見えない神だけを信じる人たちはみな神を信じない人たちである。その上、彼らは神に従うことができない。もしこのような人たちが神の征服の働きが終わるときに、依然として、目に見える神を信じることができず、しかも目に見える肉の神に従わず、逆らい続けるなら、このような「漠然派」は疑いなく滅ぼされる。それは、あなたがたのうちにも見られる。つまり、あなたがたのうち、口先では肉となった神を認めるが肉となった神に従うという真理を行うことができない人は誰でも、最後には排除され、滅ぼされる。また、口先では目に見える神を認め、しかも目に見える神が表現した真理を食べ飲みするが、漠然とした見えない神を追い求める人はなおさら将来滅ぼされる。このような人々の誰も、神の働きが終わった後の安息の時まで生き残ることができない。このような人はだれも安息の時まで生き残ることができない。悪魔の類の人はみな真理を実行しない人である。彼らの本質は神に逆らい、不従順なものであって、彼らは神に従う意図が少しもない。この様な人々はみな滅ぼされる。あなたが真理をもっているかどうか、神に逆らっているかどうかは、あなたの本質によって決まるのであり、あなたの外貌あるいは時折の言行によって決まるのではない。人が滅ぼされるかどうかは、その人の本質によって決まる。すなわち、彼らが事を行い、真理を追い求める過程で外に現れる本質によって決まるのである。同様に働きをし、しかも同じ程度の量の働きをする人々のうち人間性の本質が善であり真理を持っている人々が生き残る人々であり、人間性の本質が悪であり、目に見える神に背く者は、滅ぼされる人々である。人類の終着点に向けられた神の働き及び言葉の何もかもが、人類を、各人の本質に従って適切に取り扱う。そこには何の偶然も無ければ、無論僅かな誤りもない。人が働きを遂行するときのみ、人の情感あるいは意味が入り込むのである。神が行う働きは最適である。神はいかなる被造物についても事実を歪曲して罪に陥れることは決してない。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

4. 人間が救われるかどうかは、その人間がどの程度条件を満たしているか、どの程度の期間にわたり働きを行ってきたかによって左右されず、ましてやその人間がいくつ資格を保有しているかによって左右されない。それは、あなたの追求のなかで、何らかの効果があったかにより決められる。あなたは、救われた者が実を結ぶ木であり、青々と葉を茂らせたり豊かな花を咲かせたりはするが、実を結ばない木では無いことを知るべきである。あなたが何年も街を徘徊したとしても、だからと言ってそれに何の意味があるというのだろうか。あなたの証は、どこにあるだろうか。神に対するあなたの敬愛は、あなた自身や、あなたの欲望に対する愛に劣る。そうした者は、退化した者ではな

かろうか。あなたは、どうして救いの規範となることが出来ようか。あなたの本性は変えられず、あなたは反逆的過ぎて、救われることが出来ない。そうした人間は排除されるのではなかろうか。わたしの業が完了する時は、あなたの終わりの日が訪れる時ではなかろうか。

『言葉は肉において現れる』の「実践（7）」より

5. 人が人を判断する基準は人の振る舞いである。行いが善い者は義なる人であり、行いが悪い者は邪悪な者である。神が人を判断する基準は、その本質が神に従順であるかどうかである。つまり、その人の振る舞いが良いか悪いか、語る言葉が正しいかそうでないかに関わらず、神に従順な者は義であり、不従順な者は敵であり、悪者である。一部の人は善い行いによって未来のよい終着点を獲得しようと思い、一部の人はよい言葉によって未来のよい終着点を手に入れたと考え。人々はみな、神が人の行い、或いは人の言葉によって人の結末を定めると間違った信じ方をし、ゆえに多くの人は偽ってこれらを用いて恵みを獲得しようとする。後に安息の中で生き残る人々はみな苦難の日を経験し、しかも神のために証しをしてきた人である。彼らはみな自分の本分を果たしてきた人であり、神に従おうとする人である。仕える機会を利用して真理の実践を免れようと思う人たちはみな、生き残ることができないだろう。神がすべての人の結末を定めるのは、適切な基準に基づいている。神は人の言行だけに基づいてそれを決定するのではなく、ひとつの期間の行いに基づいて決定するのでもない。神は人がかつて神に仕えたからといって、そのすべての悪行に対して寛大に対処することは決してなく、また、人が神のために一時費やしたからといって彼の死を免除することもない。だれ一人として自分の悪の報いから逃れられず、また、だれ一人として自分の悪行を隠して滅びの苦しみから逃れることもできない。もし人が本当に自分の本分を果たすことができるのであれば、祝福を受けるにしろ不運に苦しむにしろ、その人が神に永遠に忠実であり、報いを求めないという意味である。祝福が見えれば神に忠実であり、祝福が見えない時は忠実ではなくなり、結局神のために証しをすることができず、尽くすべきように本分を尽くすこともできないこのような人たちは、かつては神に忠実に仕えた人であっても、やはり滅ぼされる。要するに、邪悪な者は永遠に生きることはできず、安息の中に入ることもできない。義なる人のみが安息の主人である。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

6. 死んだ人の魂であれ、肉としてまだ生きている人であれ、すべての悪を働く者、すべての救われなかった者は、人類の中の聖なるものたちが安息の中に入る時、滅ぼさ

れる。これらの、悪を働く魂と悪を働く人々、或いは義人の魂と義を行う人々が、どんな時代に属していたとしても、悪を行う者はみな滅ぼされ、義なる人はみな生き残る。人あるいは魂が救いを受けるかどうかは、終わりの時代の働きによってのみ決まるのではなく、むしろ、彼らが神に逆らってきたかどうかあるいは神に背いてきたかどうかによって確定されるのである。もし前の時代の人が悪を働き、救われなかったなら、彼らは間違いなく罰を受ける対象になる。もし今の時代の人が悪を働き、救われないなら、彼らもまた、確実に罰の対象になる。人々は、善と悪にもとづいて分離されるのであって、時代にもとづいて分離されるのではない。ひとたび、善と悪によって分離されたら、人々は直ちに罰を受けたり報いを与えられたりするのではない。むしろ神は、終わりの日における征服の働きを遂行した後はじめて、悪を行う者を罰し、善を行う者に報いる働きを行う。実は、神が人類に対して働きをはじめた時からずっと、神は人類を分けるために善と悪を用いている。神は自身の働きを終えて初めて、義なる人を報い、悪である者を罰するのである。最後に働きを終えて悪者と義人を分けて、それからすぐ悪を罰し、善に報いる働きに着手するのではない。悪を罰し、善に報いるという神の最終的な働きは、全て全人類を完全に清めるために行われる。そうすることによって、完全に清くなった人類を永遠の安息に導き入れることができる。神のこの段階の働きは最も重要な働きであり、神の経営の働き全体の最後の段階である。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

7. 神を冒涇したり、否定したり、中傷さえしたりする人々、つまり、意図的に攻撃したり、中傷したり、呪ったりした人々に対する神の処遇について、神は見ないふりをしたり、聞こえないふりをしたりすることはない。神には、そうした物事に対する明確な姿勢がある。神はこうした人々を嫌悪し、心で糾弾する。神はこうした人々に対して、神を冒涇した者に対する明瞭な姿勢があること、神はどのようにしてそうした人々の結末を決定するかをその人々が理解するよう、こうした人々の結末を率直に宣言している。しかし、神がその言葉を述べているにもかかわらず、神がこうした人々をどのように処分するかに関する事実を殆ど理解できず、神による結末や審判の背景となる原則を理解できずにいる。すなわち、人類は、こうした人々の処遇について、神の具体的な姿勢と方法を理解できずにいる。この問題は、神が業を行う際の原則が関与している。神は事実を出現させ、一部の人々の邪悪な行いに対処する。つまり、神はこうした人々の罪を宣告することも処遇を決定することなく、神は直接的に事実を出現させることにより、こうした人々が処罰され、相応の報いを受けるようにする。こうした事実が出現

した時、その罰を受ける物は、すべて人間の目に見える人々の身体である。一部の人々の邪悪な行動を処分する際には、神は言葉により呪うが、それと同時に神の怒りがその人々におよぶ。こうした人々が受ける罰は人々の目に見えないものである場合もあるが、この種の結末は、罰せられたり殺されたりといった目に見えるもの以上に深刻な場合がある。こうした人々を救わない、こうした人々に対して更なる慈悲や寛容をもって対処しない、それ以上の機会を与えないと神が判断した場合、こうした人々の神に対する態度は、こうした人々を無視する態度である。「無視」とは、どういう意味であろうか。この言葉は、何かを脇によけ、意識しなくなることを意味する。ここで、神が「無視」すると言う場合、2通りの解釈ができる。1つ目は、神がその者の命、その者の全てをサタンに与えて扱わせるようにした、という解釈である。神はその者の命などを担わなくなり、その管理を辞める、ということである。その者が狂気であっても、愚かであっても、あるいは生きていても死んでいても、あるいは地獄に落とされて罰を受けていても、それは神に関係ないものとなる。つまり、その被造物は創造主と何ら関係が無くなるということの意味する。2つ目は、神がその者に対して、神自らの手で何かをしようと決断した、という解釈である。神が、そうした者の奉仕や、そうした者自身を、補助的に活用する可能性もある。そうした者に対し、パウロに対して対処したように、神が特殊な方法で対処する可能性もある。以上が、そうした者に対し神の心が判断を下す際の原則と姿勢である。したがって、人々が神を拒否し、中傷し、冒瀆した場合、あるいは神の怒りを買ひ、あるいは神の赦しの範疇を超えた場合、その結末は想像を絶する。神がそうした者たちの命などのすべてを、それ以降永遠にサタンに委ねるというのが、最も重篤な結末である。こうした者たちは、永遠に赦されることが無い。これは、そうした者達がサタンの餌食となり、玩具となり、それ以降、神はそうした者達との関係を一切絶つ。

『言葉は肉において現れる』の「神の働き、神の性質、そして神自身 3」より

8. 追い求める人々と追い求めない人々は今や、2つの異なるタイプの人々であり、彼らは2つの異なる終着点をもつ2つのタイプの人々である。真理に関する認識を追求し、真理を実行する人々は神に救われる者である。真の道を知らない人々は、悪魔であり敵である。彼らは天使長の後裔であり、滅ぼされる。漠然とした神を信じる敬虔な信徒であっても、悪魔ではないだろうか。良心があるが真の道を受け入れられないような人々は悪魔である。彼らの本質は神に逆らうものである。真の道を受け入れられないような人々は、神に逆らう者である。このような人はたくさんの苦しみに耐えていたとしても、は

やはり滅ぼされる。この世を捨てたがらず、父母を離れることに耐えられず、肉の喜びを捨てられないような人々はみな神に従順ではなく、みな滅ぼされる。肉となった神を信じない人はみな悪魔であり、彼らが滅ぼされるのはなおさらである。信じるが真理を行わない人々、肉となった神を信じない人々、神の存在を全く信じない人々はみな、滅ぼされる。生き残ることができる人はみな、精錬の苦しみを受けても強く立って耐え抜いた人である。これは、本当に試練を経た人である。神を認めない人はみな敵である。すなわち、受肉した神を認めない者はだれでも、この流れの中にあってもなくても、みな反キリストである。神を信じない反抗者でないならば、サタンや悪魔、神の敵となることなどないはずだ。彼らは神に背く者ではないのか。口先だけで信じると言うが真理を持っていない人たちではないのか。祝福を受けることだけは追い求めるが、神のために証しをすることができない人たちではないだろうか。今日あなたはまだこのような悪魔と親しく交わり、良心や愛を悪魔と強調することもできる。これはサタンに親切心を示しているのではないだろうか。それは、悪魔に同調すると考えられないだろうか。もし人々が今日まだ、善悪を区別することができないなら、そして神の旨をどんな形でも求めることを望まず、愛や憐れみを、盲目的に強調するなら、さらに神の心を自身のものとして持つことが全くできないなら、そのような人の結末はもっと悲惨だろう。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

9. 人が祝福を受けるか、それとも災いを受けるかは、その人の本質によって決まるのであって、その人がほかの人と共有する本質によって決まるのではない。神の国にはそのような言い習わしも規則もない。人が最後に生き残ることができるのは、その人が神の要求を満たしたからである。そして、人が最終的に安息の時を生き残ることができないのは、その人自身が神に背き、神の要求を満足させていないからである。どの人にもふさわしい終着点がある。この終着点は各人の本質によって決まるのであり、ほかの人とは全く関係がない。子供の悪行が親になすりつけられることはなく、子供の義も親と共有することはできない。親の悪行は子供になすりつけられることはなく、親の義も子供と共有することはできない。誰もが自分の罪を担い、誰もが自分の幸運を享受する。だれもほかの人の代わりをすることができない。これが義である。人間の考えは、親が幸運を手に入れれば子供も幸運を得ることができ、子供が悪を行えば親がその罪を償わなければならないというものである。これは人の見方であり、やり方である。神の見方ではない。どの人の結末もその人の行動からくる本質によって定められるのであり、それは常に適切に定められるのである。誰も他人の罪を担うことができず、他人の代わ

りに罰を受けることはなおさらできない。これは絶対的なことである。親は子供をかわいがるが、それは親が子供の代わりに義を行うことができるということではなく、また、子供が親に孝行しても、親の代わりに義を行うことができるということではない。これは「ふたりの者が畑にいと、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう。ふたりの女がうすをひいていると、ひとりを取り去られ、ひとりに残されるであろう」という言葉の背後にある真の意味である。子供をとて愛するがゆえに、悪を行う子供を安息の中に連れていくことができる者は一人もおらず、自ら義を行うがゆえに自分の妻（或いは夫）を安息の中に連れていくことができる者も一人もいない。これは神の行政上の規則であり、一人として例外はいない。義を行う者はつまるところ義を行う者であり、悪を行う者はつまるところ悪を行う者である。義を行う者は生き残ることができる、悪を行う者は滅される。聖なる者は聖なる者である。彼らは汚れた者ではない。汚れた者は汚れた者であって、聖なる要素が少しもない。悪を行う人の子供が義を行っても、義人の親が悪を行っても、邪悪な者はすべて滅ぼされ、義人はすべて生き残る。信仰深い夫と不信仰な妻はもともと関係がなく、信仰深い子供と不信仰な親はもともと関係がない。彼らは相容れない二種類の人である。安息の中に入る前に人には肉親があるが、ひとたび安息の中に入ると、もはや語るべき肉親はなくなる。本分を尽くす者と、本分を尽くさない者は敵であり、神を愛する者と、神を憎む者は敵対する。安息の中に入る者と、滅ぼされた者は相容れることのできない二種類の被造物である。本分を尽くす被造物は生き残ることができる、本分を尽くさない被造物は滅ぼされる。さらに、これは永遠に続く。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

10. 裁きとは何か、真理とは何かをいま理解しているか。もししているならば、裁かれることに従順に従うよう強く勧める。さもなければ、神に称賛され、神の国に連れて行かれる機会を得ることは決してないであろう。裁きを受け入れるだけで清められることのできない人、つまり裁きの働きの只中において逃げる人は、永遠に神に嫌われ拒絶される。彼らの罪は、パリサイ人の罪よりもさらに多く、深刻である。彼らは神を裏切り、神の反逆者だからである。奉仕することさえ相応しくないそのような人は、さらに過酷で、加えていつまでも終わることのない懲罰を受ける。言葉では一度は忠誠を誓いながらその後、神を裏切った反逆者を神は容赦することはない。このような人は霊、魂、体の懲罰を通して報復を受けることになる。これこそ、神の義なる性質の明示ではないのか。これが人を裁き、明らかにする神の目的ではないのか。神は裁きのあいだに

あらゆる邪悪な行いをする人々すべてを悪霊がはびこる場所に引き渡し、それらの悪霊に彼らの肉体を好きなように破壊させる。そして彼らの肉体は死臭を放つ。これは彼らにふさわしい報復である。神は、それら不忠実な偽信者、偽使徒、偽勤労者の罪を一つひとつその記録書に書き留める。そして、その時が来ると、神は彼らを不浄な霊の真中に投げ入れ、不浄な霊が彼らの全身を思うままに汚すようにし、そのため彼らは決して生まれ変わることはなく、二度と光を見ることはない。一時期は神に仕えるが最後まで忠実であり続けることのできない偽善者は、神が邪悪なものに含めて数え、そのため彼らは悪人の言いなりとなり、烏合の衆の一部となる。最後には神は彼らを滅ぼす。キリストに忠実であったことがない人、自らの強みをもって何らの貢献をしたことのない人を神は脇へやり、省みることはなく、時代が変わるときに彼らをすべて滅ぼす。彼らはもはや地上には存在せず、神の国へ入ることなどなおさらありえない。神に誠実であったことはないが、状況のせいで強制的に神を表面的に取り扱うことになった人は、神の民のために奉仕する人に含めて数えられる。これらの人々のうちほんの一部だけが生き残るが、大半は奉仕をする資格さえない人々とともに滅ぶ。最後に、神と同じ考えをもつ人すべて、神の民と子ら、そして神に祭司となるよう予め定められた人々を、神は神の国に連れて行く。彼らは神の働きの精粹となる。神が制定した範疇のどれにも当てはめることのできない人は、非信者に含めて数えられる。彼らの結末がどうなるか、あなたがたは確実に想像できることであろう。わたしは既に言うべきことをすべてあなたがたに語った。あなたがたが選ぶ道は、あなたがただけの選択である。あなたがたが理解すべきことはこれである。神の働きは神と足並みをそろえることのできない人を誰も待たず、神の義なる性質はどんな人にも憐れみを示さない。

『言葉は肉において現れる』の「キリストは真理を以てもって裁きの働きを行う」より



## XIV 神の国の美しさと人類の終着点に関する預言、および神の約束と祝福についての言葉

1. わたしの言葉が完成するにつれて、わたしの国は徐々に地に形を現し、人間は次第に正常に戻り、そうして、地上にわたしの心の国が築かれる。その国では、神の民全員が正常な人間の生活を取り戻す。凍える冬は去り、春の訪れた町々の世界となり、一年中春が続く。もはや人々は暗く惨めな人間世界に臨まない。もはや人間世界の凍える寒さを耐えることがない。人々は互いに戦うことなく、国々は互いに戦争を仕掛けることがない。もはや大虐殺が行われて血が流されることはない。地はすべて幸福に満たされ、どこも人と人とのぬくもりが満ちる。わたしは世界を動き回り、玉座の上から楽しむ。わたしは星々の間で暮らす。そして、天使たちがわたしに新しい歌や踊りをささげる。天使たちは、もはや自身のもろさに涙がほほを伝うことはない。もはや天使がわたしの前ですすり泣くのを聞くことがない。そして、もはや誰も苦難をわたしに訴えることがない。今日、あなたがたはわたしの前で生きている。明日、あなたがたはみな、わたしの国で暮らすようになる。これは、わたしが人間に与える最大の祝福ではないか。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第二十章」より

2. 稲光の中、すべての動物は真の姿を明らかにする。そして、わたしの光に照らされて、人間もまた、かつての聖さを取り戻した。ああ、過去の墮落した世界がついに汚い水の中へと崩れ去り、水面の下に沈み、溶けて泥となった。ああ、わたしの創った全人類が、ついに再び光の中でよみがえり、存在のための基礎を見出し、泥の中でもがくことをやめた。ああ、わたしの手の中のもろもろの被造物よ。それらがどうしてわたしの言葉によって新たにならないことがあるのか。どうして、光の中でその機能を果たさないことがあるのか。地はもはや、動きがなく沈黙してはいない。天はもはや荒涼として悲しいところではない。天と地とは、もはや虚無で隔てられてはおらず、ひとつになって、決して再び裂かれることがない。この喜ばしい時、この歓喜の瞬間、わたしの義と聖とが宇宙全域に広まり、すべての人間が終わりなくほめたたえる。天の町々は喜びに笑い、地上の王国は喜びに舞い踊る。この時に、誰が喜ばずにいようか。そして、この時、誰が泣かずにいるのか。地は、そのはじめは天のものであった。そして、天は地とは、ひとつであった。人間は天と地とを結ぶ絆であり、その聖さのおかげで、その再生のおかげで、天はもはや地から隠されてはいない。そして、地はもはや天に対して沈黙してはいない。人類の顔は安堵の笑顔に飾られ、心には限りない甘美さが満ちる。人間

は互いに言い争うことがなく、また、殴り合うこともない。わたしの光の中で他の人々と平和的に生きない者がいるだろうか。わたしの日にわたしの名を汚す者が誰かいるだろうか。人間はみな畏敬のまなざしをわたしに向け、その心が沈黙のうちにわたしに叫んでいる。わたしは人間のあらゆる行いを探った。清められた者の中に、わたしに逆らうものは誰もいない。わたしを裁く者もいない。人間はみな、わたしの性質に満たされている。誰もがわたしを知るようになり、わたしに近づき、わたしを愛する。わたしは人間の霊の中に確固として立ち、人間の目に最も高い頂きに上げられ、その血管を血として流れる。人間の心の喜びにあふれる高揚が地のいたるところを満たし、空気は爽やかに澄み、濃い霧が地面を包むことは、もはやない。そして、太陽がまばゆく輝く。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十八章」より

3. わたしの知恵は地上のあらゆるところにあり、全宇宙にあまねく。あらゆるものの只中にわたしの知恵の果実がみのり、すべての人々の只中にわたしの知恵の傑作が満ち満ちる。何もかもわたしの国にあるすべてのもののようである。すべての人々はわたしの天の下、わたしの牧場の羊のように安心して暮らす。わたしはすべての人々の上を動き、至る所を見ている。何一つ古びて見えるものがなく、誰一人かつてと同じ人はいない。わたしは玉座に座し、全宇宙にわたり横たわり、満ち足りている。すべてのものが聖さを取り戻し、わたしは再びシオンで安らかに暮らすことができるからだ。そして、地上の人々はわたしの導きの下、穏やかで満ち足りた生活ができる。諸国民は、わたしの手の中であらゆることを管理している。諸国民はかつての知性と本来の姿を取り戻した。彼らはもはや塵におおわれてはいない。わたしの国では、人々は翡翠のように純粹で、人の心の中の聖い者のような顔をもつ。わたしの国が人々の間に打ち立てられたからである。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十六章」より

4. わたしの光の中で人々は再び光を見る。わたしの言葉の中で人々は喜びとなる物を見つける。わたしは東方から来て、東方から出ずる。わたしの栄光が輝くとき、すべての国々が照らされ、すべてが明らかにされ、闇の中には何も残らない。神の国では、神と共にある神の人々の生活は比類なく幸せである。人々の祝福された生活に海は踊り、人々と共に山々はわたしの豊かさを楽しむ。人々は誰もが努力し、懸命に働き、わたしの国で忠誠を示す。神の国にもはや反乱はなく、抵抗もない。天と地はお互いをよりどころとし、人とわたしは生の至福を通して、お互いを頼りとしながら親しく深く感じる…。この時、わたしは正式に天の生活を始める。サタンの干渉はもはやなく、人々は

安息に入る。全宇宙の至るところで、わたしの選んだ人々はわたしの栄光に住み、比類ない祝福を受け、人々の間に住む人々としてではなく、神と共に住む人々として生きる。誰もがサタンの墮落を経験し、人性の苦しさと甘美を経験した。今、わたしの光の中に住み、喜べない者などいようか。そのような美しい瞬間をただ諦め、見過ごすことなどどうしてできようか。人々よ。今、わたしのために心で歌を歌い、踊れ。あなたがたの誠実な心を引き上げ、わたしに捧げよ。今、わたしのために太鼓を叩き、奏せよ。わたしは全宇宙に喜びを輝かせる。わたしは人々にわたしの栄光の顔を示す。わたしは轟く。わたしは宇宙を超越する。わたしはすでに人々を支配している。わたしは人々により褒めたたえられる。わたしは青い空を漂い、人々はわたしとともに動く。わたしは人々の中を歩き、わたしの人々はわたしを取り囲む。人々の心は喜び、人々の歌は世界を揺るがし、空を砕く。宇宙はもはや霧に閉じ込められず、泥はなく、汚水の集まりはない。宇宙の聖なる人々よ。わたしの監視の下であなたがたの真の顔が明らかにされる。あなたがたは汚れに包まれた人々ではなく、ヒスイのように純粋な聖者であり、すべてわたしの愛する人々であり、すべてわたしの喜びである。すべてのものが生き返る。すべての聖人が天に戻ってわたしに仕え、わたしの暖かい抱擁に入り、もはや涙することなく、もはや憂うことなく、自らをわたしに捧げ、わたしの家に帰り、故郷でわたしを無限に愛する。それは不変である。悲しみはどこか。涙はどこか。肉はどこか。地はもはやなく、天は永遠である。わたしはすべての人々に現れ、すべての人々はわたしを讃える。この生活、この美しさは、はるか昔から、そして永遠に、変わらないであろう。これが神の国の生活である。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「人々よ、歓呼せよ」より

5. 「わたしはすべての人々の上を動き、至る所を見る。何一つ古びることがなく、誰一人、かつてと同じ人はいない。わたしは玉座に座し、全宇宙の上で憩い…」これは神の現在の働きの結果である。神の選民はすべて最初の形に戻り、そのため、長年にわたり苦しんできた天使たちは解放される。神が「人の心の中の聖者のような顔」と言うとおりである。天使たちは地上で働き、地上で神に仕え、神の栄光が世界中に広がるので、天は地上にもたらされ、地上は天に持ち上げられる。したがって、人間は天と地を結ぶ絆である。天と地にはもはや隔たりはなく、もはや分離しておらず、一つのものとしてつながっている。世界の至る所で、神と人間だけが存在する。ほこりも汚れもなく、すべてのものは再び新しくなり、子羊が大空の下で緑の草原に横たわっているように、神のすべての恵みを享受している。そして、この一面の新鮮な緑が現れたことから、

生命の息吹が輝き出る。というのも永遠に人間と共に暮らすために神がこの世に来るからである。神の口から「わたしは再びシオンで安らかに暮らすことができる」と語られたとおりである。これはサタンの敗北の象徴であり、この日は神の安息の日であり、すべての人々によって褒めそやされ、称えられ、すべての人に祝われる。神が玉座で安息している時は、神が地上における働きを終了する時でもあり、まさに神のすべての奥義が人間に示される瞬間である。神と人間は永久に調和し、離れることはないだろう——これらは神の国の美しい光景である。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第十六章」より

6. 神の国がすっかり地上に降りて来ると、すべての人々は最初の姿を取り戻すだろう。したがって、神は次のように言う。「わたしは玉座の上から楽しむ。わたしは星々の間で暮らす。そして、天使たちがわたしに新しい歌や踊りをささげる。天使たちは、もはや自身のもろさに涙がほほを伝うことはない。もはや天使がわたしの前ですすり泣くのを聞くことがない。そして、もはや誰も苦難をわたしに訴えることがない。」これは、神が完全に栄光を得る日は人間が休息を享受する日であることを示している。人々はサタンの妨害にあって右往左往することはもはやなく、世界は前進することをやめ、人々は安楽に暮らす——天空の無数の星は更新され、太陽、月、星など、そして天や地のすべての山と川はみな変化するからである。そして人間が変化し、神が変化するので、すべてのものも変化するだろう。これが神の経営（救いの）計画の最終的目標であり、最後には達成されるものである。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉の奥義の解釈」の「第二十章」より

7. わたしの働きは六千年しか続かない。そしてわたしは、悪しき者による全人類の支配もまた六千年より長くは続かないと約束した。それゆえもうその時は来ている。わたしはこれ以上続けたり遅らせたりはしない。終わりの日に、わたしはサタンを打ち負かし、わたしの栄光をすべて取り戻し、わたしに属する地上のすべての魂を取り戻して、これらの苦悩する魂が苦しみ的大海から逃れられるようにする。これにより地上におけるわたしの働きがすべて完了するのである。これより後、わたしは地上で再び受肉することは決してなく、すべてを支配するわたしの霊が地上で働くことは二度とない。わたしが地上で行うのはただひとつ、わたしは人類を、聖なる人類に造り直す。それは地上におけるわたしの忠実な都である。しかし、わたしは世界全体を滅ぼしたり、人類すべてを滅ぼしたりはしないことを知るべきである。わたしはその人類の残りの三分の一、わたしを愛し、完全にわたしに征服された人類の三分の一を保ち、イスラエル人が律法

の下でそうであったように、この三分の一を、多くの羊と家畜、そして地のすべての豊かさにより育み、繁栄させる。この人類はわたしのもとに永遠にとどまるであろう。ただし、それは現在のどうしようもなく汚れた人類ではなく、わたしに得られたすべての人々の群としての人類である。このような人類はサタンにより破壊され、混乱させられ、包囲攻撃されることはなく、わたしがサタンに勝利した後も地上に存在する唯一の人類となる。それは今日わたしに征服され、わたしの約束を得た人類である。それゆえ、終わりの日に征服された人類は、残され永遠に続くわたしの恵みを受ける人類でもある。これはサタンに対するわたしの勝利の唯一の証拠であり、サタンとの戦いの唯一の戦利品である。これらの戦利品はサタンの支配下からわたしにより救われたのであり、わたしの六千年にわたる経営（救いの）計画の唯一の結晶であり実りである。彼らはあらゆる国家と教派から、また全宇宙のあらゆる場所と国から来る。彼らはさまざまな民族、さまざまな言語、風習、肌の色の者であり、地球のあらゆる国家と教派、そして世界の隅々にまで広がっている。最終的に、彼らは完全な人類、サタンの勢力が及ばない人間の集団を形成するために集まって来る。

『言葉は肉において現れる』の「肉なる者は誰も怒りの日から逃れられない」より

8. 神の国の中の勝利者たちは、彼らの様々な役割と証しに基づいて祭司として、あるいは信者として仕えるであろう。また患難のただ中で勝利した者たちは、みな神の国で祭司の集団となるであろう。祭司の集団は全宇宙における福音の働きが終わった時に形成されるであろう。その時が到来すると、人間がなすべき事は、神の国において自分の本分を尽くし、神と共に神の国で生活することとなるであろう。祭司の集団の中には、祭司長と、祭司がいて、それ以外の者は神の子、神の民となるであろう。これは全て患難の間の神への証しにより決定される。それらは気まぐれで与えられた称号ではない。一旦人間の地位が確立すれば、神の働きは停止する。なぜなら、各人が種類に従って分類され、彼らの本来の地位に戻され、それは神の働きの成果のしるしであり、神の働きと人間の実践の最終結果であり、また神の働きのビジョンと人間の協力との結晶だからである。最後に人間は神の国で安息を得て、神もまた自らの住まいに戻って休息を得るであろう。これが神と人間の六千年におよぶ協力の最終結果である。

『言葉は肉において現れる』の「神の働きと人間の実践」より

9. 安息の中の生活とは、戦いも汚れも、継続する不義もない生活である。言い換えれば、そのような生活には、神に敵対するいかなる勢力の侵入もないだけでなく、サタン（サタンとは敵対する勢力を指す）による妨害もサタンの墮落も存在しない。万物が

おのおのその種類のものに従い、造物主を礼拝する。天上も地上も平穏になる。これが、人類が安息に入った生活である。神が安息の中に入った時、地上にはもうどんな不義も継続せず、もういかなる敵対勢力の侵入もなくなる。人類も新しい領域の中に入る。すなわち、彼らはもはやサタンに墮落させられた人類ではなく、サタンに墮落させられた後救われた人類である。人類の安息の日々は、神にとっての安息の日々でもある。神は人類が安息の中に入ることができないため、安息を失ったのである。つまり、神は本来、安息に入ることができなかったのではない。安息の中に入るとは、あらゆる事物の活動が止まることを意味するのでもなければ、あらゆる事物の発展が止まることを意味しているのでもない。また、神がもう働くことをやめる、あるいは人がもう生活することをやめることを意味しているのでもない。安息に入ったことのしるしは、以下のようなものである——サタンが滅ぼされている、サタンに同調する悪人たちがみな懲罰を受けて一掃されている、そして神に敵対するすべての勢力が存在しない。神が安息の中に入るとは、神がもう人類を救うという働きをしないことを意味している。人類が安息の中に入るとは、全人類がみな神の光の中と神の祝福の下に生きることを意味する。もはやサタンの墮落がなく、不義な事も起こらない。人類はみな地上で正常に生活し、神の加護のもとで生きようになるだろう。神と人が共に安息に入るということは、人類が救われたこと、サタンは滅ぼされたこと、人における 神の働きが全部終わったことを意味する。神はもはや人の中で 働き続けず、人ももうサタンの支配下に生きることがなくなる。それゆえに、神はもう忙しく働かず、人はもう忙しく駆け回らない。神と人は同時に安息の中に入るようになる。神はもとの場所に戻り、人も各人それぞれの場所に帰る。これは神の経営（救い）が終わった後に、神と人それぞれが身を置く目的地である。神には神の目的地があり、人には人の目的地がある。神は安息の中にあっても続けて全人類が地上で生きるのを導く。神の光の中にあって、人は天の唯一の真の神を礼拝する。神はもはや人の間には住まず、人も神と一緒に神の目的地で住むことはできない。神と人は同じ領域の中で生活することができない。むしろ、それぞれ自分の生き方がある。神が全人類を導くのであり、全人類は神の経営の働きの結晶である。導かれるのは人類である。人間は、本質的には、神と異なる。安息することとは、神と人がそれぞれの本来の場所に帰ることを意味する。それゆえ神が安息に入るとき、それは神がもとの場所に復帰することを意味する。神はもう地上で生活しないか、あるいは人の間にあっても、人と苦楽を共にしない。人が安息に入るとは、人が真の被造物になったことを意味する。人は地上から神を礼拝し、正常な人間の生活を送る。人々はもう神に背かず、逆らわない。彼らは原初のアダムとエバの生活に復する。これが、神と人が

安息に入った後の、それぞれの生活と目的地である。サタンが打ち負かされることは、神とサタンとの戦いが必然的に向かう方向である。こうして、神が経営の働きを終えた後に安息に入ることと人が完全に救われ安息に入るとは、同様に不可避免的に向かう方向になる。人の安息の場所は地上にあり、神の安息の場所は天にある。人は安息の中で神を礼拝し、地上で生きる。神は安息の中で残りの人類を導くが、地上から導くのではなくて天から導く。神は依然として霊であり、一方、人は、依然として肉である。神と人にはおのおの異なる安息の仕方がある。神は安息するが、人の間に来て人に現れる。人は安息するが、神に導かれて天を訪ね、天上で人生を楽しむこともある。

『言葉は肉において現れる』の「神と人は共に安息に入る」より

10. 永遠の終着点に入るとき、人は造り主を礼拝する。そして、人は救いを得て、永遠の中に入ったので、人は何の目的も追求しないし、その上、サタンによって包囲される心配もない。この時、人は自分の立場を知り、本分を尽くす。そして、罰されたり裁かれたりしなくとも、人はそれぞれ自分の本分を尽くすだろう。その時、人は身分においても、地位においても被造物となる。高低の差別はもはやない。人はそれぞれの異なる役割を果たすだけである。但し、人は依然として人類の秩序ある適切な終着点の中で生きており、造り主を礼拝するために本分を尽くす。そして、このような人類は永遠の人類となるであろう。その時、人は神に照らされた生活、神の配慮と守りの下にある生活、そして神と共に生きる生活を獲得することになる。人類は地上で正常な生活を送り、全人類が正しい軌道に乗ることになる。六千年の経営（救いの）計画は徹底的にサタンを打ち負かすことになるだろう。つまり、神は創造直後の人間の本来の姿を回復させ、そうして、神の本来の意図が成就される。

『言葉は肉において現れる』の「人間の正常な生活を回復し、素晴らしい終着点に連れて行く」より

11. 立ち上がって、わたしに協力しなさい。心からわたしのために尽くす者を、わたしは決して惨めに扱わない。心からわたしに献身するなら、わたしはあなたにわたしのすべての祝福を授けよう。完全に自分自身をわたしに捧げなさい。あなたが食べる物、着る物、あなたの将来、すべてがわたしの手の中にある。わたしはあなたの永遠の尽きることのない楽しみのために、それらのすべてを適切に整える。なぜならわたしは、「心からわたしのために尽くす者へ、わたしは必ず大いにあなたを祝福しよう」と言ったからだ。すべての祝福は、心からわたしのために自分を捧げる一人ひとりのところへ来る。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第七十章」より

12. 祝福とは、あなた方が憎むことは将来にはもう起こらないということである。つまり、それらのことは、もはやあなた方の実際の生活に存在しなくなり、あなた方の目の前から取り除かれるということである。家族、仕事、妻、夫、子供、友人や親戚、そしてあなた方が毎日嫌っている一日三食の食事ですえ、消えて無くなるだろう。（これは、時間に制約されなくなり、完全に肉から抜け出すという意味である。あなたの体は、霊に満たされることによってのみ維持される。ここで言及されているのは、あなたの肉ではなく、あなたの体である。あなたは完全に自由になり、超越するだろう。これは、神が世界創造以来示した中で最も大いなる、最も明白な奇跡である。）あなた方の体の中にあるすべての土の要素は取り除かれ、あなた方は完全に、聖なる汚れなき霊の体になるだろう。そして、あなた方は宇宙の果てまで旅するだろう。面倒な洗うことや擦り洗いも、その時から無くなり、あなた方は、ただ目一杯楽しむだろう。その時から、あなた方は、もはや結婚の概念を持たなくなるだろう（何故ならわたしは一つの時代を終わらせるのであり、世界を創造するのではないからである）。そして、女性にとって最も辛い産みの苦しみも、もはや無くなるだろう。あなた方は将来、もう働くことも労することもない。わたしの愛の抱擁に包まれ、わたしがあなた方に与えた祝福を楽しむのだ。このことは確かな事である。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第八十四章」より

13. わたしがあなた方のために用意したもの、つまり、世界中の稀有で貴重な宝があなた方に与えられるのだ。あなた方は、現時点では、それを思い浮かべることも、想像することもできない。そして、このようなことを楽しんだことがある者は一人もいない。これらの祝福があなた方の上に臨むとき、あなた方はいつまでも心から楽しむが、これらはすべてわたしの力、わたしの行為、わたしの義、そして何よりも、わたしの威厳であることを忘れてはならない。（わたしは、恵みを示すよう選んだ者たちに恵みを示し、憐みを示すよう選んだ者たちに憐みを示す。）その時、あなた方は親を持つことはなく、血縁関係もない。あなた方は皆、わたしの愛する民、わたしの最愛の子らである。それ以降は、誰もあなた方を弾圧しようとしないうだろう。それは、あなた方が大人に成長する時となり、あなた方が鉄の杖で国々を支配する時となるであろう。わたしの愛する息子たちを妨げようなどとするのは誰か。わたしの最愛の息子たちを敢えて攻撃しようとするのは誰か。父が栄光を受けたので、彼らはみなわたしの愛する子らを敬うだろう。誰も想像すらできなかったことがすべて、あなた方の目の前に現れる。それらは無限で、無尽蔵で、終わることがない。もうしばらくすれば、あなた方はもはや太陽



の焼けつく暑さに耐える必要はなくなる。また、寒さに苦しむ必要もなくなり、雨も、雪も、風さえもあなた方には及ばなくなる。それは、わたしがあなた方を愛しているからであり、それは完全にわたしの愛の世界になる。わたしはあなた方が望むすべてのものを与えよう。また、あなた方が必要とするすべてのものをあなた方のために用意しよう。わたしは義ではないなどと言う者は誰か。わたしは直ちにあなたを殺す。それは前に言ったように、わたしの怒りは（邪悪な者たちに対して）永遠に続き、わたしはほんの少しも容赦しないからである。しかし、（わたしの最愛の子らへの）わたしの愛も永遠に続くだろう。わたしは少しもそれを惜しまない。

『言葉は肉において現れる』第一部「キリストの初めの言葉」の「第八十四章」より

14. わたしは今、わが民の間を歩き回り、わが民の中で生きている。今日、わたしに本物の愛を抱いている者たちは幸いである。わたしに服従する者は幸いである。その人たちは必ずや、わたしの国にとどまるであろう。わたしを知る者は幸いである。その人たちは、必ずや、わたしの国で権力を振るうであろう。わたしを追い求める者は幸いである。その人たちは必ずやサタンの束縛から逃れ、わたしの中にある祝福を享受するであらう。自らを捨てることのできる者は幸いである。その人たちは、必ずやわたしのものとなり、わたしの国の富を相続するであろう。わたしのために走り回る者を、わたしは記念し、わたしのために尽くす人を、わたしは喜んで抱こう。わたしに捧げ物をする人に、わたしは喜びとなるものを与えよう。わたしの言葉に喜びを見出す者を、わたしは祝福する。その人たちは必ずや、わたしの国の棟木を支える柱となるであろう。その人たちは、必ずやわたしの家で何ものにも及ばない豊かさを得、彼らに並ぶものは一人もいない。あなたがたは、自分に与えられた祝福を受け入れたことがあるか。あなたがたは、あなたがたのために結ばれた約束を求めたことがあるか。あなたがたは、必ずや、わたしの光の導きの下、闇の力の要塞を打ち破るだろう。あなたがたは、闇のただ中にあっても、あなたがたを導く光を絶対に見失いはしないだろう。あなたがたは、必ずや、すべての被造物の主人となる。あなたがたは、必ずや、サタンの前で勝利する。あなたがたは、必ずや、赤い大きな竜の国が滅びるとき、無数の大衆の中で立ち上がり、わたしの勝利を証しするであろう。あなたがたは、必ずや、秦の国にあって、決意を固くし、揺るぐことがないだろう。あなたがたの耐え忍ぶ苦しみにによって、あなたがたはわたしからの祝福を相続する。そして、必ずや、全宇宙にわたしの栄光を輝かせるだろう。

『言葉は肉において現れる』第二部「全宇宙への神の言葉」の「第十九章」より

15. 神に完全にしてもらうことができる人たちは、神から祝福や嗣業を受け取ることもできる人たちである。すなわち、そのような人たちは、神が所有するものそして神という存在を取り入れる。そうすることによって取り入れたものは彼らが内部に持つものとなる。すなわち、彼らは、神の言葉が彼らの中に働いたものすべてを所有している。神という存在が何であれ、あなた方は、その存在のすべてをまさにそのまま受け入れることができる。そうすることによって、真理を生きることができる。これが、神によって完全にされ、神のものとされた人である。そのような人だけが、次に掲げる、神が授ける祝福を受け継ぐ資格がある。

1. 神の愛のすべてを受け取ること。
2. あらゆる事柄において神の旨に沿って行動すること。
3. 神の導きを受け取り、神の光の下で生き、神の啓示を受けること。
4. 地上で神によって愛された象徴のように生きること、すなわち、ペテロと同じように真に神を愛すること、神の為に十字架にかけられ、死が神の愛に対する報いに相応しいと感じるほどに神を愛すること、そしてペテロと同じ栄光を受けること。
5. 地上のすべての人によって愛され、敬われ、称賛されること。
6. 死やハデスの束縛のすべてを克服すること、サタンに働く機会を与えず、神のものとしてされていること、新鮮でいきいきとした霊的状态であること、いささかの疲れもないこと。
7. 人生のあらゆるときに、あたかも神の栄光の日の到来を見てきた人のように、言語を絶するほどの高揚感や気持ちの高まりをもてること。
8. 神とともに栄光を受け取ること、そして神の最愛の聖人たちに似た容貌をもてること。
9. 神が地上で愛するもの、すなわち神の最愛の子になること。
10. 姿を変えて、神と共に、肉を超越して第三の天まで引き上げられること。

『言葉は肉において現れる』の「完全にされた人々への約束」より